東九州自動車道関係
埋蔵文化財調査報告

－ 19 －

矢留堂ノ前遺跡

福岡県行橋市矢留所在遺跡の調査

（上巻）

2015

九州歴史資料館

1　矢留堂ノ前遺跡遠景（西上空から）

2　同上2区遠景（北上空から）

1　環濠（1区3号溝・2区17号溝）合成写真（上空から）

2　2区17号溝壁面ピット群（北東から）

3　環濠土層断面（1区3号溝12区北壁土層）（南から）

1　1区西半全景（上空から）

2　方形区画溝（1区7号溝）（西上空から）

1　1号墳（上空から）

2　5号方形周溝墓（東から）

3　同左主体部（北から）

序

福岡県では、平成19年度から西日本高速道路株式会社の委託を受けて、東九州自動車道建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査を実施してきました。

本報告書は平成21年度から23年度にかけて行った、行橋市矢留に所在する矢留堂ノ前遺跡の調査の記録です。

矢留堂ノ前遺跡は、行橋市内陸部の矢留山丘陵の裾に立地しており、官衙遺跡として話題になった長者原遺跡とは西に谷を一つ挟んだ台地に位置しています。

今回の調査では、縄文時代の落し穴群･縄文時代後期の竪穴住居跡と自然流路跡、弥生時代前期から中期前葉の環濠を伴う集落跡、弥生時代終末から古墳時代前期の集落と墳墓群、古代の集落、中世の溝で囲まれた屋敷群が発見され、それぞれの時代で地域の歴史を知る上で貴重な資料を得ることができました。

本報告書が教育、学術研究とともに、文化財愛護思想の普及･定着の一助となれば幸いです。

なお、発掘調査･報告書の作成にいたる間には、関係諸機関や地元をはじめ多くの方々にご協力･ご助言をいただきました。ここに深く感謝いたします。

平成27年３月31日

九州歴史資料館

館長　杉光　誠

例　言

1．本書は東九州自動車道建設に伴って発掘調査を実施した、福岡県行橋市大字矢留に所在する矢留堂ノ前遺跡の記録である。東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告の第19集にあたる。
2．発掘調査と整理報告は西日本高速株式会社の委託を受けて、福岡県教育庁総務部文化財保護課および九州歴史資料館が実施した。
3．矢留堂ノ前遺跡は東九州自動車道福岡工事事務所管内の第28地点にあたる。
4．本書に掲載した遺構写真の撮影は秦憲二が、遺物写真の撮影は北岡伸一が行った。空中写真の撮影は九州航空株式会社・東亜航空技研に委託し、ラジコンヘリによる撮影を行った。
5．本書に掲載した遺構図の作成は秦が行い、発掘作業員が補助した。
6．出土遺物の整理作業は、九州歴史資料館において、新原正典・小池史哲・小川泰樹・城門義廣の指導の下に実施した。
7．出土遺物及び図面・写真等の記録類は、九州歴史資料館において保管する。
8．本書に使用した分布図等は、国土交通省国土地理院発行の１/25,000地形図「行橋」を改変したものである。本書で使用する方位は、世界測地系による座標北である。
9．平成23年度から福岡県教育庁総務部文化財保護課の文化財発掘調査業務は、組織改変により、九州歴史資料館に移管された。
10．木製品の樹種同定は九州歴史資料館文化財調査室小林啓が行った。
11．鉄製品のＣＴスキャンは九州歴史資料館文化財調査室加藤和歳が行った。
12．本書のⅣ章については、日鉄住金テクノロジー株式会社八幡事業所・TACセンター大澤正巳が執筆し、その他の執筆・編集は秦が行った。

目　次

〔上巻〕

〔上巻〕
巻頭図版
序
例言
目次
挿図目次
表目次

Ⅰ　はじめに …… 1
　1　調査に至る経緯 …… 1
　2　調査の経過…… 2
　3　調査・整理の組織 …… 2
Ⅱ　位置と環境…… 7
Ⅲ　発掘調査の記録…… 13
　1　遺跡の概要…… 13
　2　調査の概要…… 13
　3　縄文時代の遺構と遺物…… 14
　　（1）竪穴住居跡…… 14
　　（2）落し穴遺構…… 18
　　（3）土坑…… 24
　　（4）自然流路跡…… 24
　　（5）甕棺…… 32
　　（6）遺構外出土の遺物…… 32
　4　弥生時代前期から中期前葉の遺構と遺物…… 37
　　（1）竪穴住居跡…… 37
　　（2）貯蔵穴…… 57
　　（3）土坑…… 106
　　（4）ピット…… 138
　　（5）溝…… 138
　　（6）その他の遺構出土石器…… 212
　　（7）遺構外出土の石器・土製品 …… 215
　5　弥生時代終末から古墳時代前期の遺構と遺物…… 221
　　（1）竪穴住居跡…… 221
　　（2）掘立柱建物跡…… 248
　　（3）埋葬遺構…… 249
　　（4）ピット…… 260
　　（5）溝…… 261

（６）その他の遺構と遺物……286
（７）特殊遺構……286

〔下巻〕

目次
挿図目次
表目次

６　古代の遺構と遺物……1
（１）掘立柱建物跡……1
（２）その他の遺構……11
（３）遺構外出土の石器･土製品……15
７　中世の遺構と遺物……17
（１）掘立柱建物跡……17
（２）柵跡……29
（３）土坑……39
（４）井戸……65
（５）墓……66
（６）溝……66
（７）その他の遺構……96
（８）遺構外出土遺物……101
（９）特殊遺物……101
８　その他の時期の出土遺物……108
Ⅳ　自然科学分析
矢留堂ノ前遺跡出土鋳造鉄斧破片と椀形鍛冶鉄滓の金属学的調査……110
Ⅴ　まとめ……127
Ⅵ　宝山桑ノ木遺跡･流末溝田遺跡の掲載漏れ挿図･遺物写真……153

図版目次

〔上巻〕

巻頭図版１　１　矢留堂ノ前遺跡遠景（西上空から）２　同上（北上空から）
巻頭図版２　１　環濠（１区３号溝･２区17号溝）合成写真（上空から）
２　２区17号溝壁面ピット群（北東から）
３　環濠土層断面（１区３号溝12区北壁土層）（南から）
巻頭図版３　１　１区西半全景（上空から）　２　方形区画溝（１区７号溝）（西上空から）
巻頭図版４　１　１号墳（上空から）　２　５号方形周溝墓（東から）
３　同左主体部（北から）

〔下巻〕

図版１　１　矢留堂ノ前遺跡１区遠景（西上空から）　２　同上２区遠景（東上空から）

図版２　１　１号落し穴（北東から）　２　１号落し穴土層断面（南西から）
３　２号落し穴（北から）　４　３号落し穴（南西から）
５　４号落し穴（南西から）　６　４号落し穴土層断面（北東から）
７　５号落し穴（南から）　８　５号落し穴土層断面（北から）
９　６号落し穴（南西から）　10　７号落し穴（南西から）

図版３　１　９号落し穴（北西から）　２　９号落し穴土層断面（南東から）
３　10号落し穴（南東から）　４　10号落し穴土層断面（南から）
５　11号落し穴（北東から）　６　12号落し穴（北から）
７　13号落し穴（北から）　８　13号落し穴土層断面（北から）
９　14号落し穴（南東から）　10　15号落し穴（北西から）

図版４　１　15号落し穴（北西から）　２　16号落し穴土層断面（北から）
３　19号落し穴（南東から）　４　19号落し穴（北西から）
５　19号落し穴（北東から）　６　19号落し穴（北東から）
７　17号落し穴土層断面（南西から）　８　23号落し穴（南西から）
９　22号落し穴（北から）　10　２区１号埋甕（南東から）

図版５　１　２区１号竪穴住居跡（東から）　２　２区２号竪穴住居跡（南東から）
３　自然流路跡（上空から）

図版６　１　9･12号竪穴住居跡（西から）　２　3･7号竪穴住居跡（北から）
３　8･11号竪穴住居跡（北東から）

図版７　１　１区16･17･20号竪穴住居跡（上空から）　２　１区7･8･10･11･18･19号竪穴住居跡（上空から）
３　41号竪穴住居跡（南西から）

図版８　１　１号貯蔵穴（北東から）　２　２号貯蔵穴（南から）
３　４号貯蔵穴（南から）　４　４号貯蔵穴遺物出土状況（北から）
５　５号貯蔵穴（南西から）　６　５号貯蔵穴物出土状況（南から）
７　６号貯蔵穴（南から）　８　７号貯蔵穴（北から）

図版９　１　８号貯蔵穴（北から）　２　９号貯蔵穴（北から）
３　11号貯蔵穴（南から）　４　11号貯蔵穴土層断面（西から）
５　12号貯蔵穴（南東から）　６　12号貯蔵穴（南から）
７　13号貯蔵穴（南から）　８　14号貯蔵穴（北から）

図版10　１　15号貯蔵穴（南から）　２　17号貯蔵穴（南西から）
３　17号貯蔵穴遺物出土状況（西から）　４　18号貯蔵穴･17号土坑（北西から）
５　19号貯蔵穴（南東から）　６　19号貯蔵穴土層断面（北西から）
７　21号貯蔵穴（南西から）　８　21号貯蔵穴土層断面（北から）
９　21号貯蔵穴土器出土状況（北東から）

図版11　１　22号貯蔵穴（南西から）　２　23号貯蔵穴（北から）
３　23号貯蔵穴遺物出土状況（北から）　４　23号貯蔵穴土層断面（北から）
５　24号貯蔵穴（南東から）　６　25号貯蔵穴（東から）
７　25号貯蔵穴土層断面（北から）　８　26号貯蔵穴（南西から）

図版12　１　27号貯蔵穴（北西から）　２　28号貯蔵穴（南東から）
３　29号貯蔵穴（北から）　４　同上土層断面（北から）
５　30･31号貯蔵穴（南西から）　６　同上土層断面（南西から）

	7	同上遺物出土状況（東から）	8	34号貯蔵穴（北から）
図版13	1	32号貯蔵穴（北西から）	2	32号貯蔵穴土層断面（北東から）
	3	35号貯蔵穴（北東から）	4	37号貯蔵穴（北西から）
	5	37号貯蔵穴（北西から）	6	38号貯蔵穴（北西から）
	7	38号貯蔵穴（北西から）	8	39号貯蔵穴（東から）
	9	39号貯蔵穴遺物出土状態（西から）	10	39号貯蔵穴土層断面（西から）
図版14	1	40号貯蔵穴（北から）	2	40号貯蔵穴（北西から）
	3	41号貯蔵穴（北西から）	4	43号貯蔵穴（西から）
	5	43号貯蔵穴（南から）	6	２区２号貯蔵穴（東から）
	7	２区３号貯蔵穴（西から）	8	１号土坑（北東から）
図版15	1	３号土坑（北から）	2	７号土坑（東から）
	3	９号土坑（南西から）	4	11号土坑（北から）
	5	14号土坑（北から）	6	15号土坑（西から）
	7	18号土坑（北東から）	8	19･20号土坑（西から）
図版16	1	21号土坑（南西から）	2	24号土坑（南から）
	3	26号土坑（南東から）	4	39号土坑（南西から）
	5	39号土坑遺物出土状況（南西から）	6	40号土坑（南東から）
	7	40号土坑土層断面（南東から）	8	41号土坑（北西から）
	9	41号土坑（北西から）		
図版17	1	42号土坑（北東から）	2	46号土坑（西から）
	3	46号土坑土層断面（西から）	4	46号土坑遺物出土状況（西から）
	5	47号土坑（南から）	6	48号土坑（東から）
	7	50号土坑（南西から）	8	50号土坑（東から）
	9	50号土坑遺物出土状況（東から）		
図版18	1	52号土坑（南東から）	2	53号土坑（北東から）
	3	79号土坑（東から）	4	81号土坑（北東から）
	5	81号土坑遺物出土状況（北から）	6	82号土坑（南西から）
	7	82号土坑遺物出土状況（北西から）	8	84号土坑（西から）
	9	84号土坑（西から）		
図版19	1	85号土坑（北から）	2	85号土坑（北から）
	3	86号土坑（南から）	4	89号土坑（北から）
	5	92号土坑（北から）	6	92号土坑土層断面（南から）
	7	93号土坑（北から）	8	93号土坑土層断面（北西から）
図版20	1	94b号土坑（東から）	2	97号土坑（北東から）
	3	98号土坑（南東から）	4	ピット493遺物出土状況（北から）
	5	113号土坑（東から）	6	113号土坑土層断面（北西から）
	7	ピット13遺物出土状況（東から）	8	ピット267遺物出土状況（東から）
図版21	1	１区３号溝陸橋部（西から）	2	同上7 ～ 10区（北西から）
	3	同上11 ～ 13区（南西から）	4	同上（北から）
	5	同上（南から）	6	同上９区遺物出土状況（南から）
	7	３号溝２区西壁（東から）		
図版22	1	１区３号溝３区東壁（西から）	2	同左２区東壁（西から）

3　２区17号溝南半（北東から）　4　２区７号溝3･4区（南から）
5　同上北半（南東から）　6　同上陸橋部（西から）
7　同上壁面ピット群（西から）　8　同上４層遺物出土状況（北から）

図版23　1　１号竪穴住居跡（南西から）　2　同上遺物出土状態（南から）
3　２号竪穴住居跡（南西から）　4　２号竪穴住居跡屋内土坑（西から）
5　３号竪穴住居跡（南から）　6　４号竪穴住居跡（南東から）
7　５号竪穴住居跡（東から）　8　同上遺物出土状態（北から）

図版24　1　６号竪穴住居跡（東から）　2　32号竪穴住居跡（南東から）
3　38号竪穴住居跡（南から）　4　同上遺物出土状況（西から）
5　39号竪穴住居跡（東から）　6　40号竪穴住居跡（東から）
7　40号竪穴住居跡焼土･炭出土状況（東から）　8　44号竪穴住居跡（北から）

図版25　1　42号竪穴住居跡（南から）　2　43号竪穴住居跡（南西から）
3　同上屋内土坑遺物出土状態（南東から）　4　45号竪穴住居跡（北から）
5　52号竪穴住居跡（東から）　6　同上遺物出土状況（西から）
7　53号竪穴住居跡（西から）　8　74号土坑（北西から）

図版26　1　１号墳北側周溝土層（東から）
2　１号墳東側周溝･２号方形周溝墓西側周溝土層（南から）
3　１号方形周溝墓･20号掘立柱建物跡（東から）
4　１号方形周溝墓西側溝土層（南から）　5　同左北側周溝土層（東から）
6　同上西側周溝土層（南から）
7　同上東側周溝土層（南から）

図版27　1　１号溝･２号方形周溝墓（東から）　2　同上東側周溝土層断面（北から）
3　同左北側周溝土層（東から）　4　３号方形周溝墓（東から）
5　同上西側周溝土層断面（北から）
6　同上東側周溝土層断面（西から）
7　同上南側周溝土層断面（西から）

図版28　1　４号方形周溝墓（東から）　2　５号方形周溝墓（東から）
3　同上主体部被覆粘土検出状況（北から）　4　同左床面検出状況（北から）

図版29　1　７号溝東辺（東から）　2　同上東辺（東から）
3　同上北東隅（西から）　4　同上南西隅No.1土器出土状態（東から）
5　同北西隅（西から）　6　同上南辺（東から）
7　７号溝南辺（東から）

図版30　1　７号溝土層断面（北から）　2　７号溝南東隅（南から）
3　28号溝（北東から）　4　29号溝土層断面（北東から）
5　30号溝土層断面（南から）　6　36号溝土層断面（北から）
7　37号溝北部（南から）

図版31　1　５号墓（南から）　2　５号墓土層断面（北西から）
3　６号墓（北から）　4　１号甕棺（北西から）
5　３号落ち込み（南から）　6　ピット210（西から）
7　ピット261（南西から）　8　ピット268（北から）

図版32　1　１区23･24･26 ～ 28･34号掘立柱建物跡、1･3･8号柵跡、41号溝（上空から）
2　１区１号掘立柱建物跡（北から）　3　１区11号掘立柱建物跡（東から）

4　２区１号掘立柱建物跡（東から）　5　２区12号掘立柱建物跡（南から）
図版33　1　１区21号掘立柱建物跡（北東から）　2　21号掘立柱建物跡土層断面（北から）
3　４号井戸（南から）　4　75号土坑（北から）
5　100号土坑（北から）
図版34　1　１区15･16･54･55号掘立柱建物跡（上空から）
2　22号掘立柱建物跡（南から）
図版35　1　２区１～５･18号号掘立柱建物跡（上空から）
2　２区６号掘立柱建物跡（南から）　3　２区７号掘立柱建物跡（南から）
図版36　1　２区９号掘立柱建物跡（西から）　2　２区10号掘立柱建物跡（北から）
3　２区11号掘立柱建物跡（南から）　4　２区14･15号掘立柱建物跡（上空から）
図版37　1　13･16･17号号掘立柱建物跡（上空から）　2　１号墓（西から）
3　２号墓（南から）　4　２号墓板痕検出状況（北から）
5　３号墓（西から）
図版38　1　１号井戸（南西から）　2　２号井戸（北西から）
3　１号井戸半裁（西から）　4　３号井戸（南西から）
5　３号井戸土層断面（西から）　6　１号柵跡柱１土層（北から）
図版39　1　４号土坑（@から）　2　16号土坑（南から）
3　15号土坑土層断面（南西から）　4　44号土坑（北から）
5　16号土坑（北から）　6　同上遺物出土状況（南西から）
7　54号土坑（南から）　8　54号土坑･18号溝（北から）
9　45号土坑（北西から）
図版40　1　１区55号土坑（南から）　2　同左土層断面（西から）
3　56号土坑（北西から）　4　57号土坑（北西から）
5　58号土坑（北から）　6　59号土坑（西から）
7　同上土層断面（北西から）　8　60号土坑（西から）
9　同上土層断面（東から）
図版41　1　61号土坑（西から）　2　61号土坑（南から）
3　62号土坑（西から）　4　62号土坑（東から）
5　63･65号土坑（北東から）　6　64号土坑（南西から）
7　65b号土坑（北西から）　8　66号土坑（西から）
9　66号土坑（東から）
図版42　1　80号土坑（南から）　2　100号土坑（南東から）
3　102号土坑（東から）　4　108号土坑（南東から）
5　113号土坑（南から）　6　２区１号土坑（上空から）
7　２区２号土坑（東から）　8　２区３号土坑（西から）
図版43　1　２区４号土坑（南から）　2　２区12号土坑（南西から）
3　２区16号土坑（東から）　4　２区17号土坑（@から）
5　２区18号土坑（北西から）　6　２区19号土坑（東から）
7　２区20号土坑（南東から）　8　２区24号土坑（南から）
図版44　1　２区22号土坑（南から）　2　２区23･24号土坑（東から）
3　２区25･27号土坑（南から）　4　２区26号土坑（南から）
5　２区27･28号土坑（南から）　6　２区30号土坑鉄滓出土状況（南から）

7　２区30･31号土坑（北から）　8　２区32号土坑（南東から）
図版45　1　２区34号土坑（北東から）　2　２区40号土坑（東から）
3　4a･b号溝土層断面（南から）　4　５a ～ c号溝土層（南から）
5　17号溝（西から）　6　２区41号土坑（北から）
7　２号溝北壁（南西から）　8　4･5号溝間溝土層（東から）
9　14号溝土層断面（北から）
図版45　1　２区19a号溝土層断面（南から）　2　２区20号溝土層断面（東から）
3　２区20号溝土層断面（北から）　4　２区38号溝の一部（南から）
5　２区38a･b号溝土層断面（東から）　6　２区北部拡張区（南から）
7　２区北部拡張区（西から）　8　２区北東部試掘トレンチ（東から）
図版46　1　２区19a号溝土層断面（南から）　2　２区20号溝土層断面（東から）
3　２区20号溝土層断面（北から）　4　２区11号溝土層断面（南から）
5　２区38a･b号溝土層断面（東から）　6　２区２号溝土層断面（北から）
7　２区北部拡張区（西から）　8　２区南端部（東から）
図版47　1　１区南半全景（上空から）　2　１区南西区全景（上空から）
図版48　1　１区南東部北東隅（上空から）　2　同上南西隅（上空から）
3　２区東半全景（上空から）
図版49　出土遺物１
図版50　出土遺物２
図版51　出土遺物３
図版52　出土遺物４
図版53　出土遺物５
図版54　出土遺物６
図版55　出土遺物７
図版56　出土遺物８
図版57　出土遺物９
図版58　出土遺物10
図版59　出土遺物11
図版60　出土遺物12
図版61　出土遺物13
図版62　出土遺物14
図版63　出土遺物15
図版64　出土遺物16
図版65　出土遺物17
図版66　出土遺物18
図版67　出土遺物19
図版68　流末溝田遺跡出土遺物

挿図目次

〔上巻〕

第１図　矢留堂ノ前遺跡位置図 …… 1
第２図　東九州道福岡工事区調査地点位置図（１/10,000） …… 4

第３図　矢留堂ノ前遺跡調査範囲図（１/2,500）　……6
第４図　周辺遺跡分布図（１/50,000）……8
第５図　縄文時代の略遺構配置図・地形復元図（1/800）…… 12
第６図　縄文時代の竪穴住居跡・土坑・甕棺実測図（４は１/15、他は１/60）…… 15
第７図　落し穴遺構実測図１（1/60）…… 17
第８図　落し穴遺構実測図２（1/60）…… 19
第９図　縄文時代竪穴住居跡・土坑出土土器・埋甕出土土器実測図（1/3）…… 21
第10図　縄文時代の竪穴住居跡・土坑・落し穴出土石器実測図
（1・2・11 ～ 13は1/2、他は1/3）…… 22
第11図　縄文時代の竪穴住居跡出土石器実測図（1/3）…… 23
第12図　２区自然流路跡実測図（1/120）…… 24
第13図　２区自然流路跡中位出土土器実測図（1/3）…… 25
第14図　２区自然流路跡・包含層出土土器実測図（1/3）…… 26
第15図　２区自然流路跡出土石器実測図１（1/3）…… 28
第16図　２区自然流路跡出土石器実測図２（1/3）…… 29
第17図　２区自然流路跡出土石器実測図３（1/3）…… 30
第18図　２区自然流路跡出土石器実測図４（11は1/4、他は1/3）…… 31
第19図　縄文時代の遺構外出土石器実測図１（１～４・8は1/2、他は1/3）…… 33
第20図　縄文時代の遺構外出土石器実測図２（1/3）…… 34
第21図　弥生時代前期から中期前葉の略遺構配置図・地形復元図（1/800）…… 38
第22図　弥生時代前期から中期前葉の竪穴住居跡実測図１　１区7・13号竪穴住居跡（1/60）… 39
第23図　弥生時代前期から中期前葉の竪穴住居跡実測図２　１区8・11号竪穴住居跡（1/60）… 40
第24図　弥生時代前期から中期前葉の竪穴住居跡実測図３　１区10・12号竪穴住居跡（1/60）… 41
第25図　弥生時代前期から中期前葉の竪穴住居跡実測図４　１区14・19号竪穴住居跡（1/60）　42
第26図　弥生時代前期から中期前葉の竪穴住居跡実測図５　１区15号竪穴住居跡（1/60）…… 43
第27図　弥生時代前期から中期前葉の竪穴住居跡実測図６
１区16・20・21号竪穴住居跡（1/80）…… 44
第28図　弥生時代前期から中期前葉の竪穴住居跡実測図７　１区17号竪穴住居跡（1/80）…… 45
第29図　弥生時代前期から中期前葉の竪穴住居跡実測図８　１区18号竪穴住居跡（1/80）…… 46
第30図　弥生時代前期から中期前葉の竪穴住居跡実測図９　１区23・24号竪穴住居跡（1/60）… 48
第31図　弥生時代前期から中期前葉の竪穴住居跡実測図10　１区29・30号竪穴住居跡（1/60）… 49
第32図　弥生時代前期から中期前葉の竪穴住居跡実測図11　１区31号竪穴住居跡（1/80）…… 50
第33図　弥生時代前期から中期前葉の竪穴住居跡実測図12　１区35・41号竪穴住居跡（1/60）… 51
第34図　弥生時代前期から中期前葉の竪穴住居跡実測図13　１区36・47号竪穴住居跡（1/60）… 52
第35図　弥生時代前期から中期前葉の竪穴住居跡実測図14　１区50号竪穴住居跡（1/60）…… 53
第36図　弥生時代前期から中期前葉の竪穴住居跡出土土器実測図１
7・8・13・16・17・29・30・35号竪穴住居跡（1/3）…… 54
第37図　弥生時代前期から中期前葉の竪穴住居跡実測図15　１区55号竪穴住居跡（1/80）…… 55
第38図　弥生時代前期から中期前葉の竪穴住居跡実測図16　１区57号竪穴住居跡（1/60）…… 56
第39図　弥生時代前期から中期前葉の竪穴住居跡実測図17　１区58号竪穴住居跡（1/60）…… 57
第40図　弥生時代前期から中期前葉の竪穴住居跡出土土器実測図２
１区41・50・55・57・58号竪穴住居跡（1/3）…… 58

第41図　貯蔵穴実測図１　１区１～４号貯蔵穴（1/60）…… 59
第42図　貯蔵穴出土土器実測図１　１区2･4号貯蔵穴（1/3）…… 60
第43図　貯蔵穴出土土器実測図２　１区４号貯蔵穴（1/3）…… 62
第44図　貯蔵穴実測図２　１区５～13号貯蔵穴（1/60）…… 64
第45図　貯蔵穴出土土器実測図３　１区５号貯蔵穴（1/3）…… 66
第46図　貯蔵穴実測図３　１区14～22号貯蔵穴（1/60）…… 70
第47図　貯蔵穴出土土器実測図４　１区6･7･9･10･12号貯蔵穴（1/3）…… 71
第48図　貯蔵穴出土土器実測図５　１区14～17･20号貯蔵穴（１は1/4、他は1/3）…… 73
第49図　貯蔵穴出土土器実測図６　１区21号貯蔵穴（１は1/3、他は1/4）…… 74
第50図　貯蔵穴出土土器実測図７　１区21号貯蔵穴（1/3）…… 75
第51図　貯蔵穴実測図４　１区23～28号貯蔵穴（1/60）…… 77
第52図　貯蔵穴出土土器実測図８　１区22･23号貯蔵穴（４は1/4、他は1/3）…… 78
第53図　貯蔵穴出土土器実測図９　１区24号貯蔵穴（1/3）…… 79
第54図　貯蔵穴出土土器実測図10　１区25･26号貯蔵穴（1/3）…… 81
第55図　貯蔵穴出土土器実測図11　１区26号貯蔵穴（1/3）…… 83
第56図　貯蔵穴出土土器実測図12　１区26号貯蔵穴（1/3）…… 85
第57図　貯蔵穴出土土器実測図13　１区26号貯蔵穴（１は1/4、他は1/3）…… 86
第58図　貯蔵穴出土土器実測図14　１区27･28号貯蔵穴（1/3）…… 88
第59図　貯蔵穴実測図５　１区29～32･35～37号貯蔵穴（1/60）…… 89
第60図　貯蔵穴出土土器実測図15　１区29号貯蔵穴（2･3は1/4、他は1/3）…… 90
第61図　貯蔵穴出土土器実測図16　１区30号貯蔵穴（1/3）…… 92
第62図　貯蔵穴出土土器実測図17　１区30･32･34号貯蔵穴（1･2は1/4、他は1/3）…… 93
第63図　貯蔵穴出土土器実測図18　１区34号貯蔵穴（２は1/4、他は1/3）…… 95
第64図　貯蔵穴実測図７　１区34･38～42号貯蔵穴（1/60）…… 96
第65図　貯蔵穴出土土器実測図19　１区35･37号貯蔵穴
（９～11･13～15･22は1/4、他は1/3）…… 98
第66図　貯蔵穴出土土器実測図20　１区38a･b号貯蔵穴（２は1/4、他は1/3）…… 100
第67図　貯蔵穴出土土器実測図21　１区38号貯蔵穴（４は1/4、他は1/3）…… 101
第68図　貯蔵穴出土土器実測図22　１区39～41号貯蔵穴（４は1/4、他は1/3）…… 103
第69図　貯蔵穴実測図８　１区43号、２区１～３号貯蔵穴（(1/60)…… 104
第70図　貯蔵穴出土土器実測図23　２区１～３号貯蔵穴（２は1/4、他は1/3）…… 106
第71図　弥生時代前期から中期前葉の土坑実測図１
１区1･3･7･9･11･13～15･18号土坑（1/60）…… 108
第72図　弥生時代前期から中期前葉の土坑出土土器実測図１
１区1･3･11･18号土坑（1･6･8は1/4、他は1/3）…… 111
第73図　弥生時代前期から中期前葉の土坑実測図２
１区19･21･22･24･26･28･38～41号土坑（1/60）…… 112
第74図　弥生時代前期から中期前葉の土坑出土土器実測図２
１区19･24･26号土坑（９は1/4、他は1/3）…… 113
第75図　弥生時代前期から中期前葉の土坑出土土器実測図３　１区39号土坑（1/3）…… 115
第76図　弥生時代前期から中期前葉の土坑実測図３
１区42･46～48･50･52･53号土坑（1/60）…… 117

第77図　弥生時代前期から中期前葉の土坑出土土器実測図４　１区41･46号土坑（1/3）…… 118
第78図　弥生時代前期から中期前葉の土坑出土土器実測図５
１区47号土坑（１は1/4、他は1/3）…… 119
第79図　弥生時代前期から中期前葉の土坑出土土器実測図６　１区48号土坑（1/3）…… 121
第80図　弥生時代前期から中期前葉の土坑出土土器実測図７　１区50･53号土坑（1/3）…… 122
第81図　弥生時代前期から中期前葉の土坑実測図４
１区79･81･82･84 ～ 86･89号土坑（1/60）…… 124
第82図　弥生時代前期から中期前葉の土坑出土土器実測図８　１区79･81号土坑（1/3）…… 125
第83図　弥生時代前期から中期前葉の土坑出土土器実測図９
１区82号土坑（3･4･8･9･12･13は1/4、他は1/3）…… 126
第84図　弥生時代前期から中期前葉の土坑出土土器実測図10
１区82号土坑（8･9は1/4、他は1/3）…… 127
第85図　弥生時代前期から中期前葉の土坑出土土器実測図11
１区82･84号土坑（１は1/4、他は1/3）…… 126
第86図　弥生時代前期から中期前葉の土坑・ピット実測図
１区92 ～ 94a･94b･97 ～ 99･110 ～ 113号土坑、ピット267（1/60）…… 132
第87図　弥生時代前期から中期前葉の土坑出土土器実測図13
１区86･89･92･97号土坑（５は1/4、他は1/3）…… 134
第88図　弥生時代前期から中期前葉の土坑出土土器実測図14
１区98･99･110･111･113号土坑（1/3）…… 135
第89図　弥生時代前期から中期前葉のピット出土土器実測図
１区ピット42･267･493、２区25･45（2･6･7は1/3、他は1/4）…… 137
第90図　１区３号溝・２区17号溝平面実測図　（1/300）…… 139
第91図　１区３号溝１～３区実測図（1/1,200・1/60）…… 140
第92図　１区３号溝１区出土土器実測図（1/3）…… 141
第93図　１区３号溝1･2区間出土土器実測図１（９は1/4、他は1/3）…… 143
第94図　１区３号溝1･2区間出土土器実測図２（1/3）…… 144
第95図　１区３号溝２区出土土器実測図１（1/3）…… 145
第96図　１区３号溝２区出土土器実測図２（2は1/4、他は1/3）…… 146
第97図　１区３号溝３区出土土器実測図（1/3）…… 148
第98図　１区３号溝４～７区実測図（1/1,200・1/60）…… 149
第99図　１区３号溝4･5区出土土器実測図（1/3）…… 150
第100図　１区３号溝６区出土土器実測図（11は1/4、他は1/3）…… 151
第101図　１区３号溝7･8区間～ 10区実測図（1/60）…… 154
第102図　１区３号溝７区出土土器実測図１（1/3）…… 155
第103図　１区３号溝７区出土土器実測図２（1/3）…… 156
第104図　１区３号溝７区出土土器実測図３（1/3）…… 157
第105図　１区３号溝７区出土土器実測図４（1/3）…… 159
第106図　１区３号溝7･8区間出土土器実測図（1/3）…… 160
第107図　１区３号溝８区出土土器実測図１（４は1/4、他は1/3）…… 161
第108図　１区３号溝８区出土土器実測図２（1/3）…… 162
第109図　１区３号溝8･9区間出土土器実測図１（1/3）…… 165

第110図　１区３号溝8･9区間出土土器実測図２（５は1/4、他は1/3）…… 166
第111図　１区３号溝8･9区間出土土器実測図３（1/3）…… 167
第112図　１区３号溝９区出土土器実測図１（1/3）…… 169
第113図　１区３号溝９区出土土器実測図２（15は1/4、1/3）…… 171
第114図　１区３号溝９区出土土器実測図３（1/3）…… 172
第115図　１区３号溝9･10区間出土土器実測図１（1/3）…… 174
第116図　１区３号溝9･10区間出土土器実測図２（1/3）…… 175
第117図　１区３号溝10区出土土器実測図１（1/3）…… 176
第118図　１区３号溝10区出土土器実測図２（13は1/4、他は1/3）…… 177
第119図　１区３号溝10区出土土器実測図３（1/3）…… 179
第120図　１区３号溝10区出土土器実測図４（16は1/4、他は1/3）…… 180
第121図　１区３号溝11 ～ 13区実測図（1/60）…… 182
第122図　１区３号溝11区出土土器実測図１（14は1/4、他は 1/3）…… 183
第123図　１区３号溝11区出土土器実測図２（1/3）…… 184
第124図　１区３号溝11･12区間出土土器実測図１（８は1/4、他は 1/3）…… 186
第125図　１区３号溝11･12区間出土土器実測図２（1/3）…… 187
第126図　１区３号溝11･12区間、12区出土土器実測図１（1/3）…… 190
第127図　１区３号溝12区出土土器実測図２（３は1/4、他は1/3）…… 191
第128図　１区３号溝12区出土土器実測図３（1/3）…… 192
第129図　１区３号溝12区出土土器実測図４（5･9は1/4、他は1/3）…… 194
第130図　１区３号溝12区出土土器実測図５（1/3）…… 195
第131図　１区３号溝12･13区間出土土器実測図（1/3）…… 196
第132図　１区３号溝13区出土土器実測図（1/3）…… 197
第133図　２区17号溝実測図（1/120・1/60）…… 198
第134図　２区17号溝遺物出土位置図（1/300）…… 199
第135図　２区17号溝１、１･２区間出土土器実測図（1/3）…… 200
第136図　２区17号溝２区出土土器実測図１（1/3）…… 201
第137図　２区17号溝２区出土土器実測図２（2･4は1/4、他は1/3）…… 203
第138図　２区17号溝2･3区間、陸橋上出土土器実測図（1/3）…… 204
第139図　２区17号溝３区出土土器実測図（1/3）…… 205
第140図　２区17号溝3･4区間出土土器実測図（1/3）…… 206
第141図　２区17号溝４区出土土器実測図１（1/3）…… 207
第142図　２区17号溝４区出土土器実測図２（1/3）…… 208
第143図　２区17号溝４区出土土器実測図３（1/3）…… 209
第144図　１区３号溝・２区17号溝出土石器実測図（１～４は1/2、他は1/3）…… 211
第145図　１区３号溝・２区17号溝出土石器･土製品･鉄製品実測図
（９･10は1/4、他は1/3）…… 213
第146図　弥生時代前期から中期前葉のその他の遺構出土石器実測図１
（１～９は1/2、他は1/3）…… 214
第147図　弥生時代前期から中期前葉のその他の遺構出土石器実測図２
（６は1/4、他は1/3）…… 216
第148図　弥生時代前期から中期前葉の遺構外出土石器実測図（１～4･8･11は1/2、他は1/3）　217

第149図　弥生時代前期から中期前葉の遺構外出土石器・土製品実測図
（12は1/6、13は1/4、他は1/3）…… 218
第150図　弥生時代終末から古墳時代初頭の略遺構配置図・地形復元図（1/800）…… 222
第151図　古墳時代前期の略遺構配置図・地形復元図（1/800）…… 223
第152図　弥生時代終末から古墳時代初頭の竪穴住居跡実測図１
１区１～３号竪穴住居跡（1/60）…… 225
第153図　弥生時代終末から古墳時代初頭の竪穴住居跡出土土器実測図１
１号竪穴住居跡（1/3）…… 226
第154図　弥生時代終末から古墳時代初頭の竪穴住居跡実測図２
１区4･5号竪穴住居跡（1/60）…… 229
第155図　弥生時代終末から古墳時代初頭の竪穴住居跡出土土器実測図２
１区２～４号竪穴住居跡（14は1/4、他は1/3）…… 230
第156図　弥生時代終末から古墳時代初頭の竪穴住居跡出土土器実測図３
１区５号竪穴住居跡（1/3）…… 232
第157図　弥生時代終末から古墳時代初頭の竪穴住居跡実測図３
１区6･9号竪穴住居跡（1/60）…… 233
第158図　弥生時代終末から古墳時代初頭の竪穴住居跡出土土器実測図４
１区5･6･9号竪穴住居跡（1/3）…… 234
第159図　弥生時代終末から古墳時代初頭の竪穴住居跡実測図４
１区37･39号竪穴住居跡（1/60）…… 235
第160図　弥生時代終末から古墳時代初頭の竪穴住居跡実測図５
１区38号竪穴住居跡（1/60）…… 236
第161図　弥生時代終末から古墳時代初頭の竪穴住居跡出土土器実測図５
１区38号竪穴住居跡（1/3）…… 238
第162図　弥生時代終末から古墳時代初頭の竪穴住居跡実測図６
１区40･42号竪穴住居跡（1/60）…… 239
第163図　弥生時代終末から古墳時代初頭の竪穴住居跡実測図７
１区43号竪穴住居跡・35号溝（1/80・1/40）…… 241
第164図　弥生時代終末から古墳時代初頭の竪穴住居跡実測図８
１区44･45号竪穴住居跡（1/60）…… 243
第165図　弥生時代終末から古墳時代初頭の竪穴住居跡出土土器実測図６
１区40･42～44号竪穴住居跡（1/3）…… 244
第166図　弥生時代終末から古墳時代初頭の竪穴住居跡出土土器実測図７
１区45号竪穴住居跡（1/3）…… 245
第167図　弥生時代終末から古墳時代初頭の竪穴住居跡実測図９
１区52･53号竪穴住居跡（1/60）…… 246
第168図　弥生時代終末から古墳時代初頭の竪穴住居跡出土土器実測図８
１区52号竪穴住居跡（1/3）…… 247
第169図　弥生時代終末から古墳時代初頭の竪穴住居跡実測図10
１区56号竪穴住居跡（1/60）…… 248
第170図　弥生時代終末から古墳時代初頭の竪穴住居跡出土土器実測図９
１区53号竪穴住居跡（1/3）…… 248

第171図　弥生時代終末から古墳時代初頭の掘立柱建物跡実測図
１区5･6号掘立柱建物跡（1/60）…… 249
第172図　弥生時代終末から古墳時代初頭の掘立柱建物跡実測図
１区10号掘立柱建物跡（1/60）…… 250
第173図　１号墳実測図（1/40･1/80）…… 251
第174図　１号墳出土土器実測図（1/3）…… 252
第175図　1･2号方形周溝墓実測図（1/60･1/120）…… 254
第176図　1･2号方形周溝墓出土土器実測図（1/3）…… 255
第177図　3･4号方形周溝墓実測図（1/60･1/120）…… 257
第178図　３号方形周溝墓出土土器実測図（1/3）…… 259
第179図　５号方形周溝墓実測図（1/40･1/80）…… 260
第180図　5･6号墓、１号甕棺墓実測図（３は1/15、他は1/60）…… 261
第181図　4･5号方形周溝墓・６号墓出土土器実測図（1/3）…… 262
第182図　１区１号甕棺墓出土土器実測図（1/3）…… 262
第183図　１区74号土坑、１区ピット260･261･268実測図　（１は1/40、他は1/20）…… 263
第184図　１区ピット260･268･302出土土器実測図（1/3）…… 264
第185図　１区７号溝実測図（1/120）…… 265-266
第186図　１区７号溝出土土器実測図１（1/3）…… 267
第187図　１区７号溝出土土器実測図２（６は1/4、他は1/3）…… 269
第188図　１区７号溝出土土器実測図３（1/3）…… 270
第189図　１区７号溝出土土器実測図４（1/3）…… 272
第190図　１区７号溝出土土器実測図５（1/3）…… 273
第191図　１区28 ～ 30･32･36･37号溝、３号落ち込み実測図　（８は1/120、他は1/60）…… 274
第192図　１区28 ～ 30号溝出土土器実測図（1/3）…… 275
第193図　１区32号溝出土土器実測図（1/3）…… 277
第194図　１区34･35号溝出土土器実測図（1/3）…… 279
第195図　１区36号溝出土土器実測図（1/3）…… 281
第196図　１区37号溝出土土器実測図１（1/3）…… 282
第197図　１区37号溝出土土器実測図２（1/3）…… 283
第198図　１区37号溝・２区１号溝、１区３号落ち込み出土土器実測図（２は1/4、他は1/3）… 285
第199図　古墳時代前期の石器・土製品・鉄製品実測図（１は1/2、15は1/4、他は1/3）…… 288

〔下巻〕

第200図　古代の略遺構配置図・地形復元図（1/800）　…… 2
第201図　古代の掘立柱建物跡実測図１　１区１・２号掘立柱建物跡（1/60）…… 3
第202図　古代の掘立柱建物跡実測図２　１区11号掘立柱建物跡（1/60）…… 4
第203図　古代の掘立柱建物跡実測図３　１区20号掘立柱建物跡（1/80）…… 4
第204図　古代の掘立柱建物跡実測図４　１区21号掘立柱建物跡（1/60）…… 5
第205図　古代の掘立柱建物跡実測図５　１区23･24号掘立柱建物跡（1/80）…… 6
第206図　古代の掘立柱建物跡実測図６　１区25･26号掘立柱建物跡（1/60）…… 7
第207図　古代の掘立柱建物跡実測図７　１区27号掘立柱建物跡（1/60）…… 8
第208図　古代の掘立柱建物跡実測図８　１区28･30号掘立柱建物跡（1/60）…… 9

第209図　古代の掘立柱建物跡実測図９　１区32号掘立柱建物跡（1/60）…… 10
第210図　古代の掘立柱建物跡実測図10　１区38･39号掘立柱建物跡（1/60）…… 11
第211図　古代の掘立柱建物跡実測図11　１区43･44号掘立柱建物跡（1/60）…… 12
第212図　古代の掘立柱建物跡実測図12　２区12号掘立柱建物跡（1/60）…… 12
第213図　古代の柵跡・土坑実測図　１区2･3･8号柵跡、４号井戸、75･101号土坑、ピット485（1/60）… 13
第214図　古代の遺構出土土器実測図　2･23･25･26･43･44号掘立柱建物跡、100号土坑、４号井戸、
ピット170･425･495、41号溝（1/3）…… 14
第215図　古代の遺構外出土土器・陶器実測図（1/3）…… 16
第216図　中世の略遺構配置図・地形復元図（1/800）…… 18
第217図　中世の掘立柱建物跡実測図１　１区３号掘立柱建物跡（1/60）…… 19
第218図　中世の掘立柱建物跡実測図２　１区4･8号掘立柱建物跡（1/60）…… 20
第219図　中世の掘立柱建物跡実測図３　１区７号掘立柱建物跡（1/60）…… 21
第220図　中世の掘立柱建物跡実測図４　１区12･14号掘立柱建物跡（1/60）…… 22
第221図　中世の掘立柱建物跡実測図５　１区15･16･19号掘立柱建物跡（1/60）…… 23
第222図　中世の掘立柱建物跡実測図６　１区22号掘立柱建物跡（1/60）…… 24
第223図　中世の掘立柱建物跡実測図７　１区33･41号掘立柱建物跡（1/60）…… 25
第224図　中世の掘立柱建物跡実測図８　１区51･52号掘立柱建物跡（1/80）…… 26
第225図　中世の掘立柱建物跡実測図９　１区54･55号掘立柱建物跡（1/60）…… 27
第226図　中世の掘立柱建物跡実測図10　２区1･2号掘立柱建物跡（1/60）…… 28
第227図　中世の掘立柱建物跡実測図11　２区３号掘立柱建物跡（1/60）…… 29
第228図　中世の掘立柱建物跡実測図12　２区4･5号掘立柱建物跡（1/60）…… 30
第229図　中世の掘立柱建物跡実測図13　２区6･7号掘立柱建物跡（1/60）…… 31
第230図　中世の掘立柱建物跡実測図14　２区９号掘立柱建物跡（1/60）…… 32
第231図　中世の掘立柱建物跡実測図15　２区10･11号掘立柱建物跡（1/60）…… 33
第232図　中世の掘立柱建物跡実測図16　２区13号掘立柱建物跡（1/60）…… 34
第233図　中世の掘立柱建物跡実測図17　２区14･15号掘立柱建物跡（1/60）…… 35
第234図　中世の掘立柱建物跡実測図18　２区16号掘立柱建物跡（1/60）…… 36
第235図　中世の掘立柱建物跡実測図19　２区17･18号掘立柱建物跡（1/60）…… 37
第236図　中世の柵跡実測図１　１区1･4･5･6号柵跡（１は1/60、他は1/80）…… 38
第237図　中世の柵跡実測図２　１区７号柵跡（1/80）…… 39
第238図　中世の柵跡実測図３　１区9･10･11･13号柵跡（1/60）…… 40
第239図　中世の柵跡実測図４　１区14号柵跡（1/80）…… 41
第240図　中世の掘立柱建物跡・柵跡出土土器・陶磁器実測図（1/3）…… 42
第241図　中世の土坑実測図１　１区4･16･43 ～ 45号土坑実測図（1/60）…… 43
第242図　中世の土坑出土土器実測図１　１区4･16･43 ～ 45号土坑（1/3）…… 44
第243図　中世の土坑実測図２　１区54 ～ 59号土坑実測図（1/60）…… 45
第244図　中世の土坑出土土器実測図２　１区54号土坑（17は1/4、他は1/3）…… 46
第245図　中世の土坑実測図３　１区60･61号土坑実測図（1/60）…… 49
第246図　中世の土坑実測図４　１区62 ～ 65a･b号土坑実測図（1/60）…… 50
第247図　中世の土坑実測図５　１区66 ～ 68･80･100号土坑実測図（1/60）…… 51
第248図　中世の土坑実測図６　１区102･108･109号土坑実測図（1/60）…… 52
第249図　中世の土坑出土土器・陶磁器実測図２

１区55･59･60･61･64･102･108号土坑（２は1/4、他は1/3）…… 53
第250図　中世の土坑実測図７　２区１～６号土坑実測図（１は1/80、他は1/60）…… 55
第251図　中世の土坑実測図８　２区8･10～2･14～22号土坑実測図（1/60）…… 57
第252図　中世の土坑実測図９　２区３～34号土坑実測図（1/60）…… 61
第253図　中世の土坑実測図10　２区37･38･40･41号土坑実測図（1/60）…… 63
第254図　中世の土坑出土土器･陶磁器実測図３
２区1･8･14･16･18～20･22～25･31～34･38号土坑（1/3）…… 64
第255図　中世の井戸･墓実測図　（1/60）…… 65
第256図　中世の井戸･墓出土土器･陶磁器実測図（1/3）…… 67
第257図　中世の溝土層断面実測図１　１区2･4･5･11･12･14･15･17～20･22号溝（1/60）…… 69
第258図　中世の溝出土土器･陶磁器実測図１　１区１号溝（1/3）…… 70
第259図　中世の溝出土土器･陶磁器実測図２　１区２号溝（７は1/4、他は1/3）…… 71
第260図　中世の溝出土土器･陶磁器実測図３　１区４号溝（1/3）…… 73
第261図　中世の溝出土土器･陶磁器実測図４　１区５号溝（15は1/4、他は1/3）…… 75
第262図　中世の溝出土土器･陶磁器実測図５　１区5b･5c･6･8･11号溝（1/3）…… 77
第263図　中世の溝出土土器･陶磁器実測図６　１区12･13号溝（1/3）…… 79
第264図　中世の溝出土土器･陶磁器実測図７　１区14･19号溝（1/3）…… 81
第265図　中世の溝出土土器実測図８　１区20号溝（1/3）…… 85
第266図　中世の溝出土土器･陶磁器実測図９　１区22･23･26･38号溝（1/3）…… 86
第267図　中世の溝土層断面実測図　２区2･3a･8･11･16･23号溝（1/60）…… 89
第268図　中世の溝出土土器･陶磁器実測図10　２区2･3･9･11号溝（1/3）…… 91
第269図　中世の溝出土土器･陶磁器実測図11
２区14･16･18･20･23･25号溝（14は1/4、他は1/3）…… 94
第270図　１区号落ち込み出土土器･陶磁器実測図（５は1/4、他は1/3）…… 97
第271図　中世の１区ピット出土土器･陶磁器実測図（1/3）…… 99
第272図　中世の２区ピット･遺構外出土土器･陶磁器実測図（1/3）…… 100
第273図　中世の土製品･金属製品･鉄滓実測図（1/3）…… 104
第274図　中世の石製品実測図１（1～6･8は1/3、他は3/4）…… 105
第275図　中世の石製品実測図２（4･5は1/4、他は1/8）…… 106
第276図　中世の木製品実測図１（1/6）…… 107
第277図　中世の木製品実測図２（４は1/3、他は1/8）…… 108
第278図　その他の時期の土器実測図（1/3）…… 109
第279図　中国古代鋼鉄技術体系 …… 115
第280図　Fe－O系平衡状態図 …… 116
第281図　縄文時代の打製石斧と石鎌の製作技法（1/4）…… 128
第282図　北部九州の弥生時代前期環濠比較図（1/2,000）…… 130
第283図　環濠出土土器変遷図１（1/12）…… 132
第284図　環濠出土土器変遷図２（1/12）…… 133
第285図　弥生時代前期から中期前葉の遺構変遷図（1/1,200）…… 134
第286図　弥生時代前期の東北系土器と丹精製土器（３は1/4、8は1/8、他は1/3）…… 136
第287図　弥生時代終末から古墳時代前期の遺構変遷図（1/1,600）…… 139
第288図　溝が巡る竪穴住居跡（1･2は1/200、他は1/400）…… 141

第289図　方形区画溝比較図（７は1/800、他は1/400）…… 143
第290図　古代の官衙遺跡・条里遺跡との関係図（1/2, 000） …… 147
第291図　中世集落想定図（1/1,200） …… 149
第292図　宝山桑ノ木遺跡Ⅰ区トレンチ出土遺物実測図（1/3） …… 154
付図　矢留堂ノ前遺跡遺構全体図（1/300）

表目次

〔上巻〕

表１　東九州自動車道関係発掘調査地点一覧…… 5
表２　特殊遺物一覧表１…… 35
表３　特殊遺物一覧表２…… 36
表４　特殊遺物一覧表３…… 219
表５　特殊遺物一覧表４…… 220
表６　特殊遺物一覧表５…… 288

〔下巻〕

表７　供試材の履歴と調査項目…… 124
表８　供試材の組成…… 125
表９　出土遺物の調査結果のまとめ…… 126

写真目次

〔下巻〕

Photo. 1　鋳造鉄斧片の顕微鏡組織とEPMA炭素線分析 …… 118
Photo. 2　顕微鏡組織１…… 119
Photo. 3　顕微鏡組織２…… 120
Photo. 4　顕微鏡組織３…… 121
Photo. 5　顕微鏡組織４…… 122
Photo. 6　顕微鏡組織５…… 123
Photo. 7　弥生生時代前期の遺構出土石材…… 145
Photo. 8　54 号土坑出土鋳型 …… 145
Photo. 9　弥生生時代前期の製塩土器の塩分吸着状況…… 145
Photo.10　古墳時代初頭の胎土使い分けの高坏 …… 145
Photo.11　赤く焼いた小型高坏・器台 …… 145
Photo.12　環濠土層断面 …… 146

Ⅰ　はじめに

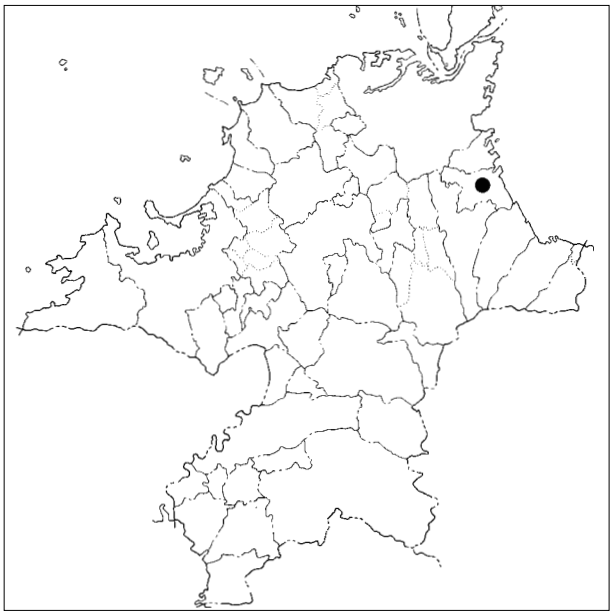
1　調査に至る経過

九州内では、九州縦貫自動車道から始まり、大分道や長崎道、宮崎道と高速道路の建設が進められてきたが、東九州側では道路整備が停滞していた。九州新幹線が福岡市・鹿児島市間で開通した九州西回りルートに比して、東回りルートは日豊線は福岡県全域と大分県域の一部が複線化されたのみで単線区間が多く、運行本数も多くない。したがって、都市部と異なり、生活に占める自動車の比重が高い地域が多いことから、南北を貫く高規格道路が待望されて久しかった。アクセス道路は、農産物・水産物の輸送の効率化や、工場の誘致や企業の進出、観光産業の振興のために欠かすことができず、東九州地域の期待がかけられている。このような中で計画された東九州自動車道は、九州縦貫自動車道小倉東JCTで分岐し、福岡県北九州市から東九州の各県を結び、鹿児島県鹿児島市に至る総延長約436kmが予定されており、大分自動車道・宮崎自動車道を利用する場合と比較して、大分市であれば約80㎞、宮崎市でも約40㎞の短縮となる。平成17（2005）年10月１日に道路公団の民営化組織として誕生した、西日本高速道路株式会社（ネクスコ西日本）九州支社が事業にあたっている。福岡県内のルートは北九州市から築上郡上毛町に至る49.4kmで、北九州市からみやこ町の椎田道路に接続する部分、及び築城IC、椎田ICの改修については福岡工事事務所が、椎田道路から分岐して大分県へと続く部分については中津工事事務所がそれぞれ担当している。

北九州JCT ～行橋IC区間までは平成26（2014）年3月に開通しており、現在工事が進められている行橋IC ～県境についても平成28年度末までに供用開始する予定である。東九州自動車道の整備計画については、報告済みの『東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告−1−雨窪遺跡群』に詳しい。

平成14年度以降、用地取得が進んだ箇所から順次試掘確認調査と併行して、多くの発掘調査を実施しており、福岡県内の調査は平成25年度でほぼ終了している。

なお、東九州自動車道全体で、コストダウンを図る目的で、緑地化部分や橋桁の下部、将来車線として当面工事を行わない部分など、将来的に調査が可能と考えられる部分については、「限定協議」範囲として、調査対象から外すこととなり、苅田北九州空港IC ～行橋IC間については平成18（2006）年、行橋IC ～豊津IC間及び築上～県境間については平成20年に協議文書を交わしている（苅田北九州空港～豊津間は平成23年に再協議）。ただし、遺跡の内容を知る上で重要と考えられる部分については、「限定協議対象地の発掘調査」の依頼を行い、承諾を得たうえで発掘調査を行っている。



第 1 図　矢留堂ノ前遺跡位置図

2　調査の経緯

東九州自動車道路線は、大字矢留地区一帯を横断しており、平成21(2009)年３月24日～26日に、用地取得の進んだ範囲から試掘調査を実施し、その結果西端のＢ762－１番地から東の858－１番地について本調査が必要となった。平成21（2009）年10月５日に、用地取得の進んでいた用地中央を横断する現道より西側を１区として発掘調査に着手した。周知の埋蔵文化財包蔵地としては、用地内は矢留鬼塚古墳と矢留堂ノ前遺跡という遺跡名があり、調査が進むにつれ一連の遺跡であることがわかり、矢留堂ノ前遺跡の単一遺跡とした。その後、東側の２区の調査に着手したが、限定協議範囲であったものの用地境界に用水路を埋設する必要が生じたことから、併行して調査を行った。さらに、調査中に用地取得の進んだ北側用地境部分の所も試掘し、遺構が確認できた範囲については併行して調査し、平成23（2011）年10月24日に終了した。

3　調査・整理組織

平成21（2009）年度から23（2011）年度の調査・平成26（2014）年度の報告に関わる関係者は次のとおりである。平成23年度以降は組織改変により、埋蔵文化財調査業務全般が九州歴史資料館に移管され、事業者との契約･整理報告等を行っている。

西日本高速道路株式会社九州支社

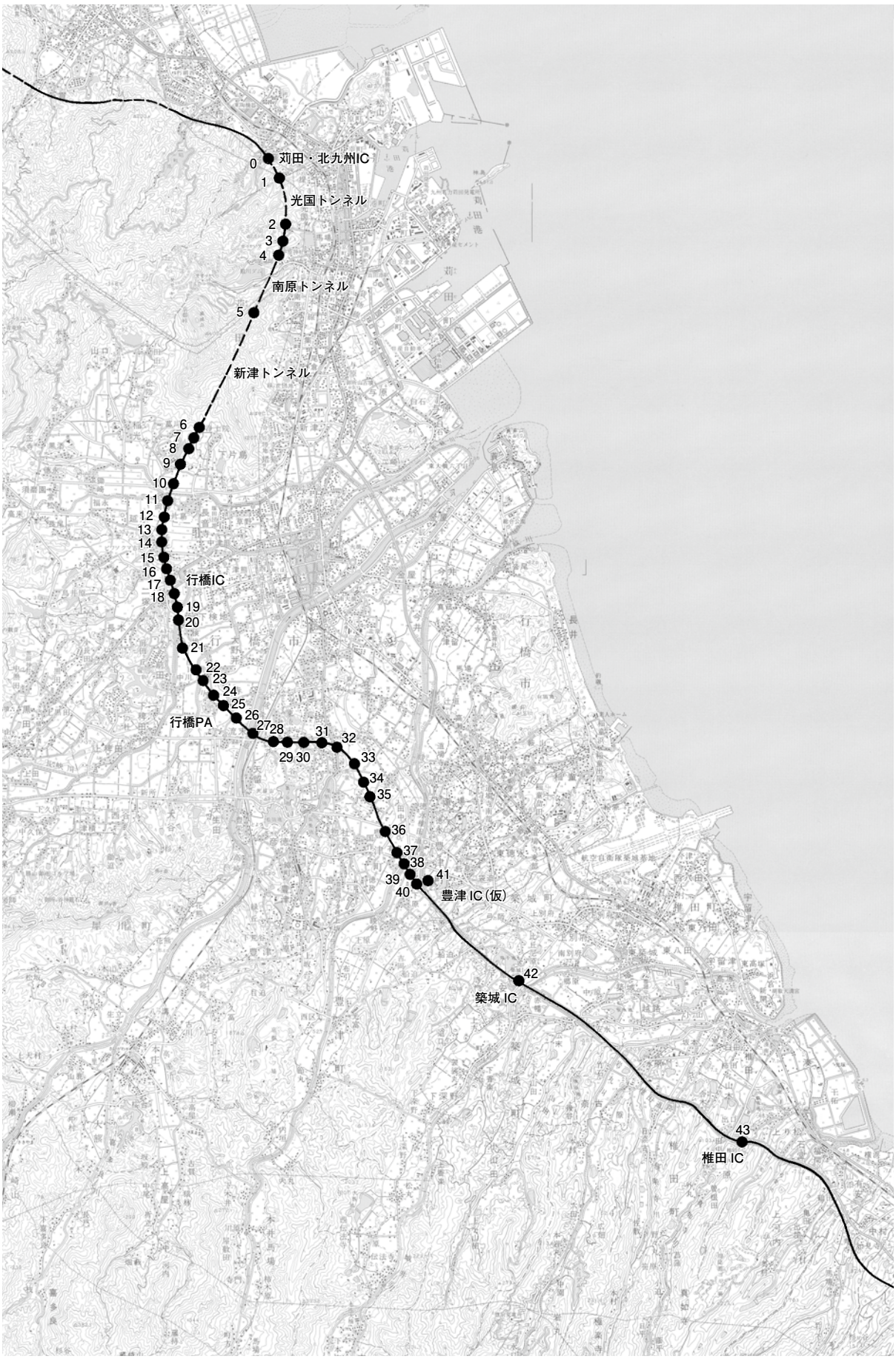
	平成21年度	平成22年度	平成23年度	平成24年度	平成26年度
支社長	久保晶紀	久保晶紀 (～9.30) 本間清輔 (10.1～)	本間清輔	本間清輔	本間清輔
福岡工事事務所長	福田美文	福田美文	中薗明広	源谷秋義	源谷秋義
副所長（技術担当）	岩尾泉 (8.1～)	岩尾泉 (～9.30) 入江壮太 (10.1～)	入江壮太 今井栄蔵 (～9.30) 井　秀和 (10.1～)	松繁浩二 井　秀和	松繁浩二
副所長（事務担当）	中村重俊	原野安博	原野安博	原野安博	甲斐島武司 (10.1～)
総務課長	白川雄二 (～9.30) 江口政秋 (10.1～)	江口政秋	江口政秋	馬場孝人	桑原和之
用地課長	桑原和之	桑原和之	桑原和之	桑原和之 (～5.10) 原野安博 (5.11～)	大野嘉彦
工務課長	大久保良和 (～9.30) 石塚純 (10.1～)	石塚純	石塚純 (～9.30) 堅山哲二 (10.1～)	堅山哲二	田中康一郎
行橋南工事長	杉本浩司	杉本浩司	榎本敬二	榎本敬二	榎本敬二

福岡県教育委員会（平成23年度の組織改変により、発掘調査は九州歴史資料館に移管）

総括	平成21年度	平成22年度
教育長	森山良一	杉光　誠
教育次長	亀岡　靖	荒巻俊彦
総務部長	荒巻俊彦	今田義雄
文化財保護課長	平川昌弘	平川昌弘
同副課長	池邉元明	伊﨑俊秋
参事兼課長補技術補佐	小池史哲	小池史哲
	伊﨑俊秋	
課長補佐	前原俊史	日高公徳
庶務		
管理係長	富永育夫	富永育夫
事務主査		
主任主事	野田　雅	仲野洋輔
調査・整理・報告		
参事補佐兼調査第二係長	飛野博文	飛野博文
参事補佐	新原正典	新原正典
技術主査	秦　憲二	秦　憲二

九州歴史資料館

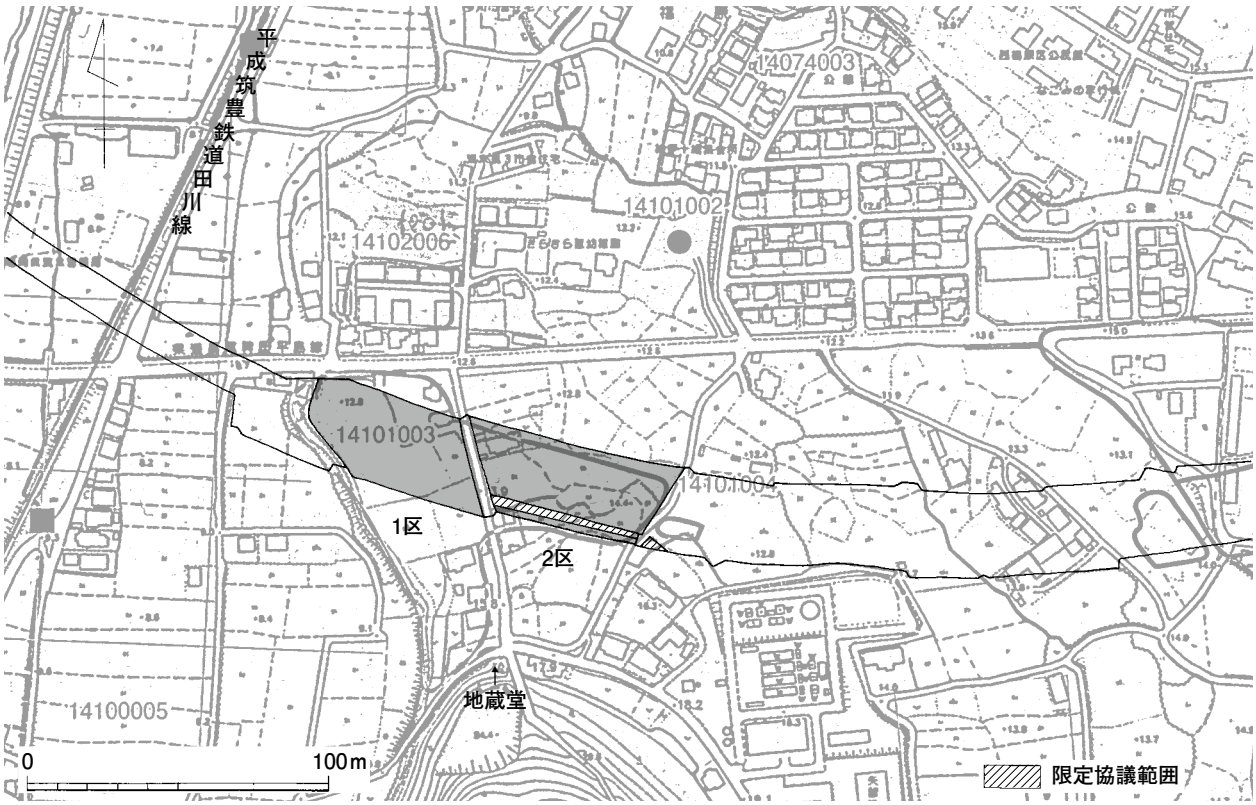
総括	平成23年度	平成24年度	平成26年度
館長	西谷　正	西谷　正	杉光　誠
副館長	南里正美	篠田隆行	伊﨑俊秋
総務室長（企画主幹）	圓城寺紀子	圓城寺紀子	塩塚孝憲
文化財調査室長（企画主幹）	飛野博文	飛野博文	飛野博文
文化財調査室長補佐（企画主幹）		吉村靖徳	吉村靖徳
文化財班長（技術主査）	小川泰樹	小川泰樹	秦　憲二
庶務			
総務班長	塩塚孝憲	長野良博	山﨑　彰
庶務担当	近藤一崇	近藤一崇	宮崎奈巳
事務主査		青木三保	南里成子
事務主査			宮崎奈巳
主任主事	熊谷泰容	近藤一崇	秦　健太
	近藤一崇		
主事	谷川賢治	谷川賢治	
整理担当			
技術主査（保存管理班長）	加藤和歳	加藤和歳	加藤和歳
参事補佐	小池史哲	小池史哲	池邉元明
技術主査			小川泰樹
主任技師			小林　啓
技師	小林　啓	小林　啓	
調査･報告			
技術主査	秦　憲二（調査）		秦　憲二（報告）



第2図　東九州自動車道福岡工事事務所管内路線図及び調査地点位置図（1/100,000）

表1　東九州自動車道関係発掘調査地点一覧

地点	工事件名	遺跡名	所在地	対象面積（㎡）	試掘年度	調査面積（㎡）	調査年度	報告年度	既刊報告書番号	備考
0	苅田IC	雨窪遺跡群	京都郡苅田町大字雨窪			4000	H13･14	H15	１集	
1	福岡		京都郡苅田町大字雨窪	1700	H22					遺跡なし
2	福岡		京都郡苅田町大字堤	4500	H21･23					遺跡なし
3	福岡	馬場遺跡群	京都郡苅田町大字堤･馬場	13100	H16･20･21	1200	H20	H24	４集	
4	福岡	馬場遺跡群	京都郡苅田町大字馬場･南原	35300	H18･19	3900	H19･20	H24	４集	
5	福岡		京都郡苅田町大字集	32100	H21･22					遺跡なし
6	福岡		京都郡苅田町大字下片島	30600	H18･20･21･23					遺跡なし
7	福岡		京都郡苅田町大字下片島	10700	H18					遺跡なし
8	福岡	岩屋古墳群	京都郡苅田町大字上片島	24200	H20～22	5000	H19	H24	５集	
9	福岡	岩屋古墳群	京都郡苅田町大字上片島	29600	H20～22		H19	H24	５集	
10	福岡		京都郡苅田町大字上片島	21500	H20					遺跡なし
11	福岡	上片島遺跡	京都郡苅田町大字岡崎･上片島	18200	H20	8440	H21～23	H24	5集	
12	福岡	上片島遺跡	京都郡苅田町大字上片島	7500	H20	6180	H21	H24	5集	
13	福岡		行橋市延永	12200	H19					遺跡なし
14	福岡		行橋市延永	17500	H19					遺跡なし
15	福岡	延永ヤヨミ園遺跡	行橋市延永･吉国	24810	H22	24810	H19～23	H23～26	2･9･11･18集	
16	福岡		行橋市吉国	4400	H20					遺跡なし
17	福岡		行橋市吉国	5100	H19					遺跡なし
18	福岡		行橋市吉国･下検地	82500	H18･19					遺跡なし
19	福岡		行橋市下検地	12710	H22					遺跡なし
20	福岡		行橋市上検地･下検地	20650	H22					遺跡なし
21	福岡		行橋市上検地･中川･大野井	19190	H22					遺跡なし
22	福岡		行橋市大野井･宝山	4820	H20･22					遺跡なし
23	福岡		行橋市宝山	10050	H20					遺跡なし
24	福岡	宝山小出遺跡	行橋市宝山	16100	H20	6360	H21･22	H25	12集	
25	福岡	宝山桑ノ木遺跡	行橋市宝山･流末	46620	H20･21	31550	H22～24	H25	12集	
26	福岡	流末溝田遺跡	行橋市流末	14710	H20･21	2900	H22	H25	12集	
27	福岡		行橋市流末	840						
28	福岡	矢留堂ノ前遺跡	行橋市矢留	18590	H20	12750	H21～23	H26	19集（本書）	
29	福岡		行橋市矢留･南泉	7000	H20･22					
30	福岡	福原長者原遺跡 福原寄原遺跡	行橋市南泉	18774	H19･22	16574	H22～24	H25	13集	
31	福岡	福原寄原遺跡	行橋市南泉	10950	H21	3300	H21	H25	13集	
32	福岡	竹並大車遺跡 竹並ヒメコ塚古墳	行橋市南泉	13888	H21･22	13888	H22			H22行橋市による調査
33	福岡	竹並大内田遺跡	行橋市南泉	17636	H20･21	4560	H21	H24	6集	
34	福岡	鬼熊遺跡	行橋市南泉	15013	H20	15013	H21			H21行橋市による調査
35	福岡	草場角名遺跡 国作三角遺跡	行橋市南泉･京都郡みやこ町国作	42940	H20～23	2720＋7000	H22･23	H24 H25	7集 8集	
36	福岡	八反田遺跡 京ヶ辻遺跡	京都郡みやこ町国作･田中･有久	29491	H20～23	29491	H21～23	H25 H26	14･20集	H21八反田遺跡はみやこ町による調査
37	福岡		京都郡みやこ町有久	1110	H21					遺跡なし
38	福岡	呰見川ノ上遺跡	京都郡みやこ町呰見	1132	H21	1132	H22	H25	10集	
39	福岡	呰見中園遺跡 呰見大塚古墳	京都郡みやこ町呰見	8218	H21･22	5918	H21～23		17集	H22呰見中園遺跡はみやこ町による調査
40	福岡	カワラケ田遺跡 下原七反田遺跡 八ッ重遺跡	京都郡みやこ町呰見･下原	45510	H19･20･21	22763	H20～22	H23･25	3･10集	
41	福岡	カワラケ田遺跡	京都郡みやこ町呰見	5080	H21	3580	H21･22	H25	10集	
42	福岡	安武・深田遺跡	築上郡築上町安武	26000	H21～23	26000	H22･23	H26	20集	一部築上町による調査
43	福岡		築上郡築上町小原	24359	H21･23					



第３図　矢留堂ノ前遺跡調査範囲図（1/2,500）

なお、発掘調査にあたっては、地元の方々、調査に参加された方々、行橋市教育委員会の関係者の方々など、多くの方より御協力を賜った。ここに記して感謝いたします。

Ⅱ　位置と環境

１　地理的環境

行橋市は福岡県東部の周防灘に面した京都（みやこ）平野の中央部に位置する。京都平野は周防灘に註ぐ今川・小波瀬川・長峡（ながお）川・祓川によって形成された小さな平野の集合体といえる。小波瀬川下流域は丘陵裾部と川が近接しているため平坦地が狭隘で、長峡川・祓川流域は氾濫原からなる低地帯で微高地が少ない。そのため、今川と祓川に挟まれた豊津台地に遺跡が集中しており、地理的にも歴史的にも京都平野の中心的位置を占めている。

豊津台地の行橋市とみやこ町の境界には、矢留山（標高93.9m）と竹並丘陵が存在しており、矢留山と竹並丘陵との間には旧河川が形成した谷が入っているため、この台地は市町域で地形的にも南北に分断されている。豊津台地の行橋市側は小河川が形成した谷が入り組んでおり、矢留山の北端の堂山丘陵裾部もまた「裏ノ谷」といわれる旧流路によって竹並丘陵と分断され、独立丘陵状の様相を呈している。

２　歴史的環境

本項では矢留堂ノ前遺跡に関係する中世までを概観する。京都平野の北西には、ナウマンゾウなど後期更新世の動物化石を産出することで有名なカルスト台地平尾台があり、人類が早くから住み着いたようである。京都平野における旧石器時代の遺跡は、後期旧石器時代のもののみで、行橋市渡築紫遺跡に代表される。この遺跡からは水晶・珪質岩・黒曜石からなる石器製作跡および礫群が確認されており、出土した剥片は150点を越えている。本遺跡周辺でも行橋市鬼熊遺跡（註１）・柳井田早崎遺跡（註２）でナイフ形石器が出土している。

縄文時代の遺跡は、早期の押型文土器が行橋市辻垣長通遺跡（註３）から出土している。また、みやこ町徳永川ノ上遺跡（註４）・行橋市鋤先遺跡（註５）・神手遺跡（註６）で落し穴群が発見されている。前期・中期の遺跡は見られないが、後・晩期になると遺跡数が増加する。後期の代表的な遺跡はみやこ町節丸西遺跡（註７）で、後期中頃から晩期初頭の竪穴住居跡が24基発見されている。遺跡周辺では、福原長者原遺跡（註８）で後期から晩期初頭の竪穴住居跡１基が発見され、すでに消滅しているが、宝山貝塚（註９）で磨消縄文土器や刻目突帯文土器が採集されているほか、行橋市流末溝田遺跡（註10）で黒川式土器や突帯文土器が出土している。

弥生時代では、前期の低地環濠集落の可能性のある行橋市辻垣ヲサマル遺跡（註11）・辻田畠田遺跡・長通遺跡が見られ、行橋市長井遺跡（註12）では夜臼式・板付Ⅰ式土器が採集されている。前期後葉から中期では、丘陵上の行橋市下稗田遺跡（註13）が著名で、多数の貯蔵穴群と集落に付随する集団墓が見られた。その一方で、鬼熊遺跡のような低地集落も発見されている。弥生後期になると、行橋市前田山遺跡（註14）で鏡が副葬された箱式石棺墓や土坑墓が発見され、下稗田遺跡では溝で区画された特定集団墓が形成されており、階級の分化が進んだことがうかがえる。終末期

1 矢留堂ノ前遺跡
2 矢留本畦遺跡
3 矢留二升五合古墳
4 矢留堂ノ山遺跡
5 矢留堂山古墳
6 福富長者原遺跡
7 福富寄原遺跡
8 寄原遺跡
9 福原遺跡
10 福富立石遺跡
11 赤ハゲ遺跡
12 福富下杯遺跡
13 福富ソウリ遺跡
14 福富大手遺跡
15 福富侍島遺跡
16 福富小畑遺跡
17 福富船越遺跡
18 農事試験場遺跡
19 長江トウノ木遺跡
20 長江平塚遺跡
21 崎野遺跡
22 崎野山城遺跡
23 柳井田早崎遺跡
24 柳井田藤ヶ塚畑遺跡
25 柳井田宮遺跡
26 侍塚遺跡
27 ヒメコ塚古墳
28 竹並下ノ原遺跡
29 竹並通り迫遺跡
30 竹並大内田遺跡
31 竹並遺跡
32 鬼熊遺跡
33 矢留遺跡
34 天生田大池遺跡
35 天生田矢萩遺跡
36 天生田大将陣東古墳群
37 天生田清地神社古墳
38 天生田宮ノ浦古墳群
39 天生田大将陣東横穴群
40 馬ヶ岳城跡
41 大谷車掘遺跡
42 大谷遠弥遺跡
43 大谷田淵遺跡
44 大谷天神尾遺跡
45 大谷舟山古墳群
46 大谷荒掘遺跡
47 古代官道
48 流末古川東遺跡
49 流末溝田遺跡
50 宝山桑ノ木遺跡
51 宝山小出遺跡
52 宝山下馬場遺跡
53 宝山城跡
54 大野井馬場遺跡
55 下稗田台ノ下遺跡
56 下稗田森遺跡
57 稗田城跡
58 下稗田遺跡
59 下稗田松山遺跡
60 前田平遺跡
61 前田山遺跡
62 ビワノクマ古墳
63 ビワノクマ遺跡
64 吉国木実堂古墳
65 延永中熊遺跡
66 延永水取遺跡
67 延永宮本遺跡
68 延永勝丸遺跡
69 延永石畑遺跡
70 延永ヤヨミ園遺跡
71 長尾病院南西遺跡
72 上片島遺跡群
73 稲光遺跡群
74 正覚寺古墳群
75 如寺遺跡群
76 葛川遺跡
77 葛川遺跡群
78 岩屋古墳群
79 浄土院遺跡群
80 木ノ元幸古墳群
81 今古賀遺跡
82 イノ山遺跡
83 百合ヶ丘古墳群
84 奥ヤ子古墳
85 奥ヤ子遺跡群
86 金屋遺跡
87 今井金屋遺跡
88 羽根木古屋敷遺跡
89 沓尾石切場遺跡
90 久津尾崎城跡
91 元永城尾古墳群
92 元永城跡
93 元永平畑古墳群
94 元永イツリ古墳群
95 長井作り山遺跡
96 長井遺跡
97 長井丸屋遺跡
98 蓑島山城跡
99 覗山穴田古墳群
100 覗山城跡
101 覗山古墳群
102 馬場観音山古墳群
103 馬場代遺跡
104 馬場村後遺跡
105 津留遺跡
106 津留足尾遺跡
107 津留見田遺跡
108 辻垣長通遺跡
109 辻垣ヲサマル遺跡
110 辻垣下出口遺跡
111 高瀬宮山古墳群
112 高瀬欠塚古墳群
113 隼人塚
114 道場寺屋敷横穴群
115 草場角名遺跡
116 道場寺鬼塚古墳
117 徳永宮地遺跡
118 上人塚古墳
119 徳永イナリ古墳
120 中原古墳
121 源左ェ門屋敷遺跡
122 京塚古墳群
123 徳永川ノ上遺跡
124 稲童古墳群
125 石並古墳
126 稲童上迫遺跡
127 稲童野稲遺跡
128 稲童1号掩体壕
129 稲童大山遺跡
130 波築紫C区遺跡
131 吹上古墳群
132 地蔵田遺跡
133 カワラケ田遺跡
134 皆見遺跡
135 皆見大塚古墳
136 皆見樋ノ口遺跡
137 皆見中園遺跡
138 神手遺跡
139 国作三角遺跡
140 京ヶ辻遺跡
141 徳政宮ノ上遺跡
142 豊前国分寺
143 惣社八幡古墳
144 正道遺跡
145 山ノ神遺跡
146 北原遺跡
147 国作城塚遺跡
148 国作銅遺跡
149 国作石塚遺跡
150 惣社古墳
151 幸木遺跡
152 豊前国府惣社地区
153 豊前国府御所地区
154 豊前国府政庁地区
155 国作八反田遺跡
156 新村ノ上古墳
157 彦徳甲塚古墳
158 彦徳サヤノ上古墳群
159 彦徳横穴群
160 甲塚北古墳
161 甲塚方墳
162 長養池遺跡
163 柱松古墳群
164 八景山南古墳群
165 八景山山麓古墳群

第４図　周辺遺跡分布図（1/50,000）

にはさらに階級分化が進んだ墳丘墓がみやこ町徳永川ノ上遺跡に存在している。

古墳時代では、豊前最古級の大型前方後円墳である苅田町石塚山古墳（国史跡）（註15）が京都平野の北端に出現する。銅鏡が11 ～ 14面副葬されており、この地域が早くから大和政権と結びついていたことを示している。中期には稲童古墳群（註16）やビワノクマ古墳（註17）といった豊富な鉄製武器を持った中小規模の古墳が沿岸部に点在している。

東九州高速道路の工事に伴い、みやこ町京ヶ辻遺跡（註18）では須恵器工人の集落跡が、砦見大塚古墳（註19）では壁画系装飾古墳が発見され、行橋市ひめこ塚古墳（註20）が調査されるなど古墳時代中・後期の新事実が明らかになってきている。

古墳時代後期では、集落遺跡に赤ハゲ遺跡（註21）や福富小畑遺跡（註22）・福原寄原遺跡（註23）などが発見されており、台地一帯に集落が広がっていたことがわかってきており、著名な竹並横穴墓群（註24）との関係がうかがわれる。本遺跡が立地する台地には、矢留二升五合古墳（註25）があり、現在は基底部の石材の一部だけが残っているが、墳丘部分を残して周囲が開墾されているので径30mほどの大型円墳であったことが想定される。

奈良時代に入るとみやこ町が豊前国の中心地となった。みやこ町国作地区に豊前国府跡（註26）があり、８世紀中葉には豊前国分寺跡（国史跡）・国分尼寺跡が創建されており、９世紀前半代には国分寺の瓦を焼いていた徳政窯跡（註27）が発見されている。近年、福原長者原遺跡（註28）では豊前国府跡の可能性がある官衙遺跡が確認され、国府が移転した可能性が指摘されている。

行橋市大谷車垣遺跡（註29）・天生田大池遺跡（註30）、みやこ町カワラケ田遺跡（註31）では古代官道の一部と見られる道路状遺構が発見されており、隣接する行橋市天生田矢萩遺跡（註32）では石帯が出土している。この官道は御所ヶ谷神籠石（国史跡）（註33）の北側を通っている。

平安時代になると京都平野北部には弥勒寺領荘園が数多く作られたが、南部は国衙が近いことから板井氏や高瀬氏など国衙に関わる有力者も勢力を持っていた。鎌倉時代に入ると、宇都宮氏が幕府から派遣され、築上町を中心に豊前国一帯に勢力を広げるが行橋市域には所領を持った形跡がない。このことは弥勒寺領荘園と国衙に関わる有力者の支配が強固であったことを示している。下稗田森遺跡（註34）では湖州鏡が副葬された土坑墓が発見されている。

室町時代には沿岸部の、今居津（今井津）が東九州の瀬戸内の玄関口の港町として発展し、今井の鋳物師集団の作った梵鐘が残っている。また、祓川河口の羽根木古屋敷遺跡（註35）では多量の中国産陶磁器が出土しており、港町の繁栄ぶりをしのばせている。

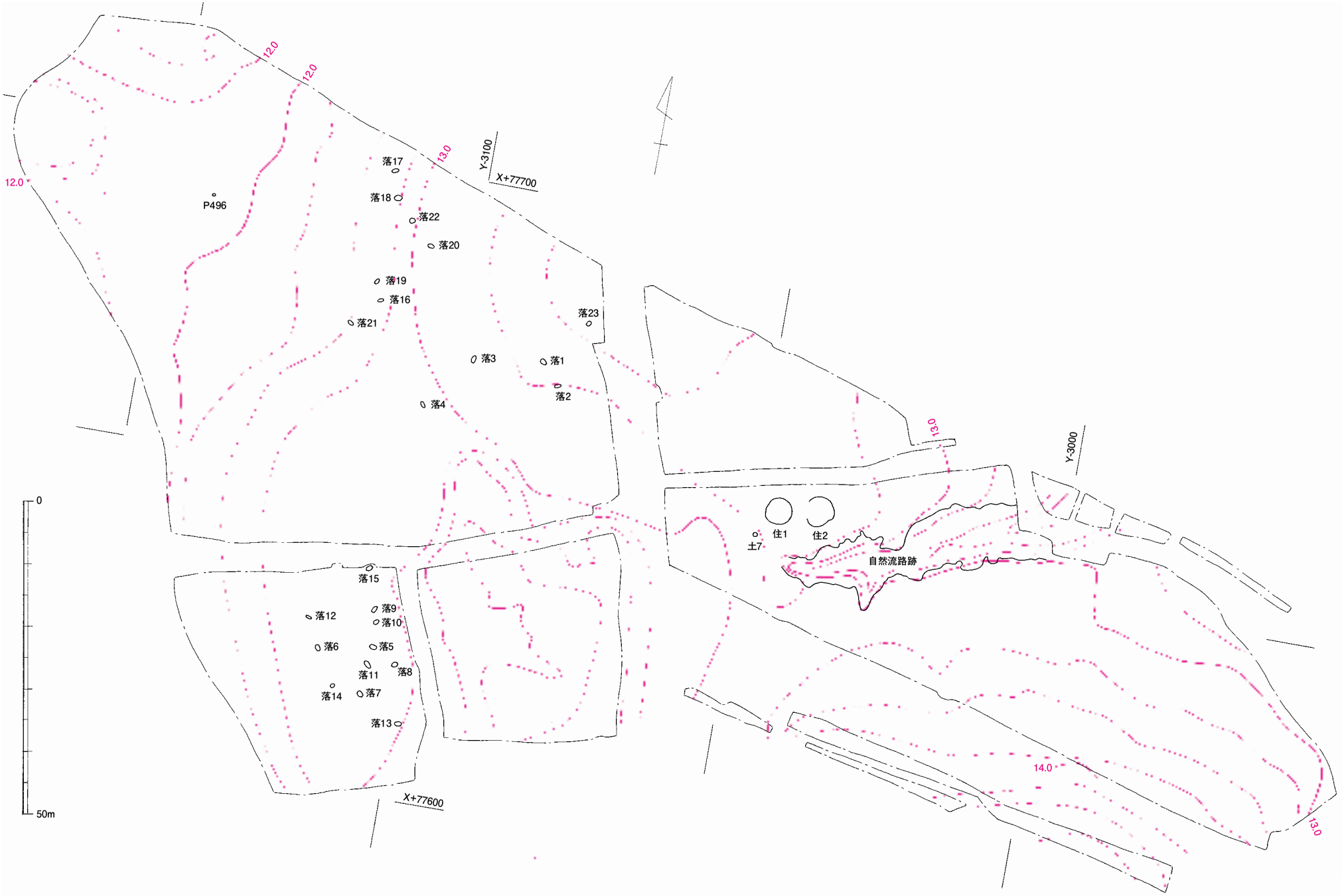
京都平野の外縁部には、北に高崎城、北西に障子ヶ岳城、南東に覗山城、南西に馬ヶ岳城跡が築かれており、中世後期には大内・大友・少弐らの勢力の係争地となった。京都平野の中心には宝山城跡があり、隣接する宝山小出遺跡・桑ノ木遺跡（註36）では室町時代の溝で整然と区画された集落が発見されており、城下町の様相を呈している。下稗田台ノ下遺跡と（註37）下稗田森遺跡では中世の屋敷地を区画する溝が確認されており、一連の居館跡の可能性が指摘されている。また、下稗田台ノ下遺跡では地下式土坑２基が検出されており、２号地下式土坑の上部には一石五輪塔が墓塔として樹立されていたことが確認され、１号地下式土坑でも五輪塔の火輪が出土しており、地下式土坑の機能について新たな知見を与えている。

註

1　行橋市教育委員会1999『鬼熊遺跡』行橋市文化財調査報告書第27集
2　行橋市教育委員会2001『柳井田早崎遺跡・柳井田藤ヶ塚畑遺跡』行橋市文化財調査報告書第27集
3　福岡県教育委員会1994『辻垣長通遺跡』椎田道路関係埋蔵文化財調査報告第２集
4　福岡県教育委員会1995『徳永川ノ上遺跡Ⅰ』椎田道路関係埋蔵文化財調査報告第４集
5　福岡県教育委員会1995『鋤先遺跡』椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第５集
6　福岡県教育委員会1992『神手遺跡』椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第６集
7　豊津町教育委員会1990『豊前国府および節丸西遺跡』豊津町文化財調査報告書第９集
8　福岡県教育委員会2000『福原寄原遺跡・福原長者原遺跡』福岡県文化財調査報告書第146集
9　行橋市、行橋市史編纂室2006『行橋市史　資料編　原始・古代』
10　九州歴史資料館2014『東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告（12)』
11　福岡県教育委員会1993『辻垣ヲサマル遺跡』椎田道路関係埋蔵文化財調査報告第１集
12　小田富士雄1972・73「福岡県長井遺跡の弥生式土器」『九州考古学』76 ～ 78号　九州考古学会
13　行橋市教育委員会1985『下稗田遺跡』行橋市文化財調査報告書第17集
14　行橋市教育委員会1987『前田山遺跡』行橋市文化財調査報告書第19集
15　苅田町教育委員会2000『石塚山古墳調査概報』苅田町文化財調査報告第９集
16　行橋市教育委員会2004『稲童古墳群』行橋市文化財調査報告書第32集
17　行橋市教育委員会2013『ビワノクマ古墳』行橋市文化財調査報告書第47集
18　九州歴史資料館2015『東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告（13)』
19　九州歴史資料館2015『東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告（14)』
20　行橋市教育委員会で整理中
21　竹並遺跡調査会1979『竹並遺跡』寧楽社赤ハゲ遺跡
22　福岡県教育委員会2004『福富小畑遺跡Ｂ地点』福岡県文化財調査報告書第194集
　　福岡県教育委員会2010『福富小畑遺跡Ｄ地点』福岡県文化財調査報告書第228集
　　１次調査（Ａ地点）は行橋市教育委員会で整理中
23　前掲註８
24　行橋市教育委員会1977「古墳時代集落の調査（赤ハゲ遺跡)」『竹並遺跡』
25　行橋市教育委員会遺跡調書より
26　前掲註７
27　九州歴史資料館1981『九州古瓦図録』
28　九州歴史資料館2015『東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告（12)』
29　行橋市教育委員会で整理中
30　福岡県教育委員会1999『天生田大池遺跡』福岡県文化財調査報告書第137集
31　九州歴史資料館2012『東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告（３)』
32　行橋市教育委員会で整理中
33　『史跡御所ヶ谷神籠石Ⅰ』行橋市文化財調査報告書第33集
34　行橋市教育委員会で整理中
35　行橋市教育委員会で整理中

36　前掲註10

37　行橋市教育委員会で整理中



第５図　縄文時代の略遺構配置図・地形復元図（1/800）

Ⅲ　発掘調査の記録

1　遺跡の概要

遺跡は行橋市大字矢留の字鬼塚と堂ノ前にあり、矢留山丘陵北端の堂山の北側尾根裾上に位置している。丘陵斜面の北と西は遺跡の西を流れる今川の氾濫原、東は自然流路が埋まった谷地形であり、遺跡は幅の広い舌状台地上に位置している。調査区内の北西部はみやこ養老院、北東は個人住宅、他は耕作地の開墾のために平坦に削平されており、現在は標高15m前後になっている。

遺跡からは、縄文時代から戦国時代にかけて多くの遺構が検出された。竪穴住居跡61基、掘立柱建物跡50棟、柵跡13条、溝状遺構53条、土坑93基、袋状貯蔵穴47基、落し穴23基、井戸４基、墳墓12基などが確認されている。

縄文時代は落し穴群と、縄文後期の集落で、行橋市内では貴重な資料となった。弥生時代前期の集落では環濠が注目される。遺跡の東から北に弧状に85m検出され、幅３m、深さ２mほどで断面V字形を呈する。その円弧のラインから、全体は長軸約69m、短軸約66mの楕円形と考えられる。みやこ平野の弥生時代の遺跡では行橋市長井遺跡と並ぶ最古段階のものである。

次に集落が作られるのは弥生時代終末期から古墳時代初頭で、19基の竪穴住居跡が確認され、この集落に伴って小児甕棺１基が発見された。この集落廃絶後の古墳時代前期に有力者一族の墓地が作られている。方墳１基、方形周溝墓５基、木蓋土坑墓２基で構成されており、方墳は１辺約20m、方形周溝墓は１辺約７～10mのもので、最も小さい５号方形周溝墓のみ主体部が残っていた。また、１辺17mの方形区画が発見されている。このほかにも、奈良時代の掘立柱建物群や、室町から戦国時代の溝で区画された屋敷地群が確認され、集落端部では鍛冶が行われている。

2　調査の概要

平成21（2009）年10月５日に重機を入れて表土剥ぎを行い、発掘調査に着手した。客土直下で基盤層が検出され、基盤層に老人ホームのコンクリート基礎が縦横に入っており、その周囲には浄化槽や攪乱穴が多く見られた。当初は遺構の残りが悪いかと思われたが、基礎の入っていない範囲では無数のピットや多くの溝が検出された。大きい溝は弥生時代前期の環濠とわかり、慎重な調査が求められた。また、ピット群は円形竪穴住居跡の柱穴だけ残ったものと中世の掘立柱建物跡群の柱穴が混在したものと判明し、遺構の認定に困難を極めた。さらに、方形区画溝が検出され、内部の遺構の検討に苦慮した。平成22年３月25日に21年度の調査を終了した。

平成22年度は４月８日から再開し、南側の調査区に着手した。重機を入れて表土剥ぎを行ったところ、東半分は遺構面が低く、他とは基盤層が異なっており湧水があった。その区画の調査が梅雨時期に重なったのでたびたび水没した。９月２日から北側の調査区に着手した。東側は厚い包含層があり、これを重機で掘削していたが、その後古墳の周溝が包含層を掘り込んでいることが判明した。古墳の周囲の方形周溝墓群は弥生時代の貯蔵穴群と重複しており、遺構密度が高い区画と

なった。10月19日には行橋市長・教育長の視察を受けた。

方形周溝墓群が東に広がる場合は、西側調査区と一緒に空撮するべきなので、北東区画に着手したが、墓地は続かず環濠の北側が検出された。環濠内部は大きく削平されており、ほとんど遺構が残っていなかった。年明けから、現道東側の２区の一部の調査に着手し、北側の区画については平成23年１月21日に記者発表、23日に現地説明会を実施し、130名ほどが来場した。１区の掘り下げ作業のめどがたったことから、３月７日から２区の表土剥ぎに着手した。３月11日は１区の図化作業が残ったので、実測を進めていたところ、防災無線が鳴り響き東北大震災が発生したことがわかった。３月25日に１区の埋め戻しを終え、22年度の調査を終了した。23年度は２区の調査を進めたところ、調査範囲の中央部に縄文時代の遺物を多く含む流路跡が検出された。堆積層に時期差がある可能性があったため、遺物を残しながら掘り進めたが、梅雨時期に重なり、多くの時間を取られた。７月５日に北側の水路に挟まれた狭い範囲を試掘してみたが削平を受けており、遺構はなかった。流路部分の調査を終え、反転して７月26日に用地の引渡しの終わった北側の区画に着手したところ、環濠の続きが検出された。これまでの環濠の中で最も深く、猛暑のもとでの過酷な作業となった。環濠の調査は多くの作業員では行えないので、併行して、８月29日に小型のバックフォーで水路を挟んだ北側の狭い区画の調査に着手したが、粗砂層の基盤層が露出しており湧水が著しく、流路の埋土からの遺物もほとんどなかったので、短期間で終了した。次に最も東の区画に着手したが、遺構密度が薄く、遺構も浅かった。この区画の調査中に、限定協議範囲で調査しない用地南端に用水路を設置する工事が生じたため調査して欲しいと依頼があり、併行して着手した。幅５ｍながら、中央部に走る現行の水路を残す必要があったため、水路からの湧水のため、南端部の調査は短期間で終了した。10月24日に図化作業を終了した。その後、次の調査予定地である福原寄原遺跡に移動して調査を行いつつ、バックホーによる埋め戻しを行い、11月14日に完了した。

足掛け３年をかけ、１区は4,600㎡、２区は5,590㎡を対象とし、実面積で計8,750㎡を調査して、パンケース180箱分の遺物が出土した。

３　縄文時代の遺構と遺物

縄文時代に属する遺構は落し穴23基、竪穴住居跡２基、土坑１基、甕棺１基、自然流路跡１条である。落し穴遺構は１区のみ、それ以外は２区のみからの検出で、縄文時代の包含層はどちらにも存在していない。

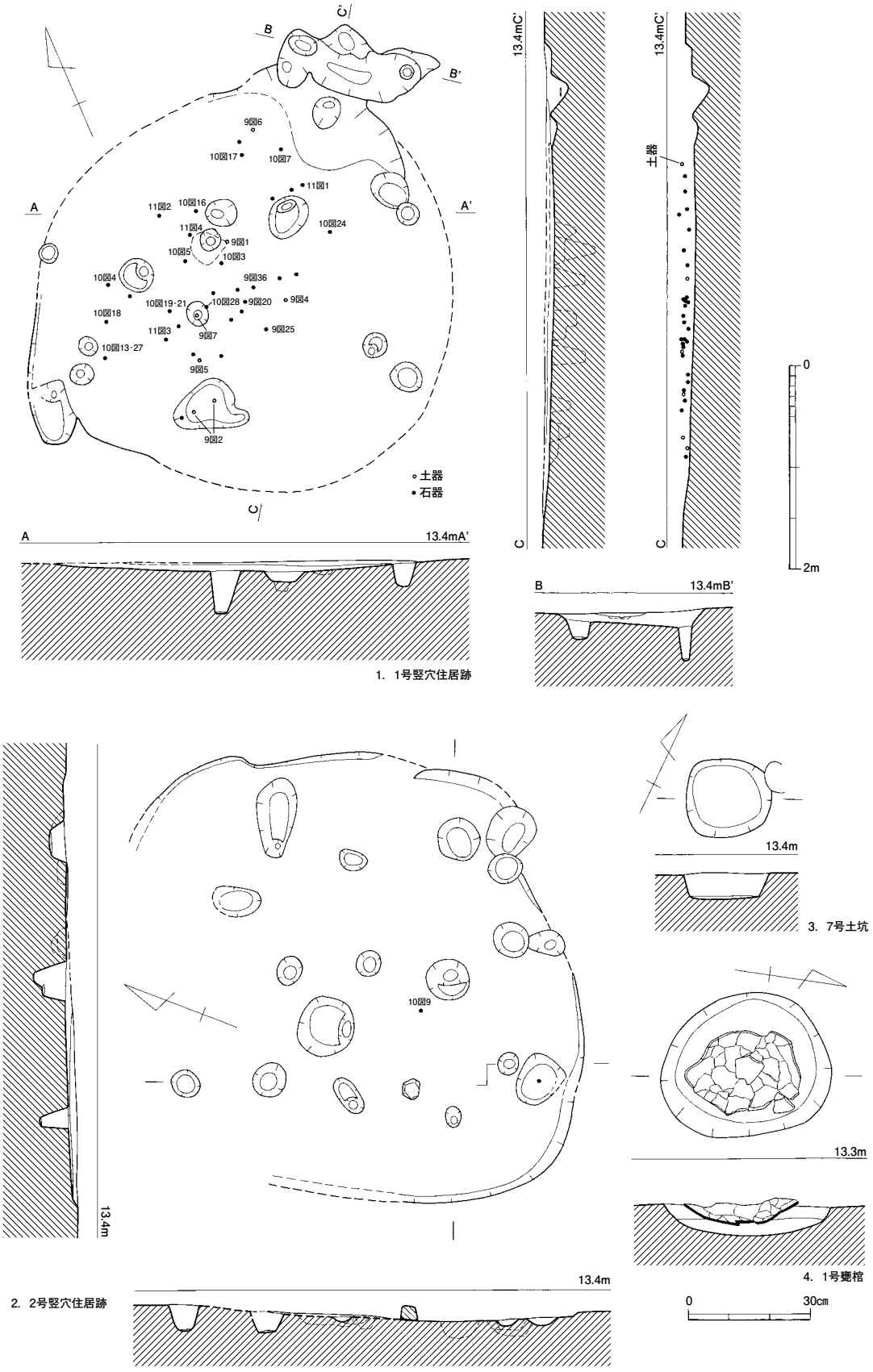
（１）竪穴住居跡

２区からのみ検出され、炉跡はなく、柱も巡らないが、縄文時代の遺物が密集して出土したことから竪穴住居跡とした。窪み地形に堆積した縄文包含層とするには、ほかに同様の集中部が見つからず、略楕円形プランをなしていることからみて、竪穴住居跡として報告する。

１号竪穴住居跡（図版５、第６図）

２区西部に位置する非常に浅く深い所でも15㎝程しか残っていない。掘り方の残っているところと、遺物の分布から楕円形プランを復元した。遺物のほとんどは床面直上である。石核が多く出土

しているが、谷からも同じように出土しており、利用の程度も同程度であることから集積していたものではないだろう。住居の時期は出土土器から三万田式期である。鐘崎式の底部があるものの、１点のみなので混入だろう。



第6図　縄文時代の竪穴住居跡・土坑・甕棺実測図（４は1/15、他は1/60）

出土遺物（図版49、第９～11図）

第９図１は口縁部と頸部片を図上接合したもので、口縁部の長さは不確実である。器面は摩滅しており、調整不明だが黒色磨研土器である。口縁内面は沈線ではなく、口縁部を内側に折り曲げた痕跡だろう。２は接合しないが同一個体の可能性が高い。小さく外反する口縁部で口唇部は平坦面をもつ。３は胴部が屈曲する深鉢片で、器面摩滅だが黒色磨研土器である。４は肩部で内面が抉れる。にぶい暗橙灰褐色なので粗製深鉢だろう。５は上げ底の底部で胴部が大きく開くので浅鉢だろう。６は鐘崎式の底部で器面が摩滅し調整不明。橙褐色を呈する。７は小型の精製土器の浅鉢で胴部が大きく屈曲し、口縁部がほぼ直立する黒色磨研土器である。

第10図２はアメリカ式打製石鏃で、裏面は主要剥離面らしく平坦である。３～８は掻器で、３は基部と先端を欠損している。縦長剥片を利用している。４は断面５角形、５は断面３角形の柱状の石材を利用している。意図的に柱状に加工したのではなく、石核を利用した可能性が高い。６は断面台形、７は断面平行四辺形の石核を利用したもので、６は２側縁を使用しており、７の基部は素面である。８は大型品なので石核を利用したものではないだろう。12･13は平面水滴形の小型掻器で、刃部の潰れは少ない。14は２次加工剥片で、断面方形にし、上下端は尖らせているが、刃部や刺突部は形成されていない。15は上端面が素面で、１側縁は面取りしているので、下縁を刃部とする７のような掻器を作ろうとしていたようだが、側縁の加工に失敗している。16･17･19～21･23～29は石核である。16は全面皮剥ぎしているが、不純物が節理を形成して深く入り込んでいるため加工をやめたものだろう。17は素面を上面として斜めに剥ぎ出したもので、剥離面を加工して断面平行四辺形を呈する。素材としては良好だが加工をやめている。19は断面台形の剥片の主要剥離面先端を加工して尖らせているが、刃部は形成されていない。20は丁寧な加工で水滴形の平坦面をつくり、そこを打面として側面を逆三角錐状に加工している。１側面は素面であり、水滴形の先端は尖っていない。この状態で何らかの道具のようでもあるが、刃部がなく使用痕跡は見られないので、未製品かもしれない。21は逆四角錐形だが、打面は転移しており、１面は古い剥離面である。23は小さい球状になったもので、意図的に丸くしたようにも見える。24は略直方体だが、１面は素面で、打面は転移を繰り返している。25は四角錐状だが、打面転移を繰り返している。26は板状に剥離された石材で、素面を上面とした剥片の側縁を加工している。27は素面を上面として斜めに剥ぎ出したもので、側縁を簡単に加工したものである。素材としては良好だが加工をやめている。28は皮剥ぎ段階のもので２面は素面を残し、１面は分割したような大きな剥離面を残す。

第11図１は下辺には片面から長い剥離による刃部を作っている。両側縁は欠損部に丸みを持たせていることから、打製石斧の欠損品を石庖丁状石器に転用したものと考えた。側面の窪みは紐掛のようなもので石庖丁状石器に必要な要素かもしれない。2･3は石鎌で、３は完形である。法量がほぼ同じで、製作技法にも共通点が見られる。４は磨石で、使用面に赤色顔料が付着しているので、顔料を粉砕するための石杵として使用したものである。赤色顔料は側面にも付着しているが、偏った付着状況から、斜めの面で作業したことがわかるので、身の深い石皿と組み合わせて使用したものだろう。

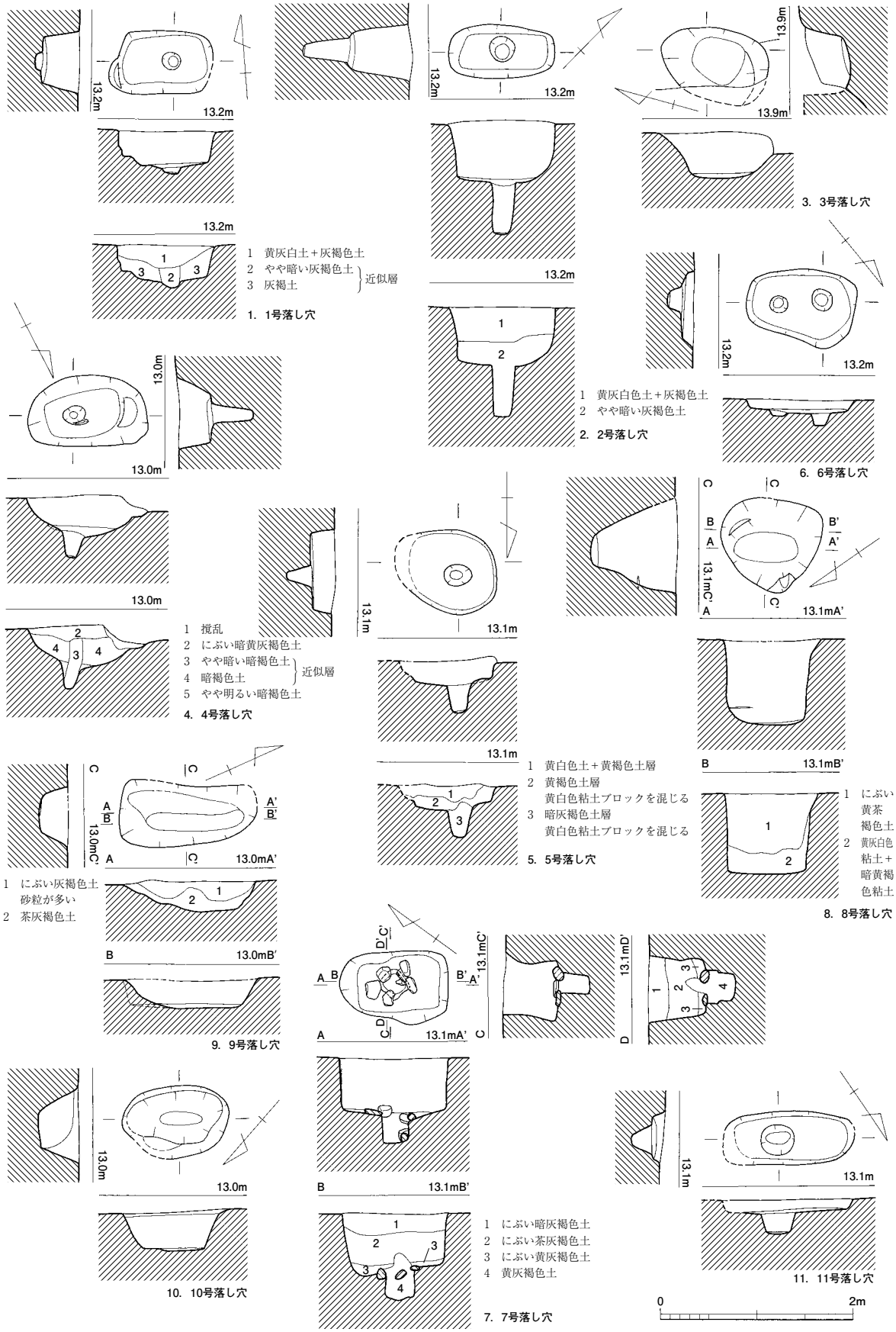
２号竪穴住居跡（図版５、第６図）

２区西部に位置する。非常に浅く深い所でも10㎝程しか残っていない。掘り方の残っているところと、遺物の分布から隅丸方形プランを復元した。遺物量は少なく床面直上であるが、台石と思わ

れる物が床面にあった。出土土器から三万田式期である。

出土遺物（図版49、第9･10図）

第９図８は大きく外反する口縁部で、口唇部に１条沈線が入ることから三万田式の深鉢だろう。



第7図　落し穴遺構実測図1（1/60）

９は底部で、８と胎土・色調が近いので同一個体かもしれない。

第10図9･10はサヌカイト製の石匙で、９は基部と両側縁が素面である。刃はゆるやかな弧状に走っており、平面形もやや湾曲している。10は刃部の小片なので他の器種の可能性もあるが、丁寧な両面加工と厚さから石匙と見られる。18･22は石核である。18は素面を上面として斜めに剥ぎだしたもので、剥離面を加工して先端を尖らせているが、不純物が多く入っているため加工を止めたのだろう。22は逆四角錐形だが、側面のうち２面は皮剥ぎ段階の面で１面は素面である。残りの剥離面も打面が転移している。

（２）落し穴遺構

１区から23基の落し穴遺構が検出された。北東部と南東部の地形の微高地に集中し、列状配置をなすものが多い。撹乱や後世の遺構によって失われているものもあるので、本来はもっと多くの落し穴遺構があり、列状配置も明瞭だっただろう。

１号落し穴遺構（図版２、第７図）

１区北東部に位置し、明確に検出された。長軸99㎝、短軸74㎝の方形プランで、中央にピットがあったが浅く、杭痕の可能性はあるものの土層では明確に確認できず、杭痕としては確実性に欠ける。２号落し穴と連続するものと見られる。埋土から石匙が出土した。

出土遺物（図版49、第10図11）

小型の石匙で、基部は欠損している。幅の狭い側縁には平坦面があり、人差し指のあたる位置を形成したものだろう。反対側の側縁は刃部加工されているので、錐としても使用している。

２号落し穴遺構（図版２、第７図）

１区北東部に位置し、明確に検出された。長軸110㎝、短軸55㎝の方形プランで、床面に中央ピットがあり、土層では２層と同一層で明確でなかったが55㎝の深さがあるので杭痕であろう。杭が抜き取られた可能性もある。１号落し穴と連続するものと見られる。

３号落し穴遺構（図版２、第７図）

１区北東部に位置し、明確に検出された。４号溝に南西部を切られ、削平のためわずかしか残っていない。本来は略方形プランと見られ、長軸118㎝、短軸は80㎝程に復元できる。埋土の特徴から落し穴と判断した。17･18･20 ～ 22号落し穴と列状配置をなすものだろう。

４号落し穴遺構（図版２、第７図）

１区中央部に位置し、明確に検出された。北西部を撹乱に切られ、削平のためわずかしか残っていない。略方形プランで、長軸125㎝、短軸は73㎝で、床面に中央ピットがある。隣接層と近似しているが土層でかろうじて杭痕らしいものが確認できた。

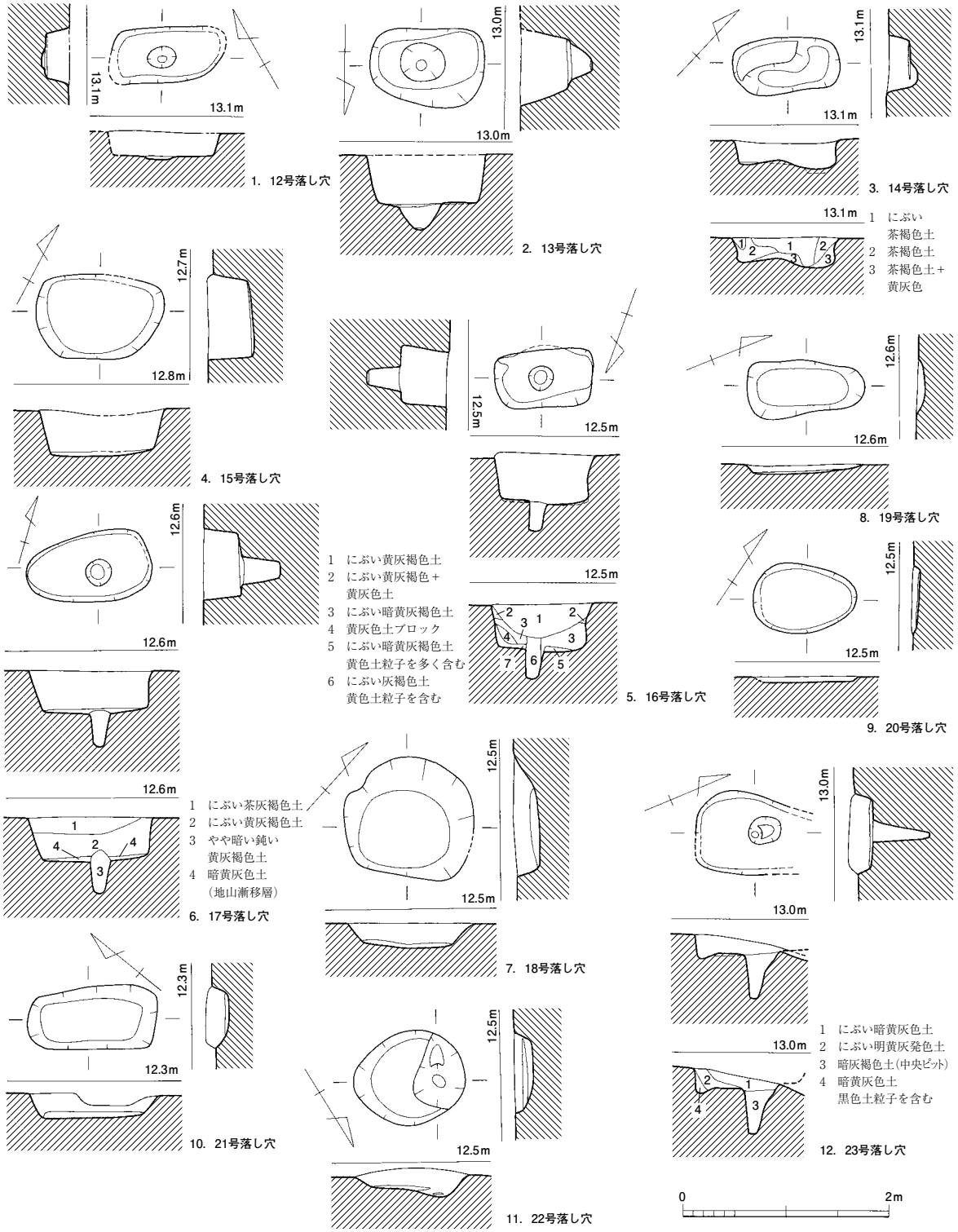
５号落し穴遺構（図版２、第７図）

１区南西部に位置し、明確に検出された。西辺をピットに切られ、削平のためわずかしか残ってい

ない。楕円形プランで長軸120cm程に復元でき、短軸は87cmを測る。床面に中央ピットがあり、やや浅いものの杭痕であろう。7･9･10･11号落し穴と列状配置をなす。

６号落し穴遺構（図版２、第７図）

１区南西部に位置し、明確に検出された。削平のためわずかしか残っていない。隅丸方形プランで長軸113cm、短軸は80cmで、床面に中央ピットが２つあるが、浅いので確実性に欠ける。列状配置内になく、埋土は特徴的でなかったが、隅丸方形プランと規模から落し穴とした。12･14号落と



第8図　落し穴遺構実測図2（1/60）

し穴と列状配置をなした可能性がある。

７号落し穴遺構（図版２、第７図）

１区南西部に位置し、明確に検出された。削平のためわずかしか残っていない。方形プランで長軸111cm、短軸は94cmで、床面に中央ピットがあり、根締め石がピットの縁と内部に確認された。柱痕としては明確に確認できなかったが、根締め石から杭痕で間違いない。5･9･10･11号落し穴と列状配置をなす。

８号落し穴遺構（第７図）

１区南西部に位置し、明確に検出された。楕円形プランだが、壁上方が広がっているので形壁が崩落でしたものと見られ、本来は略方形プランだっただろう。長軸105cm、短軸は95cmで、埋土の特徴から落し穴とした。

９号落し穴遺構（図版３、第７図）

１区南西部に位置し、明確に検出された。長方形プランで、壁が直立しないが埋土の特徴から落し穴とした。長軸146cm、短軸は70cmで、5･7･10･11号落し穴と列状配置をなす。

10号落し穴遺構（図版３、第７図）

１区南西部に位置し、明確に検出された。隅円方形プランで、北側を１号墓に切られる。床面が狭いが埋土の特徴から落し穴とした。長軸110cm、短軸は86cmで、5･7･9･11号落し穴と列状配置をなす。

11号落し穴遺構（図版３、第７図）

１区南西部に位置し、明確に検出された。隅円方形プランで、南部をピットに切られる。床面に中央ピットがあるが、径が広いことから抜き取られたものと考えられる。長軸は135cm程度だろう、短軸は56cmで、５・７・９･10号落し穴と列状配置をなす。

12号落し穴遺構（図版３、第８図）

１区南西部に位置し、明確に検出された。隅円方形プランで、削平のためわずかしか残っていない。略方形プランで長軸111cm、短軸は54cmで、床面に中央ピットがあるが、浅いため不確実である。埋土の特徴から落し穴とした。６･14号落し穴と列状配置をなした可能性がある。

13号落し穴遺構（図版３、第８図）

１区南西部に位置し、明確に検出された。46号土坑に切られ、削平のためわずかしか残っていない。略方形プランで長軸111cm、短軸は78cmで、床面に中央ピットがある。柱径が広いことから抜き取られている可能性が高い。埋土は下位まで暗茶褐色土で、底面から10cm程の厚さで茶褐色土が堆積していた。

14号落し穴遺構（図版３、第８図）

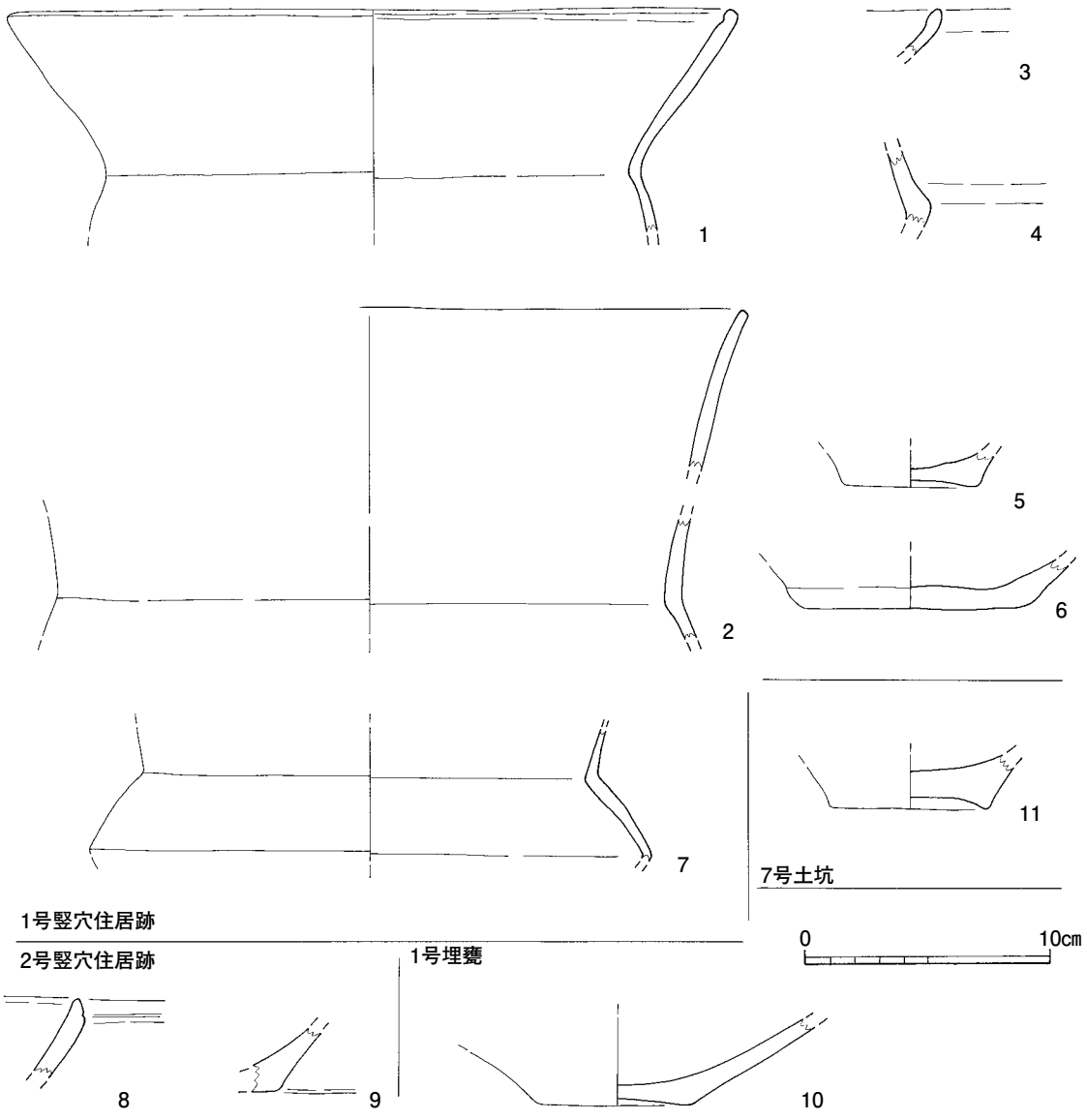
１区南西部に位置し、明確に検出された。46号土坑に切られ、削平のためわずかしか残っていない。略方形プランで長軸105cm、短軸は55cmで、底面にやや凹凸があった。６･12号落し穴と列状配置をなした可能性がある。

15号落し穴遺構（図版３、第８図）

１区中央部に位置し、明確に検出された。略方形プランで長軸95cm、短軸は58cmで、埋土の特徴から落し穴とした。間が空いているが、5･7･9･10･11号落し穴との間が14号溝で失なわれており、列状配置をなした可能性がある。

16号落し穴遺構（図版４、第８図）

１区南西部の調査区北端に位置し、4b号溝の床面から明確に検出された。略方形プランで長軸103cm、短軸は82cmで、床面に中央ピットがあり、土層に杭跡が検出できた。19･21号落し穴と列

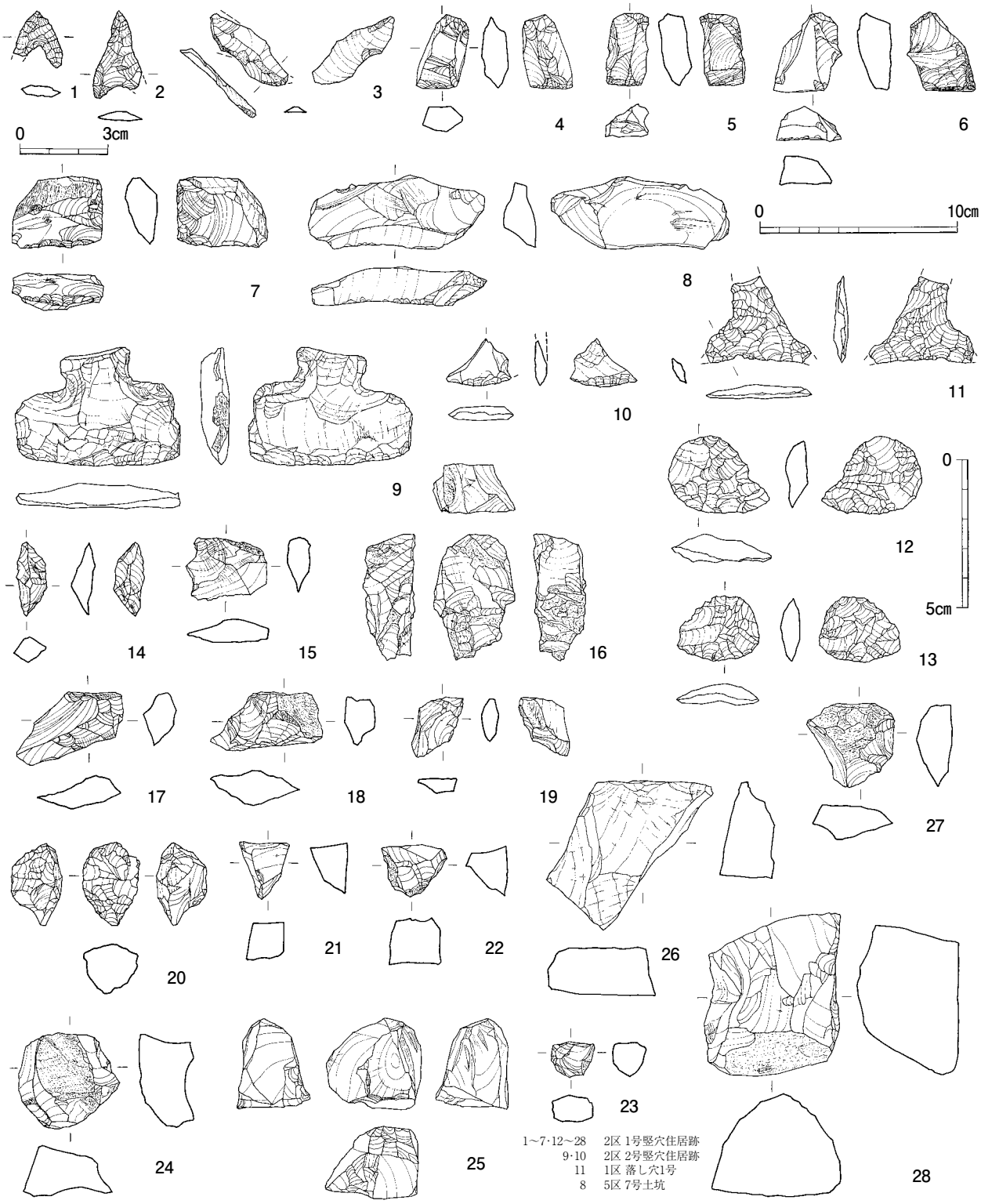


第9図　縄文時代竪穴住居跡・土坑出土土器・埋甕出土土器実測図（1/3）

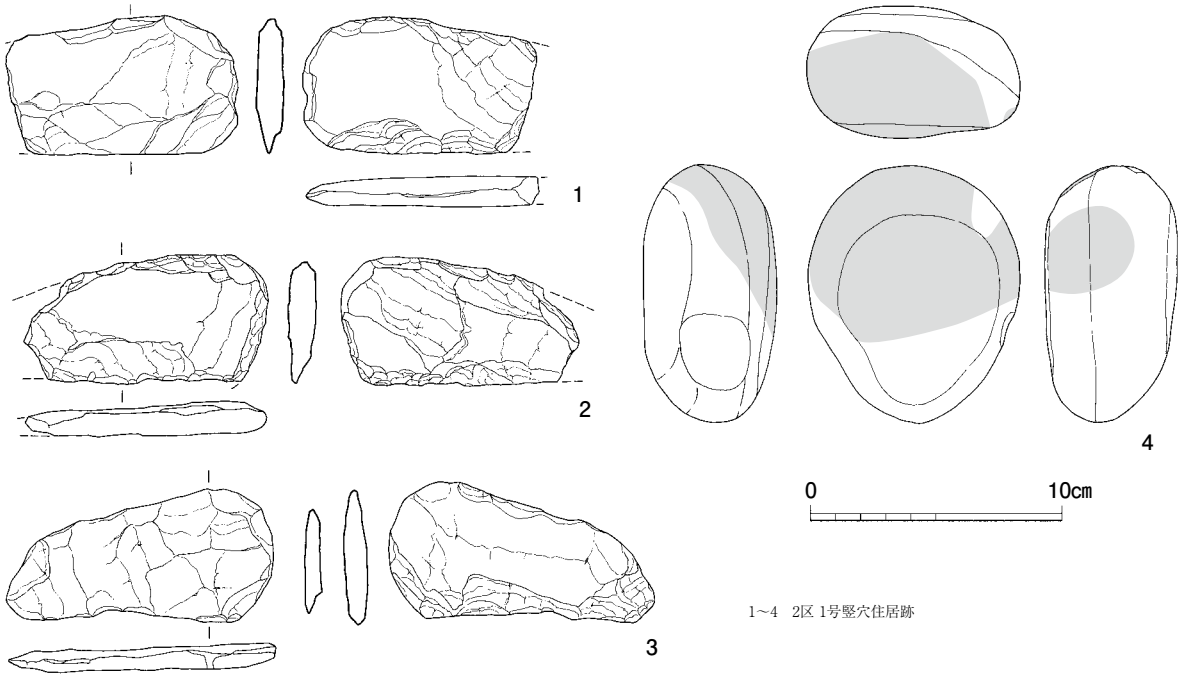
状配置をなした可能性がある。

17号落し穴遺構（図版４、第８図）

１区中央部北側に位置し、明確に検出された。22号掘立柱建物跡の北西隅の柱穴に切られる。略方形プランで長軸95㎝、短軸は58㎝で、埋土の特徴から落し穴とした。間が空いているが、18･20･22号落し穴と列状配置をなす。



第10図　縄文時代の竪穴住居跡・土坑・落し穴出土石器実測図（1･2･11 ～ 13は1/2、他は1/3）



第11図　縄文時代の竪穴住居跡出土石器実測図（1/3）

18号落し穴遺構（図版４、第８図）

１区中央部北側に位置し、明確に検出された。削平のためわずかしか残っていない。略方形プランで長軸116cm、短軸は103cmだが、壁の立ち上がりが緩やかなので、壁が崩落しているだけで本来の短軸はまだ狭かっただろう。埋土の特徴から落し穴とした。17･20･22号落し穴と列状配置をなす。

19号落し穴遺構（図版４、第８図）

１区中央部に位置し、埋土が基盤層に近くかろうじて検出できた。削平のためわずかしか残っていない。略方形プランで長軸115cm、短軸は56cmで、埋土の特徴から落し穴とした。16･21号落し穴と列状配置をなした可能性がある。

20号落し穴遺構（第８図）

１区中央部北側に位置し、埋土が基盤層に近くかろうじて検出できた。削平のためわずかしか残っていない。楕円形プランで長軸100cm、短軸は70cmで、長軸が短いが埋土の特徴から落し穴とした。17･18･22号落し穴と列状配置をなす。

21号落し穴遺構（図版４、第８図）

１区中央部北側に位置し、埋土が基盤層に近くかろうじて検出できた。削平のためわずかしか残っていない。方形プランで長軸125cm、短軸は62cmで、埋土の特徴から落し穴とした。16･19号落し穴と列状配置をなした可能性がある。

22号落し穴遺構（図版４、第８図）

１区中央部北側に位置し、埋土が基盤層に近くかろうじて検出できた。削平のためわずかしか残っていない。楕円形プランで長軸108cm、短軸は93cmで、床面が平坦でないことから、落し穴の

形態とはやや異なっているが、埋土の特徴から落し穴とした。17·18·20号落し穴と列状配置をなす。

23号落し穴遺構（図版４、第８図）

１区中央部北側で１区調査区北東端に位置し、１号溝に切られる。明瞭に検出できたが、削平のためわずかしか残っていない。略方形プランで長軸97cm以上、短軸は80cmで、床面に中央ピットがあり、土層では杭痕は確認できなかった。

（３）土坑

２区から１基だけ検出された。廃棄土坑がないのは後述する自然流路を廃棄場所に利用していたためだろう。

７号土坑（第10図）

２区西部の竪穴住居跡の西に位置する小形の円形プランで、焼けた礫が５つほどと人頭大の焼けていない花崗岩礫入っていた。姫島産黒曜石が集中的に出土した。

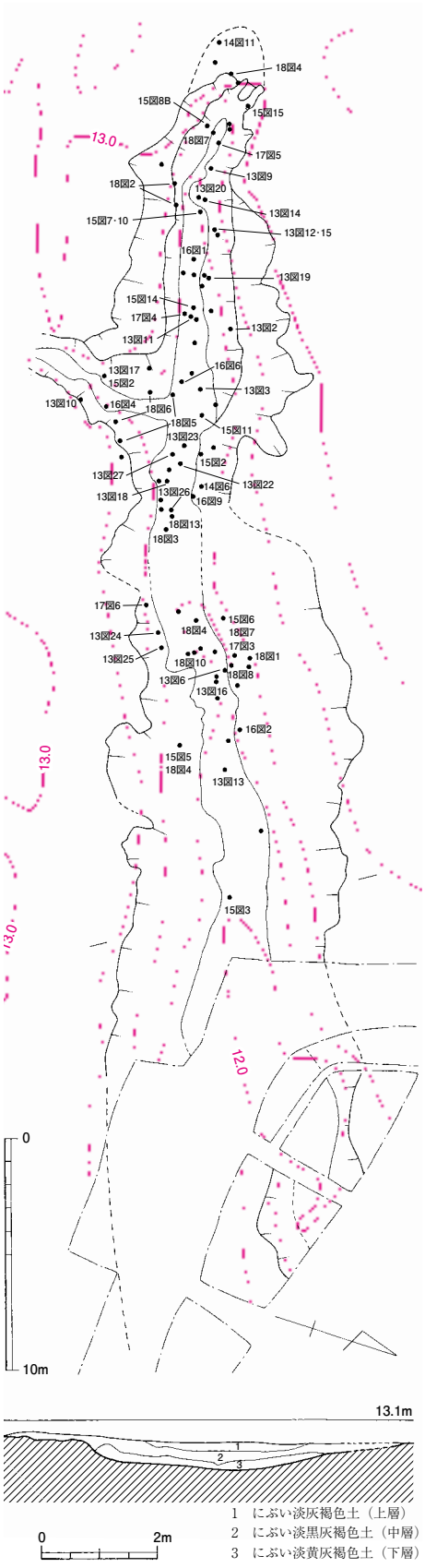
出土遺物（図版49、第10図）

１は打製長脚鏃で、自然流路跡出土の黒曜石と風化に差がないので、縄文後期のものだろう。

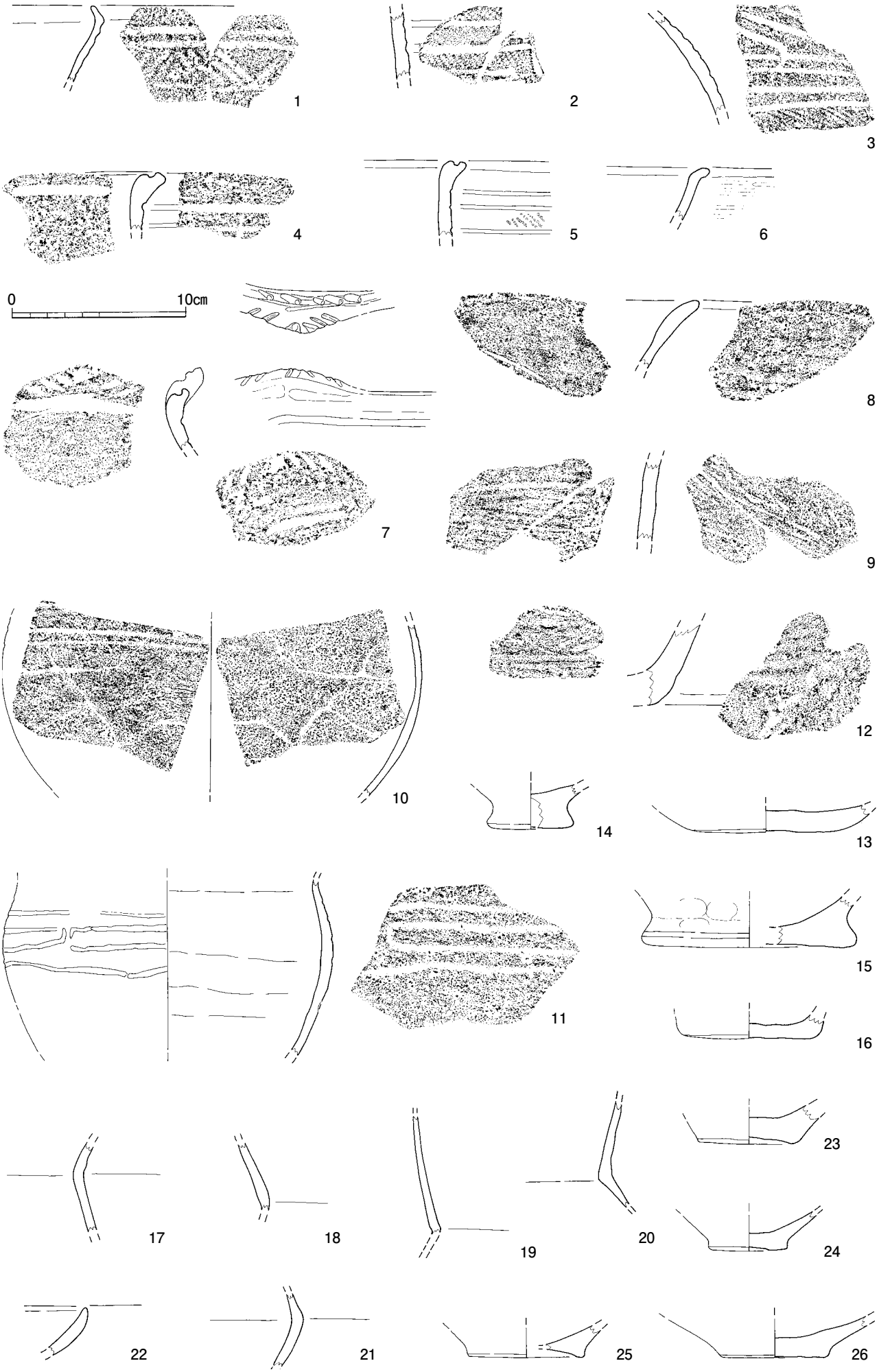
（４）自然流路跡（図版５、第12図）

２区中央部を東西に走る流路跡で、谷状に窪むことから当初は谷と認識していたが、掘り下げると溝状になったことから流路とした。2·8号溝に切られており、中世には完全に埋没していたことがわかる。13号土坑は床面から検出され、流路より古いものだが、不整形で凹凸の多い浅い床面だったので風倒木痕と考えられる。西側は幅が狭まりながら緩やかに立ち上がっているが、縄文時代の竪穴住居跡が近接するのでそれ以上に西には伸びないだろう。東端部は次第に広がり、北東拡張区でも確認できたので、東の調査区外に延びている。南辺の膨らんでいる部分も浅く緩やかな立ち上がりだったので流路であり、南からも水流があったことを指している。流路の縁部は水流の痕跡のため凸凹が著しい。

出土遺物は、縄文時代の土器・石器を中心に、一部に弥生土器が見られた。２区中央部に多く出土しており、東部にいくほど深くなるものの集落から離れるためか遺物が少なかった。部位のわかるものや文様の見られた土器片と石



第12図　2区自然流路跡実測図
（1/300・1/120）



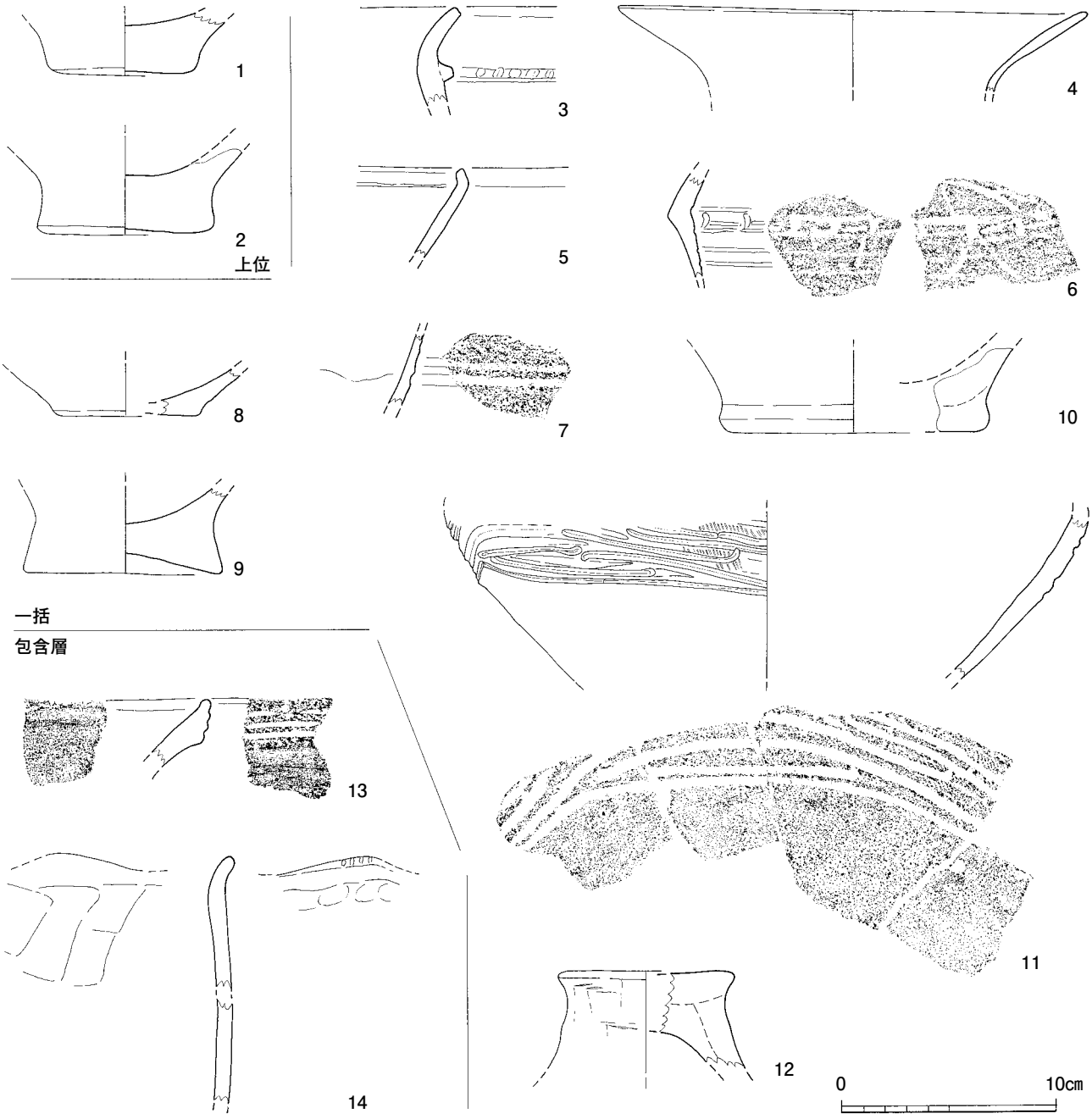
第13図　2区自然流路跡中位出土土器実測図（1/3）

器は位置を記録して上中下位に分けて取り上げたが、谷の縁部は浅いため区分ができなかったので一括で取り上げている。土層断面では１層が下位、２層が中位、３層が上位にあたる。出土土器は大きく三万田式と鐘崎式に分かれ、中位・下位が鐘崎式、上位は三万田式にあたるものと見られるが、水流による撹乱か取り上げ時の誤認により土器型式と取り上げ層順が完全には一致していない。弥生前期の土器は調査区中央部では上位に混入しているが、東端では中位からも出土している。

出土遺物では、石器全体の量に比べて土器の出土量が少ない。石器の中でもガラス質石材の石器の出土数が少なく、石核の割合が大きい。このことは、小型の石器や土器が下流に流されて、重量のある石器が残ったと見るべきであり、この石器組成は生業依存度を反映するものではない。

出土遺物（図版49･50、第13 ～ 18図）

第13図１は中位出土の土器で、１は中津式の口縁部がくの字に屈曲し、外反する鉢で、器面がほとんど摩滅しており凹線のみが残る。横位の凹線の間に４条単位の鋸歯文が入る。凹線は点を連続



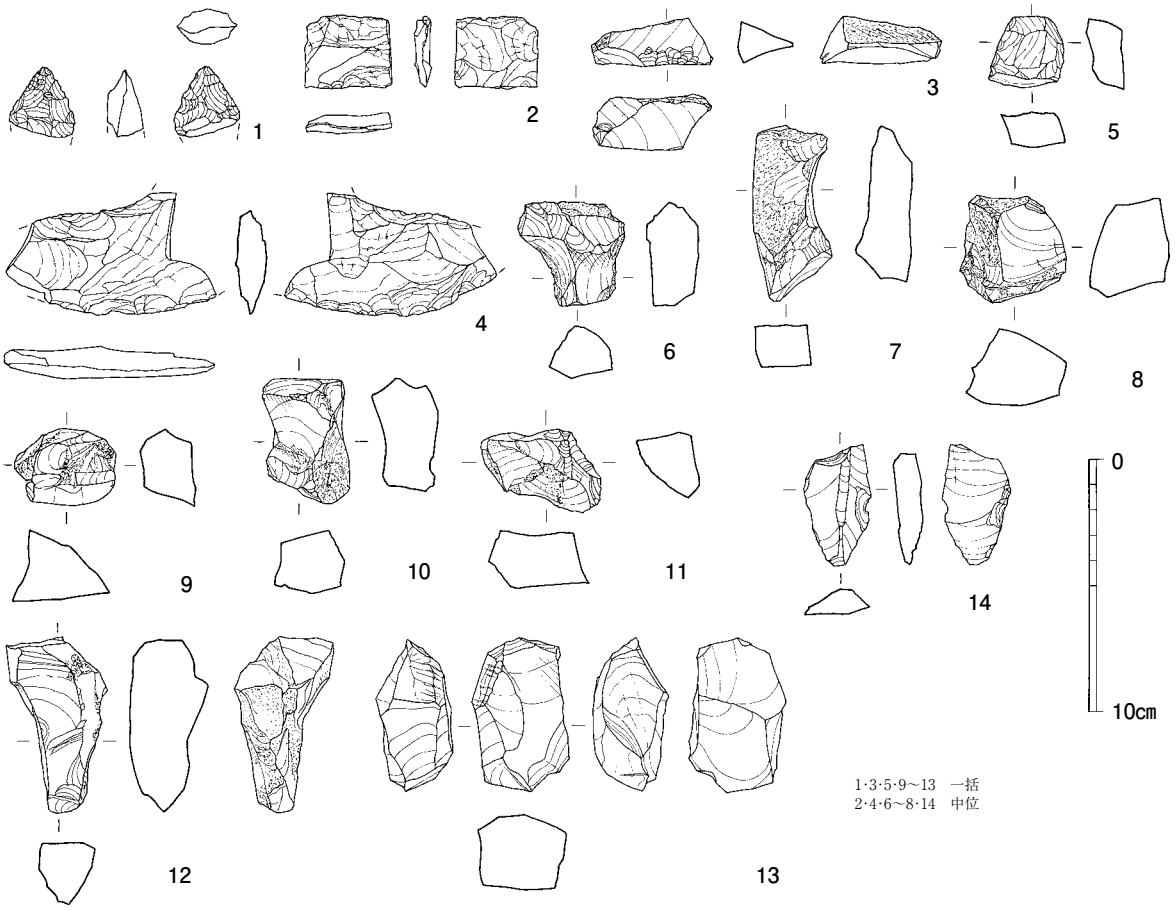
第14図　2区自然流路跡・包含層出土土器実測図（1/3）

させたような短い単位で引いている。内面に一部残る器面から本来は黄茶灰色であったことがわかる。混入物は少ない。２は小池原上層式の深鉢の肩部で磨り消し縄文。縄文はLR。橙褐色で白色粒子を多く含む。３は肩部に凹線で簡略化した入組文が入ることから、鐘崎Ⅱ式である。凹線間に擬縄文が入る。4･5は口唇部に凹線が入り、口縁下に数条の凹線が入り、凹線間に縄文が入る磨消縄文土器で鐘崎Ⅱ式である。４は上側の凹線間には縄文は見られず、下側は残りが悪いため有無がはっきりしない。５は口縁下には横位の凹線が３条入り、上側の凹線間にはなかったが、下側の凹線間にはＲＬ縄文が入る。６は体部が開く小型の浅鉢だろう。小片のため傾きはやや不確実である。器面はナデで、にぶい暗茶褐色を呈する。７は口唇部に凹線が入り、波状口縁の波頂部に刺突文が複数入る。この施文パターンは山崎遺跡５号竪穴住居跡４層出土に類例があり、鐘崎Ⅱ式にあたるが縄文は見られない。口唇部が山形に肥厚する部分は、口唇部縁に凹線が入り、凹線上に斜め上からの棒状工具の刺突文が入る。８は外反する口縁部で、内面は貝殻条痕の一部が残っているのみで平滑なナデ、外面は凹凸の残るナデ。砂粒・金雲母の混入多く、にぶい橙褐色を呈する。９は肩部片で、傾きから胴部が膨らまず、大きく外反しない深鉢である。内外アナダラ属貝殻条痕文で、外面はナデ仕上げている。白色粒子の混入多い。外面はにぶい暗茶灰褐色で、内面は暗灰褐色を呈する。10は胴部が張る小型の鉢で、内外器面が剥落しているため器壁が薄くなっている。外面の凹線文も器面剥落のため細くなっている。横位の２条の上に斜めに２条がわずかに見える。施文部にはRL縄文の痕跡も見える。施文部が縦に圧縮していないことと縄文が入ることから鐘崎Ⅱ式だろう。外面は上半が暗灰茶褐色、下半は黄橙色で、内面は上半が暗灰茶褐色、下半が黒褐色であることから、外面下半は火を受けて煤が失われたものと考えられる。11は接合しないが同一個体での小型の鉢で、胴下位はアナダラ属貝殻条痕が入って器面を削るため器壁が薄くなる。内面は貝殻条痕が横位に施され、器面が窪んでいる。ナデ仕上げしているため拓本には残らない。外面と胴中位以上は内外にぶい茶灰褐色、内面の下位は暗黒褐色を呈する。砂粒・白雲母・カクセン・石白色粒子の混入多い。文様から鐘崎Ⅲ式である。12は底部が径10㎝程で小さいものの器壁が厚いことから深鉢だろう。底の縁は丸みを持つ。内面はアナダラ属貝殻条痕が入り、外面はナデ。白色粒子の混入多い。外底の圧痕は観察できなかった。13は鉢の底部で、器面摩滅で調整不明。内外暗灰褐色。14は高台状の底部で、底部から水平に器壁の薄い鉢部が広がることから小型の台付鉢であろう。器面調整はナデのみ。15は底部の裾が外に張り出す。器面摩滅で調整は観察できない。黄橙色を呈する。16は平底の底部で、小型の杯のような器種の底部だろう。17 ～ 27は中段で取り上げているが上位の混入だろう。17は器面剥落で調整不明。外面暗橙褐色なので黒色磨研土器であろう。内面暗黄灰色を呈する。18 ～ 20は深鉢の胴部で、くの字に屈曲する。器面が剥落して調整を観察できないが、19は外面黒灰色を呈する。20は歪みがある部分と見られ小片のため傾き不確実。外面屈曲部上に積み上げ痕が残る。外面はナデ、内面はケズリ状の痕跡が残る。21は胴部が屈曲し、胴下位が張る器形の鉢で、器面摩滅で調整は不明瞭である。22は口縁部が小さく内傾する深鉢、23は器壁が厚く、底に張り出さないことから体部が開く鉢の底部である。外面は器面剥落するが内面は残っており、内外黒変がないので煮沸使用されていない。24は小型の浅鉢の底部だろうか、底部で上げ底状を呈する。器面摩滅のため調整不明。外底部の中央が窪み、縁が高台状になる。25は鉢の底部で高台状に中央部が窪む上げ底だが、内底は器面が剥落して器壁が薄くなっている。外面は暗褐色であることから黒色磨研土器だろう。混入物多い。26は浅鉢の底部で橙褐色を呈することから

鐘崎式の範疇に収まる可能性が高い。

第14図1･2は谷上段出土の弥生時代前期の土器で、器面摩滅のため調整不明。３～11は谷一括出土である。３は弥生土器の甕の口縁部で、頸部に高い刻目突帯がつく。４は口唇部が摩滅した小片を反転復元したため径は不正確だが、大きく外反する口縁部であることはまちがいない。器面が摩滅しているが、内外表面が褐色がかっており、貝殻条痕が残っていないことから黒色磨研土器であろう。三万田式土器か。５は口縁部がくの字に屈曲する三万田式土器である。中津市佐知遺跡（註１）40号遺構出土品に近い深鉢口縁部で、口縁部はナデのみ。内面も丁寧なナデでミガキはない。内外明黄橙色で変色なし。６は三万田式の佐知遺跡40号遺構に近い。太い凹線の間に半裁竹管刺突文が入り、刺突文間にも凹線が入る。太い凹線の下には沈線が２条入る。器面が摩滅しているため調整不明。内外黄灰色でカクセン石が多く入る。７は２条の横位の凹線しか残らない小片で、内面は器面が剥落している。茶褐色で混入物多い。８は浅鉢の底部で、器面剥落のため調整不明。９･10は弥生土器の甕の底部である。11は鐘崎Ⅱ式の胴部片で、当初３号住居とした谷の上位から出土したものである。外面は凹線による入組文が上下に圧縮した段階のもので、凹線の間には擬縄文が入る。擬縄文が凹線文を施す際に引きずられた痕跡がなく、擬縄文の入る部分は窪んでいたことから、摩滅しているがすべての凹線の間に施されていたと判断できる。内面は丁寧にナデているため貝殻条痕は残っていない。胎土は比較的精良でやや軟質。内外器面は灰茶褐色で、火を受けて黒変した痕跡がある。このモチーフは佐知遺跡に類例がある。12は北拡張部のトレンチから出土した弥生時代前期の蓋で、東端の中位から出土したものだが、層位的には上層にあたる。

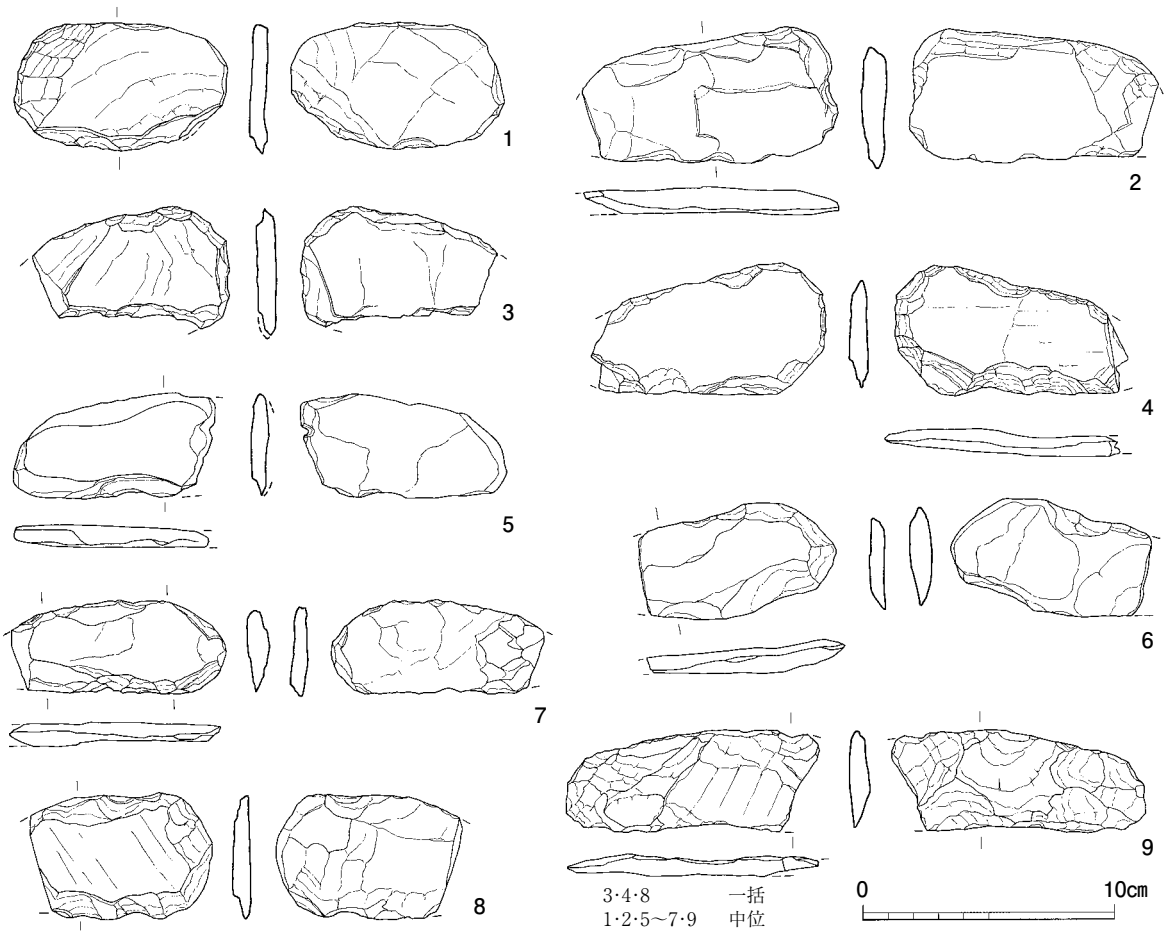
第15図１は鏃状の稜が入り、厚みがあることから、刺突具の先端と見られる。石槍の先端だろう



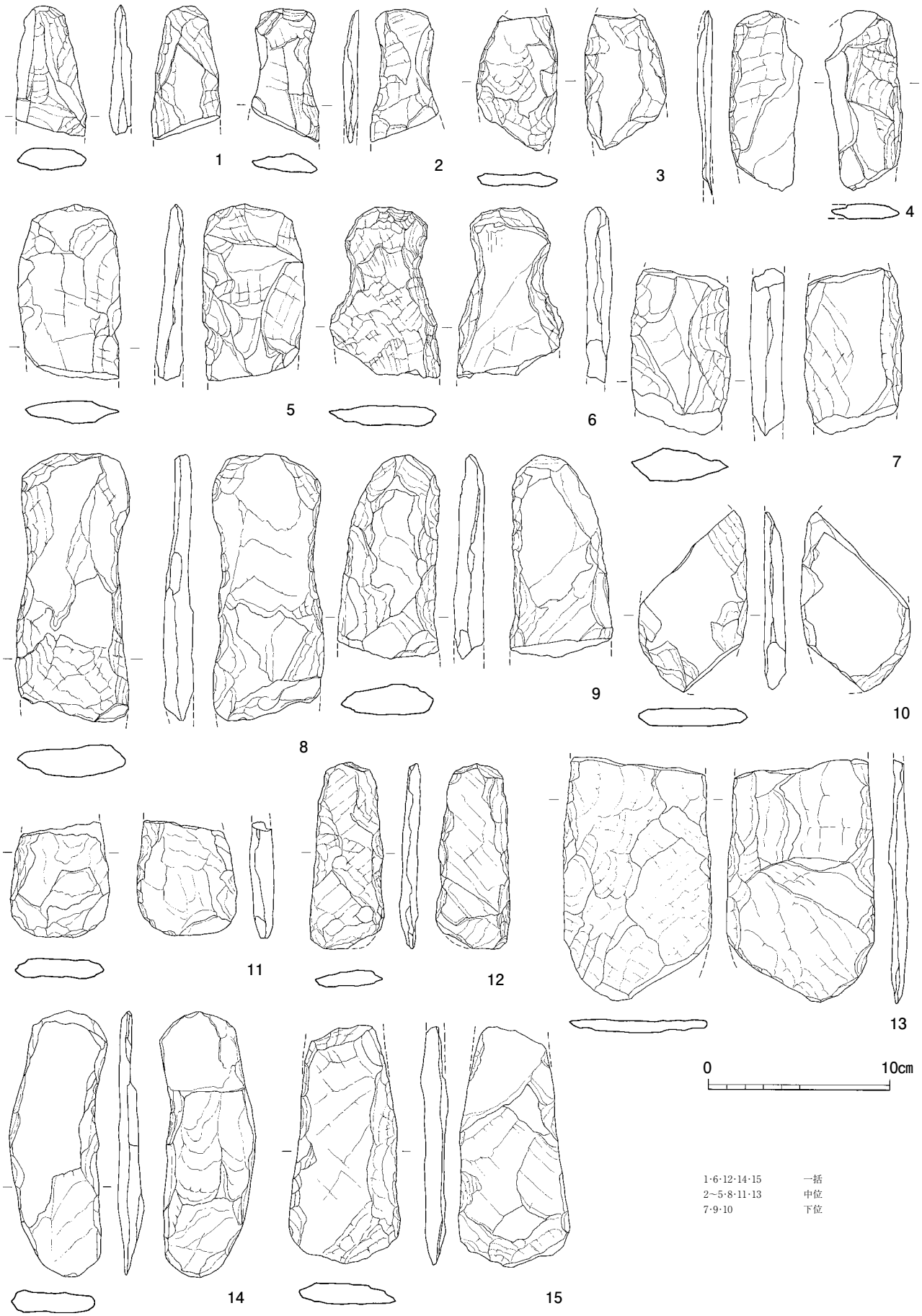
第15図　2区自然流路跡出土石器実測図1（1/3）

か。２は上端面が素面で、両側縁は折切、下面のみを刃部としており、扁平な板状を成している。サイドスクレーパーの可能性もあるが、楔形石器としておく。３は方柱状の石材の１面を大きく剥離し、その湾曲を刃部にした掻器で、１面の素面を残す。４は石匙で、両側縁は古い欠損である。つまみ部が偏るタイプだろう。５は扁平な方柱状で、素面と細かい皮剥ぎ段階の面があり、大きく剥離しているのは２面のみである。６は素面を打面として斜めに剥ぎ出した石材の打面を転移して加工している。下端面は折切の可能性が高く、このため加工を止めたのかもしれない。７は方柱状で、１面は素面だが打面は転移している。中央に不純物の節理が入っているので加工を止めた可能性が高い。８は直方体を呈し、３面は素面で、打面転移している。中央に不純物の節理が入っているので加工を止めた可能性が高い。９は四角錐状を呈し、１面は素面だが凹凸が大きく、打面は転移している。10は方柱状の２面を素面とし、異なる素面を打面とするとともに、剥離面も打面としている。11は三角柱状で、素面はなく、打面転移が著しい。12は船底形で、素面を打面として剥離した湾曲の縁を、刃部を形成しないまま掻器として使用している。不純物が多いために加工を止めたものを転用している。13は皮剥ぎ段階のものであろう。14は縦長剥片の稜を取ったもので、側縁の加工の途中で作業が止まっている。

第16図１は上端面に平坦面があり、下端は両側から尖らせているが、片側の剥離が大きい。打製石斧にしては刃部加工がないので、石庖丁状石器とした。２も１と同様の理由と、右側縁が欠損しておらず、基部と刃部の境界がないことからから、石鎌でなく石庖丁状石器とした。3･5･8は石鎌である。３は上端には平坦面がなく、打製石斧の基部の可能性もあるが、下辺は新しい欠損の



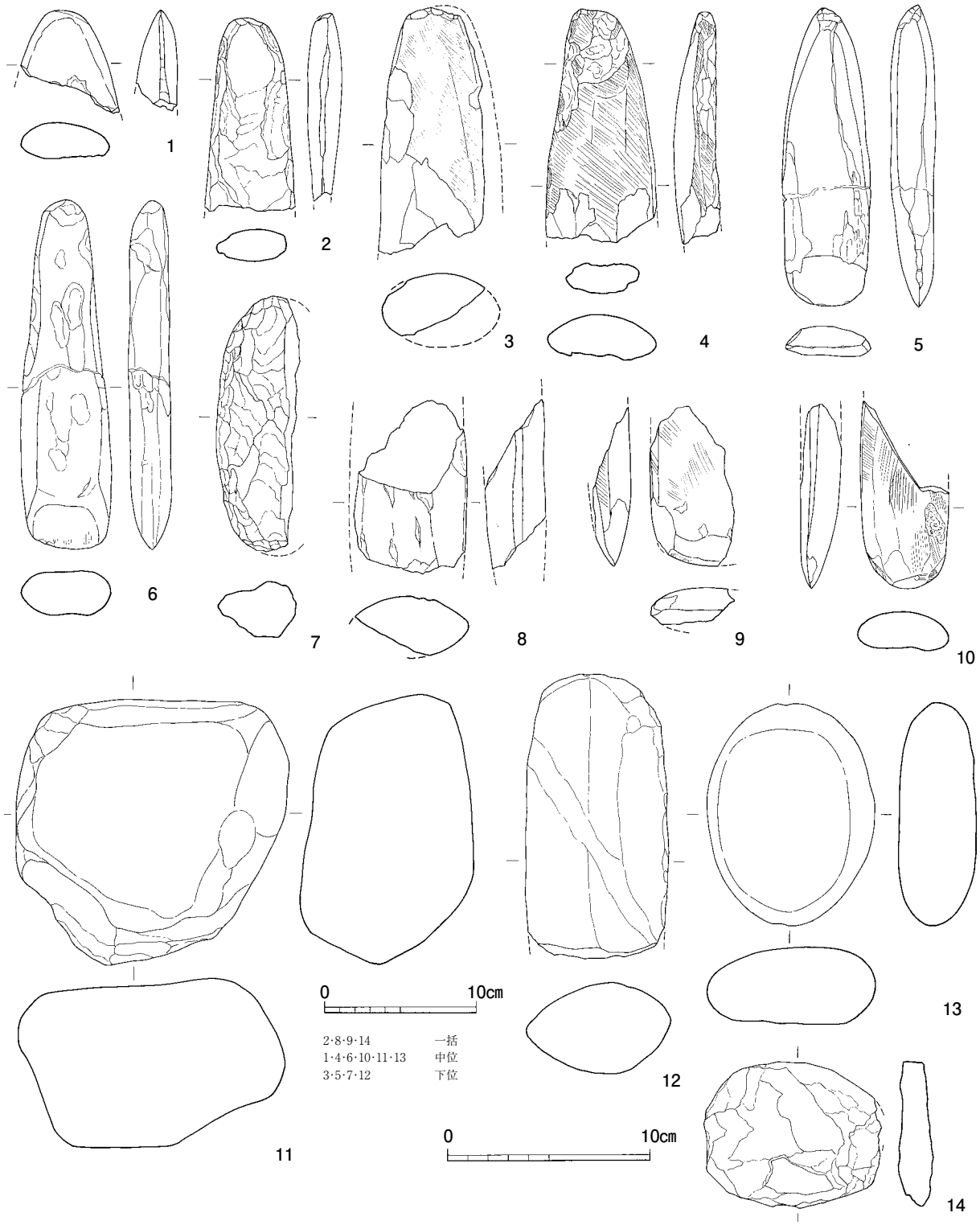
第16図　2区自然流路跡出土石器実測図2（1/3）



第17図　2区自然流路跡出土石器実測図3（1/3）

入っている部分に本来大きな剥離が入っており、片刃を作り出していたことがわかるので、鎌とした。５は上端には剥離がなく、片面の下辺のみに大きな剥離で片刃がつけられている。4･6･7は片面の下辺のみに大きな剥離で片刃がつけられているので石鎌とした。６は基部の剥離が大きい。風化が著しい。７は全体的に剥離して薄くなっている可能性がある。８は他の鎌とは反対側の面に刃がついている。

第17図は打製石斧である。１の左側縁は大きな剥離面をそのまま残している。２は緊縛部の抉り



第18図　2区自然流路跡出土石器実測図4（11は1/4、他は1/3）

が入る小型品で、摩滅している。３は両側縁が同じように加工されているので小型打製石斧とした。４は片側縁に片面から長い剥離があるので石鎌のようだが、反対側縁も両面加工で尖らせているので石斧とした。５は刃部にするには刃を形成する剥離がないので、基部とした。両側縁とも両面から加工されているので石庖丁状石器ではない。６は緊縛部が中心軸から偏っているが、刃が作られていないので石鎌の基部ではない。７は表裏とも右下への大きな剥離が顕著に見られる。８は緊縛部が窪む部分の側縁は微細剥離のみで整形している。９は基部が中心軸から偏っているが、側縁に刃がないので鎌ではない。10は側縁の剥離は片側だけにしかないようだが、残存度の差であろう。刃部は形成されているので、石庖丁状石器ではない。11は刃部の一部に平滑面がある。片面のみなので、研磨したものではないかもしれない。12は法量では石鎌のようだが、両側縁に均等に加工があり、刃部もあるので小型の打製石斧である。13は扁平な大型品で、刃部は欠損している。側縁は小さい剥離で整形している。14は大きく湾曲しており、石鎌のような形状だが、側縁には刃部がない。刃部は片側からの剥離で形成されている。15は撥形に開くもので、裏面は石材の平坦さから側縁加工は最小限に留めている。

第18図１～10は磨製石斧である。１の欠損面は摩滅していないが、新しい欠損ではない。２は緑色結晶片岩の磨製石斧で、表面の風化が著しい。3･4の欠損部は新しいので、使用による欠損状態ではない。４は９と同一個体の可能性がある。５は谷下位出土の２個体が接合して完形品になったものである。６は谷中位出土の２個体が接合して完形品になったものである。７は素面が一部に残っており、打製石斧に特徴的な剥離がない。石材は磨製石斧に使われるもので、表面が剥落したにしては、全く研磨面が残っていないので磨製石斧未成品と考えられる。側面が大きく欠損したので廃棄したのだろう。８は研磨しているが、研磨痕が見えない石材である。欠損面は古い。９の剥離面は古く、使用時の欠損であろう。６と同一個体の可能性がある。10は結晶片岩ながら、表面を丁寧に研磨している。11は石錘であろう。金雲母を多く含む石材で、ほかに例がない。上下端面平坦である。12は表面が黄橙色に変色しており、風化が著しい。使用痕は残っていないが、凝灰岩であり、持ち込まれた石材なので叩石とした。13は表面が風化しており平滑面が残っていないが、持ち込まれた石材なので、磨石と見られる。14は平坦面をもつ自然礫で、持ち込まれた石材であることから台石とした。表面の風化が著しい。

（５）甕棺（図版４、第６図）

調査区中央南部に位置し、鉢の胴部が横倒しになった状態で検出された。掘り方は浅く、下位に別の土器はなかった。

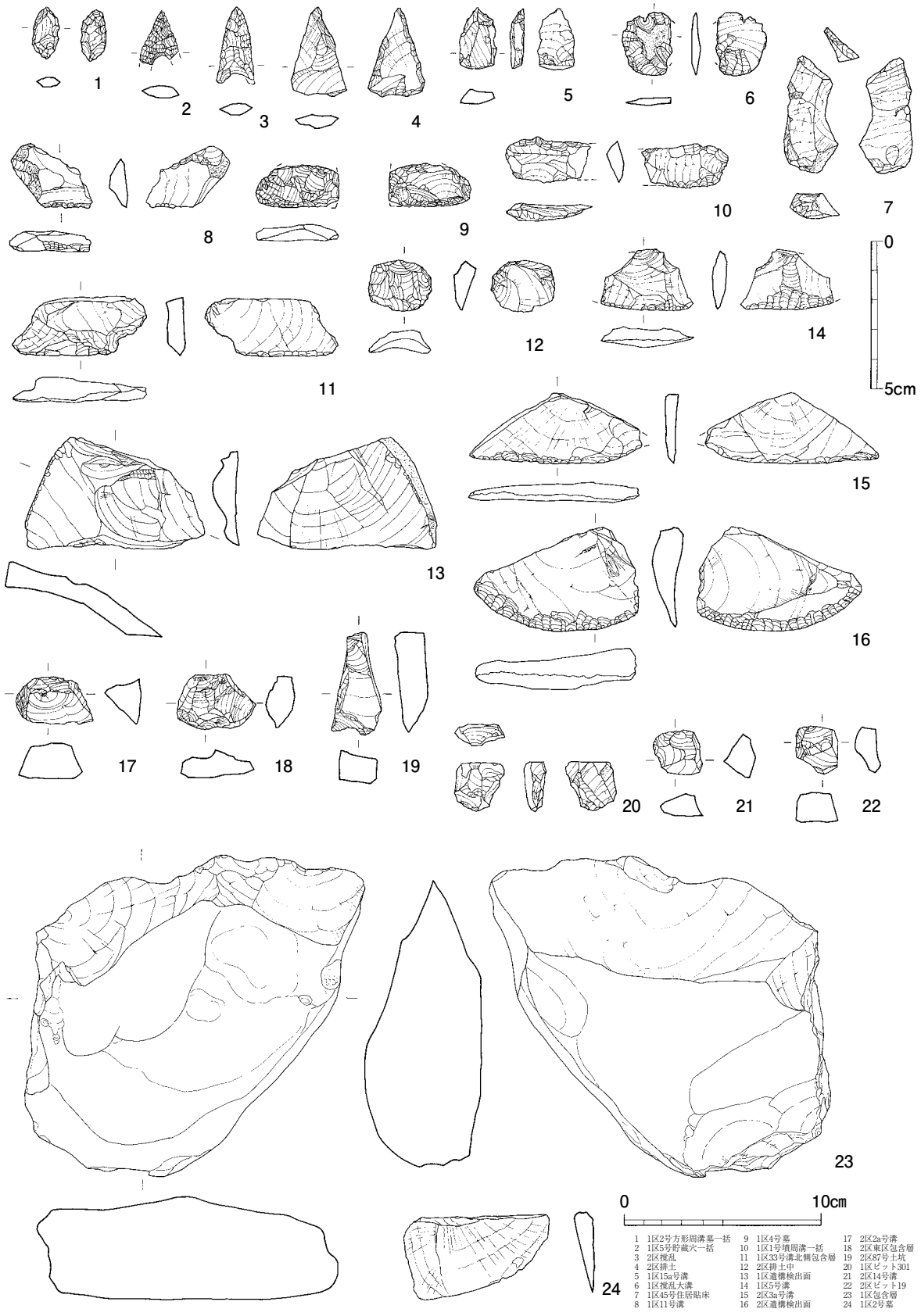
出土遺物（図版49、第９図）

10は甕棺の底部で、上底。胴部が大きく広がるので、浅鉢の可能性もある。器面摩滅で調整不明。

（６）遺構外出土の遺物（図版49・50、第14･19･20図）

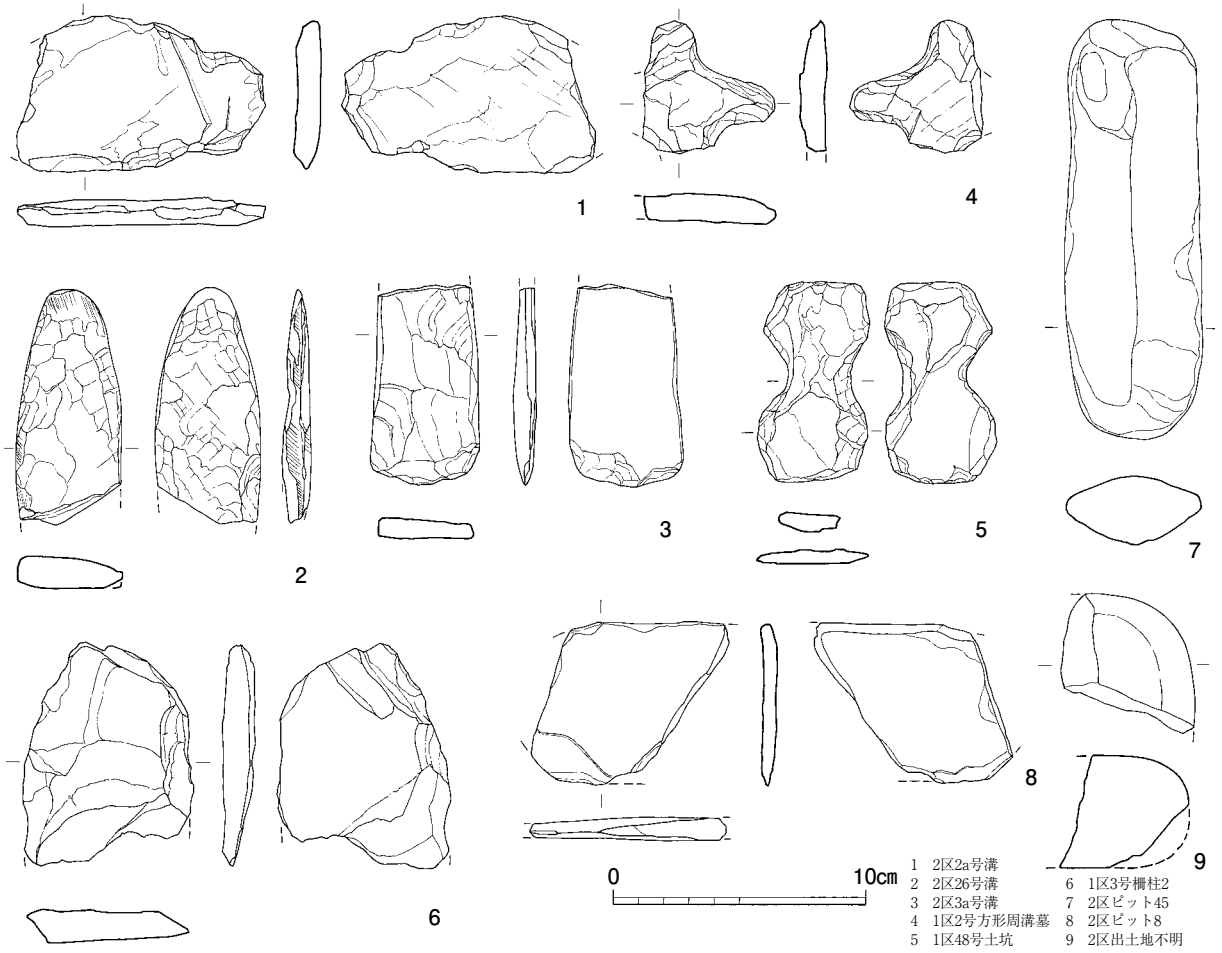
第14図13は１区の北部包含層から出土したもので、三万田式の口縁部である。RL縄文の後凹線が施されている。外面にはミガキが見られる。14は弥生時代前期の環濠3c層から出土したもので、胎土や焼成は弥生時代前期の土器と大きく変わらないが、波状口縁で頂部の口唇部に刻目が入っているので縄文土器とした。口縁部内面側は稜をもって屈曲し、外面側はナデ工具端部が残る。

第19図１は１区２号方形周溝墓の周溝から出土した柳葉形の石鏃である。１区15a号溝状遺構から出土した石錐で、黒曜石の風化が著しい。２は５号貯蔵穴から出土した打製石鏃だが、小型の凹基鏃なので弥生時代前期よりも縄文時代後期に属する可能性が高いので、ここで掲載した。３は撹乱出土の打製石鏃で両面均等に加工されている。４は排土出土の掻器である。大きさと形態は打製



第19図　縄文時代の遺構外出土石器実測図1（1～4・8は1/2、他は1/3）

石鏃のようだが、石鏃の基部の部分に使用痕があり、側縁のうち１つは片刃で、もう１つは途中で刃のつく面が逆になっている。それぞれ使用痕もあるので、打製石鏃の未製品ではない。６は撹乱出土の削器でラウンドスクレーパー状に刃部は弧を成す。７は１区45号竪穴住居跡貼床出土の彫器で、サヌカイトの縦長剥片を利用しており風化が著しい。８～10･12～16は掻器で、８は１区11号溝状遺構から出土したもので、基部は丁寧に加工と刃潰しされている。９は１区４号墓出土で、水晶製で上端面がやや欠損している。10は１区１号墳周溝出土で、風化の著しい姫島産黒曜石製である。上端面は刃はついていない。11は１区33号溝状遺構北側包含層出土で、風化の著しい姫島産黒曜石製である。両側面に抉りが入り、形状的には抉り入り石器だがつまみ部の大きい石匙とみるべきだろう。12は２区の排土出土で縦長剥片を折ったものを素材としている。上部にも刃部があり、上部の刃は摩滅している。13は１区の遺構検出面出土で、大型の横長剥片を使用しており、風化が著しい。素面を側端部とする面の縁の１側縁は刃を形成せずに使用しており、反対側の縁は縦に小さな剥落があるので使用によるものではないと判断した。14は１区５号溝状遺構から出土した石匙で、片側の側縁は刃潰ししていない。15は２区3a号溝状遺構から出土した削器で、上面は素面なので石匙の欠損品ではない。16は２区東部遺構検出面出土の削器で、斜めに長く取った剥片を利用しており、側面は石核の平坦面を残している。17～19は掻器の未成品である。17は、古い剥離面の平坦面を打面として上端面を加工した後、上端面を打面としてもう１つの平坦面を剥いで断面三角形にしているが、この剥離に湾曲がつかなかったので、古い剥離面側に刃をつけようとしている。



第20図　縄文時代の遺構外出土石器実測図2（1/3）

表2　特殊遺物一覧表1

図番号	出土遺構	時期	器種	長さ	幅	厚さ	重量	石材	備考
10図－１	２区７号土坑	縄文後期	打製石鏃	1.8	1.8	0.5	1.3	姫島産黒曜石	
10図－２	２区１号竪穴住居跡	縄文後期	打製石鏃	2.7	1.5	0.5	1.8	姫島産黒曜石	
10図－３	２区１号竪穴住居跡No.21	縄文後期	掻器	5.0	1.7	0.6	5.4	姫島産黒曜石	
10図－４	２区１号竪穴住居跡No. 3	縄文後期	掻器	3.9	2.1	1.3	14.2	姫島産黒曜石	
10図－５	２区１号竪穴住居跡No.23	縄文後期	掻器	4.1	1.9	1.3	11.7	姫島産黒曜石	２側縁使用
10図－６	２区１号竪穴住居跡	縄文後期	掻器	4.1	3.0	1.8	20.4	姫島産黒曜石	２側縁使用
10図－７	２区１号竪穴住居跡No.29	縄文後期	掻器	3.3	4.6	1.8	30.6	姫島産黒曜石	
10図－８	２区７号土坑	縄文後期	掻器	3.6	9.0	1.5	47.3	姫島産黒曜石	
10図－９	２区２号竪穴住居跡No.1	縄文後期	石匙	5.8	8.1	1.3	65.2	姫島産黒曜石	
10図－10	２区２号竪穴住居跡	縄文後期	石匙	3.2	2.2	0.7	5.9	姫島産黒曜石	
10図－11	１区１号落し穴	縄文後期	石匙兼石錐	2.8	3.3	0.7	4.7	腰岳産黒曜石	
10図－12	２区１号竪穴住居跡	縄文後期	掻器	3.4	2.5	0.8	5.9	姫島産黒曜石	
10図－13	２区１号竪穴住居跡No.27	縄文後期	掻器	2.1	2.6	0.8	4.1	姫島産黒曜石	
10図－14	２区１号竪穴住居跡	縄文後期	2次加工剥片	3.7	1.5	1.8	5.1	姫島産黒曜石	
10図－15	２区１号竪穴住居跡	縄文後期	2次加工剥片	3.2	4.1	1.3	14.6	姫島産黒曜石	
10図－16	２区１号竪穴住居跡No.25	縄文後期	石核	6.3	3.9	2.4	63.5	姫島産黒曜石	
10図－17	２区１号竪穴住居跡No.30	縄文後期	石核	3.0	5.0	1.6	19.2	姫島産黒曜石	
10図－18	２区１号竪穴住居跡No. 2	縄文後期	石核	2.8	5.5	1.8	22.4	姫島産黒曜石	
10図－19	２区１号竪穴住居跡No. 5	縄文後期	石核	3.0	2.1	0.9	6.1	姫島産黒曜石	
10図－20	２区１号竪穴住居跡No.15	縄文後期	石核	4.2	2.8	2.4	25.2	姫島産黒曜石	未成品か
10図－21	２区１号竪穴住居跡No. 5	縄文後期	石核	3.3	2.2	2.2	11.9	姫島産黒曜石	
10図－22	２区２号竪穴住居跡	縄文後期	石核	2.2	3.2	2.3	18.0	姫島産黒曜石	
10図－23	２区１号竪穴住居跡	縄文後期	石核	1.7	2.1	1.7	7.5	姫島産黒曜石	
10図－24	２区１号竪穴住居跡No.20	縄文後期	石核	4.3	4.3	2.8	71.1	姫島産黒曜石	
10図－25	２区１号竪穴住居跡No.13	縄文後期	石核	4.5	4.5	3.6	23.4	姫島産黒曜石	
10図－26	２区１号竪穴住居跡No.17	縄文後期	石核	5.8	6.2	2.6	152.6	結晶片岩	
10図－27	２区１号竪穴住居跡No. 1	縄文後期	石核	4.2	3.8	1.8	29.0	姫島産黒曜石	
10図－28	２区１号竪穴住居跡No.16	縄文後期	石核	7.6	6.3	5.2	319.5	姫島産黒曜石	
11図－１	２区１号竪穴住居跡No.26	縄文後期	石庖丁状石器	5.2	9.0	1.3	93.1	緑色結晶片岩	
11図－２	２区１号竪穴住居跡No.24	縄文後期	石鎌	9.5	4.7	1.2	86.6	緑色結晶片岩	
11図－３	２区１号竪穴住居跡No. 6	縄文後期	石鎌	10.2	5.2	0.9	69.9	緑色結晶片岩	
11図－４	２区１号竪穴住居跡No.33	縄文後期	磨石	10.2	8.5	5.3	521.7	安山岩	赤色顔料付着
15図－１	自然流路一括	縄文後期	石槍か	2.7	2.5	1.4	7.2	姫島産黒曜石	
15図－２	自然流路中位No.33	縄文後期	楔形石器	2.7	3.3	0.7	10.3	サヌカイト	
15図－３	自然流路No.85	縄文後期	掻器	4.0	1.6	2.1	15.8	姫島産黒曜石	
15図－４	自然流路中層	縄文後期	石匙	8.4	4.6	1.3	13.9	サヌカイト	
15図－５	自然流路一括	縄文後期	石核	2.8	3.2	1.6	13.9	針生産黒曜石	
15図－６	自然流路中位No.63	縄文後期	石核	3.9	4.0	2.2	32.4	姫島産黒曜石	
15図－７	自然流路中位No.67	縄文後期	石核	6.9	2.7	2.4	46.1	姫島産黒曜石	
15図－８	自然流路中位No.70	縄文後期	石核	4.0	3.7	3.3	55.6	姫島産黒曜石	
15図－９	自然流路西端	縄文後期	石核	2.8	3.5	3.0	28.9	姫島産黒曜石	
15図－10	自然流路西端	縄文後期	石核	4.8	3.2	2.8	50.2	姫島産黒曜石	
15図－11	自然流路西端	縄文後期	石核	5.0	2.3	3.1	32.5	姫島産黒曜石	
15図－12	自然流路一括	縄文後期	石核	6.6	3.5	3.3	64.8	姫島産黒曜石	
15図－13	自然流路一括	縄文後期	石核	6.0	3.7	3.0	76.8	姫島産黒曜石	
15図－14	自然流路中位No.20	縄文後期	2次加工剥片	4.5	2.4	1.1	12.4	姫島産黒曜石	
16図－１	自然流路中位No.13	縄文後期	石庖丁状石器	4.8	8.2	0.7	49.3	緑色結晶片岩	
16図－２	自然流路中位No.73	縄文後期	石鎌	5.0	9.1	1.0	74.9	緑色結晶片岩	
16図－３	自然流路一括	縄文後期	石鎌	6.6	4.9	0.8	43.9	緑色結晶片岩	
16図－４	自然流路No.78	縄文後期	石鎌	9.2	5.5	1.0	58.4	緑色結晶片岩	
16図－５	自然流路中位62	縄文後期	石鎌	4.0	7.7	0.9	38.7	緑色結晶片岩	
16図－６	自然流路No.No.26	縄文後期	石鎌	4.0	7.5	1.1	48.3	緑色結晶片岩	
16図－７	自然流路一括	縄文後期	石鎌	3.7	8.3	0.9	38.7	緑色結晶片岩	
16図－８	自然流路中位No.43	縄文後期	石鎌	4.8	7.0	1.0	43.6	緑色結晶片岩	
16図－９	自然流路中位No.42	縄文後期	石鎌	3.8	9.3	1.1	48.5	緑色結晶片岩	

表3　特殊遺物一覧表2

図番号	出土遺構	時期	器種	長さ	幅	厚さ	重量	石材	備考
17図－１	自然流路一括	縄文	打製石斧	7.3	3.7	1.3	41.1	緑色結晶片岩	
17図－２	自然流路中位No.36	縄文	打製石斧	6.9	3.7	1.2	32.2	緑色結晶片岩	
17図－３	自然流路中位No.67	縄文後期	石庖丁状石器	5.0	9.5	1.1	36.4	緑色結晶片岩	
17図－４	自然流路中位No.23	縄文	打製石斧	9.6	3.7	0.9	39.5	緑色結晶片岩	
17図－５	自然流路中位No.３	縄文	打製石斧	9.4	5.5	1.5	84.9	緑色結晶片岩	
17図－６	自然流路No.84	縄文	打製石斧	9.2	5.7	1.3	106.3	緑色結晶片岩	
17図－７	自然流路下位No.９	縄文	打製石斧	8.5	5.2	1.3	129.3	緑色結晶片岩	
17図－８	自然流路中位No.５	縄文	打製石斧	14.7	5.8	1.6	197.0	緑色結晶片岩	
17図－９	自然流路下位No.46	縄文	打製石斧	11.3	5.3	1.7	145.4	緑色結晶片岩	
17図－10	自然流路下位No.９	縄文後期	打製石斧	7.2	6.0	1.2	92.0	緑色結晶片岩	
17図－11	自然流路中位No.30	縄文	打製石斧	6.0	5.1	1.2	63.2	緑色結晶片岩	
17図－12	自然流路一括	縄文	打製石斧	10.4	4.0	1.2	59.7	緑色結晶片岩	
17図－13	自然流路中位No.５	縄文	打製石斧	12.9	7.8	1.2	162.8	緑色結晶片岩	
17図－14	自然流路一括	縄文後期	打製石斧	14.6	4.6	1.2	130.9	緑色結晶片岩	
17図－15	自然流路No.77	縄文	打製石斧	12.7	6.0	1.2	139.1	緑色結晶片岩	
18図－１	自然流路中位No.68	縄文	磨製石斧	3.8	4.3	1.7	44.1	安山岩	
18図－２	自然流路中位No.10	縄文	磨製石斧	9.3	4.4	1.7	107.5	緑色結晶片岩	
18図－３	自然流路下位No.51	縄文	磨製石斧	11.6	5.2	3.0	235.4	安山岩	
18図－４	自然流路中位No.62	縄文	磨製石斧	11.0	5.7	2.1	192.2	安山岩	９と同一個体の可能性あり
18図－５	自然流路下位No.28＋No.40	縄文	磨製石斧	14.5	4.8	2.2	211.8	緑色結晶片岩	
18図－６	自然流路中位No.32＋No.79	縄文	磨製石斧	17.2	4.5	2.2	275.1	緑色結晶片岩	
18図－７	自然流路下位No.４	縄文	磨製石斧未製品	12.7	4.6	2.7	182.2	安山岩	
18図－８	自然流路一括	縄文	磨製石斧	8.5	5.7	2.7	155.2	緑色結晶片岩	
18図－９	自然流路一括	縄文	磨製石斧	7.8	4.0	1.9	49.4	安山岩	６と同一個体の可能性あり
18図－10	自然流路中位No.65	縄文	磨製石斧	8.2	4.3	1.9	94.2	結晶片岩	
18図－11	自然流路中位No.56	縄文	石錘	7.2	8.6	1.6	137.2	結晶片岩	
18図－12	自然流路下位No.51	縄文	叩石	14.0	6.9	4.9	671.6	安山岩	
18図－13	自然流路中位No.50	縄文	磨石	11.0	8.2	3.8	478.1	安山岩	
18図－14	３号竪穴住居No.３	縄文	台石	17.5	17.8	11.3	4920	安山岩	
19図－１	１区２号方形周溝墓一括	縄文後期	打製石鏃	1.8	0.6	0.4	1.4	姫島産黒曜石	
19図－２	１区５号貯蔵穴一括	縄文後期	打製石鏃	1.9	1.3	0.5	1.4	腰岳産黒曜石	
19図－３	２区撹乱	縄文後期	打製石鏃	2.6	1.3	0.4	1.6	姫島産黒曜石	
19図－４	２区排土	縄文後期	掻器	3.0	1.8	0.6	3.3	姫島産黒曜石	４ヶ所使用
19図－５	１区15a号溝	縄文後期	石錐	3.2	1.8	0.8	5.7	腰岳産黒曜石	
19図－６	１区撹乱大溝	縄文後期	削器	3.3	2.3	0.6	4.4	腰岳産黒曜石	
19図－７	１区45号竪穴住居跡貼床	縄文後期	彫器	6.1	2.5	1.3	18.1	サヌカイト	
19図－８	１区11号溝	縄文後期	掻器	2.1	2.1	0.8	4.3	姫島産黒曜石	
19図－９	１区４号墓	縄文後期	掻器	2.1	4.0	0.8	9.8	水晶	
19図－10	１区１号墳周溝一括	縄文後期	掻器	2.0	4.1	1.0	8.5	姫島産黒曜石	
19図－11	１区33号溝北側包含層	縄文後期	石匙	5.7	2.8	1.0	17.9	姫島産黒曜石	
19図－12	２区排土中	縄文後期	掻器	3.1	2.4	1.1	8.5	姫島産黒曜石	２ヶ所使用
19図－13	１区遺構検出面	縄文後期	掻器	9.1	5.6	1.4	48.2	姫島産黒曜石	２ヶ所使用
19図－14	１区５号溝	縄文後期	削器	4.6	3.1	0.8	7.9	姫島産黒曜石	
19図－15	２区3a号溝	縄文後期	削器	8.8	3.5	1.0	27.4	サヌカイト	
19図－16	２区遺構検出面	縄文後期	削器	5.1	8.3	1.3	48.1	姫島産黒曜石	
19図－17	２区２a号溝	縄文後期	掻器未製品	2.7	3.8	1.6	14.2	姫島産黒曜石	
19図－18	２区東区包含層	縄文後期	掻器未製品	2.2	4.8	1.7	16.5	姫島産黒曜石	
19図－19	２区８号土坑	縄文後期	掻器未製品	5.0	1.7	1.7	20.0	姫島産黒曜石	
19図－20	１区27号竪穴住居跡柱４	縄文後期	2次加工剥片	2.3	2.3	1.1	7.3	姫島産黒曜石	
19図－21	２区14号溝	縄文後期	2次加工剥片	2.0	2.2	1.3	7.6	姫島産黒曜石	
19図－22	２区ピット19	縄文後期	石核	2.1	2.0	1.4	10.0	姫島産黒曜石	
19図－23	１区包含層	縄文	石核	15.2	16.7	5.9	1754.8	サヌカイト	
19図－24	１区２号墓	縄文	剥片	4.1	7.3	1.2	28.4	姫島産黒曜石	
20図－１	２区2a号溝	縄文後期	石鎌	10.0	6.0	1.2	100.0	緑色結晶片岩	
20図－２	２区26号溝	縄文後期	磨製石斧	9.1	4.1	1.2	69.6	安山岩	
20図－３	２区3a号溝	縄文後期	打製石斧	7.6	4.5	0.9	54.7	緑色結晶片岩	
20図－４	１区３号方形周溝墓	縄文後期	十字形石器	5.0	5.1	1.1	34.6	緑色結晶片岩	
20図－５	１区48号土坑	縄文後期	分銅形石器	7.9	4.3	1.0	46.5	緑色結晶片岩	
20図－６	１区３号柵柱２	弥生	打製石斧未製品	8.8	6.7	1.4	103.4	緑色結晶片岩	
20図－７	２区P45	縄文後期	原石	16.6	5.4	3.2	414.2	緑色結晶片岩	
20図－８	２区P８	縄文後期	原石	6.2	6.5	1.1	49.1	緑色結晶片岩	
20図－９	２区出土地不明	縄文か	磨石	4.5	4.5	4.5	149.3	安山岩	

しかし、節理が入っているために刃がつけられなかったので加工を止めたものとみられる。18は台形に加工した剥片の底片に片刃を付けようとしているが、剥離が大きすぎて刃縁が窪んでしまったので加工をやめたものとみられる。19は中世の８号土坑から出土したもので、縦長柱状の剥片を利用して掻器を作ろうとしているが、刃部の加工に失敗して刃縁が抉れてしまったことから加工を止めている。20･21は２次加工剥片で、20はピット301出土で、１面は平坦面を打面としているが、裏面は反対を打面として先端を尖らせて船底形にしようとしている。風化が著しい。21は14号溝状遺構出土で、図面上部が尖るように両面から加工されているが、刃を形成する途中で大きく欠損したようだ。22は打面転移が著しい石核で、古い剥離面と新しい剥離面が混在しているので、欠損品の可能性もある。23はピット496出土のサヌカイトの原石を数回剥離した石核で、剥離面の風化が進んでいないので旧石器ではない。両面から斜めに剥離されており、一見すると刃を形成しているように見えるが、縁に刃部加工はなく、使用痕もなかったので、礫器としては使われていない。側面の剥離面は風化が著しく、調整剥離ではない。調整剥離や皮剥ぎもしないまま、先端側から斜めに薄く剥離して素材剥片を得ている。24は中世の２号墓出土の素材剥片で、主要剥離面の裏には素面を残している。上端面を打面としているが、調整剥離はしていない。縁部には刃部加工がない。欠損しているが、使用によるものとはいえないので、削器としては使用されていないだろう。

第20図１は２区2a号溝状遺構から出土した石鎌で、基部に抉りがある。刃部は摩滅している。２は２区26号溝状遺構から出土した磨製石斧で、表裏面は剥落している。側面は扁平で、基部も丁寧に整形されているのでソケットに挿し込むタイプであろう。３は２区3a号溝状遺構から出土した扁平な板状の石材で、先端部分のみ加工して刃をつけている。側縁は加工の必要はないので、未製品ではなく打製石斧としてこのまま使用したのではないだろうか。４は１区３号方形周溝墓の周溝から出土した十字形石器で、十字はやや偏っている。５は１区48号土坑出土の分銅形石器で、弥生時代の遺構から出土しているが、縄文後晩期に見られるものなので、ここで掲載した。分銅形は打製石斧にも見られるが、石斧には小さいので、十字形石器と同じような機能をもつものであろう。６は３号柵柱２出土で、表裏右からだけ側縁を剥離している。刃部はなく欠損にしては尖りすぎているので、基部と見られるが、どの縁も尖っているので未製品であろう。風化しているので縄文時代に属するとした。７は２区ピット45から出土した原石で、叩石や石杵としての使用痕跡はないことから未加工と考えた。８は２区ピット８から出土した板状の原石で、欠損のみで加工されていない。９は２区出土地不明の磨石片で、研磨面は明瞭である。欠損は新しい。

註

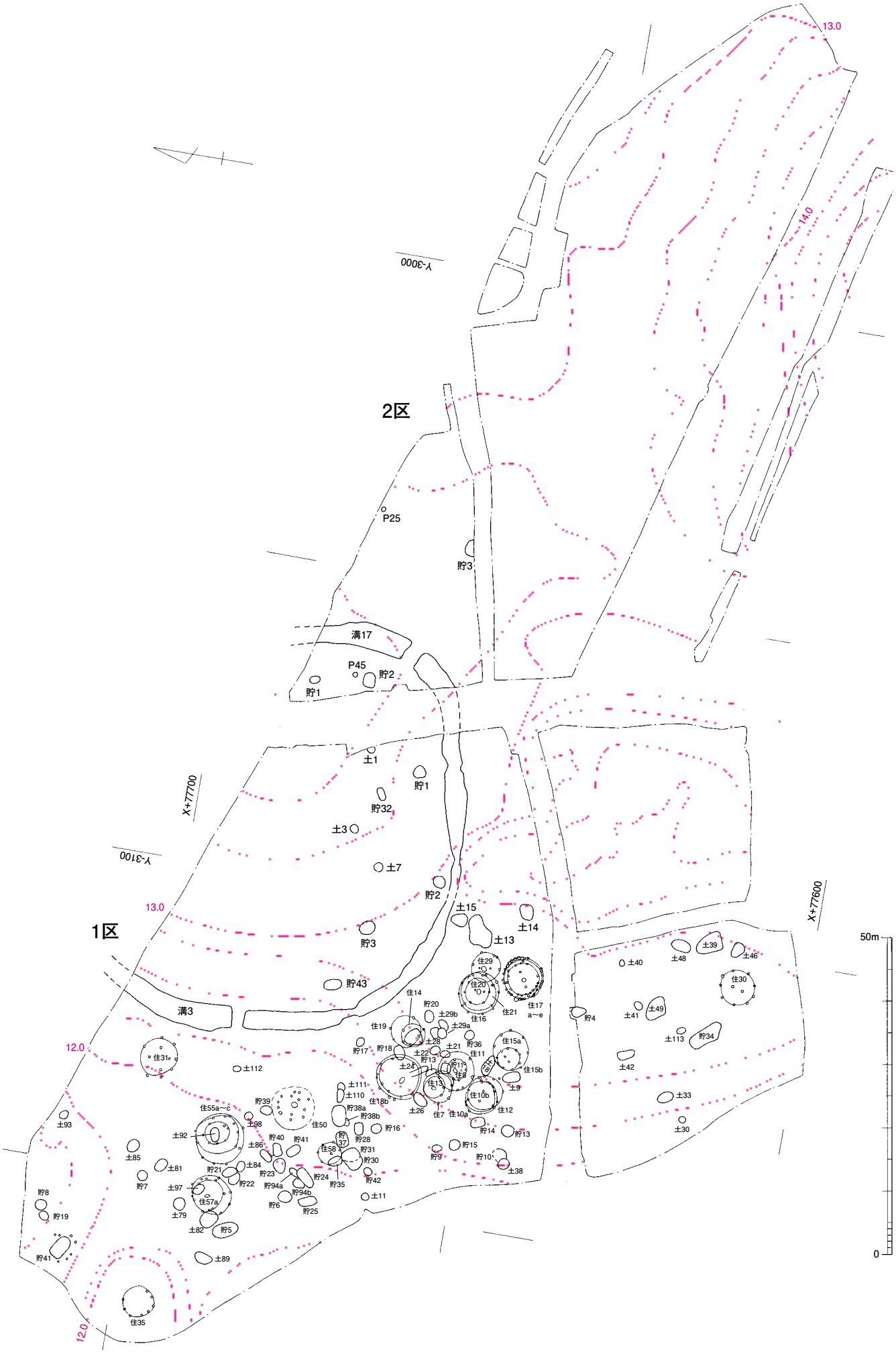
１　大分県教育委員会1989『佐知遺跡』大分県文化財調査報告書第81輯

４　弥生時代前期から中期前葉の遺構と遺物

この時期の遺構は、竪穴住居跡38基、貯蔵穴47基、土坑42基、溝１条である。すべて１区から検出されている。

（１）竪穴住居跡

27基の番号を付しているが、同じ号数の竪穴住居跡の建替えを含めると計38基にのぼる。床面が



第21図　弥生時代前期から中期前葉の略遺構配置図・地形復元図（1/800）

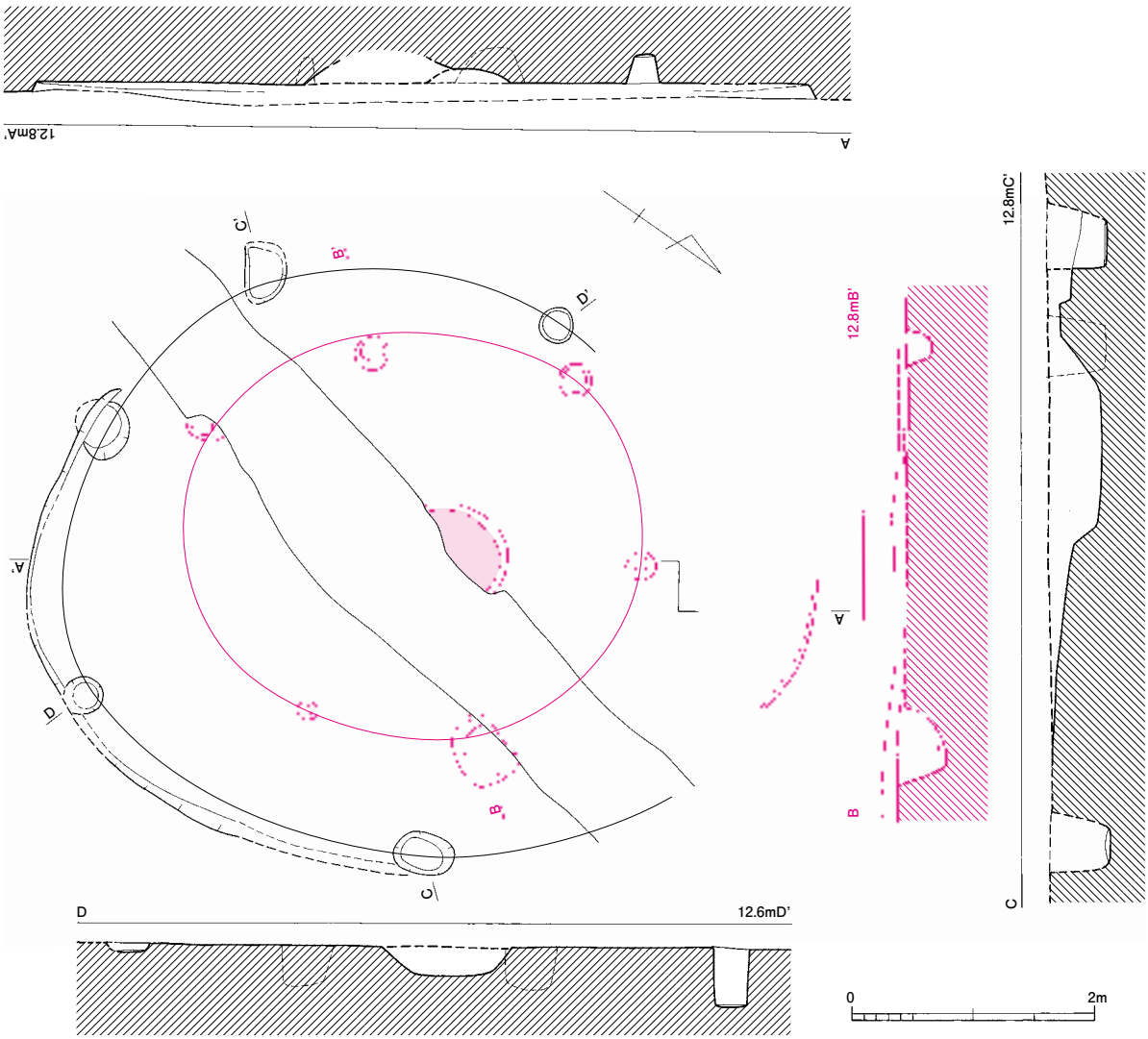
失われているため、柱穴の配置と規模から推定した不確実なものもある一方で、撹乱が多かったため確認できなかったものもあると見られるので、基数にそれほどの多寡はないだろう。

７号竪穴住居跡（図版６、第22図）

１区中央西側に位置する円形住居で、円形プランの一部と柱穴配置から復元した。東西に円形プランの一部が検出できたが、１つの遺構とするには楕円形になるため、西側プランと中央炉は13号、東側プランは７号のもので、７号の中央炉は撹乱に切られているものと考えた。柱穴が壁沿いに巡っており、斜めに入り込むものもあった。13号とは建替えの可能性があるが先後関係は確認できなかった。削平が著しく、円形プランの残っている部分でわずかに出土した土器と柱穴出土土器から中期初頭である。

出土遺物（第36図）

１は柱１出土の小型の如意形口縁甕で、口縁部は刻み目なし。内外面は器面摩滅で調整不明。内外面黄橙色から橙褐色で煮沸使用の痕跡なし。２～４は埋土出土。２は逆L字口縁甕で、外は摩滅のため調整不明。内外黄橙色で変色なし。３は肥厚口縁壺で、器面摩滅のため調整不明。内外黄橙灰色で変色がない。４はL字口縁甕で、内外器面摩滅で調整不明。内面口縁部から肩部は橙褐色で



第22図　弥生時代前期から中期前葉の竪穴住居跡実測図1　1区7・13号竪穴住居跡（1/60）

変色なし。胴部は暗灰褐色なので煮沸使用されている。

８号竪穴住居跡（図版６、第23図）

１区中央西側に位置する円形住居で、炉跡を中心に柱穴配置から復元した。11号竪穴住居跡とは別の住居番号を付与しているが、８号が小型であることから建替えではなく11号と同一遺構の可能性もある。11号貯蔵穴と切り合うが先後関係は不明確だった。床面まで削平されているため、中央炉跡から土器がわずかに出土したのみで中期初頭。

出土遺物（第36図）

５は逆L字口縁甕で内外器面摩滅のため調整不明。内外黄橙色。６は外底も赤変しているので蓋であろう。器面摩滅で調整不明。天井部完存で積み上げ痕不明。７は高杯で器面摩滅が著しい。内外黄灰色を呈する。

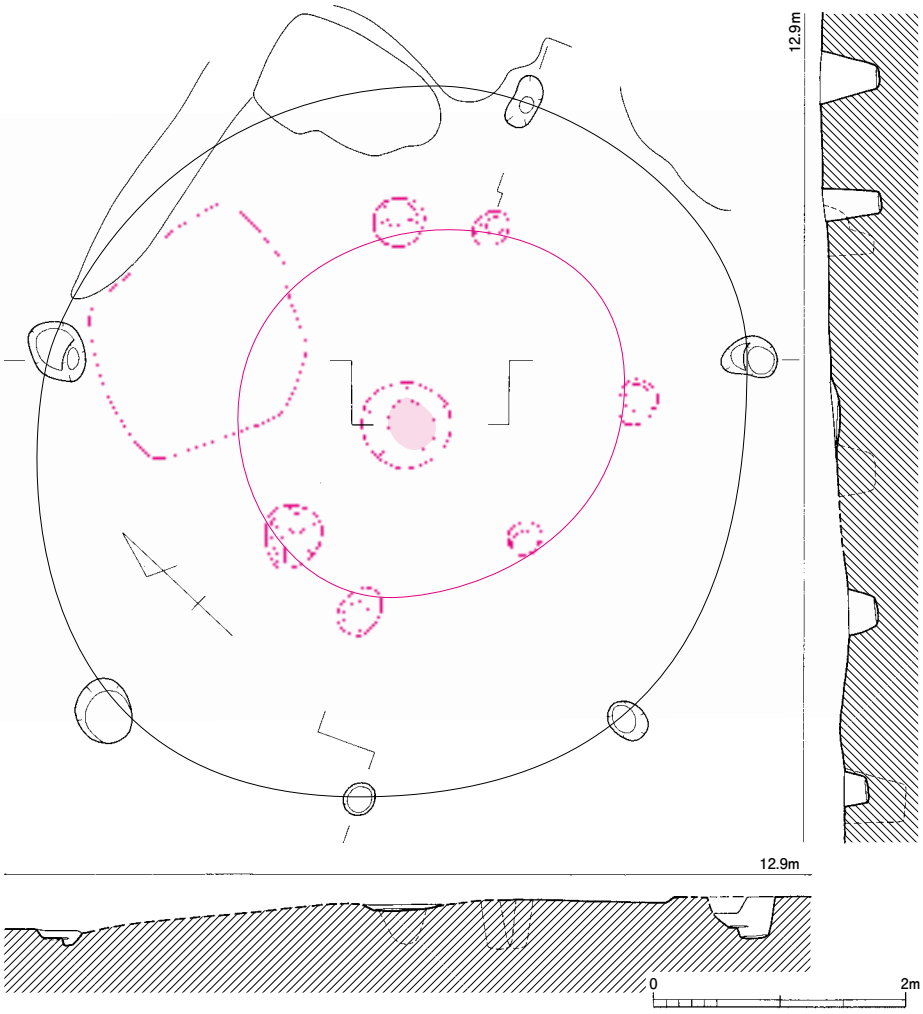
10号竪穴住居跡（図版７、第24図）

１区中央西側に位置する円形住居で、円形プランの周溝と柱穴配置から復元し、柱は位置のずれからa･b号２基を想定した。９号竪穴住居跡・７号溝に切られており、床面から柱穴が検出された。12号竪穴住居跡の柱穴が周溝を切っているのは間違いない。床面まで削平されているため、出土遺物がなく、時期を特定できない。

11号竪穴住居跡（図版６、第23図）

１区中央西側に位置する円形住居で、炉跡を中心に柱穴配置から復元した。８号竪穴住居跡とは別の住居番号を付与しているが、８号竪穴住居跡が小型であることから同一遺構の可能性もある。13号竪穴住居跡・36号土坑と切り合うが先後関係は不明。出土遺物がなく、時期を特定できない。

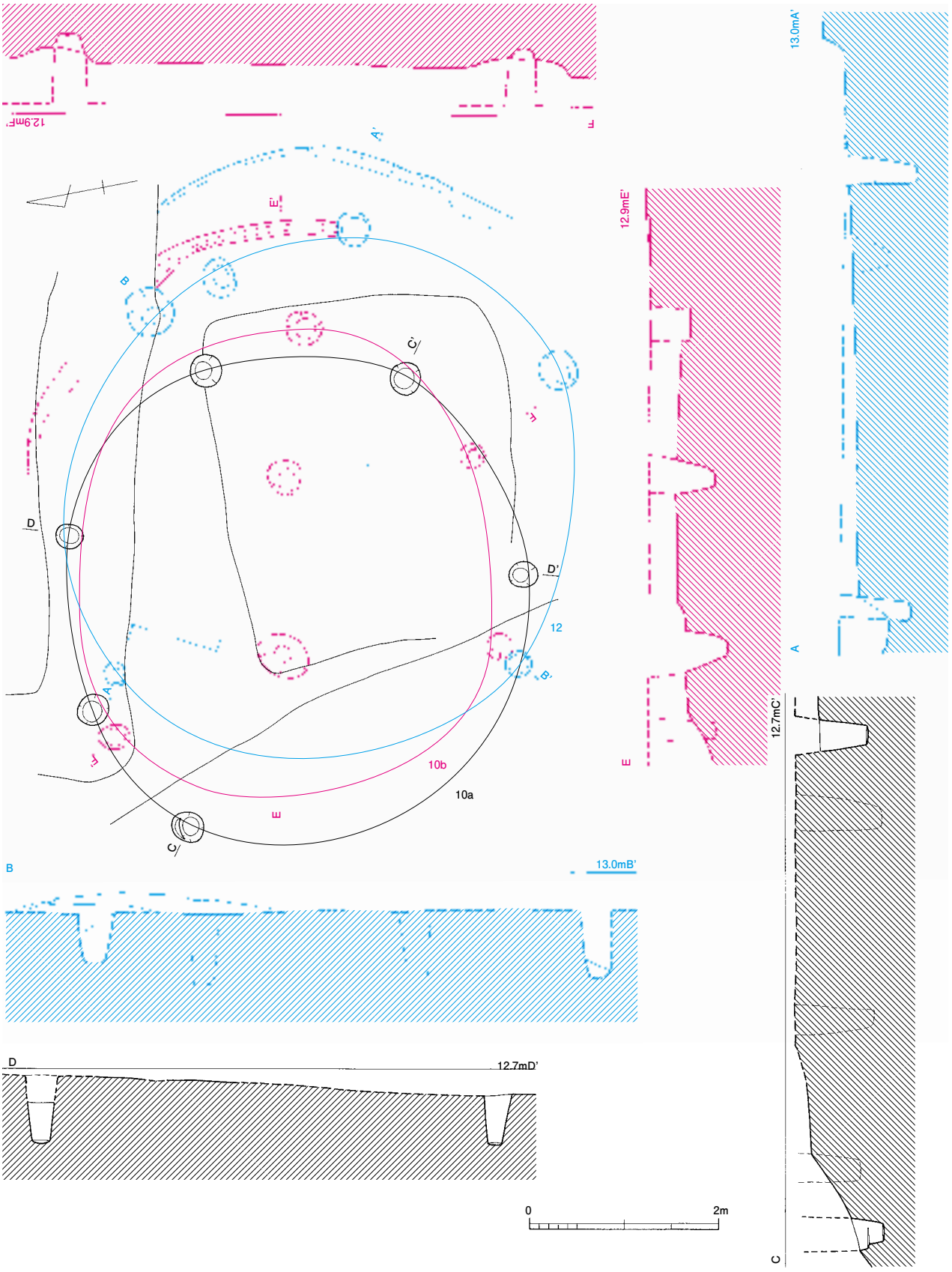
12号竪穴住居跡（図



第23図　弥生時代前期から中期前葉の竪穴住居跡実測図2
1区8･11号竪穴住居跡（1/60）

版６、第24図）

１区中央西側に位置する円形住居で、部分的に残る円形プランと柱穴配置から復元した。９号竪穴住居跡、5･7号溝に切られており、掘り方から柱穴が検出された。10号竪穴住居跡とは建替えであろうが、先後関係はわからない。東側の一部を除き、床面まで削平されているため、出土遺物が



第24図　弥生時代前期から中期前葉の竪穴住居跡実測図3　1区10･12号竪穴住居跡（1/60）

なく、時期を特定できない。

13号竪穴住居跡（第22図）

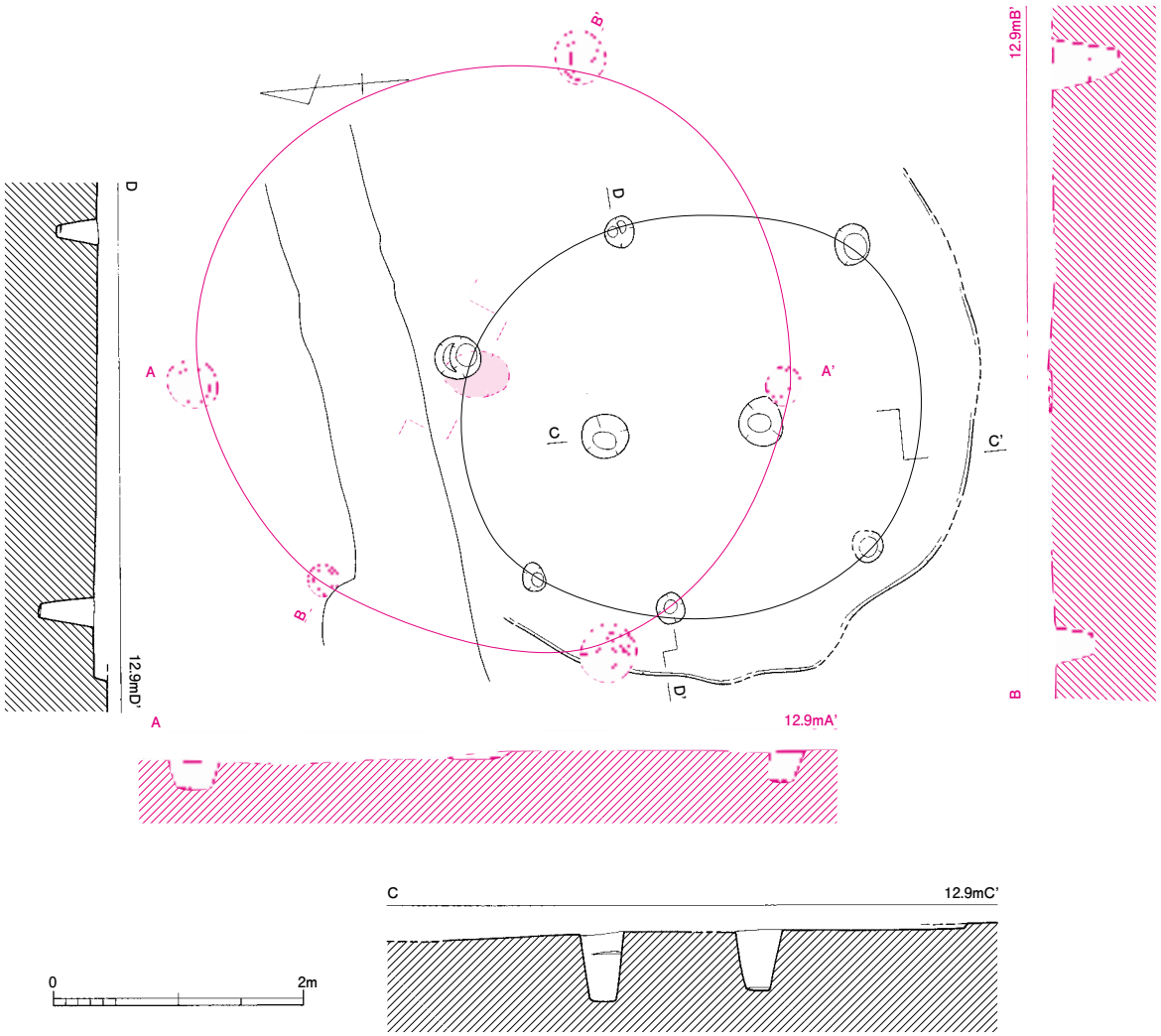
１区中央西側に位置する円形住居で、円形プランの一部と中央炉を中心に柱穴配置から復元した。７号竪穴住居跡とは切り合うが明確な切り合いはなく、先後関係はわからない。26号土坑とは切り合っているが、プランが似通っていたため先後関係は確認できなかった。削平が著しく、円形プランの残っている部分でわずかに出土した土器から板付ⅡＢ式併行期だろう。

出土遺物（第36図）

８は外面底部縁が赤変しているので甕の底部であろう。器面の残りが悪く、外面はタテハケがわかる程度で内面は調整不明。外面は赤橙色で、内面は黄橙色で変色なし。底部完存で積み上げ方法不明。９は甕の底部で、器面の残りが悪く調整不明。外面橙褐色で、赤変しており、内面黒褐色に変色しているので煮沸使用されている。

14号竪穴住居跡（第25図）

１区中央西側に位置する円形住居で、部分的に残る円形プランと柱穴配置から復元した。北側を



第25図　弥生時代前期から中期前葉の竪穴住居跡実測図4　1区14･19号竪穴住居跡（1/60）

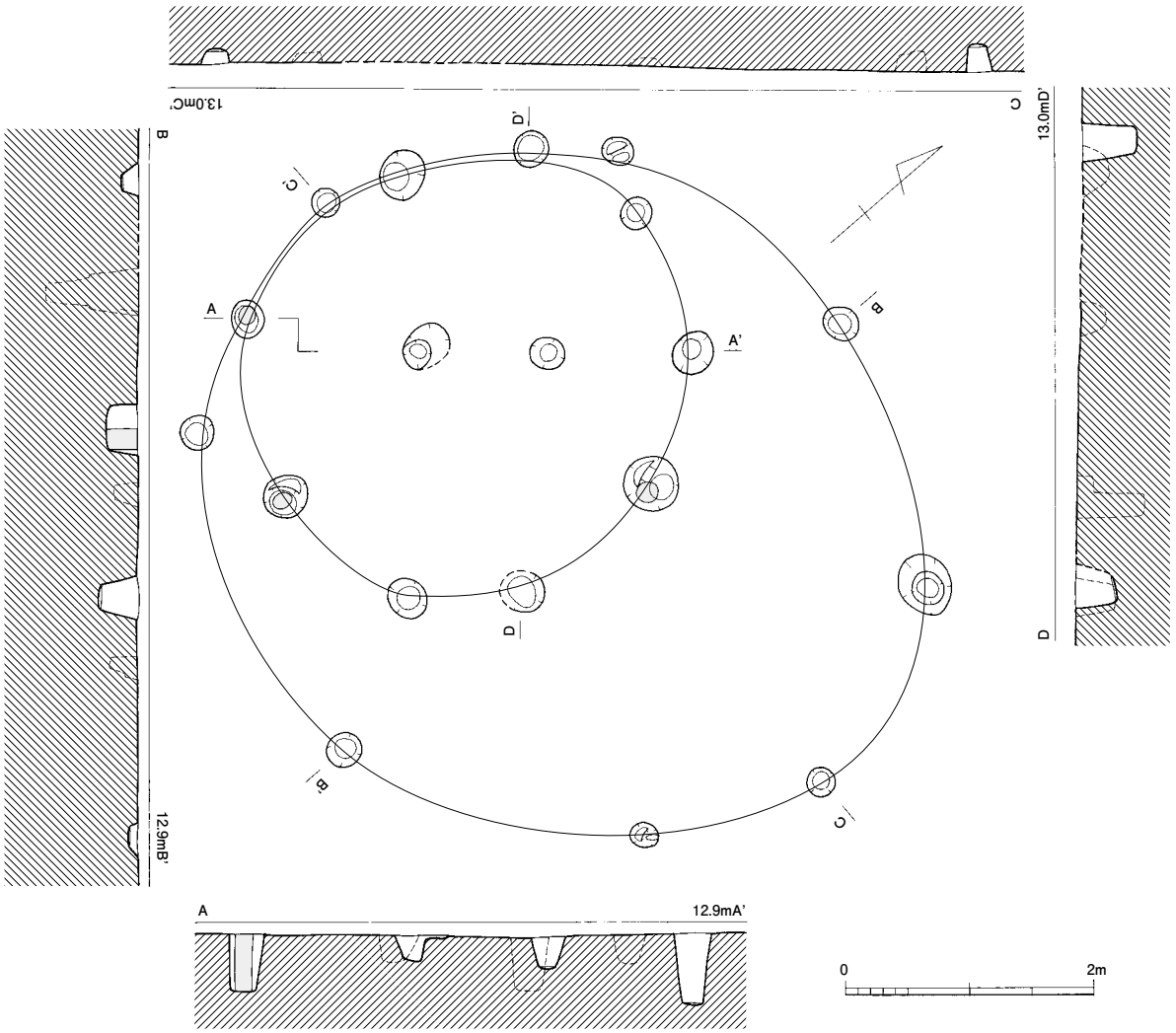
撹乱に切られているが、径4.7m程に復元できる。19号竪穴住居跡の炉跡を切っている。６号掘立柱建物跡と切り合うが、先後関係はわからない。北半分が床面まで削平されているため、出土遺物がなく、時期を特定できない。

15号竪穴住居跡（第26図）

１区中央部に位置する円形住居である。柱穴配置から復元したので、壁や中央炉・中央土坑がないため確実性に欠ける。15b号は柱穴が浅いので、他の施設が削平されたのかもしれない。柱配置からa･b ２つの建替えと見られる住居を復元したが、規模の差が大きく、柱穴が多く存在するので中間の大きさの住居が存在する可能性があるが、それを復元することはできなかった。15a号は２号掘立柱建物跡に切られている。出土遺物がなく、時期を特定できない。

16号竪穴住居跡（図版７、第27図）

１区中央部に位置する円形住居である。柱穴が多数あるなかで、中央土坑と見られる大型ピットと円形に並ぶ柱穴配置から復元したので、壁や中央炉がないため確実性に欠ける。20号竪穴住居跡を建替えているが、20号の中央土坑上面が撹乱に切られているため切り合い関係がわからない。21



第26図　弥生時代前期から中期前葉の竪穴住居跡実測図5　1区15号竪穴住居跡（1/60）

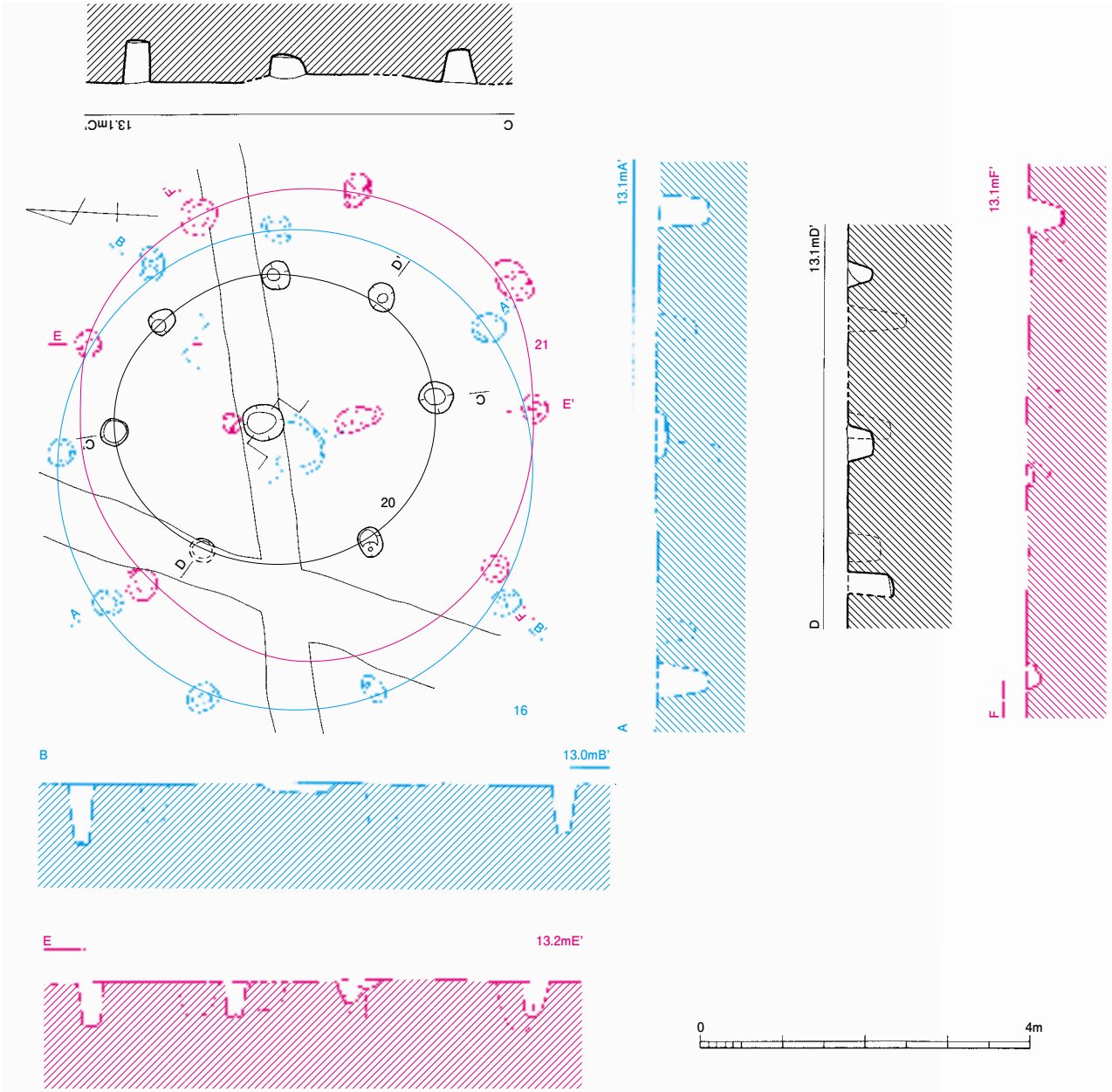
号竪穴住居とも切り合うが、先後関係はわからない。出土遺物から中期初頭であろう。

出土遺物（第36図）

10は中央土坑出土の甕の底部で、外面は目の細かいタテハケ、内面は摩滅で調整不明。外面は赤橙褐色で赤変しており、内面は黒灰褐色に変色しているので煮沸使用されている。積み上げ痕は明瞭に観察できる。

17号竪穴住居跡（図版７、第28図）

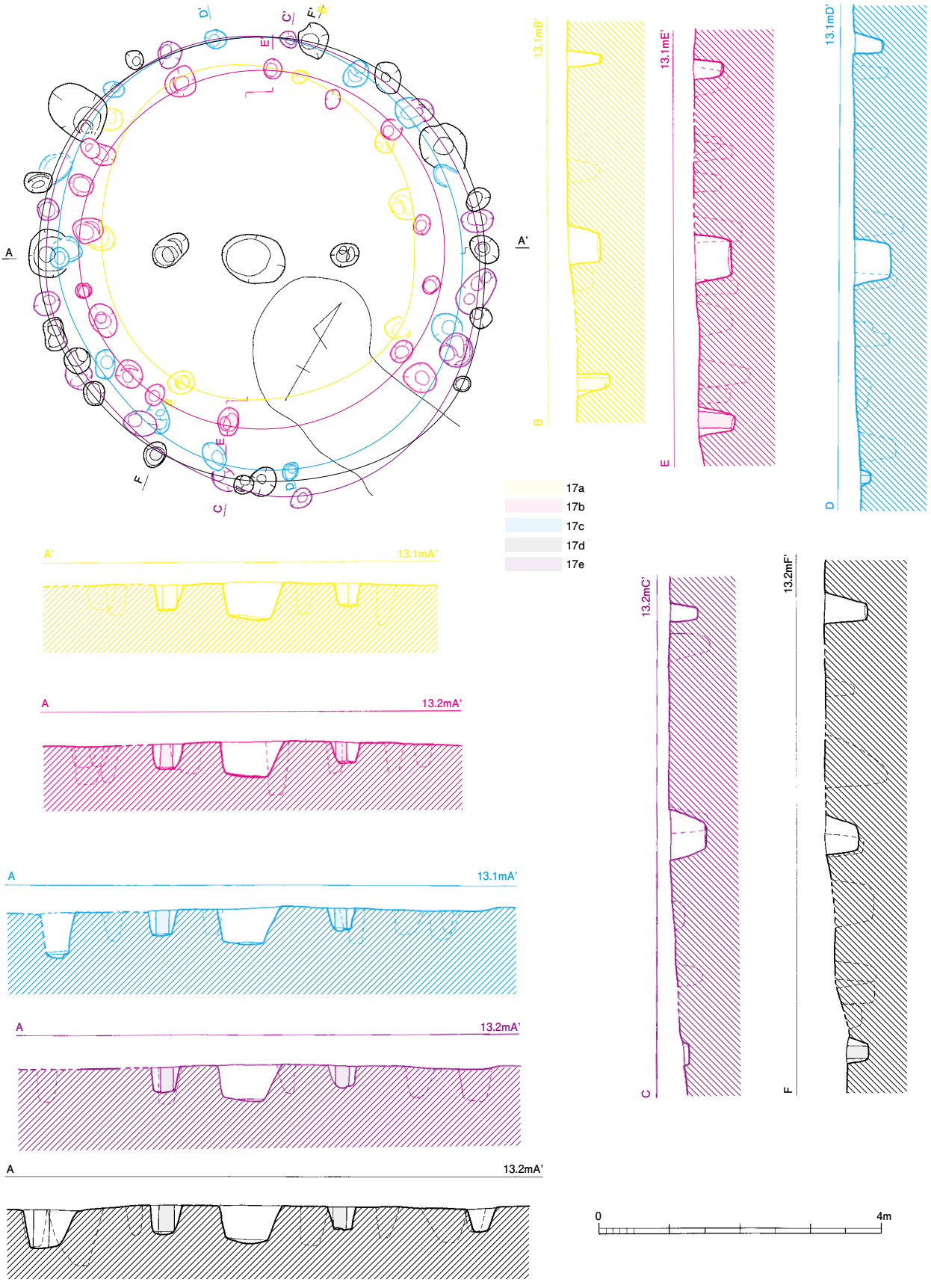
１区中央部に位置する円形住居である。中央土坑と見られる大型ピットと円形に並ぶ柱穴配置から復元したもので、壁や中央炉がないため確実性に欠ける。柱穴が多数あるなかで、柱間隔からa～e号まで同一住居を建替えた５基の住居を復元した。各住居の柱穴は中央土坑を中心に同心円に巡っており、中央２本主柱穴に建替えの痕跡がないので、中央土坑・中央２本柱穴を共有している可能性がある。出土遺物から板付ⅡB式古段階併行期に属する。



第27図　弥生時代前期から中期前葉の竪穴住居跡実測図6　1区16･20･21号竪穴住居跡（1/80）

出土遺物（第36図）

11は中央土坑出土で、形状は壺の底部だが、外面が赤変しており、内面は黒灰色を呈するので煮



第28図　弥生時代前期から中期前葉の竪穴住居跡実測図7　1区17号竪穴住居跡（1/80）

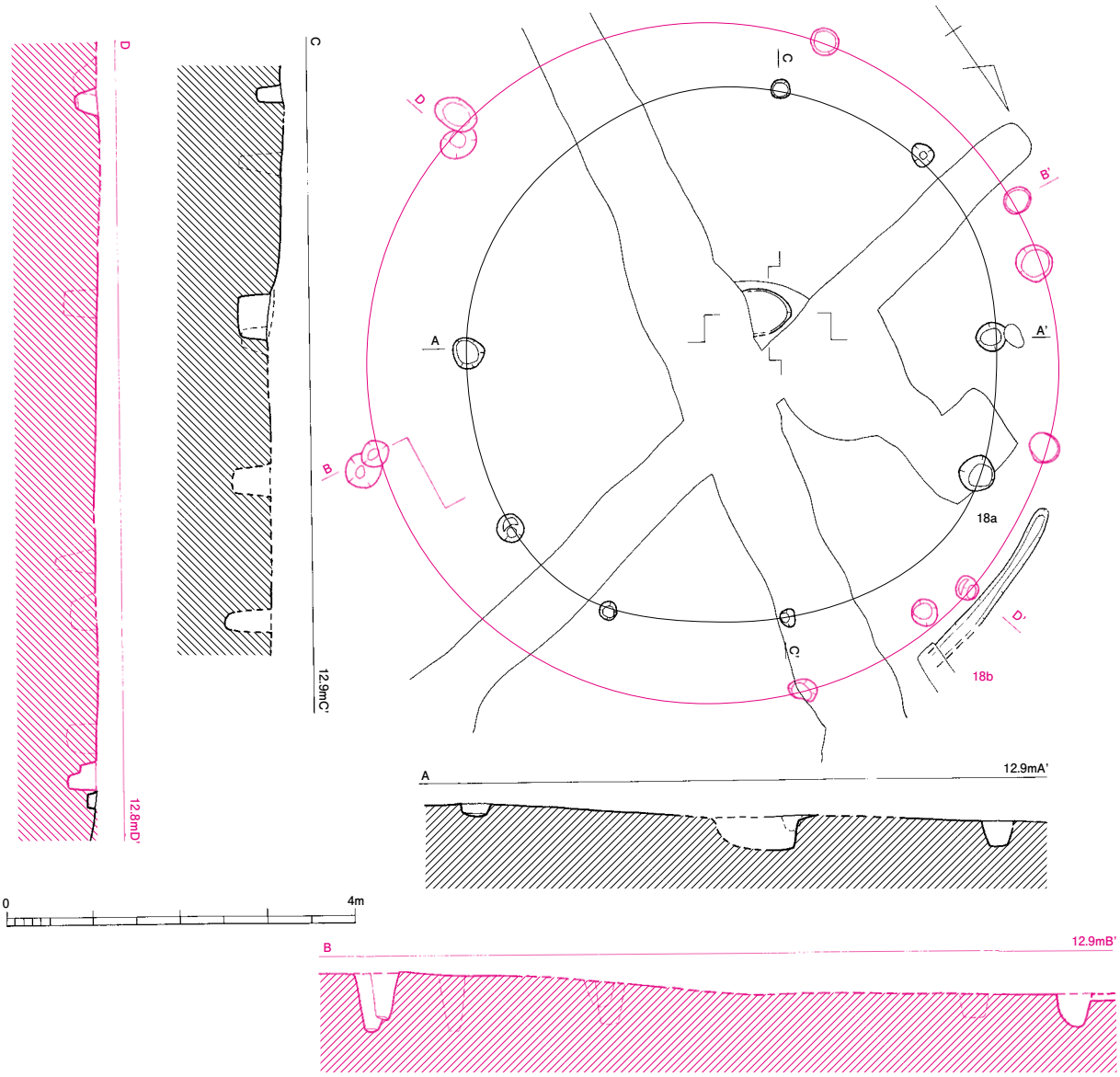
沸使用されている。甕の底部か、壺の転用の可能性もある。器面の残りが悪く、カクセン石を多く含む胎土でざらつく。底部完存で積み上げ方法不明。

18号竪穴住居跡（図版７、第26図）

１区中央部西側に位置する円形住居である。中央土坑と見られる大型ピットと周溝の一部から円形に並ぶ柱穴が多数あるなかで、円形に並ぶ柱穴配置から復元したもので、壁や中央炉がなく、柱穴が浅く、径が大きいことから確実性に欠ける。a･b号２基の住居を想定したが同一住居を建替えだろう。中央土坑はa号に属するもので。ｂ号に属するものは撹乱で失われている。中央２本柱穴を有している可能性もあるが、撹乱のため不明である。出土遺物がなく時期は特定できない。

19号竪穴住居跡（図版７、第25図）

１区中央西側に位置する円形住居である。中央炉跡と柱穴配置から復元した。柱穴が少ないので確実性に欠ける。炉跡が14号竪穴住居跡の柱穴に切られ、北半分が床面まで削平されているため、



第29図　弥生時代前期から中期前葉の竪穴住居跡実測図8　1区18号竪穴住居跡（1/80）

出土遺物がなく、時期を特定できないが、板付ⅡC式併行期の26号貯蔵穴を切るので、中期初頭から前葉の可能性が高い。

20号竪穴住居跡（図版７、第27図）

１区中央部に位置する円形住居である。円形に並ぶ柱穴が多数あるなかで、中央土坑と見られるピットと柱穴配置から復元したもので、壁や中央炉がないため確実性に欠ける。中央土坑上面が撹乱に切られているため、16号竪穴住居跡の中央土坑との切り合い関係がわからない。また、29号竪穴住居跡とも切り合うが先後関係はわからない。出土遺物がないので時期を特定できない。

21号竪穴住居跡（第27図）

１区中央部に位置する円形住居である。柱穴が多数あるなかで、中央２本主柱穴と見られる柱穴と円形に巡る柱穴配置から復元したもので、壁や中央炉がないため確実性に欠ける。また、29号竪穴住居跡とも切り合うが先後関係はわからない。出土遺物がないので時期を特定できない。

23号竪穴住居跡（第30図）

１区北西部２号方形周溝墓内に位置する円形住居である。柱穴が多数あるなかで、規模と円形に並ぶ配置から復元したもので、壁や中央炉、中央２本主柱穴がないため確実性に欠ける。81号土坑との切り合い関係は不明で出土遺物がないため時期を特定できない。

24号竪穴住居跡（第30図）

１区北西部の３号方形周溝墓東に位置する円形住居である。中央土坑と見られる大型ピットと柱穴が多数あるなかで、円形に並ぶ配置からa･b号２基の竪穴住居跡を復元したもので、壁や中央炉がないため確実性に欠ける。中央土坑と中央２本柱と推定しているものは24a号にしかなく、建替えと見られるが屋内構造が変わっていることと、24b号の柱穴が小さいことから確実性が弱い。出土遺物がないが、24a号が41号貯蔵穴を切り、24b号が50号竪穴住居跡を切る。

29号竪穴住居跡（第31図）

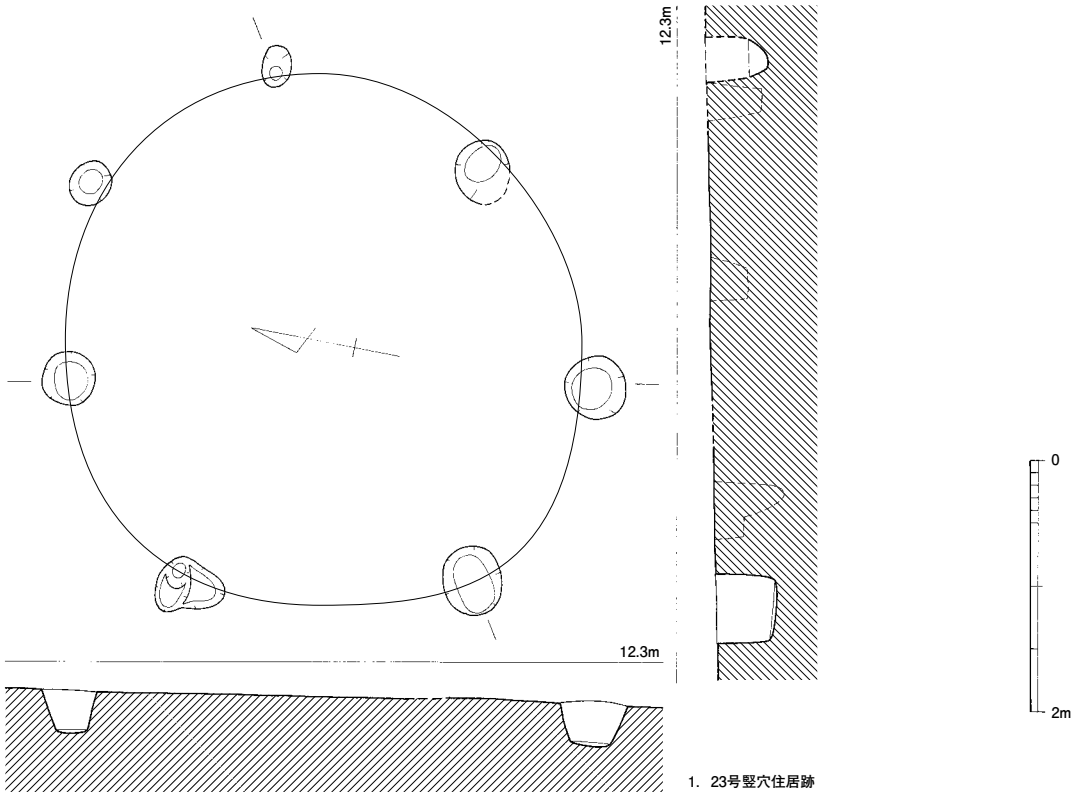
１区中央部に位置する円形住居である。中央２本主柱穴と見られる大型ピットと、柱穴が多数あるなかで円形に並ぶ配置から復元したもので、壁や中央炉がないため確実性に欠ける。20･21号竪穴住居跡とは切り合う関係にあるが、先後関係はわからない。出土遺物からは時期を特定できない。

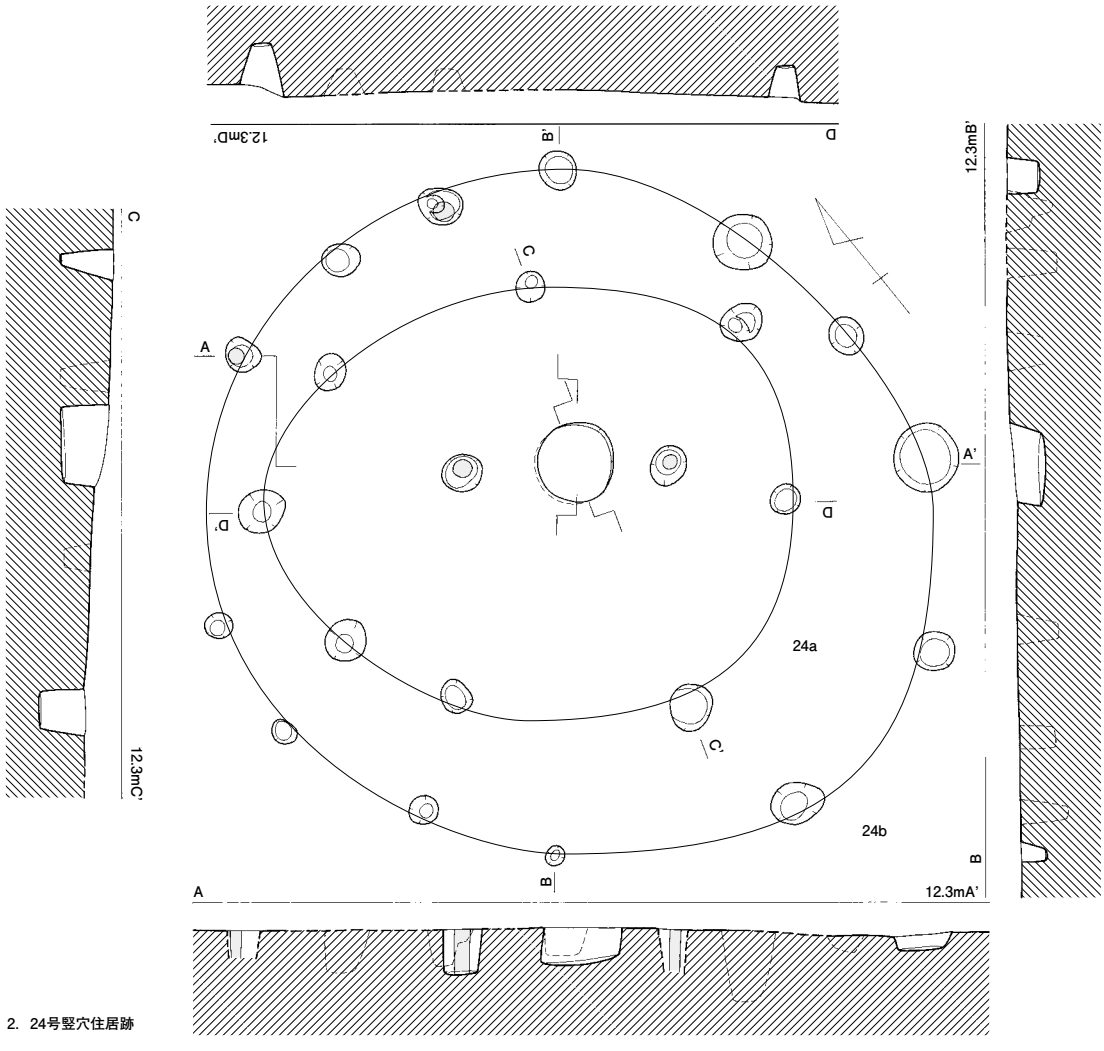
出土遺物（第36図）

12･13は中央土坑から出土したもので、12は壺の底部で、内面は器面剥落。外面はミガキ。内外黄灰色で変色なし。13は甕の底部で、器面の残りがよく、外面は目の粗いタテハケ、内面ナデ。外面はにぶい黄灰色で、赤変している。内面は黄灰色で変色ないので煮沸使用の頻度が少なかっただろう。底部完存で積み上げ方法不明。

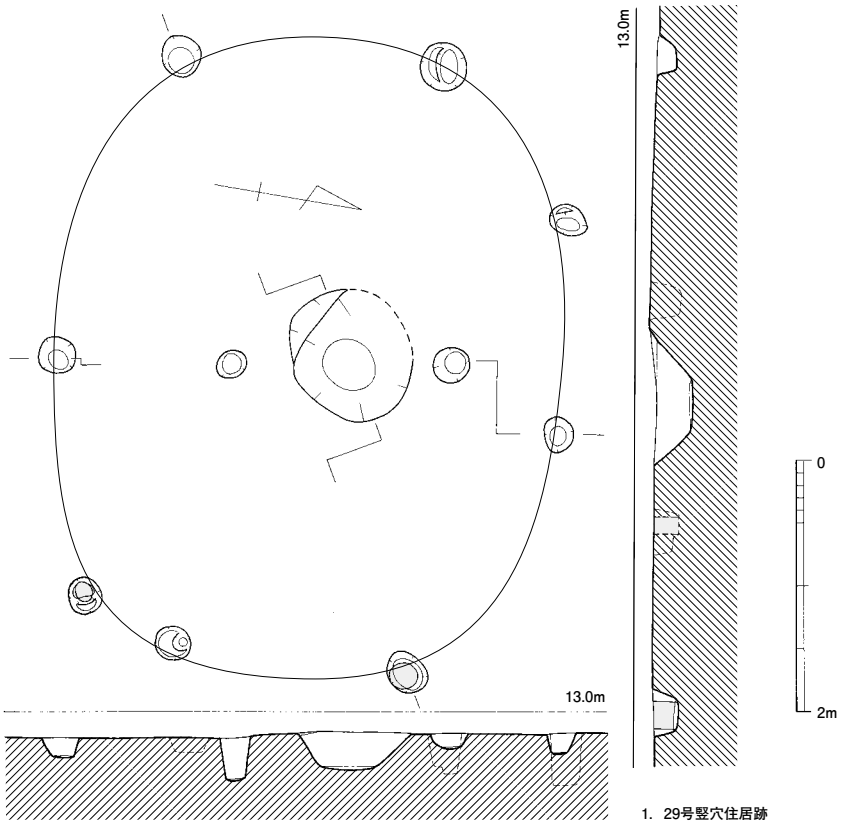
30号竪穴住居跡（第31図）

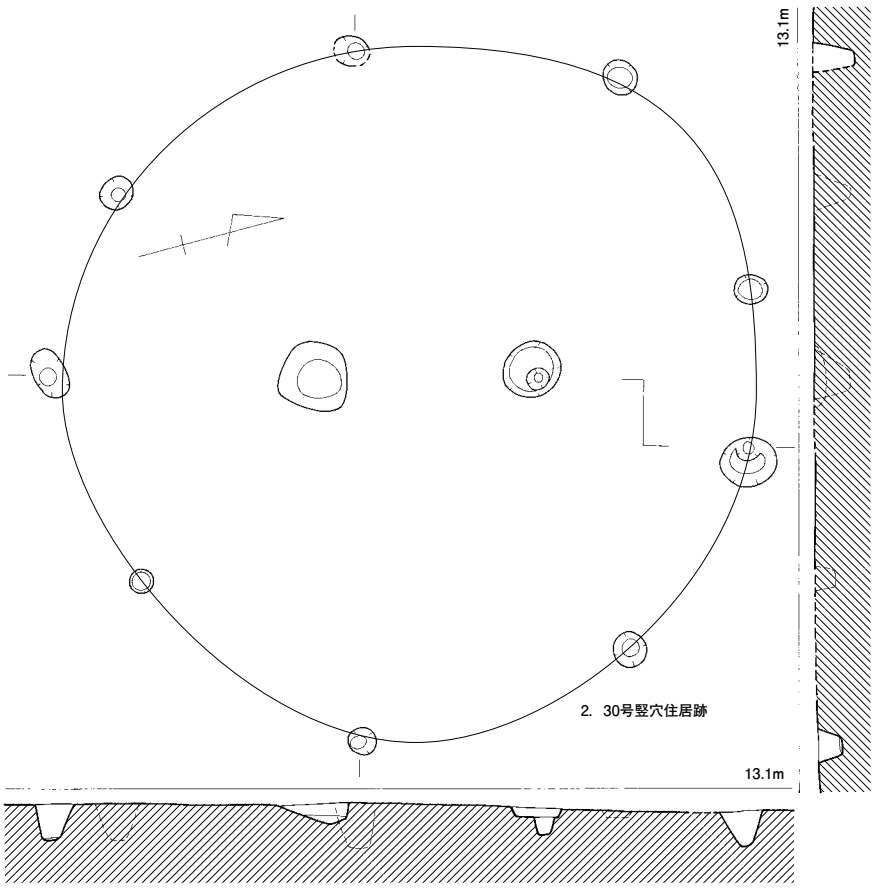
１区南西部南端に位置する円形住居である。中央２本主柱穴と見られる大型ピットと、柱穴が多





第30図　弥生時代前期から中期前葉の竪穴住居跡実測図9　1区23･24号竪穴住居跡（1/60）





第31図　弥生時代前期から中期前葉の竪穴住居跡実測図10　1区29･30号竪穴住居跡（1/60）

数あるなかで円形に並ぶ配置から復元したもので、壁や中央炉がなく、浅い柱穴もあるため確実性に欠ける。切り合う遺構は中世のもので、出土遺物から中期前葉であろう。

出土遺物（第36図）

14は柱１出土の肥厚口縁甕で、器面摩滅で調整不明。外面は赤色顔料が塗布されている。内面暗黄灰色で変色がないので煮沸使用されていない可能性がある。26号貯蔵穴出土片に同一個体あり。小片なので、本来は26号貯蔵穴の時期のものだろう。15･16中央主柱穴から出土している。15は壺の底部で、外面はタテハケ、内面はナデ。内外橙褐色で変色はない。外底には黒斑がある。底部完存で積み上げ方法不明。16は甕の底部で、上げ底で器面の残りが悪く調整不明。内底は黄灰色だが器面が剥離した可能性が高い。外面橙褐色で、赤変しており、煮沸使用されている。底部は積み上げ方法は不明瞭。

このほか打製石斧（第146図29）が出土している。

31号竪穴住居跡（第32図）

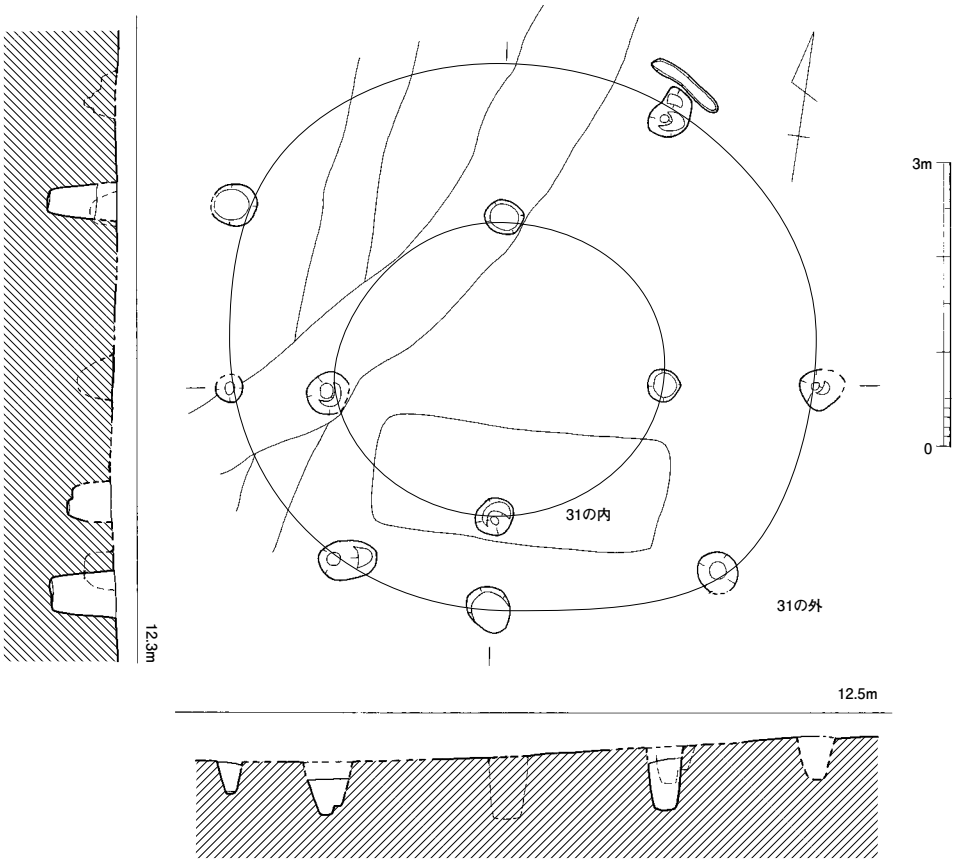
１区中央部北側に位置する円形住居である。25～27号掘立柱建物跡と切り合うが、先後関係はわからない。柱穴が多数あるなかで円形に並ぶ配置から復元したもので、周溝の一部と見られるもの以外に壁や中央炉がないため確実性に欠ける。中央に深い４本柱がめぐり、その外側に柱穴列が巡る柱穴配置を想定した。出土遺物がないので時期を特定できない。

35号竪穴住居跡（第33図）

１区中央部北側に位置する円形住居である。柱穴が多数あるなかで円形に並ぶ配置から復元したもので、周溝の一部と見られるもの以外に壁や中央炉がないため確実性に欠けるが、柱穴規模が他のピットよりも大きいことから可能性は高い。出土遺物から板付ⅡＢ～ⅡＣ式併行期であろう。

出土遺物（第36図）

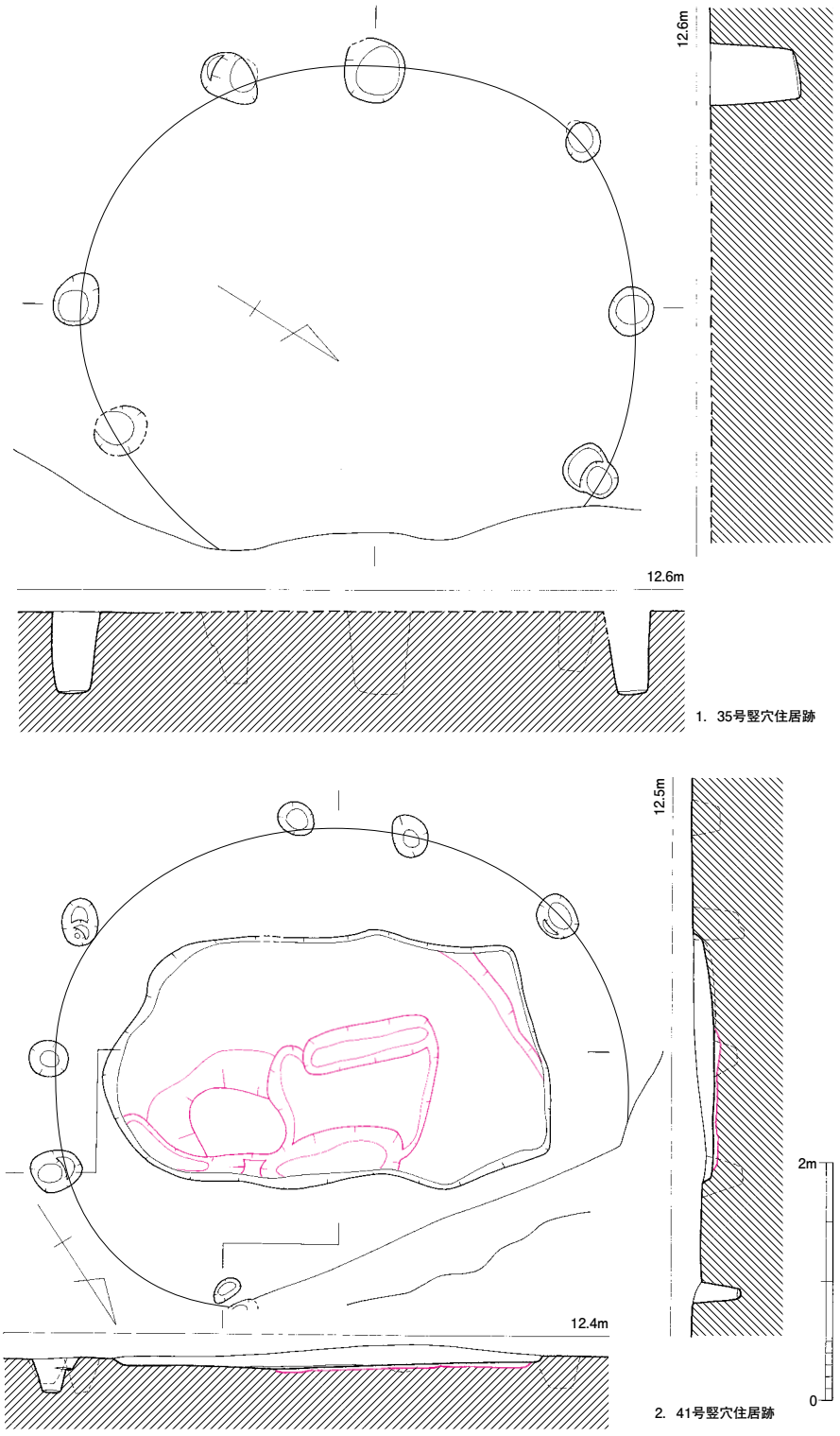
柱１から出土し



第32図　弥生時代前期から中期前葉の竪穴住居跡実測図11
1区31号竪穴住居跡（1/80）

たもので、17は広口壺で、口縁部と頸部は図上接合である。器壁が口縁部と頸部が同じなので内面の肥厚はない。内外ナデで、内外黄橙色で、頸部に変色があるが、原因を特定できない。18は甕の底部で、器面内外摩滅で調整不明。外面赤橙褐色で赤変しており、内面暗灰褐色に変色しているので煮沸使用されている。積み上げ痕は明瞭。

36号竪穴住居跡（第33図）



第33図　弥生時代前期から中期前葉の竪穴住居跡実測図12　1区35･41号竪穴住居跡（1/60）

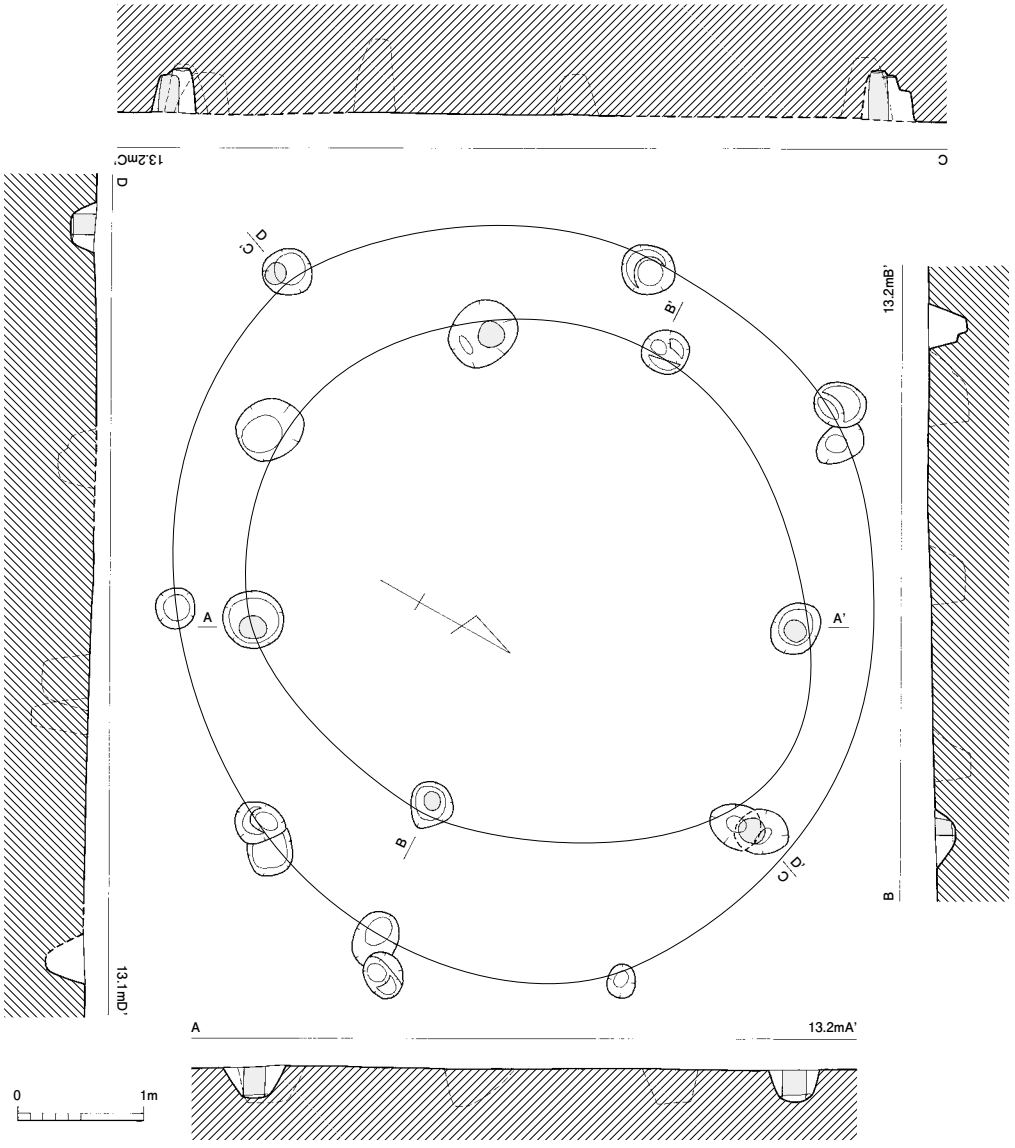
1区中央部北側に位置する円形住居である。柱穴が多数あるなかで円形に並ぶ配置から復元したもので、周溝の一部と見られるもの以外に壁や中央炉がないため確実性に欠ける。中央に深い4本柱がめぐり、その外側に柱穴列が巡るものを想定した。

41号竪穴住居跡（図版7、第33図）

1区北西部に位置する隅円方形住居である。大型土坑の上面が大きく削平されたものと見ることもできるが、貼床と見られるものがあったことから、住居としての根拠には欠けるものの竪穴住居跡とした。小判形竪穴住居跡のように壁沿いに小ピットが巡ることがないので、竪穴部のまわりの柱穴を付随するものとした想定したが、北側の柱穴が浅いので伴わない可能性もある。出土遺物から中期前葉である。

出土遺物（第40図）

1は小型の如意形口縁甕で、器面摩滅で調整不明。頸部外面の剥落が著しく、沈線の有無も確認できない。外面は全体に赤化しており、内面は淡灰褐色なので煮沸使用されている。2は如意形口縁甕で、底部は器面の状況から同一個体といえる。器面摩滅だが、外面にハケの痕跡はなくナデだろう。内面はミガキの痕跡なのでナデのみだろう。頸部の2条沈線は同時に施されている。外面橙褐色で、内面暗橙茶褐色で煮沸使用されていない可能性がある。3は2の底部になる可能性が高い。外面が全体に赤化しているが、外底が黒灰褐色なので甕の底部である。内面は黄橙色で変色がないが器面が剥落しているため胎の色調が露出したものと見られる。内外器面摩



第34図　弥生時代前期から中期前葉の竪穴住居跡実測図13
1区36・47号竪穴住居跡（1/60）

滅で調整不明。

47号竪穴住居跡（第34図）

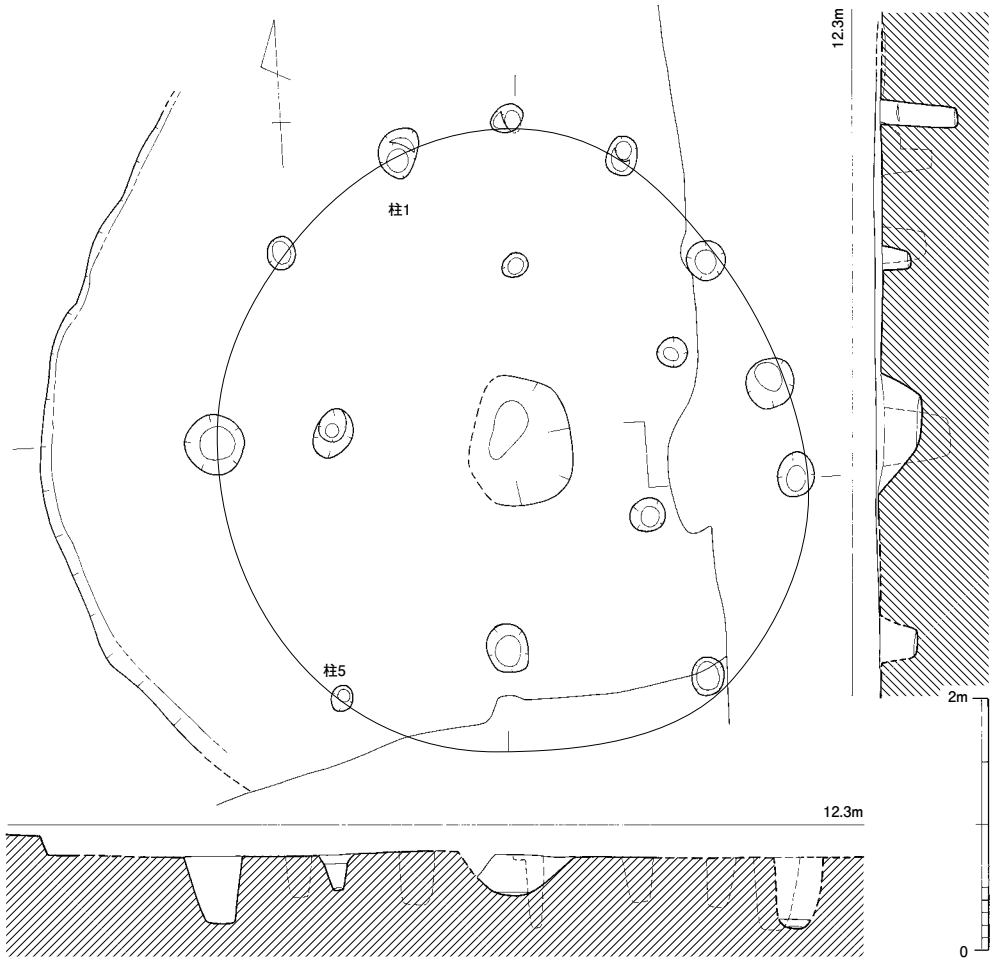
１区中央部北側に位置する円形住居である。柱穴が多数あるなかで円形に並ぶ配置から復元したもので、壁や中央炉がないため確実性に欠ける。36号竪穴住居跡の外縁に位置するので建替えの可能性が高い。出土遺物がないので時期を特定できない。

50号竪穴住居跡（第35図）

１区中央部に位置する円形住居で、円形プランの一部と中央土坑から、円形に巡る柱配置を復元した。壁沿いに小ピットが集中していたが、全周していないので伴わないものとした。内側に小さく巡る柱穴とともに１つの竪穴住居跡を構成するものとした。検出された壁から径7.4mほどの規模を測る。出土遺物から中期初頭である。

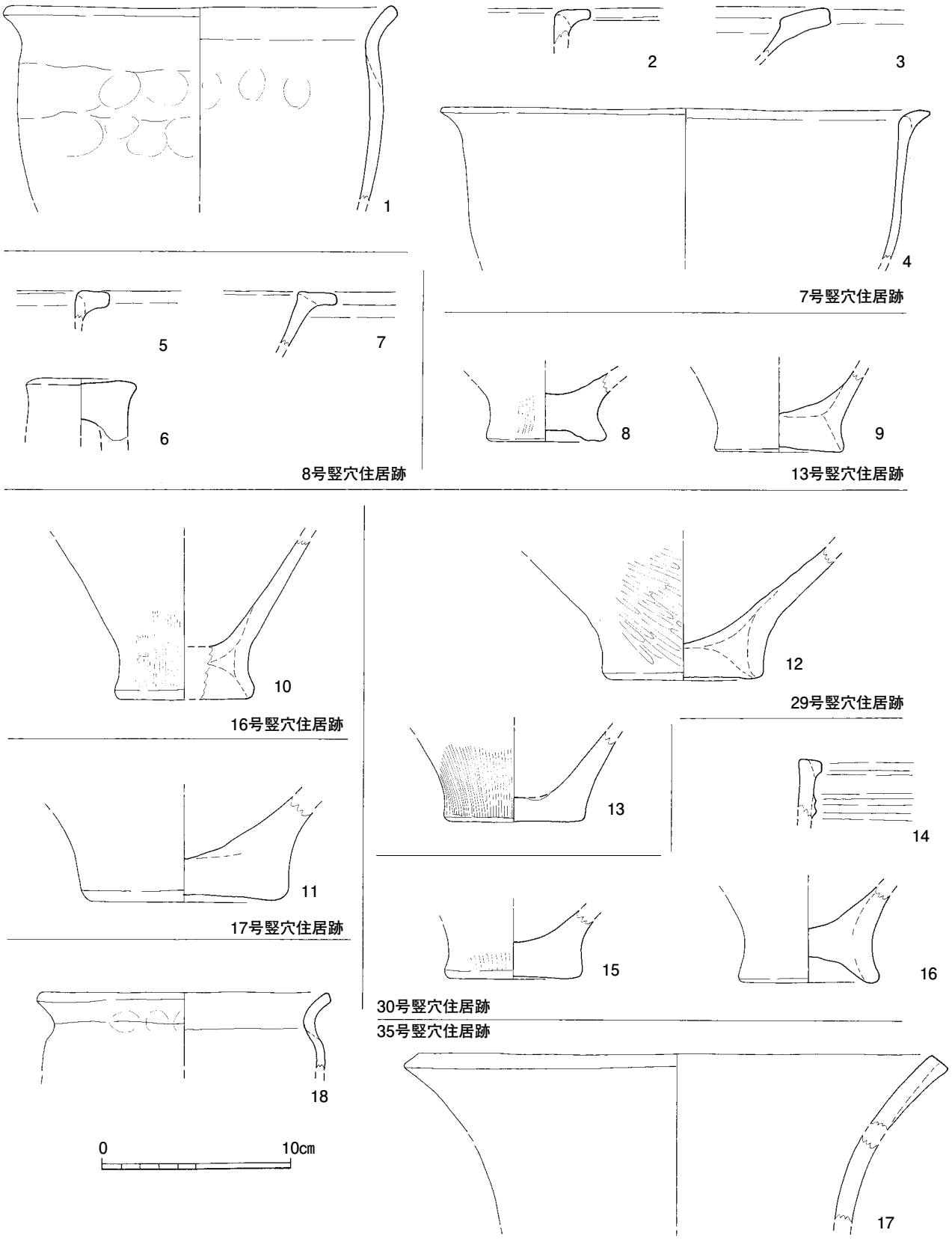
出土遺物（第40図）

４は壺の底部で、外面タテハケ、内面ナデ。外面に黄橙色で変色がなく、内面は橙褐色で焼成不良でないので広口壺であろう。底部完存で積み上げ方法不明。５は柱５出土の逆L字口縁甕で、内外面器面剥落で調整不明。内外面暗赤橙灰色で赤変しているので、煮沸使用されている。６は柱１出土で逆L字口縁甕で、内外面器面剥落で調整不明。内外面暗橙褐色で変色がないので、煮沸使用されていない



第35図　弥生時代前期から中期前葉の竪穴住居跡実測図14　50号竪穴住居跡（1/60）

可能性がある。7は甕の底部で、内外面器面剥落で調整不明。内面は暗灰色で、外面が赤橙色に赤変しているので煮沸使用されている。底部完存で積み上げ方法不明。



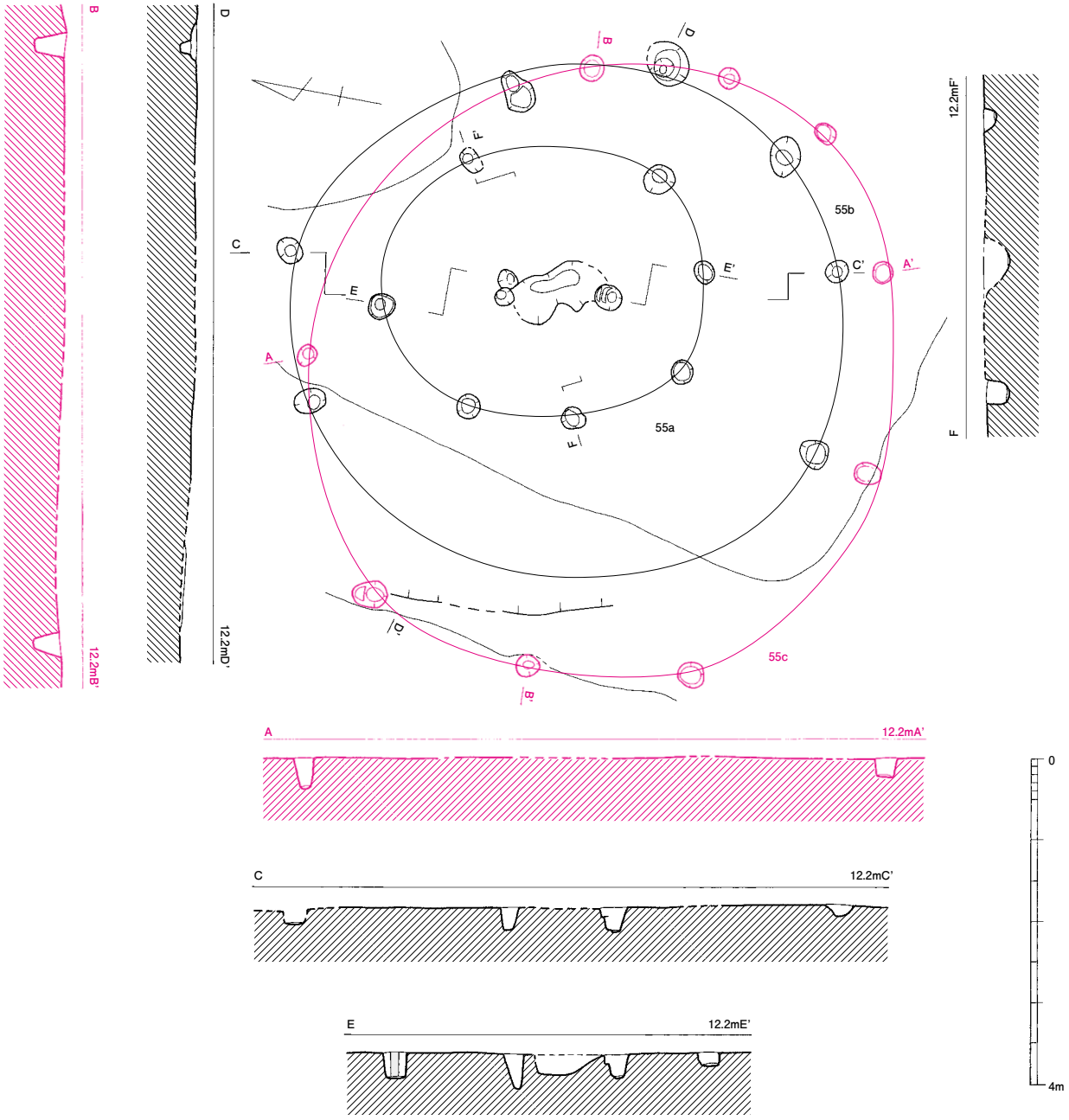
第36図　弥生時代前期から中期前葉の竪穴住居跡出土土器実測図1
7・8・13・16・17・29・30・35号竪穴住居跡（1/3）

55号竪穴住居跡（第37図）

１区中央部に位置する円形住居で、３号方形周溝墓の壁面に残っていた円形プランの一部と中央土坑から、円形に巡る柱配置を３基復元した。a･b号には中央土坑には長軸線上の端に２本主柱穴がある。ｃ号は中心がややずれたもので、中央土坑が92号土坑に切られて失われている可能性がある。出土遺物から板付ⅡＢ式併行期である。

出土遺物（第40図）

８～11は中央土坑出土で、８は広口壺で、器面の残りはよく、内外ナデ。内外黄橙色で変色なし。９は如意形口縁甕で、器壁は薄い。外面タテハケがかろうじて残るが、内面は不明。内面と頸部は橙褐色で変色ないが、外面口縁部と下位は暗黒褐色に変色しているので煮沸使用されている。10は逆L字口縁甕で、外面は丁寧なタテハケ、内面ナデ。内外面暗灰褐色で変色がないので、煮沸



第37図　弥生時代前期から中期前葉の竪穴住居跡実測図15
1区55号竪穴住居跡（1/80）

使用されていない可能性がある。11は外面底部縁が赤変しているので甕の底部であろう。器面の残りが悪く、調整不明。外面は橙褐色で、内面は暗灰褐色。

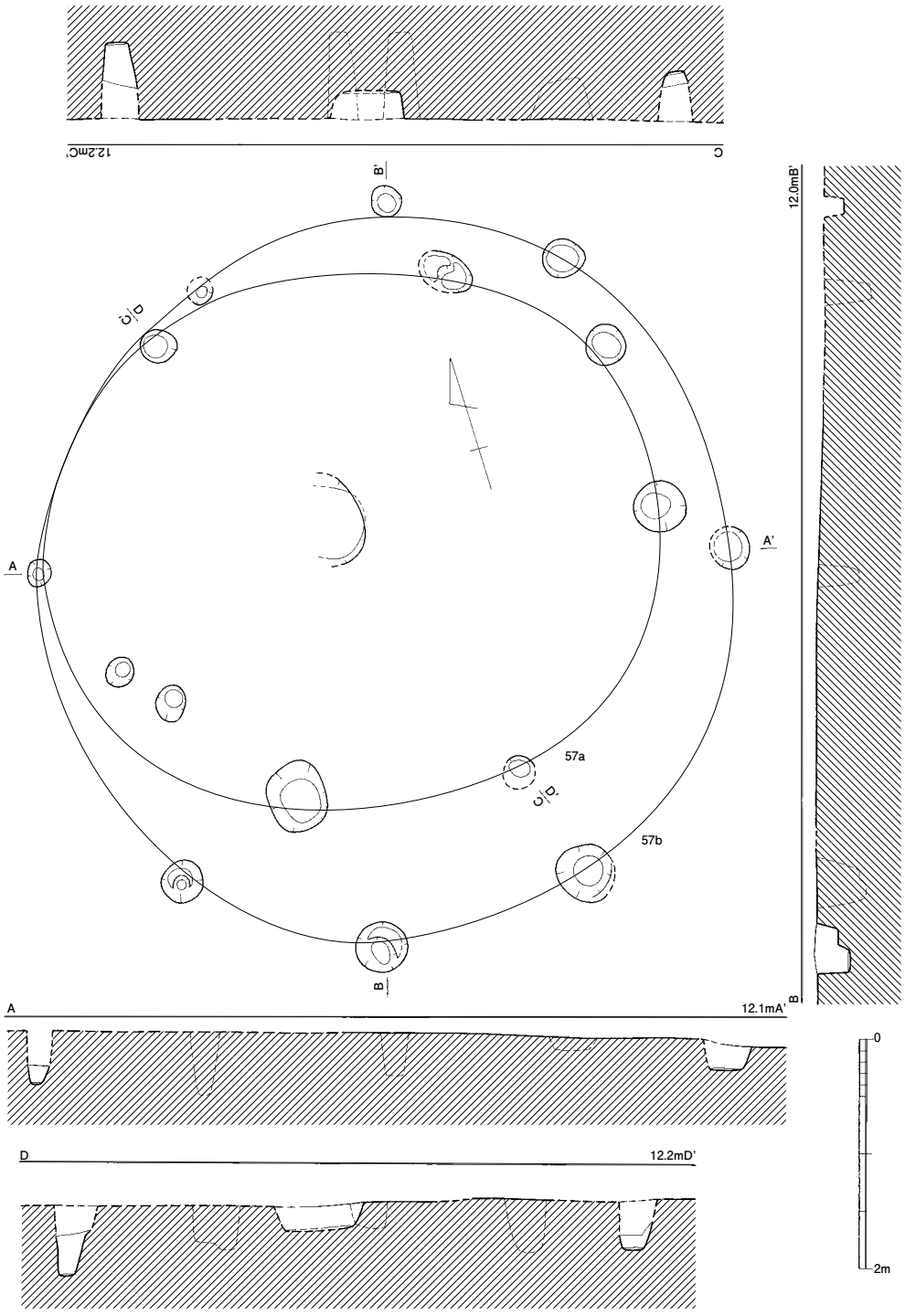
57号竪穴住居跡（第38図）

１区北西部に位置する円形住居で、中央土坑と見られる大型ピットと、円形に巡る柱配置をa･b号２基に復元した。同じ住居の建替えと見られ、ｂ号は中央土坑を持たない。36号溝・82号土坑と切り合うため発見できなかった柱穴もあったと思われ、切り合いはわからない。出土遺物から板付ⅡＣ式併行期である。

出土遺物

（第40図）

12･14は中央土坑出土、12は広口壺の頸部で、幅が広い沈線が少なくとも３条入る。沈線部分には赤色顔料が見られるが、その上はにぶい黄灰褐色のミガキの残る器面が残っているが顔料が見られない。内面は器面剥落で本来の色調がわからない。13は柱１出土でミニチュアの甕であろう。内外変色なし。器面残っており突帯に刻み目なし。14は外面が赤変しているので甕の底部である。器面内外剥落で調整不明。

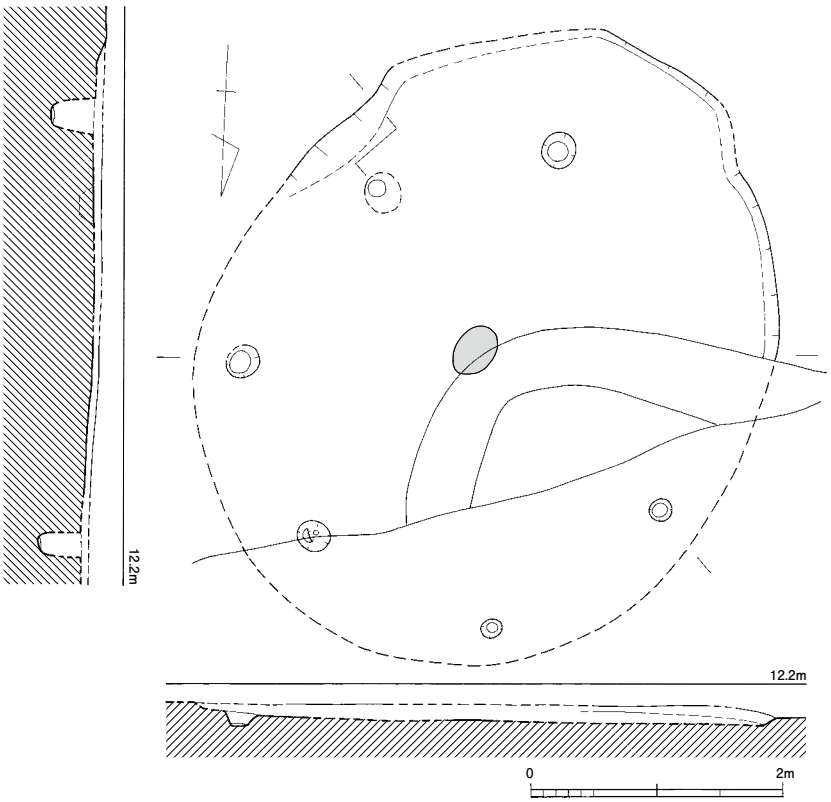


第38図　弥生時代前期から中期前葉の竪穴住居跡実測図16
1区57号竪穴住居跡（1/60）

外面橙褐色、内面暗黒灰褐色を呈する。

58号竪穴住居跡（第39図）

１区中央部西側に位置する円形住居で、円形プランの一部と焼土から、円形に巡る柱配置を復元した。焼土は炉跡としたが、掘り込みはない。多くの遺構と切り合うため発見できなかった柱穴もあったと思われ、35号貯蔵穴を切る以外は切り合いがわからない。出土遺物から板付ⅡＢ式併行期である。



第39図　弥生時代前期から中期前葉の竪穴住居跡実測図17
1区58号竪穴住居跡（1/60）

出土遺物（第40図）

埋土出土で、15は甕の頸部で、頸部の沈線は浅く広い。２条あるが途中で収束しているので、本来１条で交差する部分だろう。器面の残りが悪いがタテハケがわずかに残る。内面はヨコハケをナデ消し。内外黄橙色で、外面はにぶい黄灰褐色に変色しているので、煮沸使用の有無はわからない。16は外面底部の縁が赤変しているので甕の底部であろう。器面の残りが悪く、調整不明。外面は黄橙色で、内面は暗黒灰褐色。

（２）貯蔵穴

貯蔵穴は１区で43基、２区３基の計46基の号数を与えているが、掘り直しも含めると47基となる。調査時は大型の袋状貯蔵穴が先に検出されたため、小型のものは土坑としていたが、調査が進むと大型の貯蔵穴がわずかしかないことがわかり、壁が抉れるものについては整理段階で貯蔵穴とした。

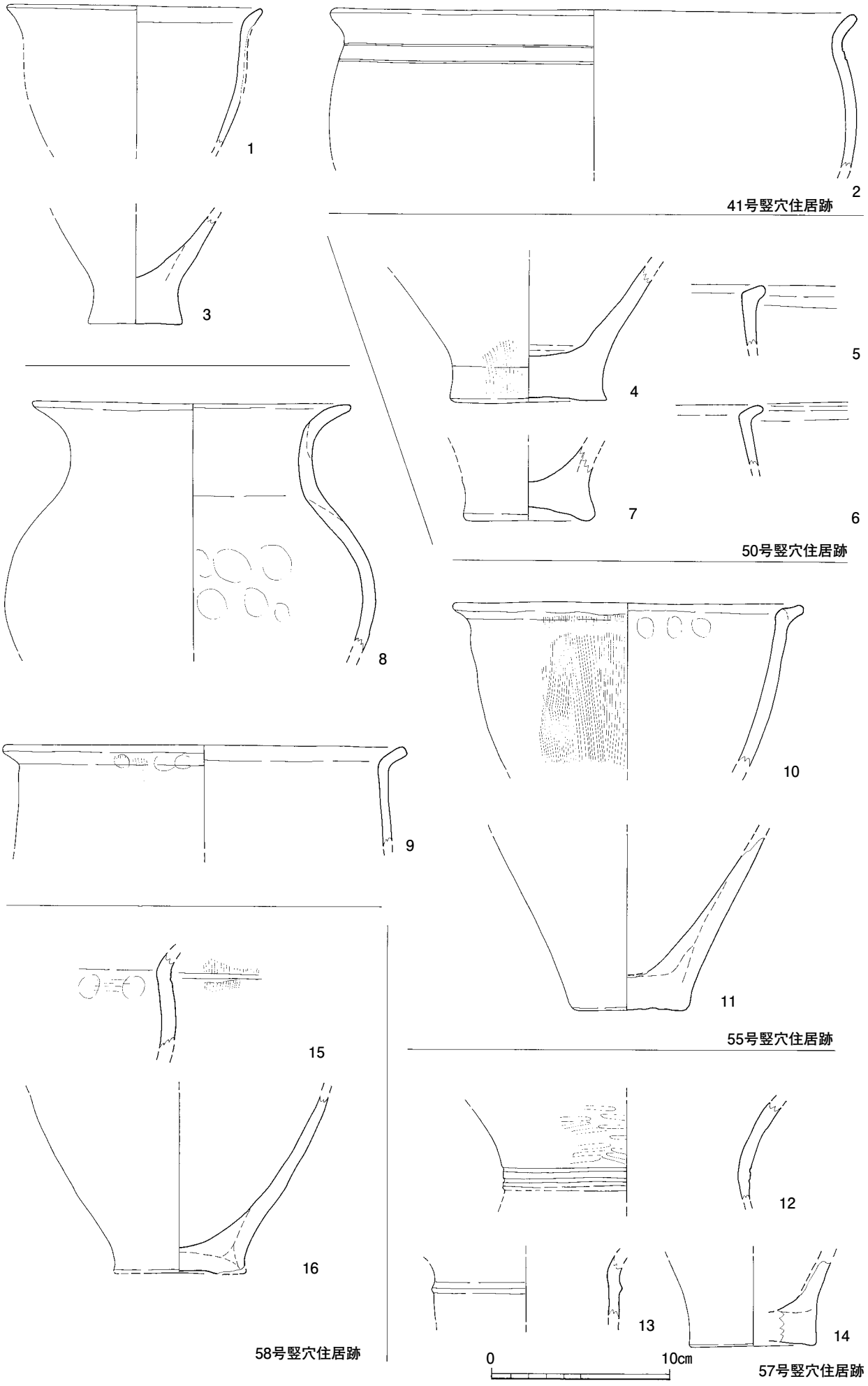
１号貯蔵穴（図版８、第41図）

１区中央部東側に位置し、２号溝に切られている。平面不整形で、壁は西側が抉れて袋状を呈する。床面は凹凸があったが、ピットらしいものはなかった。埋土には基盤層の崩落土がブロック状に入っており、天井部の崩落の後に堆積土が覆っている。出土遺物はなく時期を特定できない。

２号貯蔵穴

（図版８、第41図）

１区中央部東側に位置し、５号溝に切られている。平面不整形で、床面はほぼ平坦で、ピットらしいものはなかった。壁が抉れて袋状を呈しており、壁が直立している部分は崩落している。天井



第40図　弥生時代前期から中期前葉の竪穴住居跡出土土器実測図２
1区41・50・55・57・58号竪穴住居跡（1/3）

部の基盤層の崩落土がほぼ全面に堆積していたため、当初はそれを基盤層と誤認した。出土遺物が少なく時期を特定できない。

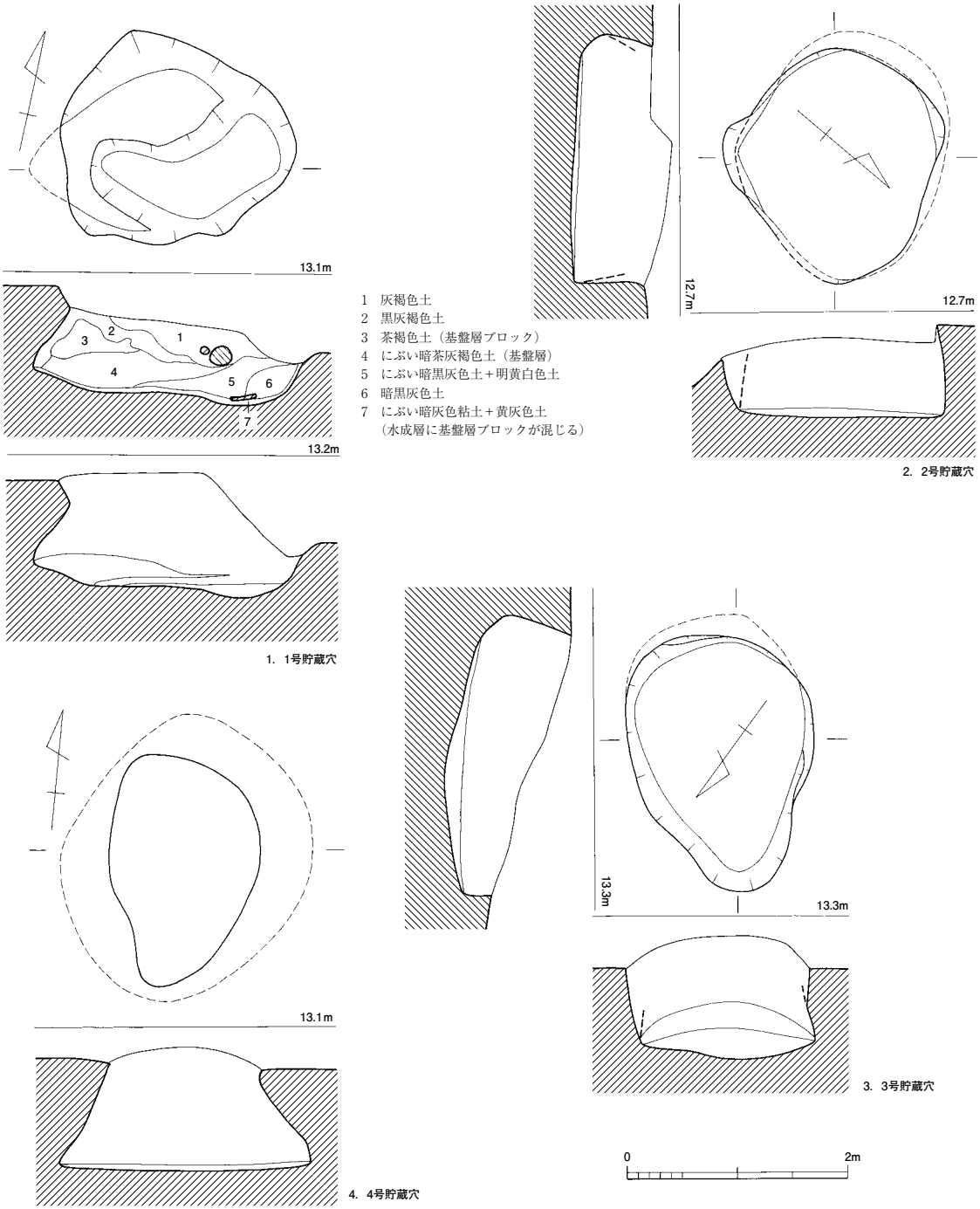
出土遺物（第42図）

１は小形甕の底部で、内面は器面剥落が著しく調整不明、外面は目の細かいタテハケが残る。内面の黄灰色は胎土の色調で、外面は橙褐色で赤変色しているので煮沸使用されている。

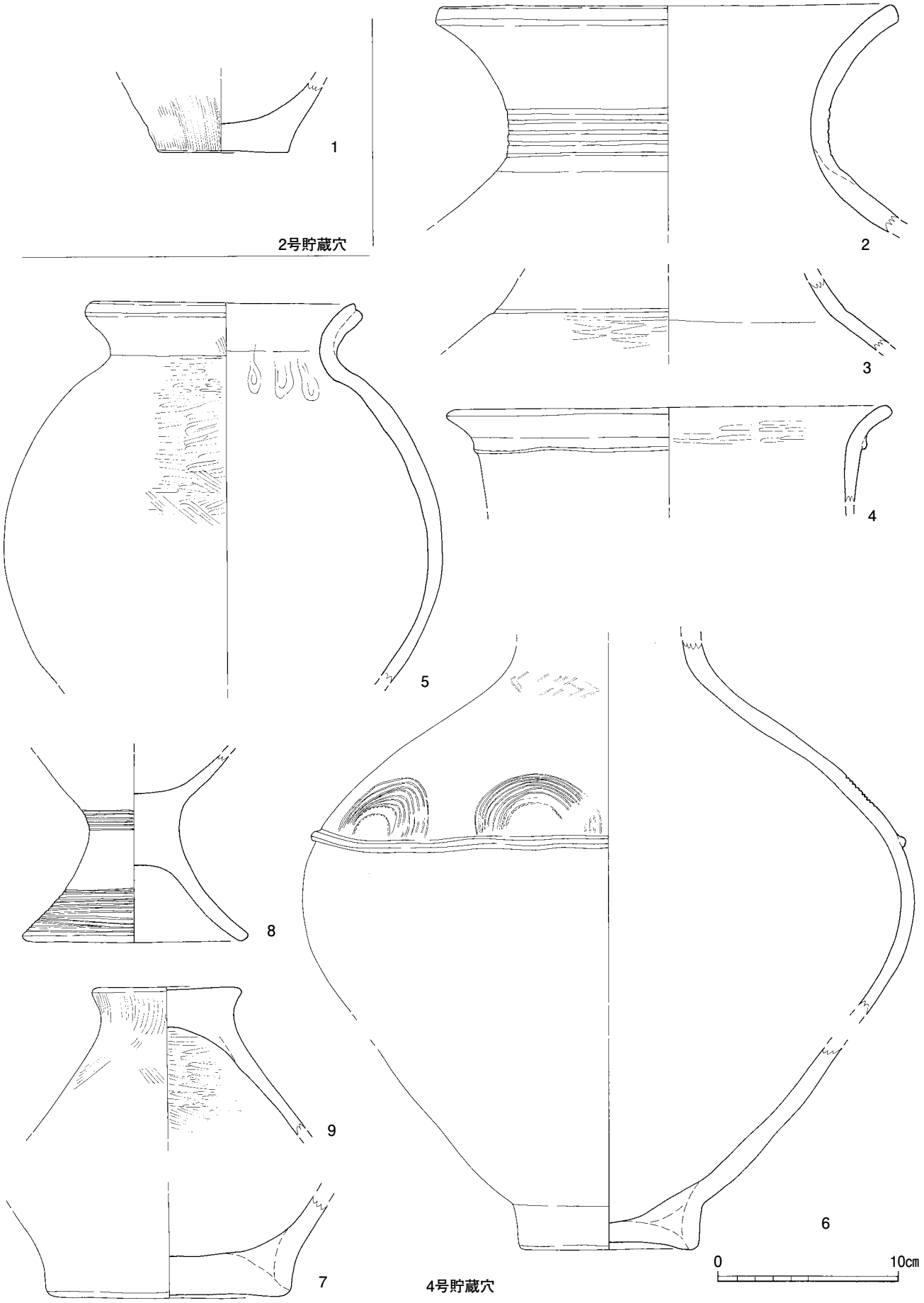
このほか磨製石斧（第147図１）が出土している。

３号貯蔵穴（第41図）

１区中央部に位置し、５号溝に切られている。平面不整形で、壁は大きく崩壊しているらしく直



第41図　貯蔵穴実測図１　1区１～４号貯蔵穴（1/60）



第42図　貯蔵穴出土土器実測図１　1区2･4号貯蔵穴（1/3）

立していた。床面は中央部が窪むのみでピットはなかった。出土遺物はなく時期不明。

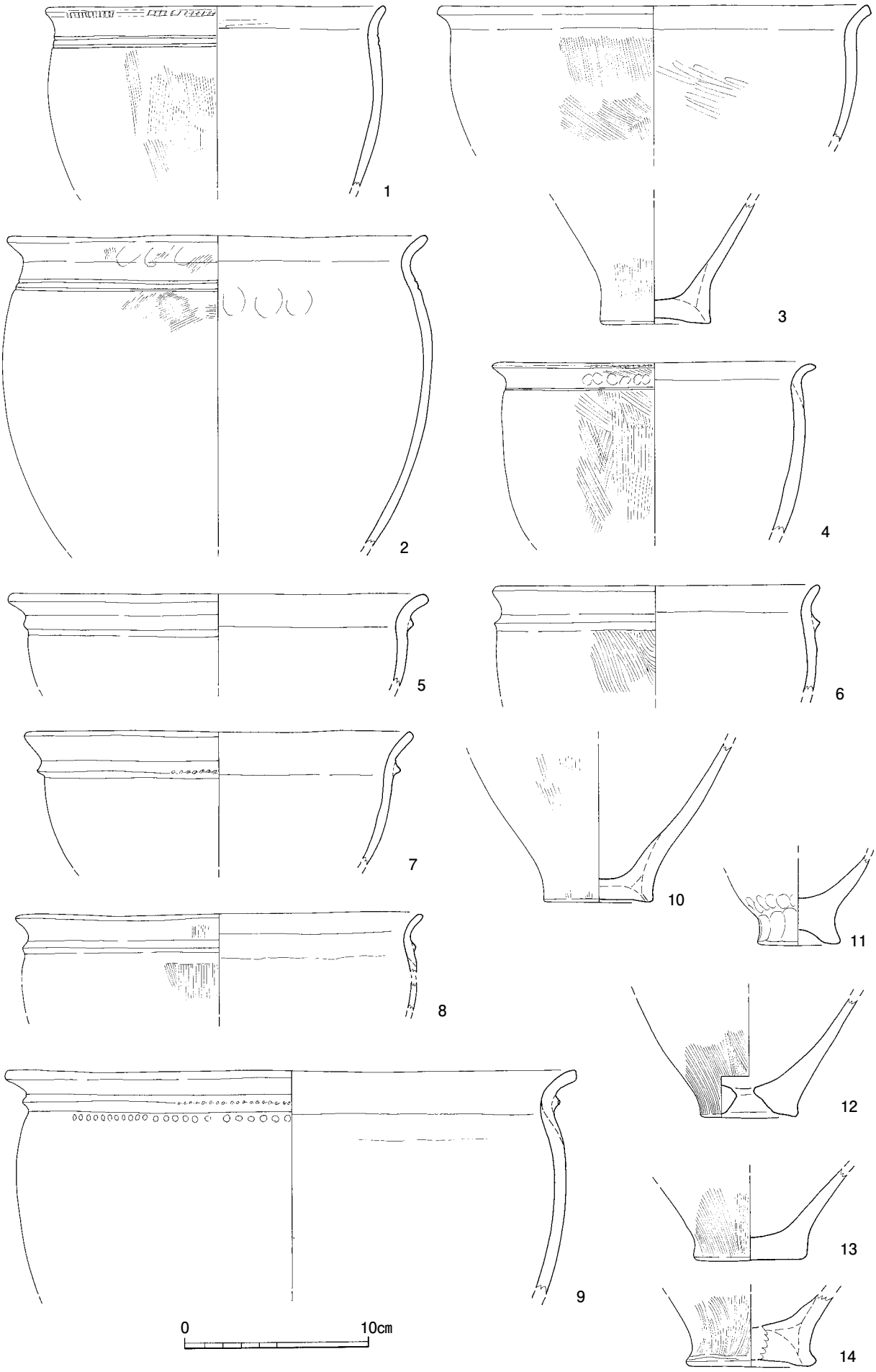
４号貯蔵穴（図版８、第41図）

１区中央部南側に位置し、14号溝に切られている。平面は不整形で、床面はほぼ平坦で、ピットらしいものはなかった。壁が抉れて袋状を呈している。上位に焼土混じりの層があった。出土遺物は中位から下位にかけて面的に出土し、板付ⅡＢ式新段階併行期である。

出土遺物（図版51、第42･43図）

第42図２は下位出土の広口壺の口縁部で、茶褐色を呈する。３は下位出土の広口壺の頸部で、３号溝１層出土片と同一個体である。頸部と肩部の境界は幅が広く深い沈線で、頸部と肩部はこの沈線を境界に段をなす。その下の２条沈線と無軸羽状文は貝殻腹縁刺突による。内外器面摩滅で調整不明。内外黄灰色で、内面頸部以下の黒灰色は焼成不良による。４は有段壺で、口縁部が歪んだ小片のため傾きは不確実。内外明赤橙色で、口縁部が火を受けているので転用の可能性がある。如意形口縁甕で、口唇部と頸部突帯に刻み目なし。内外器面は摩滅しており調整不明。頸部突帯下位の接合部未調整。５は壺で、口縁部は肥厚しており、口唇部はナデで平坦化されている。外面はミガキ、内面はナデ。内外明橙色で変色なし。６は大型壺で、頸部は貝殻腹縁ではなくヘラ状工具の刺突による無軸羽状文が入り、胴部には貝殻腹縁刺突で２重弧文を描いた後、その周囲に同心円状に線刻で弧文を加えている。頸部と胴部の間は無文である。器面摩滅で調整不明。内外はにぶい暗黄橙灰褐色で、外面に部分的に赤変がある。７は中位出土の大型壺の底部で、内外ナデ。内面の黄橙色、外面の黒灰色は黒斑。８は中位出土の高杯で、外面の沈線は押し引きによるもので櫛書きではない。内面ナデ。全体に火を受けており赤橙色を呈する。９は中位出土で、底部の裾が開き、外底に摩耗した痕跡がなく、器壁が薄く、煮沸使用されていないので蓋であろう。外面は目の粗いタテハケ、内面はミガキ。内面はにぶい暗黄灰色で、外面も黄灰から黄橙色で変色が見られないので壺蓋だろう。天井部完存で積み上げ方法不明。

第43図１は如意形口縁甕で、口唇部の刻目は下方から細長く浅く刺突されている。頸部２条沈線は幅が広く浅い。器面が摩滅しているが、外面はタテハケ、内面は口縁部がミガキ、胴部はナデ。外面は口縁部と胴部が灰褐色だが、内面橙褐色で変色がないので、煮沸使用されていない可能性がある。２は大型如意形口縁甕で、口唇部に刻目はない。頸部２条沈線は幅が広く浅い。器面が摩滅しているが、外面はタテハケ、内面はナデ。外面は内外黄橙～赤橙色で変色がないので、煮沸使用されていない。３は中位出土の如意形口縁甕で、口唇部に刻み目なし。外面は目の細かい丁寧なタテハケ、内面はミガキが部分的に残る。底部積み上げ痕は明瞭。底部外面は黒灰褐色に変色しており、赤化もみられる。内面も橙褐色から変色しているので、煮沸使用されている。４は如意形口縁甕で、口唇部の刻目は浅く小さい。内面は摩滅しているが、外面はタテハケが残り、頸部にはオサエが残る。内面はにぶい黄橙灰色で変色がないが、胎土の色調であり、外面頸部が橙褐色で、他は暗灰褐色なので煮沸使用されている。５は如意形口縁甕で、口唇部と突帯が摩滅しているので刻目の有無は不明。外面は残っている範囲ではハケが見られず、内面はナデ。内面と外面頸部が橙褐色から黄橙色で、外面口縁部と肩部は暗灰褐色に変色しているので煮沸使用されている。６は如意形口縁甕で、口唇部と頸部突帯に刻み目なし。外面は目の細かいタテハケ、内面は摩滅で調整不明。突帯下位の胴部との接合部はナデ窪んでいる。内外面赤橙色から橙褐色で、黒灰色は胎土の色調が



第43図　貯蔵穴出土土器実測図２　1区5 ～ 13号貯蔵穴（1/3）

露出している。２次加熱を全体に受けている。７は内外黄橙色で、煮沸による変色がないので鉢だろう。如意形口縁甕で、口唇部に刻み目なし。頸部突帯に小さな浅い刻み目が入るが不明瞭である。内外器面は摩滅しており調整不明。８は甕で、突帯に刻み目はなかった。９は大型如意形口縁甕で、口唇部の刻目は摩滅しているため不明瞭。頸部突帯には小さな浅い刺突が入る。突帯の下には中実円筒による刺突列点文が入る。器面が摩滅しているため内外調整不明。外面は内外黄灰色で変色がないので、煮沸使用されていない。10は中位出土の甕の底部で、器面は摩滅しており調整不明。内面の橙褐色は胎土の色調で、本来の器面の色調はわからないが外面は赤橙色で赤化しているので煮沸使用されている。11は小型甕の底部で器面摩滅しており調整不明。外面は赤橙色で赤化しており、内面はにぶい暗灰褐色に変色しているので煮沸使用されている。底部完存で積み上げ方法不明。12は中位出土の甕の底部で、外面は目の細かい丁寧なタテハケ、内面は器面摩滅しており調整不明。内面の胎土の色調で変色が見られないが、外面は橙褐色で赤化しているので煮沸使用されている。底部に外面から穿孔が見られる。底部完存で積み上げ方法不明。13は中位出土の甕の底部で、外面は目の細かい丁寧なタテハケ、内面は器面摩滅しており調整不明。内面の赤橙色は胎土の色調で、外面も本来の色調の外底はにぶい黄灰色が赤化しているので煮沸使用されている。底部完存で積み上げ方法不明。14は甕の底部で外面はタテハケ、内面は器面摩滅しており調整不明。外面は赤橙褐色で赤化しており、内面はにぶい橙褐色で変色は小さい。

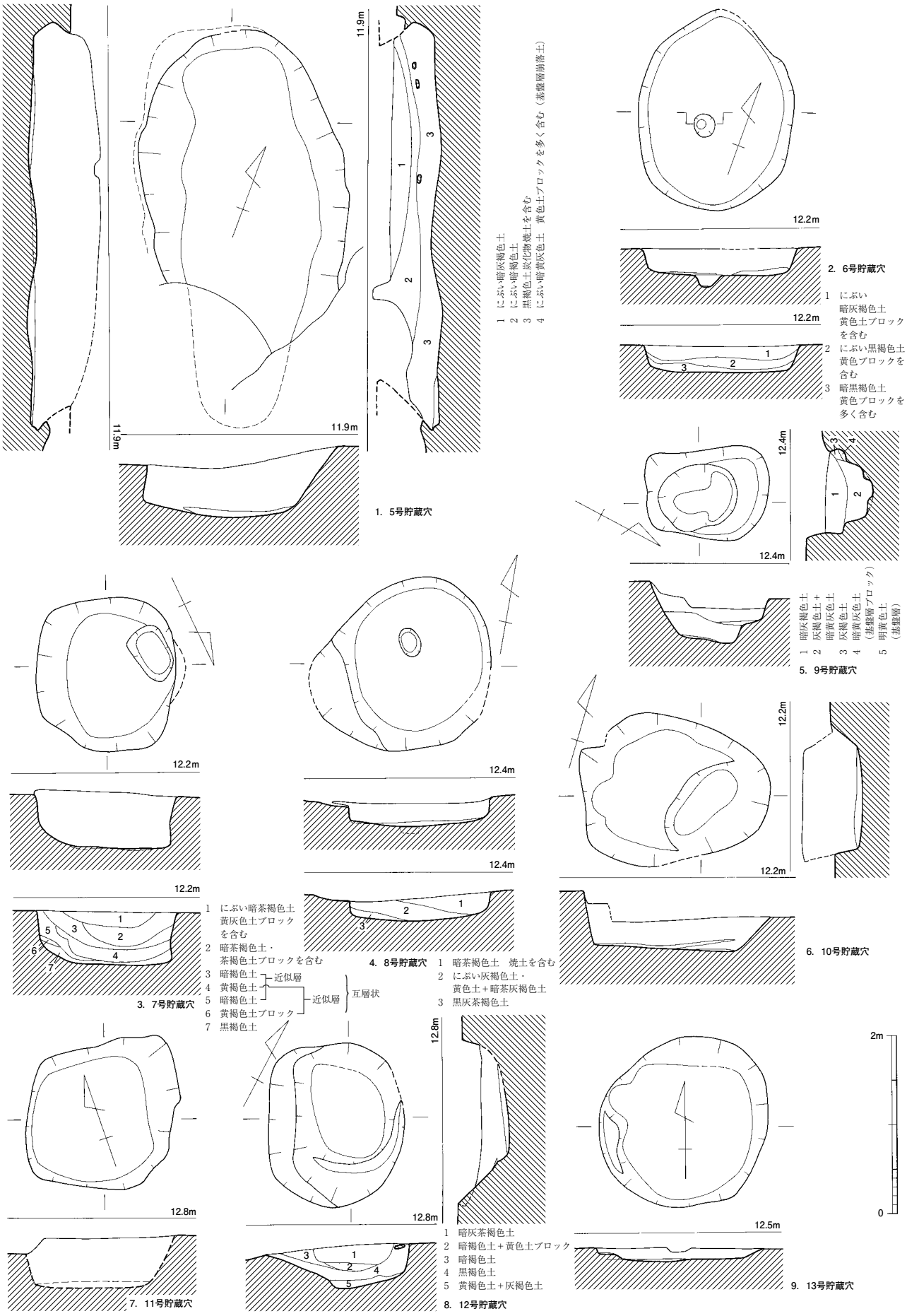
このほか２次加工剥片（第146図12）・磨製石剣（第146図17）・砥石（第147図４）のほか、下位から打製石鏃（第146図６）が出土している。

５号貯蔵穴（図版８、第44図）

１区中央部西側に位置し、28･35号溝に切られている。平面隅円長方形で、床面はほぼ平坦で、ピットらしいものはなかった。壁は崩落下部分が多かったため直立しており、下位は抉られており特に南側の抉れが大きかった。基盤層内の黒色土部分が部分的に見られたが、埋土は貯蔵穴に良く見られる基盤層ブロックと堆積層の互層ではなかったので粘性の違いで判別できた。出土遺物は多く出土しており板付ⅡＣ式併行期である。

出土遺物（第45図）

１は３層出土の大型壺で、肩部は貝殻腹縁刺突による無軸羽状文が入る。器面が摩滅しているが、外面の一部にミガキが残る。積み上げ部で剥離しており粘土積み上げの単位がわかる。内外面は橙褐色で、変色がない。２は広口壺で、口縁部から肩部の図上接合と、同一個体の底部であり、器面は摩滅しており文様の有無は不明。３・４は大型壺で、貝殻腹縁刺突文なので肩部の文様だろう。小片なので傾き・上下不明。器面の残りが良く、内外ミガキで、部分的に黄橙色だが暗黒褐色を呈する。５は大型壺の胴部片で、山形突帯の上に貝殻腹縁刺突による横線が入る。器面摩滅が著しく、外面調整不明。外面は黄橙色で摩滅しているが器面は残っている。内面の黒色は炭素吸着の黒色磨研であろう。６は３層出土の壺の底部で外面は器面摩滅しており内面は調整不明。内外黄橙灰色で、外面に黒斑がある。７は如意形口縁甕で、器壁が摩滅しており調整不明。口縁部は下方から幅の広い刻み目が入り、頸部の突帯には小さな刻み目が入る。内外面黄橙色から黄灰色だが胎の色調が露出しており、煮沸使用の有無については不明。８は如意形口縁甕で、器壁が摩滅しているが剥離していないので、本来器壁が薄い。反転復元できない小片だが、小型品ではない。口縁部は



第44図　貯蔵穴実測図２　1区5 ～ 13号貯蔵穴（1/60）

長い刻み目が狭い間隔で入る。頸部の突帯が小さく、混和材の砂粒が抜けた跡のように見えるが、口縁部と同じ細長い刻み目が入っている部分がある。内外面は器面摩滅で調整不明。外面から内面口縁部までは黄橙色だが、内面の頸部以下は暗黄灰色なので伏せ焼きされた可能性がある。煮沸使用の有無については不明である。９は如意形口縁甕で、器壁が摩滅しており調整は不明である。口縁部は下方から幅の広い刻み目が入っている。頸部の突帯は小さく、刻み目は見られない。外面から内面口縁部までは黄橙色で、煮沸使用の有無については不明。10は如意形口縁甕で、口径に比べて器壁が厚い。外面は目の細かいタテハケ、内面ナデ。外面から内面口縁部までは暗灰茶褐色で、内面は頸部以上が黄橙色、底部以下は暗灰褐色で著しい変色ではないため煮沸使用の有無については不明。11は如意形口縁甕で、口縁部は長い刻み目が狭い間隔で入る。肩部はタテハケ、内面は器面摩滅で調整不明。外面口縁部か内面頸部までは黄橙色だが、それより下は灰褐色に変色しているので煮沸使用されている。12は３層出土の如意形口縁甕で、口唇部は平坦にナデられているが刻み目なし。器面摩滅しているが、外面はタテハケがある。内面は摩滅で調整不明。外面から内面口縁部までは赤橙色で赤変している。内面胴部は黄橙色を基調としているが胎土の色調であり、本来の器面の色調は不明。煮沸使用されているだろう。13は小型の砲弾形の甕で、口縁部下の突帯には刻み目がない。突帯下位の体部との接合部は未調整で隙間が空いている。口唇部に平坦面はなく、器面摩滅で調整は不明。内外黄橙色で変色なし。褐色パミスを多く含む。14は甕の底部で内外面とも器面摩滅が著しく調整不明。外面は黄橙色で赤化しており、内面は黒灰褐色に変色しているので煮沸使用されている。内面に積み上げ部分のひび割れが入る。15は３層出土の甕の底部で器面摩滅しており内面は調整不明。外面は赤橙色で赤化しており、内面はにぶい暗灰褐色に変色しているので煮沸使用されている。積み上げ痕は明瞭。16は３層出土で、外面は赤化しており赤橙色を呈し天井部まで赤化しているので甕蓋であろう。外面は器面摩滅しており内面はナデ。内面の黒赤橙色は使用のための変色と伏せ焼き時の焼成不良の両方の可能性がある。底部完存で積み上げ方法不明。17は外面は赤化し、内面は黒灰褐色に変色しているので煮沸使用されていることから、小型の甕の可能性もあるが甕蓋であろう。内外器面摩滅で調整不明。18は小型脚付壺の脚部であろう。整形が丁寧で器面が均一で沈線を持つことから、脚付きの杯ではない。内外黄橙色で変色なし。体部との接合面で剥離している可能性が高い。

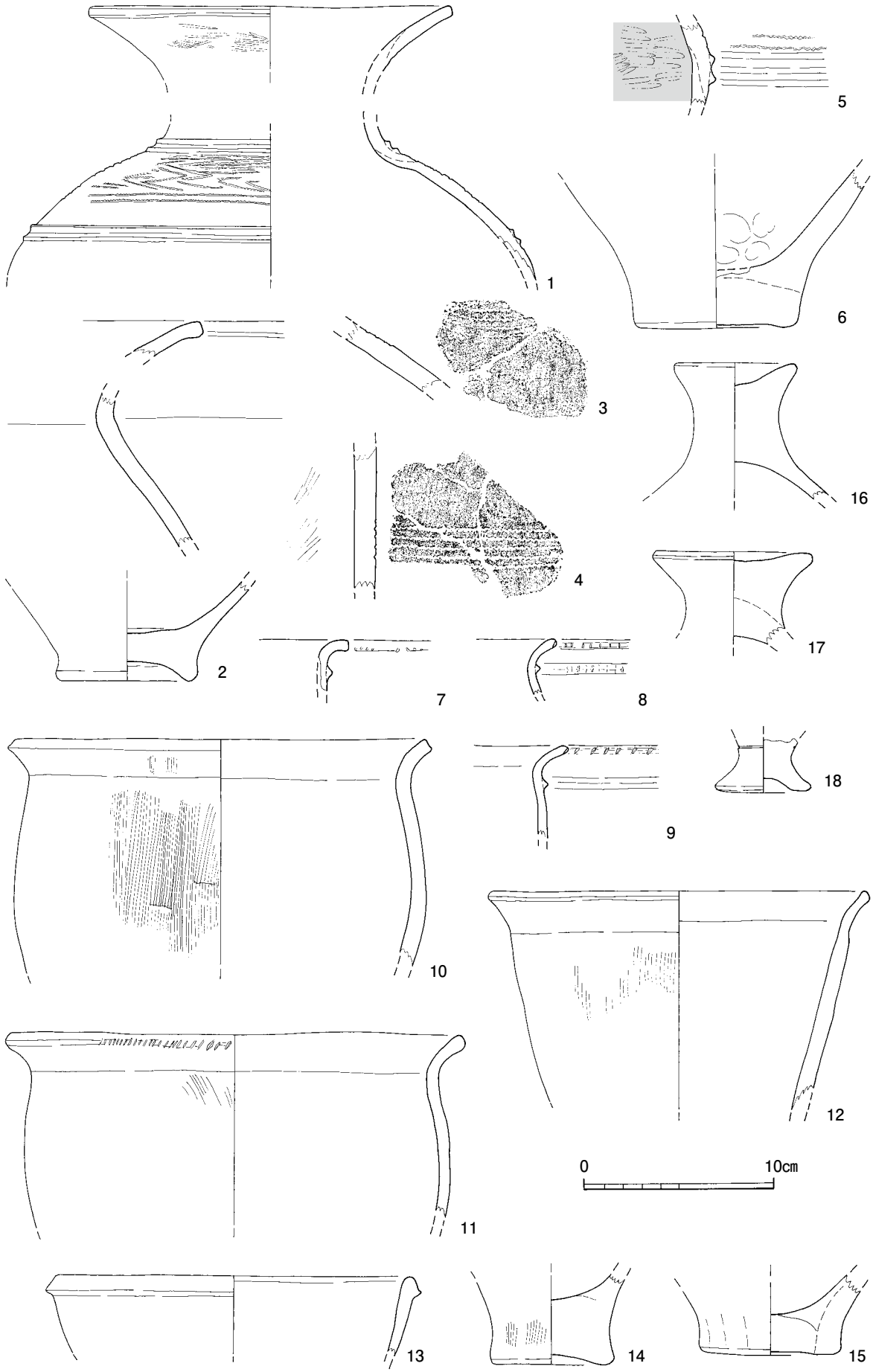
このほか、石庖丁（第146図13）、３層から打製石斧（第146図26）、打製石鏃（第146図２・３）が出土しているが、小型の凹基鏃については弥生時代前期よりも縄文時代後期に属する可能性が高いので、第19図２に掲載した。

６号貯蔵穴（図版８、第44図）

１区中央部西側に位置し、１号方形周溝墓内に位置する。平面楕円形で、床面はほぼ平坦で、中央にピットがあった。壁は崩落下部分が多いため直立しており、壁の抉り込みはなかった。埋土は貯蔵穴に良く見られる基盤層ブロックと包含層の互層ではなく、堆積も水平に近かった。出土遺物が少なく時期を特定できない。

出土遺物（第47図）

１は形態は壺の底部だが、外面橙灰色で赤化しており、内面のにぶい暗黄灰褐色は使用による変色なので、煮沸使用されていることから、大型の甕か鉢であろう。内外面は器面摩滅しており調整



第45図　貯蔵穴出土土器実測図３　1区５号貯蔵穴（1/3）

不明。積み上げ痕は明瞭。

７号貯蔵穴（図版８、第44図）

１区北西側に位置し、２号方形周溝墓北辺に切られる。平面隅円方形で、床面はほぼ平坦で、中央にピットは見られなかった。壁は西側に抉り込みがあり、床には窪みがあった。埋土は基盤層ブロックと包含層の互層が中位以下に見られた。出土遺物から中期初頭であろう。

出土遺物（第47図）

２は甕の底部で、上げ底である。内面は器面摩滅が著しく調整不明。外面は上位タテハケで下位はナデのみか。外面は黄橙色で部分的に赤化しており、内面は淡灰褐色に変色しているので煮沸使用されている。３は小型甕の底部か蓋で、外面はタテハケ。外面は黄灰色を呈するが胎の色調が露出したもので、本来の器面は外底の暗黄灰色であろう。底部完存で積み上げ方法不明。

８号貯蔵穴（図版９、第44図）

１区北西端に位置し、19号貯蔵穴との切り合いは不明確だった。平面楕円形で、床面はほぼ平坦で、中央からややずれた位置でピットが見られたが、残りが悪く浅いことから、別の時期のピットの可能性もある。埋土は中位に基盤層ブロックを斑に含む堆積層があったが、包含層との互層はなかった。出土遺物は図化できる物がなかった。

９号貯蔵穴（図版９、第44図）

１区中央部西端に位置し、５号竪穴住居跡に切られる。小型で平面隅円方形を呈し、床面はほぼ平坦で、壁はほぼ直立していた。床面には窪みがあり、埋土は基盤層ブロックと包含層の互層がなかったので、貯蔵穴とする積極的な根拠はないが、ピットとしては大型で深いことから貯蔵穴とした。出土遺物から板付ⅡＣ式併行期である。

出土遺物（第47図）

４は壺の底部で内面は器面摩滅で調整不明だが、外面はナデ。外底もナデでミガキが部分的に残る。外面暗橙褐色で変色なく、内面の黄橙色は胎土の色調である。５は壺の底部で内面は器面がほとんど失われているがわずかににぶい黄橙色が残る。外面はタテハケがわずかに残り、明橙灰色を呈する。赤化しているようだが、内面に変色が見られないので、外面は胎土の色調であろう。６は甕の底部で、上げ底である。内外面とも器面摩滅が著しく調整不明。外面は黄橙色で部分的に赤化しており、内面は淡灰褐色に変色しているので煮沸使用されている。

10号貯蔵穴（第44図）

１区中央部西端に位置し、４号竪穴住居跡に切られる。小型で平面不整形を呈し、床面はほぼ平坦で、壁はほぼ直立していた。埋土は基盤層ブロックと包含層の互層がなかったので、貯蔵穴とする積極的な根拠はないが、ピットとしては大型で深いことから貯蔵穴とした。出土遺物から板付ⅡＢ式併行期である。

出土遺物（図版51、第47図）

７は、壺の底部だが、外面底部縁が赤化しており、内面はにぶい淡暗灰色で、器面が失われてい

る。鉢か、壺を鉢に転用して煮沸している可能性がある。内外面器面摩滅で調整不明。底部完存で積み上げ方法不明。８は如意形口縁甕で、器面の残りが悪く、外面は摩滅しており、内面はミガキらしい。頸部に突帯がつき、口縁と突帯に刻み目なし。内外黄灰色を呈しており、変色がないので煮沸使用されていない。９は如意形口縁甕で、口縁部がやや内湾し、外面は丸みをもつ。内外器面摩滅で調整不明。口縁部から頸部は黄橙灰色で、それ以下は淡暗灰褐色なので煮沸使用されている。10は如意形口縁甕で、器面の残りが悪く、外面はタテハケしており、内面はナデらしい。頸部の沈線は２条あるが、１条は途中で途切れているようなので、１条沈線が巡って交差した部分の可能性もある。内外にぶい黄灰色を呈しており、変色がないので煮沸使用されていない可能性がある。11は如意形口縁甕で、口縁部と底部は図上接合である。底部の穿孔は外底からで、内底の孔縁は欠損している。器面の残りが良く、外面口縁部はナデ、頸部に短いタテハケが帯状に入り、その下に斜め方向のハケが入る。頸部のタテハケは突帯接合部の調整のようにも見えるが、剥離した痕跡はない。内面ミガキ。口唇部に刻み目なし。内外黄灰色を基調とし、外面と外底の黒灰色は黒斑で、内面は変色がないので煮沸使用されていない。12は甕の底部で、器面摩滅で調整不明。内外にぶい黄灰色で部分的に赤化している。煮沸使用されているが使用頻度は少なかったのだろう。底部完存で積み上げ方法不明。

11号貯蔵穴（図版９、第44図）

１区中央部西側に位置し、13号竪穴住居跡の壁の下から検出しており、18号竪穴住居跡との切り合いはわからない。小型の略方形プランで、床面はほぼ平坦で、壁の傾きは急だが直立や抉り込みはなかった。ピットとしては大型で深いことから貯蔵穴とした。出土遺物からは時期を特定できない。

出土遺物（第47図）

13は如意形口縁甕で、器壁が剥落しているので、器面調整だけでなく外面の刻み目や突帯の有無もわからない。内外暗黄橙褐色で煮沸使用の痕跡は明瞭でない。14は蓋で、内面裾部に伏せ焼き時に焼成不良になった黒灰色部分がある。内外ミガキで、橙褐色を呈する。

このほか大型石庖丁（第146図14）と不明鉄製品（第147図15）が出土している。

12号貯蔵穴（図版９、第44図）

１区中央部西側に位置し、13号竪穴住居跡の壁の下から検出しており、24号土坑に切られている。小型の略方形プランで、壁が緩やかに立ち上がっており根拠に乏しいがピットとしては大型で深いことから貯蔵穴とした。出土遺物からは時期を特定できない。

出土遺物（第47図）

15は肥厚口縁甕で、口唇部に刻み目なし。外器面は摩滅しているが、内面はミガキ。内外橙褐色で、煮沸使用の痕跡はない。16は甕の底部で、外面器面摩滅、内面ナデ。外面は明黄橙色で赤化しており、内面は暗黒灰色に変色しているので、煮沸使用されている。17は外面が赤橙褐色で赤化しており、器壁が薄いので甕蓋であろう。内外器面摩滅。天井部だけがにぶい黄灰褐色だが赤化はしている。内面の黒灰色は焼成不良であろう。

このほか土錘（第147図13）が出土している。

13号貯蔵穴（図版９、第44図）

１区中央部西側に位置し、畝状の小溝の下から検出した略円形プランで、床面が平坦なことから貯蔵穴とした。壁の残りが悪いが抉れはなく、埋土は基盤層の崩落土の混入が目立つ。出土遺物はなく時期を特定できない。

14号貯蔵穴（図版９、第46図）

１区中央部西側に位置し、５号溝西辺に切られ、半分程が検出された。長方形プランで、壁が緩やかに立ち上がっており、根拠に乏しいが、大型で深いことから方形貯蔵穴とした。出土遺物から板付ⅡＢ式併行期であろう。

出土遺物（第48図）

１は大型壺口縁部と底部の図上接合で、器壁が厚い。口縁部は外面タテハケ、内面ミガキ。内面は器面摩滅のため調整不明。底部は内外器面摩滅しているが、ミガキの痕跡がわずかに見られる。内外面はにぶい暗黄灰色から暗黄灰褐色。２は如意形口縁甕で、口唇部に刻み目なし。外面器面摩滅しており調整不明、内面にミガキが部分的に見られる。外面の黒灰色は黒班で、内面は橙褐色なので、煮沸使用の痕跡は明瞭でない。３は壺の底部で、外面は器面摩滅、内面は著しく剥落している。内外黄橙褐色で外底に種子圧痕あり。４は口縁部が短く、傾きが大きいので鉢だろう。器面摩滅で調整不明。５は鉢で、内外器面摩滅で調整不明。外面は灰褐色で変色や赤化した痕跡がない。内面の黄灰色は胎土の色調なので、煮沸使用の有無は不明。

15号貯蔵穴（図版10 、第46図）

１区中央部西側に位置し、南西部を撹乱に切られて不明確だが略方形プランだろう。壁が緩やかに立ち上がっており根拠に乏しいが、大型で床面が平坦であることから貯蔵穴とした。出土遺物から板付ⅡＢ式併行期である。

出土遺物（第48図）

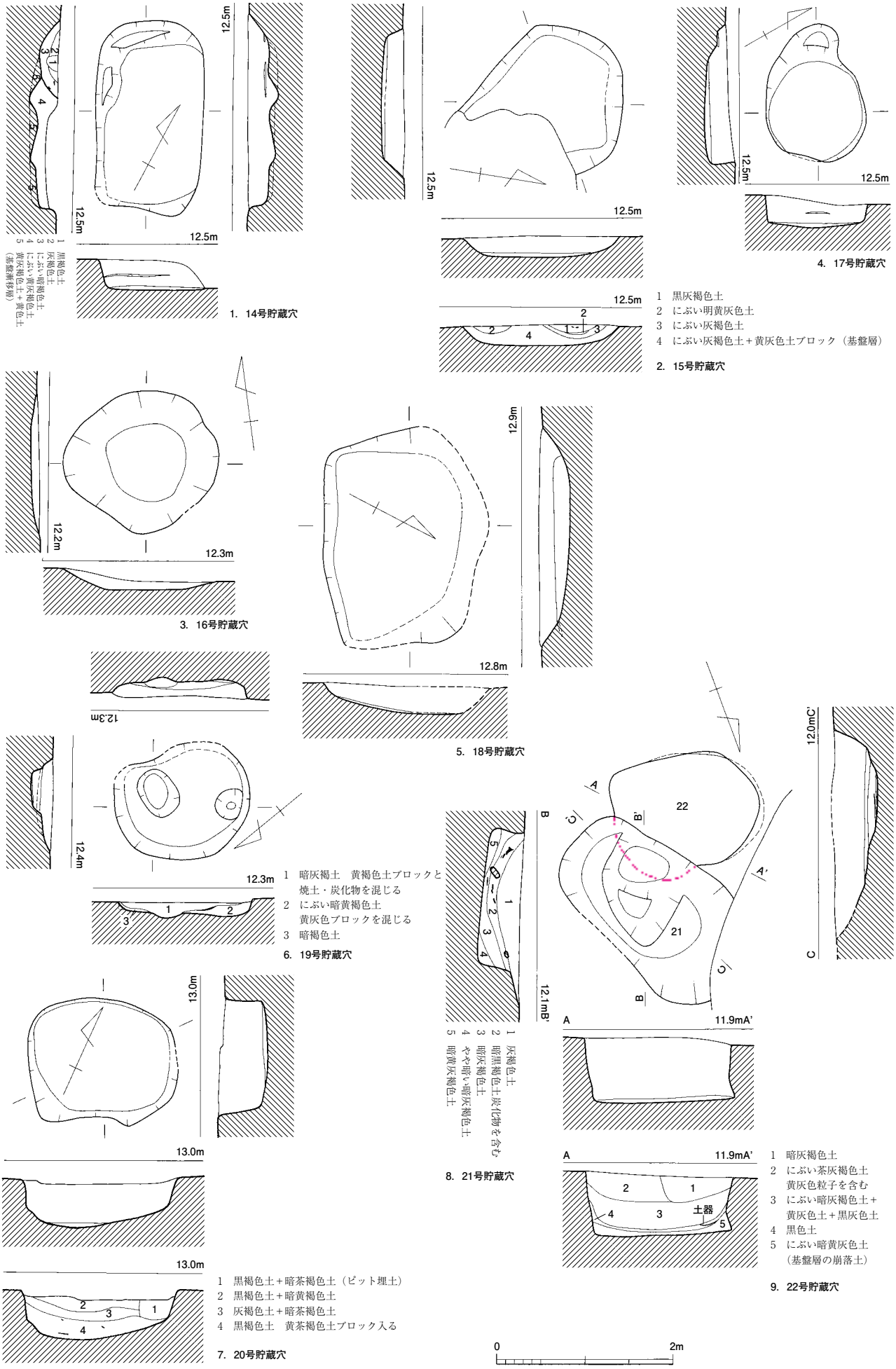
６は如意形口縁甕で、口唇部には刻み目がない。外面にタテハケ、内面にミガキが部分的に見られる。外面暗灰褐色、内面橙褐色で、煮沸使用の痕跡は明瞭でない。内外に付着している炭化物は使用時のものではないだろう。７は甕の底部で、内外面は器面摩滅。内外面は赤橙色で赤化しており、外底は橙褐色なので接地して煮沸使用されたとわかる。黒灰色は黒班だろう。

16号貯蔵穴（第46図）

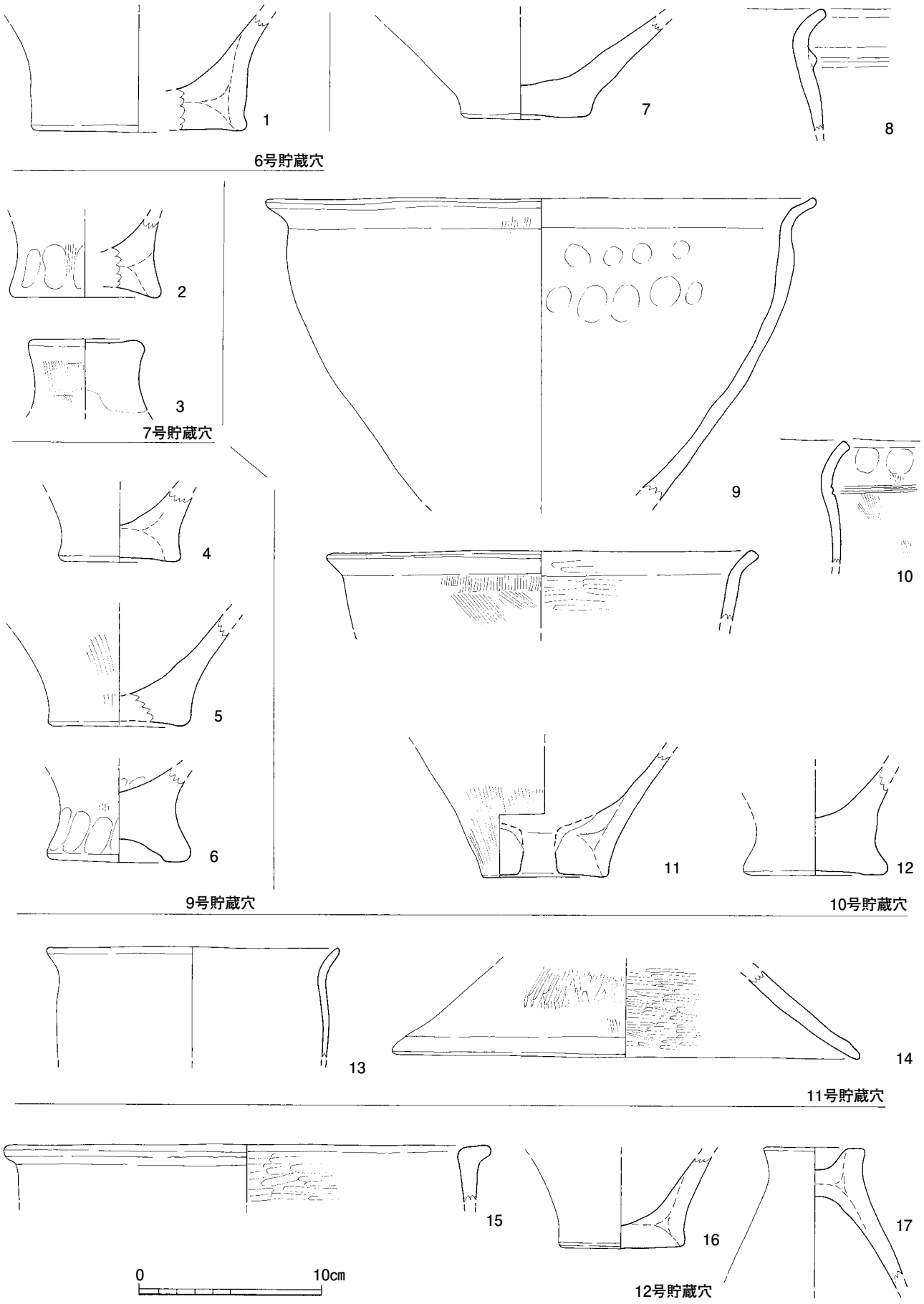
１区中央部西側の５号溝北西隅西側に位置する略円形プランで、壁が緩やかに立ち上がっており根拠に乏しいが、大型で床面が平坦であることから貯蔵穴とした。出土遺物は板付ⅡＢ式併行期である。

出土遺物（第48図）

８は如意形口縁甕で、口唇部･突帯に刻み目なし。器面摩滅しており、外面に目の粗いタテハケ、内面は器面摩滅で調整不明。内外頸部橙褐色は、胴下位は暗灰褐色、それ以外はにぶい灰褐色、煮沸使用されている。



第46図　貯蔵穴実測図３　1区14 ～ 22号貯蔵穴（1/60）



第47図　貯蔵穴出土土器実測図４　1区6･7･9･10･12号貯蔵穴（1/3）

17号貯蔵穴（図版10、第46図）

１区中央部西側に位置する略円形プランで、７号溝北辺に位置する。根拠に乏しいが、大型で壁の立ち上がりが急で床面が平坦であることから貯蔵穴とした。出土遺物はから板付ⅡＣ式併行期である。

出土遺物（第48図）

９は壺の底部で、外面は目の細かいタテハケ、内面は摩滅が著しく調整不明。内外茶褐色で、胴下位から底部に黒斑あり。外底に種子圧痕あり。10は甕の下半部で、底部は外面から穿孔されている。外面胴中位がヨコハケ、下位はタテハケ。外面胴中位はにぶい橙褐色で赤化し、底部裾も赤化している。胴下位が黄灰色なのは被熱で器面が剥落したためである。内面も暗灰褐色に変色しているので、煮沸使用されている。底部完存で積み上げ方法不明。

このほか磨石（第147図９）が出土している。

18号貯蔵穴（図版10、第46図）

１区中央部西側で、26号貯蔵穴の西に位置する。半分が攪乱で失われているが、略方形プランで６号掘立柱建物跡に切られる。壁の立ち上がりが緩やかで根拠に乏しいが、大型で床面が平坦であることから貯蔵穴とした。出土遺物は図化できる物がなかった。

19号貯蔵穴（図版10、第46図）

１区北西端に位置し、８号貯蔵穴との切り合いは不明確だった。東辺がピットに切られているが略方形プランである。根拠に乏しいが、大型で壁の立ち上がりが急で、床面がほぼ平坦であることから貯蔵穴とした。削平されているため出土遺物が少なく、図化できる物がなかったが、弥生前期に見られる胎土の大型土器の胴部片がある。

20号貯蔵穴（第46図）

１区中央部西側の26号貯蔵穴南東に位置する略方形プランで、貯蔵穴に多く見られる基盤層崩落土と埋土の互層がなく、水平堆積層なので根拠に欠けるが、壁が急に立ち上がるので貯蔵穴とした。出土遺物から中期初頭である。

出土遺物（第48図）

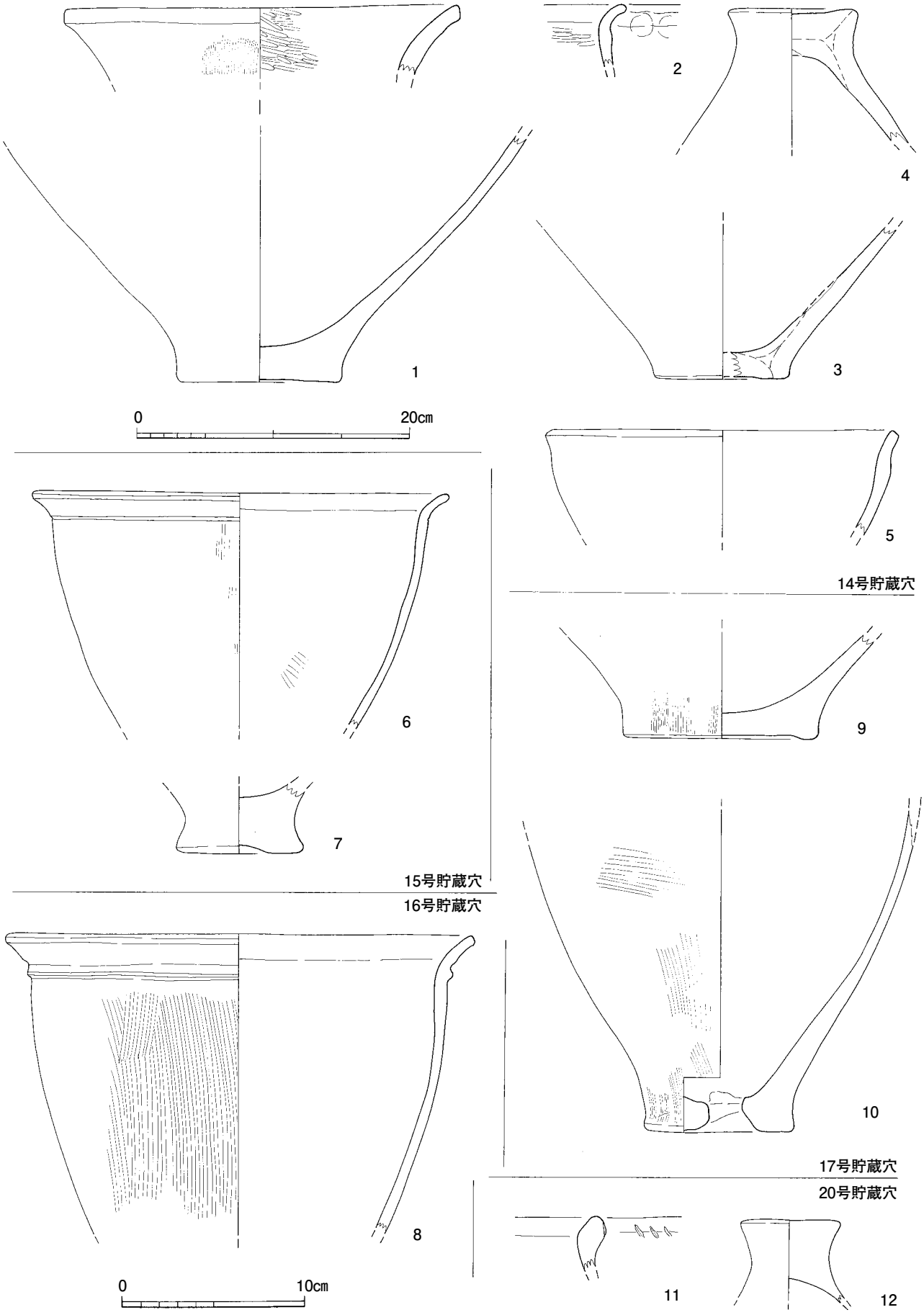
11は肥厚口縁甕で、口唇部に長い刻み目がある。器面摩滅で調整不明。内外面橙褐色で、煮沸使用の痕跡は確認できない。12は外面橙褐色で赤化しており、器壁が薄いので甕蓋であろう。内外面は器面摩滅で調整不明。内面は暗灰褐色に変色している。天井部部完存で積み上げ方法不明。

このほか石錘（第147図８）が出土している。

21号貯蔵穴

（図版10、第46図）

１区中央部西側に位置する略方形プランで、35号溝に切られ、22号貯蔵穴を切る。貯蔵穴に多く見られる基盤層崩落土と埋土の互層がないが、壁が急に立ち上がり、抉れる部分もあるので貯蔵穴とした。出土遺物から板付ⅡＣ式新段階併行期である。

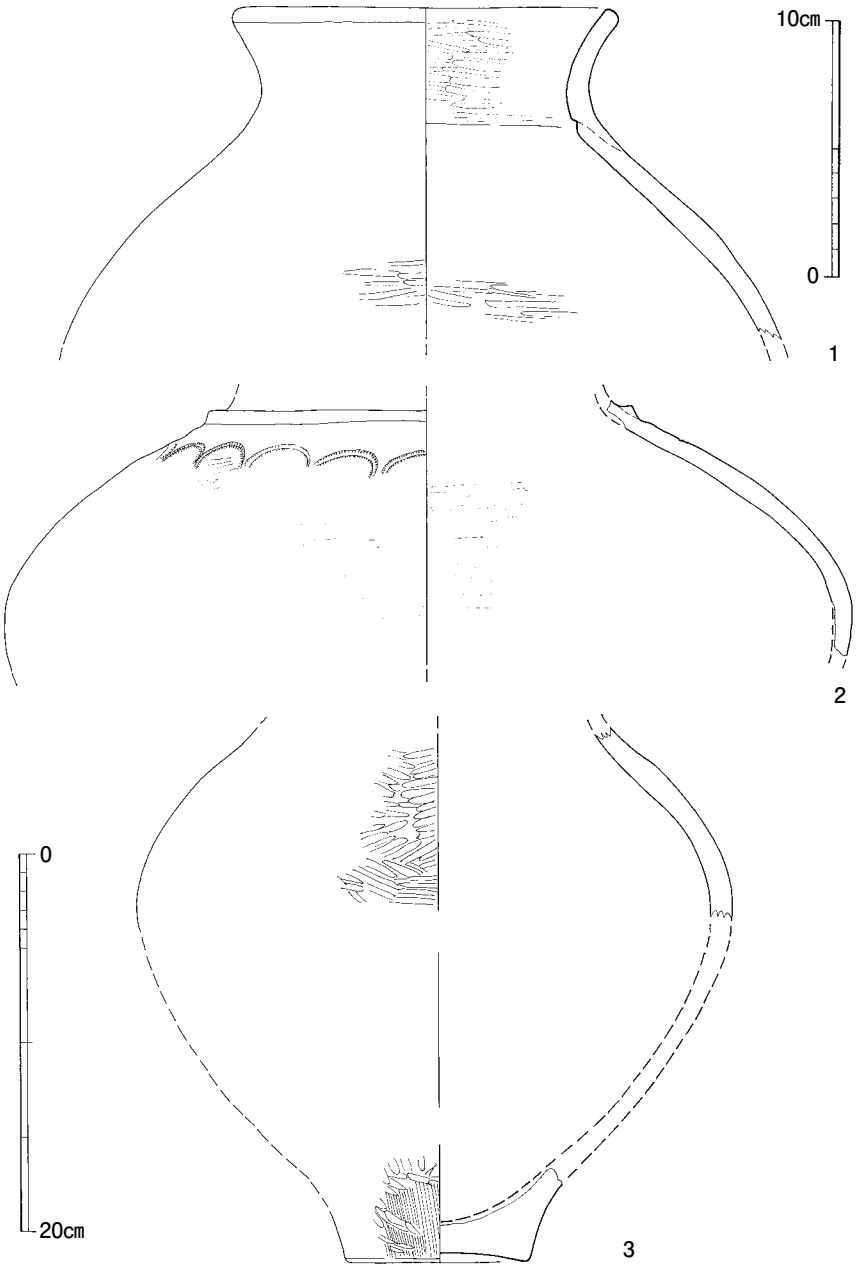


第48図　貯蔵穴出土土器実測図５　1区14 ～ 17･20号貯蔵穴（１は1/4、他は1/3）

出土遺物

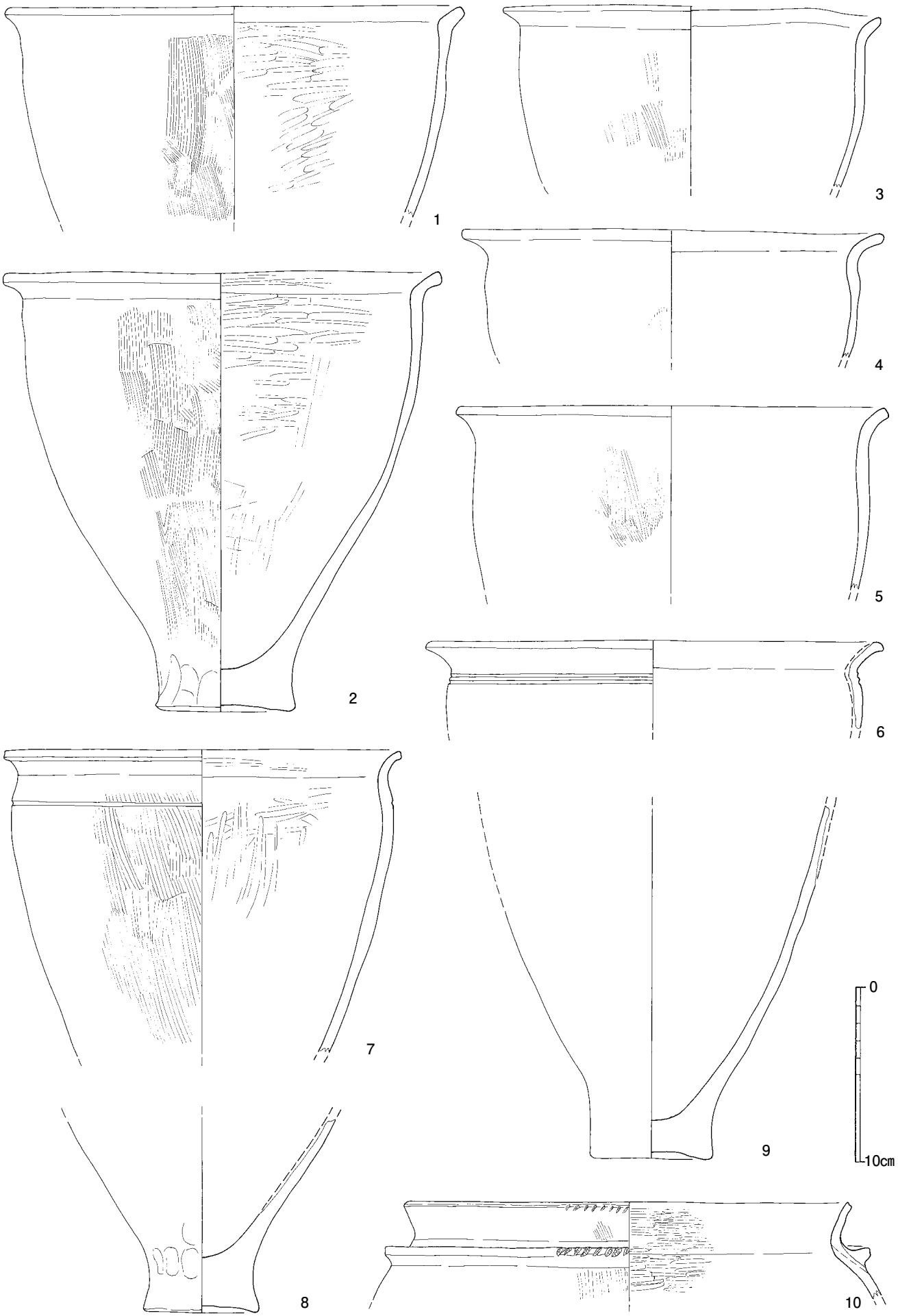
（図版51、第49･50図）

第49図１は壺で、器面の残りがよく内外ミガキで、内外ともにぶい黄灰色で変色がない。２は大型壺で、肩部は貝殻腹縁刺突による重弧文が入る。内外ミガキで、外面は黄橙色を基調とし、内面が黒灰色なのは焼成不良のためである。３は壺で、器面の残りがよく内外ミガキで、外面は胴下位がタテハケの上にミガキ。外面暗黒灰褐色、内面黄灰色で変色がない。



第49図　貯蔵穴出土土器実測図６
1区21号貯蔵穴（１は1/3、他は1/4）

第50図１は如意形口縁甕で、器面の残りがよく、外面は丁寧なタテハケ、内面はミガキ。内外黄橙色で、黒色は黒斑なので煮沸使用されていない。２は如意形口縁甕で上半と下半の図上接合である。内外器面の残りが良く、外面は目の細かいタテハケで、底部付近だけオサエ。内面はミガキで内底だけ摩滅している。外面は灰褐色から黄橙色で肩部に黒斑があるが、赤化していない。内面はにぶい黄橙褐色を呈し、変色がないので、煮沸使用されていない。底部完存で積み上げ方法不明。３は如意形口縁甕で、口縁の歪みが大きい。器壁が薄いのは器面が剥落したためである。口縁部の刻み目や頸部の沈線や突帯の有無は不明で、調整は外面にタテハケがわずかに見られる。内外口縁部が赤橙色で、それ以外暗黄橙色なので、煮沸使用されている。４は如意形口縁甕で口唇部のナデで押された粘土の端が下がっている。５は如意形口縁甕で、口唇部をナデて平坦にしている。外面丁寧なタテハケ、内面は器面剥落で調整不明。外面頸部と内面が黄橙灰色で、他は暗黄灰褐色に変色しているので煮沸使用されている。６は如意形口縁甕で、口唇部をナデて平坦にしている。外面ナデ、内面は器面剥落で調整不明で器壁も薄くなっている。頸部沈線は鋭利で深い。外面黄橙灰色が部分的にあるがほとんど黒灰色で、黒斑部分の破片であろう。煮沸使用されているかははっきりしない。７は如意形口縁甕で口唇部をナデで押



第50図　貯蔵穴出土土器実測図７　1区21号貯蔵穴（1/3）

された粘土端が下に垂れている。肩部の沈線は幅が広く浅い。外面タテハケ、内面は口縁部に目の粗いハケ、胴部はミガキ。内外橙褐色を基調とし、口縁部が変色しているのは伏せ焼きされた際の焼成不良だろう。内面下位の変色は煮沸使用のためである。８は甕下半で、胴径が小さい。器面は残りが悪く外面調整不明、内面ナデ。内外赤橙色で変色がないので、煮沸使用されていない。底部完存で積み上げ方法不明。９は甕下半で、器面は残りが悪く内外調整不明。内外赤橙色で赤変しており、内面がにぶい暗灰茶褐色に変色しているので煮沸使用されている。底部完存で積み上げ方法不明。10は大型の如意形口縁甕で、口唇部は内面側が尖るようにナデられており、外面側に下方から刻み目が入る。突帯は剥落したものを図上接合しており、接合部の剥落した跡には沈線とハケが入る。外面タテハケ、内面ミガキで、内外口縁部が黄橙色で、煮沸使用はされていない。30号貯蔵穴出土の第62図２とは径が異なるので別個体である。

22号貯蔵穴

（図版11、第46図）

１区中央部西側に位置する略方形プランで、35号溝に切られ、21号貯蔵穴に切られる。貯蔵穴に多く見られる基盤層崩落土と埋土の互層がなく、下位に黒色バンド層がある。壁が急に立ち上がり抉れる部分もあるので貯蔵穴とした。出土遺物から板付ⅡB式新段階併行期である。

出土遺物（図版52、第52図）

１は如意形口縁甕で、口唇部外側端に下方から浅く小さい刻み目が入る。器面は摩滅で調整不明。外面はにぶい灰褐色で、内面は暗黄橙色からにぶい灰褐色なので、煮沸使用されているかわからない。２は壺の底部で、外面は目の細かいタテハケ、内面はミガキ。内外橙褐色で変色や黒斑はない。外面胴下位と底部に炭化物が付着しているが、埋没時のものであろう。底部完存で積み上げ方法不明。３は鉢で、突帯の刻目は細長い器面は内外ミガキ。内外橙褐色で変色なし。底部完存で積み上げ方法不明。４は蓋で、器面は全面裾部で調整不明。内外黄橙色で部分的に赤変がある。裾部内面側は焼成不良で暗灰褐色。天井部完存で積み上げ方法不明。

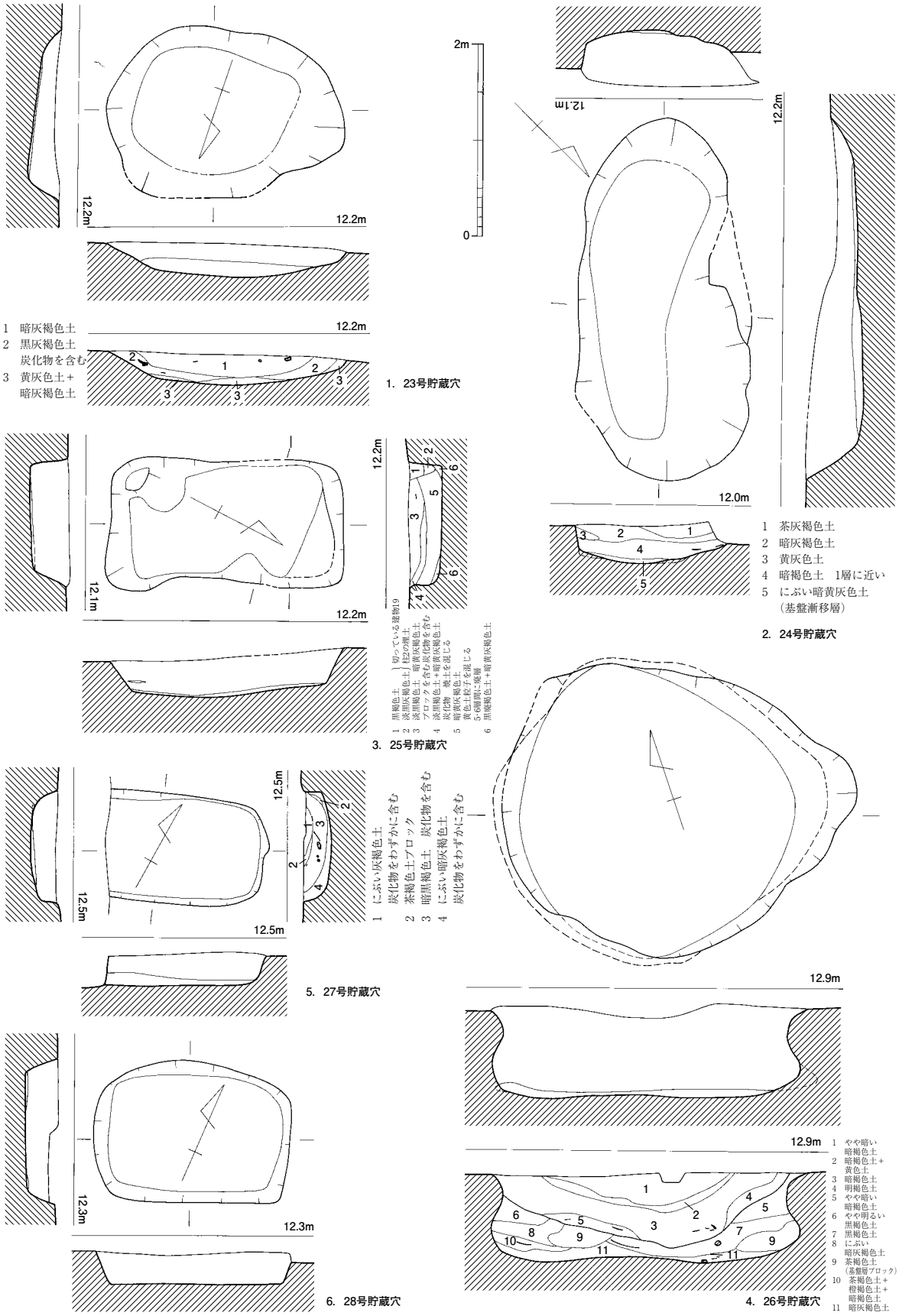
23号貯蔵穴（図版11、第51図）

１区中央部西側に位置する略方形プランで、貯蔵穴に多く見られる基盤層崩落土と埋土の互層がなく、壁の立ち上がりが緩やかなので根拠が弱いが大型で床面がほぼ平坦なので貯蔵穴とした。出土遺物から板付ⅡＢ式新段階併行期である。

出土遺物（第52図）

５は、形状は壺の底部だが、外面の底部縁が赤化しており、内面はにぶい淡暗黄灰色で、器面が失われているので、鉢か壺を鉢に転用して煮沸している可能性がある。外面はタテハケ、内面は摩滅が著しく調整不明。６は如意形口縁甕で、外面斜め方向のハケ、内面ナデ。内外とも肩部以外が灰褐色に変色しており、肩部は外面が黄橙色、内面はにぶい黄灰白色。煮沸使用されている。７は甕の底部で器面摩滅で調整不明。外面は暗灰褐色で変色しているが、内面は橙灰色で変色していない。煮沸使用されていない可能性がある。底部完存で積み上げ方法不明。８は形態的には蓋だが、外底だけが黒灰色で赤化が弱いので、接地して使用していることから鉢であろう。内外器面摩滅で調整不明。外面全面が赤化しており、強い火を受けている。内面の口縁部から胴上位は暗灰褐色、

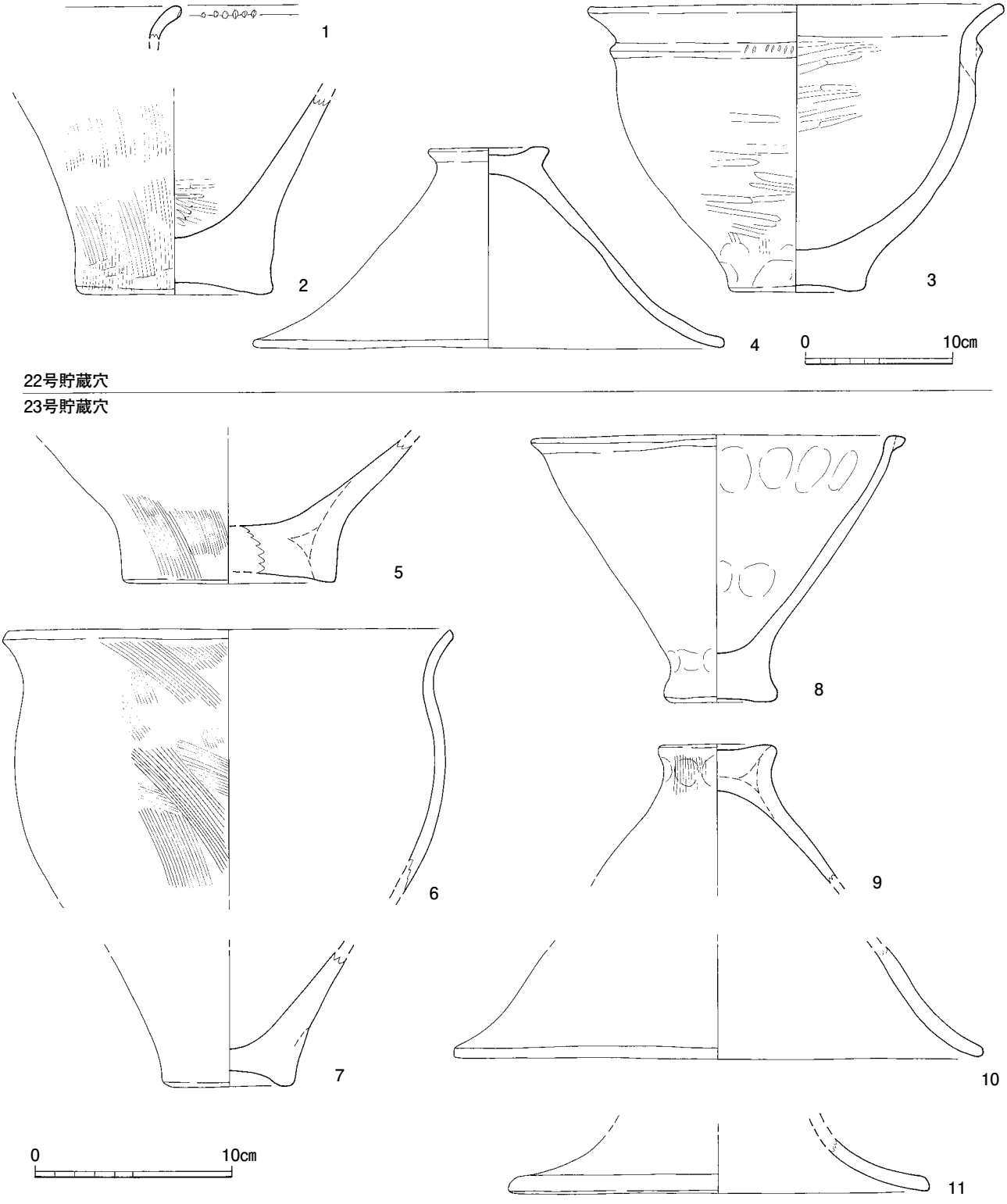
下位は黒灰色で器面が剥落しているので、中位までの水位で煮沸したものである。外底が赤化していないので接地して２次加熱しているので蓋ではない。底部完存で積み上げ方法不明。９は外面橙褐色で赤化しており、器壁が薄いので甕蓋であろう。外面はタテハケ、内面ナデ。内面は暗灰褐色



第51図　貯蔵穴実測図４　1区23 ～ 28号貯蔵穴（1/60）

に変色している。10は甕の底部で、外面は目の細かいタテハケ、内面は摩滅で調整不明。内外とも橙褐色で変色していないので、煮沸使用されていない可能性がある。底部完存で積み上げ方法不明。11は蓋で、内面裾部に伏せ焼き時に焼成不良になった黒灰色部分があるので壺ではない。内外器面摩滅で調整不明。外面橙褐色、内面黄橙色。

24号貯蔵穴（図版11、第51図）

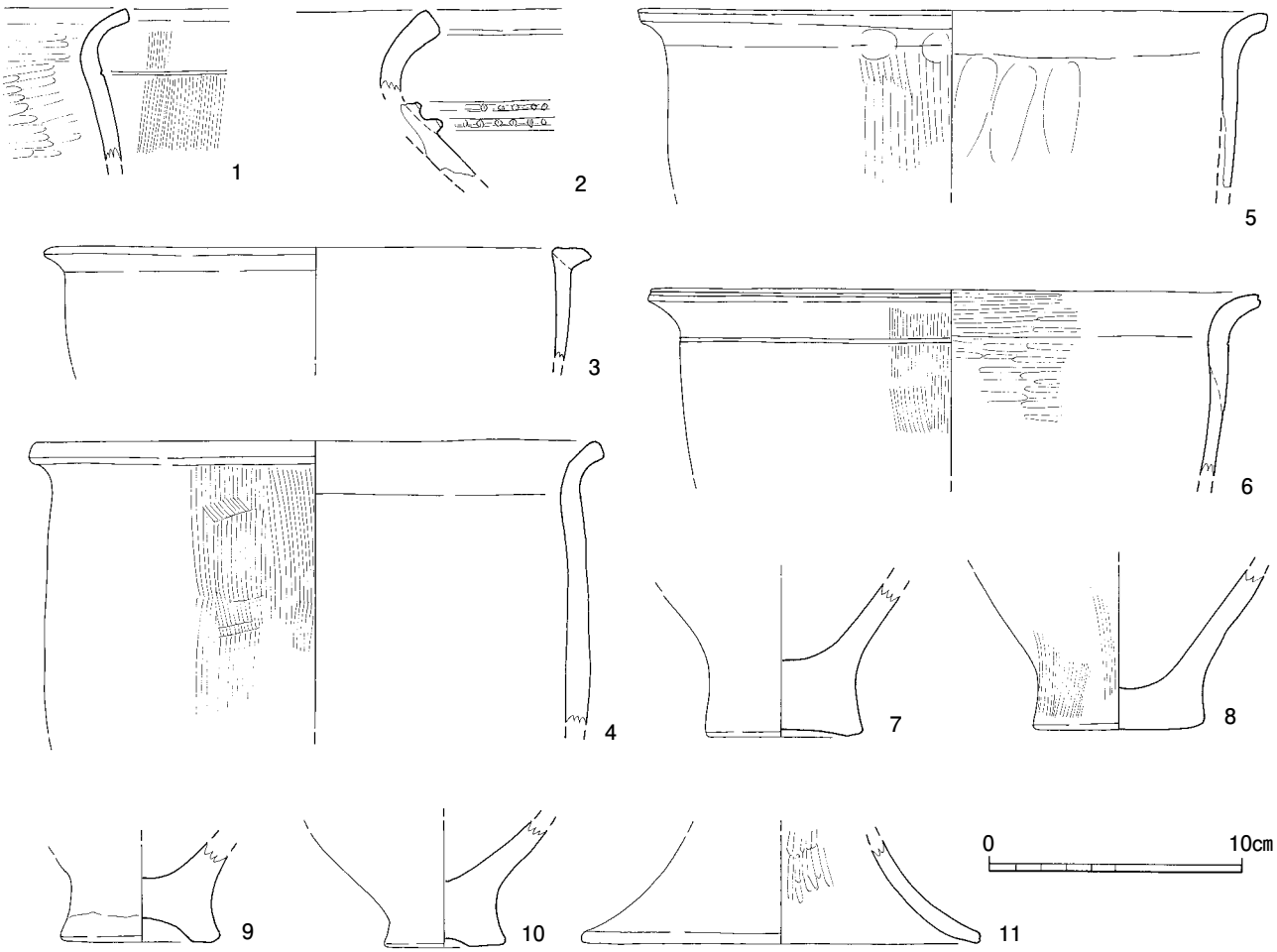


第52図　貯蔵穴出土土器実測図８　1区22･23号貯蔵穴（４は1/4、他は1/3）

１区中央部西側に位置する略長方形プランで、4b号溝に切られる２基の土坑と考えていたものが１つの大型遺構になった。貯蔵穴に多く見られる基盤層崩落土と埋土の互層がないが、壁の立ち上がりが急で床面がほぼ平坦なので貯蔵穴とした。出土遺物から中期初頭である。

出土遺物（第53図）

１は如意形口縁甕で、頸部の沈線は斜め下から施されており、深い。外面は目の細かいハケ、内面ミガキ。内面は橙褐色で変色ないが、外面は頸部が黄橙色で、口縁部と肩部は灰褐色に変色しているので煮沸使用されている。２は如意形口縁甕で、頸部に２条の刻目突帯がつき、刻み目は短く浅い。口縁部は肥厚し口唇部は平坦化している。器面の残りが悪いため調整不明。内外黄橙色から暗橙褐色で変色なし。煮沸使用されていない可能性がある。３は逆Ｌ字口縁甕で、内外面器面剥落で調整不明。外面は全面橙褐色で、内面は口縁部が橙褐色だが、胴部はにぶい黄橙灰色から暗灰褐色に変色しているので煮沸使用されている。４は如意形口縁甕で外面は器面の残りが良くタテハケで、内面はミガキのようだが摩滅している。内面の橙褐色が本来の色調で、内面下位と外面の暗黒橙褐色は煮沸使用時の変色であろう。５は如意形口縁甕で、口縁部に刻み目なし。外面タテハケ、内面器面剥落で調整不明。外面は全面暗灰褐色で、内面は口縁部が暗黄褐色だが、胴部はにぶい橙灰色で変色していないので煮沸使用の有無はわからない。６は如意形口縁甕で、外面目の細かいタテハケ、内面ミガキ。外面黄橙褐色、内面にぶい暗橙灰色で、くすんでいるが煮沸使用の変色ではない。頸部の沈線は深い。７は甕の底部で、外底は上げ底で、内外とも器面剥落が著しく調整不明。内面の暗黄灰色は変色が見られないが胎土の色調が露出したもので、煮沸使用されている。底



第53図　貯蔵穴出土土器実測図９　1区24号貯蔵穴（1/3）

部完存で積み上げ方法不明。８は底部完存で積み上げ方法不明。内外変色なく、煮沸痕跡なし。９は甕の底部で、内外ナデで橙褐色を呈し変色していないので、煮沸使用されていない可能性がある。底部完存で積み上げ方法不明。10は外面が赤化しているので小形の甕の底部である。外底は上げ底で、外面ナデ、内面は器面剥落が著しく調整不明。内面の黄橙色は変色が見られないが胎土の色調が露出したもので、外面の赤化の程度が弱いので煮沸使用頻度は少なかっただろう。底部完存で積み上げ方法不明。11は器壁の厚さに対して裾の開き方が大きいので、壺ではなく蓋である。外面摩滅で調整不明、内面に縦方向のミガキがあるので。内面の黒灰色部分は伏せ焼き時に焼成不良になったものであろう。外面にぶい暗橙褐色から黄橙色。

このほか、局部磨研石斧（第146図25）が出土している。

25号貯蔵穴（図版11、第51図）

１区中央部西側に位置する長方形プランで、１号方形周溝墓南辺・19号掘立柱建物跡に切られる。貯蔵穴に多く見られる基盤層崩落土と埋土の互層がないが、壁の立ち上がりが急で壁に抉れが見られ床面がほぼ平坦なので貯蔵穴とした。出土遺物から板付ⅡＢ式併行期である。

出土遺物（第54図）

１は壺の底部で、外底が楕円形で歪みが大きく、図の胴部径は中間の径にしている。内外器面は摩滅が著しく調整不明。内外暗橙褐色で変色なし。底部完存で積み上げ方法不明。２は如意形口縁甕で、外面目の細かいタテハケ、内面黄面剥落で調整不明。外面暗灰褐色、内面は口縁部が黄橙灰色、胴部がにぶい暗黄橙灰色に変色しているので煮沸使用されている。

このほか結晶片岩の原石（第146図30）が出土している。

26号貯蔵穴（図版11、第51図）

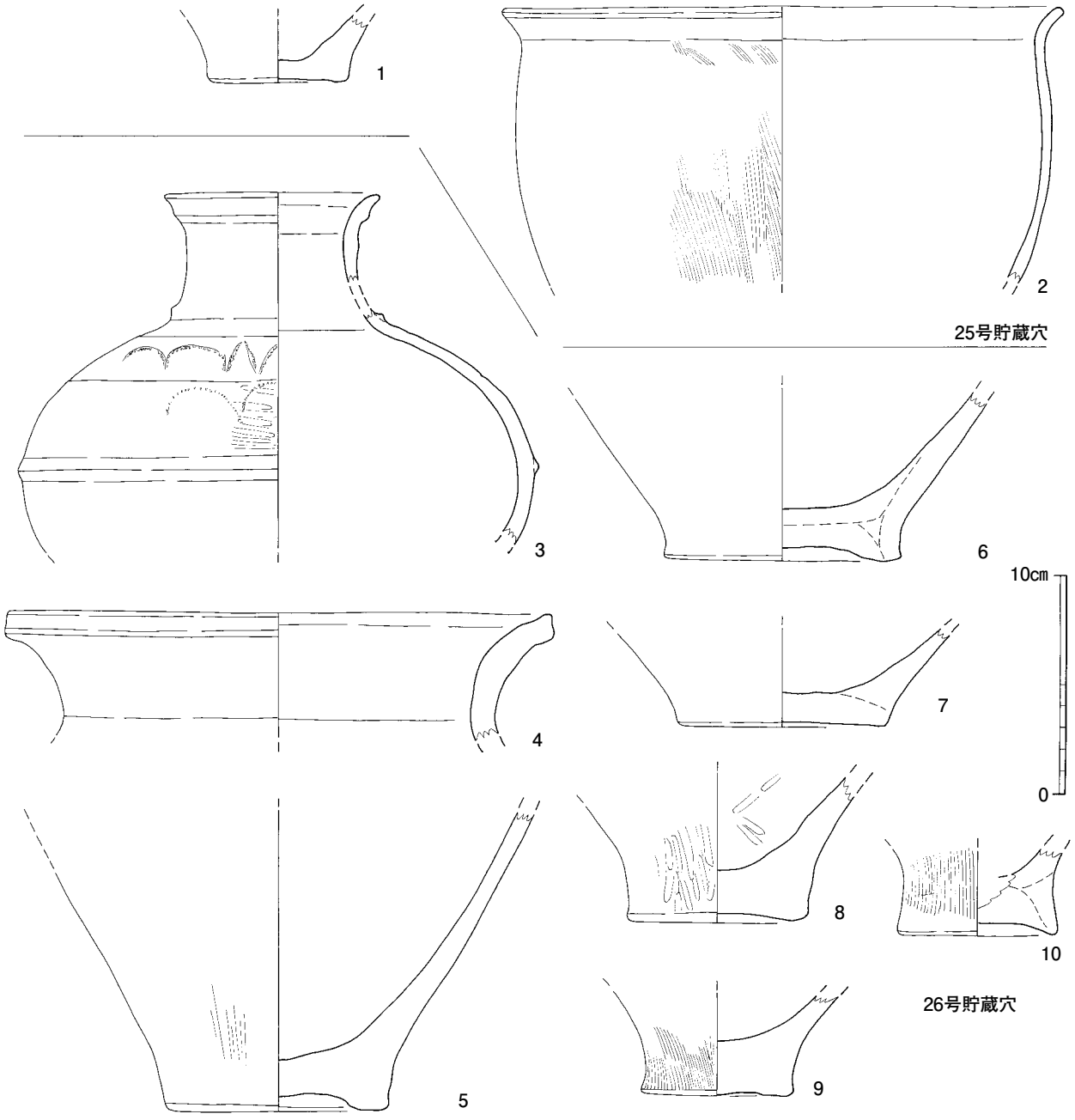
１区中央部に位置する大型円形プランで、14･19号竪穴住居跡、６号掘立柱建物跡に切られる。中位まで同一層が覆っていたので平面的に分けることができなかったが、土層からは東西２基の貯蔵穴があるように見える。壁の基盤層の一部に茶褐色土が床面まで入っており、落し穴と切り合っている可能性があったので精査したが、不整形で遺構にはならなかった。境界部分の壁が崩落して１つの大型円形プランに見えたとするべきだろう。出土遺物は板付ⅡＣ式から中期初頭まであるので、板付ⅡＣ式併行期に機能したものである。

出土遺物（第54 ～ 57図）

第54図３は壺で、38号貯蔵穴出土片の同一個体であるが、本遺構の破片が大きいので本来はこの遺構に伴うものだろう。器面の残りが悪いが内外ミガキ。内外黄橙色から橙褐色で変色なし。外面肩部に貝殻腹縁刺突による連弧文が２段に入り、境界の沈線は線刻で引かれている。内外は黄橙色で、ミガキの入る部分には化粧土がかかり茶褐色を呈する。４は壺で、器面の残りが悪いため調整不明。内外にぶい黄橙色から橙褐色で変色なし。外面肩部の施文の有無は不明。５は器面摩滅で調整不明。断面は楕円形に歪んでいるが、堆積時の土圧のせいだろう。６は壺の底部で、内外器面摩滅で調整不明。外面はにぶい橙褐色、内面はにぶい黄灰色で変色が見られない。７は底部の形状は壺だが、外面には赤変が見られるので、鉢か壺を転用して煮沸使用されたものだろう。内外器面摩滅が著しいが外面の一部にナデが残っている。胎の黄橙色や赤橙色が露出しているが、本来はにぶ

い暗灰褐色である。８は壺の底部で、内外ミガキ、内外面は黄灰色で外面の胴下位黒斑が見られる。底部完存で積み上げ方法不明。９は壺の底部だが、外面はにぶい暗黄橙色から赤橙色で赤変が見られるので、鉢に転用して煮沸されている可能性がある。外面はタテハケ、内面は摩滅が著しく調整不明。内面の黄灰色は胎土の色調が露出したもの。10は壺の底部で、外面タテハケ、内面器面摩滅で調整不明。内外面はにぶい黄橙色で変色は見られない。

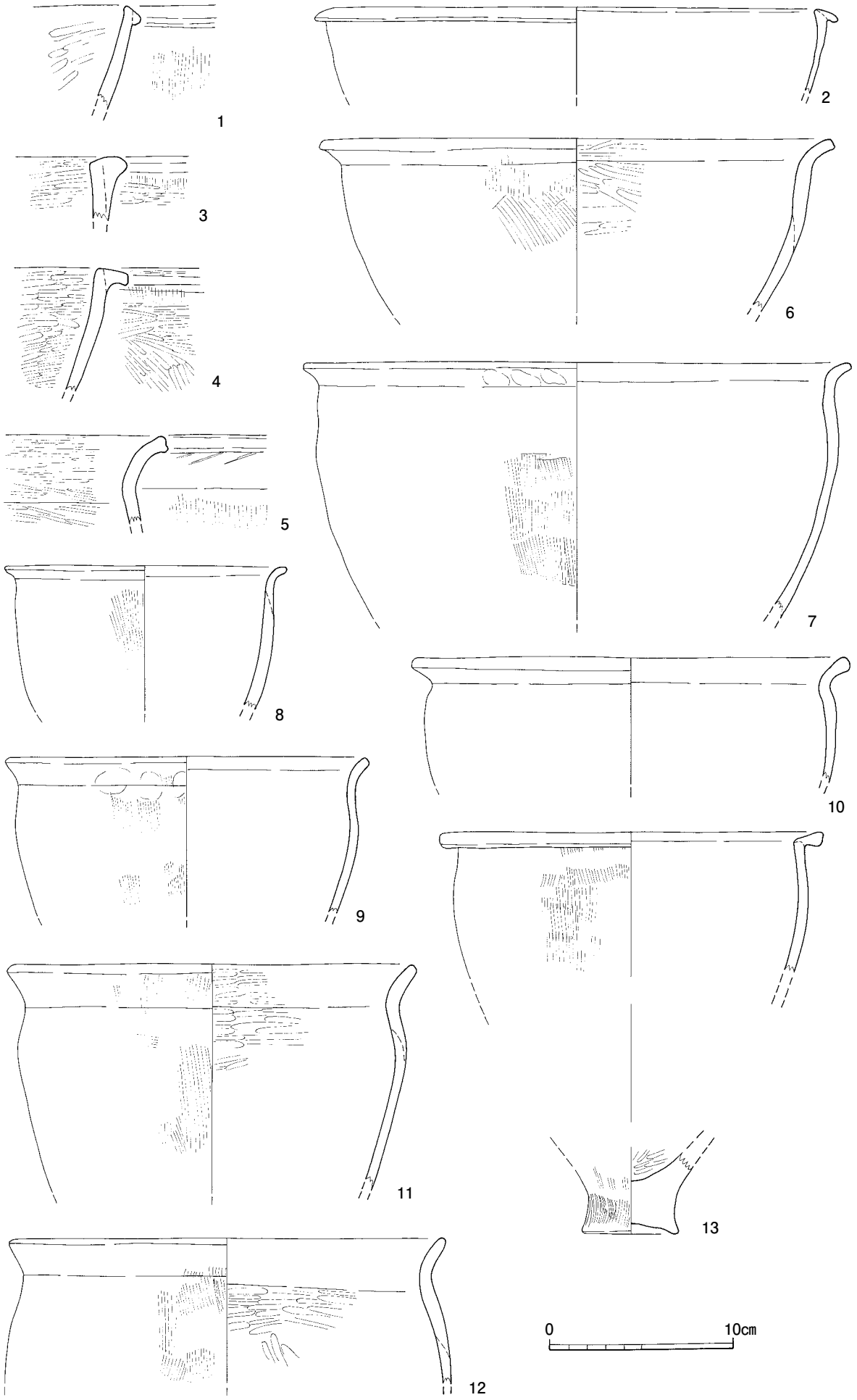
第55図１は砲弾形甕で、口唇部は突帯の上まで含めて平坦である。刻み目がある可能性があるが確認できない。外面はタテハケ、内面はミガキ。内外面は橙褐色から暗黄橙褐色で、煮沸使用されていない可能性がある。２は口縁部が屈曲して逆L字口縁を形成するもので、器壁が薄いのは摩滅のため。３は肥厚口縁甕の口縁部小片で、歪みがあるため傾きは不確実。外面は目の細かいタテハケ後ミガキ、内面ミガキ。内外黄灰色で変色がないので煮沸使用されていない可能性がある。４は丁寧に内外ミガキが入った甕で、頸部だけミガキ下のタテハケが残っている。５は大型の如意形口



第54図　貯蔵穴出土土器実測図10　　１区25･26号貯蔵穴（1/3）

縁甕で、外面タテハケ、内面ミガキ。口唇部は平坦にナデられており、外面口縁下の工具痕は頸部調整時のもの。外面頸部はタテハケ、内面は斜め方向のハケの上にミガキ。内外とも明黄橙色で煮沸使用されていない。６は甕か鉢で、器面の残りがよく、外面口縁部ヨコナデ、胴部タテハケ。内面ミガキ。内外にぶい黄橙灰色で、外面の暗褐色の部分は黒斑なので使用変色は見られない。７は如意形口縁甕で、口唇部の摩滅があるが刻み目はない。器面の残りは良く、外面はタテハケ、内面はナデ。外面頸部と内面上半は黄灰色で、外面胴部と口縁部は暗灰褐色で変色している。外面下位は赤化しているので煮沸使用されている。８は小形の如意形口縁甕で、口唇部の摩滅があるが刻み目はない。外面はタテハケ、内面はナデ。内面は黄橙灰色でわずかに変色しているのみだが、外面は暗灰褐色で下位は赤化しているので煮沸使用されている。９は小型の如意形口縁甕で、器面の残りが良く、外面は目の細かいタテハケ、内面はナデ。口唇部は刻み目なし。外面の頸部と内面上半は橙灰色だが、それ以外は暗橙褐色なので煮沸使用されている。10は如意形口縁甕で、口唇部の摩滅があるが刻み目はない。器面の残りが悪く内外調整不明。本来は内外橙褐色で変色ないので煮沸使用されていない。11は如意形口縁甕で、口唇部が摩滅しており刻目の有無は不明。外面タテハケ、内面はミガキ。内外黄橙色を基調とするが、外面は赤化し、内面は肩部以下が灰褐色に変色しているので煮沸使用されている。12は如意形口縁甕で口唇部が摩滅しており刻目の有無は不明。外面タテハケ、内面は口縁部ナデ、胴部はミガキ。内外橙褐色で変色がないので煮沸使用されていない。13は逆Ｌ字口縁甕で、口唇部はナデ窪んでいるため器壁が薄い。外面はタテハケが残り、内面はナデ。外面は黄橙色で赤化しており、内面は暗黄灰時褐色に変色しているので煮沸使用されている。

第56図１は甕で、外面タテハケ、内面ミガキで、器面が残っている。色調は外面橙灰褐色、内面は口縁部から肩部は黄橙色、内外面口縁部・外面肩部以下は灰褐色に変色しているので煮沸使用されている可能性がある。２は如意形口縁甕で、口唇部は欠損しているので刻み目の有無は不明。器面の残りが良く、外面は目の細かいタテハケ、内面ミガキ。内外面橙褐色で変色がなく。３は甕で、器面が残っており、頸部は器壁が薄い。外面目の粗いヨコハケ、内面ミガキ。色調は内外橙褐色で変色なし。４は如意形口縁甕で、口唇部の摩滅があるが刻み目はない。器面の残りは良く、外面は目の細かいタテハケ、内面は光沢のある丁寧なミガキ。内外は橙褐色で変色がないので煮沸使用されていない。５は如意形口縁甕で口唇部に下方から長い刻み目が入る。器面摩滅で内外調整不明。内外黄橙色は胎土の色調で、本来の器面はにぶい暗黄灰色で変色は見られない。煮沸使用されていない可能性がある。６は如意形口縁甕で、口唇部外面側に下方から刻み目が入る。外面は目の細かいハケが沈線の下は横方向、それ以外は縦方向に施され、内面はミガキ。口唇部は外面側に下方からの刻み目が入る。頸部の沈線は２本同時に施されており、下側が深い。外面は橙褐色から暗黄橙色、内面は橙褐色で変色がないので煮沸使用されていない。７は肥厚口縁甕の口縁部小片で、頸部沈線は深い。外面は目の細かいタテハケ、内面ナデ。黄橙色を基調としているが、外面の口縁部まで暗灰褐色に変色しているので煮沸使用されている。外面の黒色は黒斑。カクセン石を多く含む胎土。８は如意形口縁甕で、口唇部の摩滅があるが刻み目はないようだ。外面は目の細かいタテハケ、内面は光沢のある丁寧なミガキ。頸部の沈線は２本同時に施されており、下側が深い。外面は橙褐色から暗黄橙色、内面は橙褐色で変色ないので煮沸使用されていない。９は小型の如意形口縁甕で、頸部の沈線は深い。口唇部が摩滅しており刻目の有無は不明。器面は摩滅していて調整不明。内外暗橙褐色で赤化が著しいので煮沸使用されている。10は甕の底部で、外面はタテハケ、内

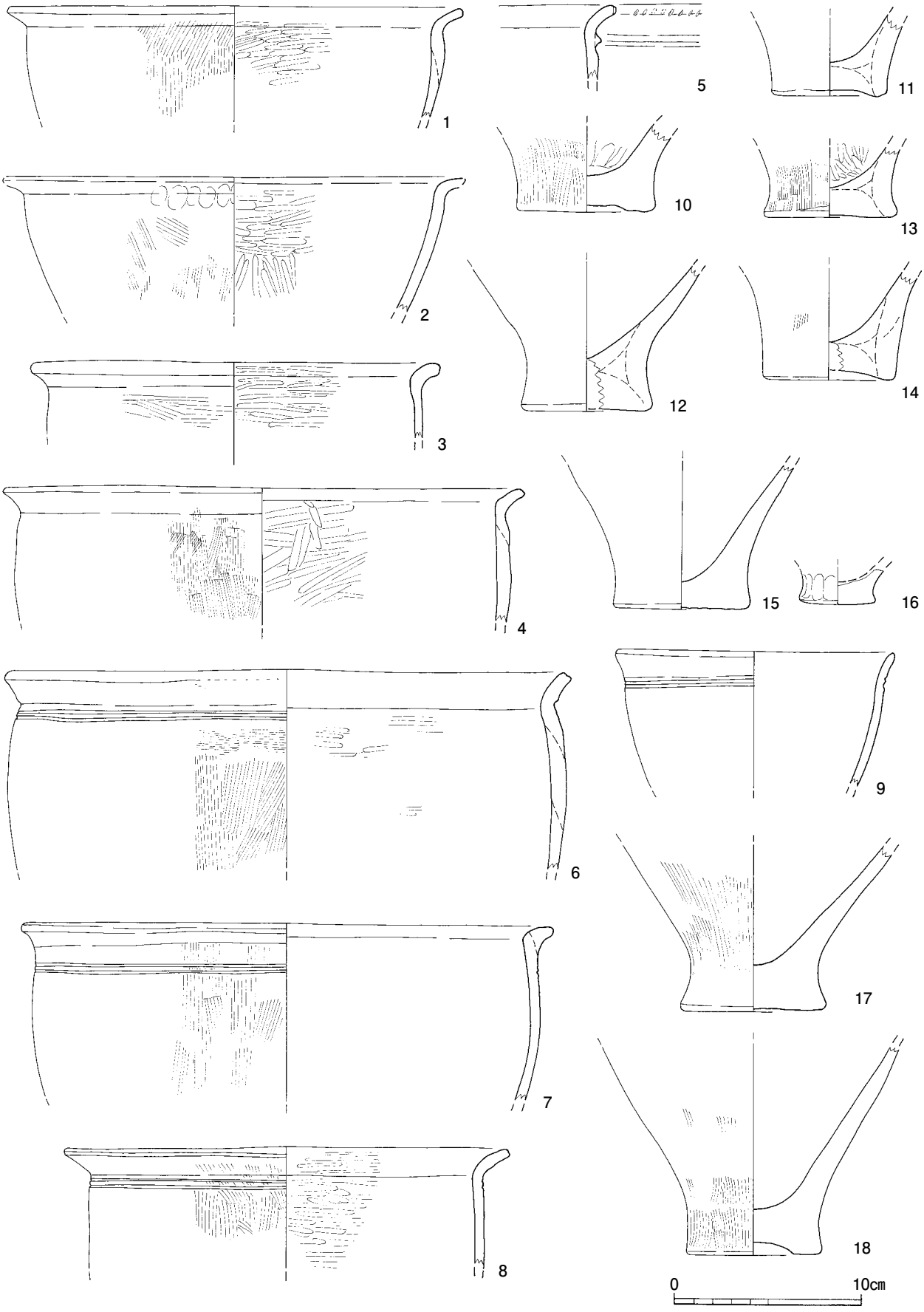


第55図　貯蔵穴出土土器実測図11　1区26号貯蔵穴（1/3）

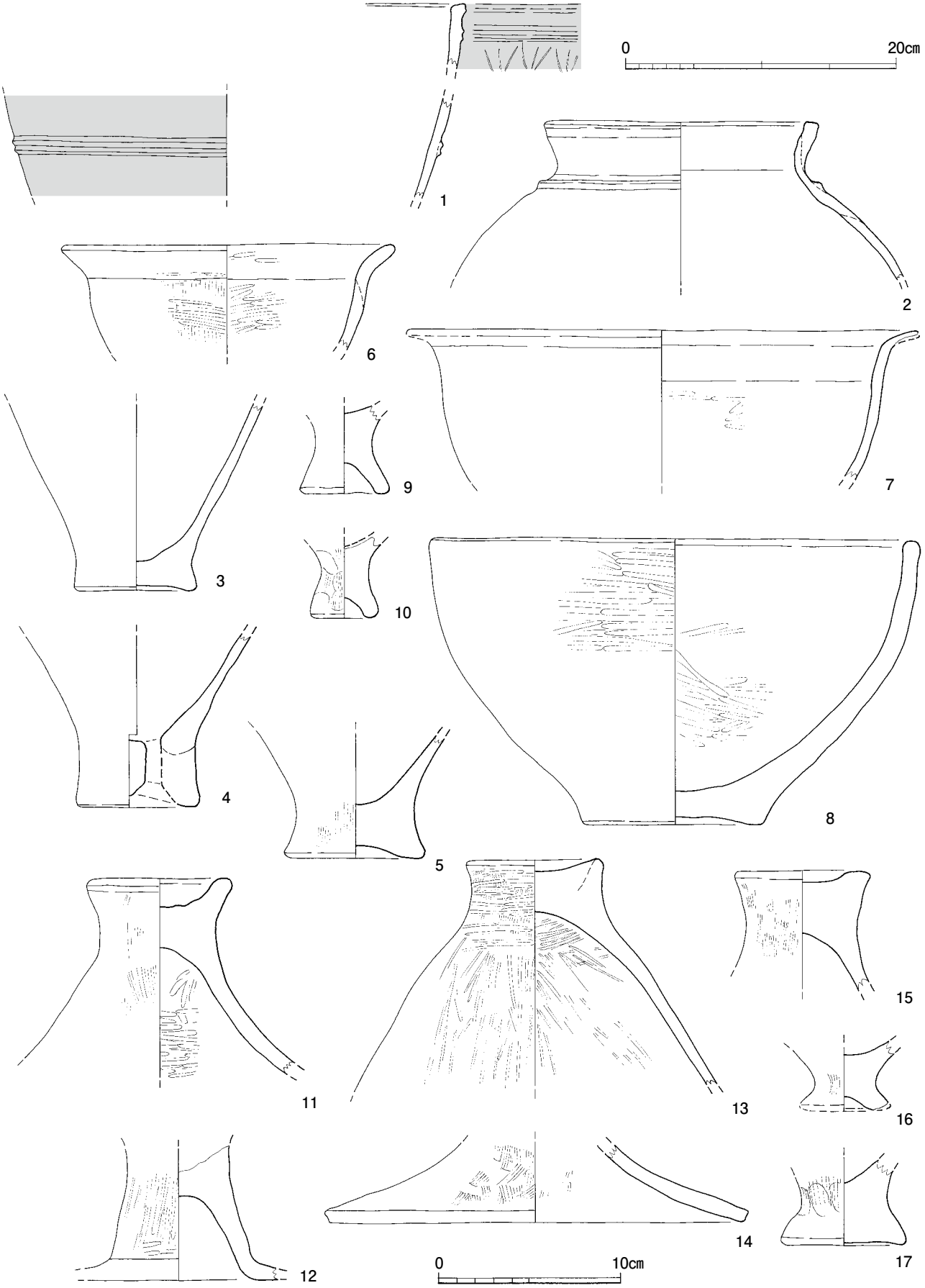
面はオサエ。外面は橙灰色で赤化している。内面は暗灰褐色の変色が見られるので煮沸使用されている。底部完存で積み上げ方法不明。11は甕の底部で、内外面は器面摩滅で調整不明。外面は赤橙色で赤化しており、内面は暗橙褐色に変色が見られるので煮沸使用されている。12は甕の底部で、器面は摩滅しており調整不明。外面は橙褐色で赤化しており、外底は接地していたため暗灰褐色を呈する。内面は明黄橙色だが、胎土の色調が露出したもので、本来の器面はにぶい暗灰褐色が一部残っているので煮沸使用されている。13は甕の底部で、外面はタテハケ、内面はミガキ。外面は黄橙灰色で赤化なし。内面は一部に変色が見られるが黄橙灰色で変色ないので煮沸使用されていない。14は甕の底部で器面摩滅しており調整不明。外面は赤橙色で赤化しており、内面は内底が橙褐色だが、それ以外はにぶい暗灰褐色に変色しているので煮沸使用されている。15は底部完存で積み上げ方法不明。底部完存で積み上げ方法不明。16は小型器種の外面が暗灰褐色で赤化していることから、壺ではなく甕とした。器面は摩滅しており調整不明。内面の黒灰色は胎土の色調で本来は黄橙色だっただろう。17は甕の底部で外面はタテハケ、内面はナデ。外面は橙褐色で赤化しており、内面はにぶい暗灰褐色に変色しているので煮沸使用されている。カクセン石を多く含む特徴的な胎土である。底部完存で積み上げ方法不明。18は甕の底部で、外面はタテハケ、内面はナデ。内面は暗灰褐色で変色が見られないが外面は橙灰色で赤化しているので使用頻度は少ないながら煮沸使用されている。底部完存で積み上げ方法不明。

第57図１は大型の砲弾形甕で、口唇部は欠損している。外面口縁部下に山形突帯が貼り付けられており、突帯下には羽状文が線刻されている。内外器面摩滅で調整不明。胴部にも山形突帯が貼り付けられている。外面は灰黒色で、その上に赤色顔料が塗布されている。内面はにぶい黄灰色で変色なし。２は頸部がすぼまらないので甕とした。器面の残りが悪いため調整不明。内外黄橙色から橙褐色で変色なし。外面肩部の施文の有無は不明。３は甕の底部で、外面は器面摩滅しておりミガキが一部に残る。内面はナデ。内外暗灰褐色で、底部縁は赤橙色で赤化しているので煮沸使用されている。４は甕の底部で、器面摩滅で内外調整不明。外面は橙灰色で底部縁が赤化している。内面は暗灰褐色の変色が見られるので煮沸使用されている。底部完存で積み上げ方法不明。底部の穿孔は外面側から施されており中心からずれている。孔の側面に変色がないので使用後に穿孔されている。５は甕の底部で外面は器面摩滅しておりタテハケがわずかに残る。内面はナデ。外面は橙褐色で赤化しており、内面はにぶい暗灰褐色に変色しているので煮沸使用されている。６は小形の如意形口縁鉢で、口唇部は刻み目がない。器面の残りが良く、外面は頸部から縦横の交互にハケが入る、内面ミガキ。外面黒灰色なのは黒斑であろう。内面は橙褐色で変色がない。７は鉢で、内面に屈曲部がある。内面胴部は器面が残っており、ナデとミガキ。外面は器面摩滅で調整不明。色調は外面黄灰色で、内面は淡黄橙杯色で変色なし。８は壺の胴部を転用した鉢である。口縁部は打ち欠いて平滑にしている。内外ミガキで、外面には同じ高さで著しい赤変が見られるので煮沸使用されている。内底と胴下位の黒灰色黒班で、全体に赤橙色に変色しているが、本来は黄橙色であろう。９･10は小型器種である。９は内外橙褐色、10は内外橙褐色で、どちらも変色がないことから脚付きの杯か鉢であろう。11は蓋で、外面はタテハケ、内面はミガキ。内外黄橙灰色で変色なし。天井部から胴部に黒斑あり。天井部完存で積み上げ方法不明。12は蓋で、天井部は接合部で剥落している。裾部は摩滅している。外面タテハケ後ミガキ、内面ナデ。内外黄灰色で変色なし。13は内外面黄灰色で変色がないので煮沸使用されておらず、内面は焼成不良でないので壺ではない。器面の残

りが良く内外丁寧なミガキが入るので煮沸使用されていない甕ではなく、蓋であろう。天井部完存で積み上げ方法不明。14は蓋で、外面はタテハケ、内面はミガキ。裾部は平坦面を持つ。内外黄橙



第56図　貯蔵穴出土土器実測図12　1区26号貯蔵穴（1/3）



第57図　貯蔵穴出土土器実測図13　1区26号貯蔵穴（１は1/4、他は1/3）

色だが、裾部は黒灰色に変色しているので、煮沸使用された甕蓋。15は蓋で、外面タテハケ、内面ナデ。内外橙褐色で変色なし。天井部完存で積み上げ方法不明。16は小型器種、内外橙褐色で変色がないことから、脚付きの杯か鉢であろう。器面は剥落のため外面にタテハケが一部残る箇所が観察できるにとどまる。17は変色のない底部で、平底で重量があるので蓋ではなく鉢であろう。内外橙褐色で、外器面の残りが良く、外面タテハケ、内面ナデ。器面は剥落のため外面にタテハケが一部残る箇所が観察できるにとどまる。

このほか柱状石斧（第146図21）・砥石（第147図5･6）・石錘（第147図７）が出土している。

27号貯蔵穴（図版12、第51図）

１区南西部に位置する長方形プランで、14号溝東辺に切られる。上位が段落ちにより50㎝近く削平されていることから、かなり深いことになる。床面も平坦で壁が直に立ち上がるので貯蔵穴とした。出土遺物から板付ⅡＣ式併行期である。

出土遺物（第58図）

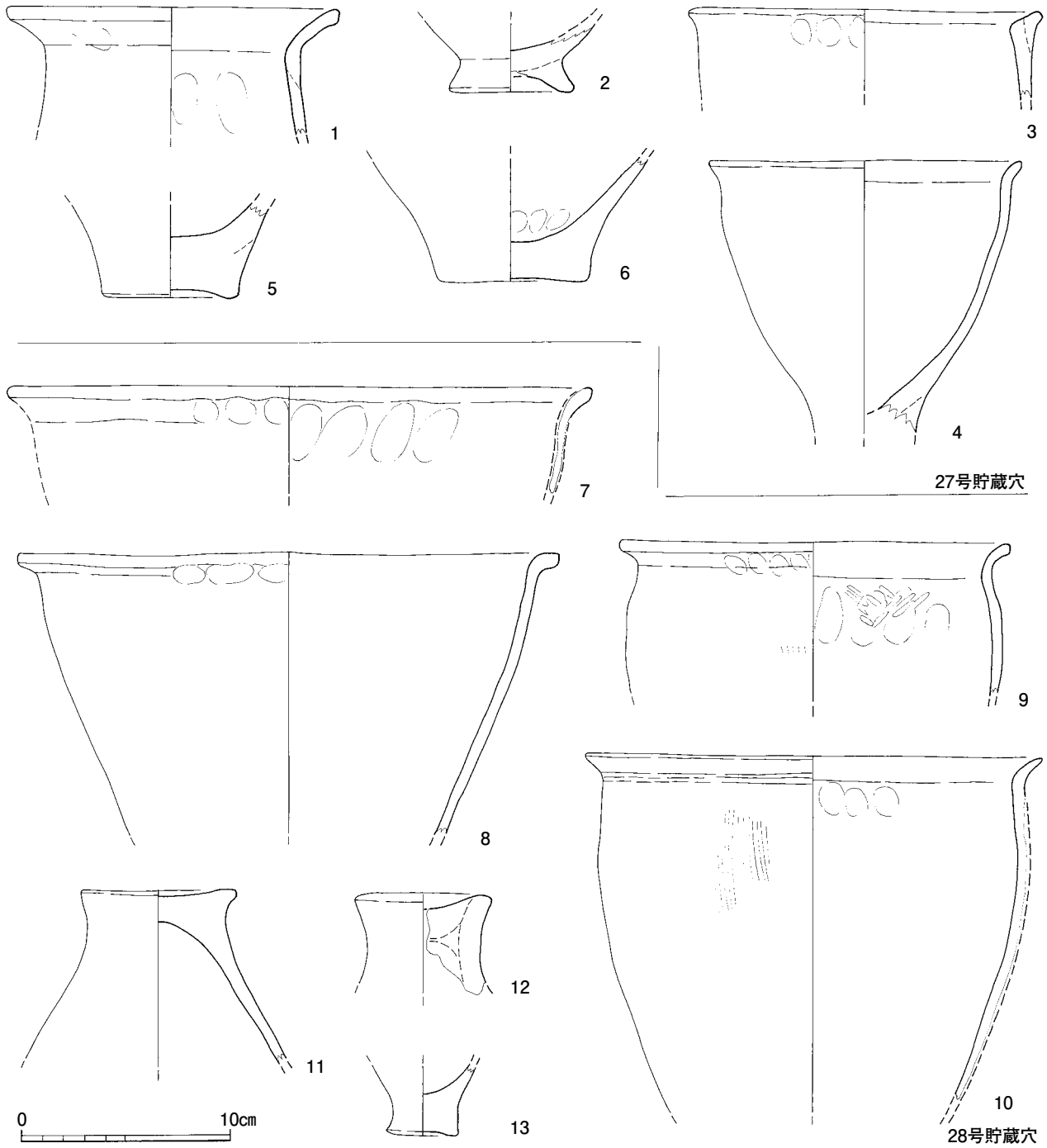
１は壺で、内外器面摩滅で調整不明。内外黄橙色で、変色なし。２は小型器種の底部で、器面摩滅が著しく調整不明。器面の残っている外面は黄灰色で、内面も胎土が露出しているものの黄灰白色で変色がないので甕ではなく、壺か鉢であろう。３は、器形は壺の底部だが外面赤橙色で赤化している。内面の暗黄灰色は使用変色とみられ、壺の胴部を転用したものだろうか。内外調整不明で、底部完存で積み上げ方法不明。４は如意形口縁甕で、器面剥落で調整不明。器壁も薄くなっている。外面赤橙褐色から暗黄橙灰色で赤化しており、内面は暗黄灰褐色に変色しているので煮沸使用されている。５は甕の底部で、器面摩滅で調整不明。外面赤橙褐色で赤変しており、内面は暗灰褐色なので煮沸使用されている。底部完存で積み上げ方法不明。

28号貯蔵穴（図版12、第51図）

１区中央西部に位置する長方形プランで、11号溝に切られる。床面が平坦で壁がわずかながら抉れるので貯蔵穴とした。壁沿いに貼り付くように土器が出土した。出土遺物から板付ⅡＢ～ⅡＣ式併行期である。

出土遺物（図版52、第58図）

７は鉢で、器面摩滅で調整不明。内外面赤橙褐色で赤変しており、煮沸使用されている。８は如意形口縁甕で、器壁が薄いのは器面が剥落したためである。口縁部の刻み目や頸部の沈線や突帯の有無は不明で、調整は見られない。内外口縁部が黄橙色で、それ以外は橙褐色なので、煮沸使用されている。９は如意形口縁甕で、器壁は本来薄い。口縁部に刻み目はないが頸部の沈線の有無は不明。外面タテハケがわずかに残り、内面ミガキ。外面頸部と内面上半部が黄橙色で、それ以外は灰橙褐色なので煮沸使用されている。内面口縁部が黒化しているのは伏せ焼きのためか。10は如意形口縁甕で、器壁が薄いのは器面が剥落したためである。口縁部の刻み目は不明で、頸部の沈線は狭く浅いものが２条見られる。外頸部と内面上半部が黄橙色で、それ以外は灰橙褐色で、外面下位は赤化していることから煮沸使用されている。11･12は蓋で、11は外面は均一に赤橙褐色で赤変しているので蓋であろう。器面摩滅で調整不明。内面は暗灰褐色なので煮沸使用された甕蓋である。天井部完存で積み上げ方法不明。12は積み上げ痕明瞭。13はミニチュアの甕の底部で、器面摩滅で調



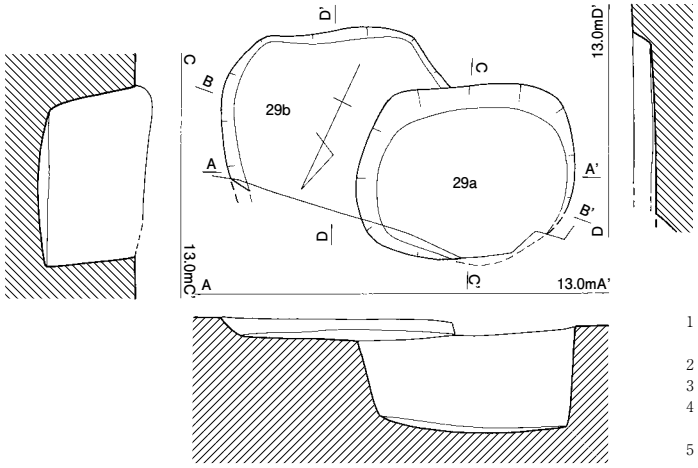
第58図　貯蔵穴出土土器実測図14　1区27･28号貯蔵穴（1/3）

整不明。橙褐色で赤変してないので煮沸使用されてない。底部完存で積み上げ方法不明。

29a･b号貯蔵穴（図版12、第59図）

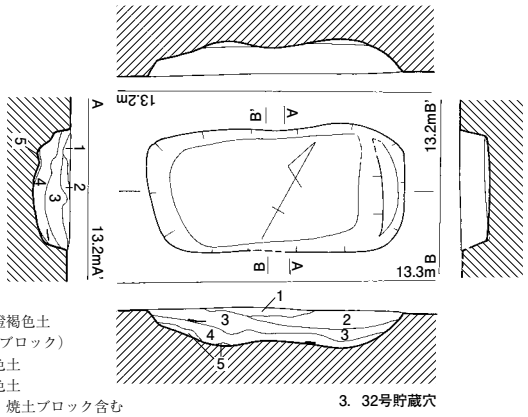
１区中央部に位置する隅円方形プランで、撹乱に切られている。現場では１基としていたが整理段階でa･b号２基に分けた。上面は同一層であったためプランを分けられなかった。29a号の中位の３層には炭化物の広がりがあったが、３層下面は29a号の上位を掘り直した土坑の床面に廃棄されたものである。炭化物の中には種子や木製品の痕跡はなかった。29b号は出土遺物から板付Ⅱｂ式併行期である。

出土遺物（図版52、第60図）



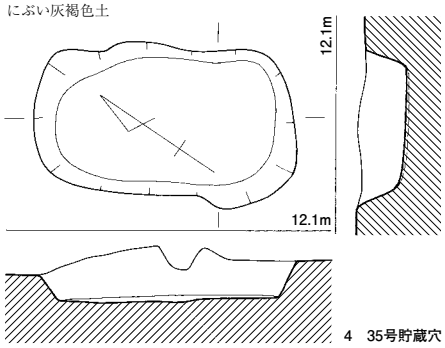
1 灰褐色土
2 黄橙色土＋灰褐色土
3 黒色土＋灰褐色土
炭化物を含む
4 暗灰褐色土
5 暗黒灰褐色土
6 にぶい灰褐色土
7 暗灰褐色土＋黄褐色土

1. 29a・b号貯蔵穴

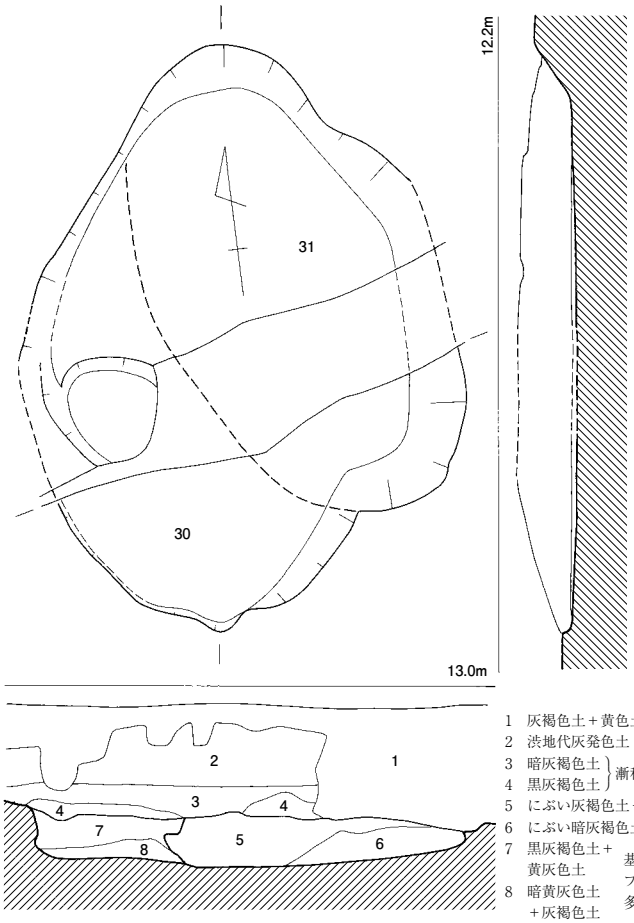


1 にぶい橙褐色土
（基盤層ブロック）
2 黒灰褐色土
3 暗灰褐色土
4 黒色土 焼土ブロック含む
炭化物少ない
5 にぶい灰褐色土

3. 32号貯蔵穴

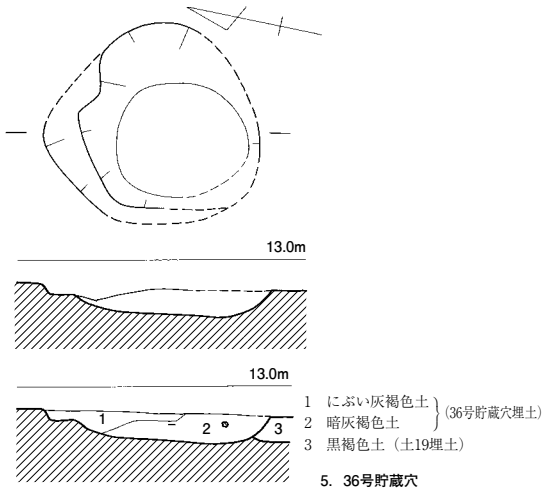


4 35号貯蔵穴



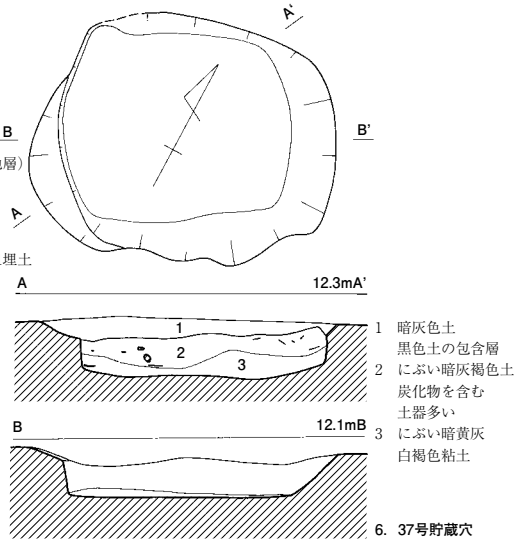
1 灰褐色土＋黄色土＋橙褐色土（整地層）
2 渋地代灰発色土（客土）
3 暗灰褐色土 } 漸移層
4 黒灰褐色土 }
5 にぶい灰褐色土＋黄灰色土 } 貯31埋土
6 にぶい暗灰褐色土＋黄灰色土 }
7 黒灰褐色土＋黄灰色土 } 貯30埋土
8 暗黄灰色土＋灰褐色土
基盤層ブロック多く含む

2. 30・31号貯蔵穴



1 にぶい灰褐色土 } (36号貯蔵穴埋土)
2 暗灰褐色土 }
3 黒褐色土（土19埋土）

5. 36号貯蔵穴



1 暗灰色土
黒色土の包含層
2 にぶい暗灰褐色土
炭化物を含む
土器多い
3 にぶい暗黄灰
白褐色粘土

6. 37号貯蔵穴

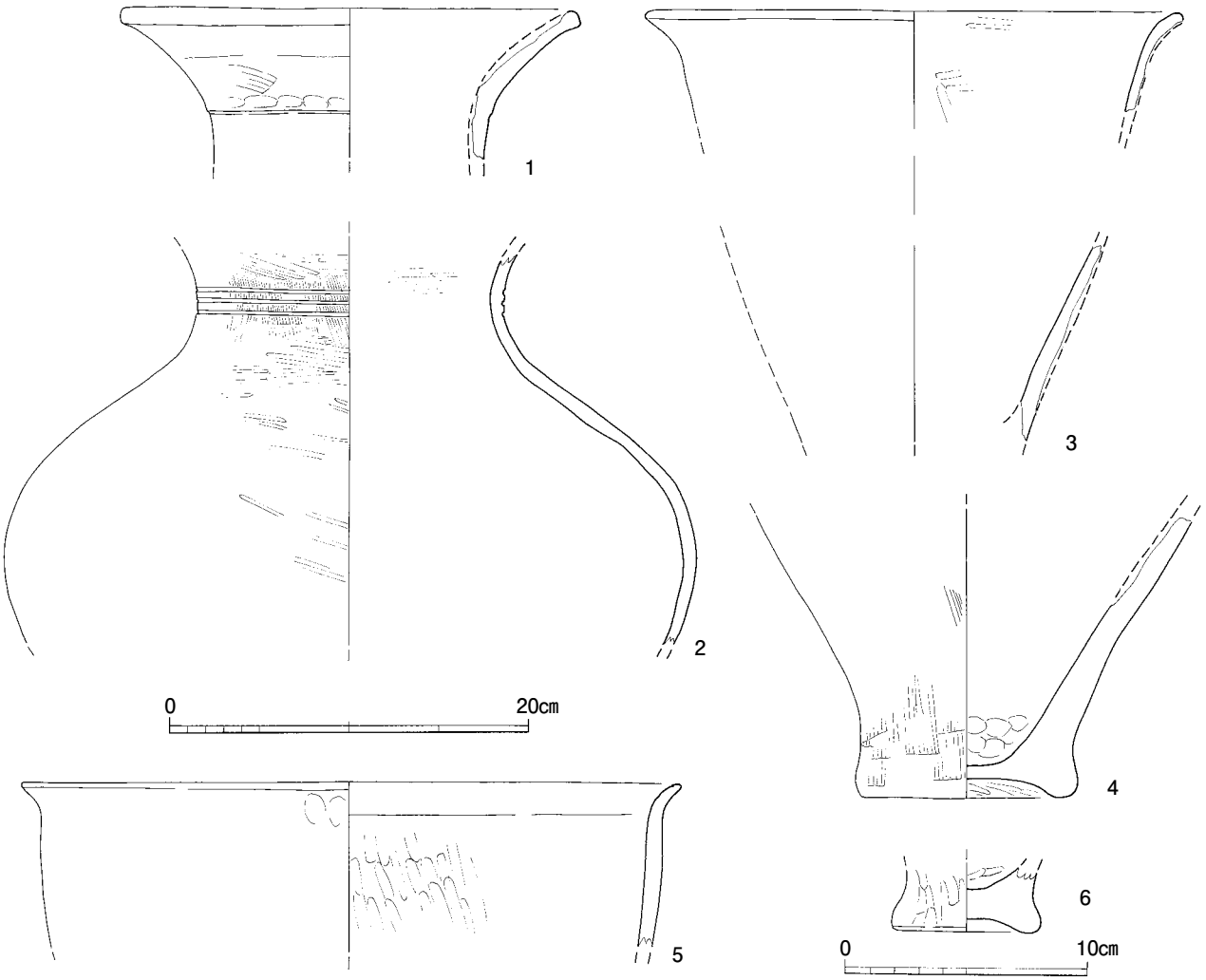
0 2m

第59図　貯蔵穴実測図５　1区29a・b ～ 32・35 ～ 37号貯蔵穴（1/60）

1は有段壺で段はわずかなので削り出しの可能性が高い。2は広口壺の頸部で、外面はタテハケ後ミガキ、内面ミガキ。頸部は櫛書きでなく沈線。外面暗橙灰色で内面が黒灰色なのは焼成不良による。3は如意形口縁甕で、口唇部に刻み目はない。外面は器面が摩滅していて調整不明、内面はミガキがわずかに見られる。内外面黒灰色から暗赤橙色に赤化しており、内面は暗黒褐色なので、煮沸使用されている。4は甕の底部で、器面摩滅で胴下位のみ器面が残り、外面タテハケ、内面調整不明。外面は外底面以外赤橙褐色で全体的に赤変しており、内面はにぶい暗淡灰褐色なので煮沸使用されている。底部完存で積み上げ方法不明。5は如意形口縁甕で、口唇部が摩滅しているので刻み目の有無は不明。外面は器面が摩滅していて調整不明、内面はミガキ。外面は胎土の色調でにぶい橙褐色だが、内面は暗橙褐色なので、煮沸使用されている。6は内外面にぶい黄橙色で焼成不良がないので鉢だろう。器面の残りが良く内外ミガキ。底部完存で積み上げ方法不明。

30･31号貯蔵穴（図版12、第59図）

1区中央部に位置する不整形プランで、中央に調査区境が入る。検出段階でプランが分けられたが、床面が一致したため同一遺構の埋土の差と誤認して出土遺物を混在させている。土層で確認して別遺構で、31号が30号を切ることがわかった。壁に抉れがある部分もあったが、北側は崩落しており、壁の立ち上がりは緩やかだった。出土遺物から板付ⅡＢ式併行期である。



第60図　貯蔵穴出土土器実測図15　1区29号貯蔵穴（2･3は1/4、他は1/3）

出土遺物（図版52、第61図）

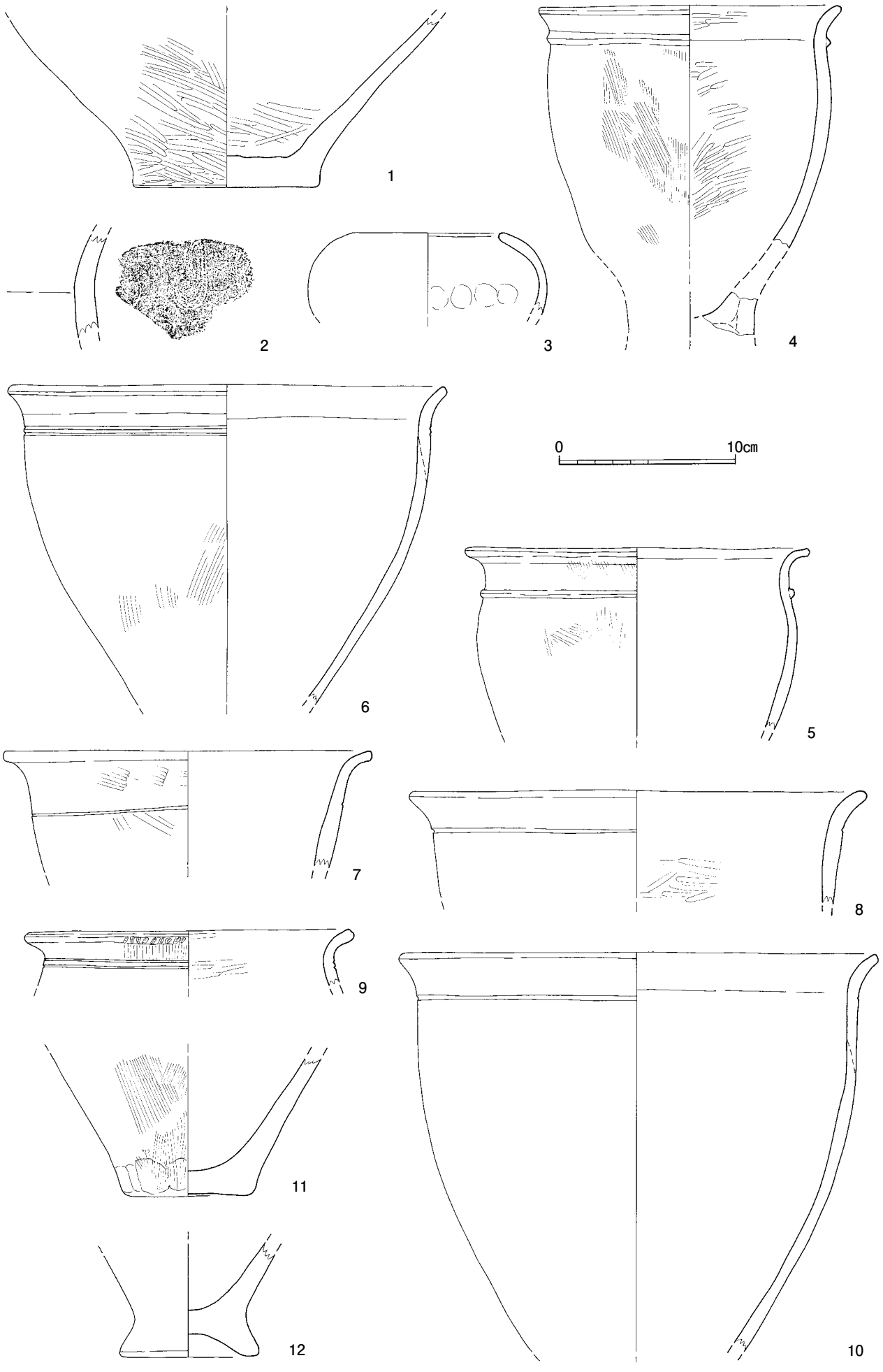
第61図１は壺の底部で、器面の残りが良く内外ミガキ。外面にぶい黄橙色から黄橙褐色で、内面のにぶい暗灰褐色は焼成不良のためである。外面胴下位から底部に黒斑あり。底部完存で積み上げ方法不明。２は大型壺頸部片で、貝殻腹縁刺突による蕨手文が入る。外面ミガキで、内面は器面摩滅のため調整不明。外面は黄橙色、内面が暗灰褐色なのは焼成不良のためである。３は無頸壺で、口縁部は丸みを持ち、内面は平滑なので、頸部がないのは明らかである。内外黄橙色で変色なし。４は小型の如意形口縁甕で、胴部までと底部は図上接合。器壁が厚く、頸部の突帯と口唇部に刻み目はない。外面タテハケ、内面はミガキ。斜めに２次被熱があり、黒色化している。２次加熱を受けていない部分は黄灰色を残すので使用頻度は低かっただろう。５は小型の如意形口縁甕で、頸部の突帯と口唇部に刻み目はない。外面タテハケ、内面は器面摩滅で不明。突帯は小さく、下位は調整が粗く隙間がある。内外頸部は黄橙色で、他は暗灰褐色なので煮沸使用されている。６は如意形口縁甕で口唇部はナデで平坦になっている。肩部の沈線は深い。器面剥落が著しいが、外面タテハケ、内面はナデが残っている。器面が残っている部分で内外暗灰褐色だが、胎土の露出した他の部分には変色は見られない。煮沸使用されたかわからない。７は如意形口縁甕で、肩部の器壁が厚い。外面はハケが部分的に残り、内面は摩滅で調整不明。外面橙褐色で、無面は黒斑部分に当たりにぶい黄黒灰色。８は如意形口縁甕で、頸部の沈線は下方から施されている。外面器面摩滅、内面はミガキが残る。内面頸部は黄橙色だが、他は暗灰褐色なので煮沸使用されている。９は如意形口縁甕で、口縁部に幅の太い刻み目が入る。頸部の２条沈線は上が細く浅い。外面頸部はタテハケ、内面はミガキ。外面から内面口縁部はにぶい暗黄灰色で、内面は胴部が暗灰褐色なので煮沸使用されている。10は如意形口縁甕で、口唇部はナデで平坦になっている。肩部の沈線は深い。器面剥落が著しく調整不明。黄橙色を基調とするが、内面は暗灰褐色、外面は胴下位が赤橙色に赤化しており、明らかに煮沸使用されている。11は甕の底部で、外面タテハケ、内面ナデで調整不明。外面は黄橙色から赤橙褐色で赤変しているが、内面は黄灰色で変色していないので、煮沸使用されているものの頻度は少なかっただろう。底部完存で積み上げ方法不明。12は甕の底部で、内外面器面剥落のため調整不明。内面は暗灰褐色で、外面赤橙色から黄橙色で赤変著しく、塩化ナトリウムらしい白色物質が染みこんだ部分があるので製塩土器の可能性がある。底部完存で積み上げ方法不明。

第62図１は如意形口縁甕で、口縁部に刻み目なし。器面の残りが悪く調整不明。内面にぶい黄灰色で変色がなく、外面は暗灰褐色で赤変は見られないので、煮沸使用されていない可能性がある。２は大型の甕で、38号貯蔵穴出土片と接合した。21号貯蔵穴出土の第50図10と酷似するが径が異なるので別個体。口唇部は内面側が尖るようにナデられており、外面側に下方から刻み目が入る。接合部の剥落した跡には沈線とハケが入る。外面タテハケ、内面ミガキで、内外口縁部が黄橙色から橙褐色で、煮沸使用はされていない。３は外底も胴部外面と同じ色調に赤変しているので蓋であろう。外面タテハケ、内面摩滅で調整不明。外面赤橙褐色で赤変しており、内面は暗灰褐色なので煮沸使用されている。天井部完存で積み上げ方法不明。

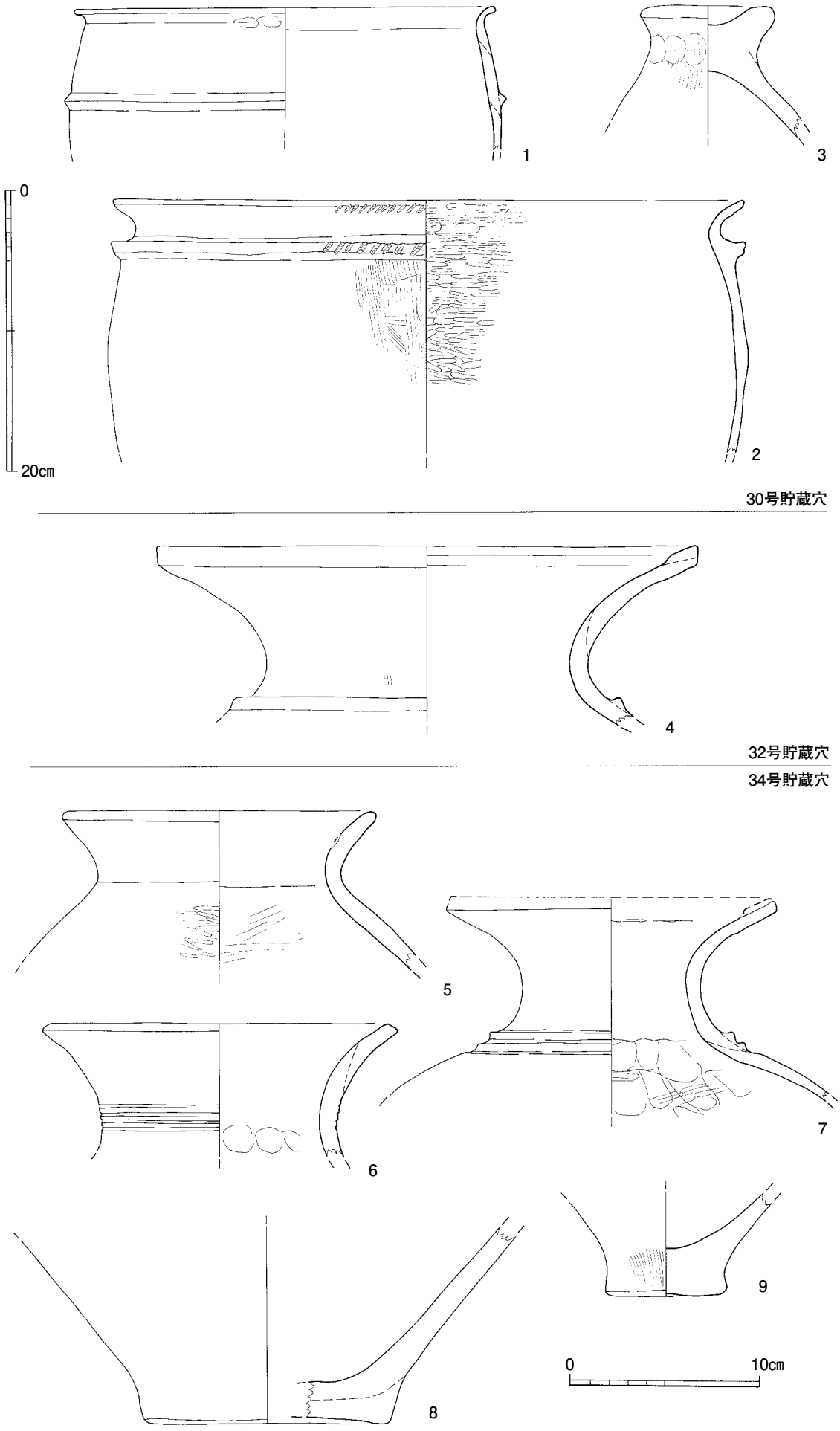
このほか磨製石剣（第146図15）が出土している。

32号貯蔵穴（図版13、第59図）

１区東部に位置する長方形プランで、２号溝の西に位置する。貯蔵穴特有の基盤層ブロックは見



第61図　貯蔵穴出土土器実測図16　1区30号貯蔵穴（1/3）



第62図　貯蔵穴出土土器実測図17　1区30･32･34号貯蔵穴（1･2は1/4、他は1/3）

られなかったので根拠が弱いが、床面が平坦で企画的な平面プランなので貯蔵穴とした。出土遺物は少ないが板付ⅡＢ式併行期であろう。

出土遺物（第62図）

４は広口壺で、口縁内面肥厚部には施文なし。内外器面摩滅で調整不明。外面橙褐色、内面黄橙色で変色なし。

34号貯蔵穴（図版12、第64図）

１区南西部に位置する大型長方形プランで、西側は段落ちで大きく削平されている。南西部のプランの窪みは削平によるもので、本来は企画的な長方形であろう。土層で単一遺構であることが確認され、貯蔵穴特有の基盤層ブロックが多く混ざる層が最下層に厚く堆積している。出土遺物から板付ⅡＣ式古段階併行期である。

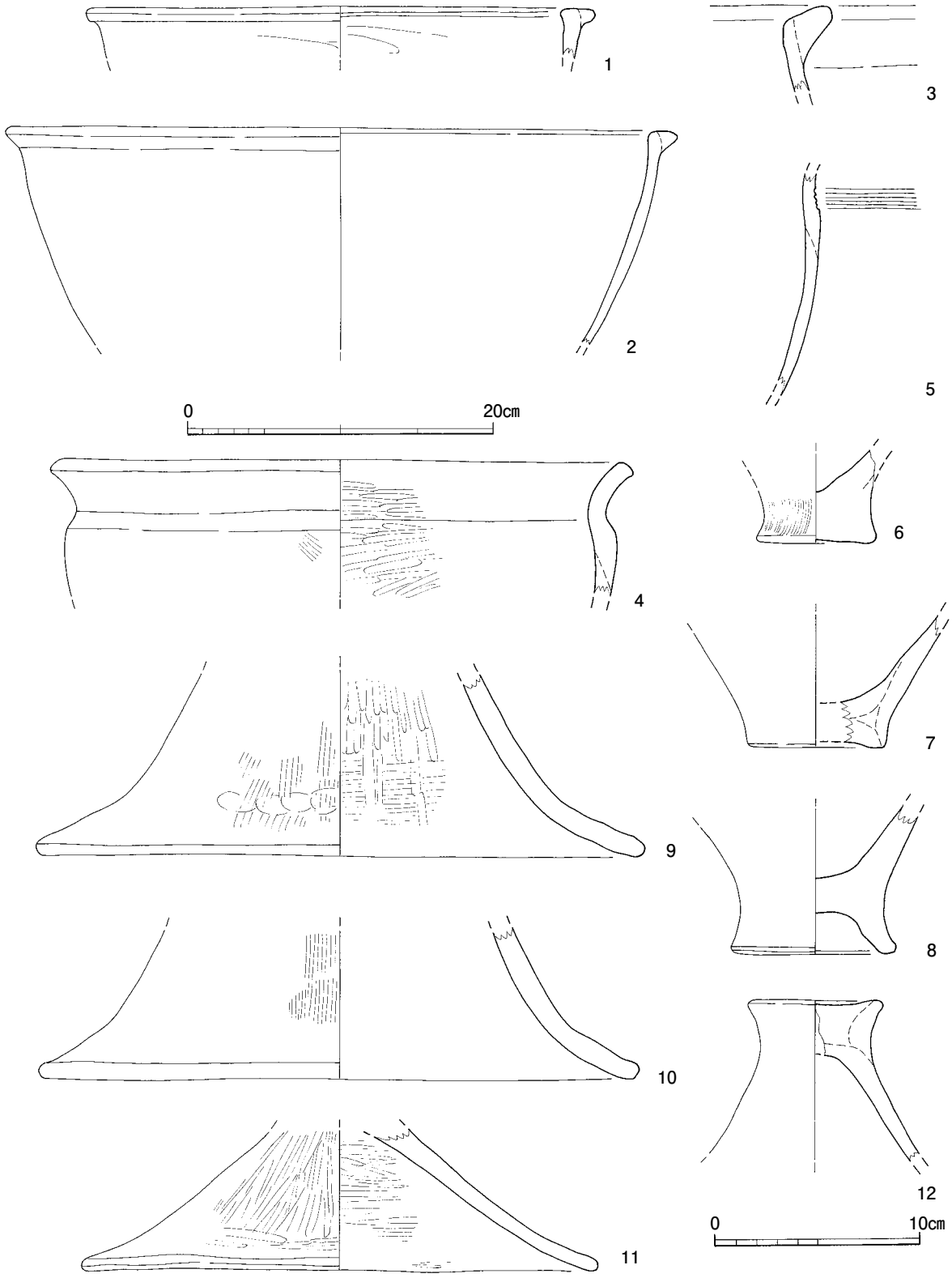
出土遺物（第62図）

第62図５は壺で、口縁部と肩部は図上接合である。内外ナデ後ミガキで、橙褐色で変色なし。６は広口壺で、口縁部と頸部は図上接合。頸部の４条沈線は櫛書きによる。内外ナデで、黄橙色で変色なし。７は広口壺で、口縁部と頸部・肩部の図上接合。口縁部内面は肥厚部が剥離しており、接合部の調整痕が沈線として残っている。器面は摩滅しており調整不明。内外面とも口縁部が赤橙色で著しく赤片しており、肩部の赤変が弱いので、倒立して転用して器台とした可能性がある。８は壺の底部で、内外面器面剥落のため調整不明。内外黄橙色。底部完存で積み上げ方法不明。９は壺の底部で、外面はタテハケ、内面は器面摩滅で調整不明、外面黄橙色で一部が赤変しており、内面は橙褐色の器面がわずかに残っているので、煮沸使用されていない。

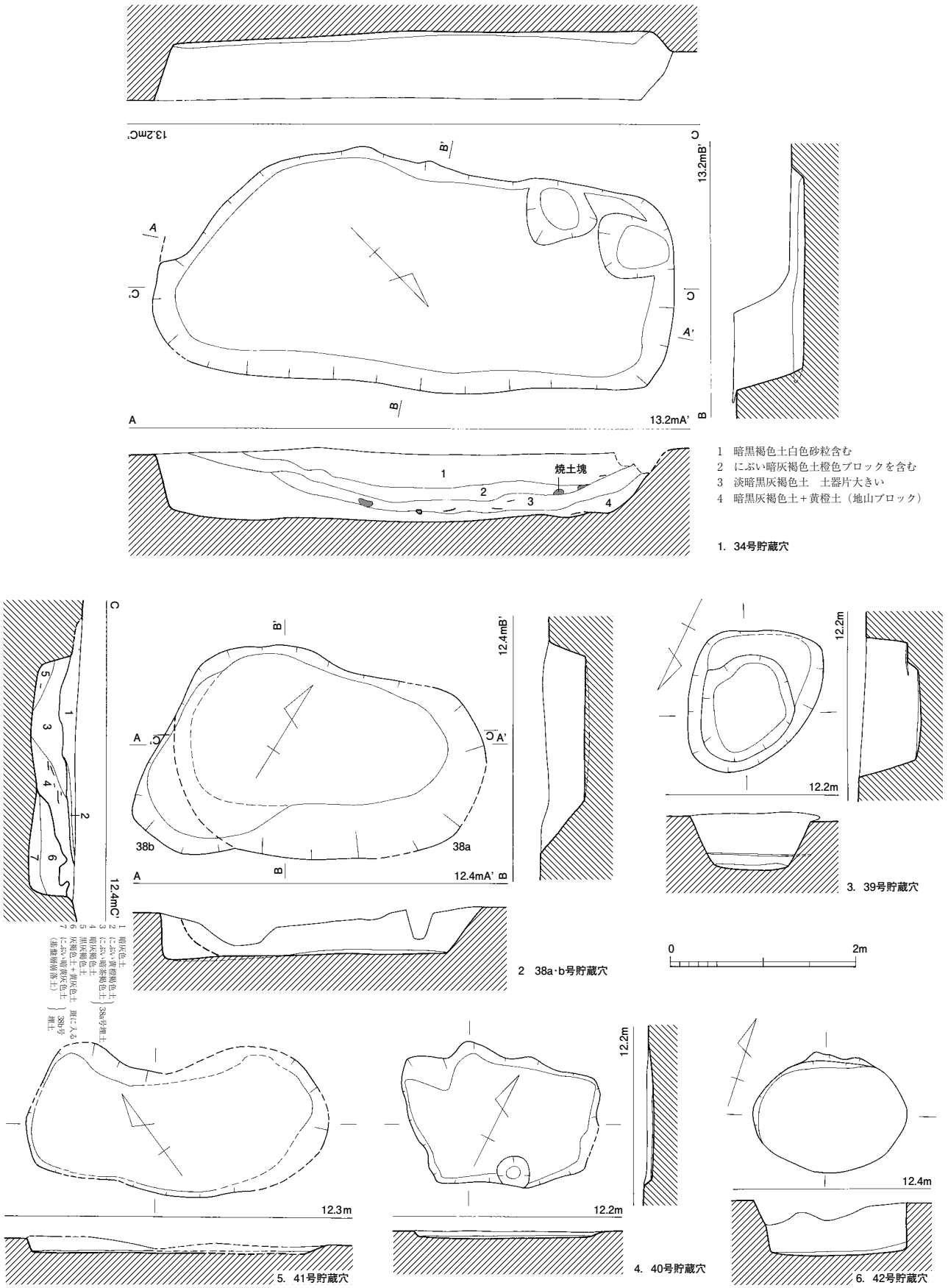
第63図１は肥厚口縁甕で、内外ケズリ状のナデ。外面にぶい黄灰色で、口唇部から内面が黒灰色なのは伏せ焼きのためであろう。煮沸使用の有無不明。２は身の浅い大型甕で、器面剥落のため調整不明。外面は赤橙色からにぶい黄橙色で、内面と口唇部は伏せ焼きによる焼成不良で黒灰色を呈するが、被熱のため部分的に赤化していることから煮沸使用されているとわかる。３は肥厚口縁甕で、器壁剥落のため調整不明。内外黄灰色だが、胎の色調であり、器面がないので煮沸使用の有無不明。４は甕で、器壁が厚い。肩部に積み上げ部のひびが入っている。外面はハケ、内面ミガキ。内外橙褐色で、変色がないので煮沸使用されていない可能性が高い。５は甕で、器壁剥落のため調整不明。肩部の沈線は櫛書きによるもの。内外黄橙色で、黒色は胎の色調が露出したもの。器面がないので煮沸使用の有無不明。６は小形の甕の底部で外面タテハケ、内面ナデ。外面橙褐色で底部縁が赤化しており、内面はにぶい暗灰褐色なので頻度は少ないものの煮沸使用されている。底部完存で積み上げ方法不明。７は甕の底部で、器面摩滅で内外調整不明、外面赤橙色で全体が赤変しており、内面は暗灰黒褐色なので、煮沸使用されている。８は甕の底部で、器面は摩滅で調整不明。外面橙褐色で、底部の裾に赤変がある。内面はにぶい暗黄灰色なので煮沸使用されている。底部完存で積み上げ方法不明。9･10は大型の蓋で、９は器面がよく残っており、外面タテハケ、内面ヨコハケ後タテミガキ。内面は器面剥落のためにぶい黄橙色で変色がないが、外面裾部縁が赤変しているので煮沸使用された甕蓋である。10は外面タテハケ後ミガキ、内面ナデ。外面は黄橙色で変色がない。器面が摩滅しているので裾縁の焼成不良の変色の有無はわからない。内面がにぶい暗橙灰色なので焼成不良と見られることから伏せ焼きされている。11は蓋で、器面がよく残っており、外

面タテハケ後ミガキ、内面ヨコミガキ。内面は黄橙色で変色がないが、裾縁が黒く変色しているので伏せ焼きされている。したがって外面が全面黒いのは焼成のためでなく、意図的に炭化物を吸着させたものだろう。

35号貯蔵穴（図版13、第59図）



第63図　貯蔵穴出土土器実測図18　1区34号貯蔵穴（２は1/4、他は1/3）



第64図　貯蔵穴実測図７　1区34･38 ～ 42号貯蔵穴（1/60）

１区中央部西端に位置する隅円方形プランで、58号竪穴住居跡の床面から検出された。床面は平坦で壁は崩落していると見られる。出土遺物から板付ⅡＣ式併行期である。

出土遺物（第65図）

１は広口壺の口縁部で、内面肥厚で肥厚部上面は無文。内外摩滅で調整不明。黄橙色を呈し、変色なし。２は如意形口縁甕で、口唇部には下方からの刻目が入る。口縁部片のみなので調整不明。内外橙褐色で変色がないので煮沸使用されていない可能性がある。３は如意形口縁甕で、器面の残りがよく外面タテハケ、内面はナデ。内外橙褐色で、外面に黒班あり。変色がないので煮沸使用されていない可能性がある。４は甕で、外面タテハケ、内面ミガキ・ナデ。内外面はにぶい暗灰褐色なので、本来の色調がわからないため煮沸使用の有無はわからない。５は口縁肥厚甕で外面はタテハケ、内面ナデ。外面黄灰色で、内面は黒灰色に変色しているので伏せ焼きされたものだろうか。６は砲弾形刻目突帯文甕で、突帯には幅が広い刻み目が入る。器面摩滅で調整不明。内外黄橙色で変色がないので煮沸使用されていない可能性がある。７は口縁肥厚甕で、器壁が薄いのは内器面の剥落のためである。内外器面は摩滅。内外面黄橙色から黄灰色で変色がないが、胎土の色調なので煮沸使用の有無不明。８は甕の底部で、内外摩滅で調整不明。黄橙色を呈し、変色なし。

36号貯蔵穴（第59図）

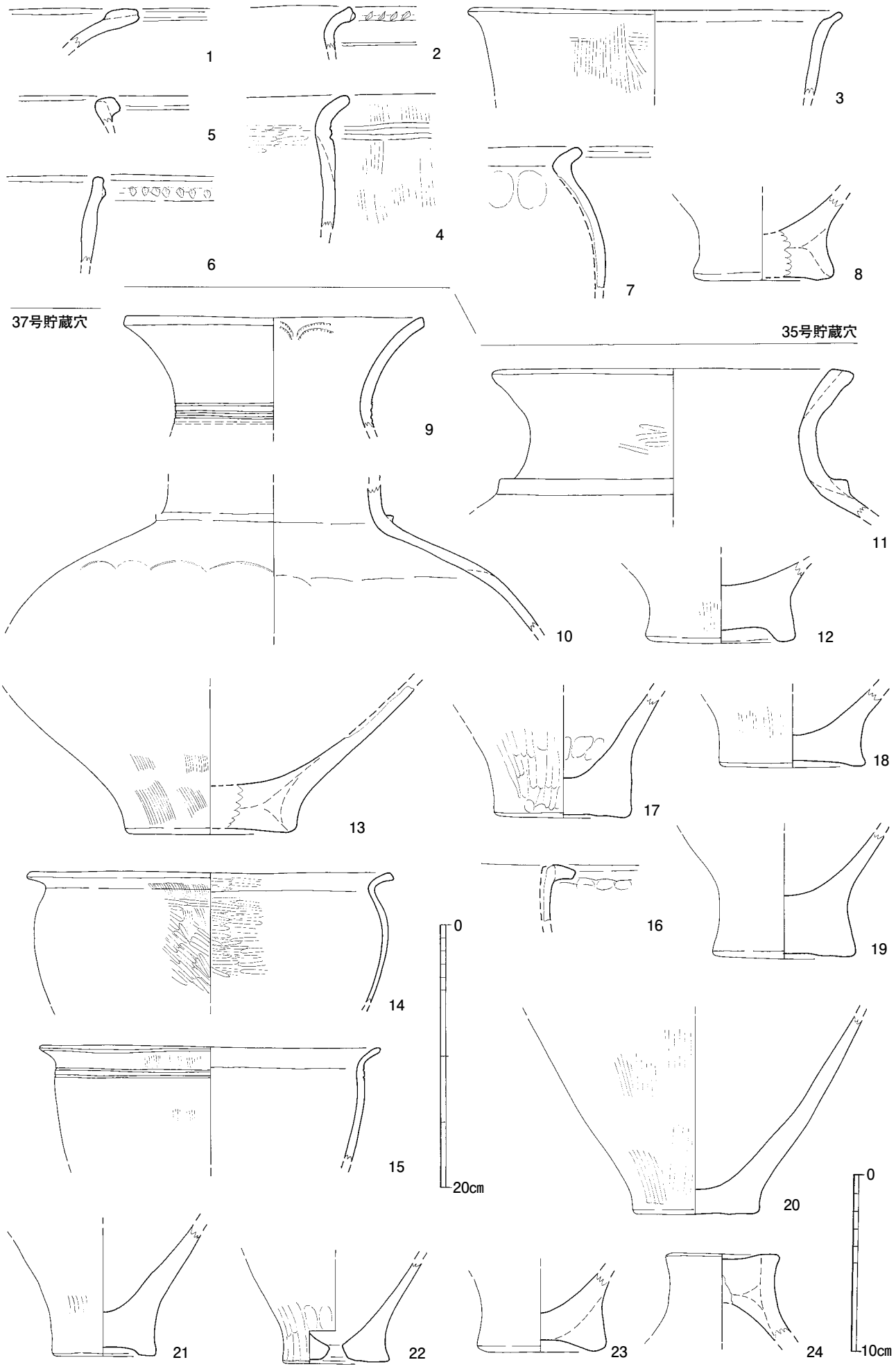
１区中央部に位置する円形プランで、撹乱を受けているため不明確な部分が多い。19号土坑を切り、床面は平坦で壁は崩落していると見られる。出土遺物がないので時期を特定できない。

37号貯蔵穴（図版13、第59図）

１区中央部に位置する略方形プランで、上西に下がる地形の包含層から掘り込まれており、上面は浅い掘り込みを受けている。床面は平坦で壁は抉れが残る。26号貯蔵穴と同一個体の破片が出土しており、出土遺物には板付ⅡＣ式併行期から中期初頭まで時期幅がある。

出土遺物（第65図）

９は広口壺の口縁部で、内面口縁部には貝殻腹縁刺突の重弧文が入る。内外摩滅で調整不明。黄橙色を呈し、変色なし。10は大型広口壺の肩部で、文様は弧文がわずかに確認でき、貝殻腹縁刺突ではない弧状の刺突文が入る。内外摩滅で調整不明。内外黄橙色を呈し、変色なし。11は広口壺の口縁部で、口唇部・頸部突帯には刻み目はない。口唇部は平坦面を持つ。外面口縁部はナデで、頸部はミガキ、内面は器面摩滅で調整不明。外面橙褐色、内面黄橙色を呈し変色なし。12は壺底部で、器面は残りが悪く外面ナデ、内面調整不明。内外面橙褐色で変色がないが、底部の縁がやや赤変しているので煮沸使用されている。底部完存で積み上げ方法不明。13は大型壺の底部で、外面目の細かいタテハケ、内面ナデが部分的に残る。外面暗黄灰褐色、内面暗灰褐色で、赤化がないことから内面は内容物による変色であろう。積み上げ痕は明瞭。14は甕で、器壁が薄く、外面は口縁部がタテハケ、胴部ミガキ、内面は丁寧なミガキである。内面明茶橙褐色で変色がなく、外面は口縁部が灰褐色なので胴部の黒灰色は黒班であろう。15は如意形口縁甕で、外面タテハケ、内面器面摩滅で不明。内面の胎土の色調が口縁と肩部が橙褐色に変色しているので煮沸使用されている。16は広口壺の口縁部で、外面肥厚で肥厚部上面は無文。内外摩滅で調整不明。黄橙色を呈し、変色なし。17は壺の底部で、器面は残りが良く外面タテミガキ、内面ナデ。内外にぶい暗灰褐色。底部完存で積



第65図　貯蔵穴出土土器実測図19　1区35・37号貯蔵穴（9～11・13～15・22は1/4、他は1/3）

み上げ方法不明。18は壺の底部で、外面は器面の残りが良くナデ、内面は器面摩滅で調整不明。内外にぶい暗橙灰色で変色なし。外底に黒斑あり底部完存で積み上げ方法不明。19は甕底部で、器面は残りが悪く内外面調整不明。にぶい暗灰褐色で変色がないが、赤化が部分的に見られるので煮沸使用されているだろう。底部完存で積み上げ方法不明。20は甕底部で、器面は残りが悪く外面タテハケがわずかに残り、内面調整不明。内面にぶい暗黄灰色で変色がないが、胎の色調であり、外面は黄橙色で赤化しているので煮沸使用されている。底部完存で積み上げ方法不明。21は甕底部で、器面は残りが悪く調整不明。外面黄橙色、内面にぶい暗灰褐色。底部裾に赤変があるので煮沸使用されている。底部完存で積み上げ方法不明。22は甕底部で、器面は残りが悪く内外面調整不明。変色がないが、外面は赤橙色で赤化が見られ、内面はにぶい暗灰褐色に変色しているので煮沸使用されている。底部完存で積み上げ方法不明。底部の穿孔は外面からで、孔の表面が変色していないので煮沸使用後に穿孔されている。23は甕底部で、器面は残りが悪く調整不明。内外面黄橙色で変色がないが、胎土の色調なので煮沸使用されているか不明。底部完存で積み上げ方法不明。24は赤く焼けているが、外底まで焼けているので蓋にした。器面摩滅で調整不明。積み上げ痕は明瞭である。

このほか柱状石斧（146図20）が出土している。

38a･b号貯蔵穴（図版13、第64図）

１区中央部西端に位置する２基の貯蔵穴が切り合ったもので、調査段階では１基としたため遺物が混在している。隅円方形プランで、a号は主軸方向を異にする。略方形プランで、上西に下がる地形の包含層から掘り込まれており、上面は浅い掘り込みを受けている。床面は平坦で壁は抉れが残る。出土遺物から中期初頭である。

出土遺物（第66･67図）

第66図１は壺の口縁部で、器面摩滅で調整不明。内外黄灰色で黒灰色の胎土の色調が露出している。外面の器面が残っている部分はにぶい黄橙灰色。２は大型壺の肩部で、器面摩滅で調整不明。内外胴下位は赤化しているので２次加熱を受けている可能性がある。３は壺の底部で、胴下位外面に縦のケズリが入っており、異質な調整である。上げ底で蓋の可能性もある。内外変色なし。４は壺底部で、外面は器面の残りが悪く調整不明、内面はナデ。内外黄橙褐色で変色なし。底部完存で積み上げ方法不明。

第67図１は小型如意形口縁甕で、内外面器面摩滅で不明。黄橙褐色から暗灰褐色で、器面本来の色調は見られないが煮沸使用による変色が見られる。２は小型如意形口縁甕で、外面タテハケ、内面ミガキ。内面はにぶい黄灰色で変色はないが、外面はにぶい黄灰黄色で胴部は暗灰褐色、胴下位は赤化している。煮沸使用の可能性あり。３は大型甕の口縁部で、器面の残りが良く、外面は口縁部がナデ、胴部はタテハケ。内面はナデとミガキ。内外橙褐色で変色ないので煮沸使用されていない。４は如意形口縁甕で、器壁は剥落があるものの本来薄い。口縁部に刻み目なし。外面目の細かいタテハケ、内面器面剥落で調整不明。内外頸部はにぶい黄橙色で変色はないが、それ以外はにぶい暗黄灰褐色なので。煮沸使用されている。５は甕で、口唇部は平坦面を持つ。器面摩滅で調整不明。黄橙色で変色なし。６は如意形口縁甕で、器壁の剥落はあるものの本来薄い。外面口縁部ナデ。胴部タテハケ。内面はミガキとナデ。口縁部は摩滅しており刻み目の有無は不明。内外明橙褐

色から黄橙色で変色がないので、煮沸使用されていない。７は甕底部で、器面は残っていて外面タテハケ、内面ナデ。内面にぶい黄灰色で変色がないが、外面黄橙色で底部縁に赤化があるので使用頻度は低いものの煮沸使用されている。底部完存で積み上げ方法不明。８は壺底部で、器面は残りが悪く内外調整不明。内外面橙褐色で変色がない。底部完存で積み上げ方法不明。９は甕底部で、器面は残りが悪く内外面調整不明。内面にぶい暗灰褐色で変色しており、外面は赤化しているので煮沸使用されている。底部完存で積み上げ方法不明。10は甕底部で、器面は内面が残っていてナデ、外面は剥落して調整不明。内面と外底はにぶい灰褐色で、外面胴部はにぶい赤橙灰色で赤変しているので煮沸使用されている。11は甕底部で、内外器面剥落で調整不明。内外にぶい灰褐色で、外面底部縁は赤変しているので煮沸使用されている。12は蓋で、器面は内面が残っていて、外面は剥落して調整不明。内外面にぶい赤紫灰色で赤変しているので煮沸使用された甕蓋であろう。底部完存で積み上げ方法不明。13は形態から蓋であろう。内外面器面摩滅で不明。外面は黄橙色から赤橙色で、赤化しているので煮沸使用されているから甕蓋である。

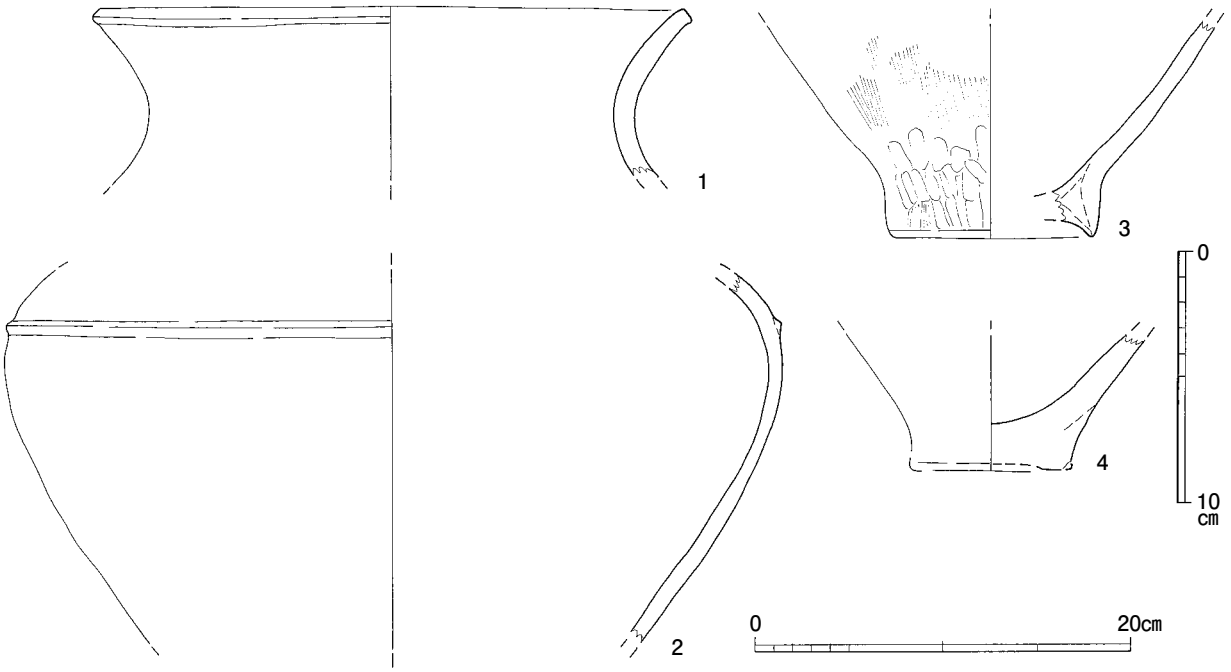
このほか砥石（第147図３）・不明石製品（第147図12）・磨製石剣（第146図16･18）が出土している。

39号貯蔵穴（図版13、第64図）

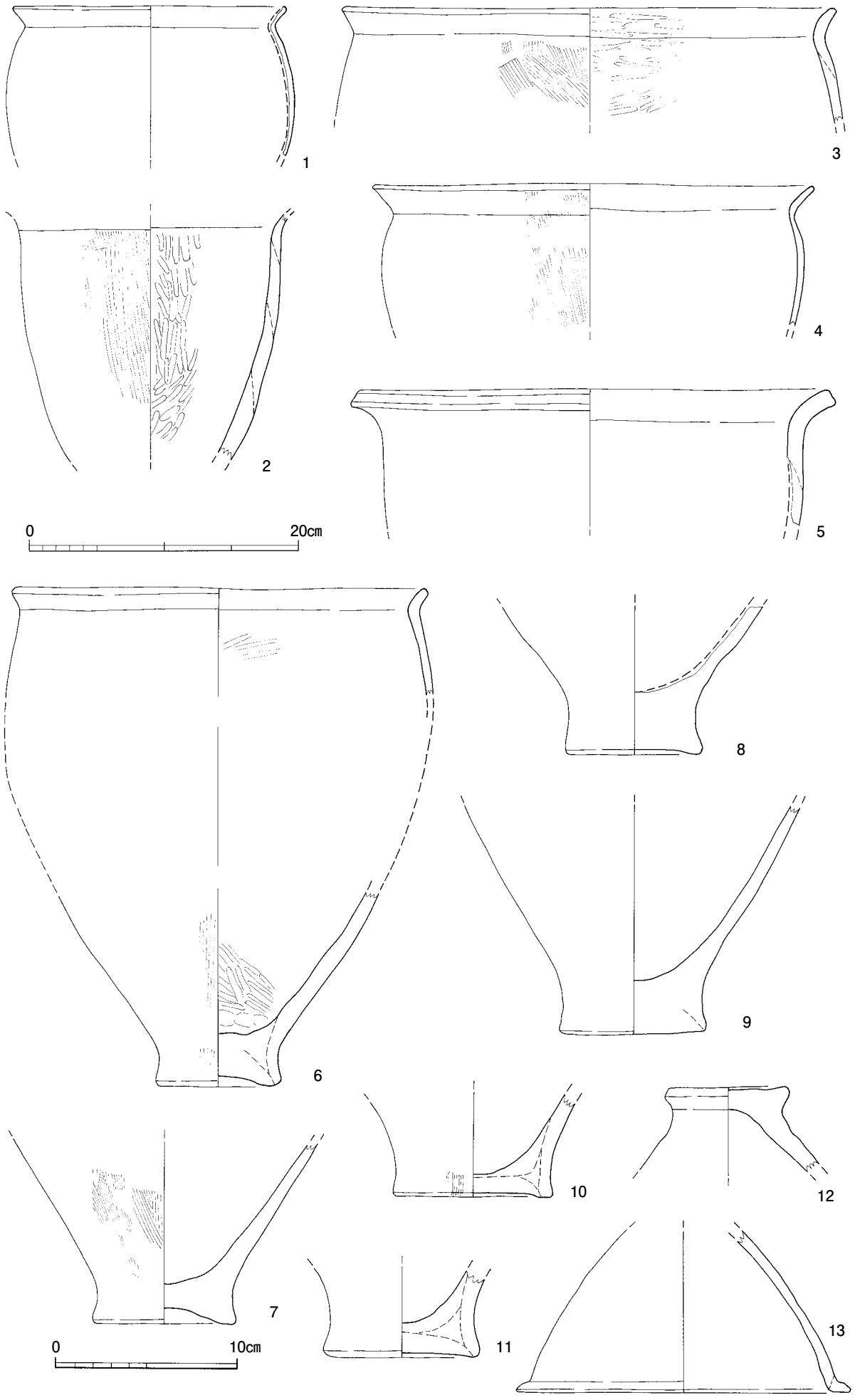
１区中央部に位置する。楕円形プランで、床面が平坦で壁が急に立ち上がり、大型で深いことから貯蔵穴とした。中位に土器や炭化物が集中して入っており、下層は基盤層の崩落土ブロックが面的に堆積していた。出土遺物から中期初頭である。

出土遺物（図版52、第68図）

１は広口壺で、器面摩滅が著しく調整不明だが、頸部に文様はない。内外黄橙色で変色なし。２は小型無頸壺で、口縁部外側を肥厚させている。内外器面摩滅のため調整不明。口縁部には刻み目



第66図　貯蔵穴出土土器実測図20　1区38a･b号貯蔵穴（２は1/4、他は1/3）



第67図　貯蔵穴出土土器実測図21　1区38号貯蔵穴（4は1/4、他は1/3）

はないが肩部の文様の有無ははっきりしない。内外にぶい黄橙色で変色なし。３は小型壺で、内外器面摩滅のため調整不明。文様がないのは器面が失われたためかもしれない。内外にぶい黄橙色で黒斑以外の変色もない。底部完存で積み上げ方法不明。４は内面頸部以下が黒灰色を呈しているので、煮沸使用されている。５は器面摩滅で肩部内面のオサエで窪んだところにわずかにハケが残る。６は肥厚口縁甕で、丸みをもつ肥厚部が貼り付けられている。器面摩滅のため調整不明。外面から口唇部まで暗赤橙色に赤化しており、内面はにぶい暗灰褐色なので煮沸使用されている。７は肥厚口縁甕で、丸みをもつ肥厚部が貼り付けられ、胴部との接合部に隙間が空いているのは器面が剥落したためである。器面摩滅のため調整不明。外面にぶい暗黄灰色、内面はにぶい黄橙褐色で、口縁部が暗黄灰色なので煮沸使用されている。９は内外黄橙色を基調とするが、外面下位が赤変しているので蓋ではなく、煮沸使用された鉢である。外面は器面摩滅しており内面はミガキ。口縁部が暗灰褐色なのは煮沸使用時に蓋を被せた痕跡であろう。

40号貯蔵穴（図版14、第64図）

１区中央部西端に位置する。略方形プランで、浅いながらも床面が平坦で壁が急に立ち上がるので貯蔵穴とした。出土遺物が少ないが板付ⅡＢ～ⅡＣ式併行期であろう。

出土遺物（第68図）

11は如意形口縁の鉢で、器面摩滅のため刻み目の有無、調整は不明。外面口縁部は黄橙色の器面がわずかに残る。内面黄橙色で変色がないので煮沸使用されていない可能性がある。

41号貯蔵穴（図版14、第64図）

１区中央部西端に位置し、５号溝方形周溝墓の東周溝に切られる。不整形プランだが、２基の主軸方向が異なるものが切り合っているのかもしれない。土層で確認できないので、１つの遺構として報告する。浅いが床面が平坦で大型なので貯蔵穴とした。出土遺物が少なく時期を特定できない。

出土遺物（第68図）

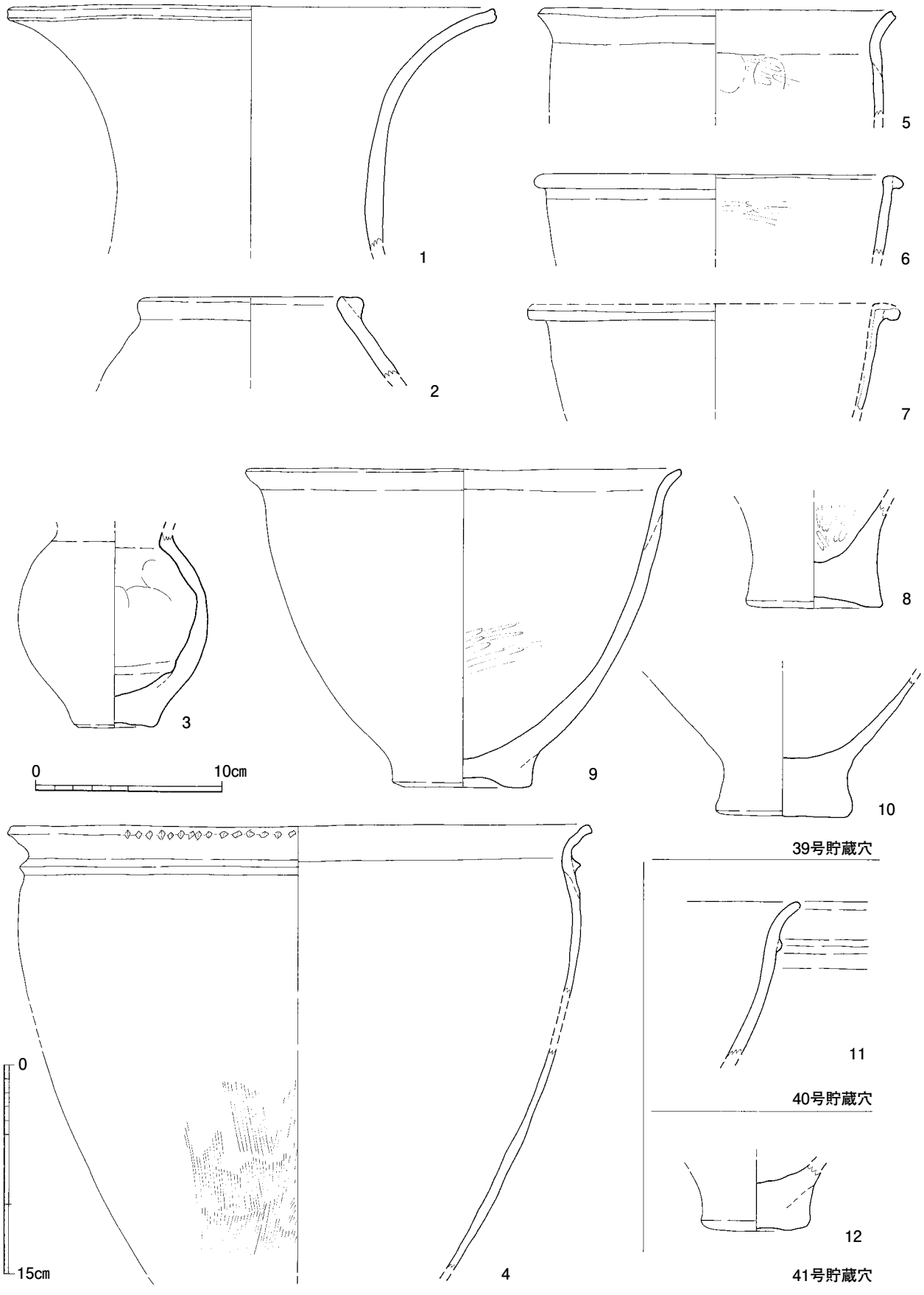
12は甕の底部で、底部周縁が欠損しているので、転用のために加工された可能性もあるが、一部が突出しているので欠損と判断した。内外面は器面剥落が著しく調整不明。内面は暗黄灰色に変色しており、外面は赤橙褐色で赤変色しているので煮沸使用されている。

42号貯蔵穴（第64図）

１区中央部西端に位置し、17号溝の床面から検出された。楕円形プランで、壁の一部に抉りが入っており、床面が平坦なので貯蔵穴とした。出土遺物がないため時期を特定できない。

43号貯蔵穴（図版14、第69図）

１区中央部の北側に位置する大型の長方形土坑で、上位を38a･38b号溝に切られる。壁の立ち上がりは緩やかだが崩落のためだろう。下位は基盤層崩落土を含む埋土があるので貯蔵穴だろう。出土遺物としては東播系須恵器摺鉢底部片と備前焼摺鉢片が出土しているが、38号溝からの混入と見られ、時期を特定できない。



第68図　貯蔵穴出土土器実測図22　1区39～41号貯蔵穴（4は1/4、他は1/3）

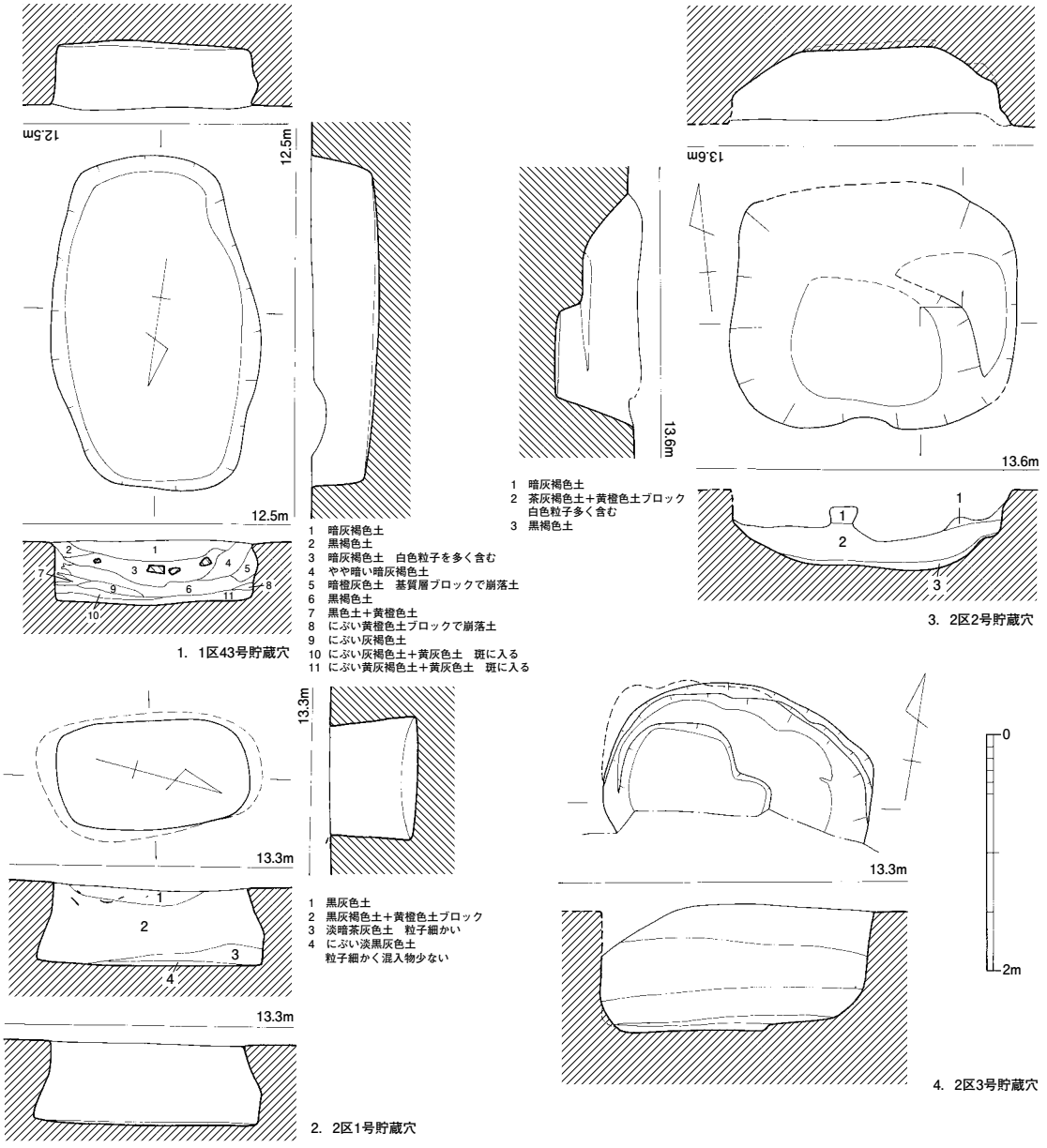
２区

１号貯蔵穴（第69図）

２区東西端の環濠内部に検出された貯蔵穴で、当初は36号土坑としていたが掘り進めると壁面が袋状に抉れることから貯蔵穴に変更した。小形の長方形プランで、土器は上位から多く出土している。４層は堆積層、３層は壁の崩落土と見られ、２層段階で意図的に埋め戻されている。第70図２は北九州市屋敷遺跡（註１）に近いので板付１式古段階平行で、これに次ぐ時期の第70図１があることから、遺構としては板付Ⅰ式新段階にあたる

出土遺物（第70図）

１は内外ケズリ状のナデ、外面はナデの下に条痕状の痕跡がある。小片のため反転復元できないが、胴部径14cmほどの小型甕である。刻目突帯が小さいのは小型品のためであろう。突帯上は平坦にナデられているため下垂突帯状になる。刺突は正面から右に向かって施している。内外変色はなく煮沸使用されていない。外面は黒灰色なのは黒斑であろう。２は屈曲如意形甕の胴部で、屈曲部



第69図　貯蔵穴実測図８　1区43号、２区1～3号貯蔵穴（1/60）

外面は内傾接合で、接合部が肥厚している。屈曲部の刻み目は突起の先端の角度に合わせて下から施している。屈曲部の上下は目の細かなハケ、内面は摩滅のため工具端しか残っていないが、外面と同じ目の細かいヨコハケである。内外面はにぶい暗灰橙褐色を呈し、煮沸使用の痕跡はない。３は壺の底部で、外面底部胴部の接合部はオサエ、他はナデ。外面は黄灰色、内面は淡橙色を呈し、外面の黒灰色は黒斑でそれ以外の変色なし。砂粒を多く含む。底部と胴部の接合状況は不明だが、内底が平坦なので、粘土板から積み上げたものと見られる。２とは別個体。

２号貯蔵穴（図版14、第69図）

２区東西端の環濠内部に検出された貯蔵穴で、当初は35号土坑としていたが大きな楕円形プランであることが判明したので貯蔵穴に変更した。34号土坑に切られており、切り合いは明瞭。上位は撹乱も受けており、１層はほとんど残っていなかった。第70図７は小片なので混入品と見られるので、遺構の時期は第70図４の時期の板付ⅡＣ式併行期であろう。

出土遺物（第70図）

４は壺の口縁部で、器壁が厚いことから大型品であろう。色調は外面にぶい黄灰白色、内面暗黄灰褐色を呈する。内面の色調は焼成の影響であろうか。５は外底部が赤変し、上部は黒褐色なので煮沸使用された甕の底部である。器面摩滅で調整不明。内面はナデ。６は東北地方縄文晩期末の大洞式の系譜を引く浮線文土器の模倣土器で、眼鏡状浮文部分か、突出しているので口縁部の突起部分であろう。鉢の体部が残っていないため上下・傾きは不明。外面と上面が灰黒褐色、下面がにぶい暗橙灰褐色を呈する。器面調整はナデのみ。

このほか磨製石斧（第147図１）が出土している。

３号貯蔵穴（図版14、第69図）

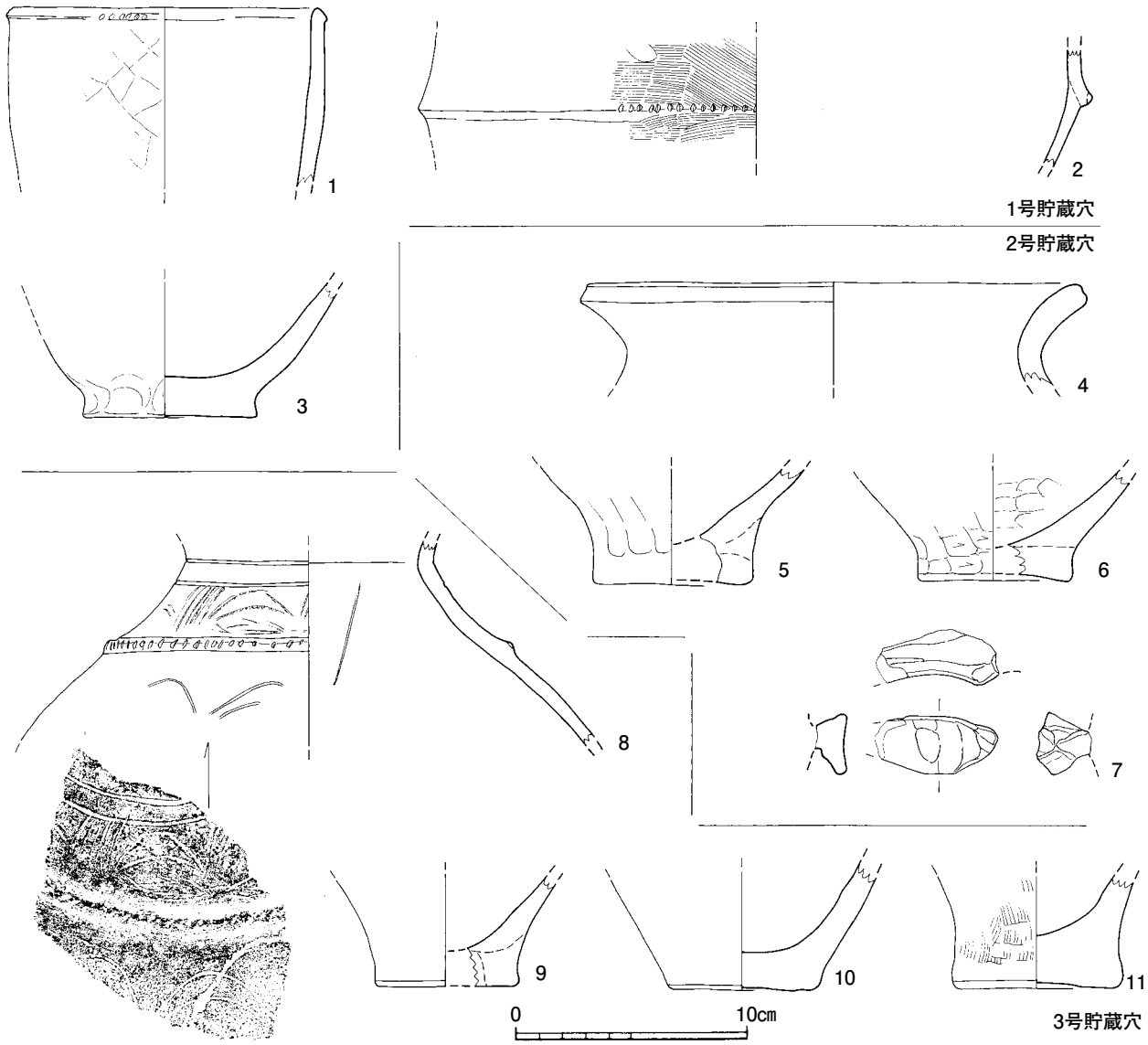
２区東西端の環濠内部に検出された貯蔵穴で、当初は39号土坑としていたが大きな楕円形プランで側面が抉れる部分があることが判明したので貯蔵穴に変更した。南半を用水路の掘り方に切られている。出土遺物が少ないが、板付ⅡＣ式併行期だろう。

出土遺物（図版52、第70図）

８は歪みがあり頸部の沈線と肩部の刻目突帯の中間の傾きで図化し、反転復元しているが、胴部が膨らむ壺であることはまちがいない。突帯の上は貝殻復縁刺突による施文と沈線が組み合わさっている。橿原系の文様が崩れたものであろう。突帯の下は２重の弧の下に横位の沈線があるので重弧文と見られる。内外ナデで、砂粒多い。内外橙褐色で変色なし。９は小型の甕底部で、内外器面摩滅で調整不明。外面は赤変して橙褐色、内面は暗灰褐色なので煮沸使用されている。底部は中央に筒状粘土を置き、その周りに粘土板を貼り付けている。10は胴部が膨らまない壺の底部だろう。器面が摩滅しているが外面はナデのみか。内面黄色、外面黄白色で煮沸使用の痕跡はない。11は内外面に煮沸使用の痕跡がないが甕だろう。外底は中央部がやや上がっている。底面は丁寧なタテハケ。器壁が厚く重量感がある。混入物多く、にぶい黄灰色を呈する。

註

（財）北九州市教育文化事業団1992『屋敷遺跡』北九州市埋蔵文化財調査報告書第126集



第70図　貯蔵穴出土土器実測図23　２区1 ～ 3号貯蔵穴（1/3）

（３）土坑

調査時に土坑としていたが、貯蔵穴に変更したものが多いため欠番が多い。41基の番号をつけているが、掘り直しを含めると42基となる。

１号土坑（図版14、第71図）

１区北東部端に位置し、１号溝に切られている。東半分が失われており、本来は平面円形と考えられる。壁際は堆積層だが、中期初頭に一度に埋まっているので人為的に埋められた可能性がある。出土遺物から中期初頭に属する。

出土遺物（図版52、第72図）

１は広口壺で、胴中位以上と底部は図上接合。ヘラ状工具の刺突による無軸羽状文と何らかのスタンプによる弧文が入る。器面は摩滅しており部分的にタテハケが見られる。内面は調整不明。器面は黄橙色だが、肩部と底部に部分的に赤変がある。底部の内面が暗灰褐色なのは焼成不良のためである。底部完存で積み上げ方法不明。２は器面摩滅で内面調整不明で、外面にわずかにタテハケが残る。３は蓋で、天井部は丸みをもつ。外面タテハケ、内面はナデ。外面黄橙褐色、内面黄灰色で変色なし。天井部完存で積み上げ方法不明。

３号土坑（図版15、第71図）

１区北東部に位置し、１号竪穴住居跡に切られている。北半分が失われており、本来は平面円形と考えられる。暗灰褐色土の緩やかな堆積で、下層は薄いことから墓ではない。出土遺物が少なく時期を特定できない。

出土遺物（第72図）

４は如意形口縁甕で、口唇部が摩滅しているため刻み目の有無は不明。頸部の沈線は幅が広く下方から施されている。外面ナデ部分しか残っていないが、沈線下はハケが入る可能性が高い。内面ミガキ。内外黄橙灰色で変色がないので煮沸使用の有無は不明。

７号土坑（図版15、第71図）

１区北東部に位置し、東部を撹乱に切られている。本来は平面楕円形と考えられる。出土遺物が少ないうえ、図化できるものがないので時期不明。

９号土坑（図版15、第71図）

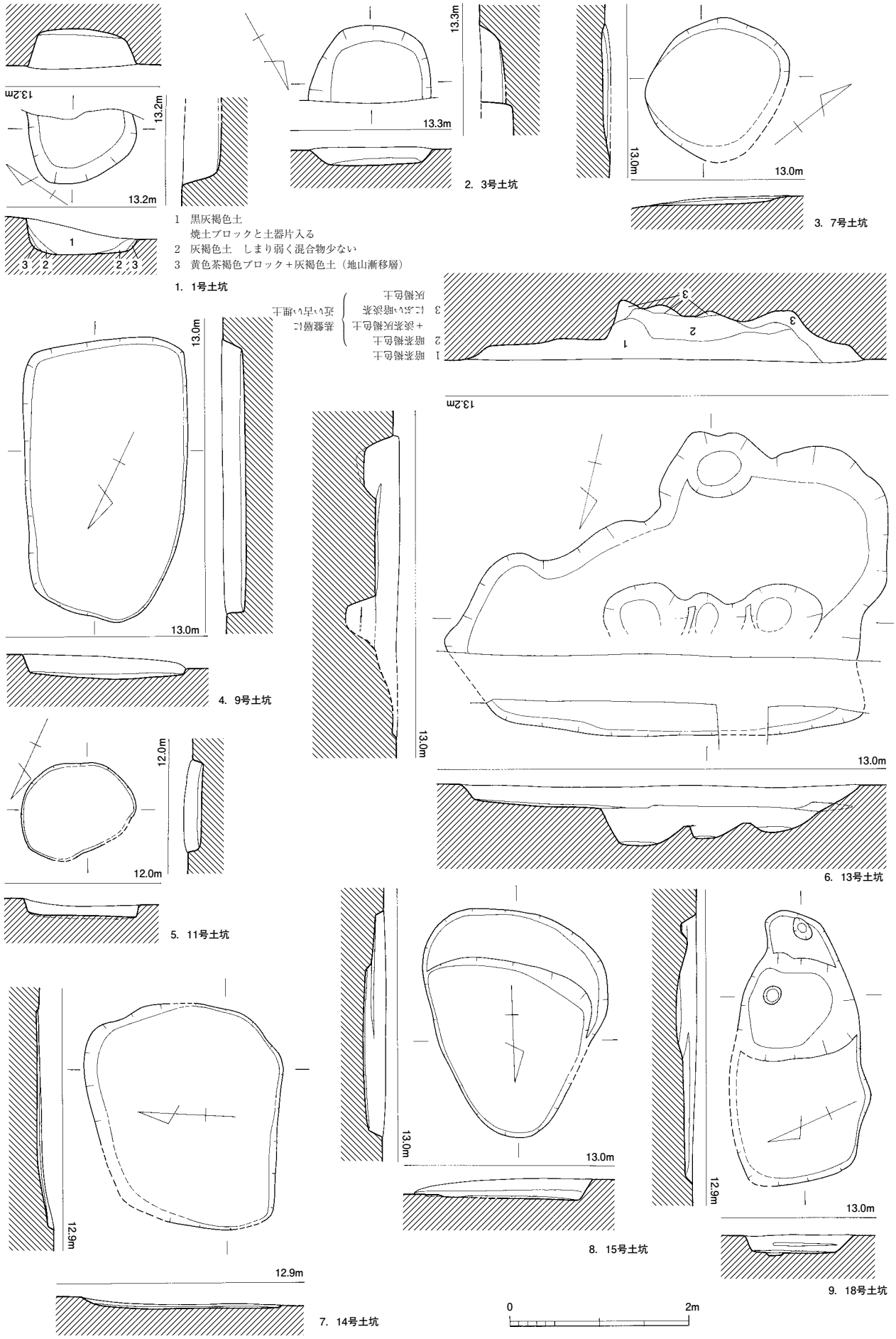
１区中央部西側に位置し、平面略方形と考えられる。浅く床面はほぼ平坦で大型長方形貯蔵穴の可能性もあるが、不確実なので土坑で掲載する。出土遺物が少ないうえ、図化できるものがないので時期不明。

11号土坑（図版15、第71図）

１区中央部西端に位置し、７号竪穴住居跡の床面から検出された。13号竪穴住居跡とも切り合うが、先後関係はわからなかった。平面略円形と考えられる。浅く床面はほぼ平坦である。出土遺物は少ないが、時期は中期初頭であろう。

出土遺物（第72図）

５は壺の口縁部で、内外器面摩滅で調整不明。内外口縁部が黒灰色で、赤変が認められるので欠損後倒立して転用した可能性がある。７は壺底部で、内外とも器面の残りが悪く調整不明。内外黄橙褐色で変色なし。胴下位に黒斑あり。底部完存で積み上げ方法不明。６は大型壺肩部片で、貝殻腹縁刺突による無軸羽状文と重弧文が入り、文様帯の間の沈線は押し引き文。外面はミガキ、内面は器面摩滅のため調整不明。外面の黒灰色は焼成不良の黒班ではなく、器面を黒くするための炭素吸着であり、研磨されている。その間に赤色顔料が見られるので彩文があった可能性がある。内面の黄橙色は胎土の色調が露出したもので変色の有無は不明。７は器面摩滅で外面に黒斑あるが、変色はない。８は大型如意形口縁甕で、口縁部に歪みがあるので傾きは不確実。下端は積み上げ部で剥離している。口唇部や突帯に刻み目はない。内外器面摩滅で調整不明。外面口縁部は黄橙色で、それ以外は内外とも赤変しており煮沸利用されている可能性がある。底部の積み上げ痕は明瞭。９は如意形口縁甕で、口唇部や突帯に刻み目はない。外面タテハケがかろうじて見られ、内面摩滅で調整不明。内外黒灰色なので黒斑部分にあたる可能性がある。10は煮沸使用の痕跡がないので脚付き杯だろう。内外器面摩滅で調整不明。外底と内面が黒灰色なので、倒立して焼成している。それ以外は黄灰色を呈する。11は、内面は暗灰褐色に変色しているのに外面は橙褐色で赤変がなく、縁が突出しているのに摩滅していないことから、蓋であろう。内外面器面摩滅で調整不明。



第71図　弥生時代前期から中期前葉の土坑実測図１　1区1･3･7･9･11･13 ～ 15･18号土坑（1/60）

このほか打製石斧（第146図28）が出土している。不明石製品（第275図８・９）は中世の混入として掲載した。

13号土坑（第71図）

１区中央部の５号溝東辺西側に位置し、中央を撹乱に切られる。平面不整形プランの大型土坑だが、浅く床面は凹凸がある。２次加工剥片（第146図８）が出土しているが、出土遺物が少ないうえ、図化できるものがないので時期不明。

14号土坑（図版15、第71図）

１区中央部５号溝東辺西側に位置し、西部を撹乱と８･15号掘立柱建物跡に切られる。平面方形プランの大型土坑で、貯蔵穴の可能性もあるが、浅いため確証がない。出土遺物が少ないうえ、図化できるものがないので時期不明。

15号土坑（図版15、第71図）

１区中央部の５号溝東辺西側に位置し、平面不整形プランの大型土坑で、貯蔵穴の可能性もあるが、浅いため確証がない。出土遺物が少ないうえ、図化できるものがないので時期不明。

18号土坑（図版15、第71図）

１区中央部西端に位置し、12号竪穴住居跡を切る。15b竪穴住居跡との先後関係はわからない。平面略長方形だが、２基が重複している可能性もある。出土遺物が少なく時期を特定できない。

出土遺物（第72図）

12は外面が黄橙色だがやや赤変しており、口唇部が丸みを持ち、内面裾部が黒灰色で、内面の器面の残る部分が暗赤黒褐色であることから、蓋である。外面は器面が摩滅しており、ハケ工具端部の痕跡だけが残っている。内外器面摩滅で調整不明。

19号土坑（図版15、第73図）

１区中央部に位置し、北半分を36号貯蔵穴と撹乱に切られており、切り合いは明らかに検出された。焼土が入っていたが床面は焼けてなかった。出土遺物から時期は中期初頭。

出土遺物（第74図）

１は甕の底部で、外面茶褐色で部分的に赤化しており、内面暗黄灰褐色で煮沸使用されている。内外器面摩滅で調整不明。

21号土坑（図版16、第73図）

１区中央部に位置し、北側を撹乱に切られる。平面不整形プランで、床面は緩やかに傾斜しているので貯蔵穴ではない。出土遺物が少ないうえ、図化できるものがなく、弥生前期の土器とわかる程度のものしかない。

24号土坑（図版16、第73図）

１区中央部西側に位置し、12号貯蔵穴を切り、７号溝に切られる。18号竪穴住居跡との先後関係はわからない。平面長方形で溝状だが、７号溝の北側には出ず、南壁は段をもって立ち上がる。出土遺物から時期は板付ⅡＢ式新段階～ⅡＣ式古段階だろう。

出土遺物（第74図）

２は如意形口縁甕で、外面斜め方向のハケ、内面ミガキで、内外黄橙褐色で煮沸使用の痕跡なし。３は如意形口縁甕で、外面タテハケ、内面は黄面摩滅で調整不明。外面頸部と内面頸部はにぶい黄灰色、それ以外は暗灰褐色で、口縁部内面は黒褐色なので蓋として煮沸使用されている。４は如意形口縁鉢で、内外器面摩滅で調整不明。内面はにぶい淡暗黄橙色でやや赤変している。内面は赤変が著しいので、中で火を使用した可能性がある。５は壺の底部の器形だが、外面の底部縁に赤化があるので、煮沸使用されているので甕の底部である。内面は器面摩滅が著しく、にぶい暗褐色に変色している。底部完存で積み上げ方法不明。６は外面が橙茶褐色で赤化がなく、内面はにぶい暗茶褐色で大きな変色がないことから、壺であろう。内外ナデのみで、ハケはない。底部完存で積み上げ方法不明。７は内面前面から外面口縁部まで赤変しているので蓋である。外面タテハケ、内面は摩滅で調整不明。外面はにぶい黄灰色、内面の器面の残っている部分は黒褐色に変色している。

26号土坑（図版16、第73図）

１区中央部西側に位置し、不整形プランで浅く、貯蔵穴が大きく削平され一部を別の遺構と切り合う遺構の可能性もあるが確証がないので土坑で掲載した。出土遺物は少ないが中期初頭だろう。

出土遺物（第74図）

８は逆Ｌ字口縁甕、外面はナデ、内面摩滅で調整不明。内外は橙褐色で変色していない。煮沸使用されているか不明。９は大型の壺で、口唇部は片単面をもつ。外面は口縁部ナデ、体部ミガキで文様なし。内面は器面摩滅で調整不明。外面は橙褐色、内面は胎土の色調が露出しているので変色の有無は不明。

28号土坑（第73図）

１区中央部西側に位置し、不整形プランで撹乱に南側を切られるので全体像がわからない。焼土がほぼ前面に広がっており浅く、29号貯蔵穴との切り合いは不明。出土遺物がなく時期を特定できない。

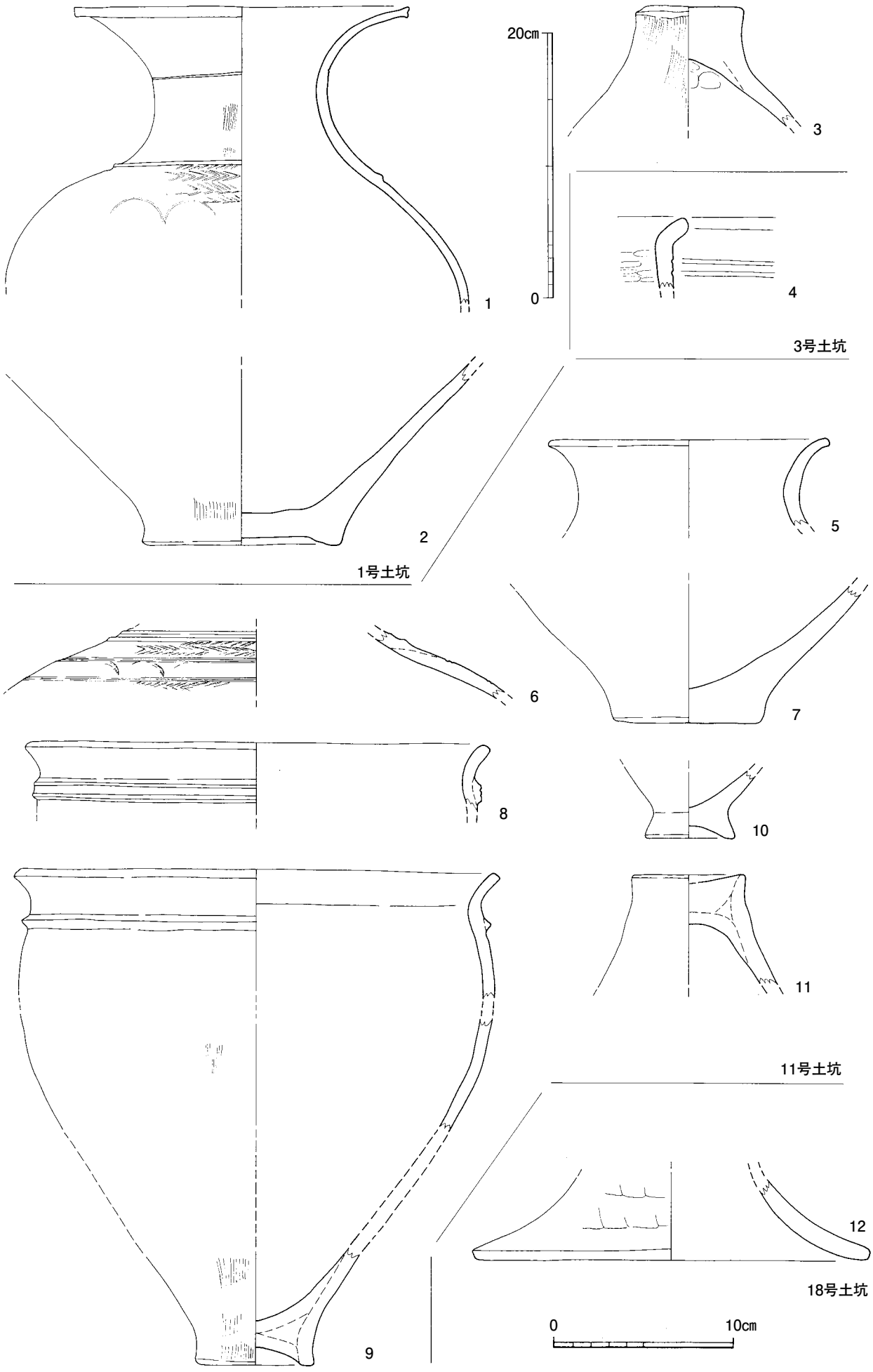
38号土坑（第73図）

１区中央部西側に位置し、不整形プランで４号竪穴住居跡に北側を切られるので全体像がわからない。10号貯蔵穴とは直接切り合わないので先後関係は不明。浅く出土遺物が少なく時期を特定できない。

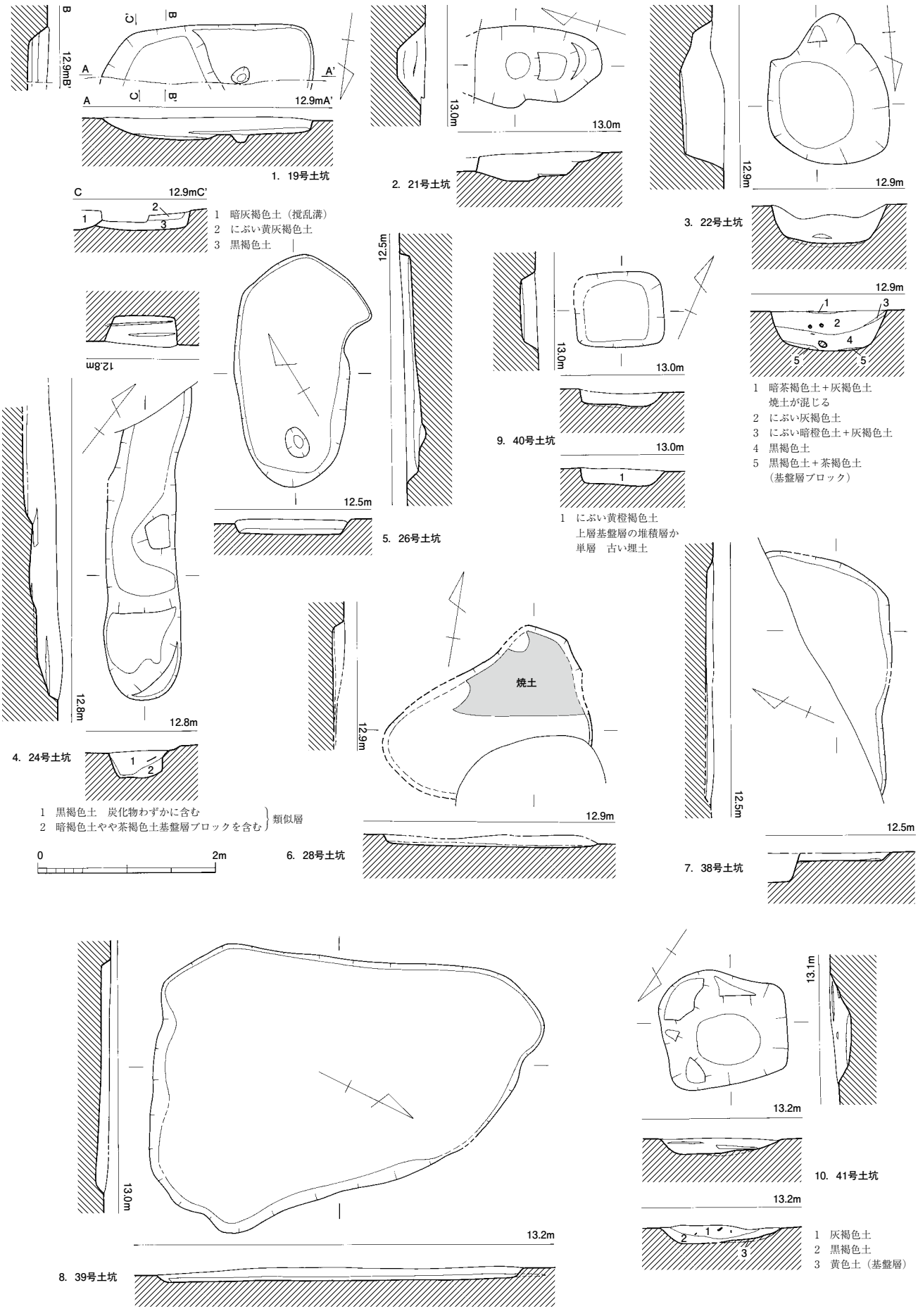
39号土坑（図版16、第73図）

１区南西部東側に位置し、10号柵に切られる。不整形プランで床面は浅く窪んでおり多くの土器が出土したので廃棄土坑の可能性が高い。出土遺物から時期は板付ⅡＢ式古段階併行期。

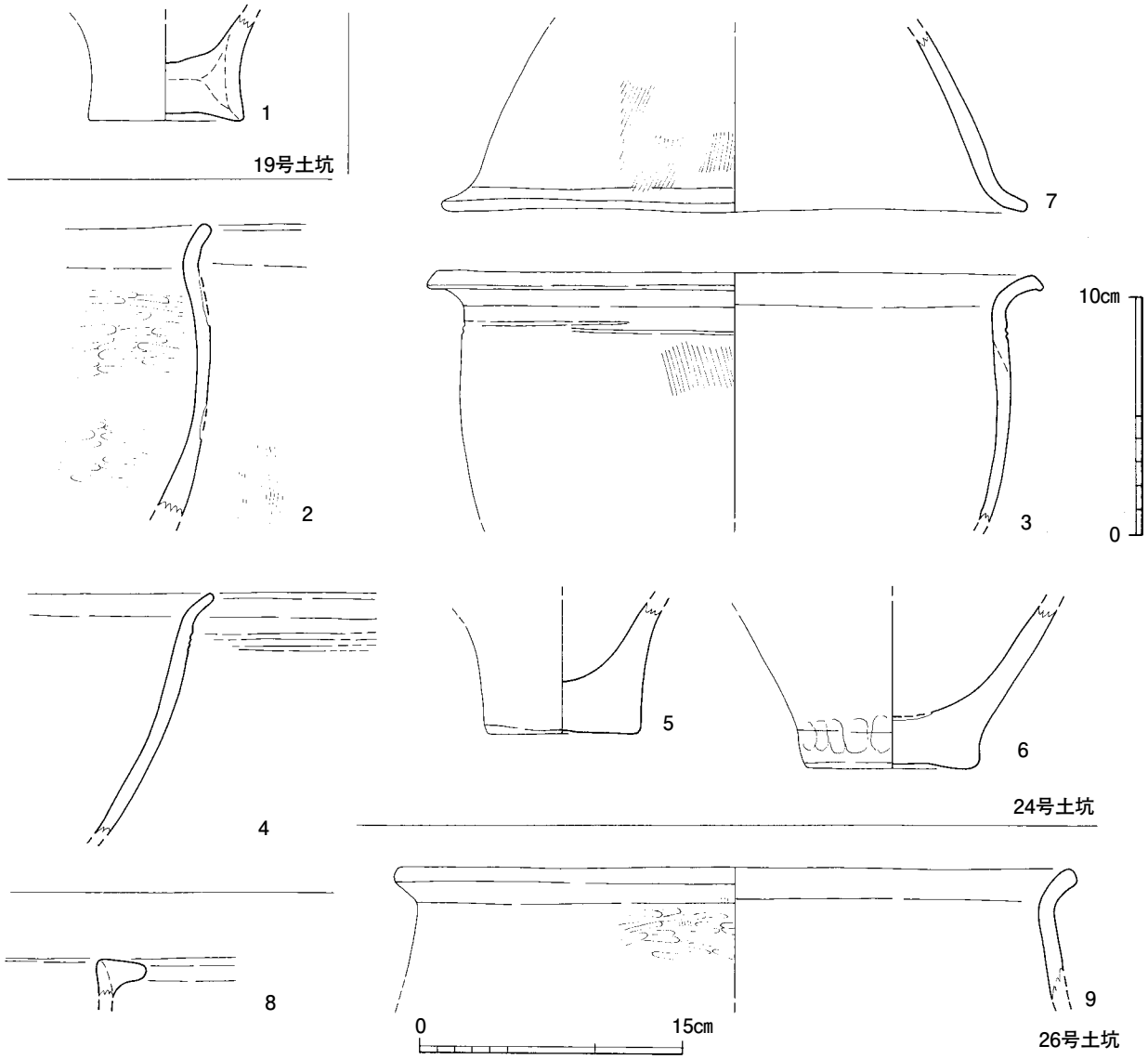
出土遺物（第75図）



第72図　弥生時代前期から中期前葉の土坑出土土器実測図１
1区1・3・11・18号土坑（1・6・8は1/4、他は1/3）



第73図　弥生時代前期から中期前葉の土坑実測図２
1区19･21･22･24･26･28･38 ～ 41号土坑（1/60）



第74図　弥生時代前期から中期前葉の土坑出土土器実測図２
1区19･24･26号土坑（9は1/4、他は1/3）

１は広口壺の口縁部で、外面はタテハケ後ミガキ、内面はミガキ。口唇部は平坦化されている。内外黄橙色だが、口縁部だけ灰褐色に変色している。２は大型広口壺の頸部で、外面は器面摩滅で調整不明。沈線は櫛書きで施されており幅が広く浅い。沈線のやや上から赤色顔料が塗布されているが、下は摩滅しているためどこまで塗布されているか不明。内面の突帯は註口部分への傾斜部であろう。外面橙褐色、内面黄灰褐色から黄橙色で変色なし。３は器面が剥落しており、器面の色調がわからないが、胎は内外黄灰色で変色していないので鉢か壺の底部だろう。内外器面摩滅で調整不明。底部完存で積み上げ方法不明。４は如意形口縁甕で、口唇部をナデた粘土が口唇部下位に寄って膨らみをもつ。内外器面摩滅で、外面口縁下に斜め方向の深いハケがあるが、他の器面には見られないので、調整ではなく工具の傷の可能性もある。外面にぶい暗橙褐色、内面はにぶい黄橙色から橙褐色で、煮沸使用の有無不明。５は器面の残りが良く、丁寧なタテハケが入る。内面は口縁部と頸部で違う方向のミガキが入る。６は如意形口縁甕で、頸部の沈線は幅が広い。外面は目の粗いタテハケ、内面器面摩滅で調整不明。外面橙褐色、内面は黄橙色でその上に黄灰白色を呈する。下位は積み上げ部で剥離している。７は如意形口縁甕で、内外器面摩滅で、外面は斜め方向の

ハケがかろうじて残る。外面橙褐色、内面は黄橙色から橙褐色で、煮沸使用の有無不明。８は如意形口縁甕で、外面は頸部までヨコナデで、それ以下はタテハケ。内面は器面摩滅で調整不明。内外面は橙褐色で変色がないので、煮沸使用されていない可能性がある。９は如意形口縁甕で、外面はタテハケがかろうじて残り、外面暗橙褐色、内面は胎が黄橙色でその上に黄灰白色を呈する。下位は積み上げ部で剥離している。10は如意形口縁甕で、口唇部に刻み目はない。外面はタテハケ、内面はハケ後ナデで、内外面橙褐色で変色がないので煮沸使用の有無不明。11は如意形口縁甕で、外面タテハケ、内面口縁部から頸部は横方向に太いミガキ、縦方向に細いミガキが残る。内外面橙褐色で、変色していないので煮沸使用されていない。12は甕の底部で、内外器面摩滅で調整不明。外面橙褐色で赤化しており、内面暗灰褐色で煮沸使用されている。底部完存で積み上げ方法不明。13は蓋で、天井部は丸みをもつ。内外器面摩滅で調整不明。外面黄橙褐色で赤変はなく、内面暗黄灰褐色で変色している。天井部完存で積み上げ方法不明。14は蓋で、外面タテハケ、内外器面摩滅で調整不明。外面橙褐色で赤変はなく、内面黄灰白色で被熱のため変色している。15は蓋で、天井部内面が窪んでいる。内外器面摩滅で調整不明。外面黄灰色で、外面天井部は黒斑。内外口縁部は煮沸使用のため暗黒灰褐色に変色しているので甕蓋である。天井部完存で積み上げ方法不明。

このほか打製石鏃（146図１）が出土している。

40号土坑（図版16、第73図）

１区南西部北東側に位置し、正方形プランで16号掘立柱建物跡に切られる。出土遺物がなく埋土が淡かったので落し穴の可能性があったが、規模とプランの違いから土坑して掲載した。

41号土坑（図版16、第73図）

１区南西部中央に位置する。浅い小型方形土坑で貯蔵穴にしては小さすぎ、墓にしては底面が窪んでいるので土坑として掲載する。出土遺物が少ないが板付ⅡＢ～ⅡＣ式併行期だろう。

出土遺物（第77図）

１は如意形口縁甕で、器面摩滅で調整不明だが、外面頸部の１条沈線は残っている。外面は黄橙色で変色がないが、内面は剥落のため煮沸使用の有無は確認できない。２は甕の底部で、外面赤橙色で著しく赤化している。内外面摩滅で調整不明。

このほか、掻器（第146図９）が出土している。

42号土坑（図版17、第76図）

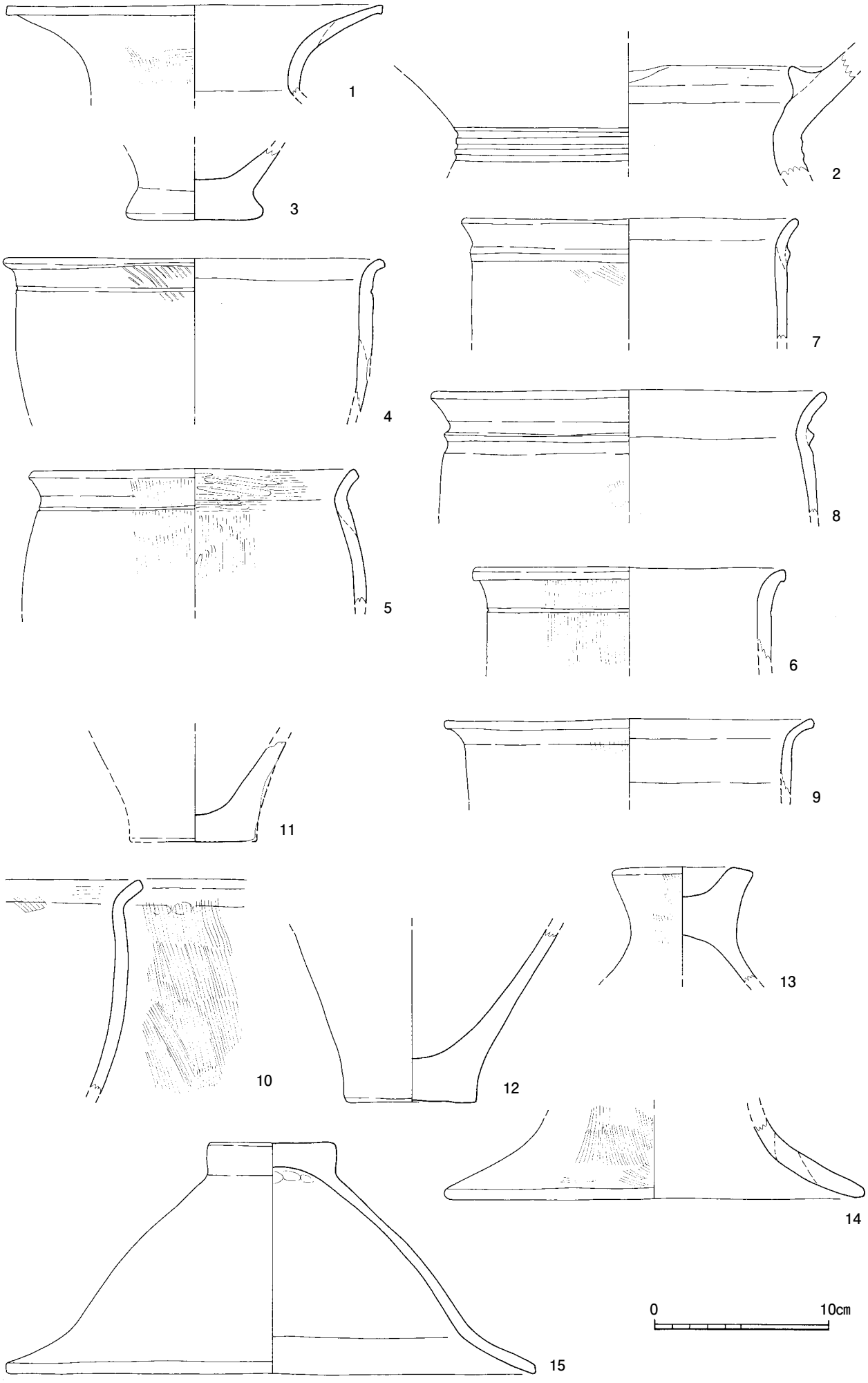
１区南西部北西側に位置し、略長方形プランで大型長方形貯蔵穴が削平されたものの可能性があるが、浅く埋土を確認できなかったので土坑とした。出土遺物が少なく時期を特定できない。

46号土坑（図版17、第76図）

１区南西部南側に位置し、13号落し穴を切る。不整形土坑で床面は南に緩やかに下がっており、遺物が多く出土したので廃棄土坑だろう。出土遺物から時期は中期初頭から前葉。

出土遺物（第77図）

３は壺で、口唇部は丸みをもつ平坦面である。器面の残りが良く、内外ミガキ、ハケ。外面黄橙



第75図　弥生時代前期から中期前葉の土坑出土土器実測図３　1区39号土坑（1/3）

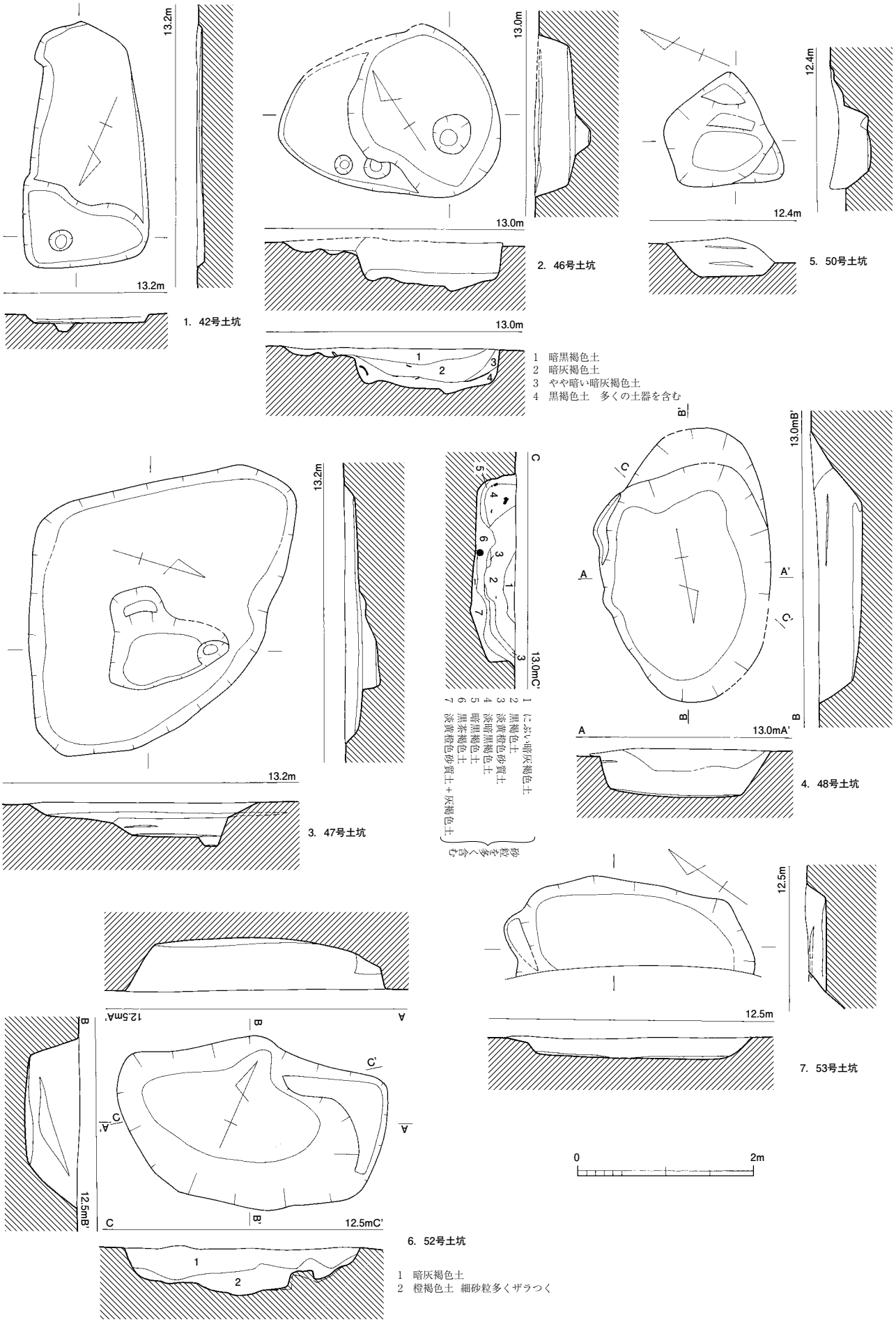
色、内面黄橙色から黄灰色で変色なし。４は壺の底部で、外面は細いタテミガキ。内器は摩滅で調整不明。内外はにぶい暗黄灰色から黄橙色で変色していない。底部完存で積み上げ方法不明。５は外面橙褐色だが赤変しておらず、内面も変色がないので壺の底部であろう。内外器面摩滅で調整不明。底部完存で積み上げ方法不明。６は変色がないので煮沸使用されていないことから鉢だろう。如意形口縁で、外面ハケ、内面ミガキ。内外橙褐色。７は逆Ｌ字口縁甕で外面は器面摩滅で調整不明、内面はナデ。内面は黄橙灰色で変色していないが、外面はにぶい暗黄橙色で煮沸使用されているか不明。８は如意形口縁甕で、器面摩滅で内面にナデがかろうじて残る。外面橙褐色、内面黄橙色で変色がないので、煮沸使用されていない可能性がある。９は如意形口縁鉢で、器面摩滅で調整不明。外面橙褐色、内外面黄橙色で、内面に黒斑がある。煮沸使用されていない可能性がある。10は甕の底部で、内外器面摩滅で調整不明。外底中央がやや下がる。内面は黄橙灰色で変色していないが、外面は黄橙色で底部縁が赤変しているので、煮沸使用されているが使用頻度が少なかっただろう。底部完存で積み上げ方法不明。11は小形の甕の底部で、外面器面摩滅で調整不明、内面はミガキ。内面は暗灰褐色で変色していないが、外面はにぶい暗灰褐色で赤変しているので、煮沸使用されている。内面が残るのは使用頻度が少なかったためだろう。底部完存で積み上げ方法不明。

47号土坑（図版17、第76図）

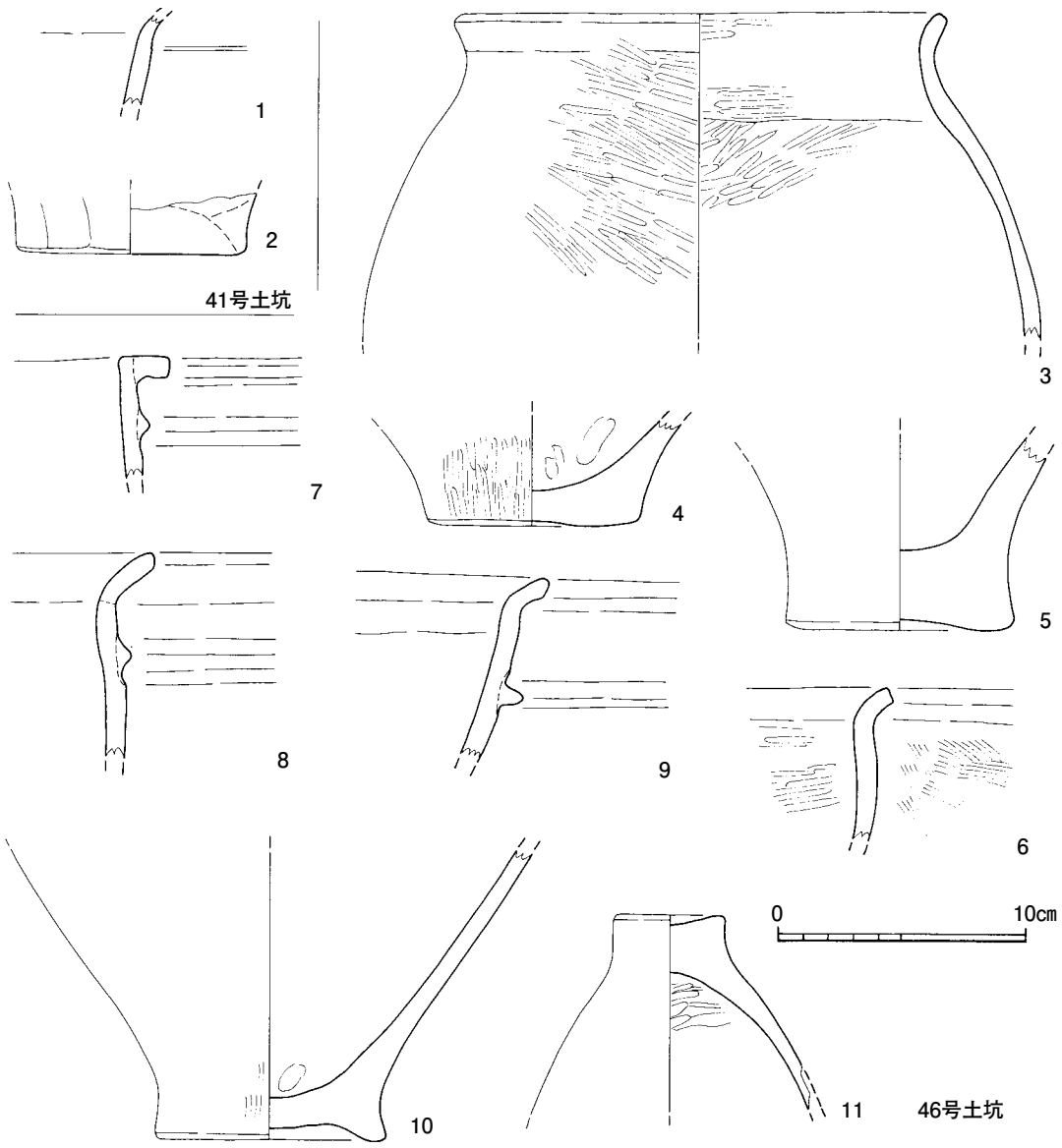
１区南西部に位置する。不整形土坑で床面はほぼ平坦だが、中央部の窪みの規模が落し穴に近いので、切っている落し穴を一緒に掘った可能性がある。出土遺物から時期は板付ⅡＣ古段階併行期。

出土遺物（第78図）

１は大型壺で、肩部と底部は図上接合。外面の無軸羽状文は腹縁に凹凸のない貝殻で刺突したもので、突帯は山形突帯の摩滅ではなく、台形突帯の端部に刻み目が入ったものであろう。頸部の浮文は近畿地方の指捏ね貼り付け突帯に近い。肩部はわずかだか赤色顔料が見られる。その分布から彩文ではなく、全面塗布であったとわかる。胴下位に塗布は無い。外面の肩部はミガキ。２は大型壺の肩部で、外面の無軸羽状文は貝殻腹縁刺突によるもの。内外面器面摩滅で調整不明。胴中位以下に変色があるが、黒斑だろう。３は１の底部である可能性が高い。胴下位外面はタテハケ。内面は胴下位はナデで、内底は摩滅している。底部完存で積み上げ方法不明。４は大型器種の口縁部で、外面器面摩滅で調整不明、内面はナデとミガキが残る。外面にぶい黄灰色で、内面は明黄橙白色で変色がないので鉢であろう。５は小型の如意形口縁甕で、外面は頸部までヨコナデで、それ以下は摩滅。内面口縁部にミガキがあり、胴部摩滅で不明。外面は暗橙褐色で赤化していない。内面はにぶい黄橙褐色を呈し、下位に変色があるので、煮沸使用されている。６は鉢の口縁部で、器壁が薄い。外面タテハケ、内面器面摩滅で調整不明。外面口縁部と胴中位以下は暗灰褐色で、肩部はにぶい黄橙色であることから煮沸使用されている。内面は口縁部から頸部が黄橙灰色で、胴部は変色している。口縁部内面が黒変しているのは伏せ焼きのためだろうか。７は甕の底部で、外面は器面摩滅で調整不明。内面はナデ。外面赤橙色で全体的に赤変しており、内面はにぶい暗灰褐色に変色しているので、煮沸使用されている。カクセン石を含む胎土。８は甕の底部で、器面摩滅で調整不明。外面は黄橙色で赤変しており、内面にぶい暗黄灰褐色に変色しているので、煮沸使用されている。積み上げ痕は明瞭。９は鉢の底部で、壺の底部を転用した可能性もある。内面に積み上げ痕



第76図　弥生時代前期から中期前葉の土坑実測図３　1区42･46 ～ 48･50･52･53号土坑（1/60）



第77図　弥生時代前期から中期前葉の土坑出土土器実測図４　1区41･46号土坑（1/3）

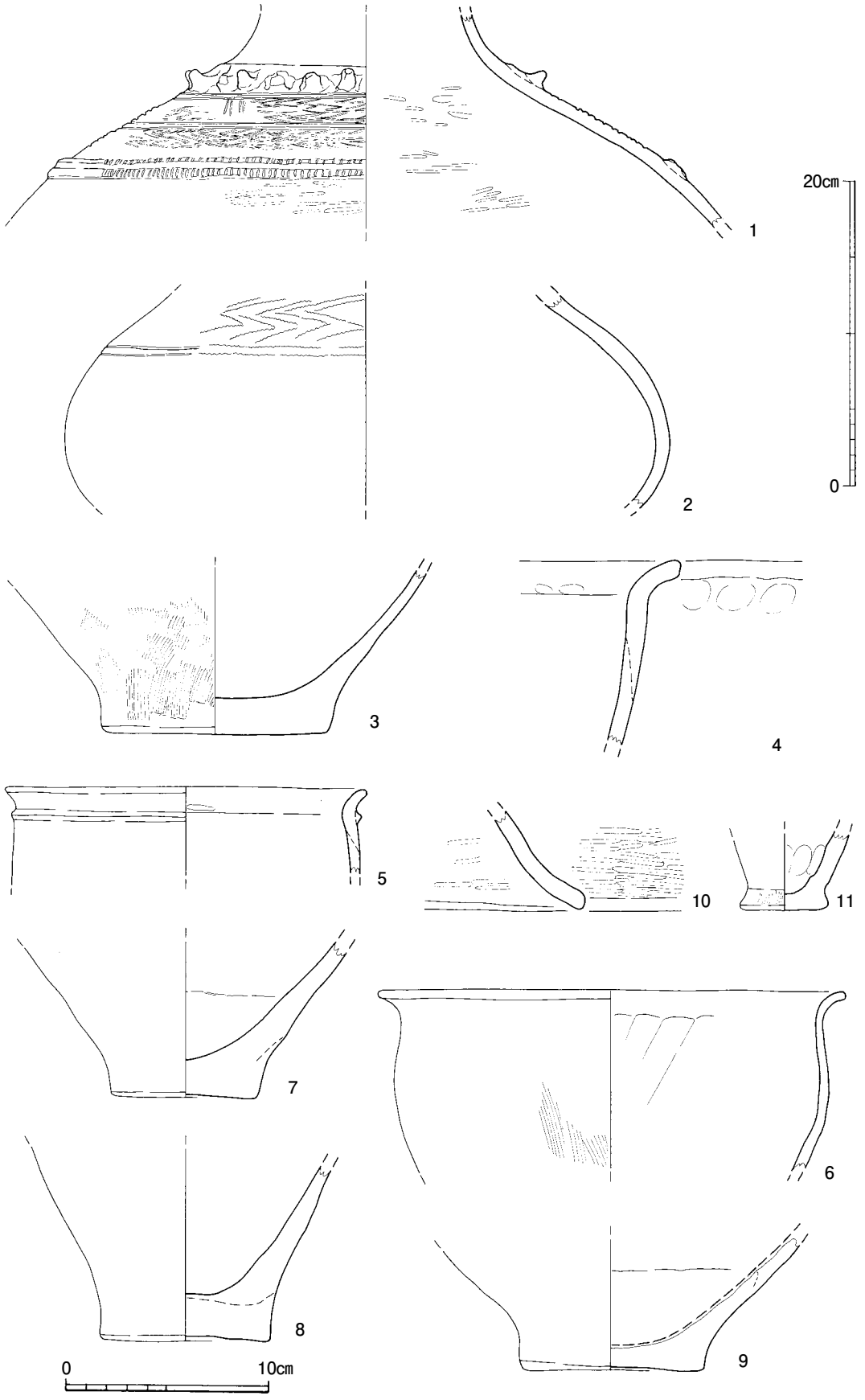
が見られる器面摩滅で調整不明。内面黄灰白色で、胎が黄橙白なので白く変色している。外面は強く赤化しているので、煮沸の被熱で変色したものだろう。底部完存で積み上げ方法不明。10は蓋で反転復元できない小片だが径30cmほどであろう。内面の器面が摩滅しているが、内外ミガキである。裾部が黒色なのは伏せ焼きによるものである。11はミニチュアの甕で、歪みが大きく底面も傾いている。器面摩滅が著しく、外面底部にタテハケが残るが、内面は調整不明。器面の残っている部分は橙褐色で、変色なし。底部完存で積み上げ方法不明。

48号土坑（図版17、第76図）

１区南西部に位置する。略方形プランで床面はほぼ平坦だが、砂質土が多い特徴的な埋土で、基盤層の崩落ブロックがないことから貯蔵穴ではない。出土遺物から時期は中期初頭。

出土遺物（第79図）

１は壺の肩部片で、器面摩滅が著しく調整不明。貝殻腹縁刺突の弧文が見られる。内外面暗灰褐色だが、小片のため原因不明。２は小型壺で、器面摩滅だが外面のミガキと内面胴下位のミガキは



第78図　弥生時代前期から中期前葉の土坑出土土器実測図５　1区47号土坑（１は1/4、他は1/3）

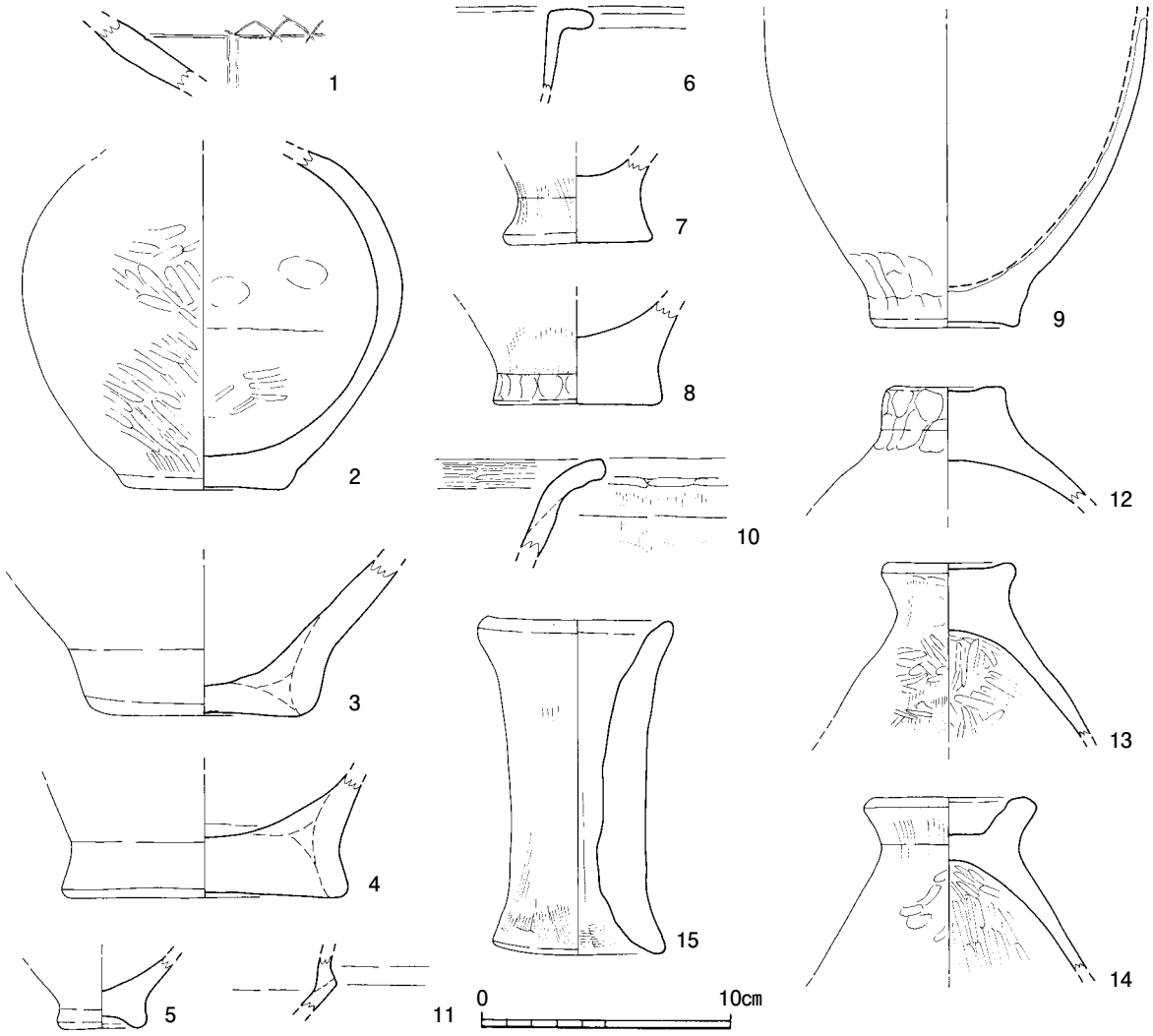
観察できる。内外黄橙灰色で変色なし。胴下位外面に黒斑あり。３は壺の底部で、器面摩滅で調整不明。外面にぶい黄橙色、内面はにぶい黄灰白色だが、約半分に外面赤変と内面の変色がある。これ偶発的に火を受けたもので煮沸使用によるものではないだろう。４は形状的には壺の底部だが、内外高い熱を受けており、外面に塩化ナトリウムらしい白色物質が染み込んでいるので、製塩土器の可能性がある。大型壺の上部を加工したものかあるいは大型鉢であろう。器面摩滅で調整不明。内外淡赤橙色、内面はにぶい黄灰白色だが、約半分に外面赤変と内面の変色がある。これは偶発的に火を受けたもので煮沸使用によるものではないだろう。５は小型壺の底部で、器面摩滅が著しく調整不明。上げ底で、無文。外面にぶい黄橙色で、内面黒灰色なのは焼成不良のため。６は逆L字口縁甕で、器面摩滅が著しく調整不明。内外黄橙色で変色がなく、煮沸使用の有無不明。７は小型甕の底部で、外面はタテハケ、内器面摩滅で調整不明。外面黄橙色でやや赤変し、内面が黒褐色に変色しているので、煮沸使用されている。底部完存で積み上げ方法不明。８は甕の底部で、外面タテハケ、内面器面摩滅で調整不明。外面淡赤橙白色で赤変しており、内面は器面が失われて胎の色調が露出しているので、本来は煮沸使用の痕跡があるだろう。底部完存で積み上げ方法不明。９は小型甕の底部で、器面摩滅で調整不明。内外黄橙白色で変色なし。煮沸使用されていない。底部完存で積み上げ方法不明。10は鉢で、器面が残っており、外面タテハケ、内面口縁部はミガキ、肩部はナデ。内外橙褐色で、変色なし。11は鉢か高杯の鉢で、内外器面摩滅で調整不明。内外暗橙灰色。小片で混入であろう。12は、壺の底部にしては内底が平坦で、内外暗黄灰色で、変色がないので蓋であろう。器面が残っており、外面ナデ後ミガキ、内面ミガキ。13は、蓋で器面が良く残っており、外面タテハケ後ミガキ、内面ミガキ。内外にぶい黄灰褐色で、変色がない。黒斑あり。天井部完存で積み上げ方法不明。14は、器面が残っており、内外暗黄灰色で、変色がないので蓋であろう。外面ナデ後ミガキ、内面ミガキ。15は器台で、２次加熱の痕跡や煤の付着がなく、橙褐色を呈する。

50号土坑（図版17、第76図）

１区南西部西端に位置し、15b号溝に切られる。不整形プランで床面の凹凸が大きい。出土遺物から時期は中期初頭。

出土遺物（図版53、第80図）

１は広口壺で、口縁部と頸部以下の図上接合である。頸部で接合しているが、２条沈線なのは間違いない。器面摩滅が著しく調整不明。口縁部はやや器壁が厚く、端部はやや内湾しており、肥厚の痕跡はない。内外黄橙色で変色なし。２は壺の肩部で、器面摩滅が著しく調整不明。肩部にかろうじて貝殻腹縁刺突の羽状文と重弧文が見られるが、その間に鋸歯文があるかは不明瞭。外面はにぶい黄橙色で、内面黒灰色なのは焼成不良のため。３は壺で、器面摩滅が著しく調整不明。肩部にかろうじて貝殻腹縁刺突の無軸羽状文が見られる。外面橙褐色で、内面黒灰色なのは焼成不良のため。４は小型壺で、口縁部は歪みが大きく傾き不明確。赤色顔料が肩部に見られるが器面摩滅が著しく、肩部の前面塗布なのか、彩文なのか不明。刺突文や沈線は見られない。内外調整不明。内外面は橙褐色で、外面胴部に黒斑あり。底部完存で積み上げ方法不明。５は甕の底部で、器面摩滅で内外調整不明。外面赤橙色で全体が赤変しており、内面は暗灰黒褐色なので、煮沸使用されている。６は甕の底部で、器面摩滅で内外調整不明。内外面橙褐色で外面底部縁が赤変しており、内面は胎土の色調が露出しているので、煮沸使用されている。７は甕蓋で、歪みが大きく体部と口縁部



第79図　弥生時代前期から中期前葉の土坑出土土器実測図６　1区48号土坑（1/3）

の図上接合のため傾きは不確実。器面摩滅のため内外調整不明。色調が内外赤橙色なのは被熱のためである。天井部完存で積み上げ方法不明。

このほか、打製石斧（第148図21）が出土している。

52号土坑（図版18、第76図）

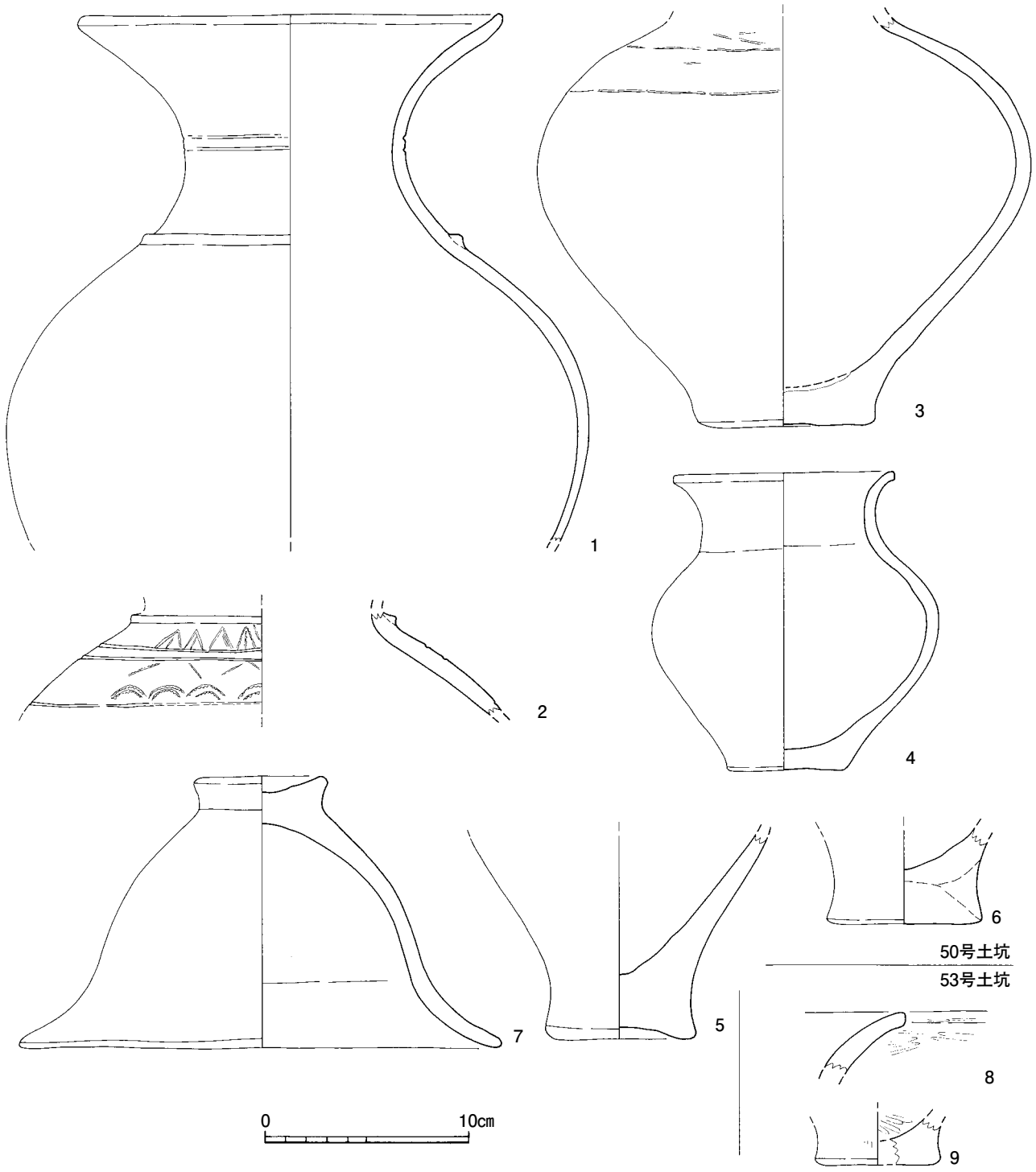
１区南西部に位置する。不整形プランで床面は凹凸が多く、埋土は基盤層の下位層だったので風倒木痕の可能性が高い。出土遺物がなく、弥生前期の土器片が入っていたのでここで掲載したが、混入の可能性もある。

53号土坑（図版18、第76図）

１区南西部西側に位置する。略長方形プランで14号溝に西半分を切られているので、全体像はわからない。長方形貯蔵穴の可能性もあるが、土層では確認できなかったので、土坑で掲載した。出土遺物からは時期を特定できない。

出土遺物（第82図）

１は壺で、内面は器面摩滅が著しいが、外面はミガキが残る。内面の黄橙色は胎土の色調で、外



第80図　弥生時代前期から中期前葉の土坑出土土器実測図７　1区50・53号土坑（1/3）

面は暗橙褐色で変色なし。２は小形器種の底部だが、外面は暗黄橙灰色で変色がなく、内面はミガキが残る。焼成不良により黒灰色化しているので壺であろう。

79号土坑（図版18、第81図）

１区北西部に位置する。２号方形周溝墓南辺に切られている。平面不整形で、貯蔵穴の可能性もあるが、土層では確認できなかったので、土坑で掲載した。出土遺物からは時期を特定しづらく、１は弥生前期のものだが、２は弥生後期のレンズ底部の可能性がある。

出土遺物（第82図）

１は小型器種の底部で、外面タテハケ、内面は器面剥落し、外面は黄灰色で黒斑あり。２はやや膨らむ底部で、黄橙色で外底と内面に赤変が見られるので甕だろう。器面摩滅で調整不明。

81号土坑（図版18、第81図）

１区北西部の２号方形周溝墓内部に位置する。平面略方形で、貯蔵穴の可能性もあるが、土層はほぼ水平の堆積で、基盤層ブロックがなかったので、土坑で掲載した。出土遺物から板付Ⅱｂ式併行期である。

出土遺物（第82図）

３は壺の肩部で、器面摩滅が著しく調整不明。肩部にかろうじて貝殻腹縁刺突の羽状文が見られる。外面はにぶい橙褐色の器面が一部残るが、内面は胎土の黄橙色だけだった。４は如意形口縁甕で、外面は一部にハケが残る。内面は器面摩滅のため調整不明。内面は橙褐色で、外黄灰色で変色がないので煮沸使用されていない可能性がある。５は甕の底部で、器面摩滅で内外調整不明、外面橙褐色で底部縁が赤変しており、内面はにぶい暗黄灰色で、頻度は少ないが煮沸使用されている。底部の積み上げ方法は不鮮明。６は壺で、外面黄橙色、内面橙褐色で変色がない。器面摩滅で調整不明。底部完存で積み上げ方法不明。

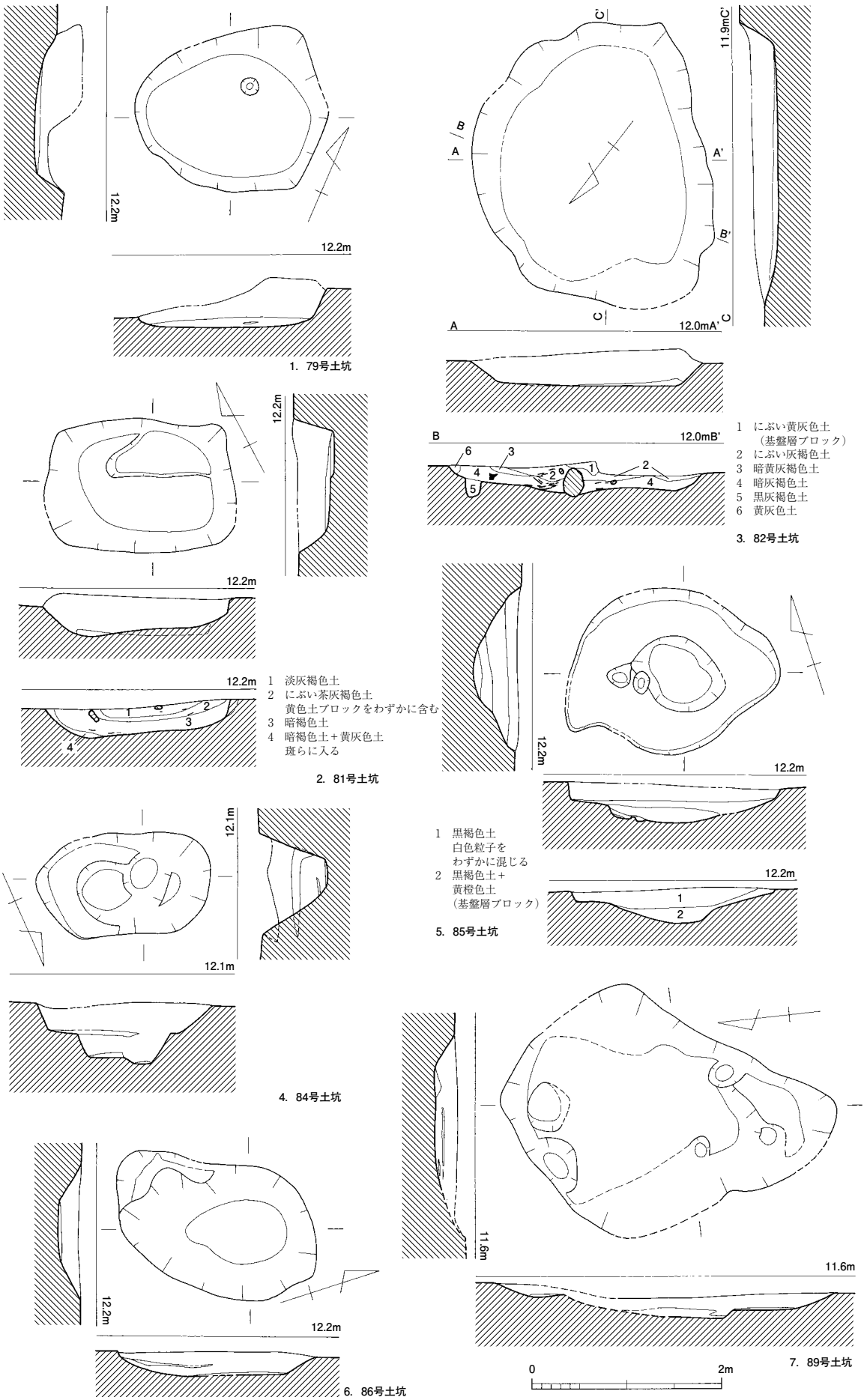
このほか、打製石斧（第146図27）が出土している。

82号土坑（図版18、第81図）

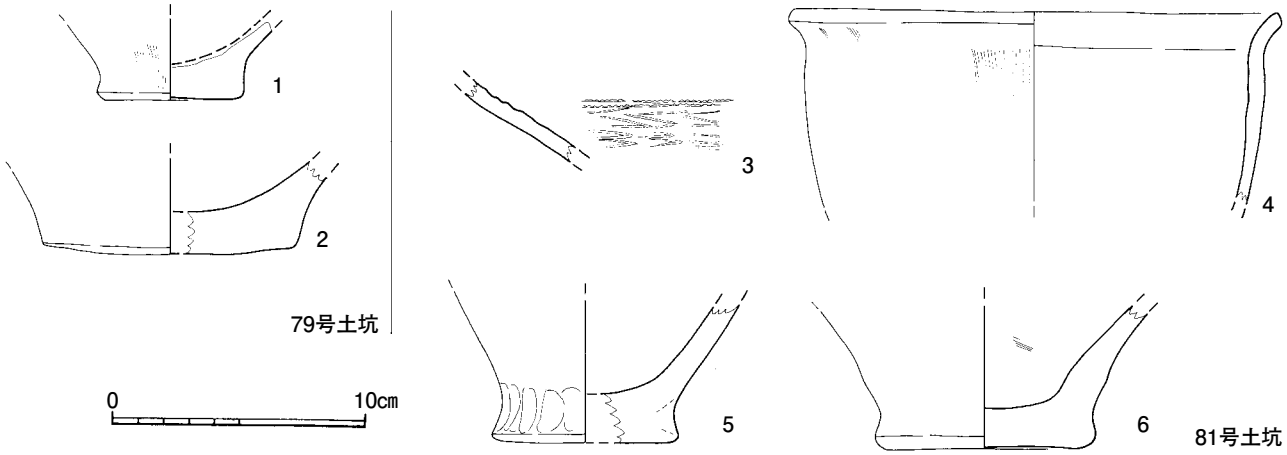
１区北西部の43･57号竪穴住居跡との切り合い関係はわからなかった。平面不整形の大型土坑だが、土層中に基盤層の崩落ブロックがないので貯蔵穴ではないだろう。出土遺物から板付ⅡB式併行期である。

出土遺物（図版53、第83 ～ 85図）

第83図１は２層出土の広口壺で、器面摩滅が著しく、調整不明。内外黄橙色を基調としており、変色なし。口縁部内面の黒色は黒斑なので伏せ焼きされている。２は４層出土の大型壺で、器面摩滅が著しく、調整不明。肩部の文様は貝殻腹縁刺突による沈線と無軸羽状文。内外黄橙色を基調としており、変色なし。３は４層出土の大型壺で、器面摩滅で内外調整不明。全面に赤化が激しく、外面に塩化ナトリウムらしい白色物質が吸着している部分があるので製塩土器の可能性がある。４は器面の残りが悪くかろうじて重弧文が見えた。貝殻腹縁刺突であるかの確認はできなかったが、沈線の可能性が高い。５は大型壺肩部片で、器面摩滅が著しく、調整不明。文様は貝殻腹縁刺突により無軸羽状文で、その下に２条の突帯がつく。６は４層出土の大型壺頸部で、器面摩滅が著しく、調整不明。文様は沈線と無軸羽状文で、摩滅していて不鮮明である。線刻とヘラ状工具の刺突によると見られるが、貝殻腹縁刺突の可能性もある。内外黄橙色を基調としており、本来の器面の色調は不明。７は大型壺肩部片で、器面摩滅が著しく、調整不明。文様は貝殻腹縁刺突により縦横の複線区画文で、その下に２条の突帯がつく。器面摩滅が著しく、調整不明。外黄橙色、５号貯蔵穴出土の第45図５とは同一個体なので、内面は炭素吸着の黒色磨研であった可能性が高い。８は大型壺で、器面摩滅が著しく、調整不明。頸部突帯下の肩部に文様がある可能性はあるが器面剥離で残っていない。外面の橙褐色を基調としているので、内面の黒灰色は焼成不良である。９は４層出



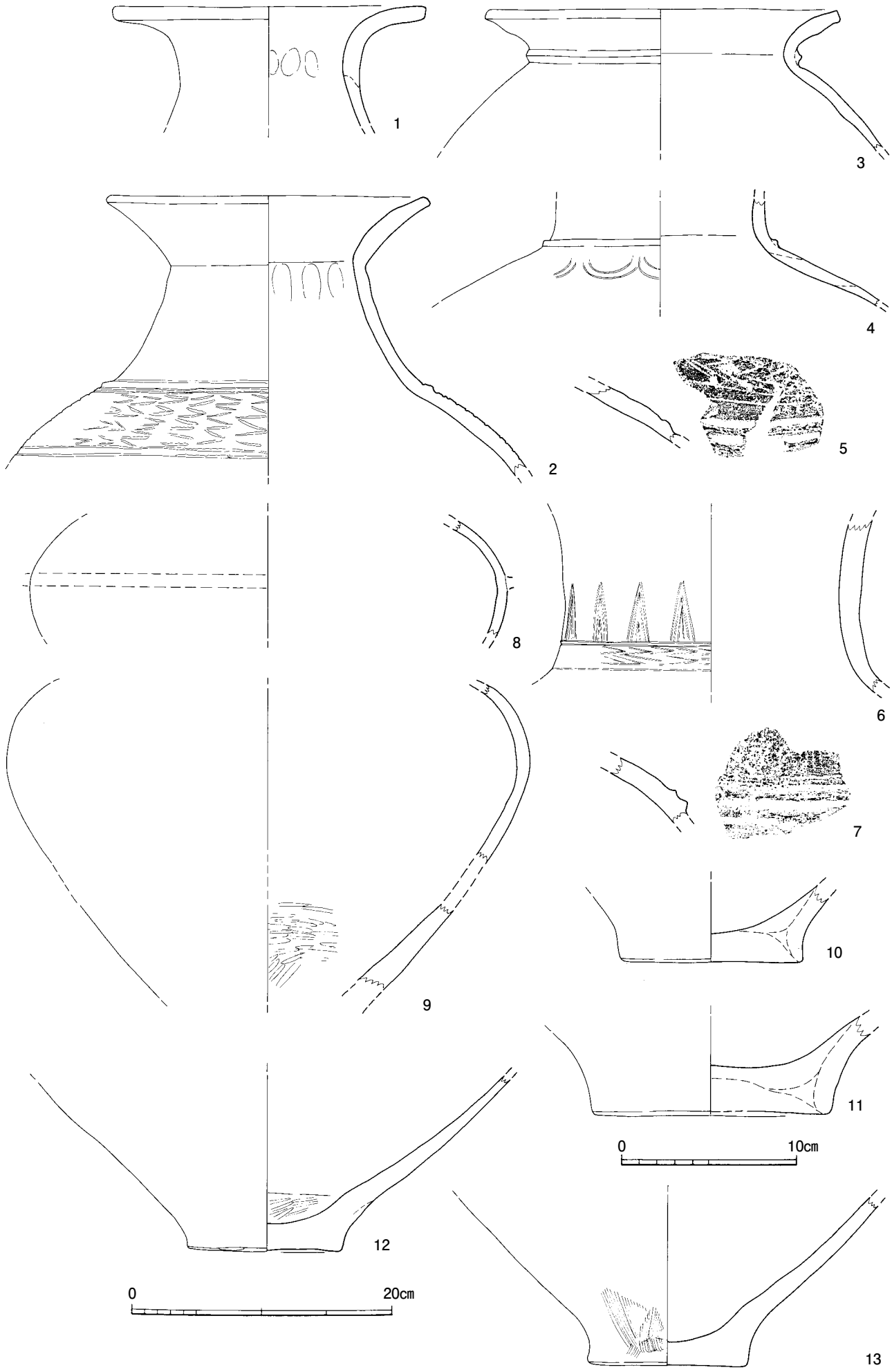
第81図　弥生時代前期から中期前葉の土坑実測図４　1区79・81・82・84 ～ 86・89号土坑（1/60）



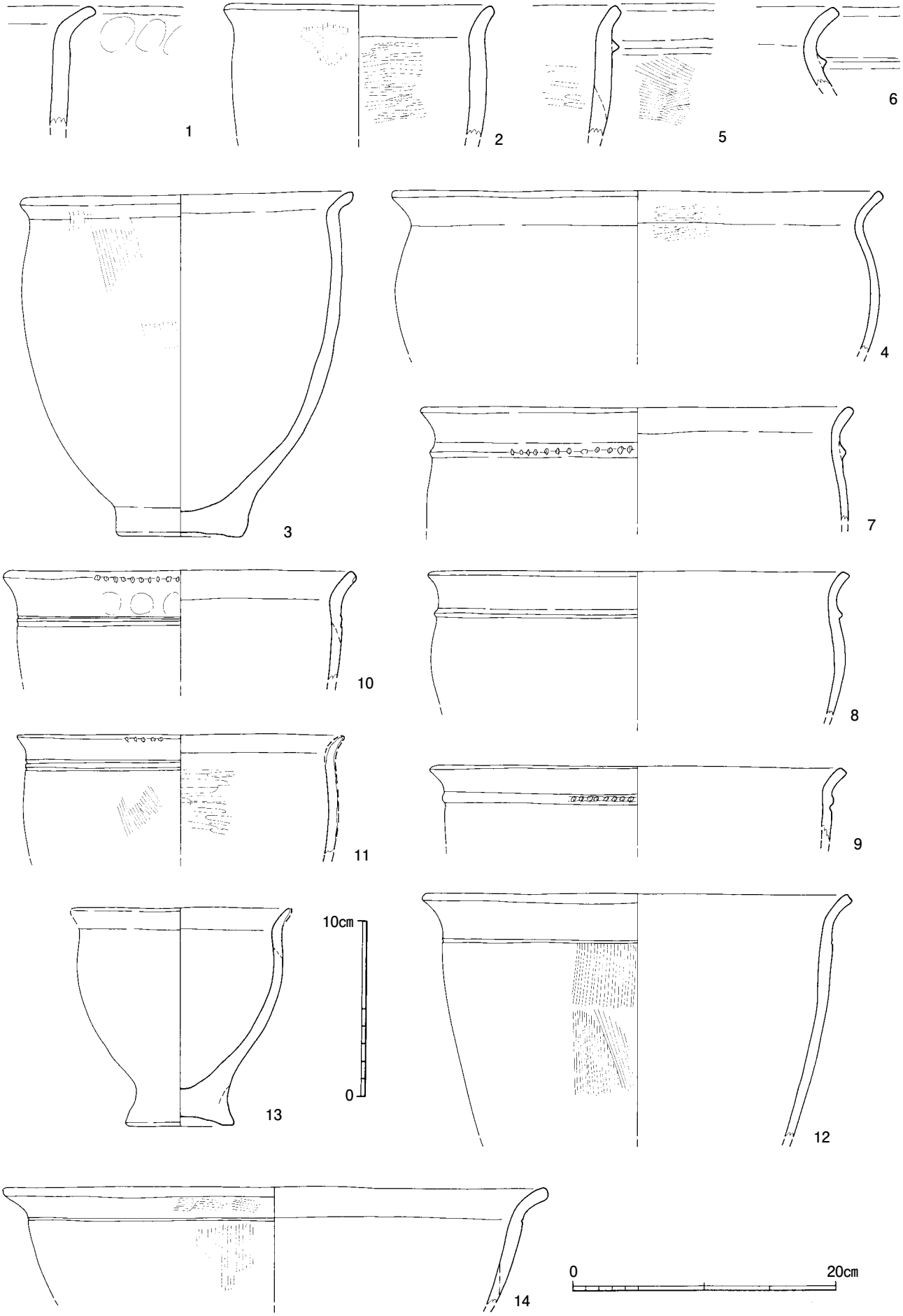
第82図　弥生時代前期から中期前葉の土坑出土土器実測図８　1区79･81号土坑（1/3）

土の大型壺で、肩部と胴部は図上接合である。器面摩滅が著しく、肩部の文様は線刻による重弧文がわずかに残っているのみで、胴下位の外面のミガキ以外は調整不明。内外黄橙色から橙褐色を基調としており、内面のにぶい黄灰色は焼成不良によるものとみられる。10は２層出土の壺の底部で、器面摩滅で調整不明。内外黄橙色で変色なし。11は４層出土の大型壺の底部で、内外ナデ。黄橙色で底部に黒斑がある。外面の一部に塩化ナトリウムらしい白色物質の吸着があるので、製塩土器の可能性がある。底部完存で積み上げ方法不明。12は４層下位出土の大型壺で、器面摩滅が著しく、内底のミガキ以外の調整は不明。内外黄橙色から橙褐色。底部完存で積み上げ方法不明。13は２層出土の大型壺の底部で、器面摩滅で内面は調整不明、外面はタテハケが残る。内面黄灰色だが胎土の色調で本来の器面の色調は不明。外面は黄灰色だが２次加熱を受けて部分的に赤変している。底部完存で積み上げ方法不明。

第84図１は４層出土の大型器種の口縁部で、内外器面摩滅で調整不明。外面黄灰色で変色がなく、内面頸部以下の黒灰色は焼成不良のためだろう。煮沸使用の痕跡がないので鉢とするが、煮沸しない大型甕の可能性もある。２は２層出土の如意形口縁甕で、口唇部は平坦化され刻み目なし。外面はタテハケがわずかに残り、内面はミガキ。外面はにぶい橙褐色で、変色がないが、内面胴部は暗灰褐色に変色しているので煮沸使用されている可能性がある。３は２層出土の甕で、内外器面摩滅で外面はタテハケがかろうじて観察できる。内面黒灰褐色に変色しており、外面は黄灰褐色で赤変しているので煮沸使用されている。胴部に黒斑がある。底部完存で積み上げ方法不明。４は１層出土の如意形口縁甕で、外面は器面摩滅のため調整不明。内面は口縁部から頸部がミガキ、それ以下はナデ。内外黄灰色で変色がないので煮沸使用されていない可能性が高い。５は１層出土の如意形口縁甕で、頸部突帯には刻み目がない。外面タテハケ、内面ミガキ。外面黄灰色で、内面の黒灰色は焼成不良であろう。煮沸使用されていない可能性が高い。６は１層出土の如意形口縁甕で、器面摩滅のため調整不明。外面黄灰色だが胎土の色調であり、内面口縁部がにぶい暗黄灰褐色なので煮沸使用の可能性もある。７は１層出土の如意形口縁甕で、頸部突帯には幅の広い刻み目が入る。器面摩滅のため調整不明。内外黄橙色は胎の色調であり、器面の色調は不明。８は４層出土の如意形口縁甕で、頸部の突帯には刻み目はない。内外面器面摩滅のため調整不明。内外黄灰色だが、胎土の色調が露出したものであり本来の色調はわからない。胎土には変色がないので煮沸使用されていない可能性が高い。９は４層出土の如意形口縁甕で、頸部の突帯には浅い刻み目が入る。



第83図　弥生時代前期から中期前葉の土坑出土土器実測図９
1区82号土坑（3・4・8・9・12・13は1/4、他は1/3）



第84図　弥生時代前期から中期前葉の土坑出土土器実測図10
1区82号土坑（8･9は1/4、他は1/3）

内外面器面摩滅のため調整不明。内外黄橙色だが、胎土の色調が露出したものであり本来の色調はわからない。胎土には変色がないので煮沸使用されていない可能性が高い。10は１層出土の如意形口縁甕で、口唇部には幅の広い刻み目が下方から入る。器面摩滅のため調整不明。外面にぶい暗黄灰色、内面の口縁部は黄橙色で、肩部以下が変色しているので煮沸使用されている。11は２層出土の如意形口縁甕で、口唇部には下方から刻み目が入る。頸部の２条沈線は幅が広く浅い。外面はハケがわずかに残り、内面はミガキ。内外橙褐色で変色なく、煮沸使用されていない。12は如意形口縁甕で、頸部には幅の広い浅い沈線が入る。外面は目の細かいタテハケ、内面は器面摩滅のため調整不明。内面の黄灰色は胎土の色調が露出したものであり本来の色調はわからない。外面は肩部以上が黄橙色で、以下はにぶい淡黄灰褐色で下位は赤変しているので煮沸使用されている。13は２層出土の小型如意形口縁甕で、口唇部が残っていないので刻み目の有無は不明。頸部に装飾は認められない。器面剥落が著しく調整不明。外面は赤橙色に赤化しており、内面は暗黄灰褐色に変色しているので煮沸使用されている。底部完存で積み上げ方法不明。14は大形甕か鉢で、外面タテハケ、内面は器面摩滅で調整不明。内外黄橙色で変色なし。

第85図１は２層出土の大型甕で、肩部と胴下位は図上接合である。口唇部には小さな刺突が入り、肩部は２条沈線間に竹管ではなく棒状の工具で刺突している。器面摩滅で内面は調整不明、外面は下位にタテハケが残る。内外面黄橙色で変色なし。胴下位が黒灰色なのは黒斑のためで煮沸使用されていない。２は４層出土の甕の底部で、器面摩滅で内外調整不明、明黄橙色なのは高温の熱を受けたためで、本来の色調は不明。外面の一部に塩化ナトリウムらしい白色物質の吸着があるので、製塩土器の可能性がある。底部完存で積み上げ方法不明。３は甕の底部で器面は内外とも摩滅していて調整不明。内面の暗灰褐色は、胎土が露出したものだが、外面は黄橙灰色で赤変しているので煮沸使用されている。４は甕の底部で、器面摩滅で調整不明。内外黄橙色で変色なし。内面暗黄橙灰色でそれほど変色していないが、外面橙褐色で赤変しており器面には斑状剥離があるので煮沸使用されている。底部完存で積み上げ方法不明。５は甕の底部で、底部は上げ底。器面は内外とも摩滅していて調整不明。外面は黄橙色で一部が赤変している。内面は淡黄橙色でやや赤化しているので煮沸使用されている。６は４層出土の甕の底部で、器面摩滅で内外調整不明、外面は赤化しており、内面は暗灰褐色に変色しているので煮沸使用されている。底部積み上げ痕は明瞭。７は甕の底部で、器面は内外とも著しく摩滅していて調整不明。内外とも赤橙色で全体に赤変している。外面に部分的に塩化ナトリウムらしい白色物質が吸着しているので製塩土器の可能性がある。底部完存で積み上げ方法不明。

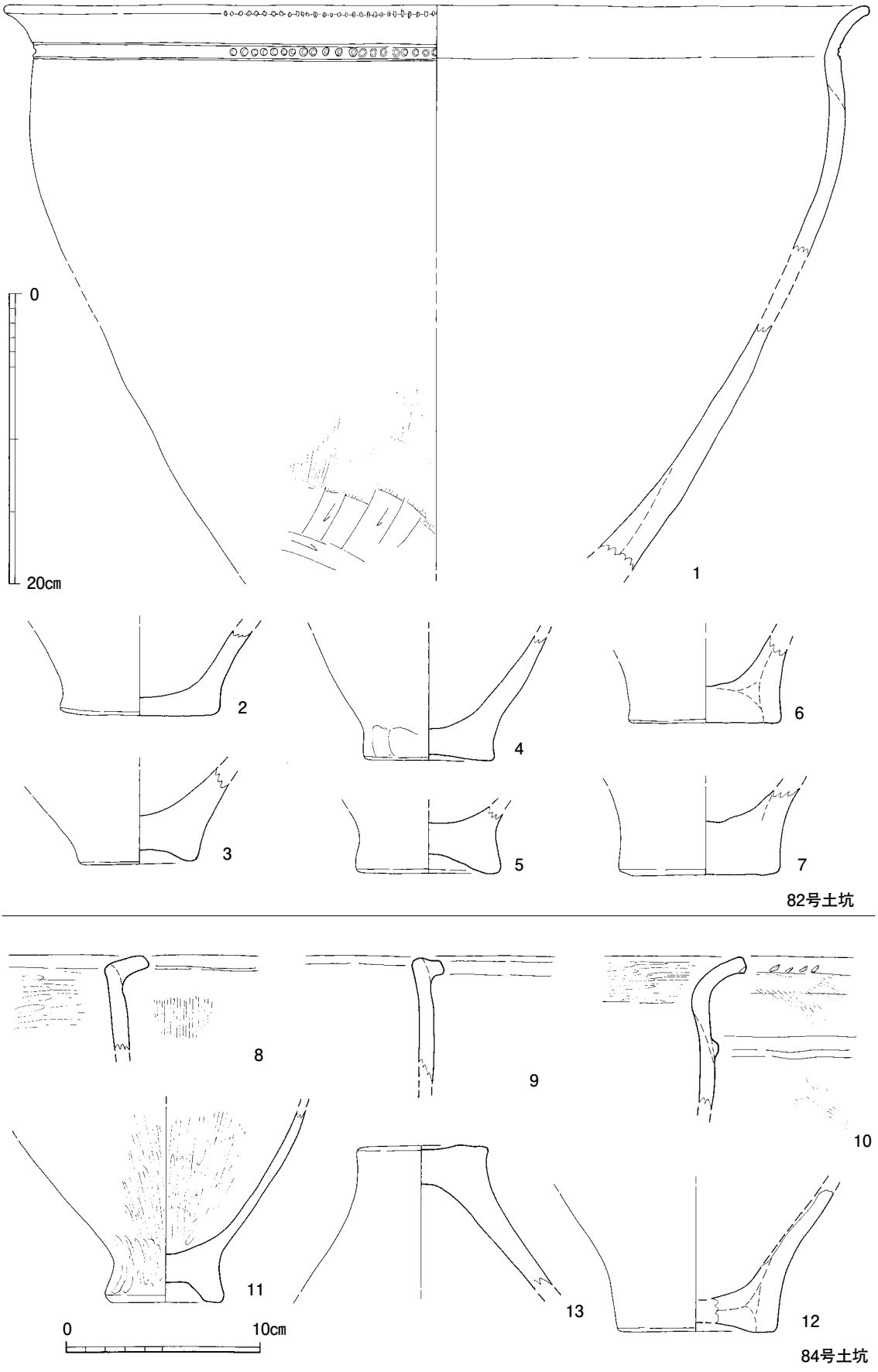
このほか、掻器（第146図11）・石庖丁状石器（第146図23）が出土している。

84号土坑（図版18、第81図）

１区中央部に位置し、３号方形周溝墓南西コーナーに広がる周溝埋土の下から検出された。平面不整形で、床面の大きな窪みがあり、遺物が多く出土したので廃棄土坑の可能性が高い。上層は基盤層ブロックを含む堆積土、中層は炭化物を含む黒灰褐色土であった。出土遺物から中期初頭である。

出土遺物（第85図）

８は逆Ｌ字口縁甕で、内面と口唇部は赤色顔料塗布後のミガキだが、外面は胴部目の細かいタテ



第85図　弥生時代前期から中期前葉の土坑出土土器実測図11
1区82･84号土坑（１は1/4、他は1/3）

ハケが残っており、赤色顔料を塗布した痕跡がまったくないので、外面には塗布しなかった可能性もある。内外黄橙色。９は逆Ｌ字口縁甕で、器面摩滅で調整不明。内面と外面頸部は黄橙色で、外面口縁部と胴部はにぶい暗黄灰褐色なので煮沸使用されている。10は如意形口縁甕で、口唇部外側端に下方から細長い刻み目が入る。器面は残りが良く、外面ハケ後ナデ、内面は口縁部がミガキ、胴部はナデ。外面頸部と内面は黄橙褐色で、外面口縁部と胴部は暗灰褐色なので、煮沸使用されている。11は鉢で、内外面器面の残りが良く、ミガキが残っている。内面は黄灰色を呈する部分は器面が摩滅している部分でミガキが残っている部分は暗黄灰色を呈しており、外面淡赤灰褐色で赤変しているので煮沸使用されている。底部完存で積み上げ方法不明。12は甕の底部で器面は内外とも摩滅していて調整不明。内面は黄灰色だが胎土が露出したもので、外面は黄橙灰色で赤変しているので煮沸使用されている。13は外面に赤化がなく、内面は黒灰褐色に変色しているので蓋であろう。器面は内外ともナデ。外面はにぶい黄橙色天井部完存で積み上げ方法不明。

このほか、打製石鏃（第146図４）が出土している

85号土坑（図版19、第81図）

１区北西部に位置する平面不整形で、床面の大きな窪みがあり、下層は基盤層ブロックだった。出土遺物がなく時期を特定できない。

86号土坑（図版19、第81図）

１区北西部の４号方形周溝墓内に位置する。平面不整形で、床面の大きな窪みがあり、遺物が多く出土したので廃棄土坑の可能性が高い。上層は基盤層ブロックを含む堆積土、中層は炭化物を含む黒灰褐色土であった。出土遺物から中期初頭である。

出土遺物（図版53、第87図）

１は逆Ｌ字口縁甕で、外面は黒褐色に煤が付着しており赤化も見られるので煮沸使用されている。２は如意形口縁甕で、口唇部外側端に下方から刻み目が入る。外面はタテハケ、内面は器面剥落で調整不明。外面頸部と内面口縁部は黄橙色で、それ以外は灰褐色で赤化が見られるので煮沸使用されている。３は如意形口縁甕で、歪みがある粗い成型。内外とも器面剥落で調整不明。内外黄橙色から黄灰色で変色が見られない。煮沸使用されているか不明。４は如意形口縁甕で、口縁部は器壁が薄い。内外とも器面剥落で調整不明。内外黄橙色だが、外面下位は暗黄灰色に変色しているので煮沸使用されている可能性が高い。５は大型如意形口縁甕で、外面は肩部がヨコハケ、胴下位はタテハケ。内面は摩滅のため調整不明。外面は全体に赤化しており、内面は黒斑部分にもかかわらず赤化している。本来は口縁部の黄橙色であろう。煮沸使用されている。６は甕の底部で、外面はハケがかろうじて観察でき、内面は器面剥落で、内底は摩耗が著しい。外面は黄橙色を基調とし、底部縁は赤変している。内面は黄橙色だが胎が露出したもので、本来の器面はわからない。

このほか円盤形土製品（第147図14）が出土している。

89号土坑（図版19、第81図）

１区北西部西端に位置し､36号溝に中央部を切られる。平面不整形で、床面は揺やかに窪んでおり、浅いためプランは不鮮明だった。出土遺物から板付ⅡB式併行期である。

出土遺物（第87図）

７は甕の底部で、器面は内外とも摩滅していて調整不明。外面は黄橙褐色で底部縁が赤変している。内面は暗黒褐色なので煮沸使用されている。

92号土坑（図版19、第86図）

１区中央部西側で３号方形周溝墓内に位置する。55a･b号竪穴住居跡と切り合い、中央部の窪みは円形住居跡の中央土坑と考えた。平面隅円方形で、貯蔵穴の可能性もあるが、土層に基盤層ブロックがないことから土坑とした。出土遺物が少なく時期を特定できない。

出土遺物（第87図）

８は如意形口縁甕で、口唇部外側端に下方から細長い刻み目が入る。器面は摩滅で調整不明。外面は灰褐色で、内面は黄橙色なので煮沸使用されているかわからない。９は如意形口縁甕で器壁が厚い。外面は斜め方向のハケ、内面は摩滅で調整不明。外面は灰褐色で、内面は黄橙色なので、煮沸使用されているかわからない

93号土坑（図版19、第86図）

１区北西部北端に位置する。平面不整形で中央部の窪み深く、下層が堆積したあと一度に埋まっている。出土遺物から板付ⅡB式併行期である。

出土遺物（図版53、第87図）

10は小型の如意形口縁甕で器壁が厚い。器面は外面がよく残っており斜め方向の目の粗いハケ、内面はナデ。外面は黒灰褐色で全体に赤化している。内面も灰褐色だが赤化している。内面口縁部は黒灰色に変色しているので、蓋をして煮沸使用されている。11は小型甕の底部で器壁が厚い。器面は外面がケズリ状の面をもつナデで、内面はナデ。外面はにぶい赤黄灰褐色で全体に赤化している。内面は灰褐色で煮沸使用されている。底部完存で積み上げ方法不明。

94a・b号土坑（図版20、第86図）

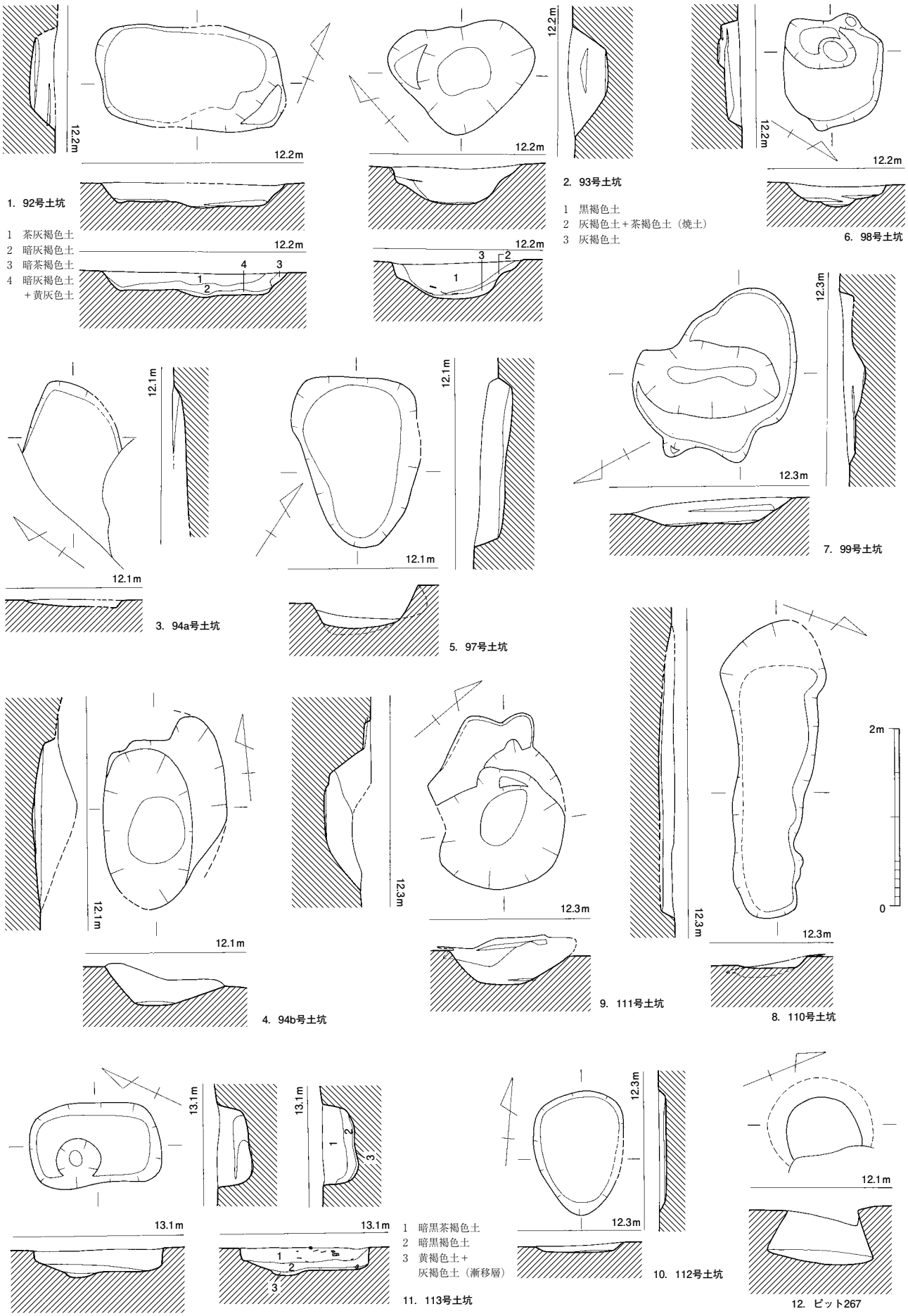
１区中央部西側で１号方形周溝墓東辺に切られている。当初24号として掘り下げていたが、方形周溝墓の下から検出されたプランを同一遺構と認識したため遺物が混ざった。後に、別の遺構と判断したのでa･b号に分けた。a号は24号貯蔵穴に切られるため、全体像はわからない。床面は平坦だが残りが悪いので貯蔵穴の可能性もあるが土坑とした。ｂ号は平面楕円形で床面は平坦だが中央部がやや窪む。出土遺物から中期前葉古段階である。

出土遺物（図版53、第87図）

12は逆Ｌ字口縁甕で、内器面は摩滅で調整不明、外面はタテハケが残る。外面橙褐色、内面黄灰色なので、煮沸使用されているか不明。13は如意形口縁甕で、口唇部に刻み目なし。器面は摩滅で調整不明。外面は頸部がにぶい黄灰色で、口縁部度体部は暗灰褐色で、内面は肩部まで橙褐色で下位は暗灰褐色なので、煮沸使用されている。

97号土坑（図版20、第86図）

１区中央部西側で36号溝に切られるため、全体像はわからない。57a号竪穴住居跡との切り合い



第86図　弥生時代前期から中期前葉の土坑・ピット実測図
1区92 ～ 94a・94b・97 ～ 99・110 ～ 113号土坑、ピット267（1/60）

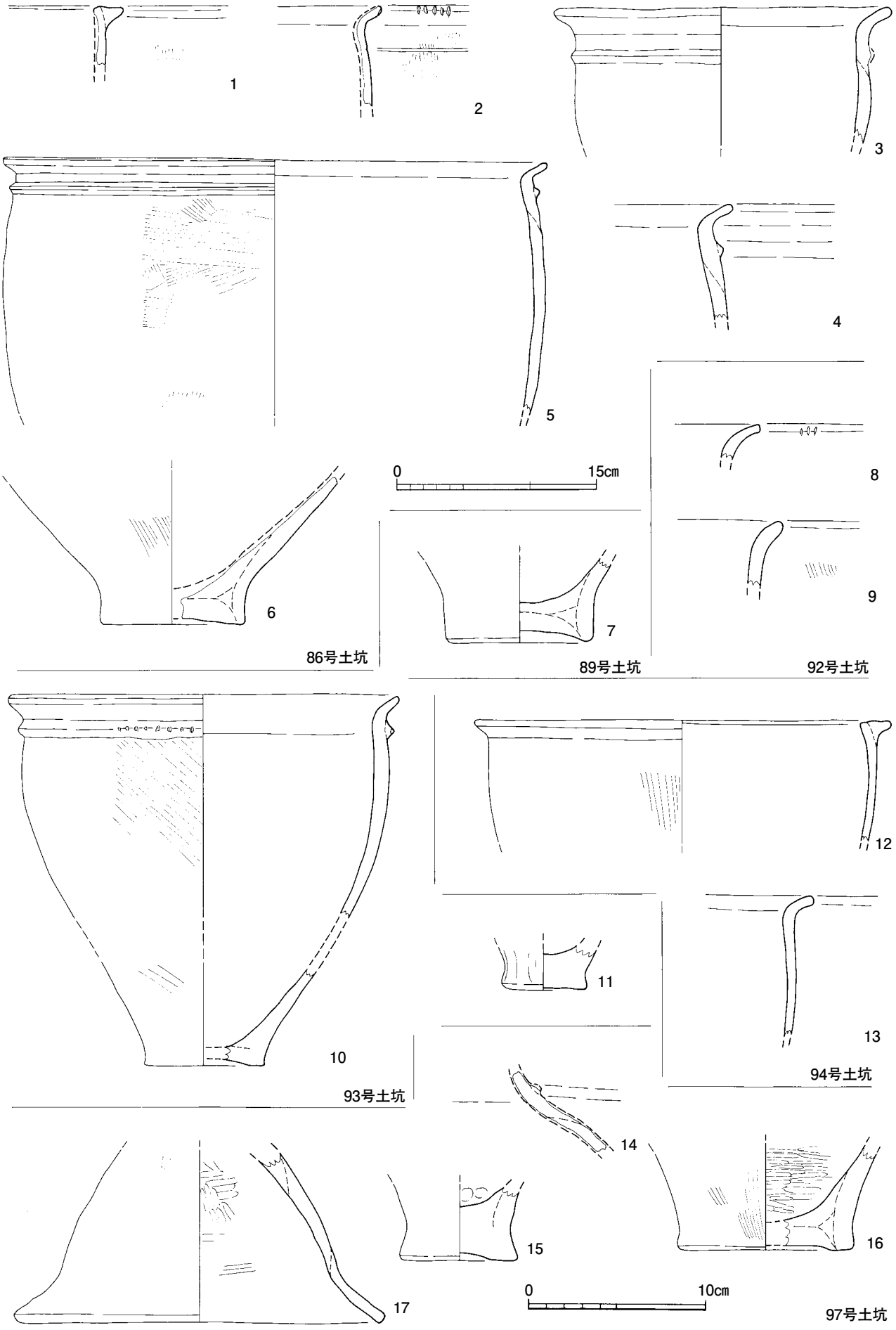
関係はわからなかった。浅く不整形プランなので土坑とした。中期初頭だろう。
出土遺物（第87図）
14は壺の頸部で、器面摩滅で調整不明。内外赤茶褐色の胎土である。15は外面に赤変がなく、内面も変色がない。見込みの中央の摩滅が著しいので蓋ではない。鉢か煮沸されていない甕であろう。器面摩滅のため内外調整不明。色調は外面にぶい黄灰色、内面橙褐色である。天井部完存で積み上げ方法不明。16は壺の底部で、外面タテハケ、内面ミガキ。外面は黄橙色で黒斑がある。内面暗灰褐色で内容物による変色であろう。底部の積み上げ痕は明瞭。17は内外とも赤変しており、外面の赤変の方が強いが、内面の天井部が暗灰褐色で赤変していないので、下からの加熱ではないことから、蓋である。外面は器面摩滅で調整不明、内面はミガキがかろうじて観察できる。内外赤橙色で、胎土の黒色が露出する部分が多い。

98号土坑（図版20、第86図）
１区中央部で３号方形周溝墓南東コーナーに切られる。浅く小型の略正方形プランなので土坑とした。出土遺物が少なく時期を特定できない。
出土遺物（第88図）
１は壺の底部で、器面摩滅で調整不明。内外黄橙褐色で変色なし。底部完存で積み上げ方法不明。

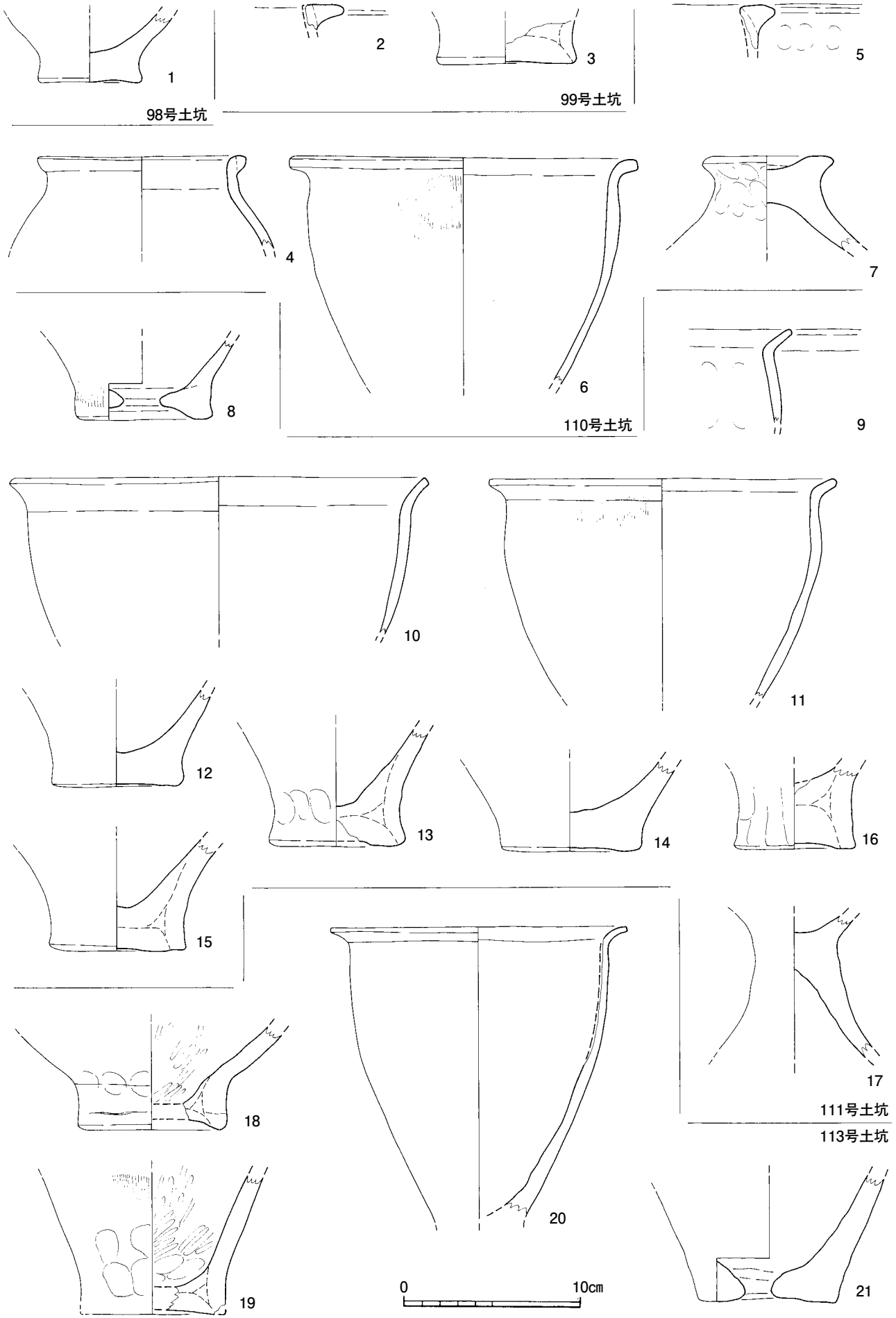
99号土坑（第86図）
１区中央部で北側に位置し、浅く不整形プランなので土坑とした。出土遺物が少ないが中期初頭だろう。
出土遺物（第88図）
２は逆L字口縁甕の口縁部で、口唇部は剥離している可能性もある。内外摩滅で調整不明。３は内面がにぶい灰褐色に変色し、外面はやや赤化しているので甕の底部であろう。

110号土坑（第86図）
１区中央部西側で111号土坑を切り、38号貯蔵穴とは切り合い関係がわからなかった。浅く略長方形プランで、溝のようだが壁の立ち上がりがあったので土坑とした。出土遺物から板付ⅡC式併行期である。
出土遺物（図版53、第88図）
４は小型の壺で口縁外面を肥厚させている。器面の摩滅が著しく調整不明。外面の黄灰色を基調とするが、内面が赤化している。外面は火を受けていないことから、内部で火を使ったことになるので、手焙りのように使用されたのではないだろうか。５は甕で口縁外面を肥厚させている。外面灰褐色で、口唇部の黒色部は黒斑だろう。煮沸使用の有無不明。６は小型の如意形口縁甕で器壁が薄い。器面摩滅が著しいが、外面にはタテハケが残る。内面は不明。内外黄橙褐色で、下位が茶褐色に変色しているので煮沸使用されている。７は小型甕か甕蓋で、内外器面摩滅で調整不明。外面黄橙色で、内面は暗橙褐色に変色している。

111号土坑（第86図）



第87図　弥生時代前期から中期前葉の土坑出土土器実測図13
1区86･89･92･93･97号土坑（５は1/4、他は1/3）



第88図　弥生時代前期から中期前葉の土坑出土土器実測図14
1区98・99・110・111・113号土坑（1/3）

１区中央部西側で５号溝北西隅と110号土坑に切られる。楕円形プランで、床は中央部が窪むのであったので土坑とした。出土遺物から板付ⅡC式併行期である。土師質土器の鉢と瓦器椀片が出土しているが５号溝に切られているので混入であろう。

出土遺物（図版53、第88図）

８は壺の底部で、外面は器面摩滅しており内面は調整不明だが、外面はタテハケが残る。外面暗黄灰色、内面の黄灰色は胎土の色調である。内面には部と胴部の積み上げ痕が残る。９は如意形口縁甕で、口唇部に刻み目はない。内外黄橙褐色で変色なし。内外器面が摩滅しているので調整不明。外面に黒斑あり。10は鉢で、口唇部に刻み目はない。内面口縁部から頸部は黄橙灰色で、胴部は暗灰褐色に変色し、外面胴部が赤変しているので煮沸使用されている。内外器面が摩滅しているので調整不明。外面に黒斑あり。11は如意形口縁甕で、口唇部に刻み目はない。内外黄橙褐色で変色なし。外面は器面が摩滅しているが、タテハケが残る。12は外面が赤変しており、内面は炭化物の吸着のためにしては変色が均一なので壺だろう。13は甕の底部で、器面剥落が著しく調整不明。外面は黄橙色だが、内面が橙褐色で変色しており、外面にわずかに赤化が見られるので煮沸使用されている。外底から穿孔されているが貫通していない。14は甕の底部で器面剥落が著しく調整不明。外面は赤化しており、内面が橙褐色で変色しているので煮沸使用されている。底部完存で積み上げ方法不明。15は甕の底部で外面は器面剥落が著しく調整不明、内面はナデ。外面は黄橙色で、内面が橙褐色で変色しており、外面に赤化が見られるので煮沸使用されている。外底の沈線は植物の茎の圧痕ではなく何かを引きずった傷であろう。16は甕の底部で、器面剥落が著しく調整不明。外面は明橙色で赤化しており、内面が黄褐色で変色しているので煮沸使用されている。17は高杯の脚部で、器面剥落が著しく調整不明。内外面はにぶい黄橙色で、杯部と脚部は完存のため接合方法不明。

112号土坑（第86図）

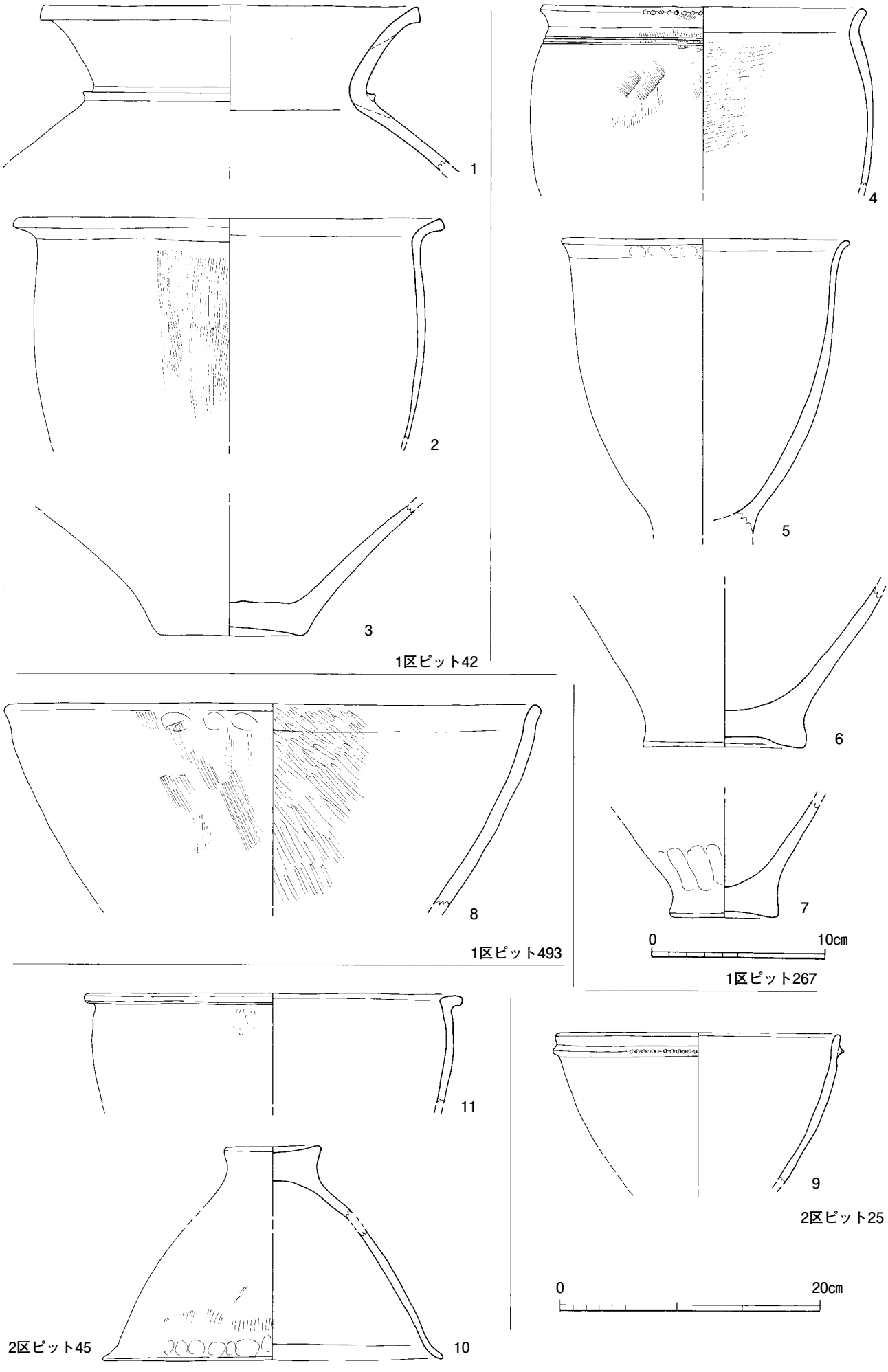
１区中央部で土坑とした。楕円形プランで当初円形住居の中央土坑としていたものだが、床面が平坦なので土坑とした。掲載していないが、砲弾形刻目突帯甕の小片が出土しており、口縁部下の刻目は幅が広く大きい。遺構の時期は特定できない。

113号土坑（図版20、第86図）

１区南西部で当初４号墓としたもので、弥生前期の土器は混入で、周囲の墓同様の土壙墓と考えていたが、墓と断定できる痕跡はなく、中世とするだけの根拠にも欠けるので弥生の土坑に変更した。方形プランで床面は平坦。出土遺物から板付ⅡB式古段階併行期だろう。

出土遺物（第88図）

18は壺か鉢の底部で、内面の焼成も良く橙褐色を呈する。19 ～ 21は甕で、19は外面タテハケ、内面ナデ。胴下位には内外オサエ列が入る。内外変色なく、橙褐色を呈する。20は口縁部と胴部の図上接合の小型品で、胴下位は赤変し、内外灰褐色に変色しているので煮沸使用されている。21は底部に穿孔があるもので、内外摩滅のため調整不明。内面は灰褐色に変色し、外面も赤変しているので煮沸使用されている。



第89図　弥生時代前期から中期前葉のピット出土土器実測図
1区ピット42・267・493、2区25・45（2・6・7は1/3、他は1/4）

（4）ピット

ピット267（図版20、第86図）

１区中央部西側の１号方形周溝墓内部の北側に位置する小型のピットで、袋状貯蔵穴のような断面形で、土器が多く出土した。水が溜まって壁が崩落し、袋状とも考えられるが、ほかのピットには見られない。

出土遺物（図版53、第89図）

4･5は如意形口縁甕で、４は小さな刻み目が口縁部に入り、頸部にタテハケの上に２条同時に引かれた細い沈線が入る。内面にぶい暗橙灰褐色だが、煮沸痕は明瞭でない。５は口唇部に刻み目なし。器面は摩滅で調整不明。外面は肩部がにぶい黄灰色で、胴部中位は黒灰色で、下位は赤橙褐色で赤変しているので、煮沸使用されている。６は壺の底部で、器面は外面摩滅しており、調整不明だが、内面はナデが残る。底部完存のため積み上げ方法は不明。内外面明黄橙色で、外面には黒斑がある。７は甕の底部で、器面は内外面摩滅しており、調整不明。底部完存のため積み上げ方法は不明。外面橙褐色で底部縁が赤変しており、内面は黒灰褐色に変色している。

その他のピット出土遺物（図版53、第89図）

１～３はピット42出土で、１は壺で、口唇部・突帯に刻み目はない。肩部にも文様なし。器面は内外摩滅しており、調整不明。外面は橙褐色。内面は茶褐色から灰褐色で口縁部が黒灰色なのは器面摩滅で胎土が露出しているため。２は如意形口縁甕で、口縁部は刻み目なし。外面は目の細かいタテハケ、内面は器面摩滅で調整不明。内外面暗黄橙色で、器面摩滅で胎の黒色が露出しているため、本来の色調がわからず煮沸使用の有無不明。８はピット493出土の大型の鉢で外面は幅の狭いミガキ、内面は幅の広いミガキ。内外黄橙色から黄灰褐色で黒斑以外の変色なし。９はピット25出土の刻目突帯甕で、口唇部に平坦面をもつ。器面摩滅で調整不明。色調は暗褐色から黄褐色で、刻目の間隔が小さい。10･11はピット45出土で、10は甕で、口縁部は外面側を肥厚しており、肥厚部上面は平坦にナデている。器面は剥落しており、外面にタテハケがわずかに残るのみである。内外黄橙色で、砂粒多い。11は蓋で、口縁部端部の内面が灰褐色に変色しているので伏せ焼きされている。外面には煤が付着するので甕蓋であろう。体部と底部と接合しないが、同一個体であろう。外面は橙褐色で、内面は暗灰褐色。外面は肩部がタテハケでその後ナデ消している。口縁部はヨコナデ。内面は丁寧なナデ。砂粒を多く含む。

このほか、１区ピット273から石核・凹み石が、ピット346･358から打製石鏃、ピット396から石製小刀、ピット456から２次加工剥片、ピット85からチャート製剥片ピット131からは打製石斧、ピット113から磨製石斧が出土しており特殊遺物の項に掲載した。

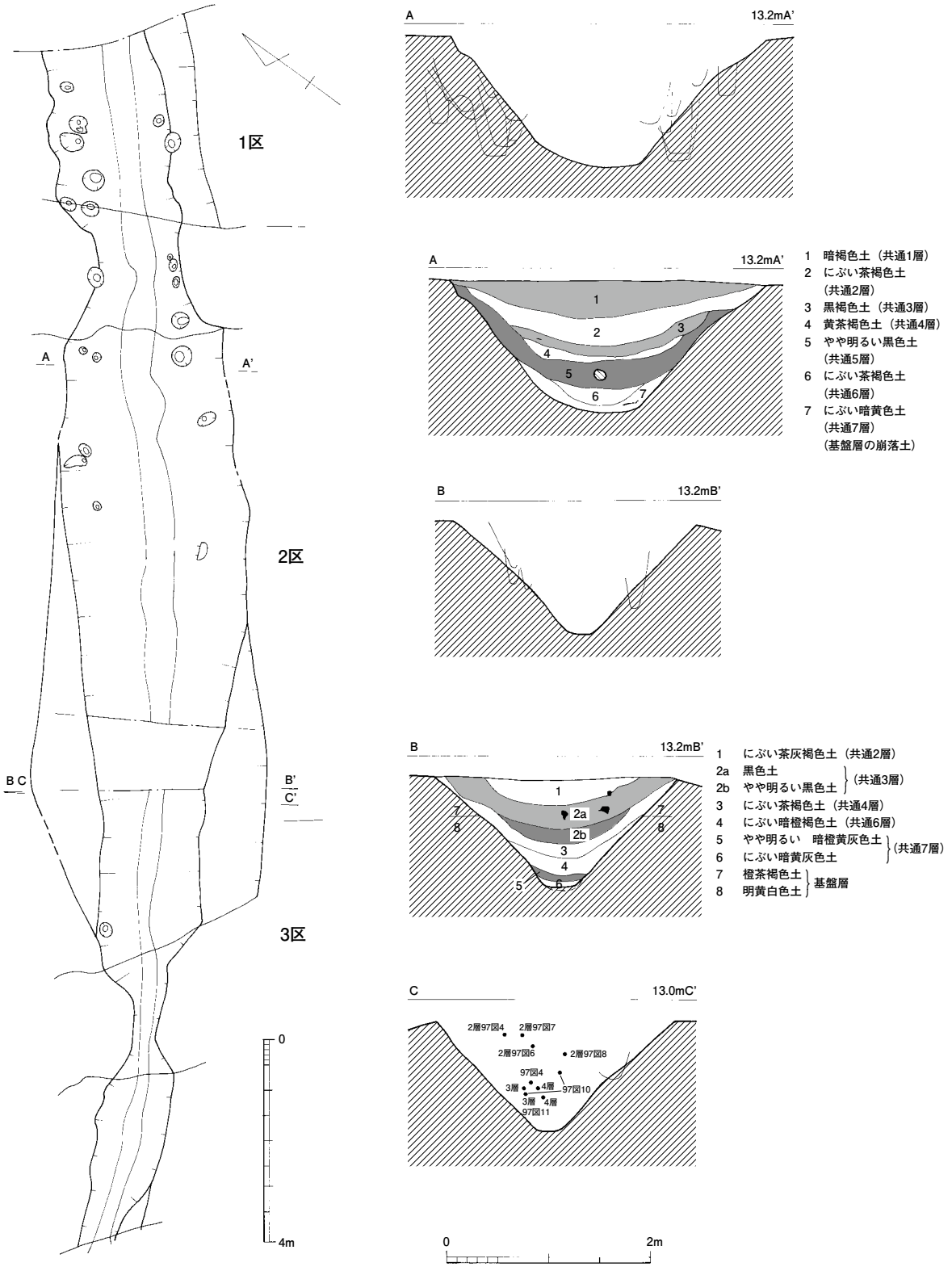
（5）溝

当該時期に属する溝は1･2区ともに１条ずつであるが、同一遺構なので環濠１条のみである。

１区３号溝・２区17号溝（巻頭図版２・図版21･22・Photo.12 、第90･91図）

１区中央部西端から中央部北端に向かって弧状に走る大溝で、明瞭に検出され、上面から出土し

第90図　１区３号溝・２区17号溝平面実測図　(1/300)

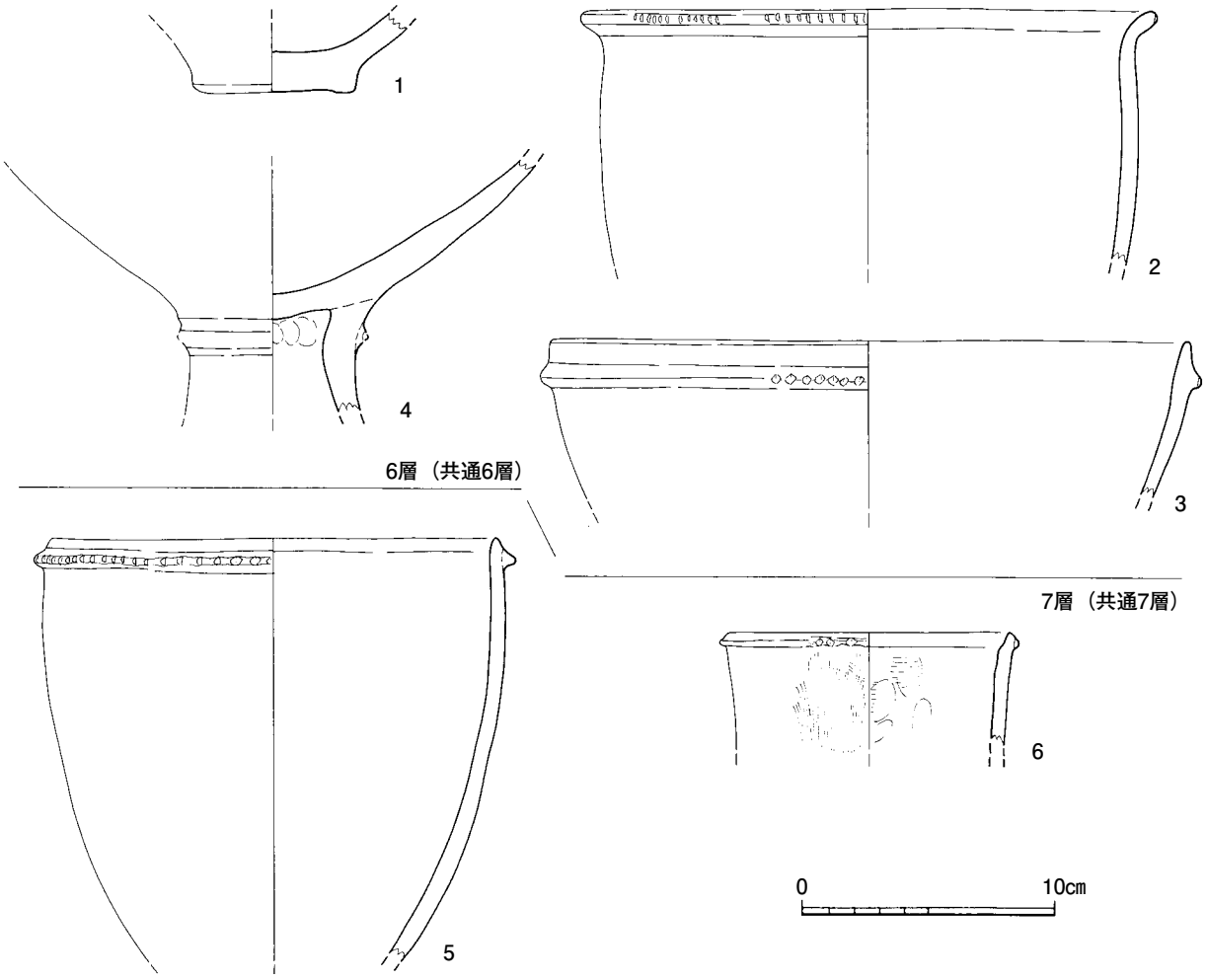


第91図　1区3号溝1～3区実測図（1/60）

た土器から当初から弥生前期の環濠であることが想定できた。１つの環濠を反転しながら分割して調査したが、１人の担当者が調査したことで土層観察・遺物の取り上げ方などは一貫して行うことができた。１区は東端から調査を始めたことから、３号溝は東から13 区に、２区17号溝は同じ調査区内だけだったので、西から４区に分けた。掘り下げにあたっては、全区間土層単位の掘り下げに努めたが、層の境界部分や大きな個体は上層に突出するため、層一括で取り上げたものについてはやや混在したものもあるだろう。最初に着手した３号溝１～３区を除いて、部位や文様など時期決定の材料になるものについては１点ごとに位置と高さを記録して取り上げ、出土層位を検証できるようにした。なお、同一層の分層は平面的には確認しづらかったので、遺物の取り上げについては土層セクション内や近い部分のわかる範囲だけ分層名をつけている。

環濠は平面プランが楕円形になり、１区の西端と２区の東端に陸橋部をもつ。１区の陸橋部は検出面で確認されたが、２区には掘り直しされた際の埋土があり、後世の遺物がわずかながら混入していた。

１区の環濠内側の検出面は東にいくほど下位の基盤層の深い部分が露出していた。したがって、環濠内部には遺構はほとんど残っておらず、貯蔵穴が失われているとすれば少なくとも２m削られているだろう。そのため、後世の遺構もほとんどなく、深い貯蔵穴や井戸・落し穴しか残っていなかった。２区の環濠内部はやや削平が浅かったものの、環濠の縁側に貯蔵穴が２基しか残っていなかった。



第92図　１区３号溝１区出土土器実測図（1/3）

陸橋部両端には柵や門状の施設は見られなかった。環濠は陸橋部に接する部分が最も幅が広く深いが、これは陸橋部の残りが良く、他の部分の削平の程度が大きかったためではない。そのことは陸橋部付近だけが断面台形で、そのほかはV字形であることに表れている。濠内で最も深いことから水が溜まりやすかったらしく、２区では陸橋部付近の溝底だけがグライ化していた。陸橋部に接する溝の小口部の辺は直線的で、壁には掘り直したものと見られる掘り方の段があった。

環濠の壁には多くのピットが見られた。上位には後世のピットもあるだろうが中位以下は確実に環濠に伴うと見られる。間隔も高さも大きさも不均一なので逆茂木ではないかと考えた。多くは直立していたが、斜めに入り込むものもあった。柱穴径は大きいものもあるが、抜き取りや柱穴壁が崩落したとも考えられる。この壁のピット群は壁の両側に見られ、陸橋部付近に集中していた。

以下、出土土器については区と層ごとに述べ、石・鉄・土製品については特殊遺物として後述する。土層は、上面の削平の程度や溝の深さの差に区毎に違いがあるほか、その区にしかないブロック状の土層があり土層名が異なっているので、個別の区の記述には取り上げ時の土層名を使用し、掲載図には共通層名を併記した。

環濠の堆積層は、基本的には有機質腐触に由来する黒色土系と基盤層に近い黄橙褐色系の互層であったことから、区毎の相違があっても対照は容易であった。共通１層は黒色土系で、削平の大きい部分にはその底面部分しか存在しない。共通２層は黒色系と黄橙褐色系の中間的な色調だが、共通３層が黒色系なので分層できた。４層は基盤層に近い堆積層で、環濠の内側から流れ込んでいる。厚く堆積する部分もあれば見られないところもあり、環濠の掘削土が流入したものと見られる。共通５層は黒色系の中でも最も濃黒で、明瞭に分層できた。この５層が薄いのは、４層の底面の掘削で削られたためであろう。共通６層はにぶい暗橙灰褐色で、明るい橙色と白色粘土化したブロックが入るので底面近くの壁が崩落したものである。共通７層はにぶい暗灰褐色土で、黒色土系には入らないが、６層以下の中で最も暗い。８層はほとんど存在せず、溝の底面が深い部分にだけ堆積していた。８層のない区画の最下層は７層となるので、８層は共通７層の下位にあたる。各土層の時期については、出土遺物の検討とともに後述する。

３号溝１区（第92図）

１区は上位を中世の２号溝に切られているので、下位層にしか出土遺物がない。また、最初に調査したため、位置を記録して遺物を取り上げていない。

１～４は６層出土で、１は壺の底部で、器面摩滅で調整不明。積み上げ痕はわからないが、粘土板貼り付けであろう。近似例が下稗田遺跡Ｃ地区364号貯蔵穴にあることから、板付ⅡＢ式併行期のものであり、混入品だろう。２は如意形口縁甕で、口縁部の刻目は小さく浅く間隔が狭い。外面はナデで、ハケはない。内面は器面摩滅。内外煮沸使用による変色なし。３は砲弾形刻目突帯文甕で、器面剥落が著しく調整不明。刻目は大きく深く間隔狭い。外面口縁部と内面はにぶい黄灰白色で、外面突帯以下は暗灰褐色を呈するので、煮沸使用されている。４は高杯で、脚部との接合部はオサエ。突帯の頂部は摩滅している。

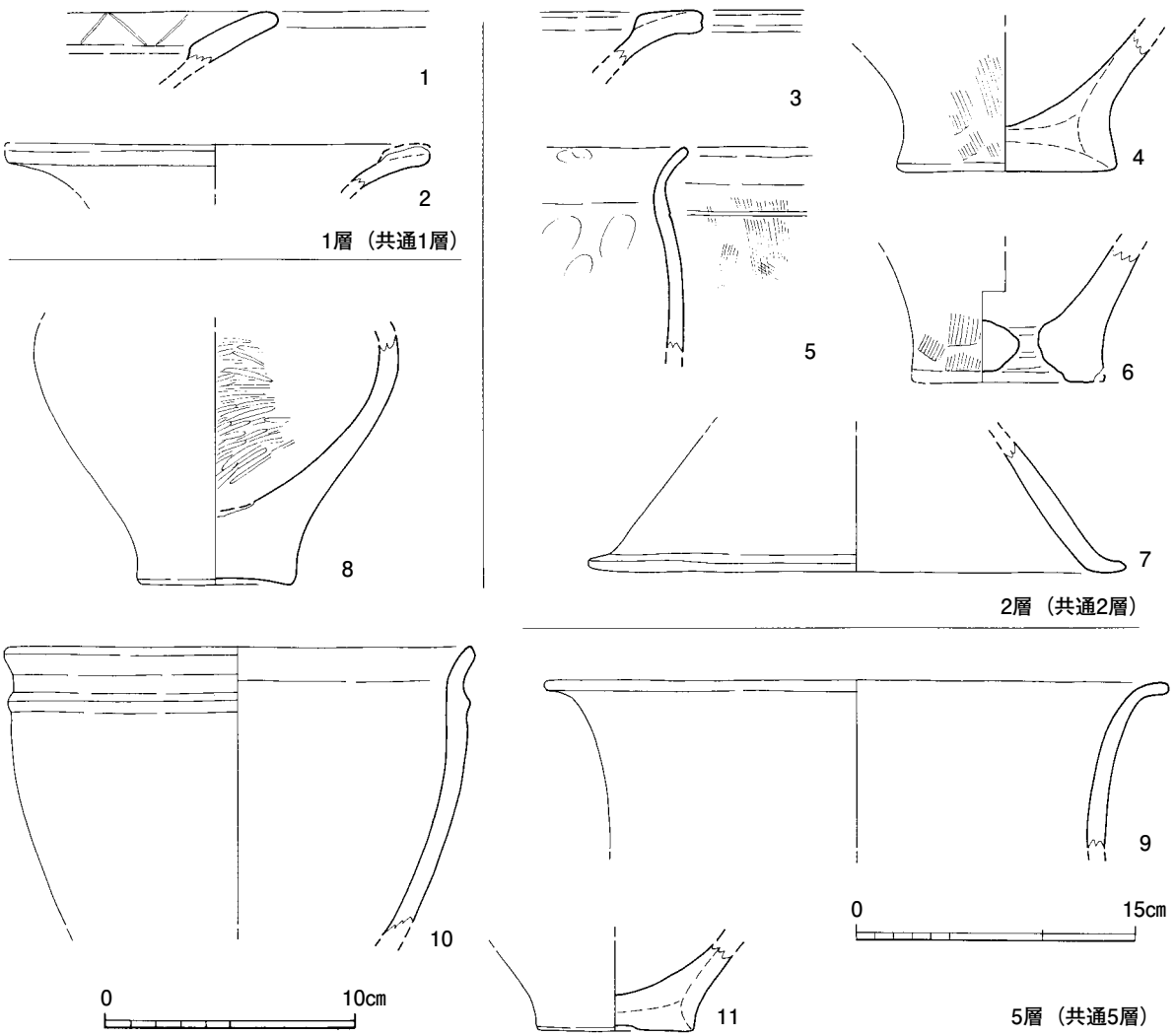
5･6は７層出土で、５は砲弾形の甕で、６層の破片と接合した。刻み目は小さく間隔が狭い。内外器面摩滅で調整不明。内外黄橙灰色だが胎土の色調で、下位は赤変しているので煮沸使用されている。６は下層で取り上げた小型の甕だが、11区７層出土に類例があるので、７層出土とする。内

外黄橙褐色で変色なし。外面は目の細かいタテハケ内面はヨコハケをナデ消している。胎土は精良で、混入物少ない。

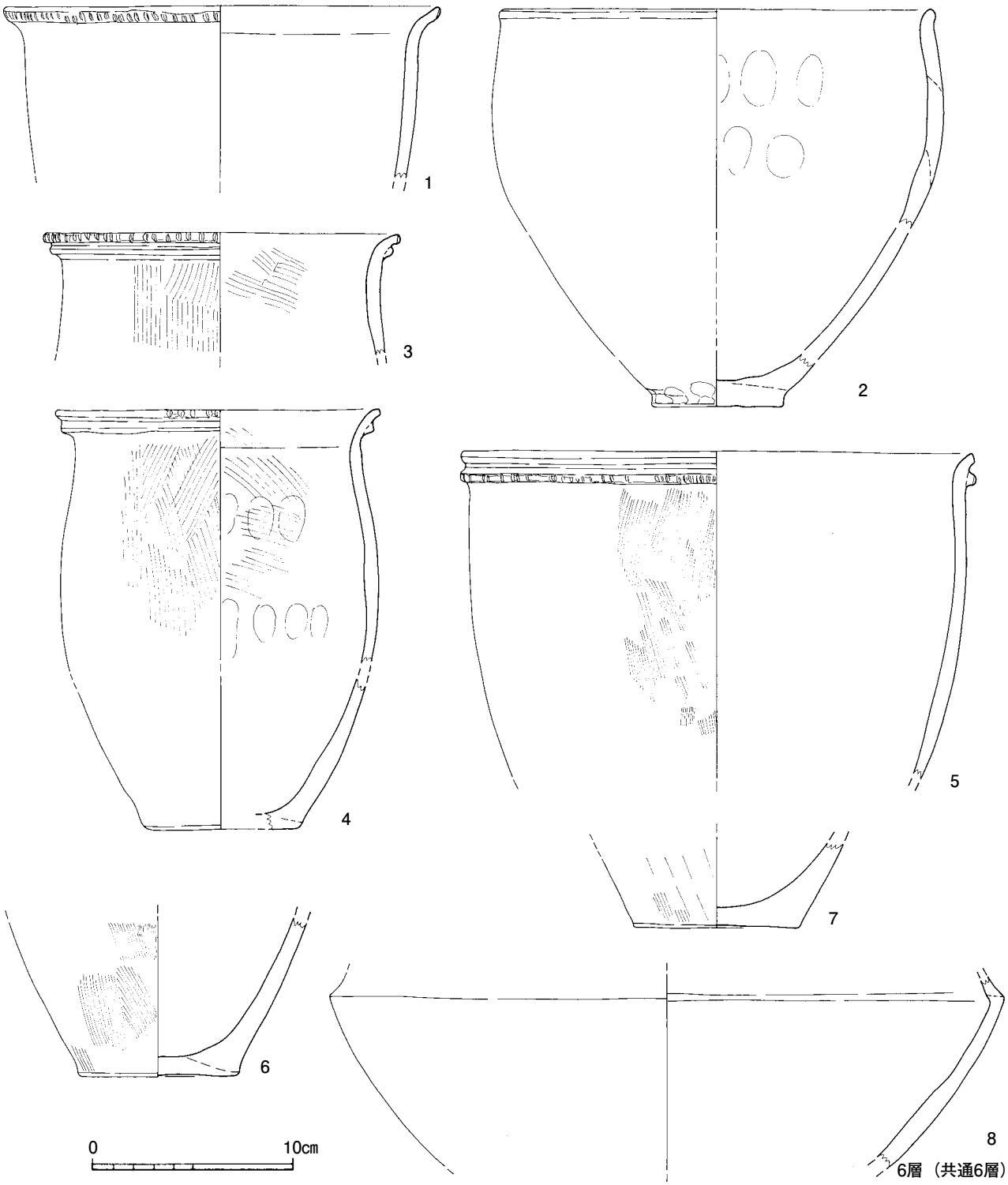
１・２区間（第93･94図）

第93図1･2は１層出土で、１は広口壺の口縁部で、内面側を肥厚し、鋸歯文が線刻されている。内外ナデ。内外暗黄橙色で変色なし。２は小型の広口壺の口縁部で、内面側を肥厚している。肥厚部や口唇部の施文の有無は不明。内外器面摩滅で調整不明。内外橙褐色で変色なし。

３～７は２層出土で、３は広口壺が高杯の口縁部で、内外器面摩滅で調整不明。内外黄橙色で変色なし。４は内外橙褐色で変色がなく、内面は器面が残っていることから壺か鉢の底部である。外面はハケ。内面ナデ。５は甕で、外面は目の細かいハケが入り、頸部はその上に細い沈線が２条入る。外面橙褐色、内面暗黄灰褐色で煮沸使用されているか不明。内面口縁部はミガキ、胴部はナデ。６は甕の底部で、外底中央部が窪む。底部完存で積み上げ方法は不明。内外ナデで、ハケがない。外面茶褐色、内面暗灰褐色で、外面底部の周縁が赤化しているが、これは表面が摩滅して胎土の色調が現れたもの。底部は外底からの穿孔があるが、穿孔部には変色が見られないので、煮沸使用された後、穿孔されたものである。７は器面の剥落が著しく調整不明。内外暗茶灰褐色で、裾部



第93図　１区３号溝1･2区間出土土器実測図１（９は1/4、他は1/3）



第94図　１区３号溝1･2区間出土土器実測図２（1/3）

の縁が黒化しているので甕蓋であろう。

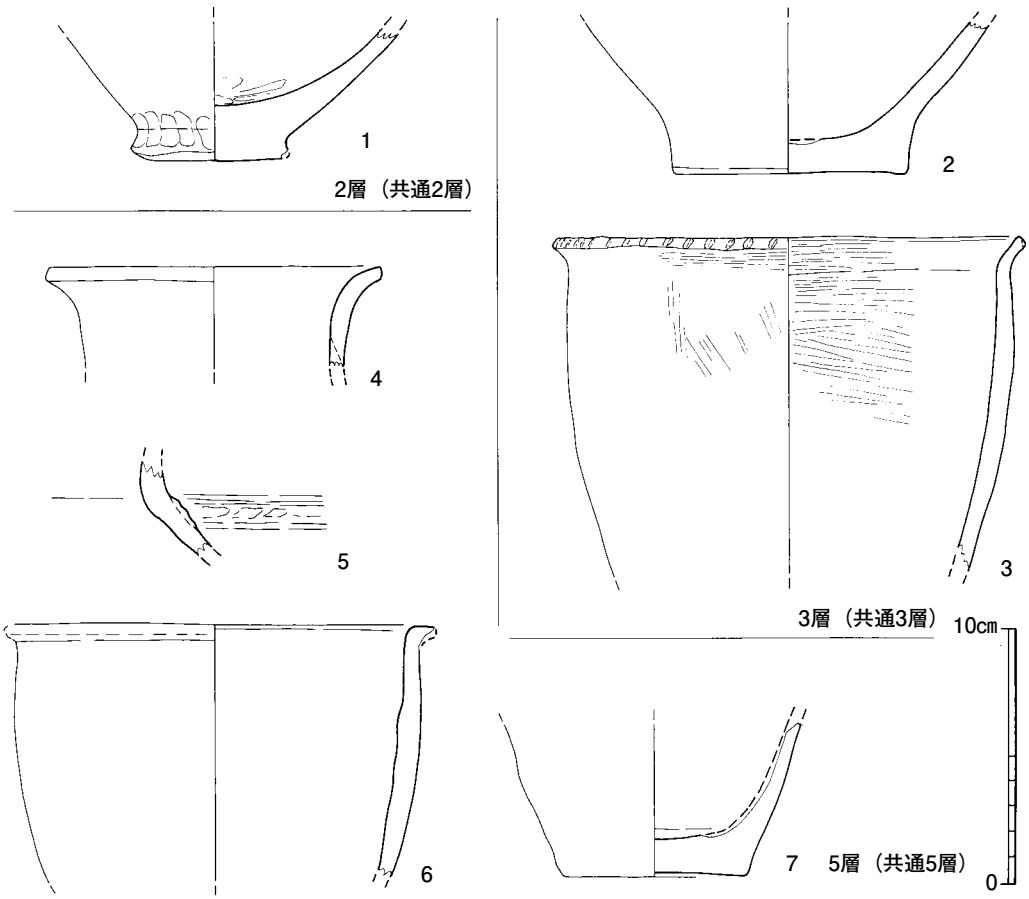
８～11は５層出土で、８は小型壺で、胴部と底部は図上接合である。外面は器面摩滅だが、内面同様ミガキの可能性が高い。外面は淡黄橙色で、内面は暗淡黄橙なのは、焼成不良のためだろう。底部完存で積み上げ方法不明。９は大型壺で、肥厚や接合痕はない。内外とも器面摩滅で調整不明。内外面淡黄橙色で、変色なし。10は器面摩滅で不明瞭だが、口縁部にも突帯にも刻み目がない。内外調整不明。内外黄灰～黄橙色で、胴下位は赤化しているので煮沸使用されている。11は外面にわずかに赤変があり、内面が黒色に変色しているので甕の底部であろう。10と同一個体になる

かは不明。外面はナデ、内面は器面が剥落している。外面淡黄橙白色。

第94図は６層出土で、１は如意形口縁の甕で、器面は摩滅しているが、外面はハケはない。内面はナデ。口縁部内面はやや窪む。外面は暗灰褐色だが、内面は黄橙色で変色なし。２は口縁が短い如意形口縁甕で、口縁部が摩滅しているので刻み目の有無は不明。器面摩滅で調整不明だが、外面にハケは見られない。外面灰褐色で下位は赤変している。内面は胎土が露出しており器面の色調は不明。底部は図上接合。３～５は如意形口縁甕の口縁下に突帯がつくもので、３は口縁部に刻み目が入るが、突帯には入らない。場所によっては突帯と口縁下部は一体化している。内外目の粗いハケで、内面はにぶい暗灰褐色に変色している。４は口縁部に刻み目があり、口縁下の突帯に刻み目がない甕で、内外目の粗いタテハケ。内外橙～黄橙褐色で、外面に大きな黒斑が入り、内面はほぼ全面黒灰色。底部は図上接合で、胴下位は赤化しているので煮沸使用されている。３とは色調が異なるので別個体である。５は口縁部には刻み目がなく、突帯には小さな刻目が狭い間隔で浅く施されている。外面は突帯下が目の細かいタテハケ。内面は器面剥落。突帯まで暗褐色に変色しているので煮沸使用されている。６は甕の底部で、外面は目の細かいタテハケ、内面はナデで、内外橙褐色を呈し、煮沸使用による変色なし。４とは色調が異なるので別個体である。７は甕の底部で器面剥落が著しい。外面は目の細かいタテハケ、内面はナデ。煮沸使用による変色は見られない。８は鉢か高杯の杯部であろう。内外面はナデのみで、ミガキは見られない。

２区（図版53、第95･96図）

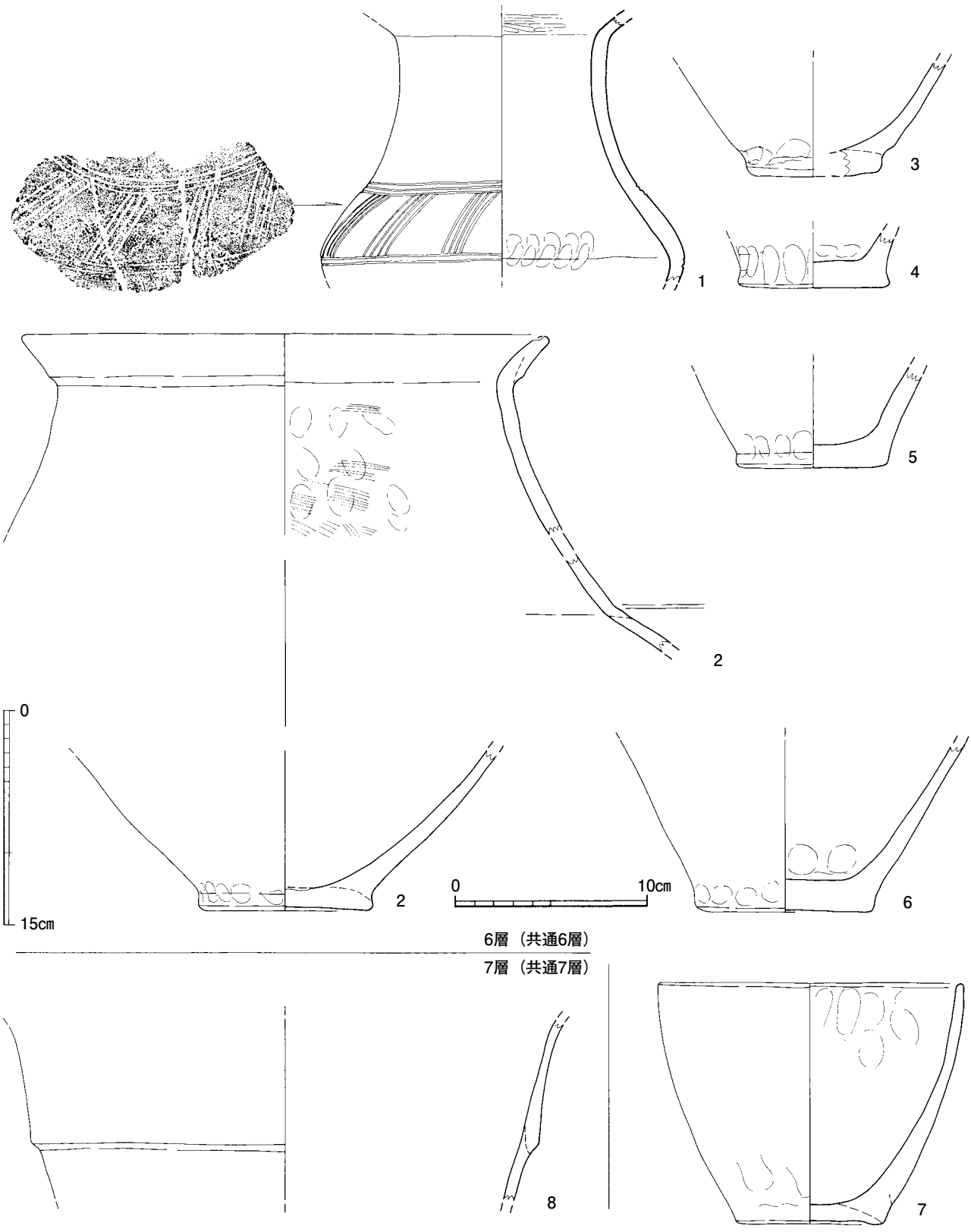
第95図１は２層出土で、小型器種の底部で、内外ナデ。外面は黄橙色で変色がなく、内面は胴下



第95図　１区３号溝２区出土土器実測図１（1/3）

位が暗灰褐色に変色し、内底は明黄灰色であることから、鉢の可能性が高い。

２・３は３層出土で２は壺の底部で、底部完存のため積み上げ方法不明。外面はナデ、内面は器面摩滅で調整不明。内外黄橙色を呈し、変色なし。３は小型の如意形口縁甕で、口唇部の刻み目は摩滅のため不明瞭。外面はナデで、部分的にハケが入り、内面はミガキ。色調は胴部の外面が赤変し、内面は暗灰褐色に変色しているので煮沸使用されている。



第96図　１区３号溝２区出土土器実測図２（2は1/4、他は1/3）

４～７は５層出土である。４は壺の口縁部で、内外ナデで黄橙灰色を呈し変色なし。５は壺の肩部で、頸部は突帯に方形のスタンプが入る鎖状突帯である。内外器面摩滅で調整不明で、黄橙色を呈する。６は小型の如意形口縁甕で、内外器面とともに口縁端部の突帯が剥落している。おそらく刻目が入っていただろう。調整不明で、色調は外面が胎土の橙褐色が露出しており、内面は下位ほど変色しているので煮沸使用されている。７は小型甕の底部で、器面は内外摩滅。内外黄橙色で、変色がないので煮沸使用されていない可能性がある。底部完存のため積み上げ方法不明。

第96図１～７は６層出土で、１は小型壺で、口縁部に肥厚の痕跡は見られない。器面が摩滅しており、外面は不明、内面は口縁部がミガキで他はナデ。内外黄橙色を呈しており変色なし。２は大型壺で、口縁部・肩部・底部の図上接合である。口縁部は肥厚による段があり、外面ナデ、内面ハケ後ナデで、底部外面には積み上げ痕が残っているので、粘土板から積み上げている。肩部は反転復元ができない小片で、段を有する。３は外面が赤化しているので、甕の底部だろう。整形が粗く、外底に粘土塊が付着している。内外器面摩滅で、調整不明。４は甕の底部で、外面は赤変しているが、内面は黄灰色である。内面の器面がないことから、変色した器面が剥落したものと思われる。底部完存のため積み上げ痕不明。５は甕の底部で、器面は内外摩滅。外面は赤変、内面は内底以外灰褐色に変色しているので煮沸使用されている、底部完存のため積み上げ方法不明。６は甕の底部で、器面は内外摩滅。底部完存のため積み上げ方法不明。内外黄橙色を呈する。７は砲弾形の小型甕で口唇部の刻目や突帯の接合痕はない。内外丁寧なナデで、内面口縁部にオサエ痕が残る。内外橙褐色で、煮沸使用されていない。

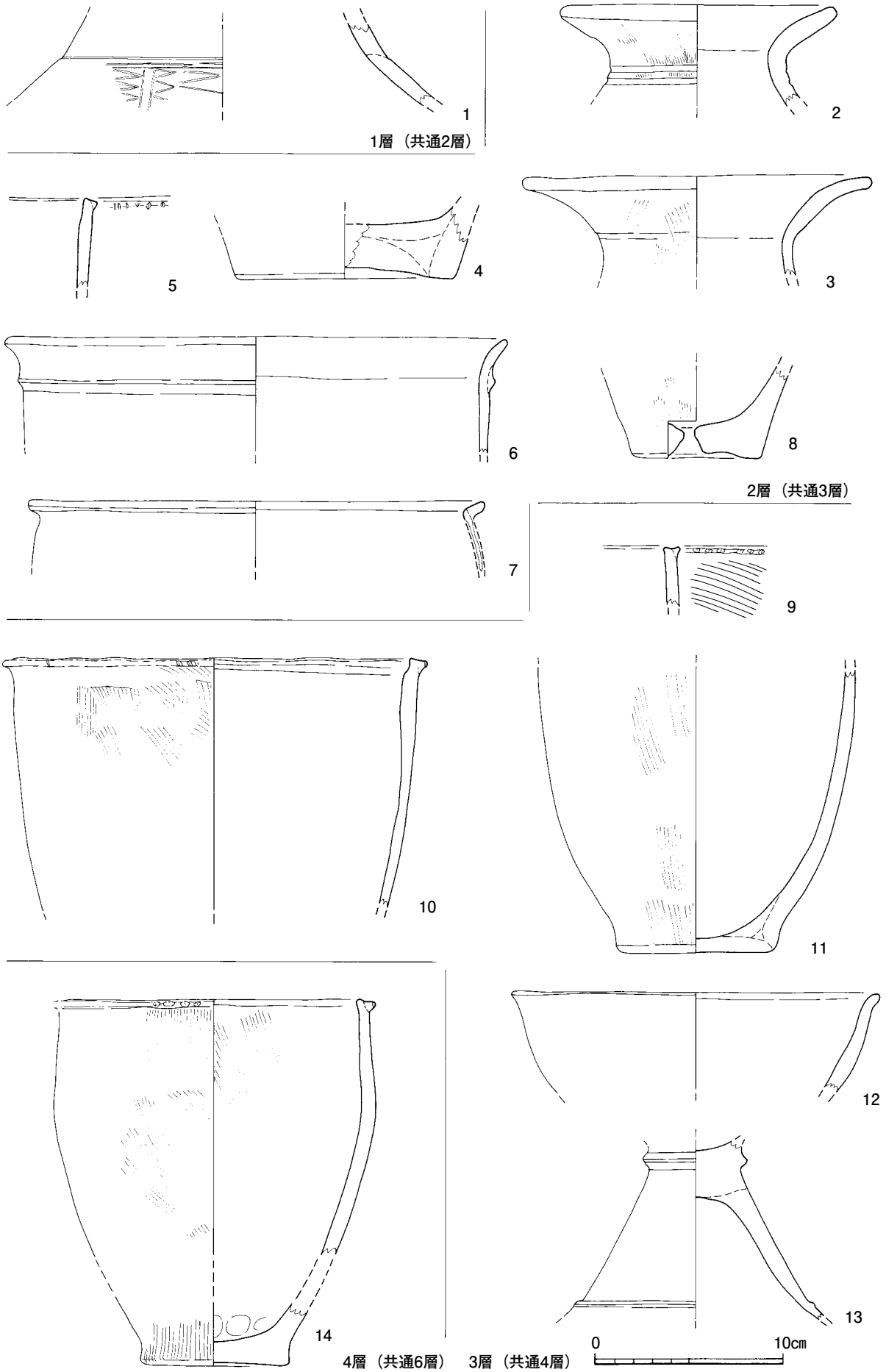
８は７層出土の有段甕で、器面は摩滅しており、調整と段部刻目の有無は不明。内外明黄橙色で胎土が異質であることから搬入品であろう。

３区（図版53、第97図）

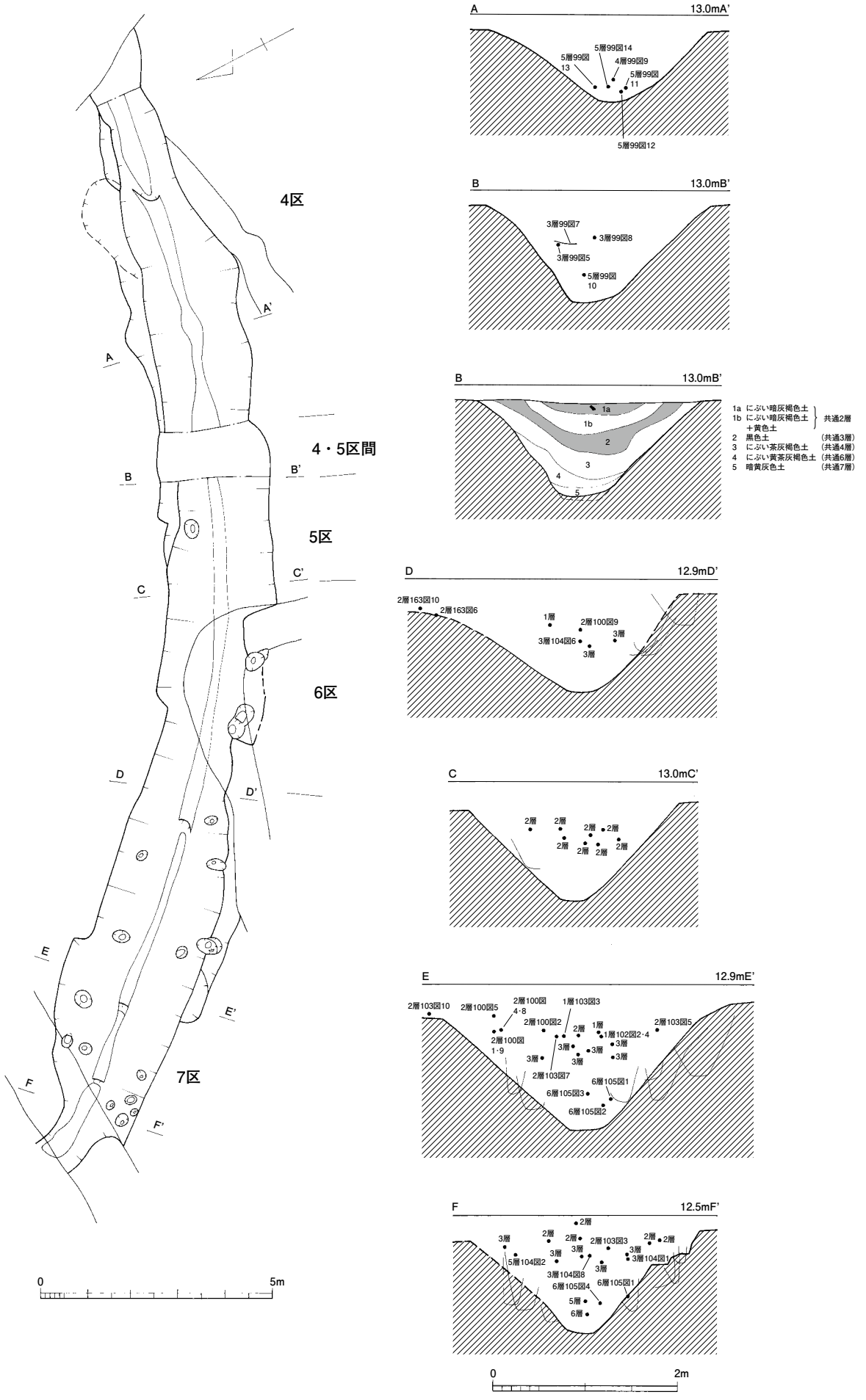
第97図１は１層出土の壺の肩部で、頸部と肩部の間には沈線が段の境界になっている。無軸羽状文は板状工具の刺突で施文されており、段部の沈線の下２条の沈線も刺突の連続で形成されている。器面摩滅で調整不明。内外暗灰褐色なのは黒斑部分のためだろうか。

２～８は２層出土で、２は広口壺で、頸部は目の細かいタテハケで、内面は器面摩滅。沈線は幅広く深い。内外橙茶褐色を呈し、変色なし。３は広口壺で、口縁部の外面の段の名残が残る。器面摩滅で外面ハケは観察できる。内外にぶい暗黄灰褐色で、褐色パミスを含む特徴的な胎土なので混入品か。４は大型壺の底部で、外底は上げ底状を呈する。器面摩滅で調整不明。花崗岩を多く含む胎土。５は砲弾形刻目突帯甕の小片で、刻目は小さい。内外黄橙色で使用変色なし。６は甕で、頸部の突帯には刻み目はない。器面摩滅で調整不明。内外黄橙色を呈し、胎土は比較的精良。７は甕で、胴部は器壁が剥離して薄くなっている。カクセン石を多く含む胎土。口唇部が赤変し、胴部はにぶい暗灰褐色なので煮沸使用されている。８は甕の底部で、外面はタテハケ、内面は器面摩滅。内面は暗灰黒色に変色しているので煮沸使用されているが、穿孔部は変色がないので使用後に穿孔されている。穿孔は外面から行っている。底部完存で積み上げ方法不明。

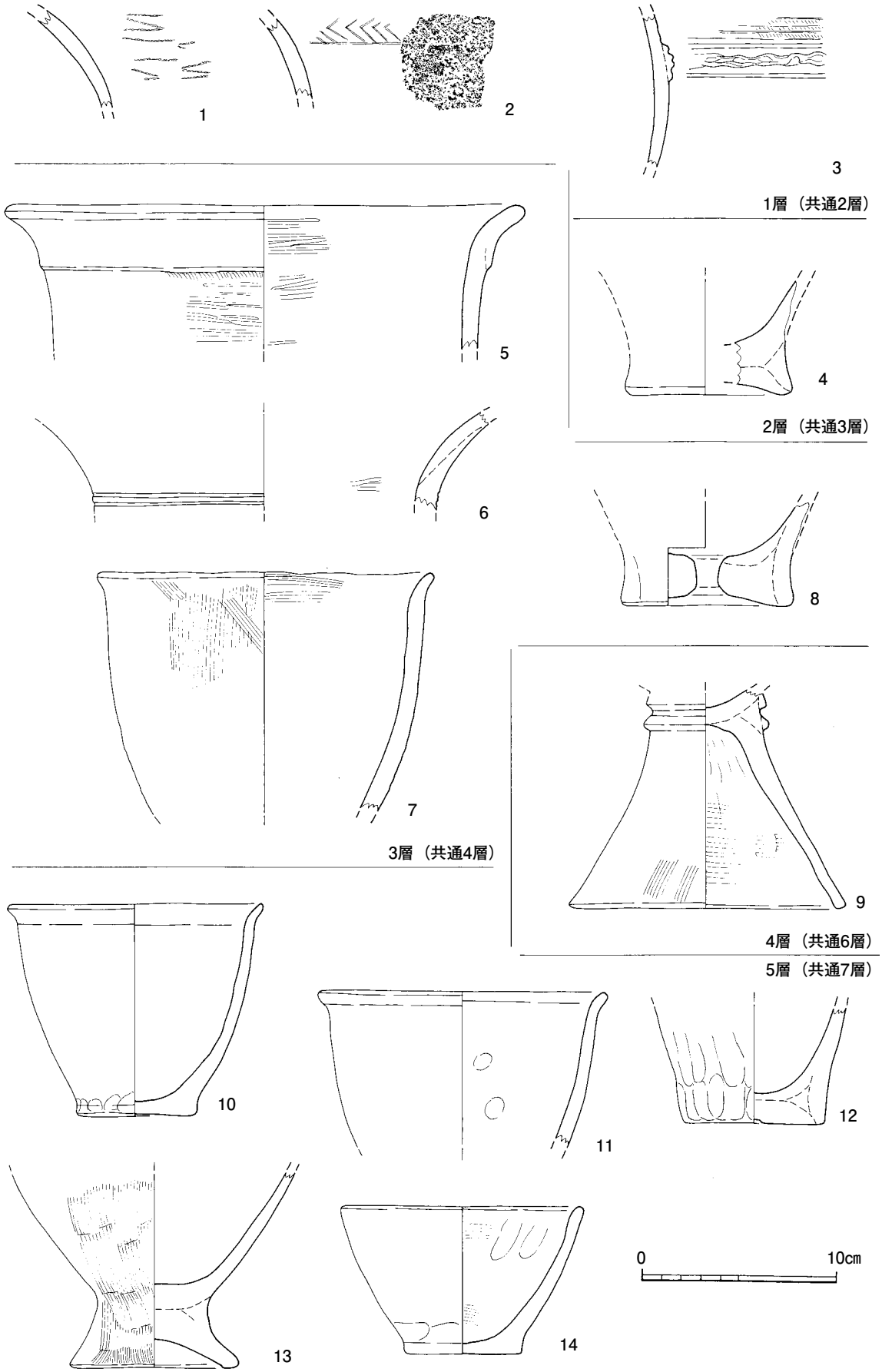
９～13は３層出土で、９は砲弾形刻目突帯甕の小片で、取り上げ時には２層としているが黒色土という注記があるので3a層と判断した。口唇部に刻目突帯がつき、器面摩滅で調整が不明瞭だが、外面はハケであろう。内外黄灰色で、褐色パミスを含む。10は口縁部に刻目突帯がつくもので、



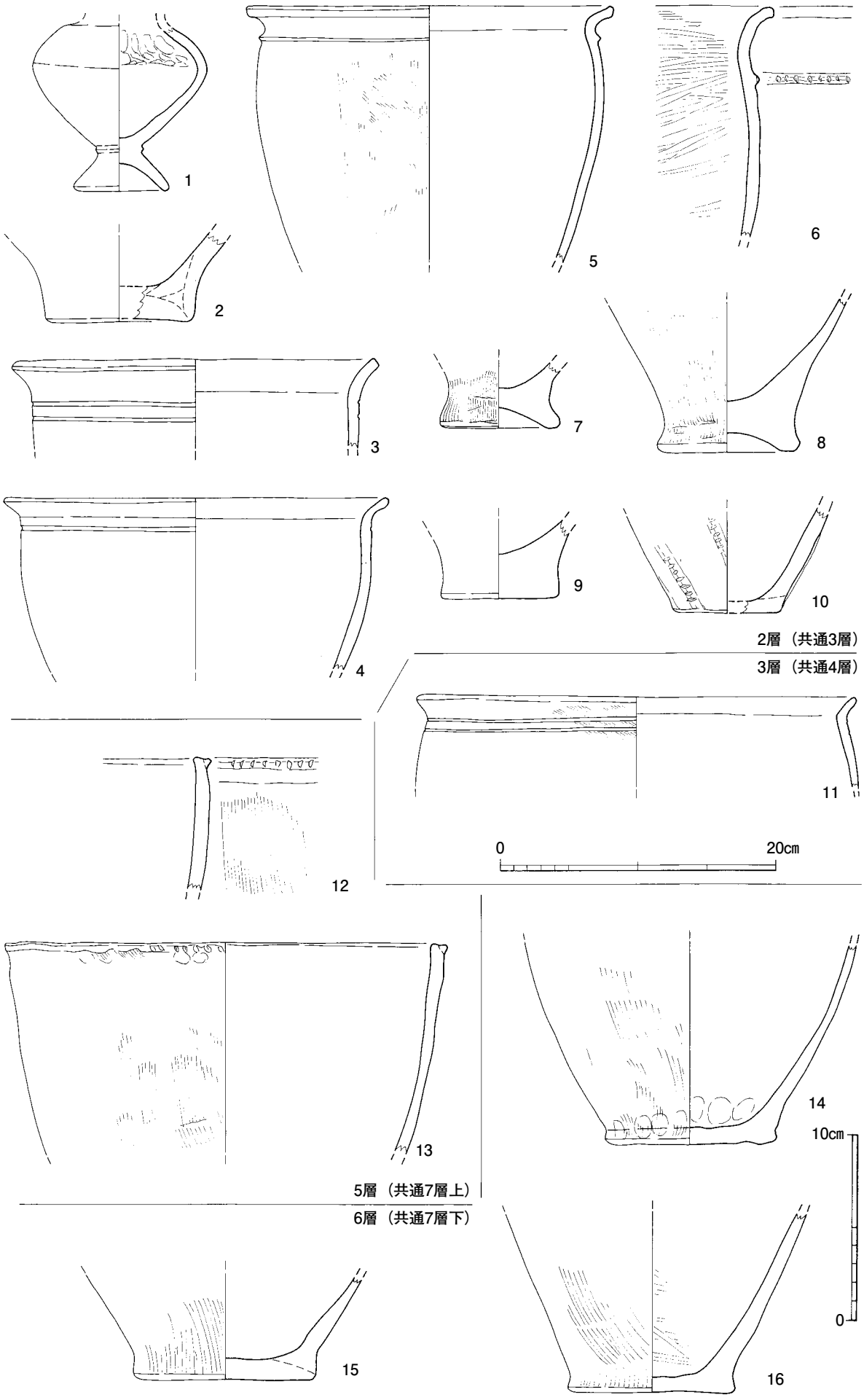
第97図　1区3号溝3区出土土器実測図（1/3）



第98図　1区3号溝4～6区実測図（1/120・1/60）



第99図　1区3号溝4･5区出土土器実測図（1/3）



第100図　１区３号溝６区出土土器実測図（11は1/4、他は1/3）

突帯が長いためほとんど摩滅している。口縁部内面はナデで窪んでいる。外面は粗く浅いタテハケで、内面は器面が失われており調整不明。内外暗灰褐色に変色しており煮沸使用されている。11は甕の底部で、外面タテハケ、積み上げ痕跡は不明瞭。外面赤変しており、内面は暗灰褐色に変色しているので煮沸使用されている。12は鉢で、内外器面摩滅で調整不明。外面暗茶灰褐色で、内面黄灰色。13は高杯脚部で取り上げ時には２層としているが黒色土という注記があるので３a層と判断した。内外器面摩滅で調整不明。裾部には突帯が貼り付けられている。

14は４層出土の小型の砲弾形の甕で、３層出土片と同一個体だが破片が大きい下位出土の４層出土とした。口縁部・胴部・底部は図上接合である。口唇部は平坦で、口縁部は突帯が剥離している部分が多いが、残存部では浅く幅広の刻み目が入る。花崗岩の混入著しい。内外ハケで、全体的ににぶい赤紫色に赤変しているので、煮沸使用されたもの。

４・５区（図版53･54、第99図）

注記ミスにより、４区を５区としたものがあったので、一括して掲載する。１～３は１層出土で、１は壺の肩部で、反転復元できない小片だが、中型品である。内外ナデで明黄橙色を呈する。内軸羽状文は貝殻腹縁の刺突で11区５層の出土品に酷似する。色調の違いから別個体としたが、同一個体の可能性もある。２は壺の肩部で、反転復元できない小片だが、中型品である。内外ナデで明黄橙色を呈する。内軸羽状文は線刻である。３は壺の胴部で、反転復元できない小片だが、大型品である。器面摩滅しており、突帯の上の沈線がかろうじて見える。内外器面摩滅で調整不明。外面橙褐色で、内面が暗黄灰色なのは焼成不良のためである。突帯には刺突が入る。

４は、２層出土で外面は赤化しているが、上げ底状の外底が赤化していないので接地して使用していることから甕の底部である。内面は淡黄橙色で変色がないが、内底部のみなので変色していない可能性がある。外面胴下位は器面が剥落している。

５～８は３層出土で、５は有段壺で、内外ミガキ。外面の段下にはハケが残る。肥厚部の接合痕は不明瞭。６は広口壺の頸部で、内外ナデ。外面明黄灰色だが、内面は暗灰褐色に変色している。煮沸使用によるものではなく、内容物の色が移ったものだろう。７は小型の甕で、目の細かいハケが外面と内面口縁部に施されており、器面は整っている。内面は器面が剥落しており、内外暗灰褐色に変色しているので煮沸使用されている。刻み目はない。８は甕の底部で、外面は淡橙灰白色で、内面はこれが煤けている程度で外面の赤化も少ないので煮沸使用の少ない甕だろう。外面は底部以外の器面が剥落しており内面はナデ。穿孔は外面側から。

９は４層出土の高杯で、胎土は精良で黄橙褐色を呈し、裾部には黒斑が対面に２ヶ所ある。内外ハケをナデ消している。

10～14は５層出土で、10は如意形口縁の小型甕で、口縁部は摩滅しているが刻み目はないようだ。内外ナデで、ハケは見られない。胴下位がわずかに赤変しており、内面は変色していないが器面の剥落が著しいので頻度の少ない煮沸使用であろう。底部完存で積み上げ方法不明。胴下位がわずかに赤変しており、内外口縁部が著しく黒変しており煮沸使用されている。11は如意形口縁の小型甕で、口縁部に刻み目はない。内外ナデで、ハケは見られない。12は甕の底部で、内外ナデで、外面のオサエ痕が目立つ。外面は赤変しており、内面内底以外が変色しているので煮沸使用されている。底部は積み上げ部分で剥離している。13は内外黄橙色を呈し変色がないので、台付鉢であろ

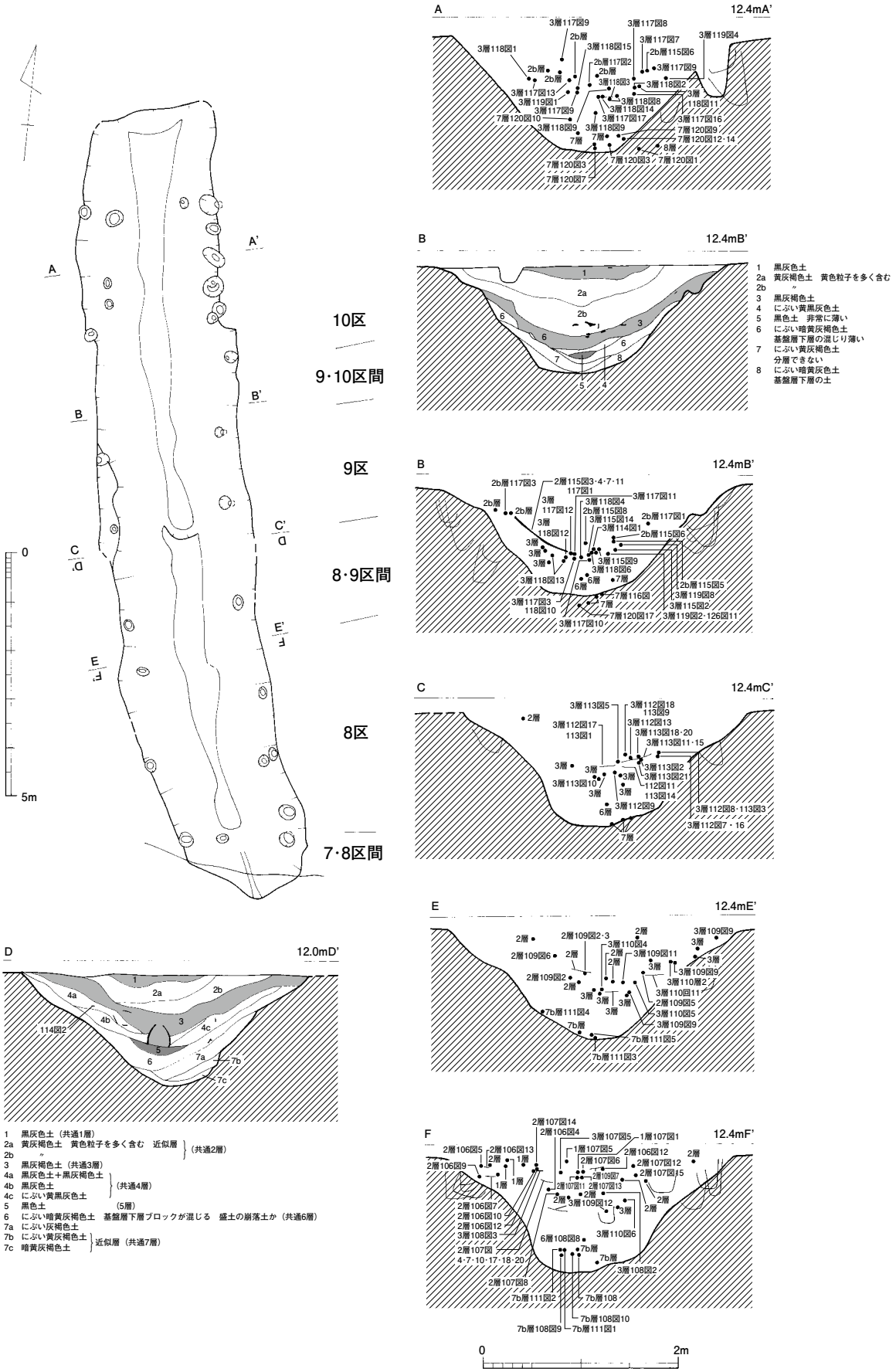
う。内外器面が残り、外面は丁寧なタテハケで、内面はナデ。底部上げ底で、底部縁の平坦面は幅が不均一である。14は鉢で、口縁部は丸くナデ仕上げされている。内外黄橙色で変色がない。外面ナデで、内面は目の粗いヨコハケ。底部完存で積み上げ方法不明。

６区（図版54、第100図）

１～10は２層出土で、１は脚付の小型壺であろう。上部は口縁部のようにも見えるが、内面がオサエであって、ヨコナデでないことから上に頸部があったことがわかる。外面はナデで文様はなく、内外黄灰色で、丹塗りもない。２は壺の底部で、内外ナデ。外面黄橙灰褐色で変色なし。内面は器面剥落。３は甕で、器面摩滅で調整不明。頸部の２条沈線は幅が広い。内面は黄灰色だが、外面はにぶい暗黄灰褐色に変色しているので煮沸使用されている。４は甕で、器面摩滅で調整不明。頸部沈線は幅広く浅い。内面口縁部は橙褐色だが、外面の暗灰褐色は胎土の色調で、外面下位は灰褐色に変色し、下部は赤化しており、下位は変色しているので煮沸使用されている。５は甕で、器壁が薄い。外面タテハケ、内面ナデ。頸部の突帯は小さい。内面部は黄灰色だが、外面口縁部は明黄灰色で、外面下位は灰褐色に変色し、下部は赤化しているので煮沸使用されている。６は北壁出土の甕で、外面は摩滅して調整不明だが、内面はミガキが残っている。頸部の突帯は小さい刻みが入る。口唇部は平坦化されており刻み目はない。明赤橙灰色で変色がないので煮沸使用されていない。７は北壁出土の甕の底部で、外面がやや赤化しているので煮沸使用された甕だろう。外面はタテハケが残っており、内面はナデが残っておりにぶい淡灰褐色で変色が弱いので使用頻度は少なかっただろう。底部完存で積み上げ方法不明。８は上げ底状の底部で、外面が赤化しているので煮沸使用された甕だろう。外面はタテハケが残っており、内面は摩滅しており、にぶい黄灰褐色を呈する。９は小型器種の底部で、胴下位が赤変しており、内面も変色しているので煮沸使用された甕であろう。内外器面の剥落が著しく調整不明。カクセン石を含む特徴的な胎土。底部完存で積み上げ方法不明。10は北壁出土の鉢の底部で、残存部から８つの平坦面をもつと見られ、面は底部に対して斜めに傾いており、平坦にナデられている。面と面の間の稜の部分には刻目が入るので貼り付け突帯ではない。下稗田遺跡Ａ地区99号貯蔵穴に近い例がある。内外黄橙灰色で変色がなく、外面に黒斑がある。11は３層出土の甕で、頸部の２条沈線は幅が広く、ハケの上に施されている。器面は摩滅しており、内面口縁部から外面が暗灰褐色に変色しているので煮沸使用されている。

12･13は５層出土で、13は砲弾形口縁甕で、口縁部に小さな突帯に刻み目が入る。外面タテハケで、内面摩滅ナデ。内外黄橙色だが、胴下位は外面が赤変、内面黒変しており、煮沸使用であろう。12は形態が13に酷似するが、色調や褐色パミスを多く含む胎土などから別個体とした。外面タテハケで、内面調整不明。内外胎土の黄橙色が露出しているため本来の器面の色調は不明。

14～16は６層出土で、14は甕で、外面タテハケ、内面ナデで、器面の残りは悪い。内外明黄灰色を呈し、煮沸使用による変色がない。器壁が薄く粗放な特徴的な胎土なので搬入品であろう。底部完存のため積み上げ方法不明。15は壺の底部で、器面摩滅が著しいが、外面は粗いハケが残っている。外面は変色が著しい部分や胎土の黄灰色が露出しているが、本来は内面と同じ黄橙色であろう。16は甕で、外面にぶい茶灰褐色、内面にぶい黄灰色で煮沸使用による変色がない。チョウ石を多量に含む。底部完存のため積み上げ方法不明。

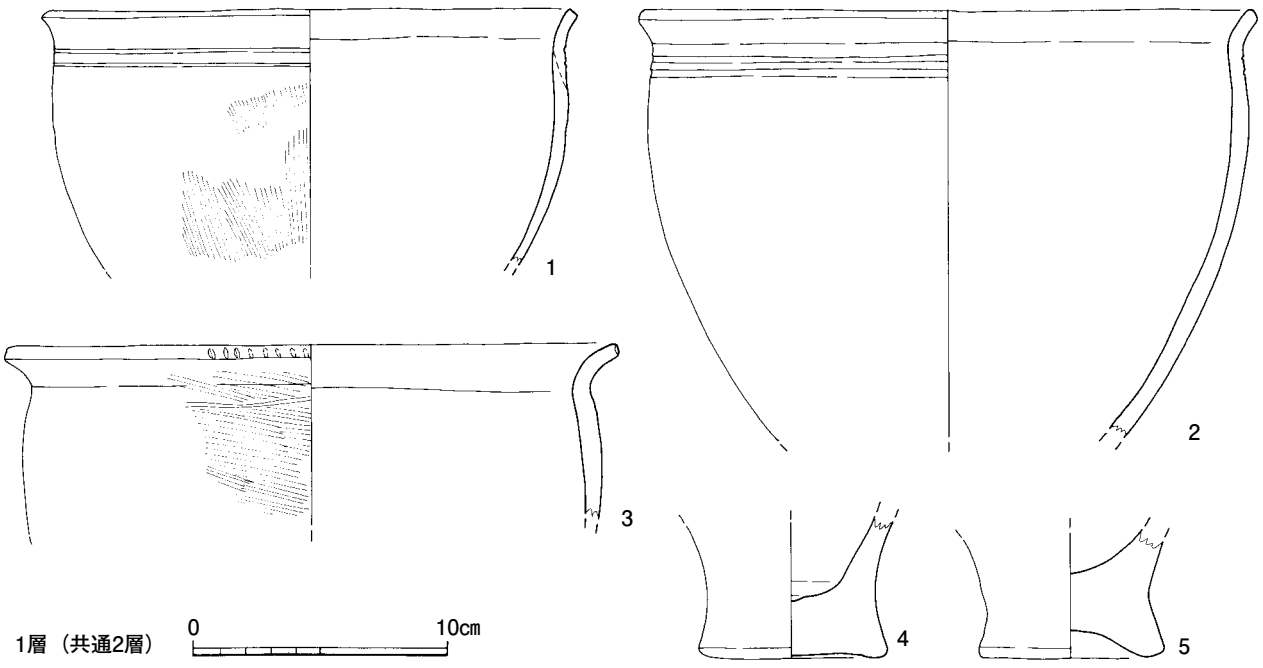


第101図　1区3号溝7・8区間～ 10区実測図（1/120・1/60）

７区（第102 ～ 105図）

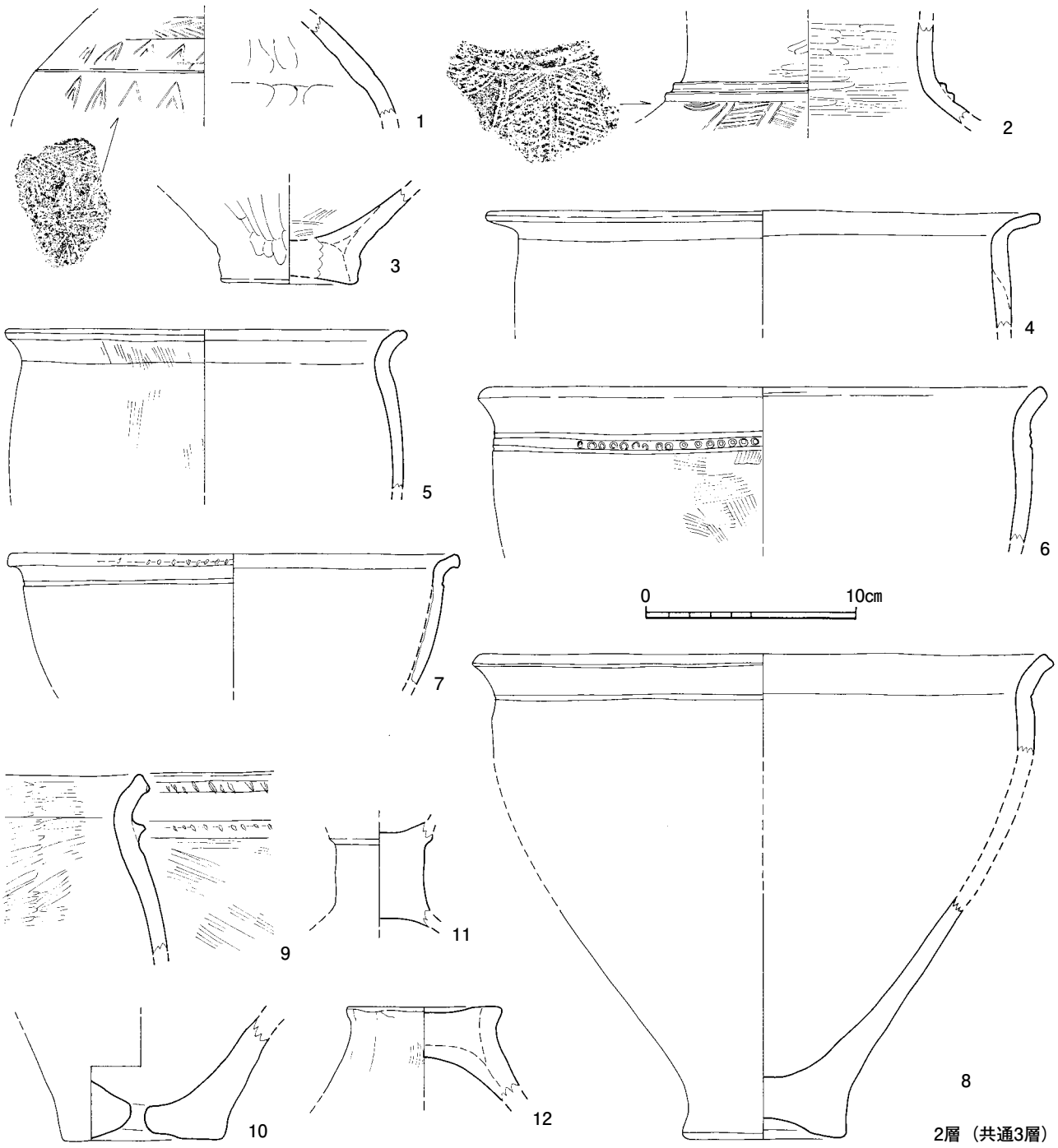
第102図は１層出土だが、７区の1a層は共通１層、1b層は共通２層であり、掲載したものはレベルから1b層にあたる。１は如意形口縁甕で、外面は目の細かいタテハケ、内面はナデ。色調は明黄橙白色だが、内外とも胴下位が灰褐色に変色しているので煮沸使用されたものだろう。２は如意形口縁甕で、摩滅して不鮮明だが口縁部に刻み目が入る。頸部の２条沈線は幅が広く浅い。外面はタテハケがわずかに残り、内面は器面摩滅。色調は内外黄橙色だが、内外とも胴下位が灰褐色に変色しているので煮沸使用されたものだろう。３は甕で、口唇部の刻み目は摩滅のため不明瞭。外面はヨコハケで、その上に幅が広く浅い沈線が入る。内面は口縁部がミガキ状のナデで、胴部はナデ。内面は口縁部が黄灰色、胴部はにぶい黄灰色で変色がないが、外面は頸部以外暗灰褐色なので煮沸使用されただろう。４は甕の底部で、内外面は器面が摩滅しており調整不明。底部完存のため積み上げ方法不明。外面は赤変しているので、煮沸使用されたものだろう。５は上げ底の小型甕の底部である。内外面とも赤化し、器面は剥落が著しく、塩化ナトリウムらしい白色物質が浸み込んでいるので製塩土器の可能性がある。底部完存のため積み上げ方法不明。

第103図は２層出土で、１は小型壺で、内外面はナデ、内面側にはオサエが目立つ。内外黄灰色で変色なし。施文は線刻による。２は壺の肩部で、２条突帯の下に線刻による有軸羽状文と重弧文が入る。内外ミガキで、内外面はにぶい黄灰色で変色なし。３は小型壺の底部で、外面は幅の太いミガキ、内面は丁寧なミガキで、外面黄橙色だが内面は黄灰褐色に変色し、暗黒褐色の部分もある。内容物による変色だろう。４は如意形口縁甕で、口縁部に刻み目はない。内外面摩滅で調整不明。色調は内外赤橙色で変色がないので煮沸使用されていない可能性がある。５は如意形口縁甕で、口縁部に刻み目はない。内外面摩滅著しく調整不明。色調は内外口縁部が黄橙色だが、頸部以下は変色しているので煮沸使用されている。６は甕で、外面はヨコハケ、内面はナデ。口唇部は平坦化されている。外面頸部には２条沈線の間に刺突文が入る。胎土が精良で内外橙褐色で変色なし。下稗田遺跡Ｃ地区364号貯蔵穴に類例あり。７は甕で、口縁部は短く屈曲し口唇部は平坦面を



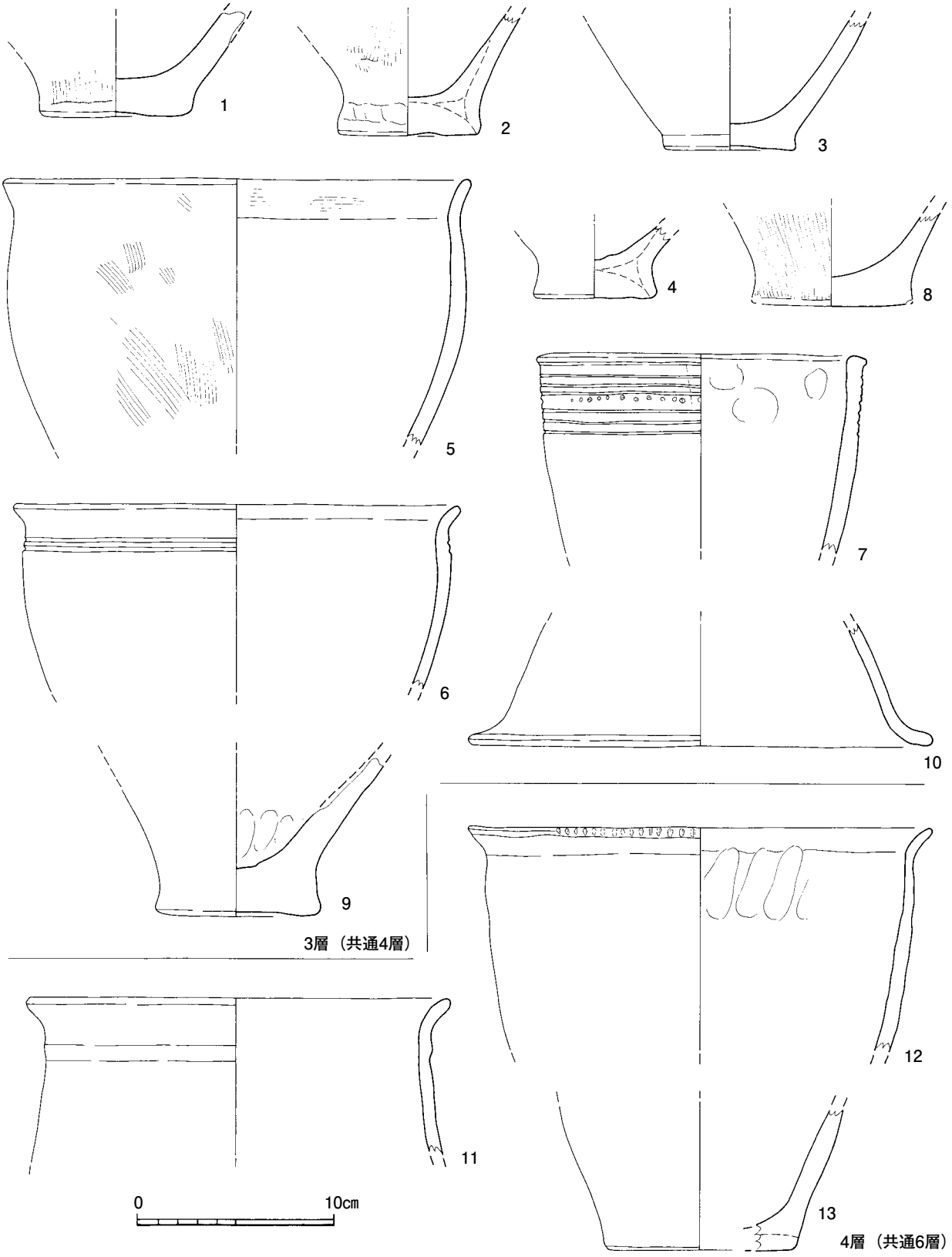
第102図　１区３号溝７区出土土器実測図１（1/3）

もち外面側端部に下方から刻み目が入る。器面磨滅が著しく調整不明。内外にぶい黄灰褐色で変色なし。８は如意形口縁甕で、器壁が厚く口縁部に刻み目はない。内外面器面摩滅著しく調整不明。色調は内外赤化しており塩化ナトリウムらしい白色物質が染み込んでいるので製塩土器の可能性がある。底部完存のため積み上げ方法不明。９は如意形口縁甕で、口唇部が平坦化され、外面側端部に長い刻み目が入る。外面斜め方向のハケ、内面ミガキ。色調は内外くすんだ暗灰褐色なので煮沸使用されていないだろう。10は甕の底部で、上げ底状で穿孔は外底から行われている。内外面は器面が摩滅しており調整不明。底部完存のため積み上げ方法不明。外面は赤変しているので、煮沸使用されたものだろう。11は高杯の脚部で、裾部が剥離しているが、外底が平坦なので裾は短いもの



第103図　１区３号溝７区出土土器実測図２（1/3）

と考えられ、下稗田遺跡Ｅ地区25号貯蔵穴に類例が求められる。接合方法は不明。内外面ともナデで、器面は本来内面の明黄灰色であり、外面の黒色は黒斑である。12は内面が黒色なのは伏せ焼きによるものなので、蓋であろう。内外とも器面が摩滅しているが、外面にタテハケが残る。天井部完存のため積み上げ方法不明。



第104図　１区３号溝７区出土土器実測図３（1/3）

第104図１～10は３層出土で、１は壺の底部で、底部完存のため積み上げ方法不明。内外ナデだが、外面に一部目幅の広いハケが見られる。比較的胎土は精良。積み上げ痕は明瞭。２は内面が焼成不良のために黒化しており、外面は煮沸使用の痕跡がないことから壺である。３は壺の底部で、底部完存のため積み上げ方法不明。外面ナデだが、内面は器面摩滅で不明。比較的胎土は精良で、にぶい黄灰色を呈し、胴下位に大きな黒斑がある。４は外面は橙褐色で変色がなく、調整はナデ。内面はにぶい灰褐色に変色しており、器面が剥落しているので壺であろう。５～９は甕で、５は器面が摩滅しているが外面タテハケ、内面ナデが部分的に残っている。内外灰褐色に変色しているので煮沸使用されたものだろう。６は肩部に幅の広い２条沈線が入る。外面は器面摩滅で調整が不明だが、内面はナデが残っている。内面に器面が残っており変色がないことから、煮沸使用されていない甕である。７は砲弾形の甕で、沈線と刺突列点文が入り、口縁部が小さく肥厚し、口唇部に平坦面をもつ。調整は外面タテハケで、内面ナデ。胎土に特に特徴がないので、在地のものだろう。８は外面に目の粗い特徴的なハケが深く施されている、内面が褐色化しており、内底だけ黄灰色を呈する。外面は煮沸使用の痕跡がないことから煮沸使用されていない甕であろう。９は、外面は器面が摩滅しており調整不明。底部完存のため積み上げ方法不明。外底を除く外面は赤変しており、内面は器面が剥落しているので、煮沸使用されたものだろう。10は器面がほとんど失われているが、裾部が黒変しているので、鉢ではなく蓋であろう。

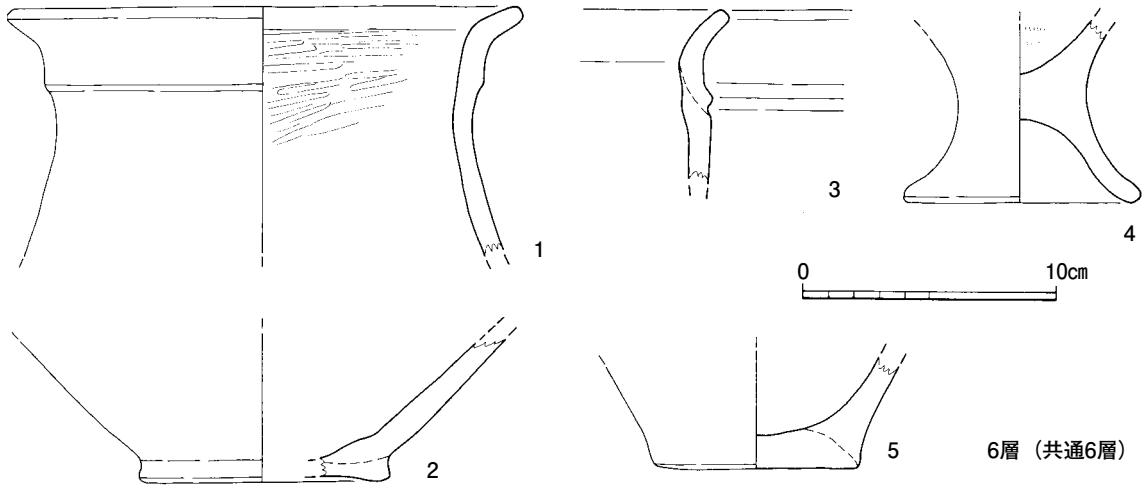
第104図11～13は４層出土で、11は有段壺で、段は積み上げ部の高まりを段に整形したもので肥厚ではない。内外黄橙色で変色なし。12は口縁部に刻み目が入る甕で、刻み目は摩滅のため不明瞭。内外器面摩滅のため器壁が薄くなっている。外面下位は赤変しているので煮沸使用されている。13は甕の底部で、内外器面摩滅著しい。外面は赤変しており煮沸使用されている。

第105図１～４は６層出土で、１は有段壺で、段は削り出し、内面口縁部は屈曲位置から下にミガキが入り、屈曲部はナデ。２は壺の底部で、胎土から有段壺だろう。器面が摩滅しており、調整不明。３は８層出土としているが６層のまちがいだろう。有段甕で、反転復元できないが大型品で、器壁が厚い。段の部分が突帯化している。内外器面摩滅しており、内面の口縁部に一部ナデが残る。内面はにぶい暗黄灰色で、外面は暗灰褐色を呈し、煮沸使用の可能性がある。４は脚付鉢の脚部で、内外器面摩滅で調整不明。黄橙色を呈し、変色なし。５は甕の底部で、外底が黒化している。器面が摩滅しており、調整不明。

７・８区間（図版54、第106図）

1･2は１層出土で、１は大型広口壺で、内面が肥厚している。内面はミガキだが外面は摩滅のため調整不明。摩滅しているが口唇部に刻み目はない。外面黄灰色だが器面が摩滅したためで、内面と同じ暗黄灰色であろう。２は甕で、口縁に刻み目がない。口縁に歪みあるので傾きはやや確実性に欠ける。内外面は器面摩滅で調整不明。外面橙褐色、内面黄橙色で、煮沸使用の有無は不明。

３～13は２層出土で、３は壺で、器面は摩滅して調整不明。外面の施文は貝殻腹縁刺突によるもので、内外黄灰色で変色なし。４は小型甕で、胴下位がすぼまる。器壁が厚く、口縁部が歪んでおり、外面は目の粗いハケが入るので整形が荒い。口縁には刻み目がない。内面の器面摩滅が著しい。外面は暗茶褐色で、内面は口縁部が黄橙色で、胴部がにぶい暗黄橙灰色なので、煮沸使用されている。５は如意形口縁甕で、文様はない。外面はハケとミガキで、外面は暗橙褐色、内面は器面



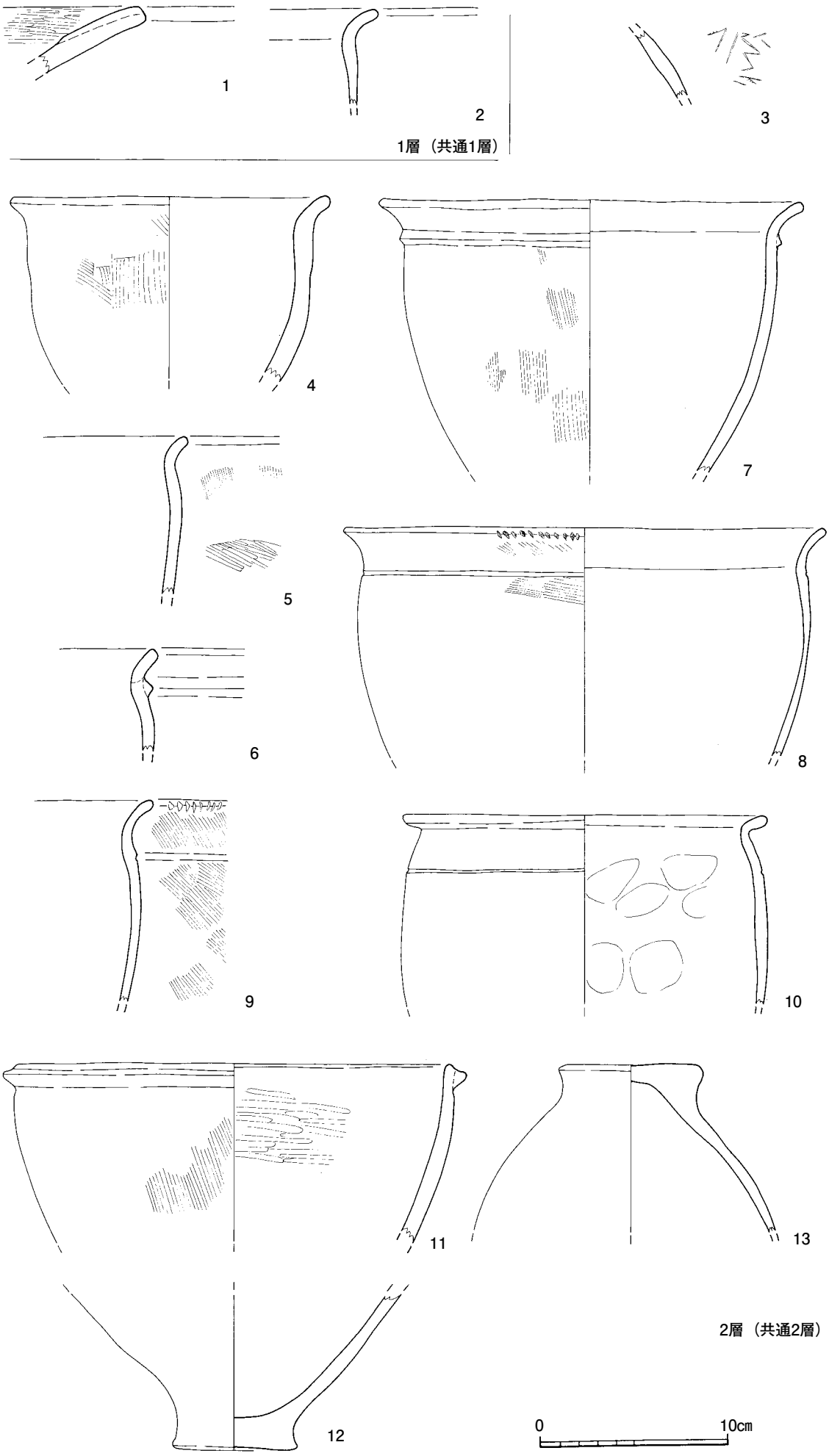
第105図　１区３号溝７区出土土器実測図４（1/3）

が剥落しており、にぶい黄橙灰色。６は口縁下に突帯があり、内外器面摩滅で調整不明。頸部突帯には刻み目なし。内外強く焼けており、赤橙色から黄橙色を呈す。器壁が厚いことから特殊な用途が想定される。７は甕で、口縁下の突帯には刻み目がない。外面は目の細かいハケで、内面は器面摩滅。外面から内面口縁部まで暗灰褐色なので、煮沸使用されている。８は如意形口縁甕で、口縁部に刻み目が入る。刻み目は下方から細長いものが狭い間隔で刺突されている。器面の残りが悪く、内面は調整不明、外面は斜めのハケがかろうじて観察できる。内面黄橙色、外面暗灰褐色で、頸部だけ黄橙色であることから煮沸使用の可能性が高い。９は甕で、口縁部と胴部は図上接合である。反転復元できない小片だが口径31cm前後だろう。口縁端部は下方から刻み目が入る。外面は目の細かいハケで、内面は器面摩滅。外面口縁部から内面は黄橙色で、外面肩部以下は暗黄灰褐色に変色しているので煮沸使用されている。10は小型の如意形口縁甕で、口縁部に刻み目はない。頸部沈線は幅が広く浅い。器面の残りが悪く、調整は内面にオサエが残るのみ。内面黄橙色で煮沸使用されていない。11は砲弾形甕で、口縁下の突帯には刻み目がない。外面は目の細かいハケで、内面はミガキ。内面は明橙褐色で、外面は黄橙色で変色なし。黒灰色は黒斑で、煮沸使用されていない。12は胴部が大きく開くので蓋のようだが、外面が赤変しており煮沸使用されている。外面は摩滅しているが、内面は一部器面が残り、ミガキが見られる。底部完存で積み上げ方法不明。13は外面が被熱で赤化し、縁部が黒褐色に変色する一方で内底は黄灰色で変色していないことから蓋であろう。内面は器面の荒れが著しいが、底部完存で積み上げ方法不明。

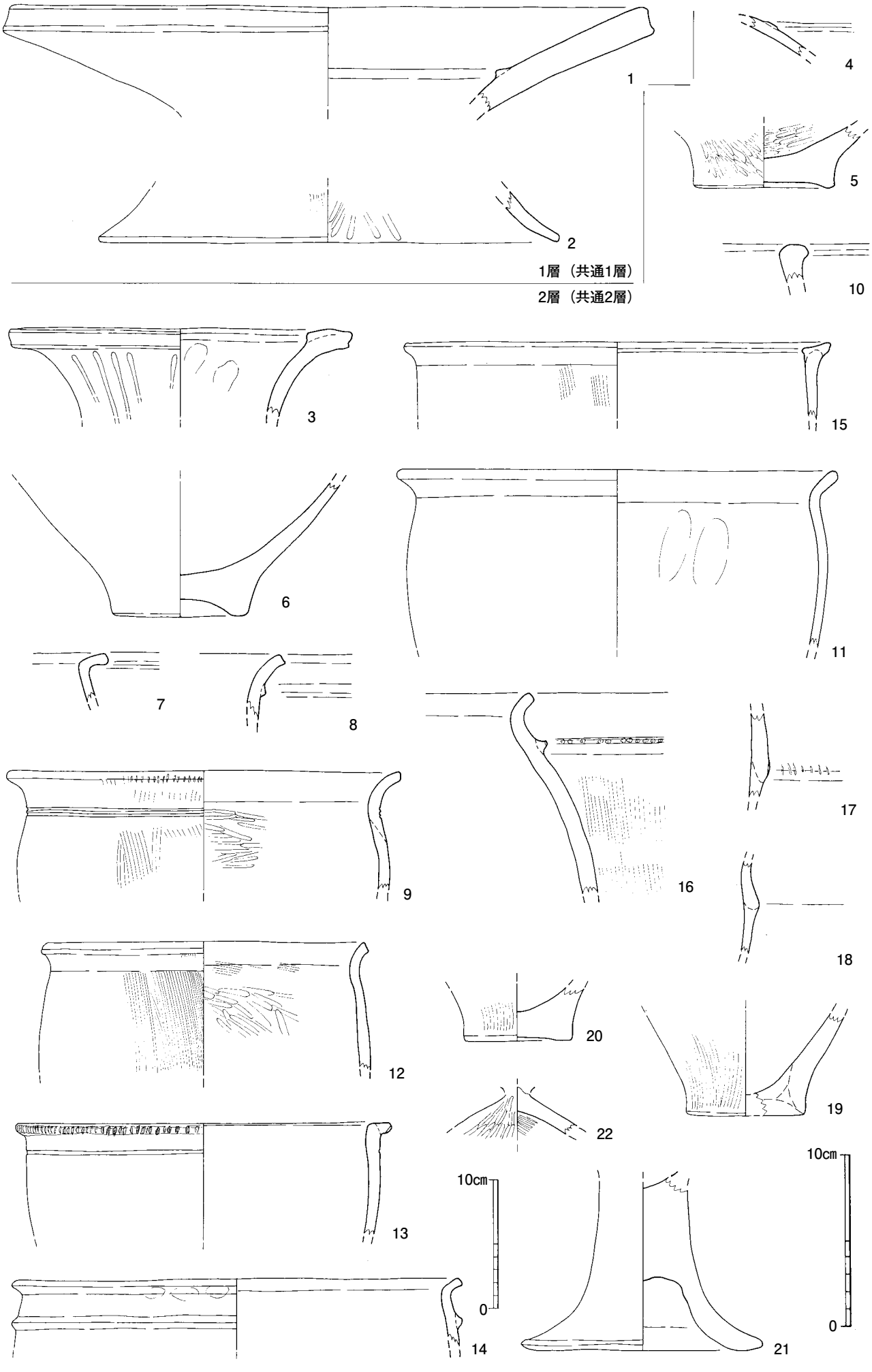
８区（図版54、第107･108図）

１層出土としたもののうち取り上げレベルから２層と判断できたものは整理段階で２層に変更した。第107図1･2は１層出土で、１は大型広口壺で、口縁部が肥厚し、内面に突帯がつく。器面は摩滅のため調整不明。口唇部に刻み目はない。内面黄橙色だが、外面が黒色なのは黒斑である。２は壺蓋で摩滅しているが外面はタテハケ、内面はミガキが残る。内面裾部のみ黒化しているのは黒斑で、炭化物ではない。内外橙褐色を呈する。

３～22は２層出土で、３は広口壺で、口縁部を肥厚し、頸部には暗文が入る。内外黄橙色を呈する。４は壺の肩部で、断面台形の突帯がつく。器面の残りが悪く、調整不明。外面黄橙色、内面

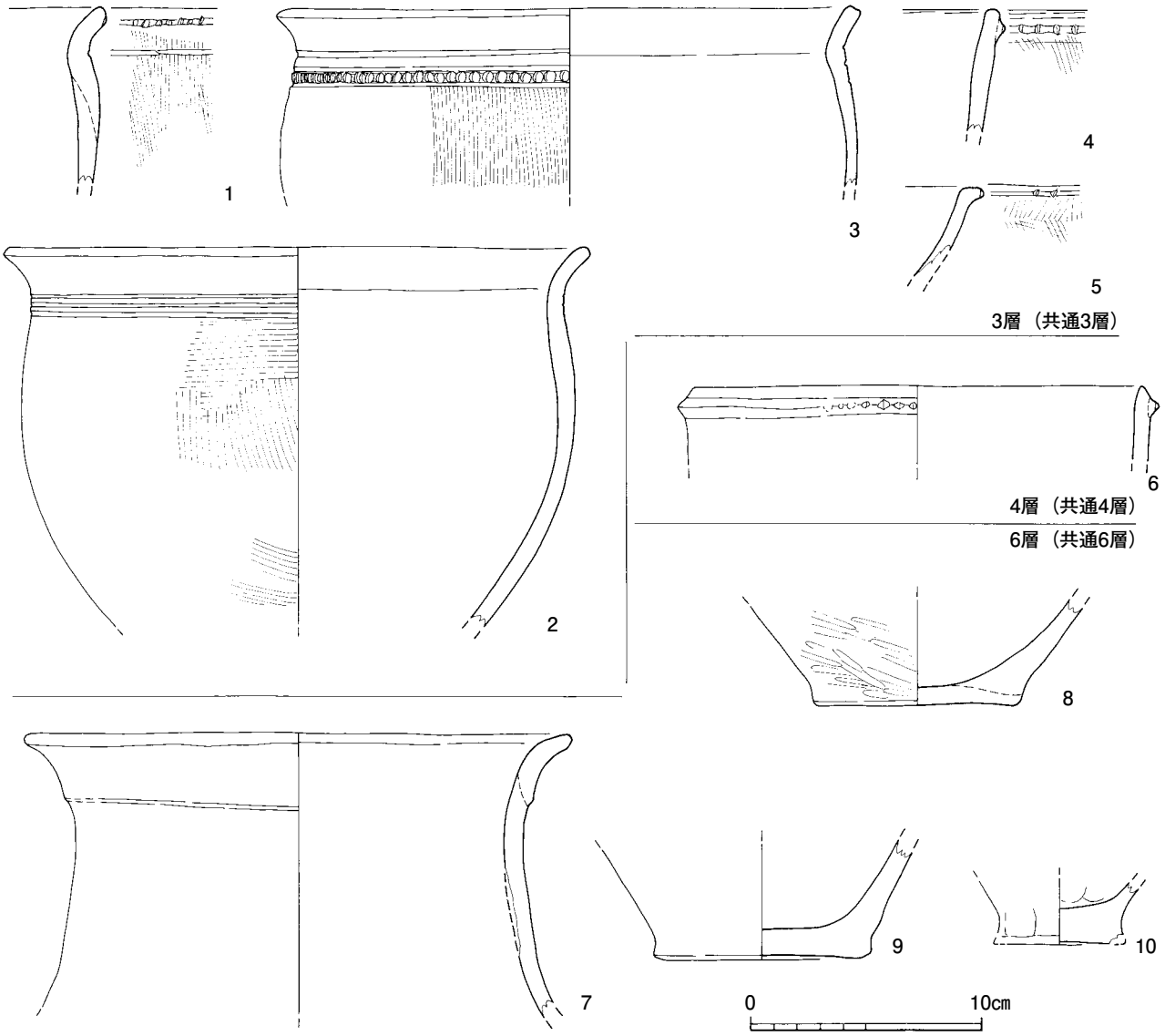


第106図　1区3号溝7･8区間出土土器実測図（1/3）



第107図　1区3号溝8区出土土器実測図1（14は1/4、他は1/3）

の黒は黒斑か焼成不良だろう。５は壺の底部で、器面の残りが良く内外ミガキ。外面黄灰白色で黒斑あり、内面にぶい黒灰色なのは焼成不良のためである。６は壺の底部で、上げ底である。底部完存のため積み上げ方法不明。器面の残りが悪く、調整不明。内外黄橙色で変色なし。胴下位に黒斑あり。７は小型の如意形口縁甕で、器壁が薄い。器面の残りが悪く、調整不明。外面黄橙色で、内面橙褐色なので、煮沸に使われているだろう。８は甕で、内外器面摩滅で調整不明。頸部突帯には刻み目なし。内外面は黄灰色で変色なし。９は如意形口縁甕で、口縁部に刻目が入る。頸部の２条沈線は幅が広く浅い。外面は目の粗いタテハケがわずかに残り、内面は口縁部がナデ、胴部はミガキ。色調は内外黄白色で、変色がないので煮沸使用されていない可能性がある。10は甕で、口縁部肥厚後、口唇部を平坦化しているが、歪みがある。器面の残りが良く、内外面ナデ。内外にぶい橙褐色で変色がないので、煮沸に使われていない。11は如意形口縁甕で、器壁が薄い。器面の残りが悪く、調整不明。内外面橙褐色で変色がないが、胎土の色調なので煮沸使用の有無は不明。12は小型の如意形口縁甕で、器壁が薄い。器面の残りが良く、外面目の細かいタテハケ、内面ミガキ。内外面橙褐色で変色ないので、煮沸使用に使われていない。13は小型の甕で、口縁外面肥厚部に刻み目が下方から刺突されている。頸部の沈線は幅広く浅い。内外器面ともに器面摩滅で調整不明。色



第108図　１区３号溝８区出土土器実測図２（1/3）

調は内面上半が橙褐色で、他は暗灰褐色に変色しているので煮沸使用されている。14は甕で、１層出土片と同一個体である。口縁部が短く、肩部は積み上げ部のため口縁部より器壁が厚く、積み上げ部で剥落した部分がある。口唇部は平坦で、刻目なし。頸部の突帯も摩滅しているが刻み目なし。内外器面摩滅のため調整不明。内外面は暗黄橙色だが、器表面の色調ではないので煮沸使用の有無はわからない。15は甕で、口縁部肥厚後、口唇部を平坦化しているが、わずかに窪む。器面の残りが良く、外面タテハケ、内面ナデ。内外面橙褐色で変色ないので、煮沸に使われていない。16は大型甕で、肩部の突帯には小さい刻み目が入る。内外肩部以下は暗灰褐色に変色しているので煮沸使用されている。17は有段甕で、古い時期のものの混入であろう。屈曲部は突起して細長い刻目が入る。器面摩滅で調整不明。内外黄橙色で、変色なし。18は小型の有段甕で、古い時期のものの混入であろう。屈曲部は突起しているが突帯状にはなっておらず刻目もない。器面摩滅で調整不明。内外黄灰色。19は甕の底部で、器面の残りが悪く、外面はタテハケがわかるが内面は不明。外面橙褐色で赤化しており、内面にぶい暗黄灰褐色なので、煮沸使用されている。20は甕の底部で、外面はタテハケがわかるが内面は不明。内面は暗灰褐色に変色しているが、外面は黄橙色でわずかに赤化が見られる程度なので煮沸使用の頻度が少なかったのだろう。21は高杯の脚部で、器壁が厚い。器面摩滅のため調整不明。内外にぶい黄橙色から暗黄褐色で変色なし。22は小型の壺蓋で、内外ミガキ。暗橙褐色を呈し変色なし。

第108図１～５は３層出土で、１は甕で、口縁部から肩部にかけて器壁が厚い。口唇部には平坦面はなく、端部に刻目が入る。頸部の沈線は幅が広いが浅く、沈線の上下にハケが残る。外面は明黄灰色を呈し、内面は暗黄灰色で変色が見られるが、煮沸使用の変色はない。２は甕で、口径に比べて器壁が厚い。口唇部には平坦面はなく、刻目なし。頸部の沈線は幅が広く深い。沈線の上はヨコナデ、下はヨコハケ、胴部はタテハケで、ハケは目が粗く深いためミガキ痕のように見える特徴的なもの。内面はミガキのような丁寧なナデ。外面は黄橙色だが、胴部は暗灰褐色を呈しているが、内面は黄橙色で変色がないので煮沸使用されてないか使用頻度が少ない。３は甕で、比較的精良な胎土で、沈線は幅が広く深い。刺突列点文は竹管ではなく、断面円形の棒状工具によるものだが、先端はやや斜めに切られており、器面に対して垂直でなく斜めに刺突されている。外面タテハケ、内面ナデ。変色が弱いので煮沸使用されていない可能性が高い。４は砲弾形の刻目突帯文土器で、器面が摩滅している小片なので混入であろう。５は小型の鉢だが、内外口縁以外は暗褐色に変色している。口縁部は刻目突帯がつき、体部は粗いハケ調整で、小片のため反転復元できないが口径15㎝程度である。Photo.９- １はこの層から出土した土器片で、内外器面剥落で調整不明の小片。胴部片で部位不明なので傾き・上下もわからない。表面に塩化ナトリウムらしい白色物質が吸着しており、内外赤紫色を呈するので製塩土器の可能性がある。

第108図６は４層出土の砲弾形刻目突帯甕で、突帯は高く刻み目の幅が狭い。内面口縁下は丸みを持ち、上端は尖る。内外黄灰色で変色なし。

第108図７～10は６層出土で、７は有段壺で、口縁部の段は削り出しである。外面は丁寧なナデ、内面は器面剥落が著しい。内外黄橙色で、砂粒多い。８は壺の底部で内面は焼成不良のために黒化している。外面はミガキで、赤橙色を呈する。９は底部裾が小さく開く。器面が剥落しているが、変色がないので壺の底部であろう。10は小型壺の底部であろう。底部裾は小さく開く。器面が摩滅しており調整不明。

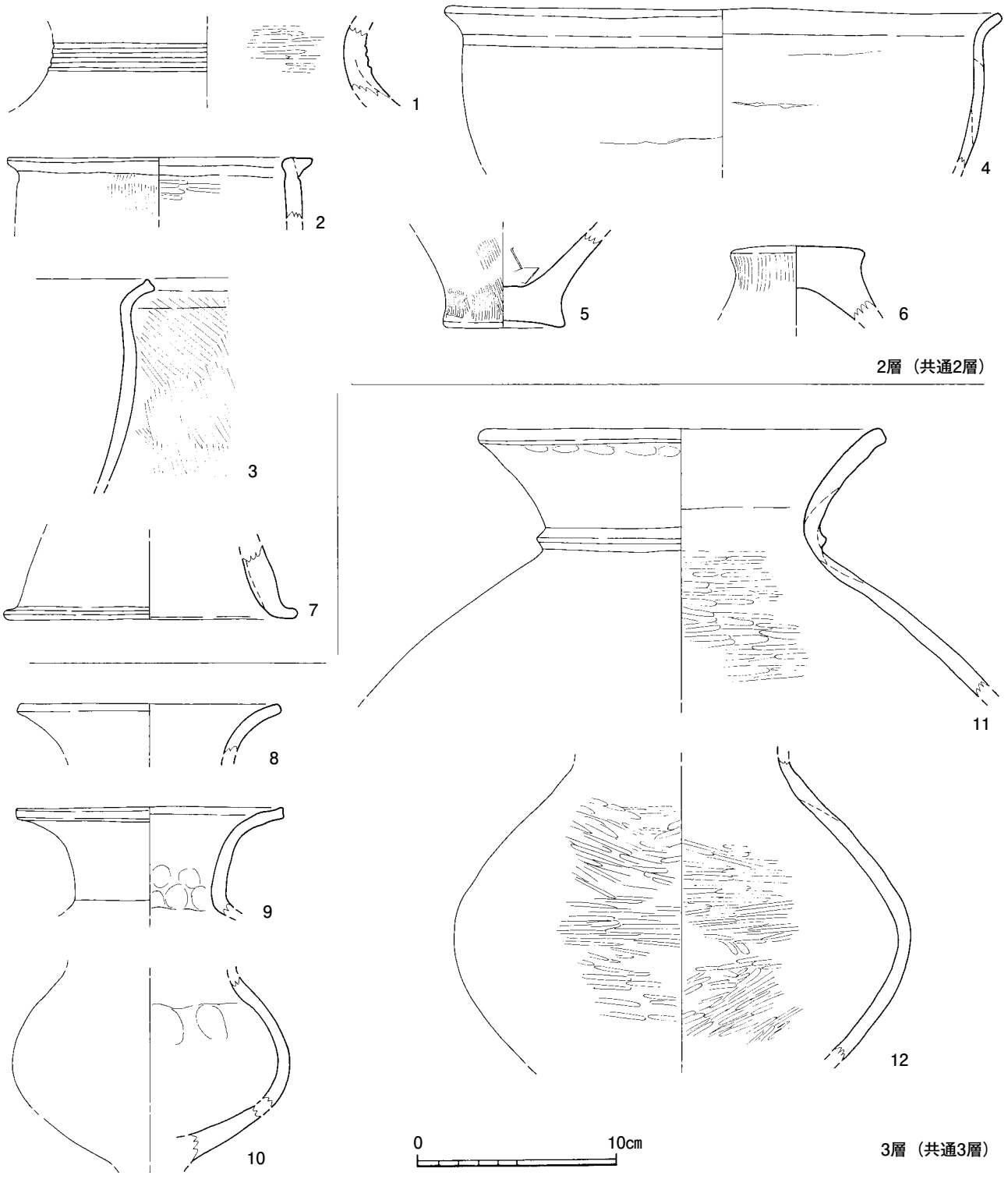
８・９区間（第109 ～ 111図）

第109図１～７は２層出土で、１は２b層出土の壺の頸部で、３条の削り出し突帯がつく。外面は器面が剥落して調整不明だが、内面はミガキが残る。砂粒を多く含むが、堅緻。内外茶褐色を呈する。２は小型甕で、口縁部外面に刻み目のない突帯がつき、口唇部は平坦にナデられている。突帯下位の接合部の調整が粗く隙間が残っている。外面はタテハケ、内面はミガキで、内外にぶい暗灰褐色だが使用変色は見られない。３は甕の口縁部で、外面は目の間隔の広いハケが施され、口縁端部や頸部はナデ消されていない。内面は口縁部から頸部がミガキ、胴部はナデ。口唇部のナデにより、平坦面をもつ。４は大型の甕か鉢で、器面が摩滅しており調整は不明。外面頸部に２条沈線が入る。器面摩滅と欠損により粘土の積み上げ痕が明瞭に観察できる。内外にぶい黄橙色を呈する。５は煮沸や焼成不良により使用変色が見られないので鉢の底部の可能性が高い。目の細かいタテハケが底部下端まで入り、内面はナデ工具痕が残る。器面の残りがよく、内外茶橙色。６は器面摩滅が著しいが、外面タテハケが残る。内面はにぶい暗黒褐色だが、外面は黄橙色で、底面に丸みをもつことから蓋の可能性が高い。７は支脚であろう。手捏ね成形のため、器面にオサエ痕が多く残る。器壁の厚さも不均一で、口縁部も歪みがある。外面暗茶褐色、内面橙褐色で変色なし。砂粒を多く含む。

第109図８～ 12は３層出土で、8･9は小型壺の口縁部で、内面側端部が尖るなど酷似するが口径が異なる。８は口縁内面に黒班がある。９は内外ナデで、黄橙色を呈する。10は小型壺で、胴部の上部と下部で図上接合したものである。器面が剥落しているため文様の有無は不明。内外黄橙色を呈するので8･9とは別個体。11は口縁部と肩部の図上接合である。外面は器面がやや摩滅しているのでナデしか残っていないが、本来は内面のようにミガキがあっただろう。内外黄橙色で変色なし。口唇部は平坦にナデられ、頸部突帯には刻み目はない。12は壺の胴部で、肩部に文様はない。内外ミガキ。外面は暗灰褐色で下位に黒斑あり。内面は橙褐色で変色なし。

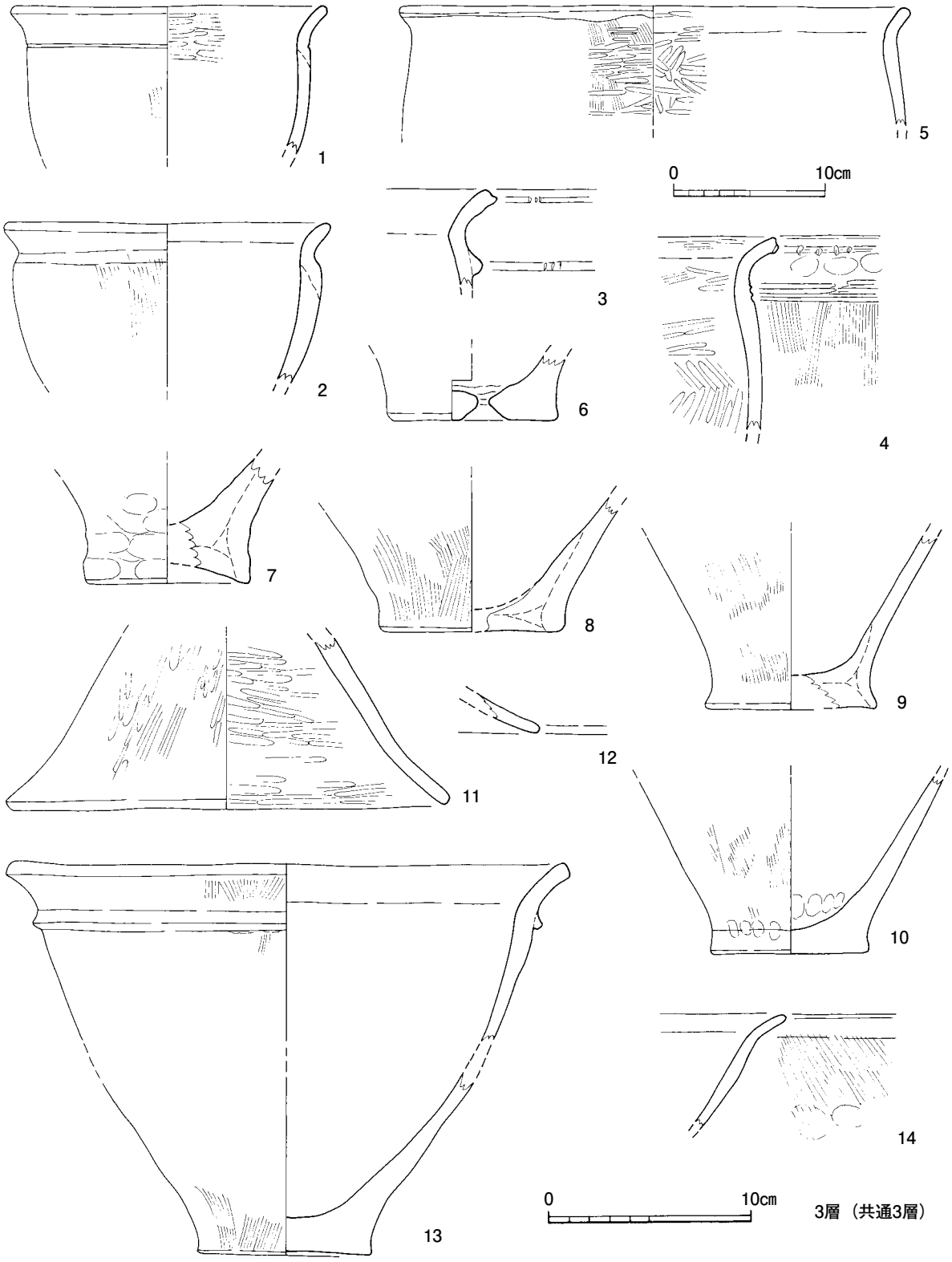
第110図は３層出土で、１は小型の甕で、器面は摩滅しているが、外面にハケ、内面にミガキが残っているので本来器壁が薄いものである。内外暗黄灰褐色で、煮沸使用の痕跡なし。２は小型の甕で、外面は目の粗いタテハケ、内面はナデ。内外橙褐色だが、外面肩部以下は変色しているので煮沸使用されている。３は甕で、反転復元できないが大型品だろう。口縁部と頸部突帯に刻み目が入る。内外黄灰色で変色がないので煮沸使用されていない可能性あり。４は甕で、口唇部はナデのため平坦で、下端は刻目が入る。頸部には深い沈線が入り、沈線より上はナデ、下は目の細かいタテハケで、内面にもミガキが見られる。内外暗褐色だが、煮沸使用の痕跡がない。５は甕で、口縁部の整形が粗く、平坦面はない。外面はハケ後にミガキ、内面はミガキで、内外明橙褐色で変色なし。壺のような調整だが、器形は甕であり、煮沸使用されていない甕であろう。６は底部に外面側からの穿孔がある甕で、穿孔は平滑なので回転させて開けたものであろう。底部完存で、積み上げ方法不明。内外器面摩滅で、内面は内底以外が暗灰褐色に変色している。７は外面のオサエのみの調整は蓋の特徴だが、内底には炭化物が付着しているので煮沸使用された甕の底部である。外面は橙褐色で赤変している。８は甕の底部で、外面は目の粗いタテハケで、内面は器面が摩滅し、内底は器壁が薄くなっている。内外にぶい黄灰橙色で変色なし。煮沸使用されていないかもしれない。内底の器壁が薄くなっているのはその使用方法のためだろう。９は甕の底部で、裾が突出してい

る。外面タテハケ、内面ナデで、器面は残っている。外面が赤化しており、内面が黒褐色に変色しているので煮沸使用されている。10は甕の底部で、器面は内外摩滅しているが、外面はタテハケとわかる。外面はにぶい暗黄灰褐色に変色し、赤変しているので煮沸使用されている。底部完存で、積み上げ方法不明。11は壺蓋で、内外ミガキ。内面口縁部のみ黒化しているのは黒斑で、炭化物ではない。内外暗茶褐色を呈する。12は甕蓋で裾部内面が黒灰色に変色している。裾端部は粗い整形。器壁が薄いが、径は大きい。13は鉢で、８・９区間２層・９区３層とも接合し、口縁部と底部は図



第109図　１区３号溝8･9区間出土土器実測図１（1/3）

上接合である。頸部突帯の貼り付け後の調整は上側のみナデで、頸部の突帯は下垂しており、貼り付け部の調整は上側が丁寧なナデだが、下側はほとんど未調整。器面は一部だけが残っており、本来は外面黄橙色から淡橙色で、内面黄灰色。胴下位外面の赤化している部分は焼成時のもので、使用時のものではないと思われる。14は鉢で、外面は目の粗いタテハケ、内面ナデ。内面はにぶい黄橙色で変色なし。外面の黒色は黒斑である。

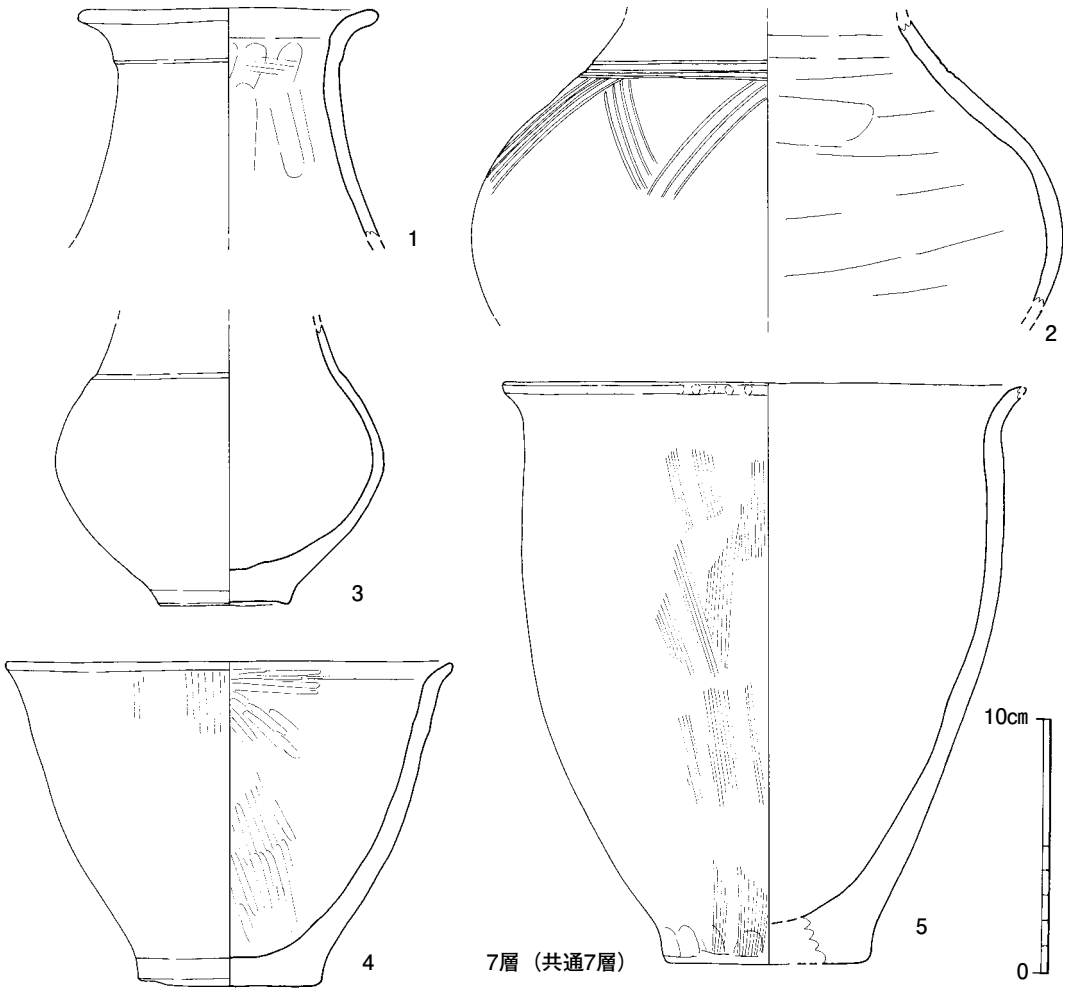


第110図　１区３号溝8･9区間出土土器実測図２（５は1/4、他は1/3）

第111図は７層出土で、１は7b層出土の壺で、外面はナデ、頸部内面側にはオサエ。口縁部の肥厚は薄く、接合痕は不明瞭。内面黒変しているのは焼成不良のため。２は壺の肩部で、内外ナデ。沈線が浅いが器面は残っているので、本来浅く施されている。複線鋸歯文の下位には横沈線はない。内面黒変は焼成不良のため。１に胎土と色調が酷似するので同一個体の可能性がある。３は小型壺で、胴以下と肩部は図上接合。器面摩滅で、内面の一部にナデが残るのみ。底部完存で積み上げ方法は不明だが、粘土板貼り付け底部であろう。外面に文様は残っていなかったが、沈線の可能性が高い。３は7c層出土の如意形口縁甕で、口唇部が欠損しているが刻み目による端部の歪みがあるので、刻み目はあったようだ。内面は器面剥落だが、胴中位に炭化物の付着が見られる。外面はタテハケで、胴下位は赤化しているので煮沸使用されている。胴部にはやや歪みがあり、歪みの大きい部分では上半部が内傾し、胴部が張る器形になる。外面暗灰褐色を呈する。４は7d層出土の如意形口縁の小型甕で、口唇部が欠損しているが刻み目はないようだ。外面は口縁下にタテハケが見られるがそれ以下は器面摩滅で調整不明。内面はミガキで器面が残っている。内外明黄橙色で変色がないので煮沸使用されていない。底部完存のため積み上げ方法は不明。

９区（図版54･55、第112 ～ 114図）

第112図1･2は１層出土で、１は甕で、口唇部が摩滅しているため刻み目の有無は不明。外面は



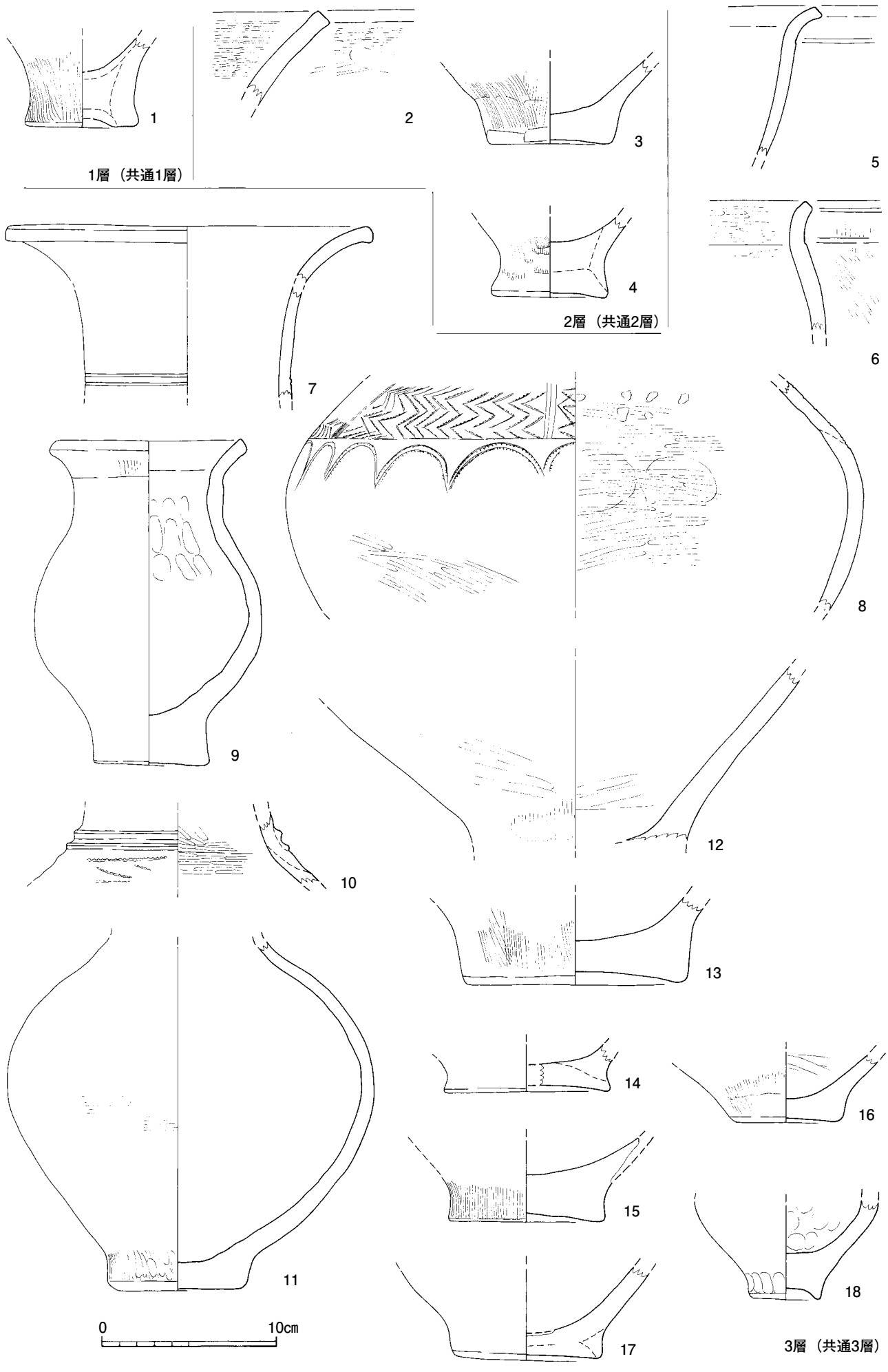
第111図　１区３号溝8･9区間出土土器実測図３（1/3）

口縁部から頸部はタテハケで、その上に幅が広く浅い沈線が入る。肩部は斜め方向のハケ、内面は口縁部がミガキで、内面口縁部はミガキ、胴部はナデ。内外にぶい黄灰色で変色なし。２は内外変色や器面の荒れがないことから鉢の底部だろうか。外面目の粗いタテハケ、内面ナデ。内外橙褐色。

３～６は２層出土で、３は大型壺の口縁部で、器壁の肥厚はない。外面口縁下のみヨコハケが残るが、他はミガキで仕上げられている。内外茶褐色で、内面口縁部から口唇部に変色がある。４は北壁出土で壺か、鉢の底部だろう。調整は外面タテハケで、内面はナデ。底部近くはケズリで粗く整えられている。本来の色調はにぶい黄橙色のようだが変色している。内面もにぶい暗黄灰色に変色している。５は１条沈線甕で、口唇部外側がやや延びる。器面剥落で調整不明。口唇部はナデによる平坦面がある。外面はにぶい暗黄橙色、内面は口縁部が赤橙色、胴部は黒灰色を呈するが、これは焼成不良によるもので、胎土も黒灰色である。６は甕の底部で、調整は外面タテハケが底部端まで達しており、内面はナデ。小さな上げ底で、外面橙褐色、内面にぶい暗黄橙色で、煮沸使用の痕跡はない。

７～18は３層出土で、７は広口壺で、口縁部と頸部は図上接合なので、頸部の長さは不確実である。器面の残りが悪く、調整不明。内外明黄橙色で変色なし。口縁部が黒化しているのは伏せ焼きされたためか。８は壺の頸部で、貝殻腹縁刺突による無軸羽状文。器面の残りがよく、内外面ミガキ。内面黄橙色で、外面は灰茶褐色で変色なし。９は小型壺で、口縁部は一部しか残っておらず、反転復元している。歪みがあるため口径はやや確実性に欠ける。器面は摩滅しているが文様の痕跡はない。外面はタテハケが見られるが部分的で他はナデ。内面は器面剥離が目立つ。胎土は比較的精良。内外黄灰褐色を呈する。底部完存のため積み上げ方法は不明。10は壺の頸部で、貝殻腹縁刺突による無軸羽状文。器面の残りがよく、外面ナデ、内面ミガキ。内外明黄橙色で変色なし。11は小型壺で、胴部と底部は図上接合である。器面は摩滅しているが文様の痕跡はない。外面はヨコハケが見られるがナデの前の調整の可能性がある。底部はタテハケとミガキがある。内面は器面剥離。胎土は比較的精良。内外黄灰褐色を呈する。底部完存のため積み上げ方法は不明。12は大型壺の底部で、外面は胴下位にタテハケとミガキが残る、内面はミガキがわずかに残る。外面黄灰色で、内面の暗灰色は焼成不良によるものだろう。積み上げ部分で剥離している。13は壺の底部で、外面はタテハケ、内面ナデで器面が残る。胎土は比較的精良。外面黄灰色で、内面の暗黄灰色は焼成不良によるものだろう。底部完存のため積み上げ方法は不明。14は底部が薄く、煮沸使用変色がないので壺の底部であろう。積み上げ痕は明瞭。内外ナデで、にぶい黄灰色を呈しており変色なし。15は外面には黄橙色で変色がなく、内面が使用変色しているので、壺か鉢であろう。器面がよく残っており、外面タテハケで、積み上げ部で剥離しており、表面のナデ部が剥離した部分にオサエ痕が観察できる。16は壺の底部で、外面はナデ、内面はミガキ。外面黄灰から黄橙色で、内面の暗灰褐色は焼成不良によるものだろう。底部完存のため積み上げ方法は不明だが、器面が剥離したところにタテハケが見られた。積み上げ作業の途中に必要な調整ではないので、作り直したものだろう。17は器面が摩滅し外面が赤化しているので煮沸使用された甕である。本来の色調は黄橙褐色であろう。18は小型壺の底部であろう。上げ底で器壁が厚い。器面は残っているが調整が粗い。内面が橙褐色を呈する。

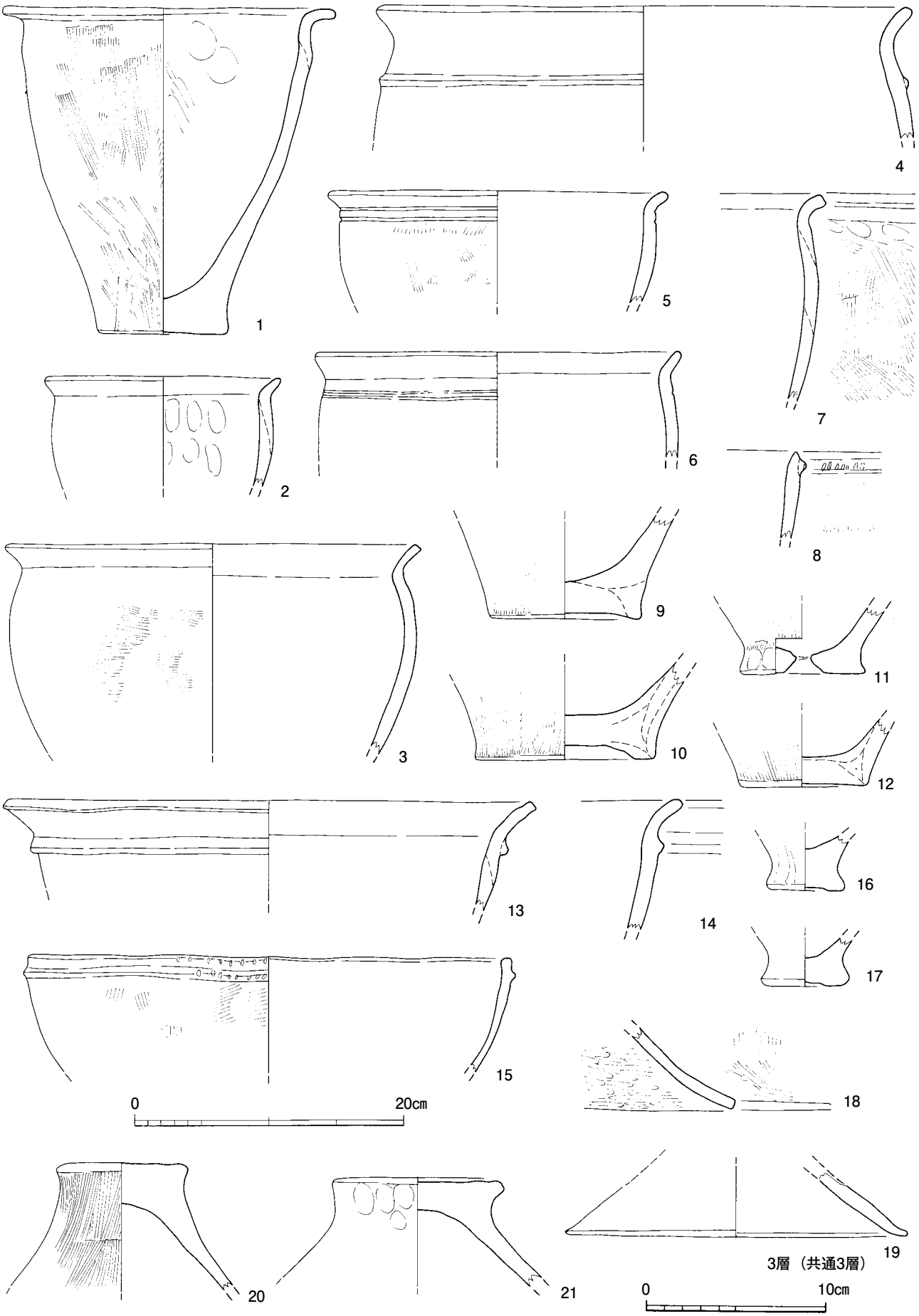
第113図は３層出土で、１は小型の甕で、口縁部が大きく外傾するもの。外面は目の細かいハケ



第112図　1区3号溝9区出土土器実測図1（1/3）

が丁寧に施されており、胴下位と内面はミガキである。煮沸による変色はない。内外明黄橙色を呈する。底部完存のため積み上げ方法は不明。２は小型の甕で、外面はにぶい橙褐色で黒斑あり、内面は口縁部が黄橙色だが、胴部は暗黄橙色で煮沸使用はされていないようなので、内容物により使用変色だろう。外面ナデ、内面オサエ。３は小型甕で、口縁部は器面が残っているので本来器壁が薄い。外面はヨコハケで内面は器面剥落。胴下位は赤化しているので煮沸使用されている。内外黄橙褐色を呈する。４は器面摩滅が著しく口縁部と突帯の刻み目の有無はわからない。内外黄灰色だが、胎が露出しているので変色の有無は不明。５は小型甕で、２条沈線が入る。沈線は幅が広く深い。外面はタテハケ、内面ナデ。内面黄橙色で変色ないが、外面胴部以下は茶褐色に変色しているので、煮沸使用されているが頻度は少ないだろう。６は小型の甕で、器面が摩滅しているため調整不明。内外口縁部は黄橙色だが、肩部以下は暗黄灰褐色なので煮沸使用されている。７は甕で、外面は残りが良く、丁寧なハケ調整。内面は胴部が器面剥落。内外黄灰色で変色なし。煮沸使用されていない。８は砲弾形刻目突帯文甕で、外面は目の細かいタテハケで内面ナデ。比較的精良な胎土で、内外黄橙色で変色なし。９は甕の底部で、器面の残りがよく、内面は暗灰褐色で底部縁だけが赤変しているので頻度の少ない煮沸使用であろう。外面タテハケ、内面ナデ。10は上げ底で、外面はタテハケで赤化している。内面は器面が摩滅しているが、明黄橙色で変色がない。使用頻度の少ない甕だろうか。11は小型の甕で、外面タテハケ、内面ナデで器面の残りが良い。外面黄橙色だがやや赤変しており、内面は灰褐色に変色しているので、使用頻度が少ない煮沸使用であろう。底部は外面から穿孔されている。底部完存のため積み上げ方法は不明。12は甕の底部で外面は丁寧なタテハケ、内面はナデ。外面は橙褐色で赤化は明瞭でないが、内面は暗灰褐色なので煮沸使用されているだろう。13･14は有段鉢で、頸部の突帯には刻み目はない。13は鉢で、突帯下位の接合部は未調整で、隙間が空いている。内外ナデで黄灰色を呈し、変色なし。14は突帯の接合部調整の丁寧なもので、外面橙褐色、内面黄灰色である。色調差の要因は不明。15は大型の甕で、口唇部はナデで平坦にしており、口唇端部と突帯に刻み目が入るが残りが悪い。外面は目の粗いヨコハケ。砂粒の多いざらつく特徴的な胎土で、ガクセン石を多く含む。16･17は小型の甕の底部で、器面が摩滅しているが内外ナデでミガキはないだろう。内外にぶい暗黄灰色で変色なし。底部完存で積み上方法不明。17は作りが粗く脚部が平面楕円形で、外面は赤化し、内面は黒灰褐色に変色しているので煮沸使用されている。18は内面が黒変しているので甕蓋である。外面から内面裾部はにぶい暗黄灰色だが、内面体部が黒変しているのは外蓋として使用されたためではないだろうか。19は蓋で、内外器面摩滅だが、内面はナデ後ミガキだろう。比較的精良で、内外黄橙色を呈する。20は甕の底部で、外面は赤化し、内面は黒灰褐色に変色しているので煮沸使用されているが、器面の残りが良い。外面は丁寧なタテハケで、内面ナデ。使用頻度の少ないのだろう。底部完存で積み上げ方法不明。21は壺蓋で、外面は器面摩滅が著しいが、内外ナデだろう。外面黄橙色、内面明橙色で変色なし。底部完存のため積み上げ方法は不明。

第114図1･2は４層出土で、１は９区３層・10区３層と３区５層出土の頸部・肩部・胴部片を図上接合した。広範囲に散らばっており、出土層も違っているが、胎土・色調・器面の状態から同一個体と判断される。５層出土は１点だけの小片なので、本来４層にあったものとした。内外器面摩滅で、貝殻腹縁刺突による鋸歯文が充填されている。２は4a層出土の甕の口縁部で、不鮮明だが口唇部に刻み目が入る。頸部の沈線は深い。外面タテハケ、内面は器面摩滅で不明。内面は明黄橙色

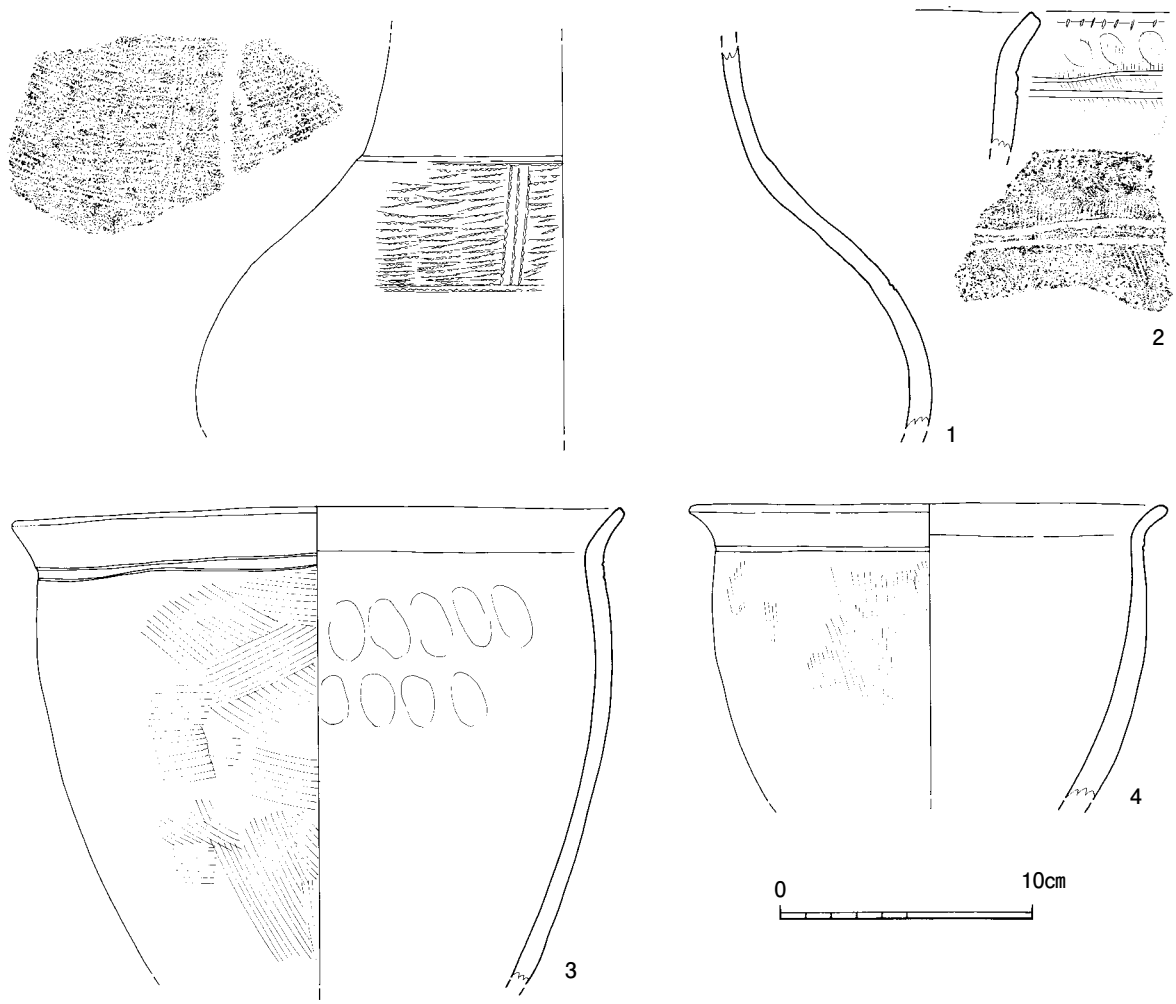


第113図　１区３号溝９区出土土器実測図２（15は1/4、1/3）

で変色はないが、外面は口縁部が暗黄灰色、胴部は暗灰褐色で、変色しているので煮沸使用されている。３は4b層出土の甕の口縁部で、口唇部は平坦化され刻み目なし。頸部の沈線は細い。外面肩部は目の粗いヨコハケとタテハケ、内面はナデ。内外黄橙色で黒斑以外変色はないので煮沸使用されていないだろう。沈線と外面のハケ調整が特異なので搬入品か。４は南壁から出土した小型甕で、器面が摩滅しており、外面のハケ目がかろうじて観察できる。口縁部の器壁が薄いが器面は大きく剥落していない。頸部沈線は１条で深い。内外にぶい黄灰褐色で、外面胴部が赤変しているので煮沸使用されている。

９･10区間（第115･116図）

115図１～８は２層出土で、１は壺で、口縁部と頸部から胴部片は図上接合であり、頸部沈線は３条と想定した。口縁部が大きく外反し、端部がやや肥厚する　肩部には貼り付け突帯があり、内面は頸部以下がミガキだが、口縁部はナデ、外面は器面摩滅で調整不明だが、頸部にタテハケが見られた。２は底部で、粘土板貼り付け底部で、黒斑部分にあたるため黒色を呈する。３は口縁部外面に突帯を貼り付けた甕で、突帯下部は調整が粗く、ヨコナデ時の工具痕跡が沈線状に残り、接合面の剥離部分はハケが残っている。外面は目の細かいハケが丁寧に施され、内面はナデ。内外煮沸による変色が著しく、下位は器面が剥離している。花崗岩の混入著しい。４は口縁部と口唇部に刻



第114図　１区３号溝９区出土土器実測図３（1/3）

目をもつ甕で、外面はハケ。砂を多く含む特徴的な胎土なので搬入品であろう。５は甕の底部で、上げ底状を呈する。器面が剥落しているが、ハケの痕跡が残っている。特徴的な粗放な胎土である。赤変はほとんどなく、煮沸されてない甕だろうか。底部はほぼ残っているため積み上げ方法は不明。６は小型器種で、外面がオサエのみで整形が粗いことから杯だろうか。外底に種子圧痕がある。内外黄橙色で変色なし。７は器面の摩滅が著しいが、器壁は薄いので蓋であろう。外面橙褐色、内面灰褐色で、変色がある。８は2b層出土で、外面に丁寧なタテハケが残り、内面は暗褐色に変色しているが、器面が残っているので蓋である。平坦面をもつ上げ底である。特徴のある粗放な胎土である。

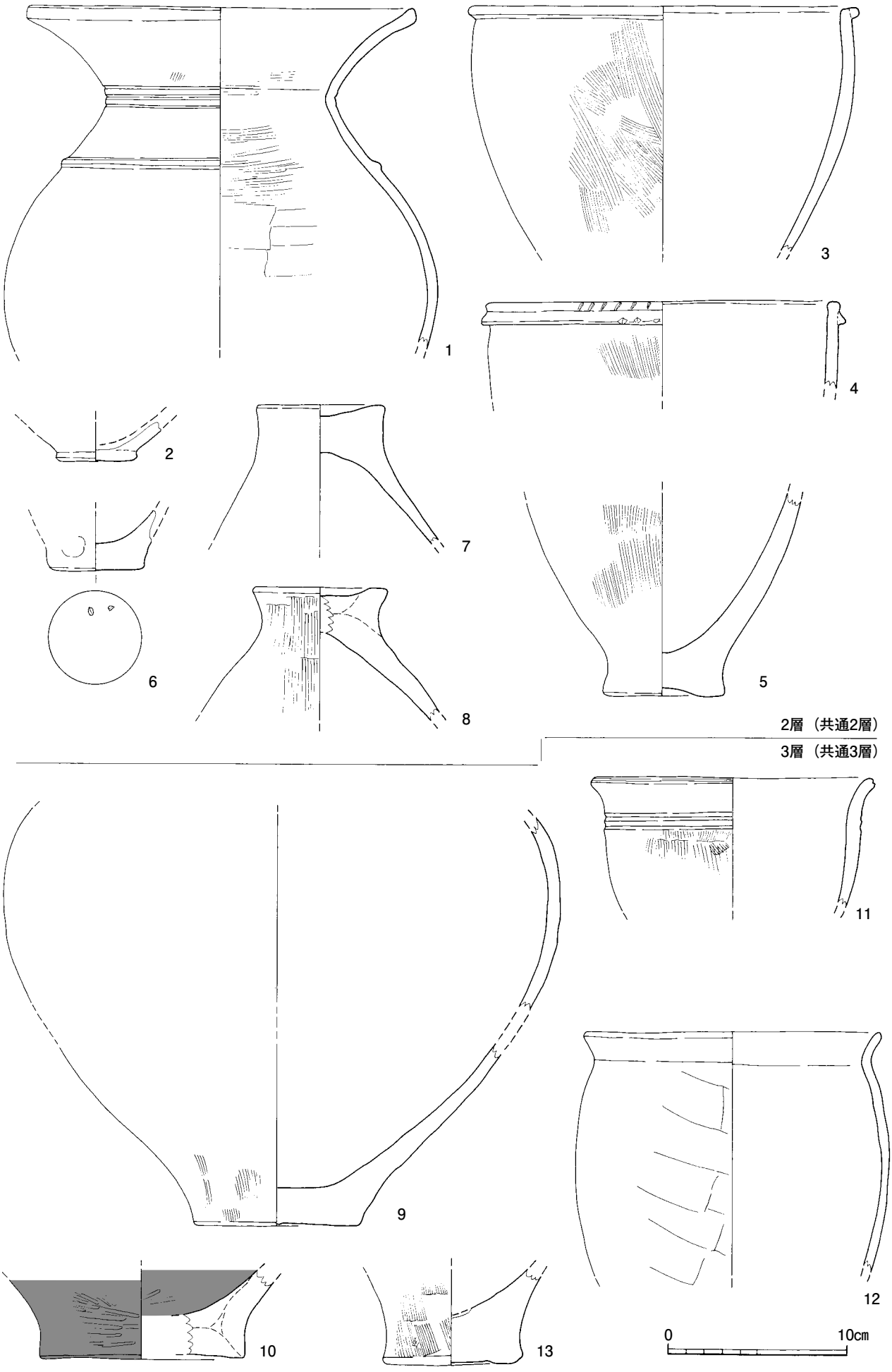
９～13は３層出土で、９は壺の底部で、内外面摩滅で調整不明。外面底部にわずかにタテハケが残る。内外黄橙灰色で変色なし。底部完存のため積み上げ方法は不明。10は壺の底部で、内外面ミガキで、外底面にもミガキが入る。全面黒色で、黒漆塗りか。胎土はにぶい橙褐色。11は２b層出土片と同一個体で、下層の方の３層出土とした。口唇部に沈線をもち、外面は肩部に凹線のように幅の広い２条沈線があり、沈線より上はヨコナデ、下はタテハケである。軟質で粗放な特徴的な胎土なので搬入品であろう。12は小型の如意形口縁甕で、刻目はなし。外面はハケ状の工具によるナデで、内面ナデ。内外黄橙色で煮沸使用の痕跡なし。13は図上接合の鉢で、口縁下の突帯の接合は下位側は隙間があく。外面タテハケ、内面摩滅。内素外暗黄灰色で大きな変色がない。

第116図は７層出土の上下半を図上接合した甕で、刻目突帯の刻目は小さく間隔が狭い。外面は目の粗いタテハケで、突帯の上下ヨコナデ。内面はナデ。内外暗黄灰色で煮沸使用の痕跡なし。外底部はやや上げ底状。

10区（図版55、第117～120図）

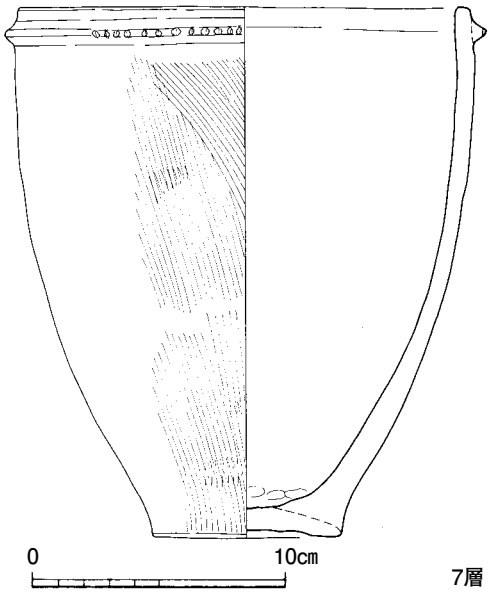
第117図１～７は２層出土で、１は2b層出土の壺の底部で内外丁寧なナデでつくりは均一である。底部完存のため積み上げ方法不明。２は2b層出土で、内外面がナデで、内面に変色が見られないので壺か鉢の底部であろう。３は2a層出土にしているがレベルから2b層とする。小型の甕で、外面は板状工具での粗いナデが入り、内面はナデ。口縁部は内面に稜をもって屈曲する。内外暗灰褐色で、煮沸使用の痕跡はない。４は2b層出土の甕の底部で、底部は上げ底。内外ナデで、煮沸使用の痕跡なし。５は底部内面側は剥落しているが、胎土まで変色しており、外面赤変から煮沸使用されているので、甕蓋だろう。外面は器面が剥落しているのでオサエ痕しか残っていない。天井部完存のため積み上げ方法不明。６は蓋で、天井部は平坦面をもつ上げ底。外面は粗い整形で、裾の開き方が均一でない。内面も器面が残っており、煮沸使用の痕跡はない。粗放で特徴的な胎土である。７は壺蓋で、器面摩滅しているが、外面は工具によるナデ。内外茶褐色で変色なし。精良な胎土でやや軟質。

８～17は３層出土である。８は壺で、内外面器面摩滅だが、ナデだろう。内外黄橙色で変色なし。９は大型壺の頸部から肩部で、肩部には施文帯が入っているようだが器面が剥落して、凹凸しか残っていない。内外面器面摩滅で調整不明。内外赤橙色で変色なし。10は大型壺の肩部で、器面の残りが悪く、貝殻腹縁刺突文が不鮮明である。内外面はにぶい黄橙色を呈する。11は壺の肩部で、貝殻腹縁刺突による施文が入る。内外面器面摩滅で、内外黄橙色で変色なし。12～17は壷の底部である。12の内面は器面の残りが悪く、外面はナデ。内外面は橙褐色。底部完存で積み上げ方法不



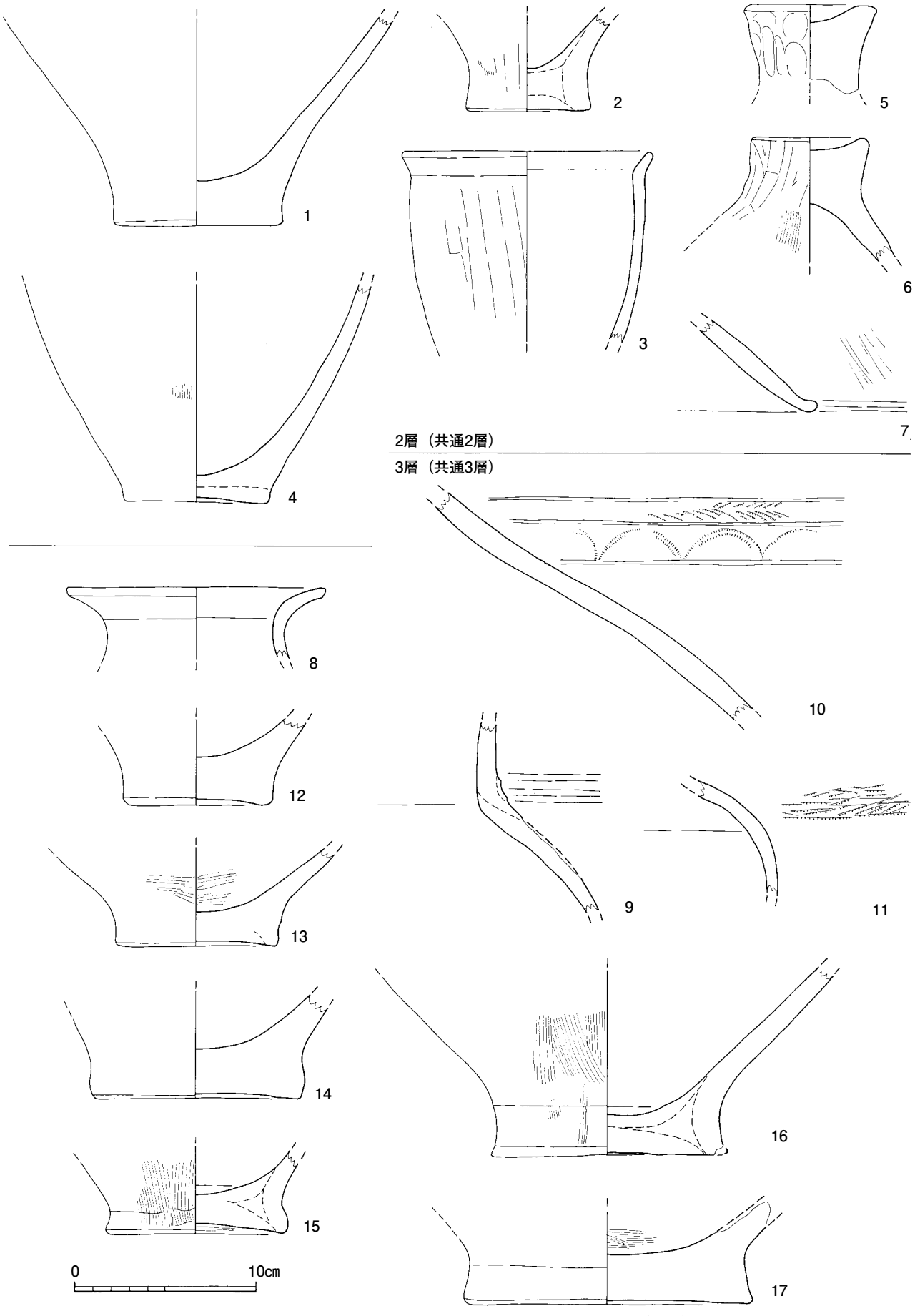
第115図　１区３号溝9･10区間出土土器実測図１（1/3）

明。13の器面は残りが良く、外面はナデ、内面ミガキで、内外面は明黄橙色。底部完存で積み上げ方法不明。14の内外面摩滅で調整不明。内面は黄橙色で変色がないが、外面はやや赤化している。15は外面タテハケで、外底は上げ底状なので丁寧なナデ。内面はにぶい黄灰色で変色がないが、外面は黄橙色でやや赤化している。16は大型壺の底部で、外面は目の細かいタテハケ、内面は器面剥落。内外暗灰褐色で変色なし。17は大型壺の底部で、器面の残りが良い。外面はナデ、内面ミガキで、外面はにぶい黄橙色、内面は暗灰褐色を呈する。底部完存で積み上げ方法不明。

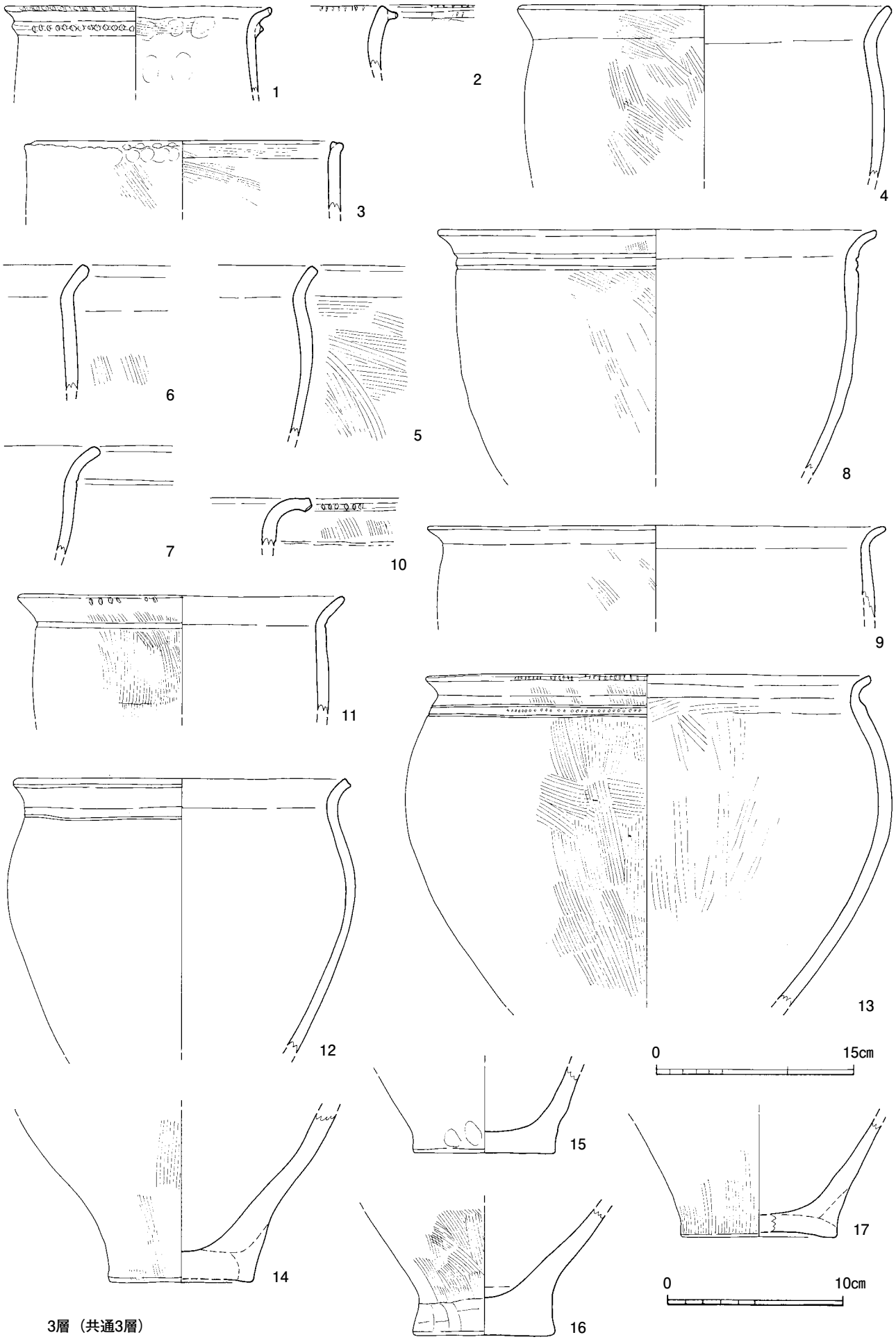


第116図　１区３号溝9･10区間出土土器実測図２（1/3）

第118図は３層出土で、１は小型甕で口縁部と口縁下突帯に刻み目が入る。外面は器面摩滅で観察できない。内面頸部は目の細かいヨコハケ。内外にぶい橙褐色で変色なし。２は如意形口縁甕で口唇部と突帯に細く浅い刻み目がある。内外摩滅で調整不明。にぶい黄橙灰色で変色がないので煮沸使用の有無不明。３は砲弾形の甕で、11･12区間７層第125図19に後出するものなので、古い時期の混入だろう。口縁部は内面側に肥厚させ、口唇部は交互のオサエにより波状を呈する。４は甕で口唇部に刻み目はない。外面はハケで、内面摩滅で調整不明。内外橙褐色で、変色はないが、内面の器面摩滅が著しいので煮沸以外の方法で使用されたものだろう。５は小型甕で口唇部に刻み目はない。外面はハケで、内面ナデ。外面にぶい暗黄灰色で、口縁部と肩部に変色がある。内面の黒色は焼成不良によるものだろうが、煮沸使用されている。６は肩部に１条沈線の入る甕で、器面摩滅で口唇部の刻み目の有無は不明。内面口縁部は明黄橙色だが、外面は灰褐色で、煮沸使用の有無は不明。７は甕で口唇部に刻み目はない。内外器面摩滅で調整不明。外面は肩部に凹線のように幅の広い１条沈線がある。８は如意形口縁甕で口唇部に刻み目はない。外面はハケで、内面摩滅で調整不明。口縁部から内面上半まで黄橙色、それ以外は暗灰褐色に変色しているので煮沸使用されている。９は如意形口縁甕で口唇部に刻み目はない。外面はハケで、内面摩滅で調整不明。変色がないので煮沸使用の有無不明。10は甕で口唇部の刻み目は深く間隔が狭い。外面は目の粗いタテハケで、内面は摩滅で調整不明。外面は肩部に沈線があるが、その下にもあったかは不明。黄橙色だが口縁部が黒褐色に変色しているので煮沸使用されている。11は如意形口縁甕で口唇部に刻み目が下方から入る。外面はハケで、内面ナデ。内面橙褐色、内面口縁部から外面は黒褐色に変色しているので煮沸使用されている。頸部の沈線は幅広く浅い。12は小型甕で、９区３層の破片と同一個体であろう。口唇部はナデで平坦化されている。内外面摩滅のため調整不明で、特に外面肩部は斑状剥離している。外面の肩部の一部に１条沈線の痕跡がある。内外黄灰色だが煮沸使用で変色している。13は大甕で、摩滅していて不明瞭だが、口唇部に刻み目が入る。外面は口縁部から頸部がタテハケ、肩部がヨコハケ、胴部がタテハケで、ハケ目は粗い。内面はミガキ。頸部には２条沈線の間に刺突文が入る。14は甕の底部で、外面タテハケ、内面ナデ。積み上げ部分で破損している。内外黄橙色だが、外面赤化し、内面にぶい暗灰褐色なので煮沸使用されている。15は甕の底部で、外面は器面摩滅だが、外



第117図　1区3号溝10区出土土器実測図1（1/3）

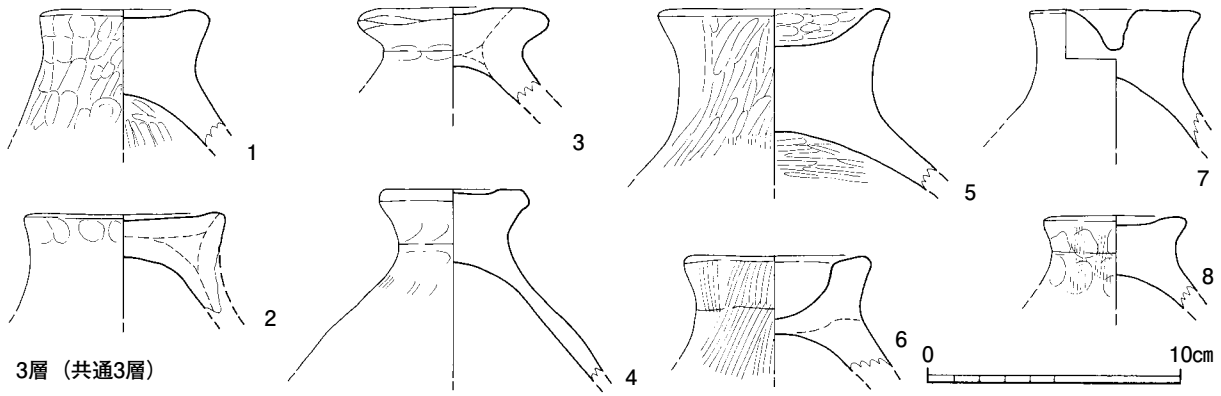


第118図　１区３号溝10区出土土器実測図２（13は1/4、他は1/3）

面にハケはないようだ。内外面は黄橙色で使用痕跡がない。16は甕の胴部で、外面はハケで、内面摩滅で調整不明。内外橙褐色で、外面胴部に変色があり、内面の器面摩滅が著しいので煮沸使用されていただろう。17は甕の底部で、外面タテハケ、内面ナデ。外面が赤変しているので煮沸使用されている、内外黄橙褐色を呈する。

第119図１は器面の残りがよく、内外ミガキ。外面橙褐色で、内面の灰黒色は甕蓋として使用したためであろう。２は甕蓋で、内面の摩滅が著しい。外面は積み上げ部に剥離しており、積み上げ前のオサエが残る。外面橙褐色で、内面の黒色は焼成不良によるものなので伏せ焼きされている。３は壺蓋で、内面の摩滅が著しく、外面はナデ。内外茶褐色で変色なし。４は壺蓋で、内外ナデ。内面黄灰色で変色がないので甕蓋ではない天井部完存で積み上げ方法不明。５は蓋で内外ミガキ。器面の残りが良い。内面はにぶい黄灰色だが、外面は暗灰褐色だが、意図的に黒くしているのか変色なのかわからない。６は甕蓋で、外底は削り出して上げ底にしている。内外器面が残っており、外面はタテハケ、内面ナデ。橙褐色で、外面の黒灰色は黒斑である。７は甕の底部で、内外面の摩滅が著しく、調整不明。内面黄灰褐色で変色がないが、外面が赤変しているので使用頻度の少ない甕だろうか。外底から穿孔されているが貫通していない。８は甕蓋で、内面の摩滅が著しく、外面はタテハケ。内外橙褐色だが、内面は変色している。

第120図１～16は７層出土で、１は壺の底部で、外面は器面摩滅、内面はナデが残る。底部完存で積み上げ方法不明。内外に大きな黒斑あり。２は口縁部に大きな刻目の入る甕で、刻目のため口唇部の歪みが大きい。外面はタテハケ、内外とも器面が摩滅し、暗灰褐色に変色しているので煮沸使用されている。３は砲弾形刻目突帯文甕で、外面はナデで、内面は器面がほとんど失われている。刻み目は小さく間隔が狭く浅い。外面は口縁部が変色なく橙褐色を呈するが突帯以下は暗灰褐色に変色している。内面は口縁部以外が変色しているので、煮沸使用されている。４は甕の口縁部で、器面摩滅が著しい。口縁下の突帯はオサエで整形されており、接合部の調整も粗い。内外黄灰色で搬入品の可能性が高い。５は口縁が外傾する刻目突帯文甕で、器面は摩滅で調整不明。刻み目は口唇部と突帯にあり、小さく間隔が狭く浅い。内面の口縁部は変色していないが、外面は口縁部が変色なく橙褐色を呈するが突帯以下は暗灰褐色に変色しているので煮沸使用されている。６は砲弾形刻目突帯文甕で、外面は器面がほとんど失われているが、残存している部分にハケがなくナデのみ、刻み目は小さく間隔が狭く浅い。内面は口縁部が変色なく橙褐色を呈する。胴部は炭化物により黒変し、胴下位は器面が剥落しているので、煮沸使用されている。７は砲弾形刻目突帯文甕で、器面は摩滅しており器壁が薄くなっている。調整は不明で、刻み目は小さく間隔が広い。内外面は灰褐色に変色しているので煮沸使用されている。８は口縁が外傾する刻目突帯文甕で、器面は摩滅しているものの外面に目の粗いタテハケが見られる。刻み目は突帯にあり、長く深く間隔が広い。内外面は灰褐色に変色しているので煮沸使用されている。９は口縁部と刻目突帯文甕で、外面は目の粗いタテハケ、内面は口縁部に斜め方向の粗いハケがある。刻み目は小さく間隔が狭く浅い。内面は口縁部が変色なく黄橙色を呈するが、胴部は灰褐色に変色し、外面は器面が剥落しているので、煮沸使用されている。10は甕の底部で、内外器面摩滅で調整不明。外面橙褐色で底部縁が赤化している。内面は底部周囲がにぶい黄灰色だが上位は暗灰褐色に変色しているので煮沸使用されている。11は外面がタテハケ、内面は摩滅のため調整不明。外面赤褐色、内面黒褐色なので煮沸使用されている。12は小型甕の底部で、内外面は器面が摩滅しているため調整不明。内面は黄灰色



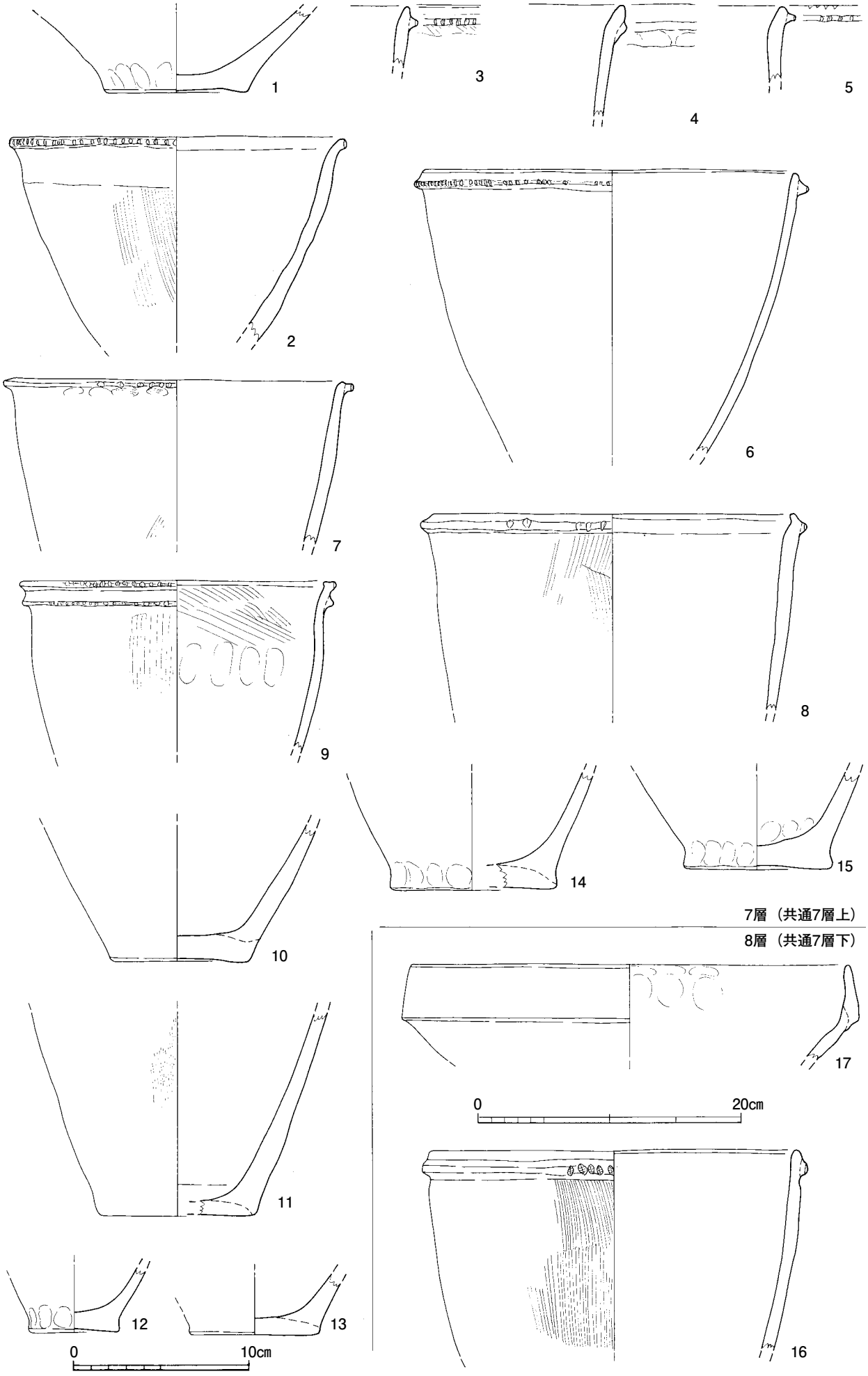
第119図　１区３号溝10区出土土器実測図３（1/3）

だが、外面は暗灰褐色だが一部が赤化しているのみなので、使用頻度が小さい煮沸使用だろうか。底部完存で積み上げ方法不明。13は小型甕の底部で、内外面は器面が摩滅しているため調整不明。内面の黄黒灰色は黒斑であろう。外面は赤化しているので、煮沸使用されている。14は甕の底部で、内外面は器面が摩滅しているため調整不明だが、外面はナデのみだろう。内外面は橙褐色だが、外面は赤化しており、内面は茶灰褐色に変色しているので、煮沸使用されている。15は甕の底部で、内外面は器面が摩滅しているため調整不明。内外面は黄橙色だが、外面は赤化しているので頻度の少ない煮沸使用だっただろう。16は砲弾形刻目突帯文甕で、７層と８層の判別の困難な位置からの出土であったが、形態から８層とするべきだろう。外面は目の粗いタテハケで、内面はナデ。刻み目は大きく深く間隔が狭い。内外面変色なく黄灰色を呈するので煮沸使用されていない。17は、７層で取り上げているがレベルから８層とした。口縁部の８分の１ほど残っており、傾きと復元径にまちがいはなく、口縁部は丸みをもって残っているので鉢である。器面は摩滅しているが、外面の一部にナデが残る。胴部との接合痕は明瞭。

11区（第122･123図）

第122図１～８は２層出土で、１は広口壺で、口縁部内面側を肥厚させ、上面には貝殻腹縁刺突による鋸歯文が施されている。頸部はタテハケの後、幅が広く深い横沈線が入る。肥厚部は外面側にオサエ痕が残る。内外茶褐色で変色なし。２は小片なので上下傾きは不明瞭だが、横位に赤色顔料を塗布する壺と想定した。外面の貝殻腹縁刺突による重弧文は端部だけが残っており、連続していない。外面にぶい黄橙色、内面橙褐色を呈する。３は壺で、外面ナデ、内面ミガキ。内外にぶい黄灰色で変色なし。突帯には刻み目なし。４は壺で、内外茶褐色で変色なし。内外ナデで、底部は蛇ノ目状になっている。５は如意形口縁甕で、口縁部に刻み目が入る。刻み目は下方から細長いものが狭い間隔で刺突されている。器面の残りが良く、器壁が薄いのは小型品のためであろう。反転復元できない小片だが、口径20㎝ほどだろう。内外ナデ。外面には目の細かいタテハケが入る。内外黄橙色で変色なし。7･8区間２層第106図８に近いが同一個体ではない。６は甕で器面の残りが良く、器壁が薄いが小型器種ではない。外面口縁部はヨコナデで、胴部はタテハケ、内面はナデ。内外茶褐色で変色なし。煮沸使用されていない。７は小型器種で、変色がないことから鉢の脚部であろう。器面は剥落しているが外面にハケの痕跡が残る。

８～14は３層出土で、８は広口壺で、口縁部内面に凹線があるが、段が退化したものであろう。



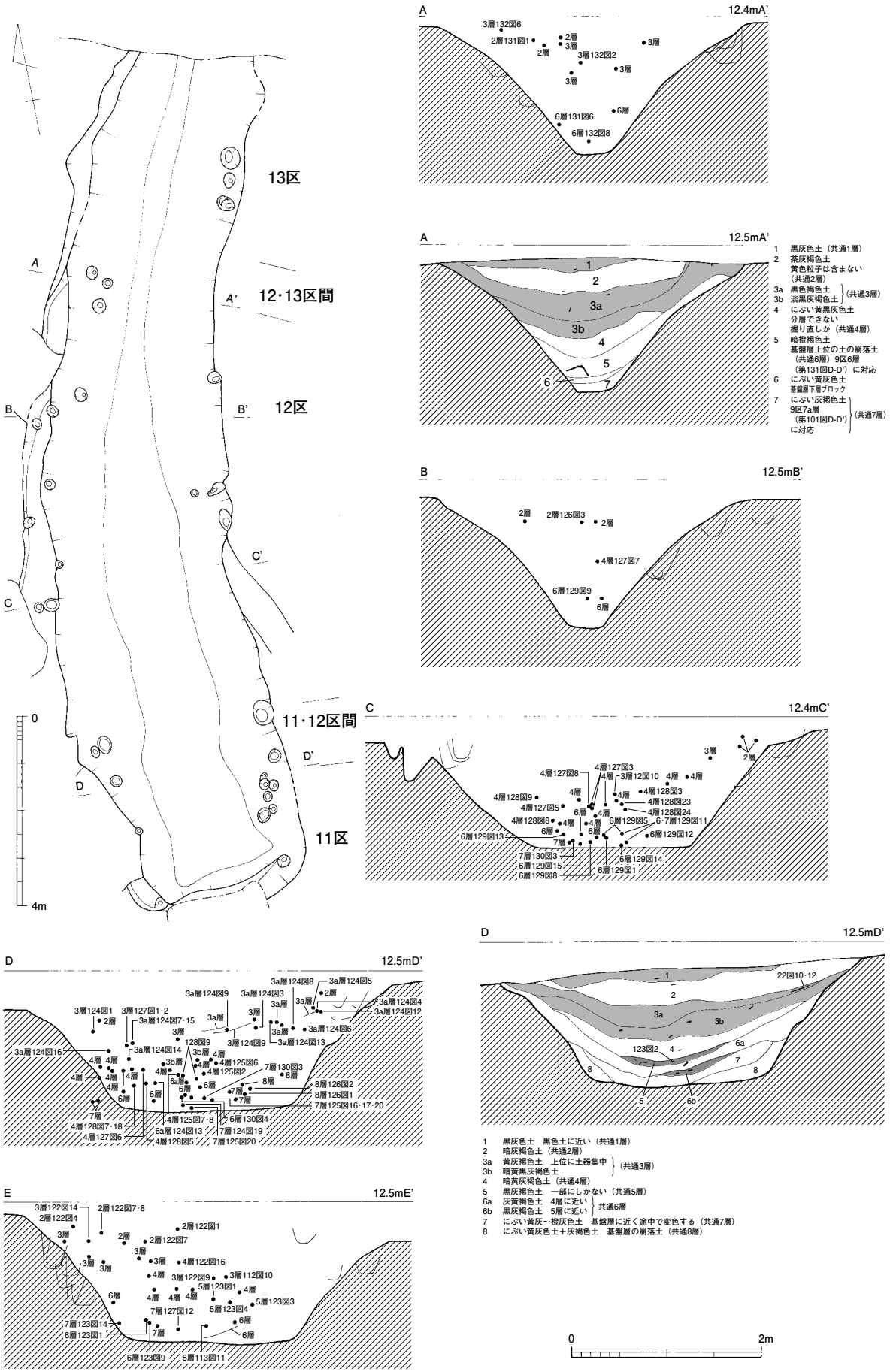
第120図　１区３号溝10区出土土器実測図４（16は1/4、他は1/3）

口唇部は平坦面を持ち、上端は尖り、下端には刻目が入る。口縁部は内外赤褐色で、頸部内面は黄橙色であることから伏せ焼きで焼成されている。器面摩滅で調整不明。９は小型壺で底部に２条沈線が入る。内外黄灰色で変色なし。器面摩滅で調整不明。3a層出土の10は小型器種の底部で、内面は黒色だが、炭化物が付着したのではなく黒斑である。外面はハケの上にミガキが見られるので、小型壺であろう。11は壺の底部で、外面タテハケ、内面ミガキ状のナデで、橙褐色を呈し変色なし。12は北壁3a層出土の甕で、口唇部はナデで平坦面を持ち、ナデの粘土が下端に寄って肥厚しているように見える。外面タテハケ、内面ナデ。外面は変色が見られないが、内面は頸部まで暗灰褐色に変色している。13は内外面に変色がなく、器面の残りがよいので煮沸しない甕である。外面は目の細かいハケ、内面はミガキのような丁寧なナデ。口唇部には平坦面があり、口縁部を肥厚した粘土の接合痕跡が沈線状に残る。肩部は器壁が厚いのは２重沈線を深く刻むためであろう。14は小型の甕で、外面はタテハケが端部まで施されている。底部完存のため積み上げ方法は不明。内外黄灰色で煮沸使用による変色はない。

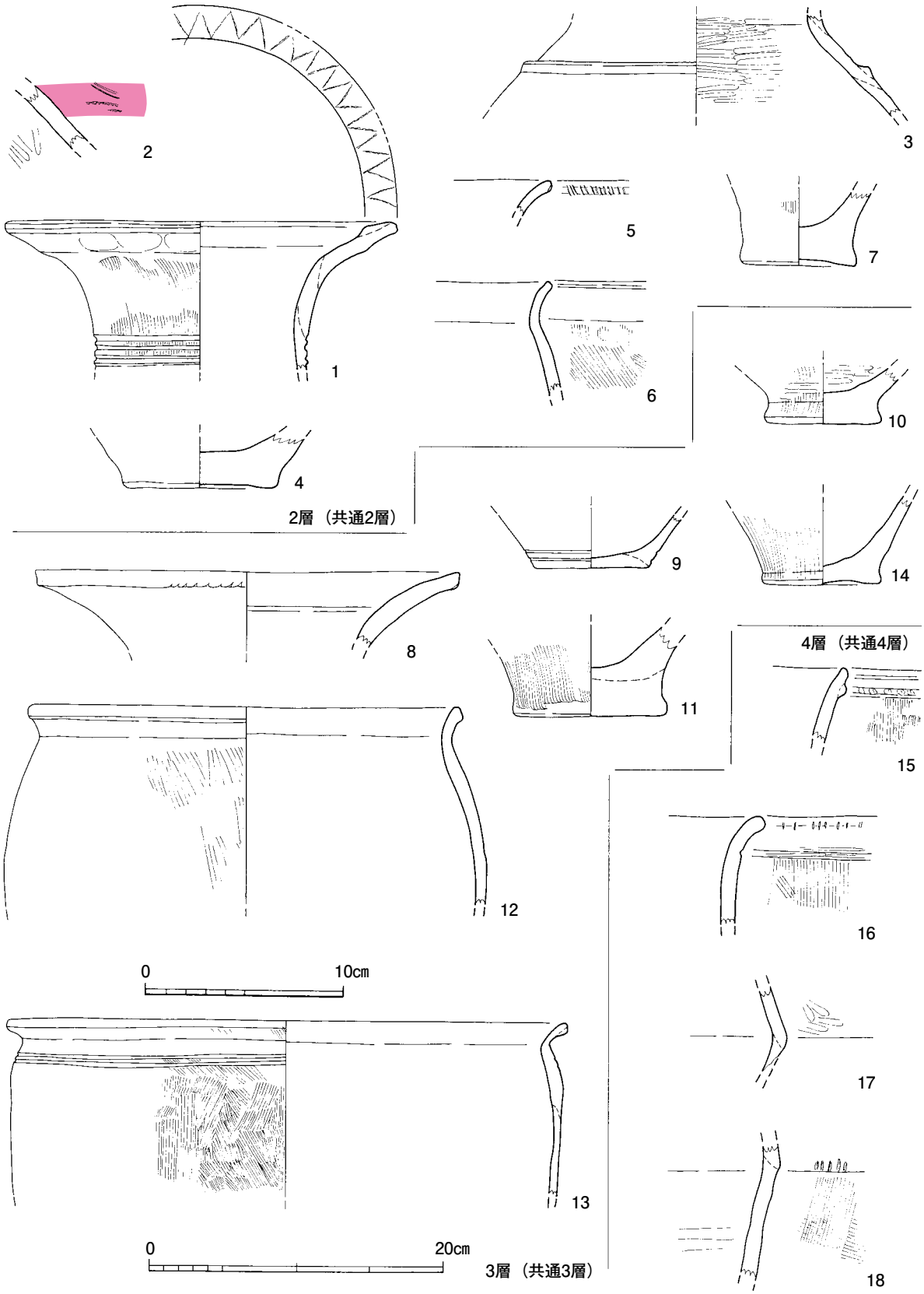
15 ～ 18は４層出土で、15は刻目突帯文甕で口縁は外反する。外面には目の細かいタテハケが入る。内外黄灰色で変色なし。器面の摩滅が著しく、刻み目は残りが悪い。16は甕の口縁部で、口唇部には縦長で幅が狭い刻み目が浅く入る。頸部の沈線は幅が広い逆三角形状。内面は器面が摩滅している。外面の口縁部はヨコナデ、胴部はタテハケ。外面暗灰褐色で、内面は黄橙色で、下位には変色が見られるので煮沸使用されている。17は肩が屈曲する鉢の胴部で、屈曲部の外面に刻目はない。外面はミガキ、内面は器面が摩滅しており不明。外面黄橙色、内面黄灰色。18は有段甕で、段には長い刻目が入る。段の上にはヨコナデ、下には縦横にハケが入る。内面はヨコナデで、混入した砂を引きずった痕跡が残る。胎土は精良で、内外にぶい黄橙色を呈し、変色なし。

第123図１～４は５層出土で、１は壺の胴部で、貝殻腹縁で２条横線と無軸羽状文が入る。内外ナデ。内外橙褐色で、外面２ヶ所黒斑がある。２は壺の肩部で、貝殻腹縁で２条横線と縦方向の羽状文が入る。外面はミガキが摩滅したものだろう。内面ナデ。外面にぶい灰褐色。内面の黒褐色は焼成不良だろう。３は壺の底部で、底部完存のため積み上げ方法不明。内外面ナデで、にぶい橙褐色を呈する。４は天井部と胴部外面が同じように変色し、赤化が見られないので蓋であろう。天井部は歪んでいる。外面タテハケで内面は器面摩滅。天井部完存で積み上げ方法不明。内面黄橙色で、外面にぶい黄橙灰色。

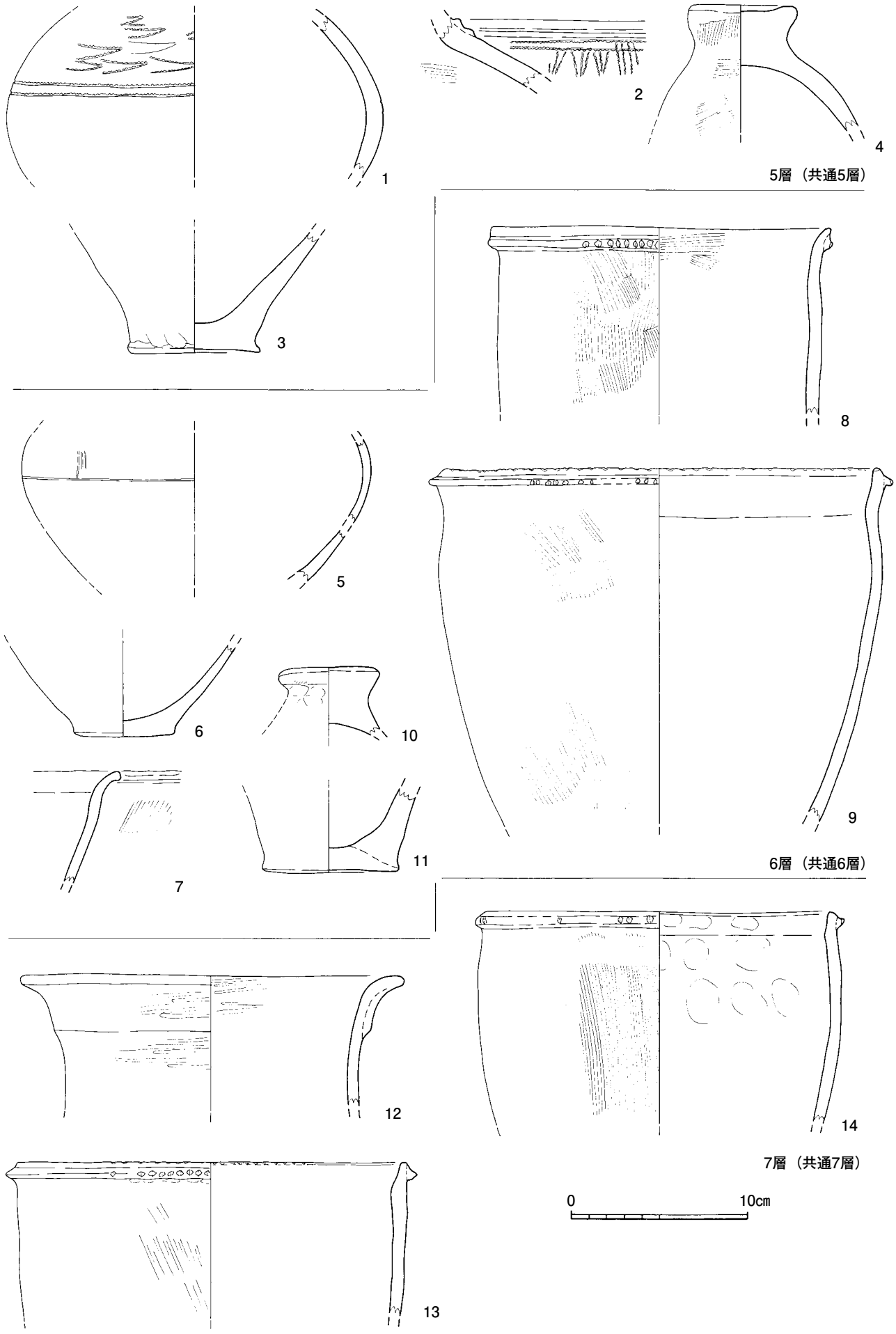
５～ 11は６層出土で、５は小型壺の胴部で、１条沈線の上に３条の縦方向の沈線が残っている。線の湾曲と文様のない部分が大きいことから重弧文の一部と見られる。内外器面マメツのため調整不明。６は小型壺の底部で、外面は器面摩滅だが、内面はミガキのような丁寧なナデ。内外黄橙色で変色なし。底部完存のため積み上げ状況は不明。７は器面が摩滅しているため刻目が残っていないが、口唇部に平坦面があるので、本来あったであろう。内面胴部が黒変しているので如意形口縁甕と見られるが、傾きが大きいので鉢の可能性もある。８は甕の口縁部で、目の粗いハケが、外面はタテ、内面口縁部にはヨコに入る異質な調整で、刻目突帯の上部は口縁端部まで肥厚させていることから搬入品であろう。内面は煮沸使用により変色している。９は甕で、口唇部と突帯に刻目が入る。外面は突帯と肩部以下が暗褐色に変色している。外面はハケで、内面は器面剥落。10は6b層の蓋で、裾の傾きから天井部の平坦面は傾いている。外面は調整が粗く、内面は器面剥落。11は器面は内外とも剥落し、外面胴部は赤変しているので、煮沸使用されていることから、甕の底部で



第121図　1区3号溝11 ～ 13区実測図（1/120・1/60）



第122図　1区3号溝11区出土土器実測図1（14は1/4、他は 1/3）



第123図　１区３号溝11区出土土器実測図２（1/3）

ある。

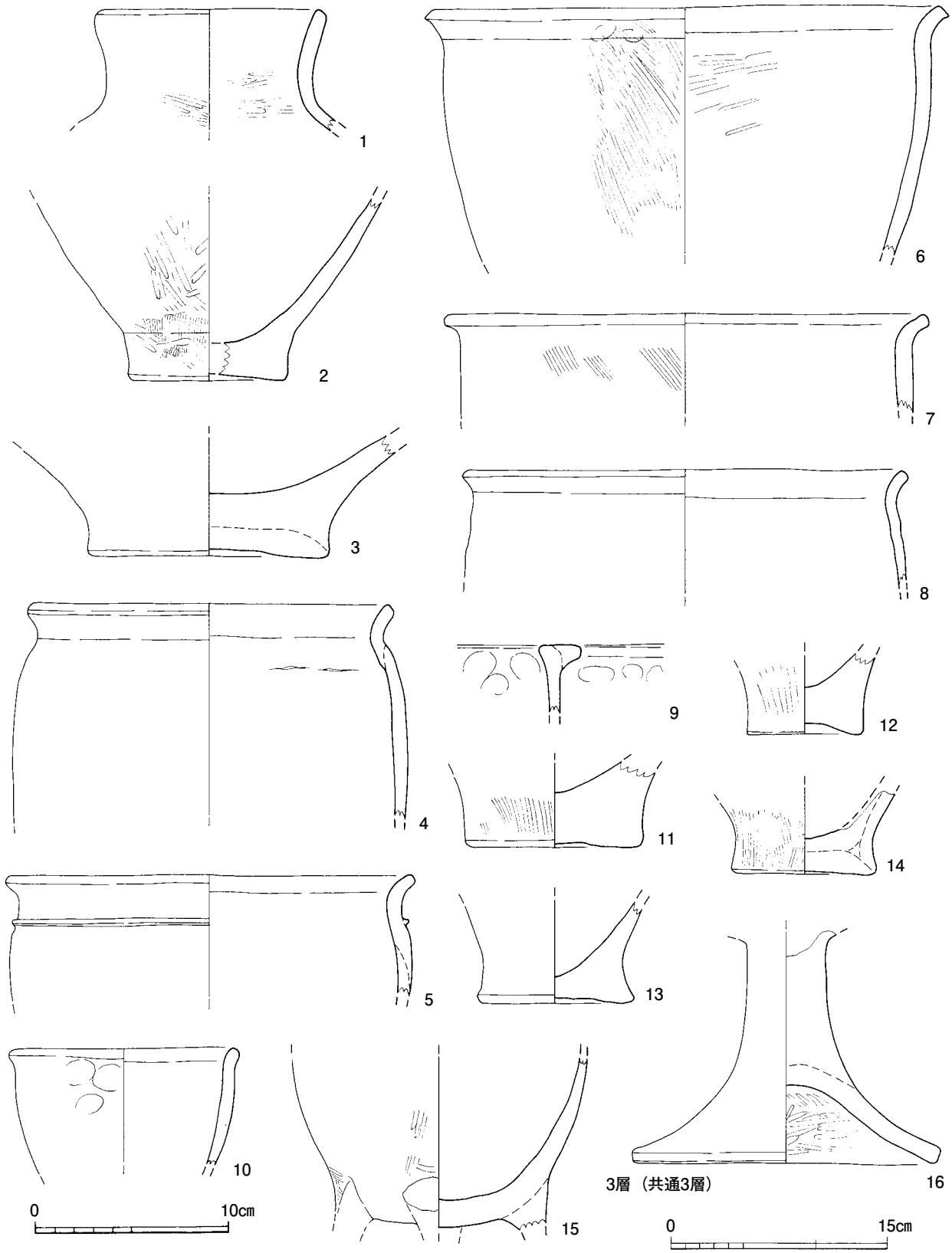
12 ～ 14は７層出土で、12は有段壺で、内外ミガキ。13は2・4層と同じくらいの大きさの破片と接合したもので、2･4層は混入が多いことから最も古い層の７層出土とした。刻目突帯の下位は爪状の小さな圧痕が残っている。外面はハケ、内面は器面摩滅で観察できない。14の内面口縁部はオサエ列のため内傾しているように見える。外面タテハケ、内面ナデで器面はよく残っている。内外黄橙褐色を呈するが、外面胴部は暗灰褐色に変色している。煮沸使用の痕跡はないが、変色はあるので頻度の少ない使用だったのかもしれない。

11･12区間（第124･125図）

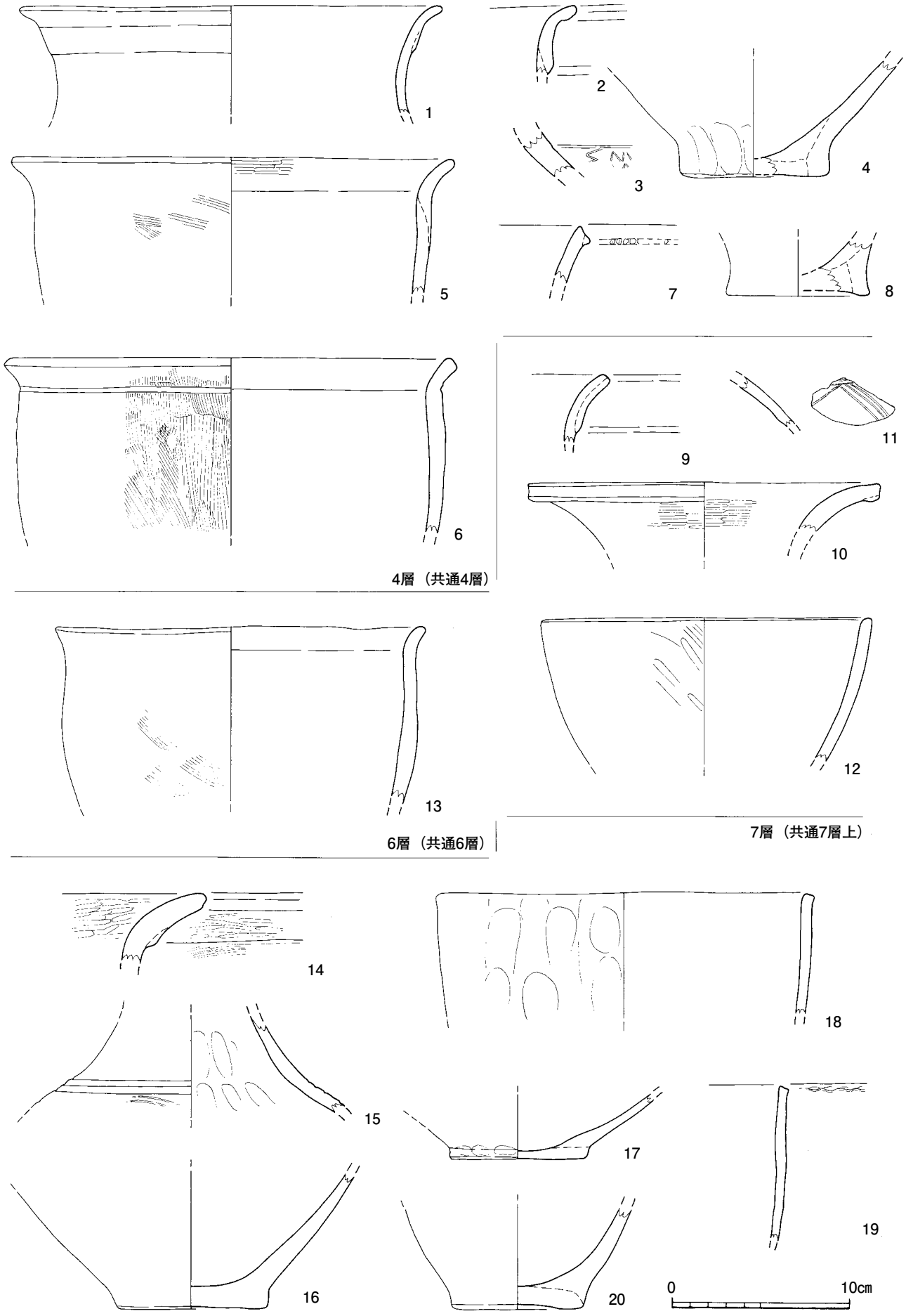
第124図は３層出土で、１は3a層出土の壺で、口唇部はナデ仕上げされている。内外ミガキで、橙褐色を呈し変色なし。２は3a層出土で、内外面胴部ミガキで胴下位のみ丁寧なタテハケ。口唇部は平坦ではないが、内面側端部が尖る。内外濃茶褐色の特徴的な胎土。３は3a層出土の大型壺の底部で、内外面器面摩滅で調整不明。内外面黄橙色を呈し変色なし。４は3a層出土の甕で口縁部は短かく、内面に積み上げ痕が残る。口唇部に刻み目なし。内外面ナデ。内外暗黄橙灰色で下位が黒変しているので、煮沸使用の可能性が高い。５は甕で口縁部は短かく、口唇部に刻み目なし。頸部突帯は小さく、刻み目なし。内外器面は摩滅で調整不明。内外橙褐色で、煮沸使用の有無は不明。６は3a層出土のやや大きい中型甕で、口唇部はナデで平坦にされ、下端が尖る。外面口縁部はオサエ痕が残り、胴部は丁寧なハケ調整。内面は器面が摩滅しているが、ミガキの痕跡が見られる。内外面とも頸部まで変色があるので煮沸使用されているだろう。７は3a層出土の甕で口縁部は短く、口唇部に刻み目なし。外面タテハケ、内面ナデ。内外にぶい黄灰色で変色がなく、煮沸使用の有無は不明。８は内外面摩滅で調整不明。口唇部はナデによる平坦面をもつ。９は3a層出土の甕で口縁部外面肥厚。内面オサエ、外面は器面摩滅。内外暗灰褐色で、煮沸使用の有無は不明。10は3a層出土の小型器種で、内外ナデで口縁部の整形も粗いことから、小型甕か有脚鉢だろう。内外変色なし。11は3b層出土の壺の底部で、外面タテハケ、内面摩滅、暗橙褐色を呈し変色なし。底部完存のため積み上げ方法不明。12は3a層出土の外面黄橙色なのに内面は暗灰褐色であることから蓋の可能性があるが、穿孔があるので小型甕とした。上げ底状で、底部完存で積み上げ方法不明瞭。外面粗いタテハケ、内面ナデ。天井部に２ヶ所穿孔されようとして貫通していない穴が２つある。13は3a層出土の甕の底部で、外面はタケハケ後、胴下位をヨコナデしている。内面はナデ。内外器面が残り、変色がないので煮沸使用されていないものだろう。14は甕の底部で、外面は丁寧なタテハケ。外面赤橙色だが、外底は暗黄灰褐色なので接地して使用している。内面は暗灰褐色で器面剥落著しい。15は３層・２層出土片が接合し、3a層に同一個体があるものなので、３層出土であろう。底部に対角線上に４つの脚がつく脚付鉢で、脚は欠損部からそれほど伸びないだろう。内外黄灰色で変色なし。東北地方の縄文晩期末に見られる四脚鉢に類例があるが、胎土は特異なものではないので、搬入品ではなく、模倣したものだろう。16は高杯の脚部で外面は器面摩滅、内面はミガキ。中実の脚部に裾が貼り付けられている。内外橙褐色で変色なし。

第125図１～８は４層出土で、１は壺で、10区３層と同一個体。器壁が薄いのは器面が摩滅しているためで、調整不明。内外黄橙色で変色なし。２は有段壺で口縁部が肥厚している。内外ナデ、内外黄橙色で変色なし。３は壺の肩部で、沈線による無軸羽状文が充填されており、縦方向の区画

もある。段は削り出し。外面黄橙色、内面黄灰色を呈する。４は外面ナデで内面は器面剥落。外面橙褐色、内面黄灰色で、壺の底部だろう。５は口唇部に刻み目はない。外面口縁部から頸部はナデ、肩部は斜め方向のハケ。内面口縁部はミガキ、胴部はナデ。内外暗灰褐色で、変色なし。６は有段甕で、反転復元できない小片だが口径25cmほどだろう。口縁部は肥厚というより口縁下の調整



第124図　１区３号溝11･12区間出土土器実測図１（８は1/4、他は 1/3）



第125図　1区3号溝11・12区間出土土器実測図2（1/3）

により口縁下が抉れたものだろう。内外黄橙色で変色なし。11区３層の破片と同一個体である。目の細かいハケが丁寧に入り、頸部は深く幅の広い沈線が入る。内面は丁寧なナデ。外面は暗灰褐色だが、内面は橙褐色で変色なし。煮沸使用されているか判然としない。混入物は比較的少ない。７は刻目突帯文甕で、口縁が外反する。刻み目は小さく間隔が狭い。器面摩滅で調整不明。内面から外縁口縁部は黄灰色。外面はにぶい褐色に変色している。８は内外面ナデで、外面は橙褐色、内面は淡灰褐色で煮沸使用による変色ではないので壺の底部だろう。

９～13は６層出土である。９は6a層出土の有段壺で、小片のため傾きは不確実。肥厚部が一部剥落しており、肥厚状況がわかる。器面摩滅で、胎土は比較的精良。10は6a層の広口壺で、調整は粗い。内外ミガキで、内面裾部は黒斑がある。11は6a層の小型壺の肩部で、小片のため傾きは不確実。外面ナデで、内面器面剥落。外面は黒褐色を呈する。12は6a層出土の砲弾形小型甕で、外面はミガキ、内面はナデ。内外黄橙色で変色なし。13は6a層出土の如意形口縁甕の口縁部で、口唇部に刻目はない。内面は器面摩滅だが、外面の胴部には目の細かいハケが入る。

14～20は７層出土で、14は大型壺の口縁部で口縁部外面に小さな肥厚による段がある。内外ミガキで、にぶい橙白灰色を呈する。15は壺の肩部で、内外器面摩滅で内面のオサエ痕がわかるのみ。肩部の沈線の最も上のものは頸部との間に段がある。沈線下の重弧文も１本単位の沈線によるが施される。黄橙灰色で変色なし。16は壺の底部で、内外器面摩滅で調整不明。底部完存のため積み上げ方法不明。内外黄橙～黄灰色で変色なし。17は壺の底部で、内外器面剥落で調整不明。外面橙褐色だが、内面は灰褐色に変色している。内容物による変色か。18は砲弾形の甕で、口唇部は交互のオサエにより波状を呈する。19は砲弾形の甕で、11･12区間３層出土片と同一個体。反転復元できない小片だが小型品ではない。外面はナデのみでハケがない。内面は内外摩滅しており調整不明。内外暗黄橙褐色で内面はにぶい黄灰褐色だが、変色のない破片もあるので煮沸していない可能性もある。20は甕の底部で、外面ナデのみでハケがない。内面は器面摩滅。外面赤変しており、内面は胎の色が露出しているので変色していないだけで、煮沸使用されている。

第126図1･2は８層出土で、１は小型壺の肩部で、器面が摩滅しているため調整不明。外面肩部に複線鋸歯文が部分的に残っている。内外黄灰色。２は壺の底部で、積み上げ痕は不明瞭。内外器面摩滅で、調整不明。外面暗黄橙色、内面黄橙色を呈し、変色なし。

12区（図版55、第126～130図）

第126図３は２層出土の口縁部肥厚する甕で、器面摩滅で調整不明。外面にぶい暗黄褐色で、内面はにぶい黄灰色を呈する。煮沸使用の痕跡ははっきりしない。

４～11は３層出土で、４は3a層出土の小型壺の肩部で、内外ナデで、外面肩部に赤色顔料が付着している。剥落が著しいが、丹塗りではなくなんらかの彩文と考えられる。外面黄橙色、内面黄灰白色を呈し変色なし。５は３層出土の甕で、反転復元できない小片だが、大型品である。外面は器面摩滅で調整不明、内面はナデ。頸部の突帯は摩滅しているが刻み目はないだろう。内外にぶい黄灰色で煮沸使用による変色はない。６は大型の甕で、口唇部はナデで平坦面を持ち、両端に小さい刻目が入る。頸部の刻目突帯は小さく、刻み目も小さい。器面摩滅が著しく調整不明。内外にぶい暗黄橙褐色で煮沸使用による変色は見られない。７は刻目突帯文甕で、反転復元できない小片だが、大型品である。刻み目は幅が広く浅い。内外黄橙色で煮沸使用による変色はない。８は外面が

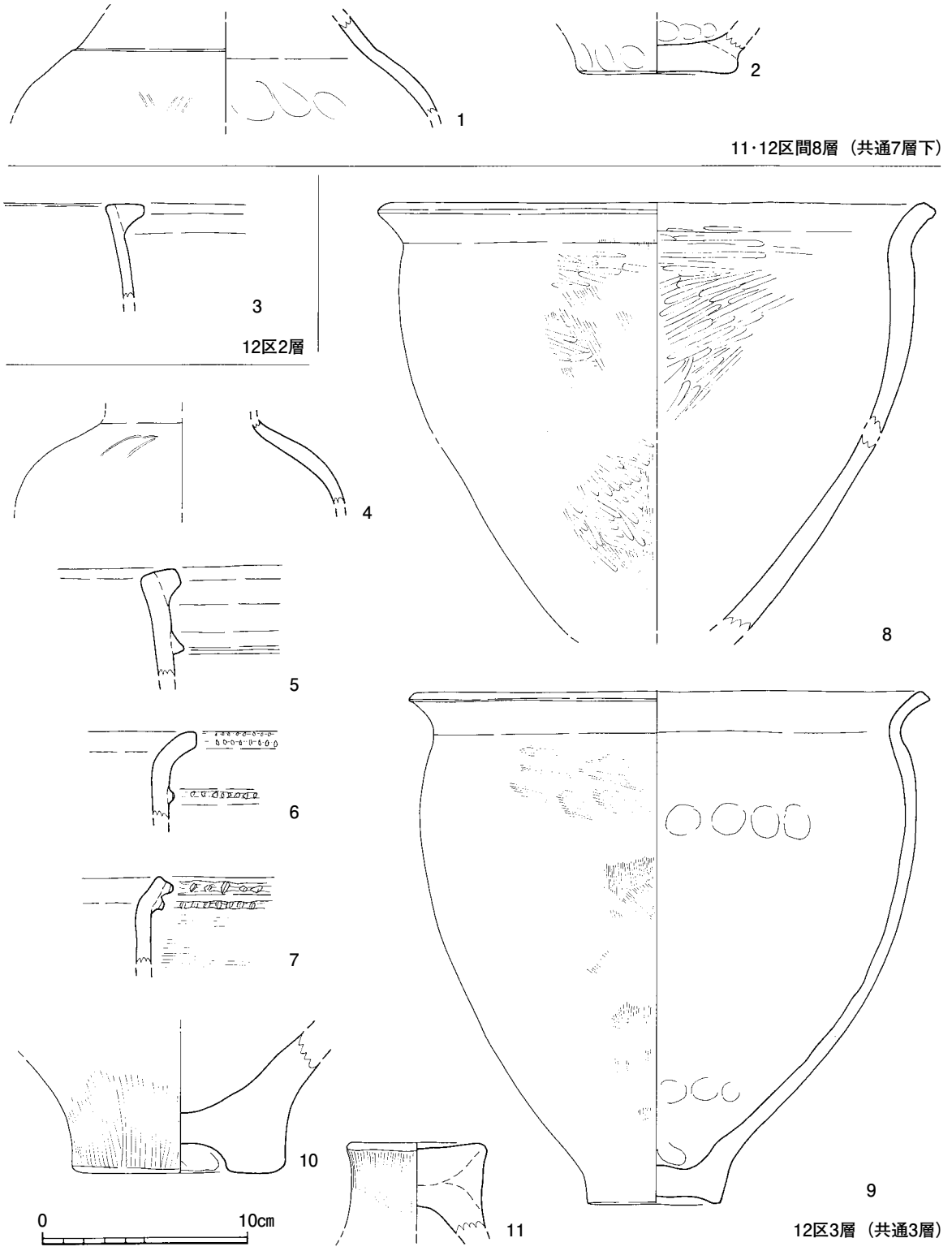
タテハケ後ミガキで、内面もミガキ。内外橙褐色で外面は赤化していないので鉢であろう。口縁部と胴部は図上接合。９は大型の甕で、口唇部はナデで平坦面を持ち、刻目なし。胴上半と下半で図上接合している。肩部はヨコハケ、胴部はタテハケ。底部完存のため積み上げ方法不明。内外にぶい黄橙灰色で変色がないので煮沸使用されていないようだ。10は甕の底部で、外底は上げ底状に抉られている。底部完存で積み上げ方法不明。外面タテハケ、内面摩滅。外面黄橙色で、内面にぶい灰褐色。11は外面がタテハケで、内面が器面剥落している。内外黄橙色で外面は赤化しておらず、内面がやや灰褐色に変色しているので蓋であろう。天井部部完存のため積み上げ方法不明。

第127図1･2は４層出土としたがレベルから３層に変更した。１は頸部が直立し、口唇部に平坦面をもつ壺で、器面は摩滅しているが文様の痕跡は残っていない。内外ナデであろう。暗橙褐色を呈し、変色なし。２は広口壺で、口縁部内面は肥厚しており、肥厚部の直下に沈線がある。これは肥厚部の調整した工具の痕跡かもしれない。外面はタテハケで、上位はヨコナデで消されている。頸部には山形突帯が貼り付けられており、接合部の剥離部分にタテハケが残っている。内外にぶい茶灰褐色で変色なし。

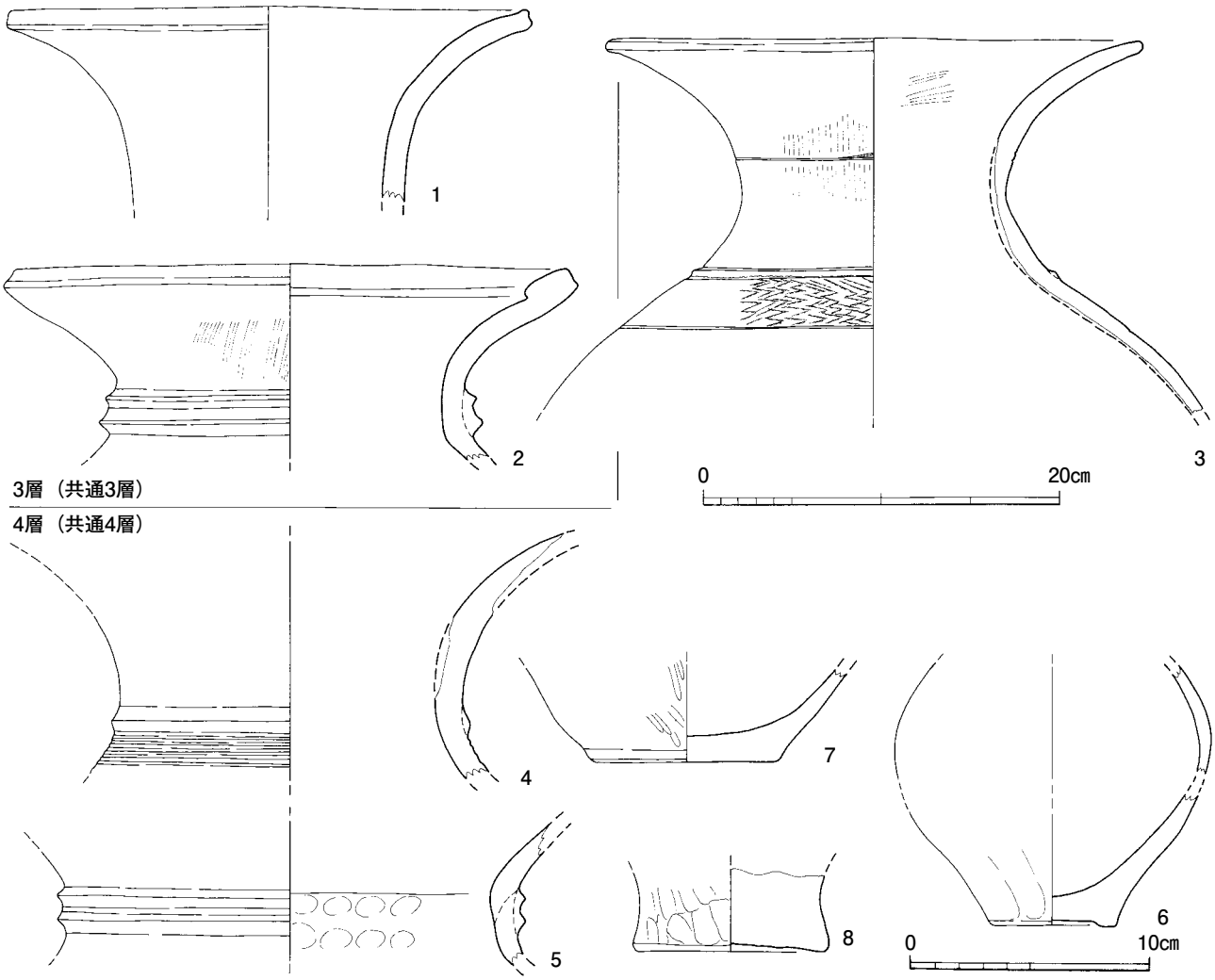
第127図３～８と、第128図１～24は４層出土である。第127図３は広口壺で、９区３層出土片と同一個体である。外器面は摩滅しているが本来は荒いタテハケの上にミガキが入る。内面はミガキ。頸部には１条の沈線が入るが重複している部分は２条に見える。肩部は突帯の下に貝殻腹縁刺突により無軸羽状文帯が入る。内外黄灰色を呈する。４は広口壺の頸部で、突帯の下に櫛書き条線が入る。器壁が厚いが接合痕は不明瞭。器面摩滅しており調整不明。内外黄橙色を呈する。５は広口壺の頸部で、９区３層出土片と同一個体である。器面摩滅しており調整不明。内外黄橙色を呈する。６は小型壺で、胴部と底部は図上接合なので不確実。砂粒が少なく精良だが軟質。残存部では文様がない。７は壺の底部で、外面はナデ後ミガキで内面は器面剥落。内外黄橙色で、外底に黒斑あり。底部完存で積み上げ方法は不明。８は外面がミガキ状のナデで、茶褐色を呈し変色がないので壺の底部だろう。底部完存で積み上げ方法不明。

第128図１～24は４層出土である。１は小型甕で、外面ハケだがオサエが残る。内面はナデ。器面の残りが悪く、外面は口縁部まで暗黒灰褐色で煤が付着する部分もある。内面は胴部が暗茶褐色で、口縁部は黄灰色なので胴部は内外赤化していると見られる。２は小型甕で、器面剥落著しい。内外茶橙褐色で煮沸使用による変色なし。３は器壁が厚い。外面ハケ、内面ナデで、外面暗灰褐色、内橙褐色で、煮沸使用の痕跡がないので、鉢か。４は甕で、口縁部の歪みが大きい。外面は目の細かいタテハケ、内面はナデ。口縁部の刻み目は細長く間隔が狭い。頸部はヨコハケで、ハケ調整後に長い刻目を刺突したので、刻目間の下半分にはハケが残る。内外茶褐色で頸部の沈線は深く幅広い。５は小型甕で、外面頸部にはオサエが残る。外面はヨコハケで、内面は器面剥落。器壁が厚い。外面は暗灰褐色に変色しているが、内面には変色がなく、煮沸されているかわからない。６は器壁が厚い甕で、口唇部はナデで平坦にされている。外面はナデでハケはなく、内面もナデのみ。外面から内面口縁部まで暗灰褐色に変色しており、頸部のみ本来の明黄灰色を呈するので煮沸使用されている。７は小型甕で、外面のハケが浅い。外面から内面口縁部まで暗褐色に変色しているので、内蓋で煮沸使用されたとわかる。８は大型の甕で、口縁下の突帯の上側はナデ調整で窪んでいる。器面は摩滅しており調整不明。内外黄灰色を呈する。９は器壁が薄く、突帯が尖る。外面ハケ内面ナデ後ミガキで煮沸使用の痕跡がないので鉢だろう。10は器面が摩滅しており、調整不明

で、刻み目は不鮮明。褐色パミスを含む軟質で粗放な特徴的な胎土である。11は刻目突帯甕で、小片のため反転復元できないが小型器種であろう。突帯には刻目がなく、内外面に目の粗いハケが入る。内面黄橙色。12は刻目突帯甕で、刻目が突出し小さな刻み目が浅く入る。黄灰色で褐色パミスを含む軟質で粗放な特徴的な胎土である。13は器面摩滅で調整不明。内外暗茶橙色を呈する。14は口縁部に歪みがあり、小片のため傾き不確実。突帯が突出しており、刻み目は幅広く斜めに入る。



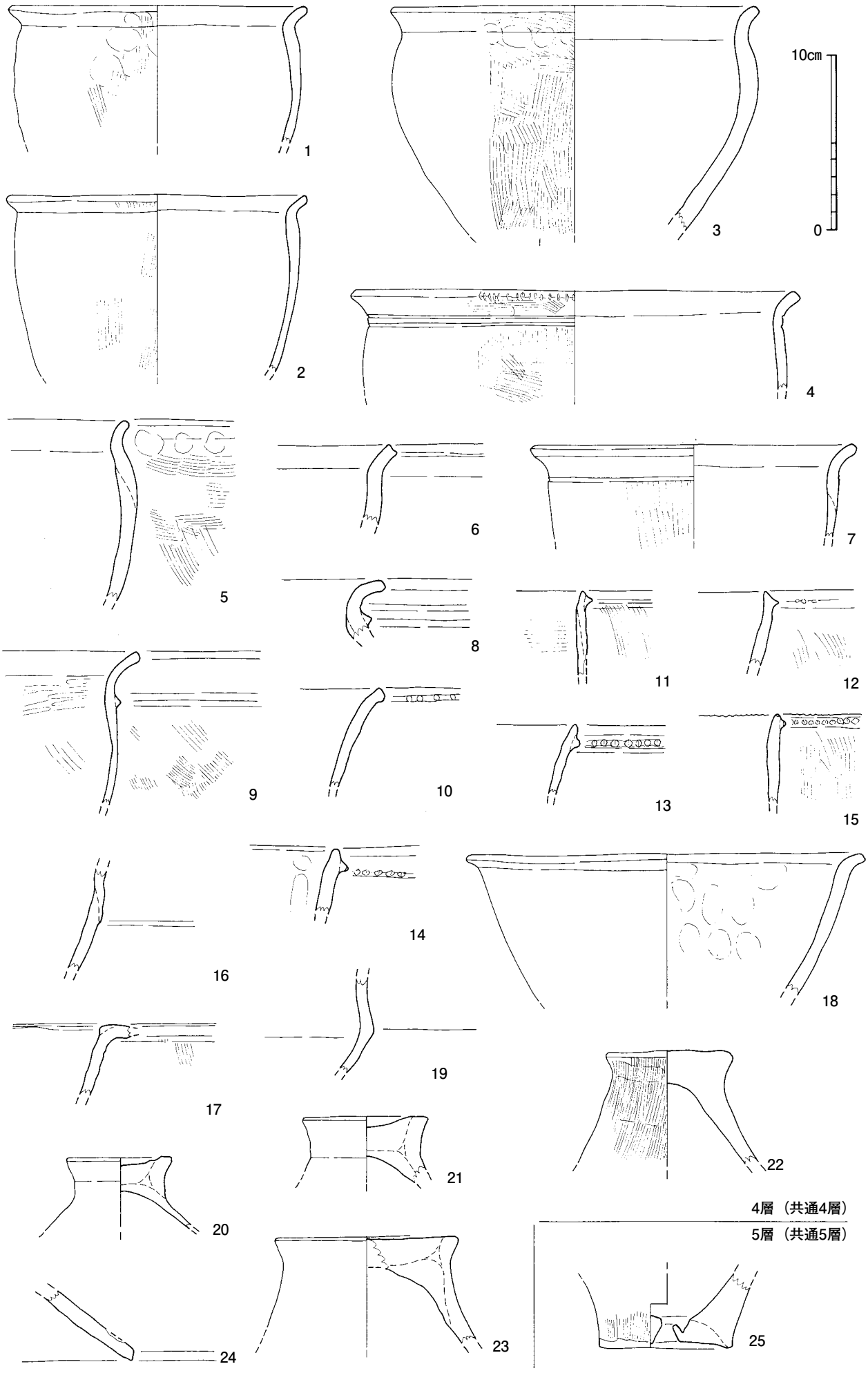
第126図　１区３号溝11･12区間、12区出土土器実測図１（1/3）



第127図　１区３号溝12区出土土器実測図２（３は1/4、他は1/3）

小型器種だが歪があるため反転復元できない。外面は赤変し、外面口縁部から内面は黒化しているので、煮沸使用されている。15は口唇部にも刻み目が入る。器面摩滅しているが、外面タテハケで、内外黄橙灰色で褐色パミスを多く含む。16は有段甕の肩部で、段は肥厚ではなく削り出しによるもの。内外ナデで、外面は茶褐色、内面黄灰色で煮沸使用の痕跡なし。胎土は比較的精良。17は器面摩滅が著しいが、外面はタテハケ。小片のため反転復元できないが、径が大きく体部の湾曲が小さいことから高杯とみられる。暗茶灰褐色だが、一部に茶褐色部分があるので焼成不良であろう。18は高杯か鉢で、外面は器面摩滅だが、内面は器面が残っている。外面は変色しているが、内面は変色なく明黄橙色を呈する。19は肩が屈曲する鉢で、黄灰色の色調。器面は摩滅で調整不明。20･21は蓋で､20は外面がにぶい暗灰褐色に変色しているが、内面は黄灰色である。器面摩滅で調整不明。21は積み上げ部で欠損しているので積み上げ方法がよくわかる。茶灰褐色を呈し、粗放でざらつき特徴的な胎土。22は外面にタテハケが残り、内面が器面剥落している。内外にぶい暗黄灰色で変色がないので蓋であろう。天井部完存のため積み上げ方法不明。23は内外器面が剥落しており、調整不明。外底と内底は暗灰褐色に変色しており、外面胴部は赤褐色なので、甕であろう。砂粒を多く含む。24は蓋で、裾部内面は黒斑が見られる。内面黄橙灰色で変色がないが、外面はにぶい淡暗灰褐色で器面摩滅が著しい。

25は５層出土の甕の底部で、外面タテハケ、内面器面摩滅。面外黄橙色で煮沸使用されていな



第128図　1区3号溝12区出土土器実測図3（1/3）

い。底部に外面から穿孔された孔と内面から穿孔されて貫通していない凹みがある。

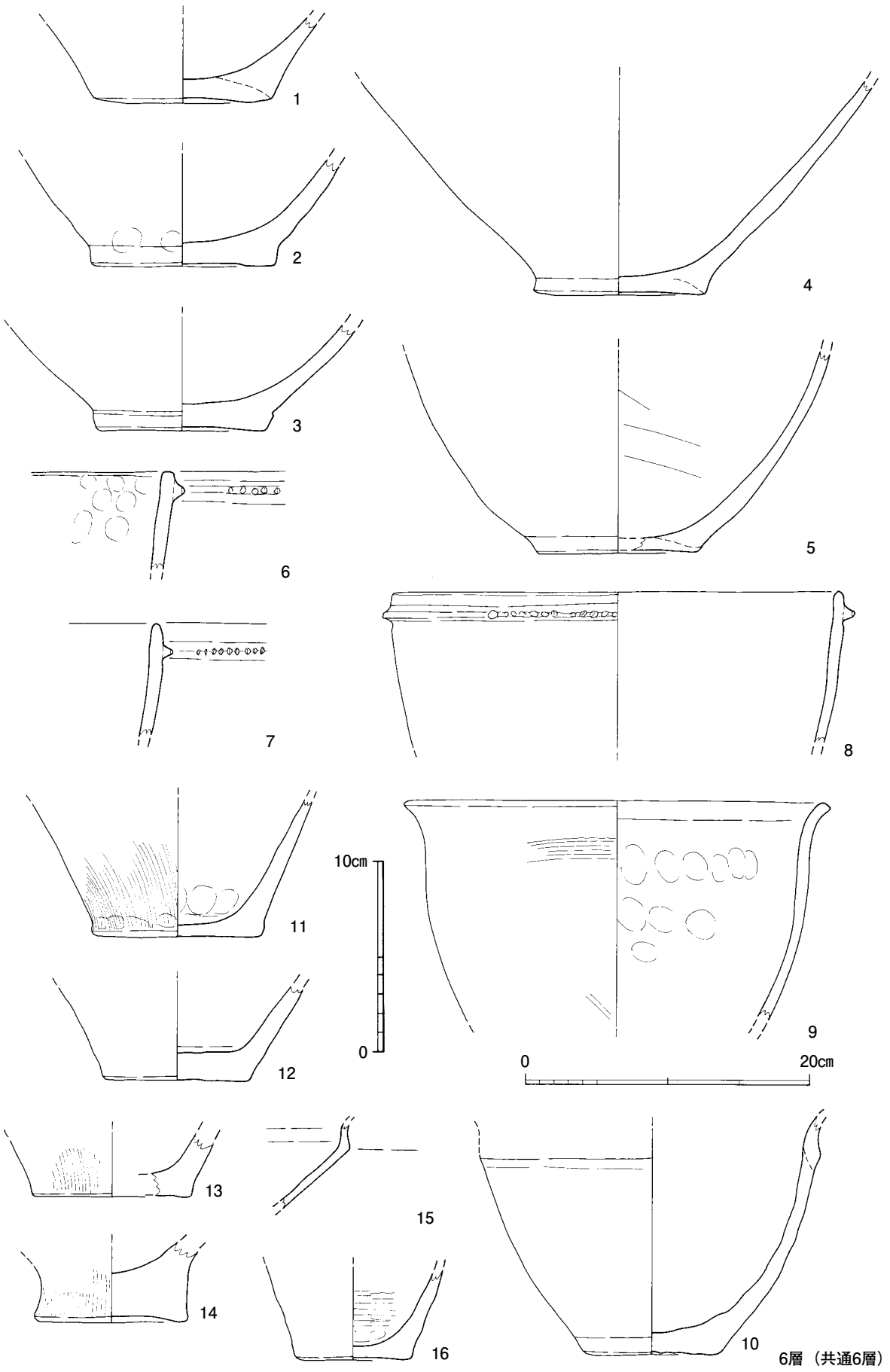
第129図は６層出土で、１は壺の底部で、内外器面摩滅で調整不明。黄橙色で変色なし。外面胴下位から底部に大きな黒斑がある。胎土は比較的精良。２は壺の底部で、内外面摩滅で調整不明。黄橙色で変色なし。底部の積み上げ痕は摩滅のため不明瞭。３は壺の底部で、底部と胴部の間に明瞭な段がつく。内外丁寧なナデ。橙褐色で変色なし。底部完存で積み上げ方法不明。４は壺の底部で内外ナデ。内外黄橙色で変色なし。内面は器面摩滅著しい。５は壺で、内外ナデ。内面はナデ工具の工具痕が残る。橙褐色から黄橙色で、胴下位に黒斑が入る。６は砲弾形刻目突帯甕で、刻み目は残りが悪く不明瞭。器面摩滅が著しく、内面のオサエが目立つ。内外黄橙褐色で、使用変色は見られない。７は砲弾形刻目突帯甕で、口縁部の歪みが大きく反転復元できない。刻み目は残りが悪く不明瞭。器面摩滅が著しいが、外面はナデでハケは見られない。内外口縁部は黄橙色で、突帯より下が変色しているので、煮沸使用されている。８は砲弾形刻目突帯甕で、突帯は下位の接合部の調整が粗く、刻み目は残りが悪く不明瞭だが、小さく浅く間隔が狭い。器面摩滅が著しいが、外面はナデでハケは見られない。内外黒灰褐色なのは部分的に橙褐色が残っていることから、焼成不良によるものだが使用変色もあるだろう。９は如意形口縁甕で、外面橙褐色。内面は黄橙色で変色なし。内面の黒色は黒斑。器面摩滅しているが、内外ナデだろう。10は有段甕で、器面の摩滅が著しく不鮮明だが、口縁部が外反し、口縁下の段は突帯状に肥厚するものである。内外にぶい黄灰色。11は外面がにぶい灰褐色だが、煮沸変色ではない。内面の器面剥落も底部は残っているので、煮沸使用されていない甕か。12は甕の底部で、外面はハケがなくナデのみ。内面は器面が摩滅している。外面は暗灰褐色で、赤化しているので煮沸使用されている。底部完存で積み上げ方法不明。13は外面にハケが残り、内面は摩滅している。外面は明赤橙色を呈しているが、煤の付着はない。煮沸使用されていない甕か。14は外面端までハケが入り、内面はナデで、器面が残っている。内外赤褐色を呈して変色もないので、鉢の底部であろう。15は裾が小さく開く鉢で、口縁部は外傾する。器面摩滅で調整不明。内外黄橙色を呈する。16は小型器種で外面は赤変している部分があるが、内面は変色がほとんどなく、器面も残っている。外底の中央部だけが黒変しておらず、使用方法不明。

第130図は７層出土で、１は壺の肩部で、内外ナデで、肩部に１本単位の沈線による重弧文が施される。橙褐色で変色なし。２は壺の底部で、内外器面剥落で調整不明。底部完存で積み上げ方法不明。橙褐色で変色なく、外面に黒斑あり。３は甕で、口縁部は粘土帯を積み上げて内傾させている。外面タテハケ、内面ナデで、器面の残りは悪い。内外にぶい黄橙褐色を呈し、胴下位には赤化しているので煮沸使用されている。器壁が薄く粗放な特徴的な胎土なので搬入品であろう。底部完存のため積み上げ方法不明。４は甕の底部で、内外面は器面が摩滅しているが、外面はハケがなくナデのみだろう。内外面は黄橙色で、変色がないので煮沸使用されていない。

12･13区間（131図）

１は２層から出土した山陰系の台付き装飾壺だろうか。器面摩滅が著しい。本来黄灰白色を呈するが、器面が失われて胎土の黒灰色が斑に露出している。外面口縁部から肩部まで凹線が入る。焼成不良なため胎土が不明瞭だが、搬入品であろう。

２は3a層出土の壺の肩部で、浅い沈線で縦横の複線が施されている。内面は器面摩滅しており調整不明。外面橙褐色を呈し、内面が灰褐色なのは焼成不良のためである。



第129図　１区３号溝12区出土土器実測図４（5･9は1/4、他は1/3）

３は５層出土で内面に目の細かい丁寧なハケが入り、外面は器面がほとんど失われているがナデだろう。内面は胴下位から底部以外は器面が剥落しており器壁が薄くなっているので、器面の剥落を防ぐものがあったことがわかる。それにより内面が変色したもので、煮沸使用によるものではないだろう。外面の一部が赤変しているが、片側にだけ見られるので２次的なものであって、壺とするべきだろう。底部完存で積み上げ方法不明。４は甕の底部で、内面ナデ、外面タテハケ。外面暗灰茶褐色で赤化しているが、内面は黄灰色で変色がない。煮沸使用頻度の少ないものか。底部完存で積み上げ方法不明。５は反転復元できない小片だが、大型品なので高杯であろう。内外器面摩滅で調整不明。胎土は橙褐色だが、器面は黄灰白色を呈する。

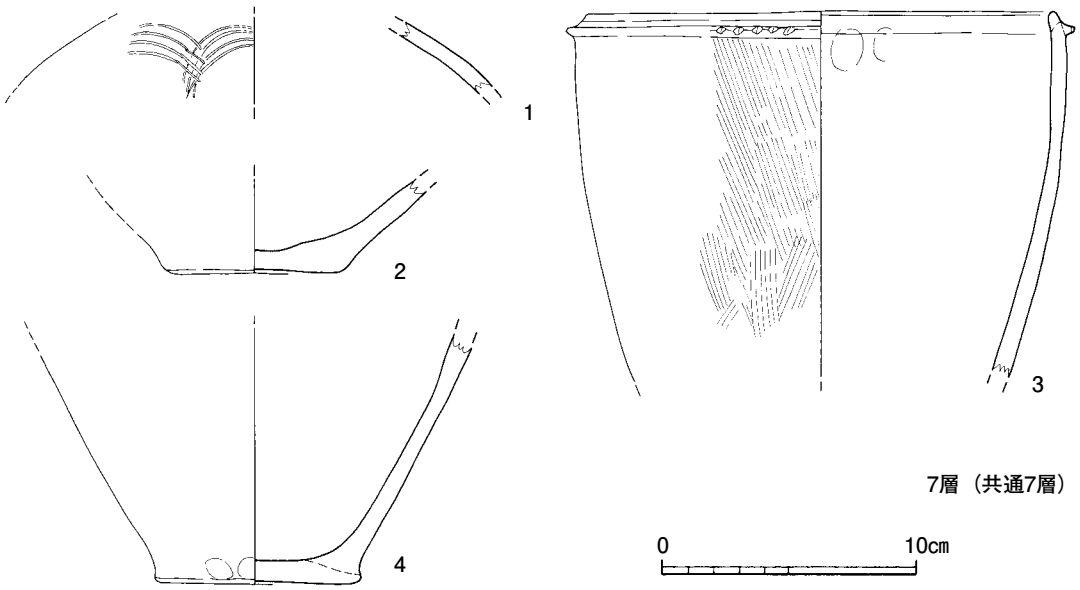
6･7は６層出土で、６は壺の底部で、内外器面摩滅で調整不明。橙褐色で変色なく、胴下位と底部に黒斑あり。底部完存で積み上げ方法不明。７は外反する甕で口縁下の突帯の刻み目の有無は摩滅のため不明。外面黄橙色、内面暗黄橙色で変色なし。

13区（図版55、第132図）

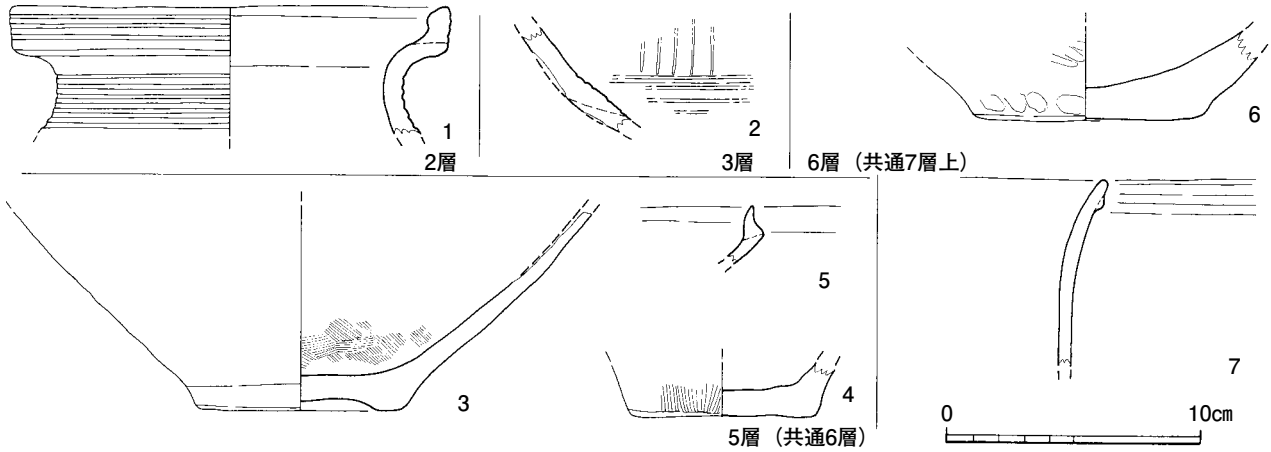
１は2a層出土で、北壁から出土したもので、口縁部が短く外傾する。外面胴部が直立気味に珍しい器形。口唇部はナデで平坦になりその粘土が端部によって膨らみをもつ。頸部の突帯の上下はヨコナデでやや窪む。内面は口縁部が赤化し、胴部はにぶい灰褐色に変色する。

２～６は３層出土で、２は壺の口縁部で、肥厚部はない。外面は目の粗いタテハケ、内面ナデ。頸部との接合部で破損している。内外面橙褐色を呈し、変色なし。3･4は砲弾形刻目突帯甕で、刻み目は、４は間隔が狭く、３は小さい。器面摩滅が著しいが、外面はナデでハケは見られない。３は外面タテハケが見られる内外口縁部は黄橙色で煮沸使用の有無は不明。５は有段甕で、内外橙褐色で変色がないので煮沸使用されていない。外面ナデ、内面ハケで積み上げ痕が残る。６は外面が赤変しており、内面の器面に変色がないので甕だろう。内外面器面摩滅で、外面はオサエしか見られない。本来は橙茶褐色を呈する。

７は５層出土の屈曲如意形甕で、外面に目の細かい丁寧なハケが入り、屈曲以下の外面と内面は



第130図　１区３号溝12区出土土器実測図５（1/3）



第131図　１区３号溝12･13区間出土土器実測図（1/3）

器面がほとんど失われている。外面は特に器面が剥落しており器壁が薄くなっており段に刻み目があったか不明。内外胎土の黄橙色だが、外面の器面の残っているところは暗灰褐色なので、煮沸使用されたものだろう。胎土は褐色パミスの混入。

８は６層出土の壺の底部で、4･5層出土の破片と接合したが、６層が最下層なので、６層に属するものとした。器面は内外摩滅しており、調整不明。底部の器壁が薄いのは底面が摩耗したためか。積み上げ痕はやや不明瞭。

２区17号溝

１区（第135図）

135図１・２は２b層出土で、１は壺の肩部で、器面が剥落しているが、突帯の基部と１条の沈線だけが残っていた。内外黄橙色。２は甕の底部で、外面はタテハケが端部まで達し、このハケ端部の窪みが底部裾が外に張り出す原因となっている。内面は一部だけが残っている。外面橙色で、内面暗茶褐色なので煮沸使用されている。

３は４層出土の屈曲如意形甕で、胴部に刻目突帯が入る。屈曲部と突帯の接合痕は観察できなかった。外面は間隔が広く浅いタテハケ、内面はナデで、屈曲部にはオサエ列がある。内外面黄褐色で変色なし。

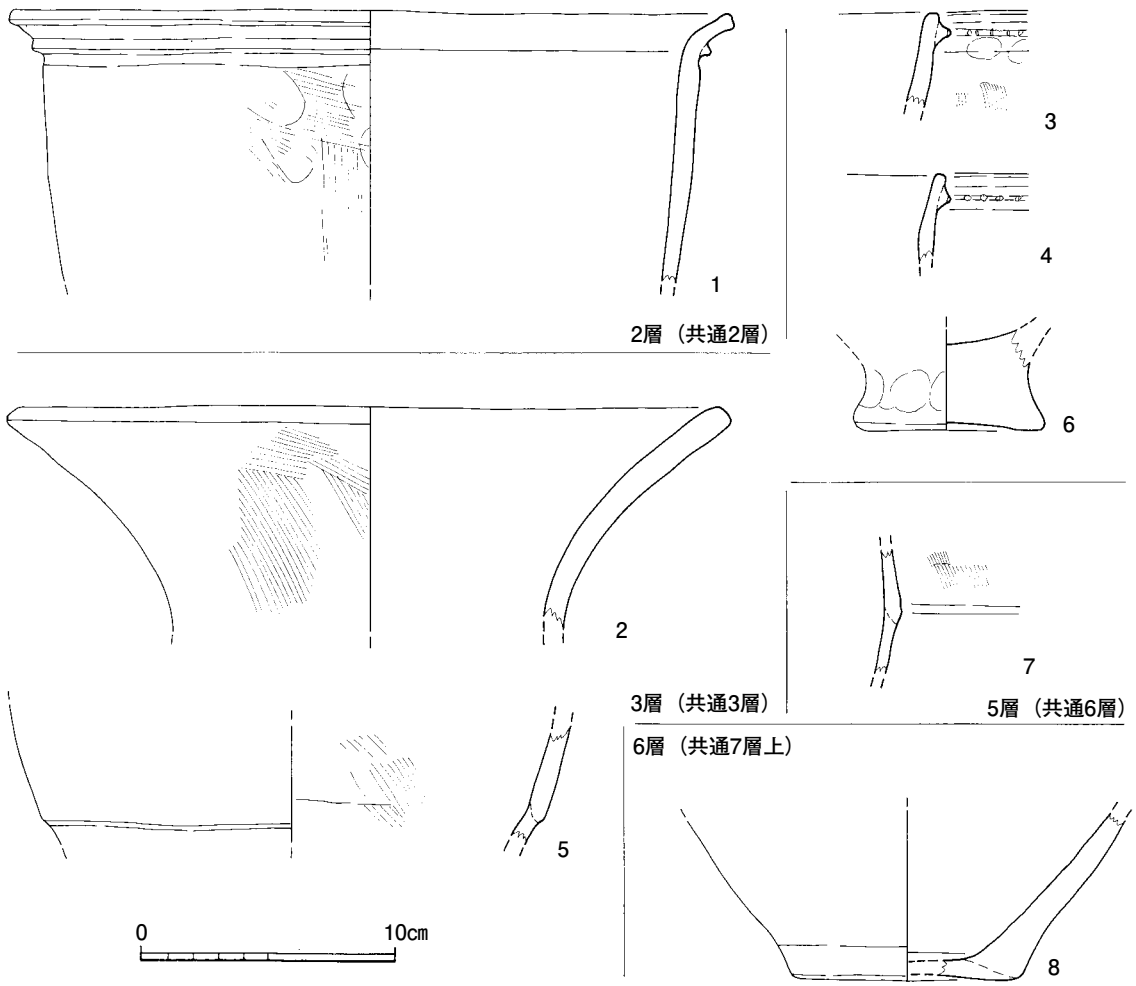
１・２区間（第135図）

４は1b層出土の壺の胴部で、１条の突帯が貼り付けられている。器面摩滅で調整不明。外面黄橙色、内面にぶい黄灰色で砂粒多い。

５は2a層出土の小型壺肩部で、小片から反転復元しているので径は不正確。複線鋸歯文と見られるが斜線は痕跡しか残っていないので条数はわからない。器面は残っていないため調整不明。外面黄橙色、内面黄灰白色。胎土はやや軟質でカクセン石、白雲母を多く含む。

６は3a層出土の如意形口縁甕の口縁部で、口唇部に上方から幅の広い刺突が入る。内外にぶい黄灰色で変色がない。

7･8は６層出土で、７は６層と７層出土片が接合した小型の甕で口縁部が内傾し、外面に刻目突帯が貼り付けられている。突帯は歪んでおり下垂状になっている部分がある。外面ナデ、内面は器



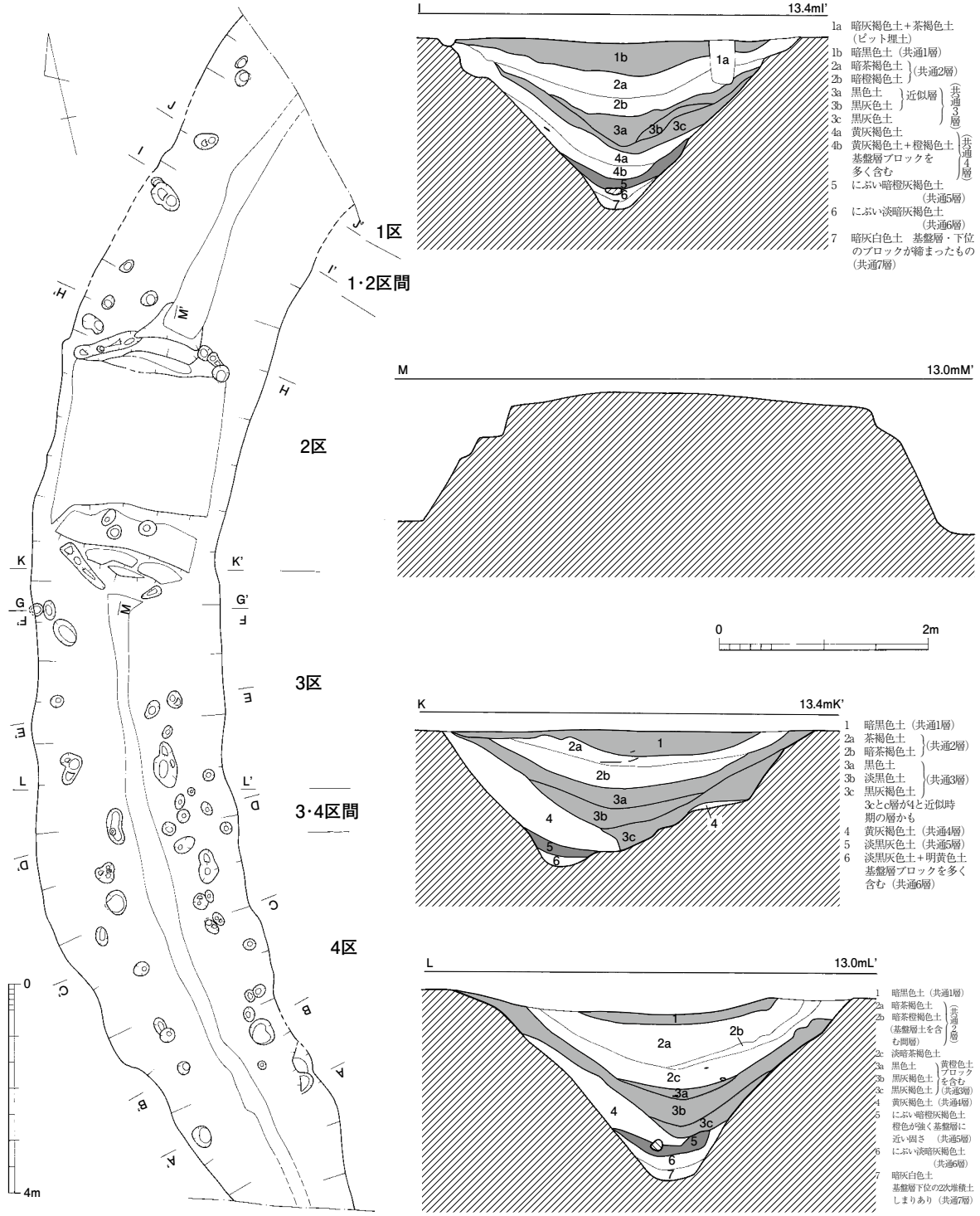
第132図　１区３号溝13区出土土器実測図（1/3）

面摩滅で不明。内外黄橙色で変色がないので煮沸使用されてない。砂粒多く含む。刻目は幅が広く浅い。８は７に近い場所から出土した甕の底部で、同一個体にしては径が異なる。端だけで接地してわずかに上底状になっている。器面が摩滅しているため調整不明。砂粒多く含む。外面の胴部と底部の接合部はオサエ跡をナデ消している。色調は黄橙色から橙色を呈する。

９は７層出土で小型の壺が鉢の底部で、端だけが接地して上げ底状になる。

２区（第136･137図）

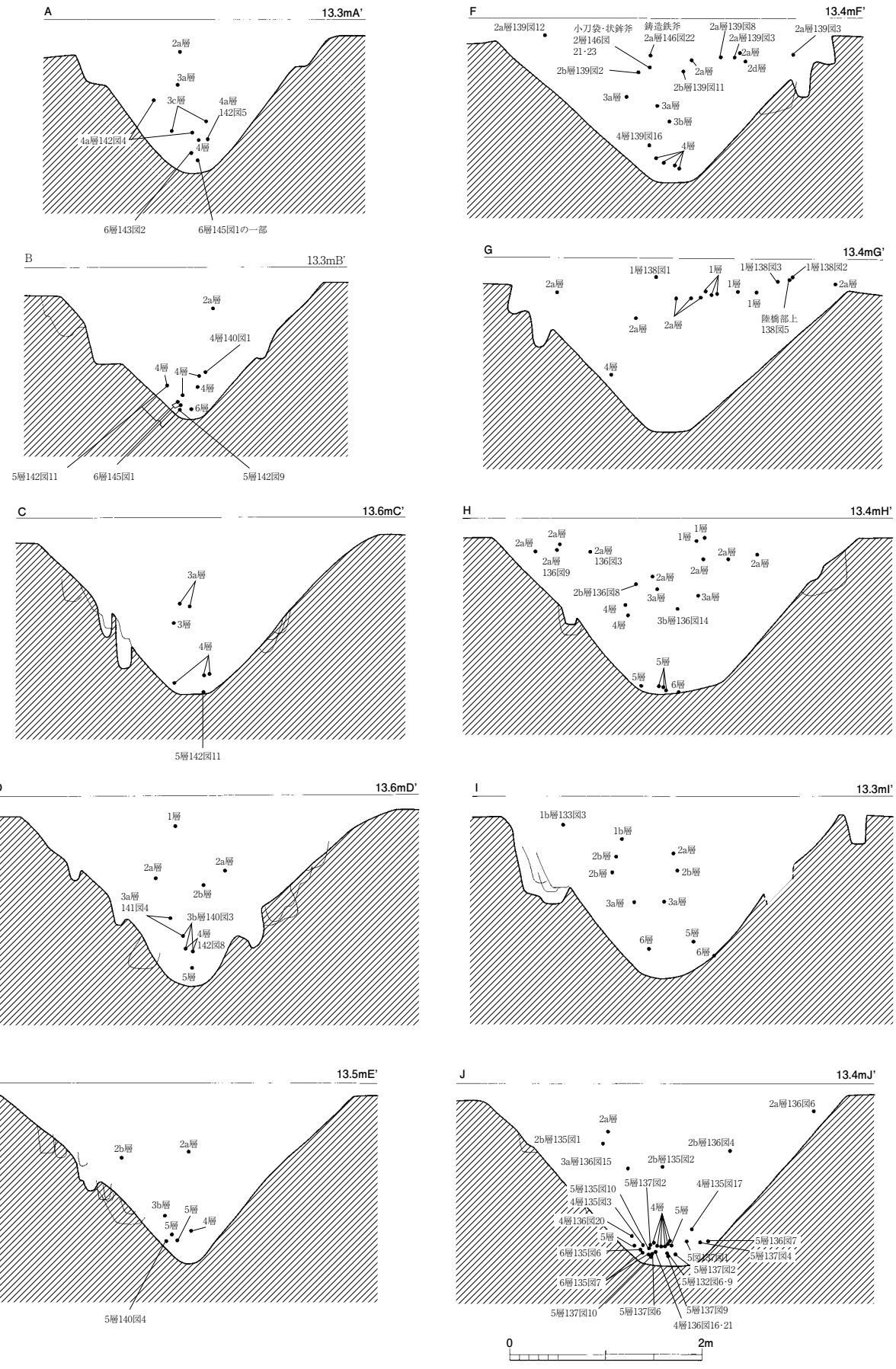
第136図１～10は２層出土で、１は2a層出土の小型壺、貝殻腹縁刺突による列点文が２条あり、その間は無文。内外にぶい黄灰色で変色なし。器面摩滅で調整不明。器壁が厚く、内面はオサエ後未調整なのは頸が小さいため内面胴部まで手が届かなかったためだろう。白色粒子を多く含むが、比較的精良。２は2a層出土の壺の肩部片で、貝殻腹縁による羽状文と重弧文が入る。内外黄橙色。３は2a層出土の小型壺の底部だろう。粘土板を貼り付けている。４は2b層出土の壺の底部で、内面は器面剥落、外底は縁だけで接地する上げ底状。５は2a層出土の壺か鉢の底部で外面は器面剥落だが、内面がケズリ状ナデ。内外淡暗灰褐色を呈するが、焼成時の変色だろう。６は2a上層出土の小型甕の口縁部で口唇部は内面側が尖る。外面黒斑、内面黄橙色。砂粒多い。７は2b層出土の甕の口縁部で外面口縁下に長い刻み目と２条沈線が入る。内外黄橙色を呈する。８は鉢で脚がつくタ



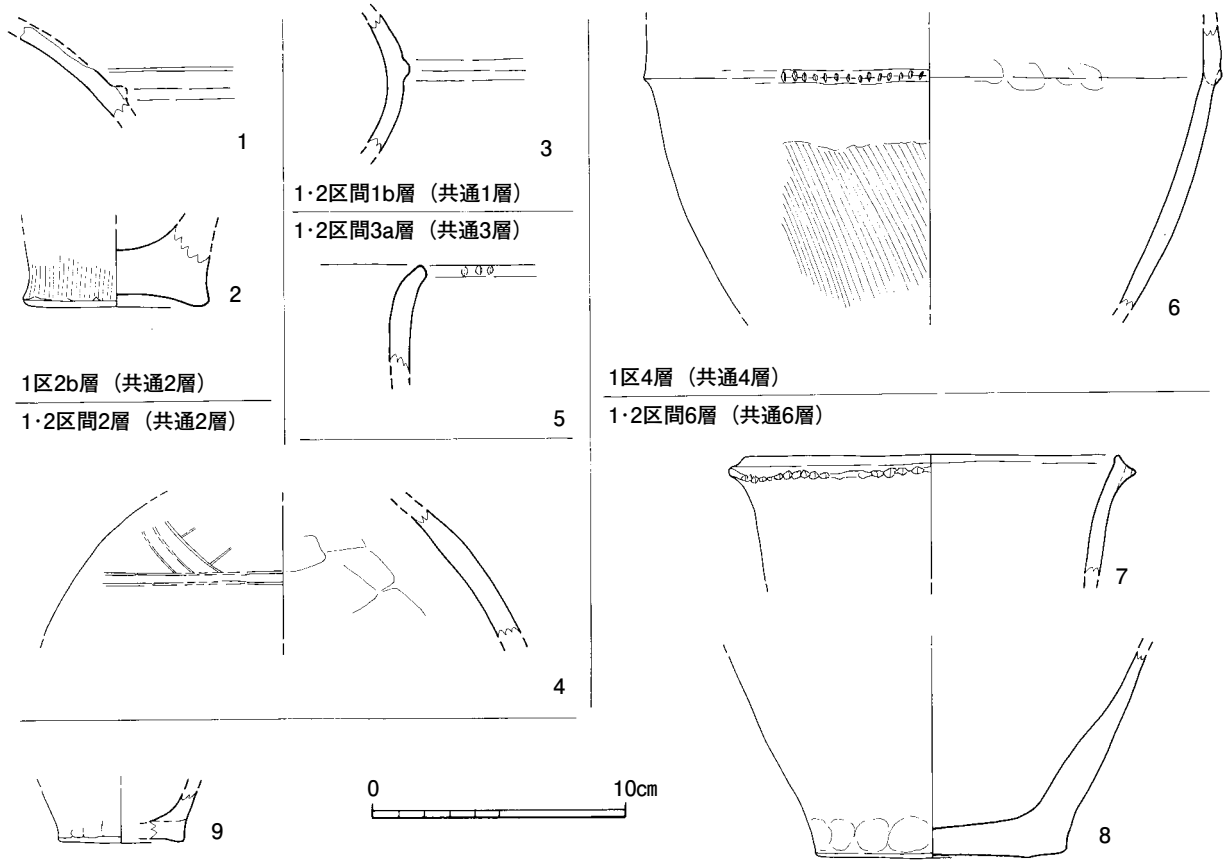
第133図　２区17号溝実測図（1/120・1/60）

イプであろう。内外ナデで、口縁部はヨコナデ。外面は橙褐色、内面は黄白色であることから伏せ焼きされたものか。９は2a上層出土の甕蓋で、天井部には膨らみがある。外面は目の細かいハケが残るが、内面は剥落が著しい。外面橙褐色、内面にぶい暗灰褐色なので煮沸使用されている。10は小型の甕蓋で、裾部が黒く変色しているのは伏せ焼きのためだろう。

11 ～ 15は３層出土で、11は壺の胴部片で、貝殻腹縁による文様が入る。小片のため上下・傾き不確実。黄橙色を呈する。12は大型壺の胴部片で、断面台形の突帯が貼り付けられている。器面剥落に伴い接合部の調整が失われている。大型品の小片であるため傾きは不確実。内外にぶい暗橙褐



第134図　２区17号溝遺物出土位置図（1/60）

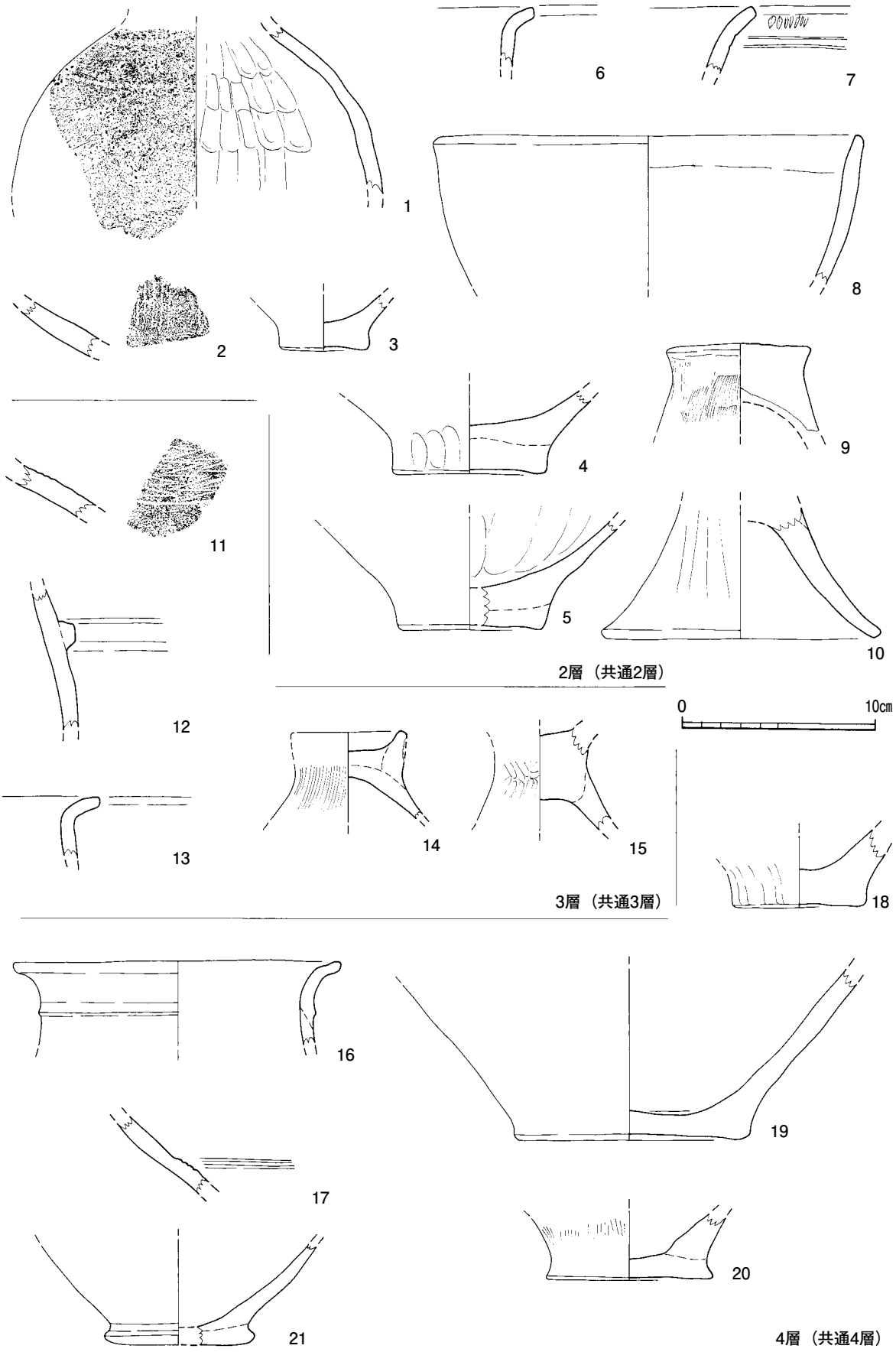


第135図　２区17号溝１、1・2区間出土土器実測図（1/3）

色。13は甕の口縁部で赤色顔料が付着する可能性がある。内外黄橙色。14は3a層出土の蓋の天井部で、輪状の尖ったつまみがつく。外面タテハケ、内面ナデ。内外橙色で、変色なし。15は高杯の脚部で、外面のミガキ部分には光沢がある。内面も丁寧なナデ。内外黄橙色で変色なし。

16 ～ 21は４層出土で、16は壺の口縁部で、口縁下に削り出し段がつく。器面摩滅で調整不明。17は壺の肩部で、削り出しの段の下に３条の沈線が入る。内外黄橙色を呈する。18は器壁の厚い底部で、壺であろう。底部は完存しており、積み上げ痕は確認できない。外底は中央部がわずかに上がっている。内外オサエ痕が残るが、ナデ仕上げされている。内外にぶい暗黄橙灰色を呈し、変色なし。19は壺の底部で、中央部がやや上げ底状になる。器面摩滅で調整不明。内面暗灰褐色なので頸が締まる器形だろう。19と４区４層第146図８は近接して出土したが別個体である。20は縁が尖る底部で、内外変色がなく、傾きが大きいので壺か鉢の底部だろう。半分残存しており、断面で接合痕が見え、粘土板から積み上げている。外面は胴部と底部の接合部はオサエで、ヨコナデで仕上げている。このためタテハケの下端はナデ消されている。内外にぶい黄橙色から橙色で変色なし。比較的精良で堅緻。21は壺の底部で、16に隣接して出土したので同一個体の可能性あり。底部は中央部の粘土の端を肥厚して端部を張り出している。内面に黒灰色の焼成不良部があるので頸が締まった器形であろう。

第137図１～ 10は５層出土で、１は壺の口縁部から胴部片で、外面は丁寧なミガキ、内面は器面剥落でケズリ状のナデの単位が見える程度しか残っていない。線刻による２本単位の細い沈線で頸部に縦線が入り、頸部から肩部に３本の横線の間に複線鋸歯文が入る。文様をもつ胴部上の破片と下の破片が接合していないため、複線鋸歯文部分は不確実だが、２段と想定した。その下に２本線



第136図　２区17号溝２区出土土器実測図1（1/3）

による弧文が入る。外面は暗茶褐色、内面は暗黒灰色なのは焼成不良のためである。４層出土品の胴部片と接合したが、４層出土品は小片なので、本来は５層に属するだろう。２は大型壺の口縁部か頸部片で、４層出土片と接合した。内外ナデ。口縁部は段がない。頸部は段の下に細線の１条沈線が入る。３は大型壺の頸部で、１条の凹線の下に細い沈線が入る。図上接合した肩部片は歪んでいるため傾き不確実。内外にぶい黄橙色を呈する。内面はナデ、外面は器面摩滅で調整不明。４は刻目突帯文の小型甕で、口唇部尖る。外面タテハケで、内面は器面摩滅のため調整不明。砂粒多く、内外黄橙色を呈するが本来は暗茶褐色であったものと見られる。煮沸使用の有無については不明である。５は如意状口縁に刻み目が入る小型甕で、口唇部は細い刻み目が端面の上から下まで入るので口唇部が刻みの影響を受けて小さく波打っている。内外ナデのみ。外面は煤が付着しており本来の黄橙色だが、変色している。内面口縁部の色調が本来の色調を残すことから、煮沸使用されている。６は刻目突帯甕で、口縁のすぐ下に突帯が貼り付けられている口縁下突出甕にあたる。器面が摩滅しているため調整や、刻み目の詳細は不明。砂粒多く、胎土の黄橙色が露出しているが、暗茶灰褐色の表面が部分的に残っている。３区3b層の第139図15と接合した。７は甕の胴部から底部片で、底部は３／４が残る。外底面は平坦である。内面は器面が失われているが、外面は縦方向のミガキ。内外底部と胴部の間にオサエ列があり、ナデ仕上げしていない。底部からの積み上げ痕は不明瞭。内面はにぶい黄灰色、外面は黄灰色から黄橙色で、黒斑がある。８は甕の底部で、小さな上げ底状を呈する。外面の縦方向の調整痕はハケのように入るが間隔が広くまばらなのでナデの工具痕であろう。内外橙褐色で、煮沸使用の痕跡はない。９は杯で、内外オサエ後ナデ。内外橙褐色で、黒斑が多い。砂粒を多く含む。10は完形の杯で、外面に大きなオサエ痕が残り、歪み大きい。底部は上げ底で、内面は器面剥落で調整不明。内外黄灰白色で変色なし。

11は７層出土の小型の壺か鉢の底部で、接合部が見られないが粘土板接合であろう。外面は暗茶灰褐色を呈し、内面は胎土の暗黄灰色が露出している。

２・３区間（第138図）

１～３は１層出土で、１は大型壺の口縁部で、外面口縁下に段の名残がある。内面ミガキで、外面ナデ。にぶい橙褐色を呈する。２は壺の底部で、器面剥落のため調整不明。砂粒多い。上げ底で、外底部から穿孔あり。３は甕の底部で、器面の残りが良い。外面はタテハケ、内面はナデ。内外黄橙色で変色なし。砂粒多い。

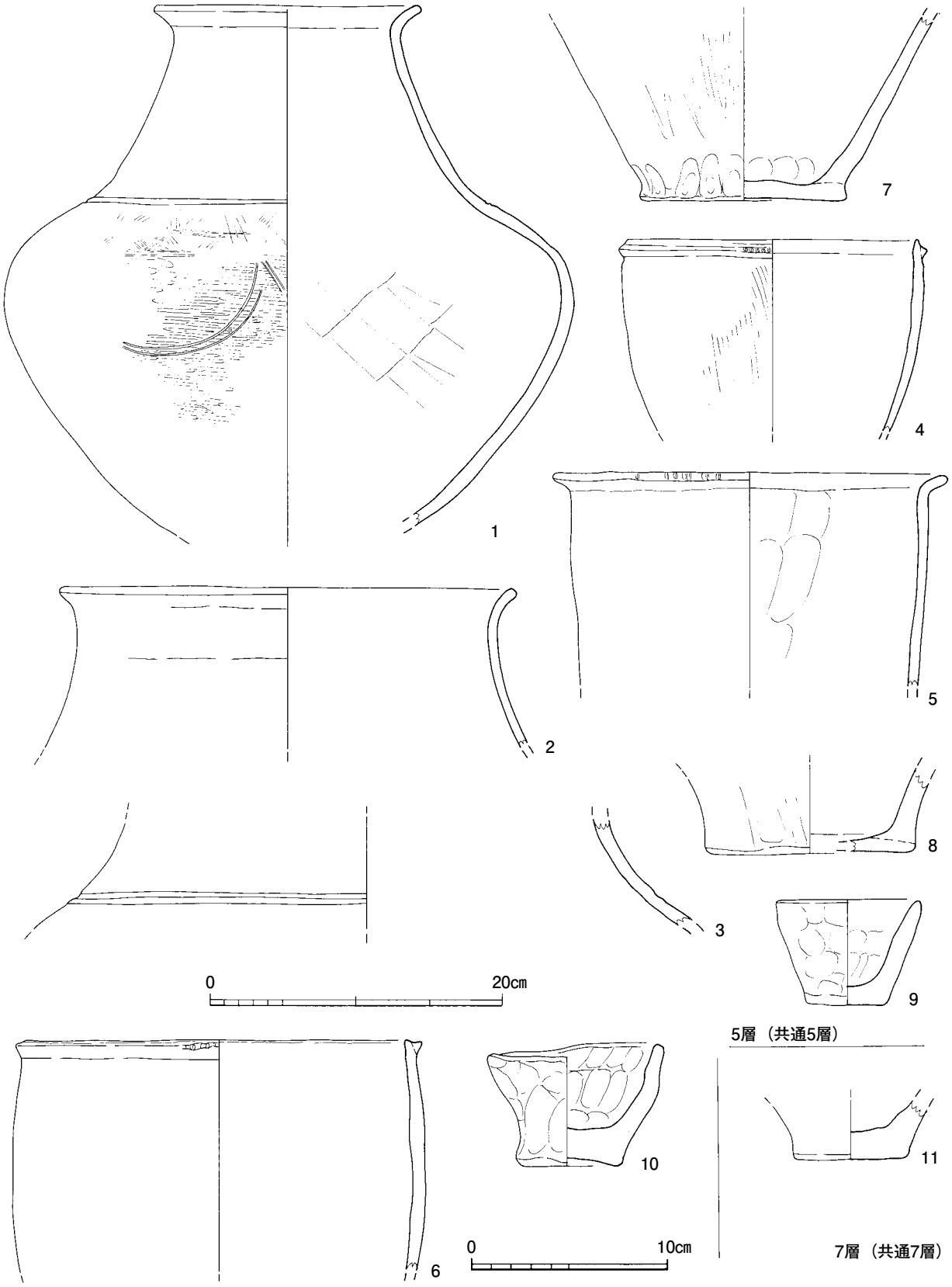
４は２層出土の鉢の頸部で、外面に積み上げ痕が残る。内外接合部にヨコハケを施した後ナデ仕上げ。にぶい暗茶褐色を呈する。

５は陸橋上出土の壺か鉢の底部で、完存しており底部外端が尖る。この端部で接地し、わずかながら上げ底状になる。接合痕は不明瞭。外面はナデのみ、内面は器面剥落で不明。外面はにぶい暗茶灰褐色を呈す。砂粒の混入多い。

３区（第139図）

１は１層出土の小壺蓋で外面ハケ、内面ナデ。裾部は摩滅しているので本来の形状がわからない。内外黄橙色を呈す。

２～14は２層出土で、２は2a層出土としているが、レベルから2b層とした。壺の口縁部で、内



第137図　２区17号溝２区出土土器実測図２（２～４は1/4、他は1/3）

外ミガキ。口縁外面側は小さく肥厚し、頸部はわずかに窪む。段の名残であろう。内外暗茶褐色で変色なし。３は2a層の大型壺の口縁部で、口縁部は内面側に肥厚しており、口唇部に幅の広い刻目が入る。器面は剥落しており調整不明。砂粒多く含む。４は2a層の有段壺の口縁部で、内面は積み上げ部が窪んでいる。器面はナデ。内外にぶい黄灰白色で変色なし。５は2a層の壺の頸部で断面三

角形で、刻目なし。内外頸部より上は変色がないことから、内容物の影響が外面にまで達していたことがわかる。６は南壁土層2a層中の壺の底部で、外面はナデ、内面は器面摩滅で調整不明。底部は中央部がやや上げ底状になる。７は2b層の胴部が膨らむ甕の口縁から胴部片で、外面はタテハケ、内面はナデ。口唇部をナデて平坦にしている。暗黒灰褐色を呈する。チョウ石の混入目立つ。小片で反転復元できないが、胴部径20㎝前後だろう。８は2a層出土で、頸部沈線は押し引き。外面は肩部以上と内面がにぶい黄橙灰色で、内外下位は暗灰褐色に変色しているので、煮沸使用されている。９は2b層で甕の底部で内外調整不明。内面黒灰色なので煮沸使用の可能性がある。外面はオサエ後ナデ仕上げ。粘土板から積み上げていると見られる。10は2a層で出土の鉢の口縁部で内外ミガキが入る。器壁が厚い。口縁部内面側はナデ窪み。内外黄橙色で、黒斑あり。11は2b層高杯の脚部で突帯が貼り付けられている。12は2a層の甕蓋で、天井部は膨らみがあり、中央の窪みは欠損によるものかもしれない。内面は茶灰褐色に変色しているので煮沸使用されている。外面は器面が摩滅して調整不明である。13は2a層の小型の甕蓋で、断面から天井部外縁は肥厚させている。外面はタテハケで底部はヨコナデ、内面はナデ。外面は暗灰褐色、内面は暗黒褐色を呈する。14は2a層の甕蓋で、天井部縁を肥厚している。天井部はやや窪む。胎土は砂粒多い。内外ナデで、内面灰黒褐色、外面橙色。

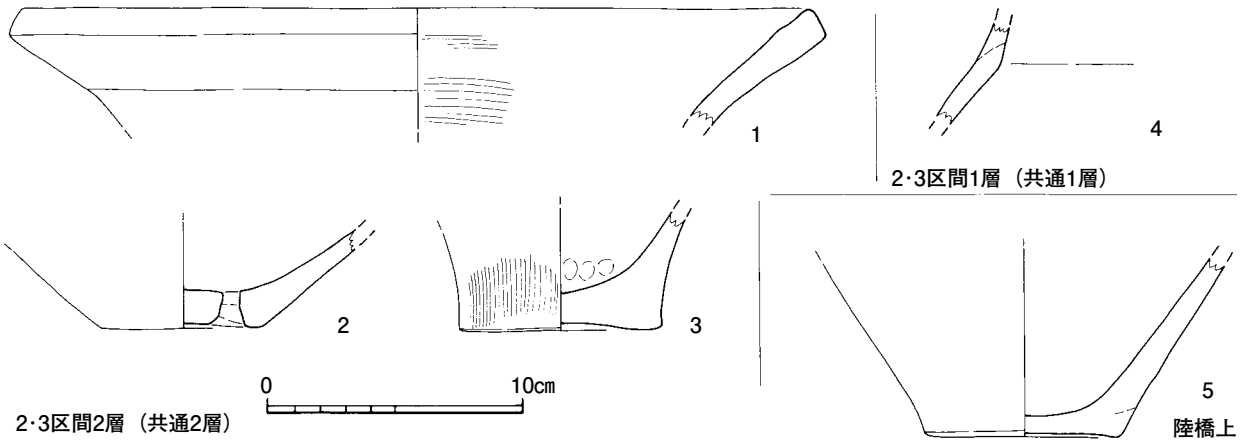
15は3b層出土の小型甕の口縁部で、外面の貼り付け突帯は突出する。刻み目はわずかに見られる。外面橙色、内面黄橙色で変色なし。３区2a層出土片と同一個体。

16は４層出土の壺か鉢の底部で、内面に積み上げ痕が残る。内面ナデで見込みは器面が摩滅している。外面は底部と胴部のオサエ痕がナデ消されている。外底は縁部だけで接して小さな上げ底を呈する。

３・４区間（第140図）

１は１層出土の甕の口縁部で、外面が肥厚して口唇部が平坦化している。器面摩滅で調整不明。内外黄橙色を呈する。

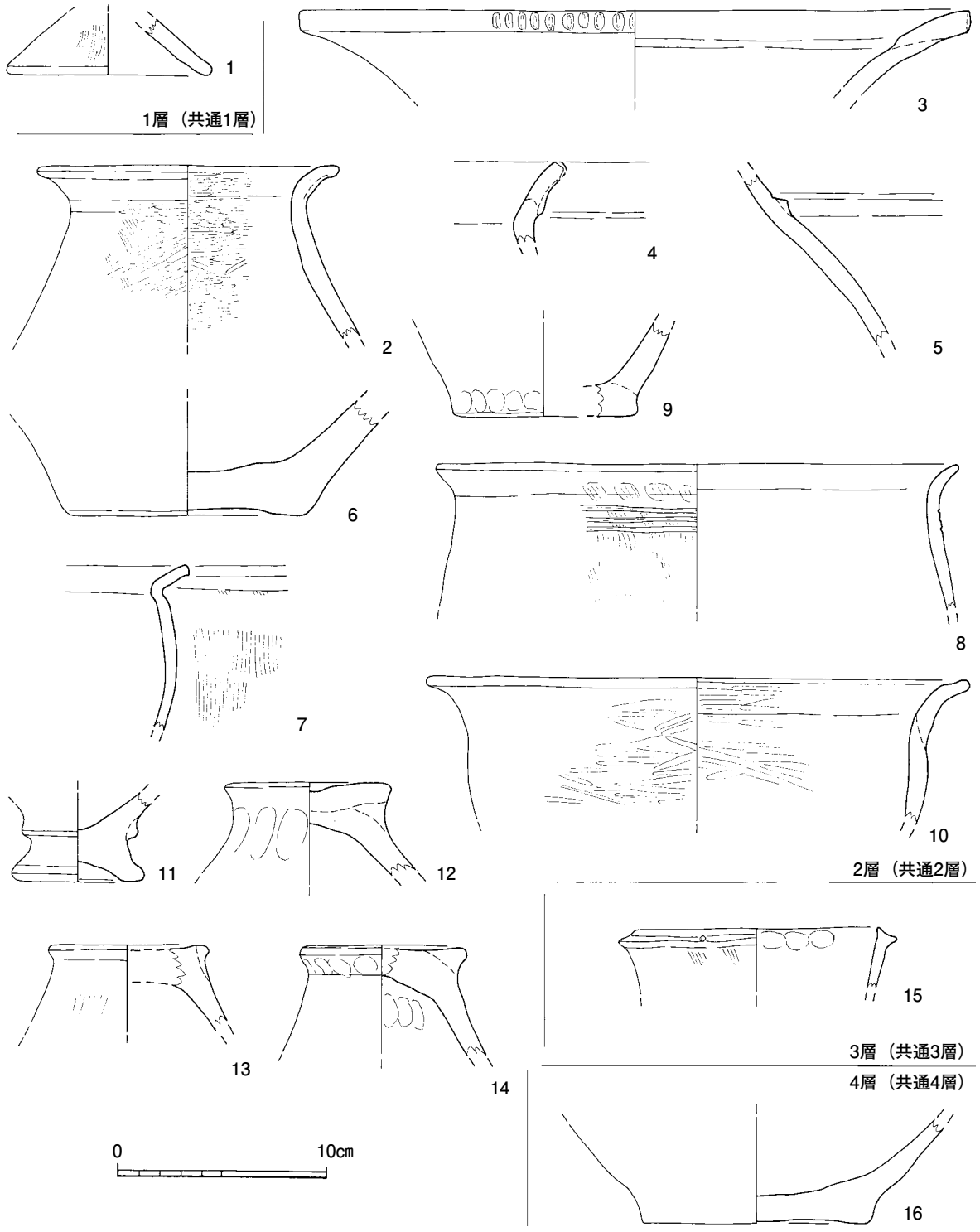
2･3は３層出土で、２は3a層で、刻目突帯甕である。体部が大きく開く器形で、口縁部は小さく内傾しており、屈曲部が院は小さな刻目突帯が貼り付けられ、内面にはオサエ痕が残る。内外口縁部は黄橙色で、それ以外は暗黄褐色に変色しているので煮沸使用されている。３は3c層出土の壺の



第138図　２区17号溝2･3区間、陸橋上出土土器実測図（1/3）

底部で、外面の沈線は細沈線なのか、工具傷なのかわからない。

4･5は５層出土で、小型甕の底部で、底部と胴部の接合部はナデ窪んでいる。外面は板状工具によるナデで、工具端部の痕跡が残る。外底部は端部が高台状に接地して小さな上げ底を呈する。外面橙褐色で、内面に変色が見られるので煮沸使用されている。５は５層と接合した。口縁部はやや歪みがあるが、ほぼ水平で底部も中央部が上がる小さな上げ底である。外面と内面上半は強く火を受けているが、内面底部は変色がないので、２次的なものだろうか。



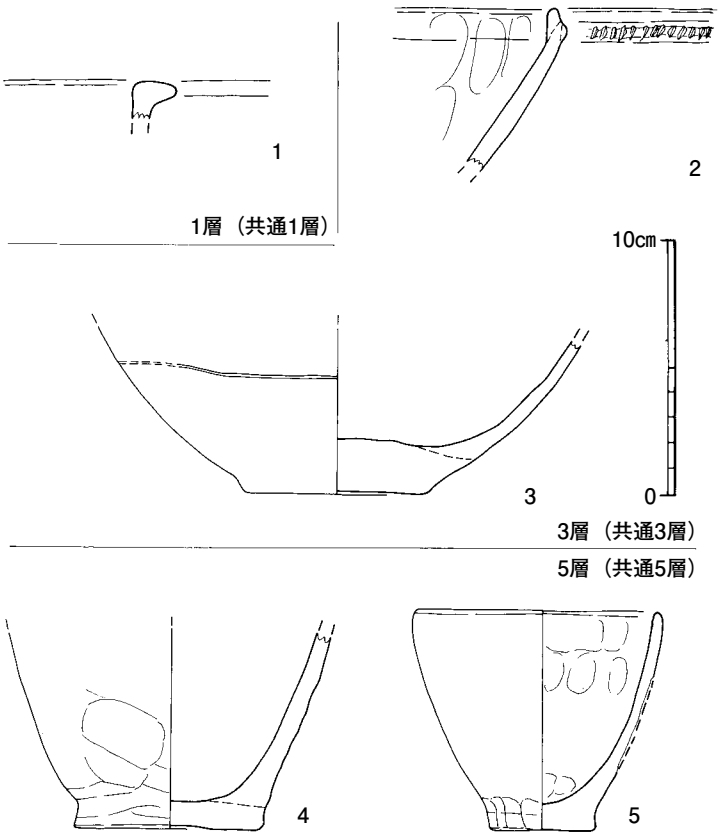
第139図　２区17号溝３区出土土器実測図（1/3）

４区（第141 ～ 143図）

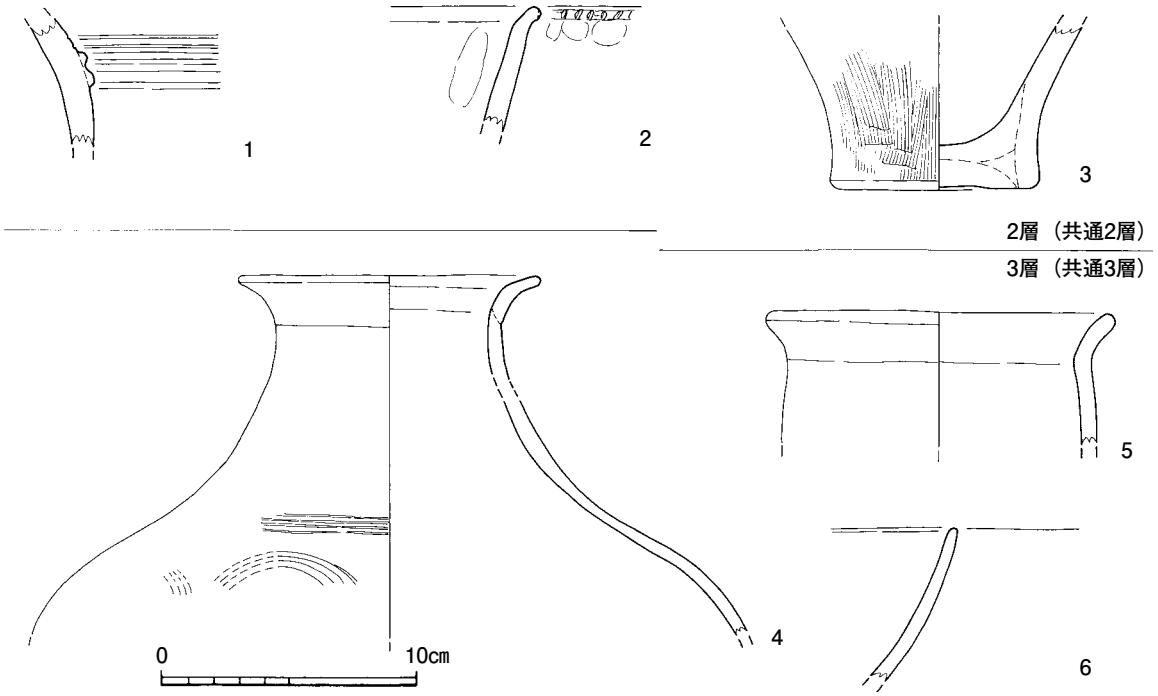
第141図１～３は２層出土で、１は2b層出土の壺の胴部片で、２条の突帯には刻み目はない。突帯上には貝殻腹縁刺突による条線が入る。外面はナデ。外黄橙灰色。２は如意形口縁甕で、口縁部に斜めに幅の狭い刺突が入る。外面は暗灰褐色だが、内面は黄橙色で変色がないので煮沸使用の有無は不明。３は2a層出土の甕の底部で、外面は丁寧なハケで、内面はナデ。器壁が厚く、外底は平底。外面は煤が付着している。赤変もあり、内面は暗灰褐色に変色しているので煮沸使用されている。砂粒を多く含む。

４～６は３層出土で、４は3b層と3a層出土片が接合した、3c層出土片と同一個体の壺で、口縁部片と頸部片は図上接合のため、頸部の長さは不確実。口縁部は肥厚がなく、頸部と口縁部の間は接合部に沈線が１条入る。肩部は段がなく、沈線が施されるのみで、沈線はいずれも細線で、横線は途切れる部分がある。器壁が薄い。内外黄橙色で、内面は暗黄灰色に変色している。底部は器壁が厚く、中央部が盛り上がっている。縁だけで接地し小さな上げ底状を呈する。５は3a層如意形口縁の小型甕で、器壁の厚さに比べて径は小さい。器面摩滅で調整不明。６は3c層砲弾形の甕の口縁部片で、小片のため反転復元できないが胴部径で25㎝前後であろう。内外ナデのみ、内面口縁下に凹線があるが調整時のものだろう。内外にぶい暗黄灰色で変色なし。

第142図１～８は４層出土で、１は口縁部に刻目が入る如意状口縁甕で、刻み目は小さく、肥厚はない。内外ナデで、平滑に仕上げられており、黄橙色の器面に丹塗りが見られる。肩部まで部分的にしか残っていないので彩文なのかは不明。２は上半部と下半部は図上接合で、3c層からも同一個体の破片が出土している。摩滅のため器面調整は不明瞭で、刻目突帯はわずかながらある。下半は明橙褐色に赤化し、上半は黒褐色に煤けているので煮沸使用されている。３は砲弾形甕で、口縁下に刻目突帯がつく。刻目突帯は歪みがあるがほぼ水平で、刻みが大きいので尖らない。刻み目は水平に施される。外底は平坦な平底。外面板状の単位が残るナデ、内面はオサエのちナデ。内外口縁下まで暗灰褐色で、外面胴中位以下は赤変しているので煮沸使用されている。４は4a層甕の底部で上げ底である。外面はタテハケが端部まで達しており、内面はオサエ痕が残る。内外黄橙色で変色なし。図化していないが3c層№６と接合した。５は甕も底部で、外面は赤変、内面は灰褐色に変色しているので煮沸使用されている。外面は底部と胴部の接合部のオサエ痕がナデ消



第140図　２区17号溝3･4区間出土土器実測図（1/3）

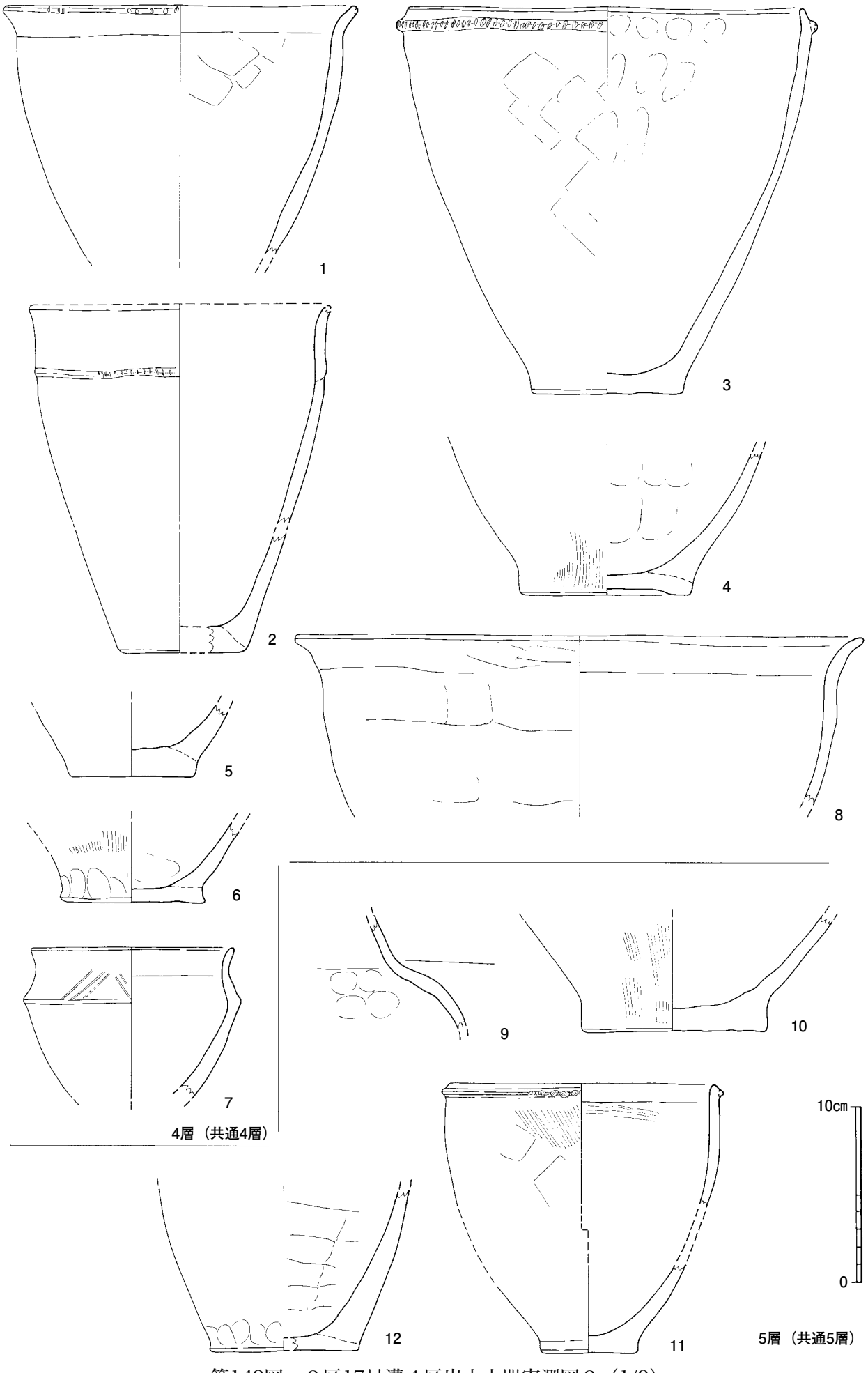


第141図　２区17号溝４区出土土器実測図１（1/3）

されている。６は甕の底部で、底部は完存し、接合痕が見える。粘土板から積み上げており、外底は完全に平坦である。胴部と底部の接合部はオサエだが、凹凸が大きいのでオサエ後のナデ仕上げはしていない。ハケの下端は摩滅しているためナデ消されているか不明。内外にぶい暗黄灰色で変色なし。７は小型の鉢で、肩部に３条沈線の鋸歯文が入る。器面は暗灰褐色を呈し、変色はない。

９～12は５層出土で、９は壺の頸部で、頸部片と胴部片は図上接合。頸部に段はなく、肩部に稜が入る。小片なので反転復元できないが、肩部で38㎝前後になるので、頸部が内傾し、胴部が張らない器形である。器面内外黄橙色で変色ないが胎土は精良軟質。10は甕の底部で、外面はハケが底部まで達する。内外黄橙色で変色なし。11は小型甕で、口縁部から胴部片と底部は図上接合である。口縁部は刻目のない突帯だけの部分と刻み目が入る部分がある。外面はハケ内面ナデ。内外橙色で煮沸使用されていない。12は４層５の破片と接合した。甕の底部で、内面は暗黄灰褐色だが、外面が赤変していないので、内面は内容物で変色したものだろう。第143図は６層出土で、１は口縁部・肩部・胴部・底部の図上接合で、小片なので反転復元できないが、肩部で38㎝前後になるので、頸部が内傾し、胴部が張らない器形である。口縁部はオサエ痕で歪みがあり、肩部も歪みが大きく、肩の張り方が場所によって異なる。頸部の段はなく、内面肩部には稜が入る。胴下位に赤色原料の塗布が帯状に見られたので赤彩されていたようだが、口縁部や肩部では摩滅のため確認できない。器面は外面黄橙色から淡橙色で、内面は頸部が黄灰色だが、肩部は暗灰褐色で、変色している。図化していないが５層№３や４区2a層出土片とも接合したが、本来６層のものだろう。２は甕の胴部片で、屈曲部と胴下位は図上接合。刻目突帯は突帯というより接合して肥厚した部分に施されている。屈曲部より上位はナデのみで、下位はタテハケの幅が広く浅い。内外黄橙色を呈するので煮沸使用の痕跡なし。

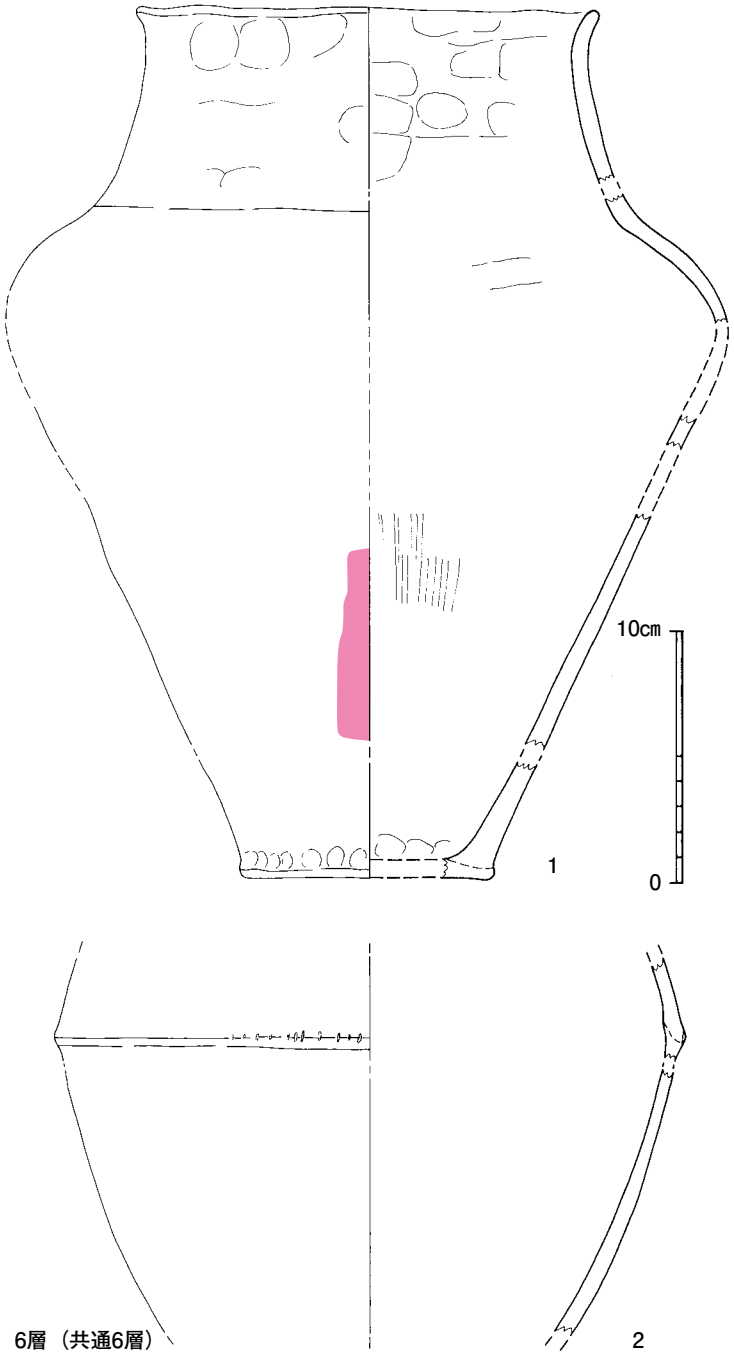
このほか2b層から赤色顔料塊8.9ｇが出土した。



第142図　２区17号溝４区出土土器実測図２（1/3）

１区３号溝・２区17号溝出土石器（図版55、第144･145図）

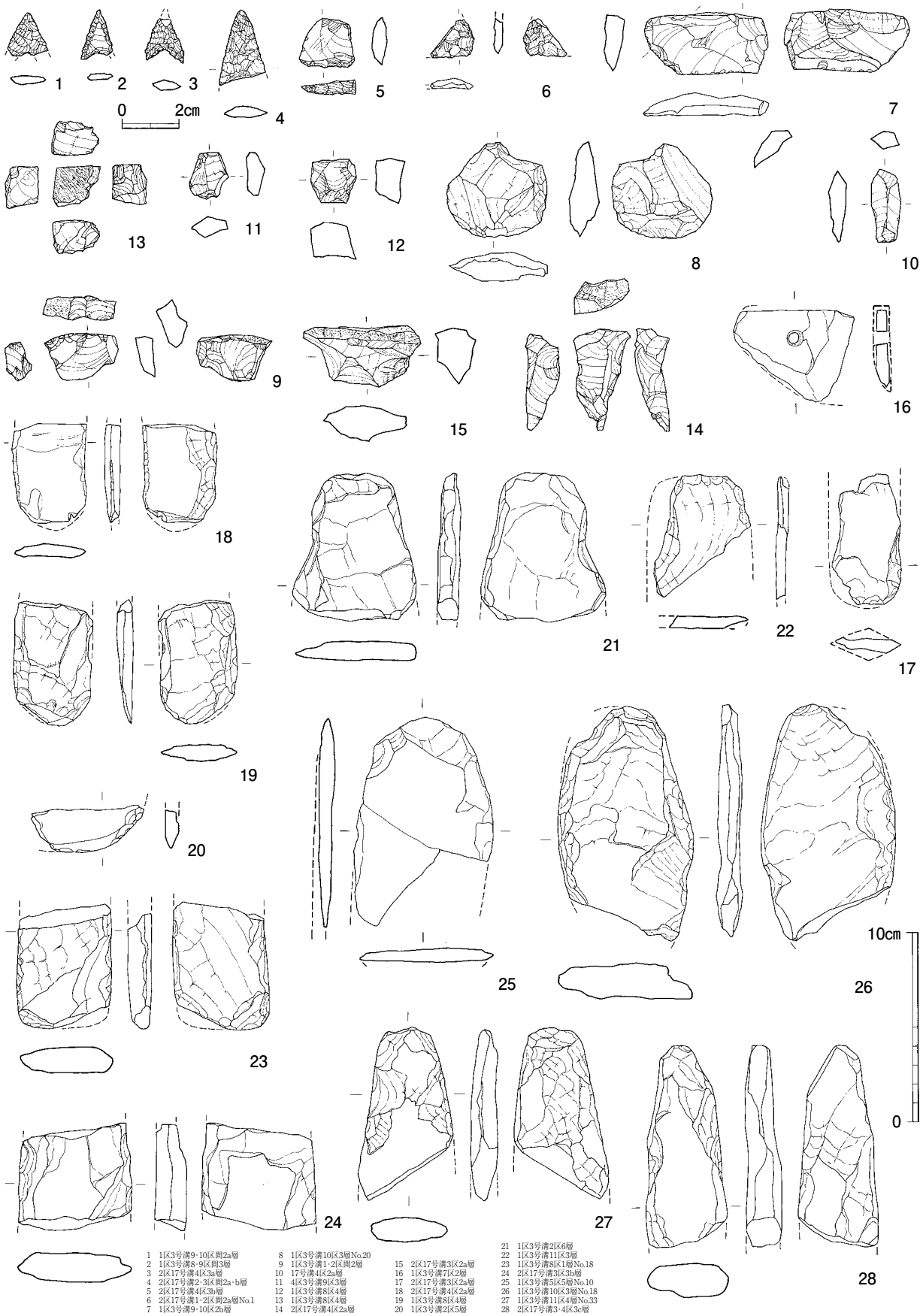
第144図１～４は打製石鏃である。１は2a層出土で、平面正三角形で、どの角でも先端になりうる。中央が厚くなるように均等に両面同様に加工されている。２は３層出土で、中央部は両面とも平坦面が残る。３は3a層出土で側縁を鋸歯状に加工している。４は2a･b層出土で両面全面剥離である。５は3b層出土で側面は素面で、上端面を打面とする縦長剥片を折って刃部を作るとともに、上面の縁にも刃をつけている。６は2a層出土で刃部の小片であり、全体像はわからないが、両面剥離で形成された薄い器種なので削器とした。７は2b層出土で、古い剥離面をもつ石材の角を打面とした斜めに長い剥片を使用しているため、側面と上端面は古い剥離面を残している。下の縁部は直線ラインを利用して刃を作らずに削器として利用しており、刃こぼれがある。右側縁と上端面の縁は刃をつけて湾曲を利用した掻器としている。８は３層出土で、両面剥離されており、主要剥離面をほとんど残していない。２つの湾曲のある部分を掻器とし、大きな剥離面の部分は縁に刃がないので欠損であろう。９は２層出土で、上端面は一部に素面を残していることから打面調整された面から剥離された横長の剥片を使用しており、両端を折り、上下の縁の湾曲を利用して刃をつけないまま掻器として使用している。10は４層出土で、断面平行四辺形の柱状の剥片の下部に刃をつけないまま掻器として使用している。11は３層出土で、上端面の古い剥離面を打面として断面長五角形に剥離し、端を尖らせているが、刃もなく使用もしていないので、２次加工剥片である。12は４層出土で、立方体状に剥離された残欠である。打面は転移している。13は2a層出土の石核で、立方体状に剥離された残欠である。３つの側面は上面の素面を打面としている。14は上端面の素面を打面として剥離し、その剥離面を打面としてさらに２面剥離して逆四角錐状にしている。15は2a層出土で船底形の石核である。上端面を打面として側面



第143図　２区17号溝４区出土土器実測図３（1/3）

を下が尖るように剥離している。16は２層出土で欠損と剥落が多く、本来の形態がわかりにくいが、刃部らしい部分がわずかにあることから片刃の石庖丁と判断した。17は2a層出土の磨製石剣片で、大きく欠損しているが、刃縁の一部が残っている。その角度と幅から先端近くの部位と考えられる。18･19は石鎌のような法量だが、先端に研磨による平坦面があることから、局部磨研石斧と判断した。18は2a層出土で、刃部の欠損が大きい。側縁は右下への剥離があるが、平坦な面には剥離がない。欠損面が摩滅しているので、側縁の剥離も摩滅しているものと見られる。19は３層出土で側面は鎌の刃部ではなく、打製石斧の側縁に見られる右下への剥離である。20は５層出土で、両面刃部が研磨されているが、研磨されていない面を残す部分もあり、石材から石庖丁ではなく局部磨研石斧と判断した。21 ～ 28は打製石斧である。21は６層出土で基部側面に緊縛部と見られるくぼみがあるので、撥形に開くものと見られる。22は扁平な素材を使っているので、縁部だけを加工して平面形を整えている。基部の角の１つだけしか残っていないが短冊形になるように整形したものだろう。23は１層出土で、側縁を短冊形に加工している。側縁は右下剥離なので基部ではなく、刃部欠損と判断した。24は中央部の破片で、両側縁は同程度の剥離である。25は５層出土で、薄い石材を使用しているが、剥落によってさらに薄くなっている。摩滅が著しいので、剥離の新旧がわからない。基部ではなく刃部である可能性もある。26は３層出土で、刃部欠損で裏面に加工がないが、表面側縁は右下への剥離が大きいことから未製品ではなく、裏面は平坦なので加工しなかったと考えられる。27は撥形に開くもので、明瞭な緊縛痕はない。28は3c層出土で、幅が狭く基部が尖るもので、側縁は右下への剥離である。

第145図１は１区３号溝11区２層出土の小型の磨製石斧基部で、基部の先端が尖る。２は１区３号溝10区７層出土の磨製石斧で、刃部は刃こぼれとつぶれが著しい。蛇紋岩製で254.5gを測る。３は１区３号溝８区１層出土で、表面の摩滅が著しい。粗割りの窪みも残っていないので全面研磨の磨製石斧だったものだろう。表裏ともに表面が剥落している。４は１区３号溝９区３層出土の凹み石で、多孔質の石材。５は１区３号溝２区２層出土の多孔質の軟質凝灰岩で、軽石に近い。片面が赤化し、反対面は黒化しているので、磨石ではなく、火に関係する道具であろう。６は１区３号溝11区７層出土の小型の叩き石で、両端面使用している。７は１区３号溝10区３層出土の小型の叩き石で、表面が摩耗しているので磨石として使用していたかはわからない。８は１区３号溝12区４層出土の凹み石で、多孔質の石材。９は２区17号溝４区３層出土の花崗岩の角礫で、小口部以外の表面が赤化しているので、火に関係する道具であろう。10は１区３号溝２区５層出土の凹み石で、多孔質の石材。11から13は投弾と見られる礫で、加工はないが、持ち込まれたものであることは間違いない。出土区・層位は不明。14は１区３号溝９区３層出土の線刻礫で、やや窪む面に7･8条の線刻がほぼ等間隔に入る。15は１区３号溝７区10上層出土の紡錘車で、小型で平坦面にオサエ痕が残るので、土錘の可能性もある。16は１区３号溝11区４層出土の紡錘車で、表面は赤褐色を呈するが赤色顔料ではない。17は１区３号溝５区１層出土の土錘で、半分以上欠損している。18は１区３号溝10区３層出土の大型土錘で、器面は摩滅しているが手捏ね成型痕が明瞭に残る。19 ～ 21は管状土錘で、19は３号溝一括出土なので層位不明。19は線刻がある。20は１区３号溝５区２層出土の小型品で、孔が径1.2㎜と非常に小さい。21は１区３号溝10区３層出土で、小型品。22は２区17号溝３区４層出土で小刀の先端だろうか。23は２区17号溝３区2a層出土で鋳造鉄斧の袋部片である。24はⅡ区17号溝２層出土の袋状鉄斧である。23･24は出土位置を記録している。24は４層取り上げ記



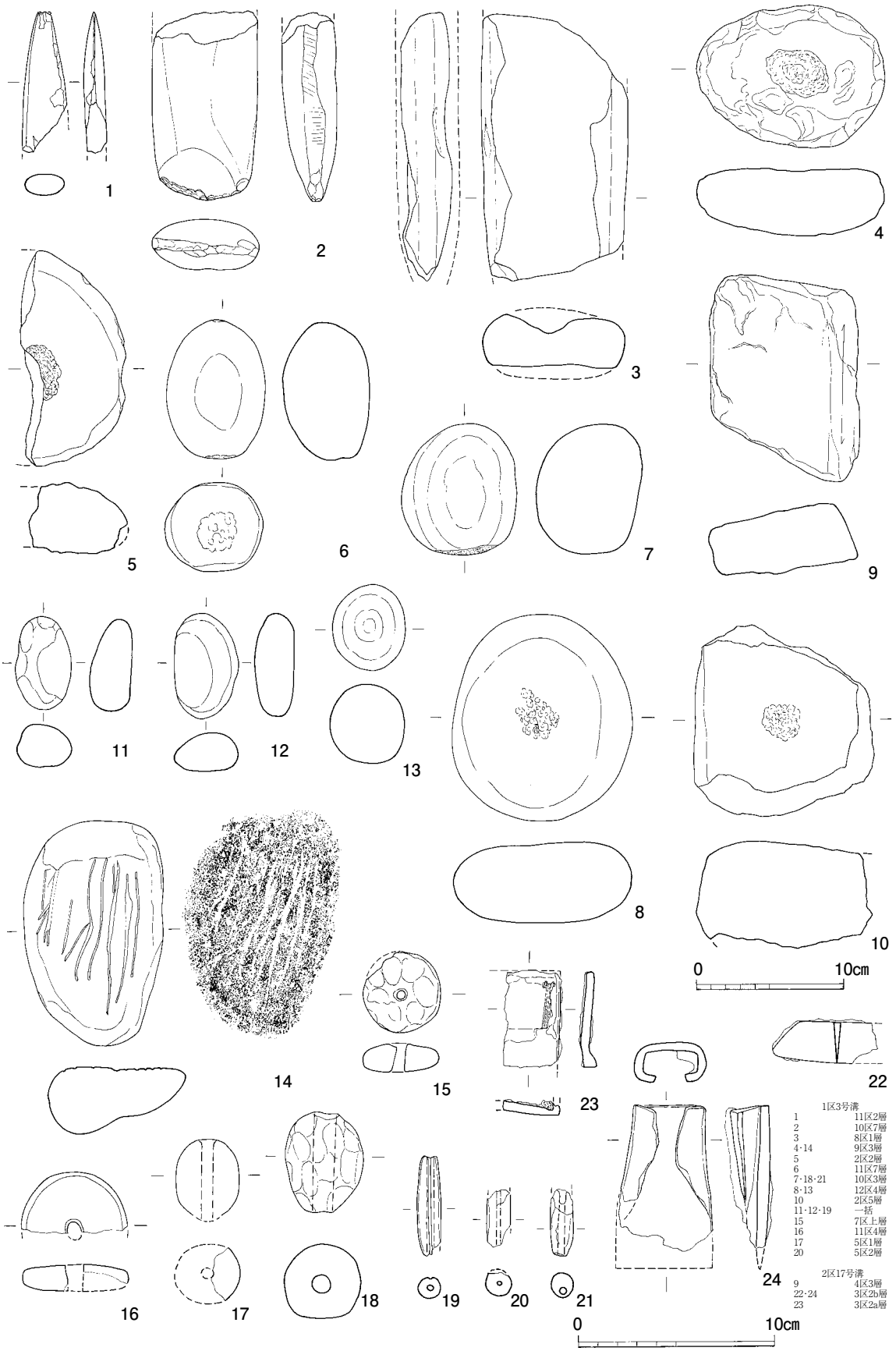
1 1区3号溝9・10区間2a層
2 1区3号溝8・9区間3層
3 2区17号溝4区3a層
4 2区17号溝2・3区間2a・b層
5 2区17号溝4区3b層
6 2区17号溝1・2区間2a層No.1
7 1区3号溝9・10区2b層
8 1区3号溝10区3層No.20
9 1区3号溝1・2区間2層
10 17号溝4区2a層
11 4区3号溝9区3層
12 1区3号溝8区4層
13 1区3号溝8区4層
14 2区17号溝4区2a層
15 2区17号溝3区2a層
16 1区3号溝7区2層
17 2区17号溝3区2a層
18 2区17号溝4区2a層
19 1区3号溝8区4層
20 1区3号溝2区5層
21 1区3号溝2区6層
22 1区3号溝11区3層
23 1区3号溝8区1層No.18
24 2区17号溝3区3b層
25 1区3号溝5区5層No.10
26 1区3号溝10区3層No.18
27 1区3号溝11区4層No.33
28 2区17号溝3・4区3c層

第144図　１区３号溝・２区17号溝出土石器実測図（1 ～ 4は1/2、他は1/3）

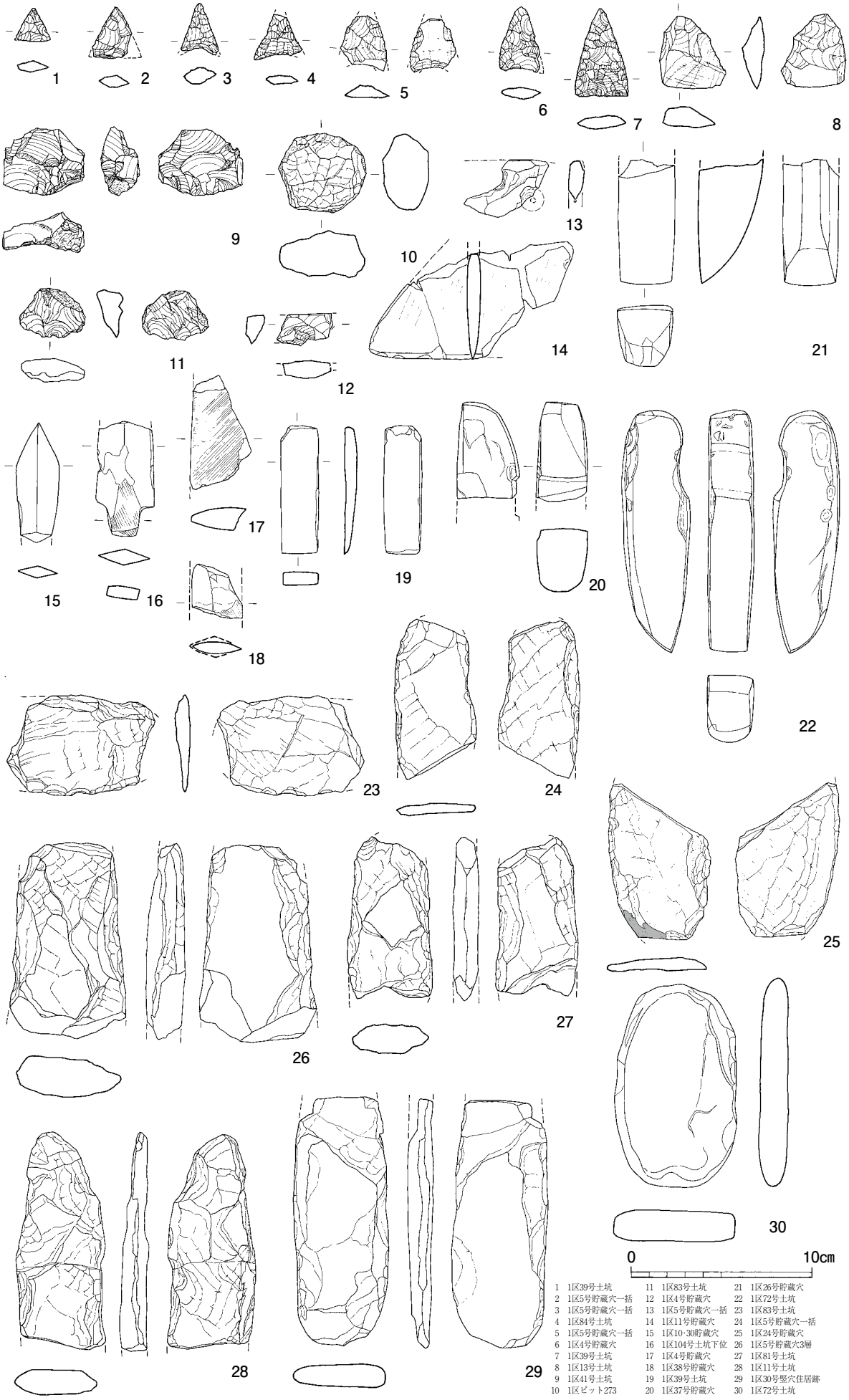
載しているが、出土レベルでは2b層にあたるので、２層に修正し、４層一括で取り上げた。22も同様にして2b層と判断した。

（６）その他の遺構出土石器（図版56、第146･147図）

第146図１～７は打製石鏃である。１は１区39号土坑出土で、両面同様に加工されている。２は１区５号貯蔵穴出土で、正三角形だが、下辺の加工が粗い。両面同様に剥離されている。３は１区５号貯蔵穴出土で、風化が著しいので縄文時代に属する可能性もある。両面同様に剥離されている。４は１区84号土坑出土で両面同様に剥離されている。５は５号貯蔵穴出土で、両面全面剥離で１面に主要剥離面を残すため断面台形をなす。６は１区４号貯蔵穴下位両面加工で側縁が膨らみアメリカ式に近い形態である。７は両面加工の完形品である。８は１区13号土坑出土で、主要剥離面の２側縁に微細剥離が見られるので石鏃の未製品である。９は１区41号土坑出土の掻器で、素面と古い剥離面の角から剥がした縦長剥片を使用し、主要剥離面を両端から剥離して湾曲を作り、刃を２ヶ所に作っている。10は１区ピット273出土で、円盤形に剥離し、素面を円盤の側面にだけ残しているので石核と考えられる。11は23号貯蔵穴出土で、素面を打面とし、素面を２側面に残す扇形の剥片を素材とし、断面長三角形に尖らせた縁に刃をつけずに使用している。12は１区４号貯蔵穴出土で、素面を打面とし、素面を２側面に残す扇形の剥片を素材とし、断面長三角形に尖らせた縁に刃をつけずに使用している。風化が著しく、新しく欠損した面は明瞭にわかる。断面略長方形で、湾曲の大きい面を作り、その縁を掻器に使用しているが縁に凹凸がついてしまったので加工を止めたのだろう。13は１区５号貯蔵穴出土の石庖丁の小片で、表裏面と上端面の一部、穿孔部の一部が残っている。穿孔は両面から施されているが、穴の壁は摺鉢状に窪んでいる。14は１区11号貯蔵穴出土の大型石庖丁の小片で、表裏面と側面の一部、刃部の一部が残っている。逆三角形では刃が側縁全体に作られることになるので、台形の下片に刃がつくタイプと考えた。側面は平坦で、刃部近くは別の平坦面を作る。また。側面の縁には刃こぼれ状の欠損がある。刃部の研磨は丁寧で光沢を持つ。15～17は磨製石剣である。15は１区104号土坑下位出土の基部片で、基部の中心は刃部の中心軸からずれている。16は１区10号土坑出土で、頁岩のような色調だが、凝灰岩が風化したもので、新欠面は本来の暗灰色を呈する。小さいが鏃にしては幅が広いので、剣の側縁を研ぎ直した再利用品とした。大型の鏃として使用した可能性もある。17は稜がなく、側縁が尖らないので基部付近の破片だろうか。18は小型品の小片で、多くの部分が摩耗している。19は１区39号土坑出土の扁平片刃石斧で、本来の幅の３分の１程度である。頁岩のような色調だが、凝灰岩が風化したもので、両側面が欠損面であることは風化が進んでいないことからわかる。20～22は柱状片刃石斧で、20は１区37号貯蔵穴出土で、風化が著しく研磨や使用痕は不明。21は１区37号土坑出土で、表面が剥離しているため研磨面の残りが悪い。22は１区72号土坑出土で、基部を加工して柄に入るよう調整している。23は23号貯蔵穴出土で、石材自体が扁平で剥落したものではない。上辺が厚く表面が平滑であり、下縁には小さな剥離があるのでこれを刃部とする石庖丁石器と判断した。24は１区５号貯蔵穴出土で、石材自体が扁平なので両側縁を丸くする程度の加工しかない。側縁に石鎌らしい刃部はなく、緊縛部らしい窪んだ部分があることから打製石斧と判断した。25は１区88号土坑出土で、扁平な石材で、側縁片側に丸みがあり、反対側縁には大きな剥離があるが、刃部に研磨がある局部磨研石斧である。26は１区５号貯蔵穴３層出土で、表裏とも左側縁は丸みを残すが、右側縁の



第145図　１区３号溝・２区17号溝出土石器・土製品・鉄製品実測図（9･10は1/4、他は1/3）



1 1区39号土坑
2 1区5号貯蔵穴一括
3 1区5号貯蔵穴一括
4 1区84号土坑
5 1区5号貯蔵穴一括
6 1区4号貯蔵穴
7 1区39号土坑
8 1区13号土坑
9 1区41号土坑
10 1区ピット273
11 1区83号土坑
12 1区4号貯蔵穴
13 1区5号貯蔵穴一括
14 1区11号貯蔵穴
15 1区10・30貯蔵穴
16 1区104号土坑下位
17 1区4号貯蔵穴
18 1区38号貯蔵穴
19 1区39号土坑
20 1区37号貯蔵穴
21 1区26号貯蔵穴
22 1区72号土坑
23 1区83号土坑
24 1区5号貯蔵穴一括
25 1区24号貯蔵穴
26 1区5号貯蔵穴3層
27 1区81号土坑
28 1区11号土坑
29 1区30号竪穴住居跡
30 1区72号土坑

第146図　弥生時代前期から中期前葉のその他の遺構出土石器実測図１（1～9は1/2、他は1/3）

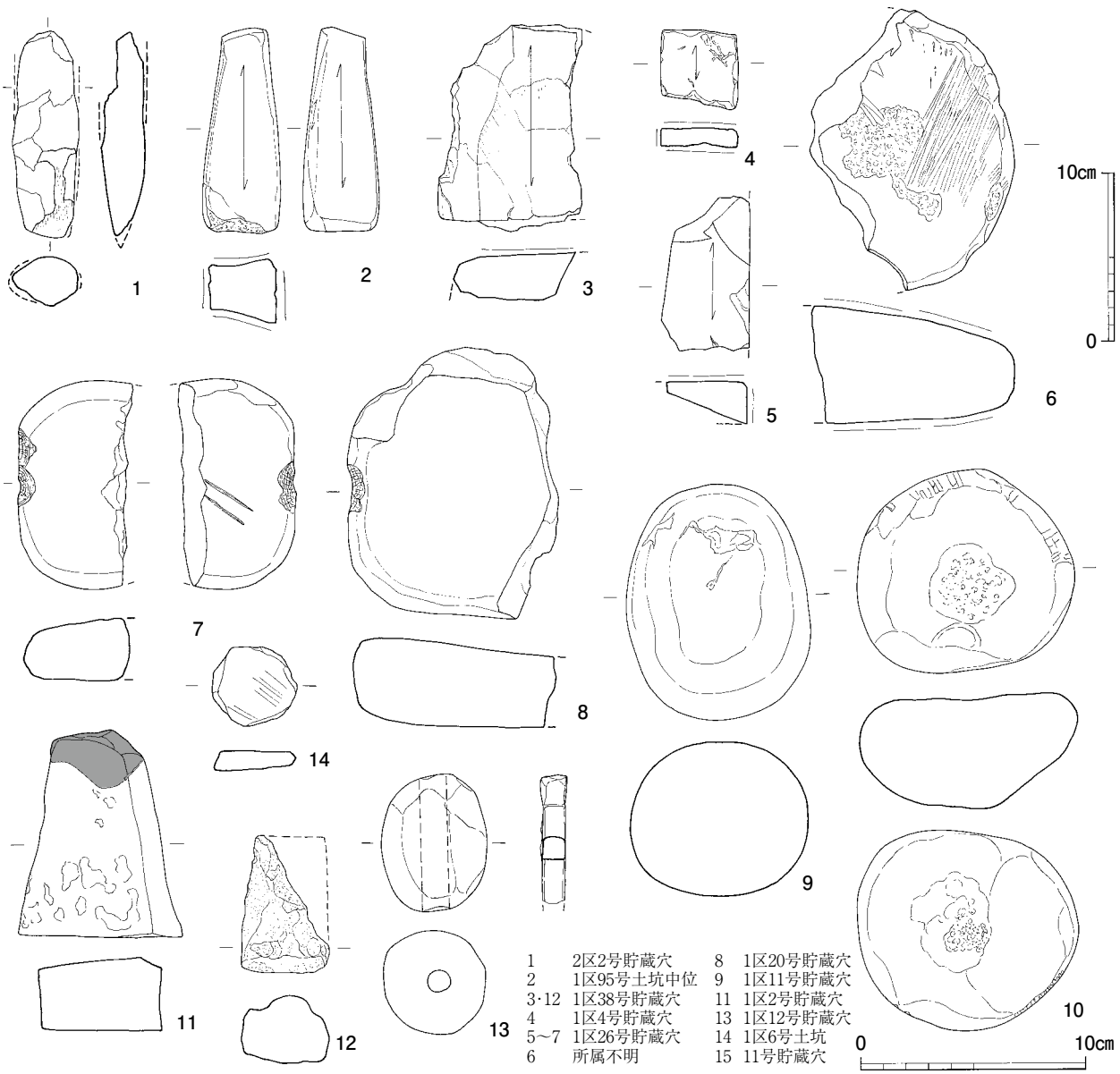
剥離が大きい。27は小型品で表裏とも左側縁は丸みを残すが、右側縁の剥離が大きい。28は１区11号土坑出土で、中心軸がやや湾曲して、幅が狭いものの、側縁の加工から石鎌ではなく打製石斧である。表面の風化が進んでいる。29は１区30号竪穴住居跡柱１出土の打製石斧で、側縁はほとんど加工しておらず、短冊状の原石の側縁を整えて、先端に刃をつけたもの。30は１区25号貯蔵穴出土の扁平な板石状の緑色結晶片岩の原石である。一部を打ち欠いただけで加工を止めている。

第147図１は２区２号貯蔵穴出土の磨製石斧で、周縁はすべて欠損しており、中央部の研磨面だけが残っている。２は１区39号貯蔵穴中位出土の４面使用の砥石で、刃先を研いだ沈線が残る面がある。砂岩だが目が細かいので中砥石であろう。３は１区38号貯蔵穴出土で、使用面の１面しか残っていない。仕上げ砥石である。４は１区４号貯蔵穴出土の板状の砥石で表裏から擦り切り、中央部を折切している。５～７は１区26号貯蔵穴出土で、５は中砥で、やや目が粗い。６は円礫の平坦面を砥石に利用している。７は石錘で、隅丸方形の板状の礫の長辺側に抉りが入っている。短片側は片面にしか打ち欠きがないので、意図的なものではないと判断した。８は20号貯蔵穴出土の石錘で、隅丸方形の板状の礫で、欠損が大きいため辺の長短はわからない。９は17号貯蔵穴出土の円礫で、表面が摩滅しているため明確な使用痕はない。法量と手に収まる大きさから磨石と考えた。10は１区ピット273出土の凹み石で、２面使用し、側縁に砥石に使用したような擦った痕跡がある。11は１区２号貯蔵穴出土の板状の板石片で、上部は赤化し、それ以外は黒く変色しているので、火に関わる道具であり、支脚のような機能が想定される形状から意図的に割ったものとみられる。12は１区38号貯蔵穴出土の不明石製品で、直方体に軽石を加工したものである。穿孔はないが、漁撈具の可能性がある。13は１区12号貯蔵穴出土の大型土錘。14は１区86号土坑出土の円盤状土製品で、変色がないことから壺形土器片の加工品だろうか。15は１区11号貯蔵穴出土の不明鉄製品で断面正方形を呈する。釘にしては大きく、鉄素材かあるいは玉製作遺跡に多く見られる工具にも似る。

（７）遺構外出土の石器・土製品（図版56、第148･149図）

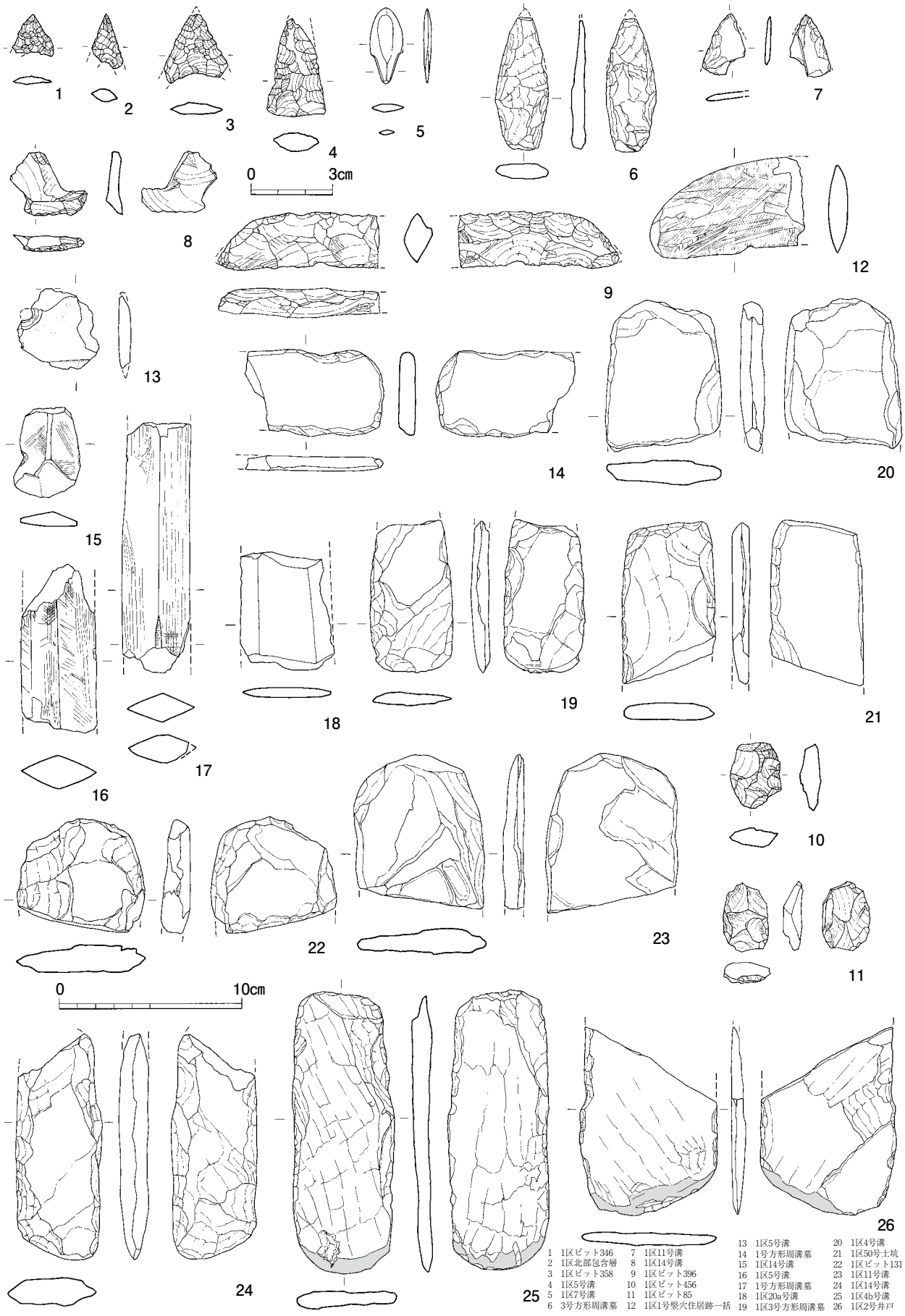
当該期の遺構に属さないものの、同じ時期のものと見られる遺物については、それぞれの遺構でなくここで掲載した。

第148図１～4･6･7は打製石鏃である。１は１区ピット346出土で、１面は主要剥離面なので断面蒲鉾形を呈する。２は１区北部包含層出土で、表裏同様に加工されている。1･2は縄文時代に属する可能性もある。３は１区ピット358出土で１面は主要剥離面で扁平な断面蒲鉾形を呈する。４は１区５号溝出土で、先端が欠けているため本来はまだ長く、4.3～4.5㎝ほどの大型品である。１面には素面が一部残っている。５は７号溝出土の定角式磨製石鏃で、摩滅しているため研磨痕は不明瞭。逆刺は摩滅している可能性もある。６は１区３号方形周溝墓の周溝から出土した柳葉形打製石鏃で、基部が残っている。磨製石鏃の未製品ではない。７は１区11号溝出土のサヌカイト製の打製石鏃で、石匙の先端部分の可能性もあるが薄いことから石鏃とした。風化しており縄文時代に属する可能性もあるが、基部が残っていないことから大型品と見られるので弥生時代の所産とした。表裏中央部は２次加工が及んでいない。８は１区14号溝出土の掻器で、長靴形を呈する。９は１区ピット396出土の石製小刀で、風化が著しく、欠損面も風化している。湾曲する鎬が入り、両側縁とも尖っているがどちらの刃部加工も剥離が大きく凹凸が大きいため刃がまっすぐ通っていない。



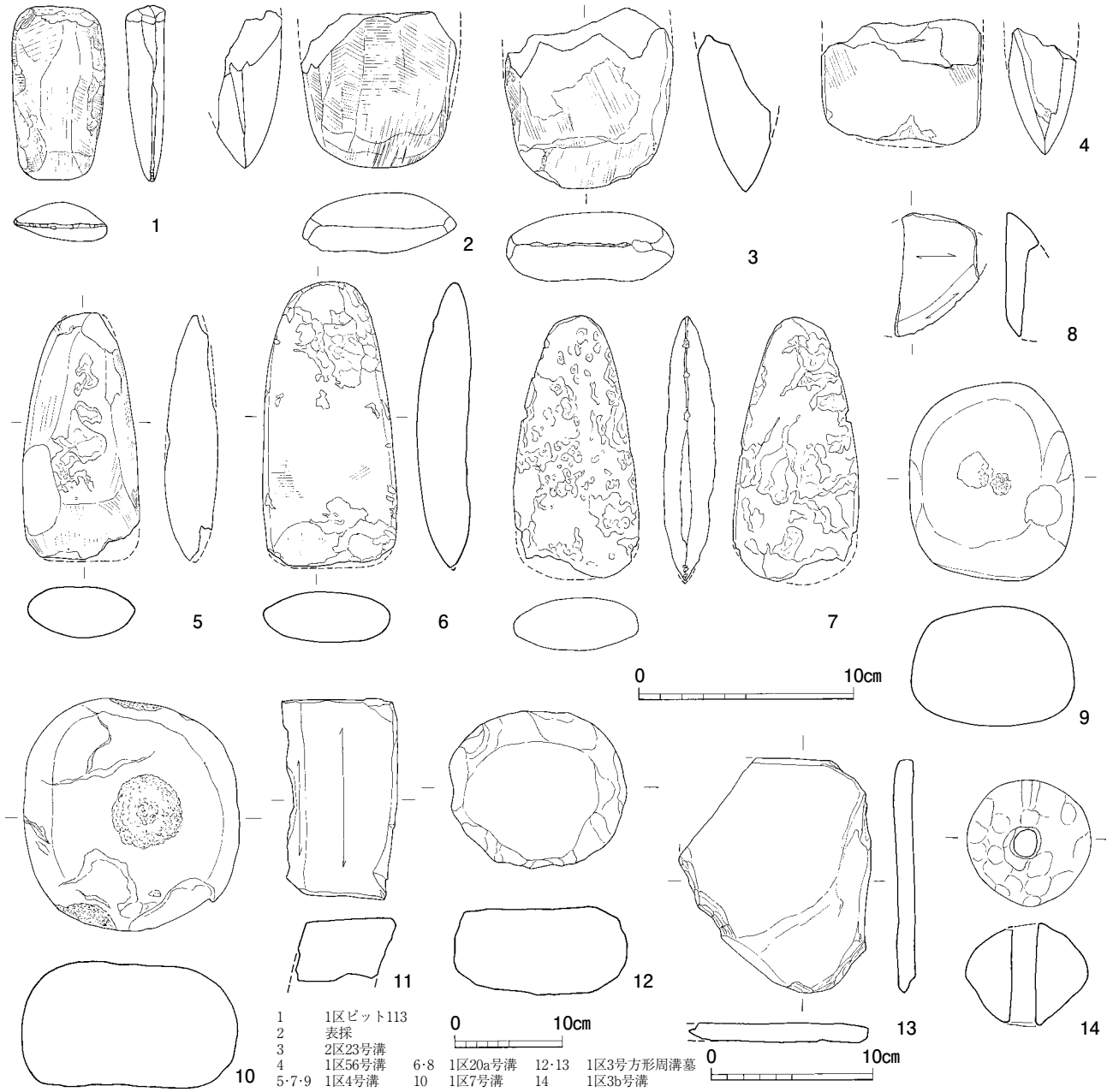
第147図　弥生時代前期から中期前葉のその他の遺構出土石器実測図２（６は1/4、他は1/3）

10は１区ピット456出土の２次加工剥片で、中央部に不純物の節理が通っているので加工を止めている。縄文時代に属する可能性もある。11は１区２号堀立柱建物跡柱３出土のチャート製の剥片で、全面剥離されていることと大きさから打製石鏃の未製品の可能性が高い。風化の程度が弱いことから弥生時代の所産とした。12は１区１号竪穴住居跡出土の磨製石鎌で、大きな擦痕は研磨方向とは異なるので使用により付いたものだろう。13は１区５号溝出土の輝緑凝灰岩製磨製石庖丁の小片で、基部も刃部も残っていない。穿孔は両面から施されている。14は１区１号墳周溝出土の石鎌の基部であろう。緊縛部と見られる窪みがあり、刃部はない。打製石斧にしては薄く加工が少なく、石庖丁状石器にしては小さすぎる。15は１区14号溝出土の磨製石剣片で、鎬を持つ片面が剥がれたもので、鎬が削られているので基部の可能性が高い。側縁は残っていない。小片のため石戈の可能性もある。16は１区５号溝出土の石剣で、厚さから基部付近と見られる。17は１区１号方形周溝周墓出土の石剣で、鎬が削られている部分は基部付近である。18は１区20a号溝出土の石剣で、風化が著しい。19 ～ 26は打製石斧である。19は１区３号方形周溝墓周溝出土で、小型で薄いが側面加工が



第148図　弥生時代前期から中期前葉の遺構外出土石器実測図（1 ～ 4･8 ～ 11は1/2、他は1/3）

整っており、明瞭な刃部をもつ。20は１区４号溝出土で、刃部はなく、側縁加工は表裏とも右下への剥離である。欠損は古く、再利用はされていない。21は１区50号土坑出土で、刃部はなく、側縁加工は左右が同じ幅になるように加工されており、表面の側縁は右下への剥離で、裏面は素面の平坦面のままである。欠損は古く、再利用はされていない。22は１区ピット131出土で刃はなく、刃が欠損したにしては側縁の端部が厚いので、基部と見られる。欠損部は丸く研磨されているので、側縁の大きな剥離は転用するために刃部をつけたものと見られる。角部が欠損しているが本来は略方形の打製石斧に作り変えられたものである。23は１区11号溝出土で、刃部はないので基部である。側縁加工は左右が同じ幅になるように加工されており、表面の側縁は右への剥離で、裏面は素面の平坦面のままである。24は１区14号溝出土の打製石斧で、扁平な石材の側縁を加工している。刃部は斜めで、先端部分は刃が潰れている。25･26は刃部が両面から研磨されているので局部磨製石斧



第149図　弥生時代前期から中期前葉の遺構外出土石器・土製品実測図
（12は1/6、13は1/4、他は1/3）

表4　特殊遺物一覧表３

図番号	出土遺構	時期	器種	長さ	幅	厚さ	重量	石材	備考
144図－１	１区３号溝9・10区間2a層	弥生	打製石鏃	1.3	1.3	0.3	1.1	腰岳産黒曜石	
144図－２	１区３号溝8・9区間３層	弥生	打製石鏃	1.6	1.0	0.3	1.5	姫島産黒曜石	
144図－３	２区17号溝４区3a層	弥生	打製石鏃	1.0	1.2	0.5	1.3	腰岳産黒曜石	
144図－４	２区17号溝2・3区間2a・ｂ層	弥生	打製石鏃	2.4	1.5	0.5	1.9	姫島産黒曜石	
144図－５	２区17号溝４区3b層	弥生	掻器	2.5	2.4	1.0	7.6	姫島産黒曜石	２ヶ所使用
144図－６	２区17号溝1・２区間2a層No.1	弥生	削器	1.5	2.9	0.6	2.5	姫島産黒曜石	
144図－７	１区３号溝9・10 区2b層	弥生	削器兼掻器	3.2	6.4	1.2	29.1	姫島産黒曜石	３ヶ所使用
144図－８	１区３号溝10区３層No.20	弥生	掻器	5.1	5.1	1.7	35.7	サヌカイト	２ヶ所使用
144図－９	１区３号溝1・２区間２層	弥生	掻器	2.2	3.8	1.4	12.5	姫島産黒曜石	２ヶ所使用
144図－10	２区17号溝４区2a層	弥生	石核	1.6	2.3	1.7	5.7	姫島産黒曜石	
144図－11	１区３号溝９区３層	弥生	2次加工剥片	2.4	2.0	1.1	5.4	姫島産黒曜石	
144図－12	１区３号溝８区４層	弥生	石核	2.3	2.6	2.9	14.7	姫島産黒曜石	
144図－13	１区３号溝８区４層	弥生	掻器	3.9	1.6	1.0	11.5	姫島産黒曜石	
144図－14	２区17号溝４区2a層	弥生	石核	5.2	3.0	1.8	22.9	姫島産黒曜石	
144図－15	２区17号溝３区2a層	弥生	石核	3.4	6.1	2.2	41.6	姫島産黒曜石	
144図－16	１区３号溝７区２層	弥生	石庖丁	4.8	6.1	0.9	27.4	凝灰岩	
144図－17	２区17号溝３区2a層	弥生	磨製石剣	6.9	3.6	0.9	19.7	凝灰岩	
144図－18	２区17号溝４区2a層	弥生	局部磨研石斧	5.2	4.0	0.6	28.0	緑色結晶片岩	
144図－19	１区３号溝８区４層	弥生	局部磨研石斧	6.1	4.2	1.0	37.4	緑色結晶片岩	
144図－20	１区３号溝２区５層	弥生	局部磨研石斧	2.1	6.0	0.8	13.4	緑色結晶片岩	
144図－21	１区３号溝２区６層	弥生	打製石斧	7.5	6.4	1.2	93.2	緑色結晶片岩	
144図－22	１区３号溝11区３層	弥生	打製石斧	5.2	4.6	0.7	26.5	緑色結晶片岩	
144図－23	１区３号溝８区１層No.18	弥生	打製石斧	6.1	5.0	1.4	76.0	緑色結晶片岩	
144図－24	２区17号溝３区3b層	弥生	打製石斧	5.2	6.0	1.7	87.4	緑色結晶片岩	
144図－25	１区３号溝５区５層No.10	弥生	打製石斧	10.3	7.0	0.8	74.1	緑色結晶片岩	刃部の可能性もある
144図－26	１区３号溝10区３層No.18	弥生	打製石斧	12.0	6.9	1.8	234.0	緑色結晶片岩	
144図－27	１区３号溝11区４層No.33	弥生	打製石斧	8.5	4.5	1.5	81.4	緑色結晶片岩	
144図－28	２区17号溝3・4区3c層	弥生	打製石斧	10.4	4.2	1.8	124.8	緑色結晶片岩	
145図－１	１区３号溝11区２層	弥生	小型磨製石斧	7.2	2.2	1.2	24.2	蛇紋岩	
145図－２	１区３号溝10区７層No.84	弥生	磨製石斧	9.8	5.4	2.8	254.5	蛇紋岩	
145図－３	１区３号溝８区１層No.24	弥生	磨製石斧	13.3	7.0	2.6	388.7	軟質砂岩	
145図－４	１区３号溝９区３層No.27	弥生	凹み石	9.6	7.3	3.3	263.8	安山岩	
145図－５	１区３号溝２区２層	弥生	不明石製品	10.0	5.3	3.5	218.5	軟質凝灰岩	
145図－６	１区３号溝11区７層No.44	弥生	叩石	7.1	5.2	4.6	218.1	硬質砂岩	
145図－７	１区３号溝10区３層No.12	弥生	叩石	6.8	5.8	5.5	317.9	硬質砂岩	
145図－８	１区３号溝12区４層	弥生	凹み石	10.6	9.0	4.0	599.4	砂岩	
145図－９	２区17号溝４区３層No.4	弥生	不明石製品	13.2	10.0	4.6	954.8	花崗岩	
145図－10	１区３号溝２区５層	弥生	凹み石	9.8	9.1	5.2	1756.9	安山岩	
145図－11	１区３号溝一括	弥生	投弾	5.1	3.1	2.0	37.7	花崗岩	
145図－12	１区３号溝一括	弥生	投弾	4.5	2.7	2.3	49.8	硬質砂岩	
145図－13	１区３号溝一括	弥生	投弾	4.4	3.7	4.1	66.8	安山岩	
145図－14	１区３号溝９区３層	弥生	線刻礫	11.5	7.1	3.5	335.2	軟質砂岩	
145図－15	１区３号７号溝10区上層	弥生	紡錘車	4.3	4.1	1.5	21.3		
145図－16	１区３号溝11区４層No.25	弥生	紡錘車	5.3	3.1	1.3	22.6		
145図－17	１区３号溝５区1層	弥生	土錘	5.2	1.2	1.0	73.8		
145図－18	１区３号溝10区３層	弥生	土錘	5.2	4.1	3.8	73.8		
145図－19	１区３号溝一括	弥生	土錘	2.8	1.3	1.2	7.6		線刻あり
145図－20	１区３号溝５区２層	弥生	土錘	3.5	1.2	1.2	4.5		
145図－21	１区３号溝10区３層	弥生	土錘	3.4	1.2	1.1	6.4		
145図－22	２区17号３号溝３区２層	弥生	小刀	5.7	2.2	0.2			
145図－23	２区17号３号溝３区2a層	弥生	鋳造鉄斧	5.1	2.7	0.8			
145図－24	２区17号溝３区２層	弥生	袋状鉄斧	7.4	4.8	2.3			
146図－１	１区39号土坑	弥生	打製石鏃	1.2	1.3	0.4	0.9	姫島産黒曜石	
146図－２	１区５号貯蔵穴一括	弥生	打製石鏃	1.8	1.3	0.5	1.7	腰岳産黒曜石	
146図－３	１区５号貯蔵穴一括	弥生	打製石鏃	1.6	1.4	0.6	1.7	サヌカイト	
146図－４	１区84号土坑	弥生	打製石鏃	1.4	1.7	0.3	2.0	腰岳産黒曜石	
146図－５	１区５号貯蔵穴一括	弥生	打製石鏃	1.7	1.5	0.6	2.5	姫島産黒曜石	
146図－６	１区４号貯蔵穴下位	弥生	打製石鏃	2.2	1.4	0.4	1.7	姫島産黒曜石	
146図－７	１区39号土坑	弥生	打製石鏃	3.2	1.8	0.4	3.4	腰岳産黒曜石	
146図－８	１区13号土坑	弥生	2次加工剥片	2.8	2.3	0.9	5.5	姫島産黒曜石	
146図－９	１区41号土坑	弥生	掻器	2.4	2.9	1.1	8.4	腰岳産黒曜石	２ヶ所使用
146図－10	１区ピット273	弥生	石核	4.0	4.6	2.5	67.0	石英	
146図－11	１区83号土坑	弥生	掻器	2.7	3.5	1.2	11.0	腰岳産黒曜石	
146図－12	１区４号貯蔵穴	弥生	2次加工剥片	1.7	2.8	1.2	7.1	腰岳産黒曜石	
146図－13	１区５号貯蔵穴一括	弥生	石庖丁	3.2	3.7	0.9	12.1	凝灰岩	
146図－14	１区11号貯蔵	弥生	大型石庖丁	5.7	9.2	0.8	62.0	凝灰岩	
146図－15	１区30号貯蔵穴	弥生	石剣	6.5	2.3	0.7	14.1	凝灰岩	鏃に転用した可能性もある
146図－16	１区38号貯蔵穴	弥生	石剣	6.3	3.3	1.0	25.8	凝灰岩	
146図－17	１区４号貯蔵穴	弥生	石剣	5.8	3.3	1.3	23.0	凝灰岩	
146図－18	１区38号貯蔵穴	弥生	石剣	2.7	2.6	0.8	5.1	凝灰岩	

表5　特殊遺物一覧表４

図番号	出土遺構	時期	器種	長さ	幅	厚さ	重量	石材	備考
146図－19	１区39号土坑	弥生	扁平片刃石斧	7.0	1.5	0.8	20.3	凝灰岩	
146図－20	１区37号貯蔵穴	弥生	柱状石斧	5.8	2.6	3.4	89.7	凝灰岩	基部を刃部に再利用
146図－21	１区26号貯蔵穴	弥生	柱状石斧	7.0	3.0	3.6	119.4	凝灰岩	
146図－22	１区72号土坑	弥生	柱状石斧	13.4	2.3	3.5	233.4	頁岩	
146図－23	１区83号土坑	弥生	石庖丁状石器	5.4	7.2	0.9	58.4	緑色結晶片岩	
146図－24	１区５号貯蔵穴一括	弥生	打製石斧	8.7	4.3	0.8	43.6	緑色結晶片岩	
146図－25	１区24号貯蔵穴	弥生	局部磨研石斧	7.7	5.3	0.8	55.0	緑色結晶片岩	
146図－26	１区５号貯蔵穴３層	弥生	打製石斧	10.6	6.4	2.2	229.3	緑色結晶片岩	
146図－27	１区81号土坑	弥生	打製石斧	8.9	4.5	1.6	91.1	緑色結晶片岩	
146図－28	１区11号土坑	弥生	打製石斧	11.6	4.7	1.5	127.0	緑色結晶片岩	
146図－29	１区30号竪穴住居跡	弥生	打製石斧	13.7	5.0	1.5	165.9	緑色結晶片岩	
146図－30	１区25号貯蔵穴	弥生	原石	11.3	6.5	1.6	226.2	緑色結晶片岩	
147図－１	２区２号貯蔵穴	弥生	磨製石斧	9.0	3.2	2.3	71.9	結晶片岩	
147図－２	１区95号土坑中位	弥生	砥石	9.1	3.2	2.7	126.9	砂岩	
147図－３	１区38号貯蔵穴	弥生	砥石	9.1	6.2	2.0	172.6	凝灰岩	
147図－４	１区４号貯蔵穴	弥生	砥石	3.2	3.4	0.8	17.9	頁岩	
147図－５	１区26号貯蔵穴	弥生	砥石	6.8	3.7	1.9	61.6	凝灰岩	
147図－６	所属不明	弥生	砥石	12.4	8.8	5.0	1574.9	凝灰岩	
147図－７	１区26号貯蔵穴	弥生	石錘	9.4	4.8	2.7	174.5	安山岩	
147図－８	１区20号貯蔵穴	弥生	石錘	11.8	9.2	3.8	687.7	安山岩	
147図－９	１区17号貯蔵穴	弥生	磨石	10.4	8.0	6.7	824.0	安山岩	
147図－10	１区ピット273	弥生	凹み石	9.7	9.0	4.9	611.8	安山岩	
147図－11	１区２号貯蔵穴	弥生	不明石製品	9.0	7.3	3.2	345.5	安山岩	焼け面あり
147図－12	１区38号貯蔵穴	弥生	不明石製品	6.2	3.8	3.1	14.8	軽石	
147図－13	１区12号貯蔵穴	弥生	土錘	6.1	4.5	4.8	123.0		
147図－14	１区86号土坑	弥生	円盤形土製品	3.7	3.5	0.9	12.4		
147図－15	１区11号貯蔵穴	弥生	不明鉄製品	5.7	1.1	1.1	15.2		鉄素材か
148図－１	１区ピット346	弥生	打製石鏃	1.4	1.4	0.3	1.3	腰岳産黒曜石	
148図－２	１区北部包含層	弥生	打製石鏃	1.0	2.1	0.6	1.5	腰岳産黒曜石	
148図－３	１区ピット358	弥生	打製石鏃	2.2	2.3	0.5	3.0	姫島産黒曜石	
148図－４	１区５号溝	弥生	打製石鏃	3.5	2.0	0.7	4.9	腰岳産黒曜石	
148図－５	１区７号溝	弥生	磨製石鏃	4.2	1.7	0.7	4.8	頁岩	
148図－６	３号方形周溝墓	弥生	打製石鏃	7.2	2.8	1.0	23.4	緑色結晶片岩	
148図－７	１区11号溝	弥生	打製石鏃	3.3	1.9	0.4	5.9	サヌカイト	
148図－８	１区14号溝	弥生	掻器	2.2	2.1	0.5	2.9	腰岳産黒曜石	
148図－９	１区34号堀立柱建物跡柱２	弥生	小刀	2.7	8.6	1.7	46.0	サヌカイト	
148図－10	１区ピット456	弥生	2次加工剥片	3.6	2.8	1.2	11.3	姫島産黒曜石	
148図－11	１区ピット85	弥生	2次加工剥片	2.5	1.6	0.6	4.5	チャート剥片	
148図－12	１区１号竪穴住居跡一括	弥生	磨製石鎌	4.8	8.4	1.3	61.9	凝灰岩	
148図－13	１区５号溝	弥生	石庖丁	3.9	4.4	0.8	18.9	輝緑凝灰岩	
148図－14	１号方形周溝墓	弥生	石鎌	4.6	7.4	1.0	55.5	緑色結晶片岩	
148図－15	１区14号溝	弥生	石剣	4.9	3.3	0.8	17.0	凝灰岩	石戈片の可能性もある
148図－16	１区５号溝	弥生	石剣	8.9	4.0	1.9	61.8	凝灰岩	
148図－17	１号方形周溝墓	弥生	石剣	13.6	3.6	1.7	76.6	凝灰岩	
148図－18	１区20a号溝	弥生	石剣	6.2	5.1	0.6	37.4	凝灰岩	
148図－19	１区３号方形周溝墓	弥生	打製石斧	8.0	4.3	1.0	56.9	緑色結晶片岩	
148図－20	１区４号溝	弥生	打製石斧	7.7	6.1	1.4	115.2	緑色結晶片岩	
148図－21	１区50号土坑	弥生	打製石斧	8.3	5.2	1.1	80.8	緑色結晶片岩	
148図－22	１区ピット131	弥生	打製石斧	5.8	6.8	1.5	92.7	緑色結晶片岩	基部片を再利用
148図－23	１区11号溝	弥生	打製石斧	7.8	6.9	1.3	118.9	緑色結晶片岩	
148図－24	１区14号溝	弥生	打製石斧	12.2	4.5	1.8	141.3	緑色結晶片岩	
148図－25	１区4b号溝	弥生	局部磨製石斧	15.3	5.5	1.1	133.5	緑色結晶片岩	
148図－26	１区２号井戸	弥生	局部磨製石斧	8.5	7.1	0.9	84.4	緑色結晶片岩	
149図－１	１区17E号竪穴住居跡柱１	弥生	磨製石斧	7.8	4.2	1.9	101.3	安山岩	
149図－２	表採	弥生	磨製石斧	7.5	7.4	2.7	209.1	輝緑凝灰岩	
149図－３	２区23号溝	弥生	磨製石斧	7.7	7.6	2.8	167.5	安山岩質凝灰岩	
149図－４	１区5b号溝	弥生	磨製石斧	5.7	7.4	3.2	203.9	安山岩	刃部砥ぎ直し
149図－５	１区４号溝	弥生	磨製石斧	11.6	5.8	2.5	209.7	安山岩	
149図－６	１区20a号溝	弥生	磨製石斧	13.2	6.2	2.2	334.7	安山岩	刃部砥ぎ直し
149図－７	１区４号溝	弥生	磨製石斧	12.0	5.3	2.3	224.4	安山岩	
149図－８	１区20a号溝	弥生	砥石	5.4	3.5	1.4	32.4	頁岩	転用か　弥生以降の所産の可能性もある
149図－９	１区４号溝	弥生	叩き石兼凹み石	9.2	8.7	5.5	553.0	安山岩	
149図－10	１区７号溝	弥生	凹み石	10.7	9.8	5.9	962.0	安山岩	
149図－11	１区54号土坑	弥生	砥石	8.6	5.2	2.7	243.0	長石英	鋳型片の再利用
149図－12	１区３号方形周溝墓	弥生	砥石	19.4	17.6	8.8	2773.6	凝灰岩	
149図－13	１区３号方形周溝墓No．６	弥生	原石	14.6	11.7	1.1	224.4	緑色結晶片岩	
149図－14	１区36号溝	弥生	土錘	5.8	5.7	4.8	131.2		
146図－16	１区38号貯蔵穴	弥生	石剣	6.3	3.3	1.0	25.8	凝灰岩	
146図－17	１区４号貯蔵穴	弥生	石剣	5.8	3.3	1.3	23.0	凝灰岩	
146図－18	１区38号貯蔵穴	弥生	石剣	2.7	2.6	0.8	5.1	凝灰岩	

である。25は１区２号井戸、26は１区4b号溝出土で、両者とも薄い素材を使用しているので、表面の側縁剥離は右上・右下への剥離で、左側縁は左右平行になるよう整えられている。25は基部付近に右上への加工がある。26の裏面は素面の平坦面のままで側縁だけ加工している。

第149図１は１区の中世のピット113出土の磨製石斧で、欠損部を整形して再利用している。２は表採の蛤刃石斧で灰白色の安山岩質凝灰岩製である。３は２区23号溝出土の蛤刃石斧で丁寧に整形されている。167.5gを測る。４は１区5b号溝出土の蛤刃石斧の刃部で刃部の弧の湾曲が弱いので欠損部を研ぎ直したものと考えられる。５は１区４号溝出土の磨製石斧で、刃部は両刃だがやや偏っている。６は１区20a号溝出土で、刃部は平坦なので、研ぎ直している。７は１区４号溝出土の磨製石斧で、著しく風化している。８は１区20a号溝出土の砥石で、斜め方向の研磨面があるので、別の器種の破片を転用した可能性がある。弥生時代以降の所産の可能性もある。９は１区４号溝出土の叩き石兼凹み石で、広い２面と下面･側面を使っている。10は１区７号溝出土の凹み石で、両平坦面に窪みがあり、小口面２面に敲打痕跡がある。火を受けたのか、一部赤く変色している。11は１区54号土坑出土の砥石で、裏面は強い被熱を受けて黒くなっており、黒い面の縁が赤くなっている。石材が弥生時代の鋳型によく使われる長石英なので鋳型片を砥石に再利用したものだろう。12は１区３号方形周溝墓周溝出土の砥石。13は３号方形周溝墓の周溝出土の石材で、墓の主体部の石材には小さすぎるので、石器の原石とした。縄文時代に属する可能性もある。14は１区36号溝から出土した算盤玉形の大型土錘で、平坦面がないので紡錘車ではないだろう。古墳時代初頭の溝だが、類例と胎土から弥生前期に属するものと考えた。

５　弥生時代終末から古墳時代前期の遺構と遺物

本遺跡における当該期の遺構は、集落遺跡から埋葬遺跡に変わっているが、出土土器の時期差が小さいため、同一項で説明する。なお、本項における時期区分については、久住猛雄論文（註１）を参考にした。

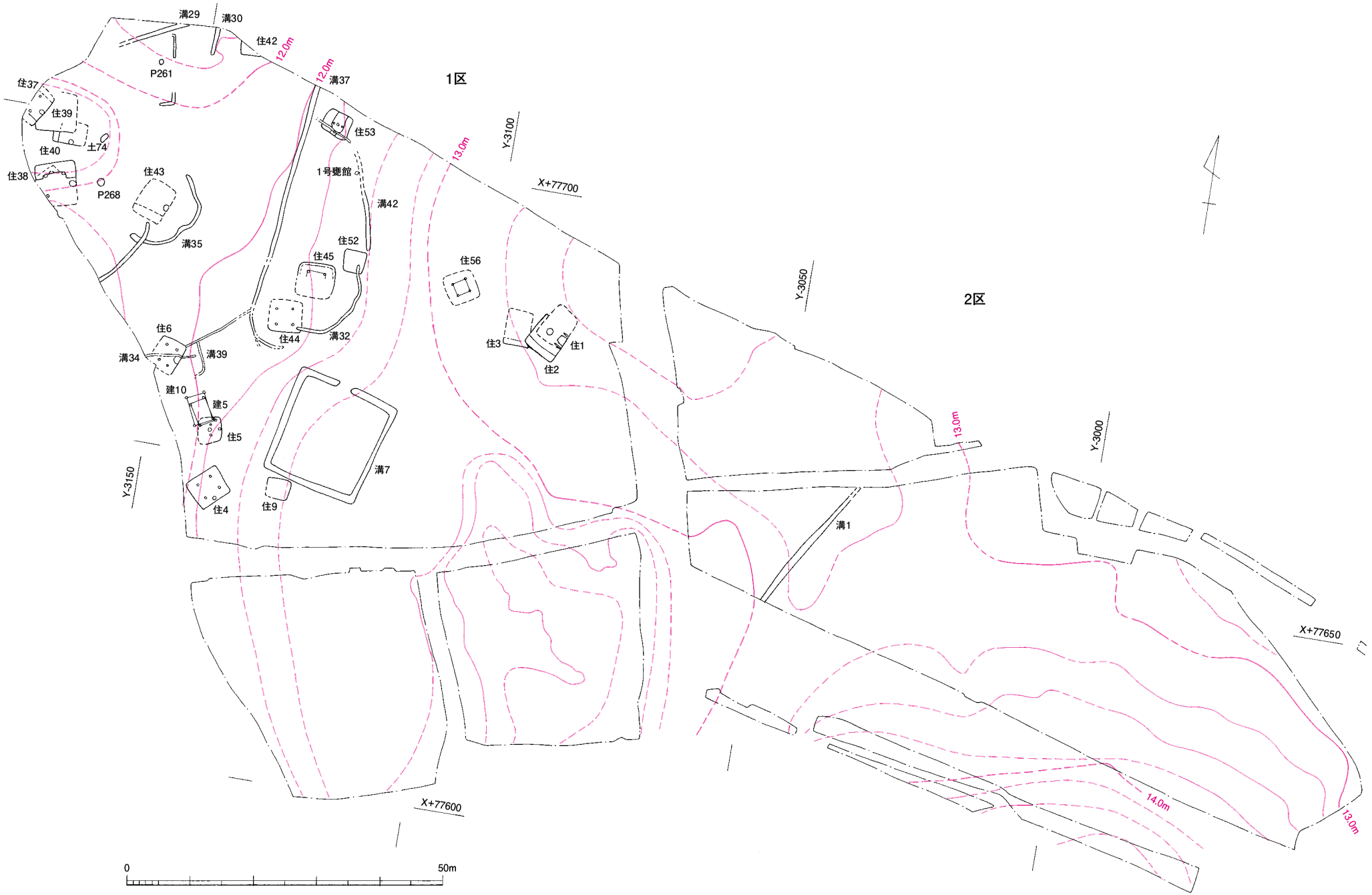
検出された遺構は、竪穴住居跡21基、掘立柱建物跡３棟、古墳１基、方形周溝墓５基、木蓋土壙墓２基、甕棺墓１基、土坑１基、溝11条などである。２区からは溝が１条検出されたのみで、他は１区の遺構である。

（１）竪穴住居跡

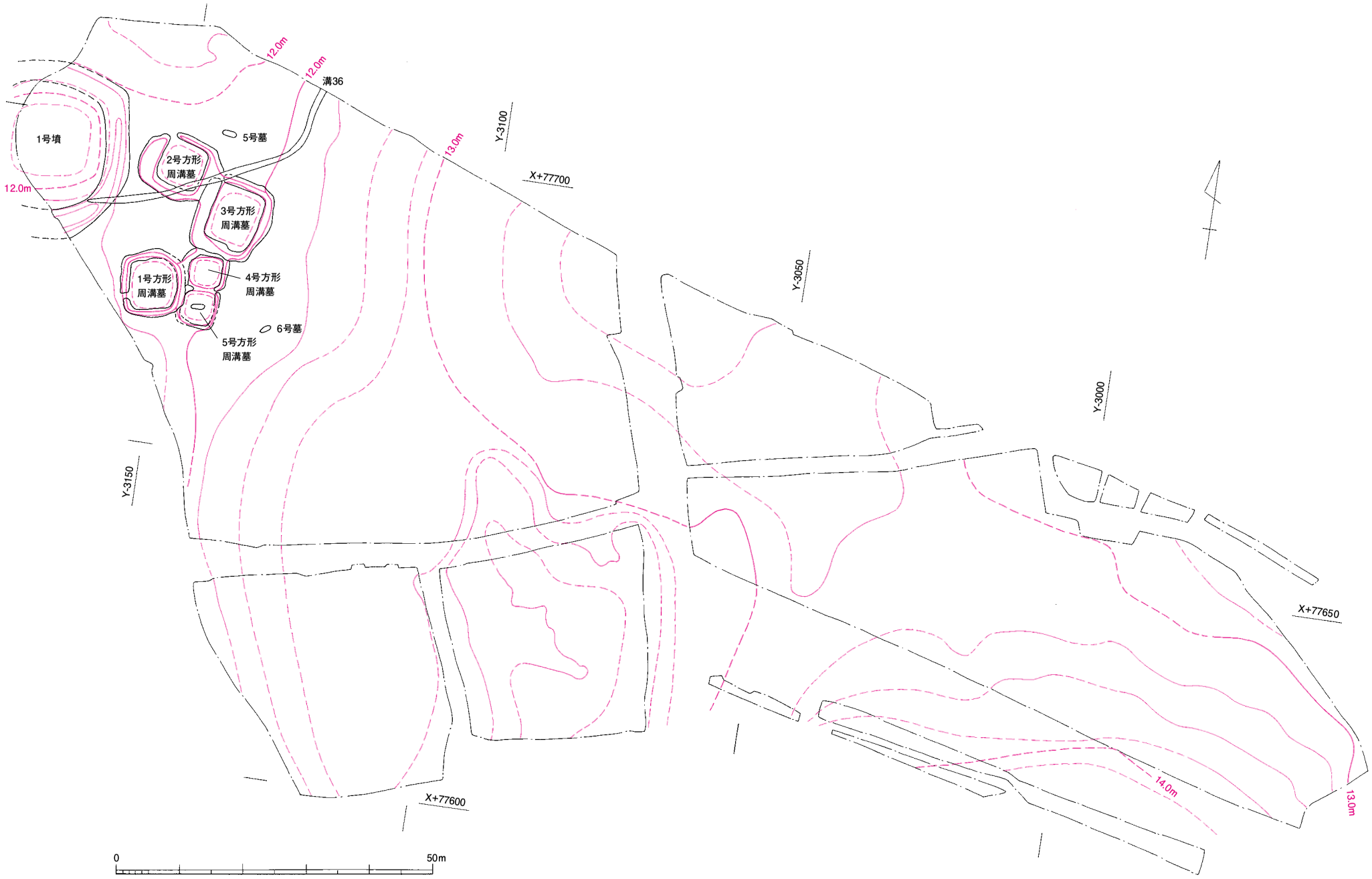
この時期の竪穴住居跡は１区からのみ検出され、17基の号数を与えているが、建替えを加えると21基となる。

１号竪穴住居跡（図版23、第152図）

１区北東部東端に位置する方形住居で、２号竪穴住居跡に切られている。西辺は削平と２号竪穴住居跡に近接していたためプランを確認できなかった。南辺にベッド状遺構をもち、東辺に小ピットを伴う屋内土坑がある。炉にあたる部分に掘り込みがあったが、焼土が残っていなかった。主柱穴は２本と４本の双方を念頭に精査したが検出できなかった。２号とは主軸方向が同じなので建替えの前の住居であろう。２号竪穴住居跡の床面から検出されているので確実に本遺構に伴う出



第150図　弥生時代終末から古墳時代初頭の略遺構配置図・地形復元図（1/800）



第151図　古墳時代前期の略遺構配置図・地形復元図（1/800）

土遺物は少ないものの、ＩＢ期新段階である。

出土遺物（図版57、第153･199図）

１は直口壺で、口縁部と胴部は図上接合である。器面摩滅しているが、わずかに胴中位に外器面が残っており、タテハケの上に幅の広いミガキが入る。内面はケズリ。内外黄橙色で、胴下位から内底は焼成不良から変色しているのみ。２は２重口縁壺で、器面摩滅で調整不明。内外赤橙色で、意図的に赤く焼成した可能性がある。３は大型壺の底部で、外底は肥厚した平底だが、肥厚部の継ぎ目に隙間の空いた部分があり、ハケの上に肥厚したことがわかる。外面ハケ、内面は調整不明だが、平滑である。外面橙褐色、内面淡橙褐灰色で、変色はない。外面に黒斑がある。４は甕で、内外面は器面剥落が著しく調整不明。内面はケズリ。口縁端部は平坦面を持ち内側は尖る。内外面橙褐色で変色はないが胎土の色調で器面が残っていないので煮沸使用の有無はわからない。５は甕で外面は器面の剥落が著しく、調整不明。内面はケズリ。口縁端部は失われている。外面橙褐色、胴中位に黒斑あり。内面は胴中位以下はにぶい暗灰褐色なので煮沸使用されている。６は小型の甕、外面は右上がりのタタキ、内面は器面剥落が著しく調整不明。外面橙褐色で変色はなく、内面は黒灰色なので焼成不良であるから煮沸使用はされていない。しかし、内面が焼成不良なので鉢ではなく、タタキが胴下位まであることから煮沸使用されていない小型甕と判断した。７は小型の高杯で、脚部は内面にしぼりがある。内外橙褐色で変色なし。裾部が短いが先端は尖っている。８は高杯で、器面摩滅で調整不明。杯部は赤橙灰色で、裾部に赤変があるので２次焼成を受けている。９は屋内土坑出土の高杯で、器面摩滅で調整不明。全面赤橙色で赤く焼成した可能性がある。透し孔は１ヶ所しか残っていないため総数は不明。10は高杯で、器面摩滅で調整不明。器面は本来赤橙色だったが、剥落して胎土の黄橙色が露出している。意図的に赤く焼成した可能性がある。透し孔は３ヶ所。11は器台で、外面は幅の狭いミガキ、内面は器面摩滅で調整不明。器面は本来暗橙褐色で変色なし。脚部との接合部分で剥離している。12は丸底壺で、口縁部は摩滅しているが端部まで残っている。内外黄橙色で変色なし。内外器面摩滅で外面にハケの痕跡がある程度。13は108号土坑出土としたが、下位の本遺構のものが混ざった可能性が高いのでここに掲載した。小型丸底壺で、器面の摩滅が著しく調整不明。外面の黄橙灰色を基調とし、黒班以外は変色なし。

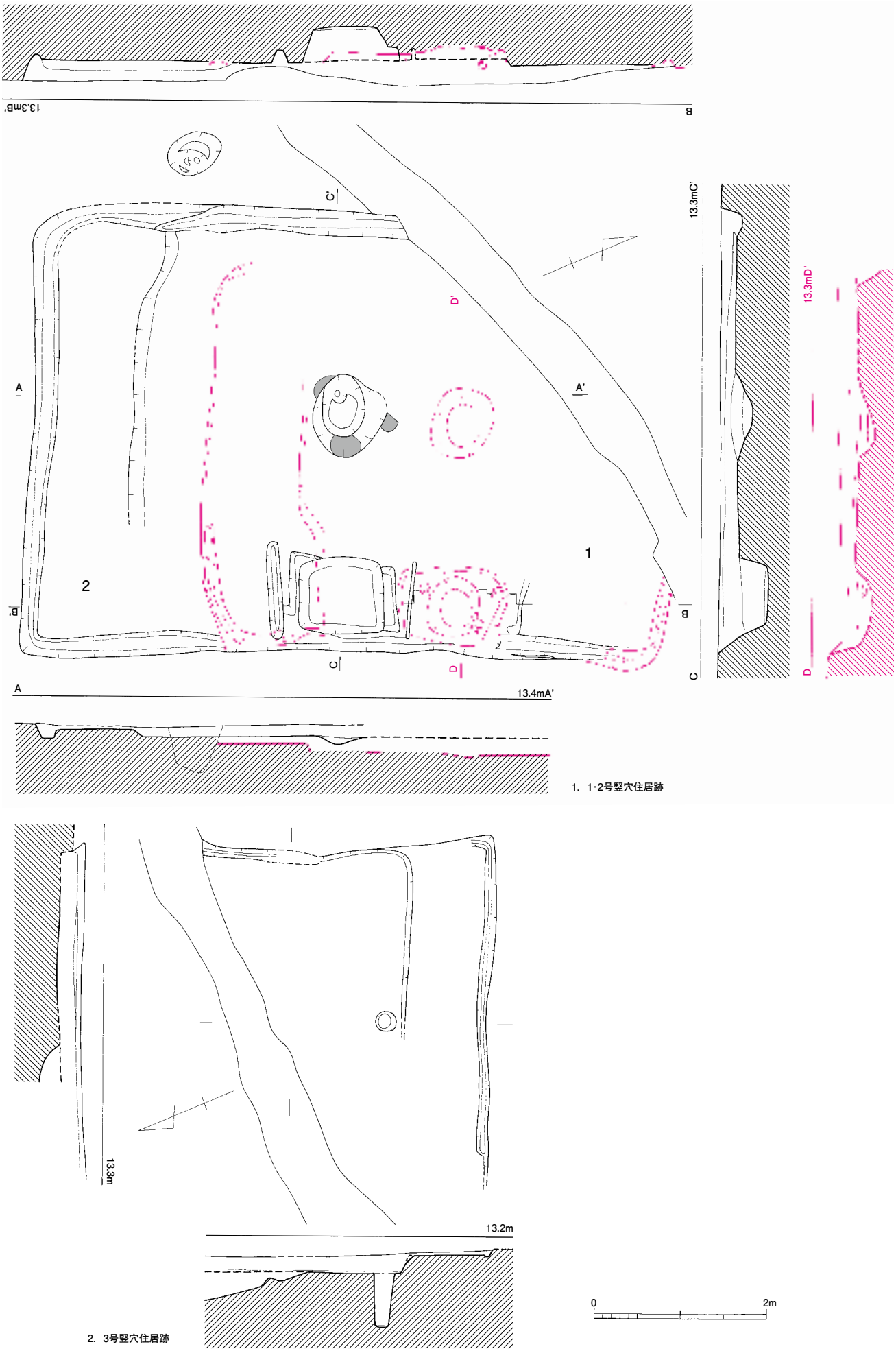
このほか、土製勾玉（第199図９）が出土した。

２号竪穴住居跡（図版23、第152図）

１区北東部東端に位置する長方形住居で、１号竪穴住居跡を切る。北辺は削平と２号竪穴住居跡のプランと近接していたためコーナーを確認できなかった。南北辺にベッド状遺構をもち、東辺に狭い溝を伴う屋内土坑がある。炉は掘り込みの縁辺に焼土が残っており、掘り下げすぎた可能性がある。主柱穴は２本と４本の双方を念頭に精査したが検出できなかった。壁沿いには周溝も検出されている。１号竪穴住居跡とは主軸方向が同じなので建替えの関係にあるだろう。出土遺物は床面から浮いた物がほとんどであった。出土遺物からⅡＡ古段階に属する。

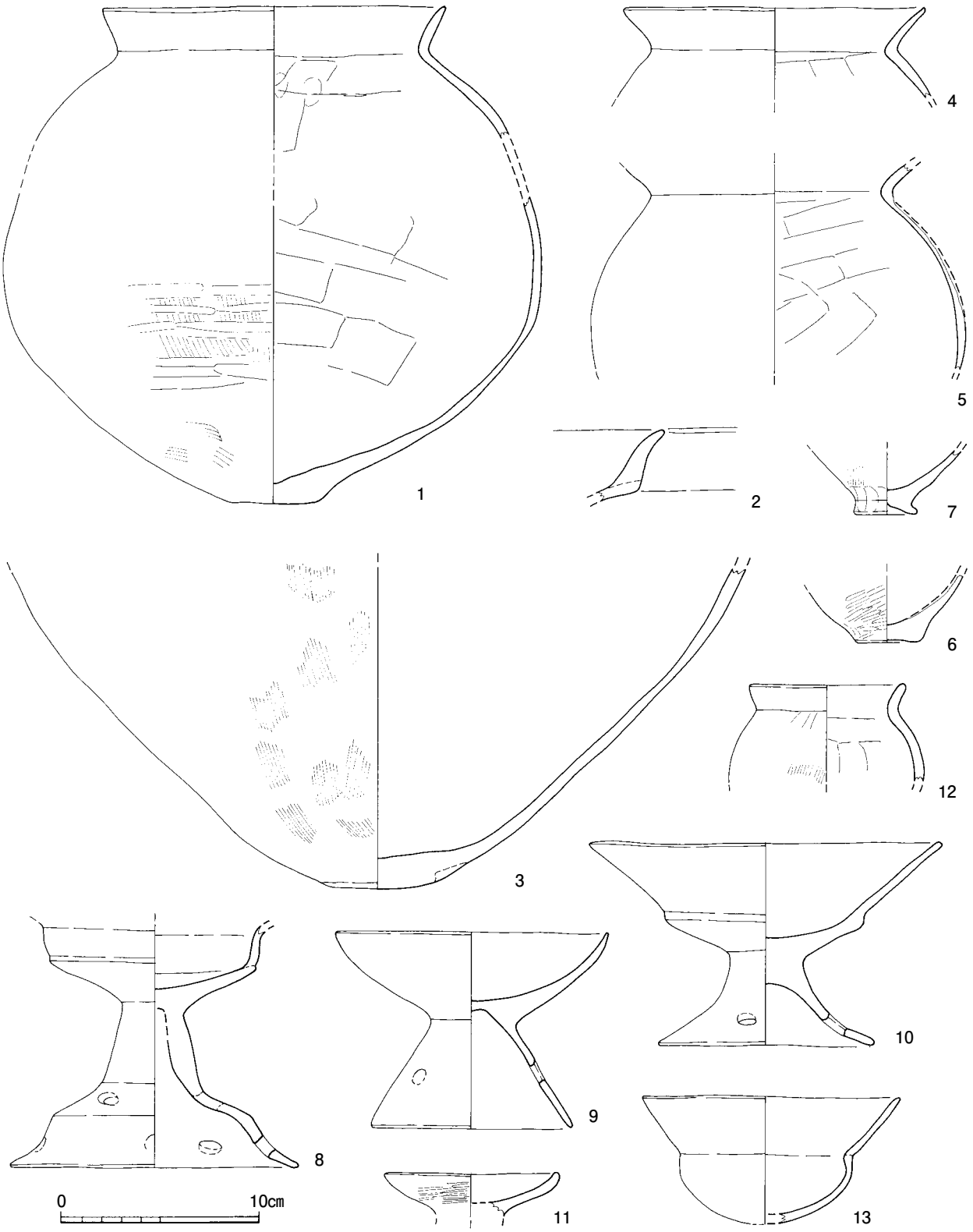
出土遺物（図版57、第155･199図）

１は２重口縁壺で、器面摩滅で調整不明。全面にぶい黄橙色。２は２重口縁壺で、外面は器面の剥落が著しく調整不明、外面頸部にタタキらしい痕跡がある。外面頸部に積み上げ痕が残る。内外面黄橙色だが、胎土の色調が露出したもので煮沸使用の有無は不明。３は大型壺の口縁部で、口唇



第152図　弥生時代終末から古墳時代初頭の竪穴住居跡実測図１　1区１～３号竪穴住居跡（1/60）

部は摩滅しており不明瞭である。外面は黄灰色だが、胎土の色調である。内面は黄灰白色で焼成不良だろう。４は外面が黄灰色で変色がないので壺の底部である。外底は肥厚して蛇ノ目状の底部である。外面はナデのみ、内面摩滅のためは調整不明。内面の暗灰色は焼成不良のためである。外面胴下位から底部に黒斑あり。５は外面に赤変がないので壺だろう。外面は器面が摩滅して不明量ながらタキの痕跡はない。内面も不明。外面は黄橙色、内面は黄色で変色なし。６は甕で、外面は器



第153図　弥生時代終末から古墳時代初頭の竪穴住居跡出土土器実測図１　１号竪穴住居跡(1/ ３)

面の剥落が著しく調整不明。内外面黄橙色だが、胎土の色調が露出したもので煮沸使用の有無は不明。７は甕で、外面は器面の剥落が著しく調整不明だが、タタキらしい痕跡がある。内面はケズリの痕跡が残る。内外面頸部が黄橙色、それ以外はにぶい黄灰色で、煮沸使用の変色パターンである。８は小型高杯で、器面摩滅で調整不明。全面にぶい黄灰色で変色なし。透し孔は確認できないが欠損している部分にあるのだろう。９は高杯で、器面摩滅で調整不明。全面にぶい黄灰褐色で変色なし。透し孔は２ヶ所確認できるので４ヶ所だろう。10は高杯で、器面摩滅で調整不明だが、脚部外面はミガキらしい平坦面がある。全面にぶい黄灰白色で変色なし。透し孔は４ヶ所。11は小型鉢で、外面は器面摩滅で調整不明だが、平滑なことからナデかミガキであろう。内面はケズリ。外面は赤橙褐色から黄橙色で、意図的に赤く焼いた可能性がある。底部に黒斑がある。口縁端部は残りが悪いが尖る。12は小型高杯で、内面はハケ、外面は器面摩滅で調整不明。全面にぶい黄橙灰色で変色なし。透し孔は４ヶ所。

このほか、土製勾玉（第199図10）・砥石（第199図７）が出土している。

３号竪穴住居跡（図版23、第152図）

１区北東部東端に位置する長方形住居で、２号竪穴住居跡に切られる。検出段階では切り合いが確認できなかったが、３号竪穴住居跡のベッド状遺構上に検出された２号竪穴住居跡のプラン上面に貼床の痕跡がなかったことから先後関係を判断した。南辺にベッド状遺構をもち、半分以上が削平によって失われているため確実性に欠けるが、南側主柱穴は検出されなかった。出土遺物からⅠA期に属する。

出土遺物（図版57、第155図）

13は壺の底部で、器面剥落が著しい。底部は小さな平底で摩滅しているので蛇ノ目状なのかわからない。外面は凹凸が多いのでタタキの可能性が高い。外面はケズリ。外面暗黄橙色、内面橙褐色から赤橙色を呈する。14は壺の胴部で、器面摩滅で外面はタテハケが部分的に残る。内面は一部に残っている部分があるので、器壁は本来薄いとわかる。外面に方形突帯がつき、無文。内外赤橙色を呈する。外面に黒斑あり。

４号竪穴住居跡（図版23、第154図）

１区中央部南西側に位置する正方形住居で、10号貯蔵穴・38号土坑に切られる。ベッド状遺構も想定したが貼床に硬化がなかったため床面が捉えにくく、確認できなかった。床面からやや浮いて炭化材が見られた。主柱穴は４本で、南壁際中央のピットは円形プランで小型だが、遺構の深さからみて屋内土坑と考えられる。出土遺物からⅡA古段階に属する。

出土遺物（第155図）

15は高杯で、器壁が厚い。器面が摩滅しており調整不明。内外面にぶい黄灰色。16は高杯脚部で、器壁が厚い。器面が摩滅しており調整不明。内外面にぶい黄灰色から赤橙色。17は高杯脚部で、器壁が厚い。器面が摩滅しており調整不明。内外面にぶい黄灰色。18は小型高杯で、器面が摩滅しており調整不明。内外面にぶい黄灰色から赤橙色。透し孔は３ヶ所。19はミニチュアの高杯だろうか。手捏成型で調整はオサエのみ。外面橙褐色、内面暗黄灰色で、マーブル状の胎土。

５号竪穴住居跡（図版23、第154図）

１区中央部南西側に位置する方形住居で、5･10号掘立柱建物跡の柱穴が床面とベッド状遺構上面から検出された。ベッド状遺構は貼土であったことから、掘立柱建物跡が切っていることは間違いない。９号貯蔵穴は本遺構のコーナー部分と重複していたため、平面プランの切り合いは確認できなかったが本遺構が切っている。主柱穴は２本で、柱穴径が小さいが柱痕部分ではなく掘り方だった。炉跡は底面だけに焼土が広がっていた。東壁際中央のピットは円形プランで小型だが、遺構の深さからみて屋内土坑と考えられる。出土遺物からＩB期古段階に属する。

出土遺物（図版57、第156･158図）

第156図１は壺の頸部で、頸部が大きく外反するので複合口縁壺の可能性が高い。器面摩滅で調整不明、内面肩部はケズリ状のナデか。内外黄橙色を基調とするが胎土の黒灰色が露出している。２は２重口縁壺で、器面摩滅で調整不明。赤橙色の器面がわずかに残るので意図的に赤く焼成した可能性がある。３は直口壺で、器面は摩滅しており外面はハケがわずかに見られるがタタキの痕跡はない。内面はケズリであろう。外面赤橙色は胎土の色調で、本来暗灰褐色、内面は焼成不良でにぶい暗黄灰色だが煮沸使用の痕跡はない。４は直口壺で、器面は摩滅しており調整不明。外面は黄橙灰色、内面黄灰色で変色なし。５は壺の底部で２本の棒状のスタンプが底部に残る。内外器面摩滅で調整不明。黄橙色で変色なし。６は甕で、器面摩滅ながら内外面は目の粗いハケがかろうじて観察できる。内面は口縁部のみ黄橙色でそれ以下は黒灰色で焼成不良。外面は黄橙灰色。７は甕で、内外ハケ、外面黄橙色。８は甕で、外面目の細かい丁寧なタテハケ、内面ケズリ。外面赤橙色だが煤の付着がないので煮沸使用に伴う赤変ではない。意図的に赤く焼成した可能性が高い。内面は焼成不良で黒茶褐色を呈する。９は甕で、目の粗いハケの後、板状のナデが入る粗い器面調整で、表面はゴワゴワしており、内面はケズリだが器面が厚い。外面は黄橙色で内面は黄灰白色なので煮沸使用はされていないが、内容物による変色がある。10は長胴の甕で底部は尖る。外面肩部は器面が摩滅しているが本来タタキが入るだろう。内面ハケ。外面胴上半は茶褐色、下半は暗灰褐色で煤の付着も見られる。内面は頸部まで暗灰色で黒い炭化物のようなものが点在する。11は小型甕で、底部は摩滅しているが平底で、胴下位には屈曲がないので弥生前期の甕の混入ではない。外面タテハケ、内面丁寧なヨコハケ。外面黄橙灰色、内面は橙褐色で変色や器面摩滅がないので煮沸使用されていない。

第158図１は小型甕で、器壁が厚い。外面は器面摩滅で、内面は丁寧なハケ、外面黄灰色、内面黄橙色で、変色なし。２は小型甕で、器面剥落が著しい。底部は丸みをもつ平底で、外面黄橙色で黒斑周辺は黄灰色。内面は淡赤橙杯色で、変色や器面摩滅がないので煮沸使用されていない。３は高杯の杯部で、内外器面摩滅で調整不明。黄灰白色で変色なし。４は高杯脚部で、内外器面摩滅で調整不明。外面上半は赤橙色で下半は黄灰白色で意図的に粘土を分けた可能性がある。ただし黒斑周囲も黄灰色を呈する。透し孔は対面に２ヶ所のみ。５は高杯の脚部で、器面摩滅で調整不明。内面に積み上げ痕あり。透し孔は３ヶ所。外面黄灰色で変色なし。杯部との接合部には縁に刻目が入る。６は支脚で、上面には一部肥厚しており、突起がつく可能性がある。器壁が厚く重い。側面は板状工具によるオサエ面があり、内面は板状工具によるケズリ。全面黒褐色から暗灰褐色で、赤変している部分がある。７は大甕の胴部片で、積み上げ痕が残る。断面方形突帯にはハケ状工具による斜め刺突が入る。器面摩滅で調整不明。内外黄橙色で変色なし。８は底部を肥厚させている。器

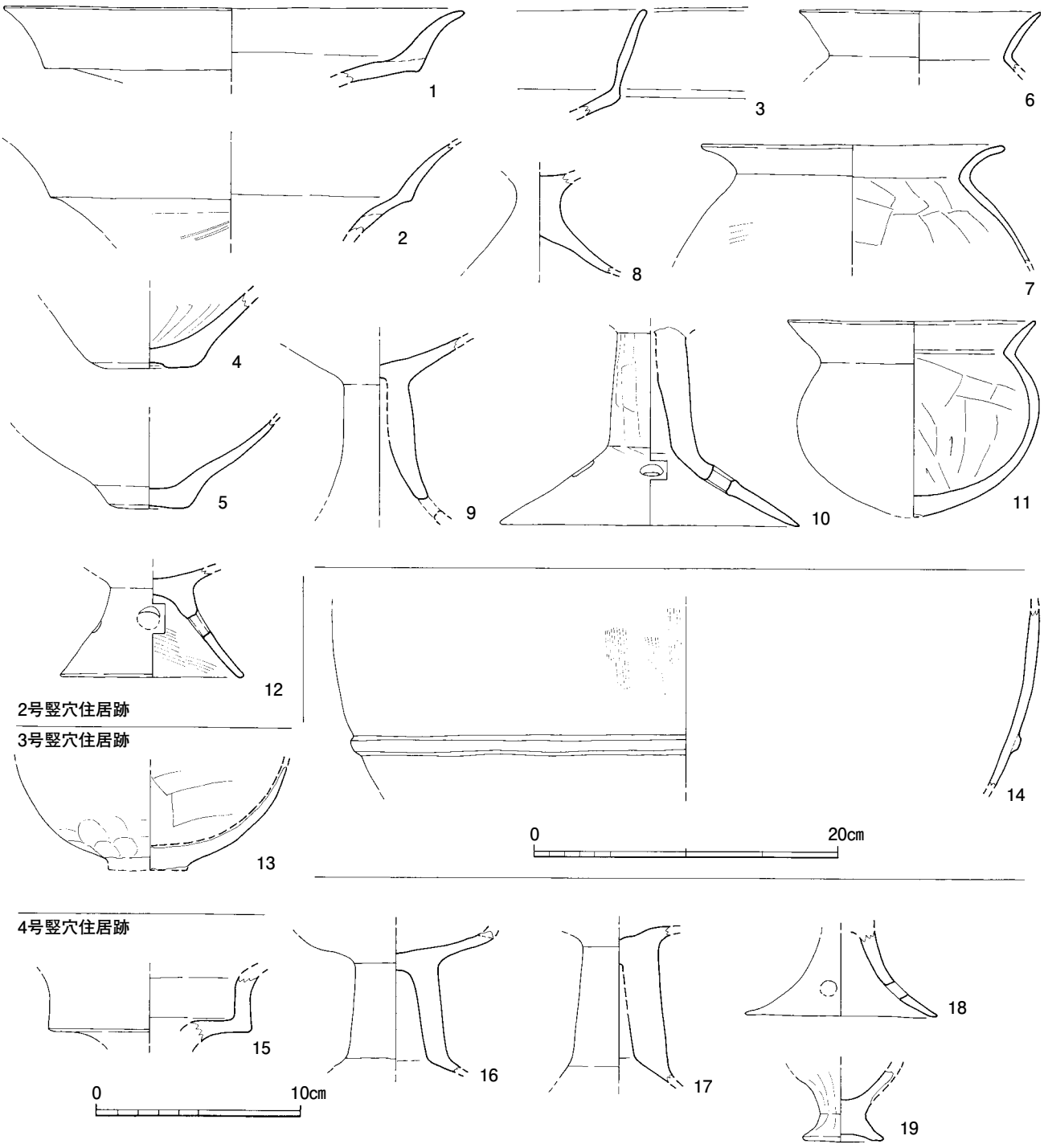
第154図　弥生時代終末から古墳時代初頭の竪穴住居跡実測図２　1区4･5号竪穴住居跡（1/60）

面摩滅で調整不明。内外黄橙色で焼成不良の変色もないので鉢か。９は手捏ねの把手と見られる。器面はオサエのみで凹凸が多い粗い作りで、内外黄橙色で変色はない。剥離部分の状況から、杯のようなものがつくと見られる。

このほか、土製模造鏡（第199図11）と小杯（第199図12）が出土している。

６号竪穴住居跡（図版24、第157図）

１区中央部西端に位置する正方形住居で、32号溝の西端に切られる。11号土坑は床面から検出され、切り合い関係はわからなかった。４本主柱構造で南西隅の柱穴は径が非常に小さいが他の柱穴に匹敵する深さであった。西壁中央には方形の屋内土坑があった。上面を大きく削平されており、残りが悪かったため断片的にしか確認できなかったが、北辺に貼土のベッド状遺構があった。これを掘り下げると、下位の遺構の周溝が検出され、主軸方向が一致することから６号竪穴住居跡の前身になる住居と考えられたがこれに伴う主柱穴や屋内土坑がなかったので確実性に欠ける。出土遺



第155図　弥生時代終末から古墳時代初頭の竪穴住居跡出土土器実測図２
1区2 ～ 4号竪穴住居跡（14は1/4、他は1/ 3）

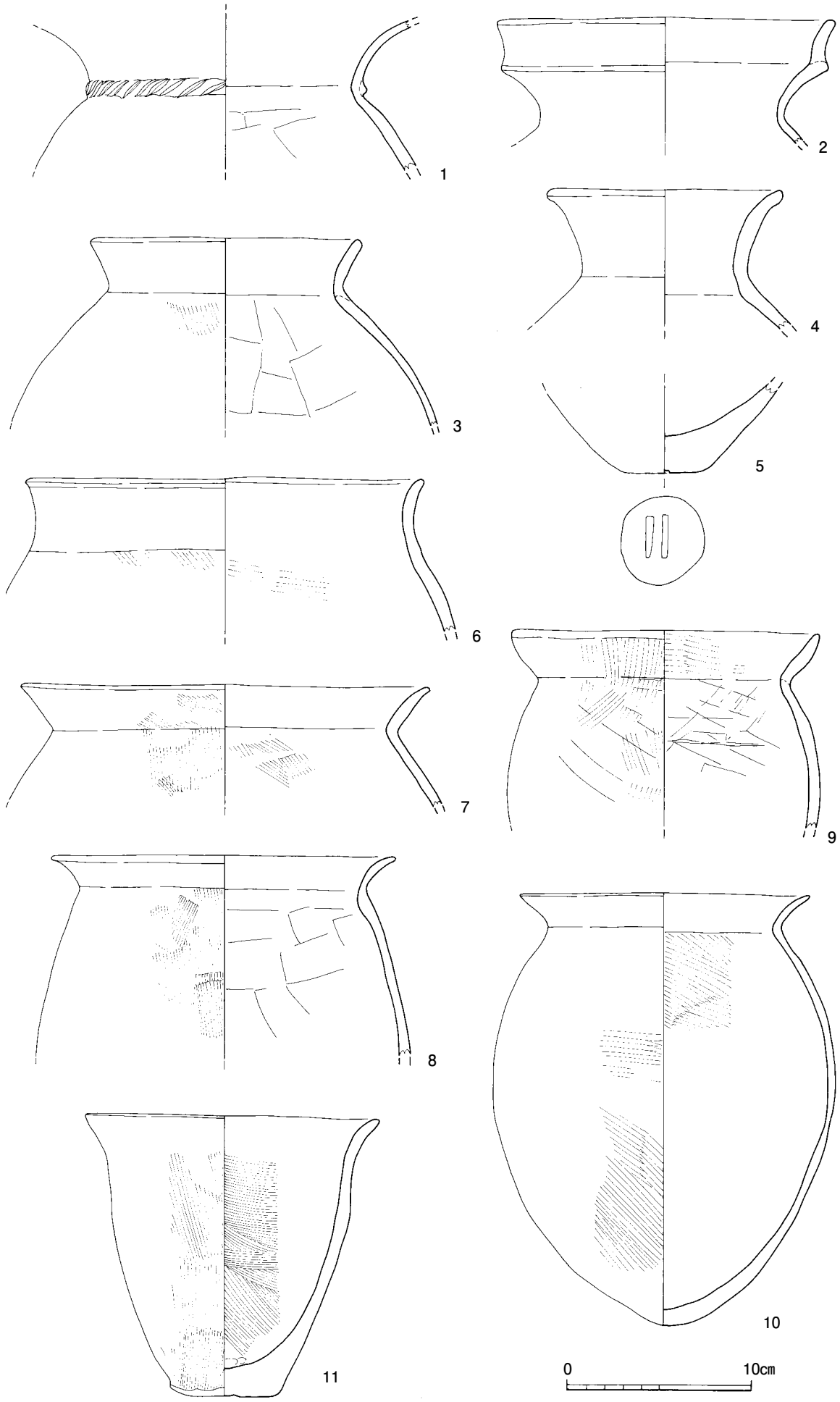
物からＩB期新段階に属する。
出土遺物（第158図）
10は甕の小片で、歪みがあるため傾きは不確実。器面摩滅だが、外面はハケ、内面は調整不明。外面から内面口縁部は黄橙色、内面肩部は暗黄灰色で焼成不良。11は貼ベッド内出土の甕の口縁部で小片のため反転復元できないが、小型品ではなく、器壁が薄いのは器面摩滅のため。器面調整は残っていない。外面から内面口縁部は暗黄灰褐色、内面頸部は黄橙色なので煮沸使用されている。12は小型高杯の頸部で器面摩滅で調整不明。内外橙褐色から黄橙色で、黒斑が多い。杯部がすべて外れており、裾部も水平に失われているので、反転して杯として使用した可能性が高い。

９号竪穴住居跡（第157図）
１区中央部南西側に位置する小型方形住居で、４号溝西辺に切られる。10･12号竪穴住居跡との切り合いは不鮮明だったが、切っているだろう。屋内施設は周溝のみで、主柱穴や炉跡・屋内土坑は確認できなかった。貼床があり、東壁の下に別の掘り込みがあったが、明確なプランでなく遺物も出土しなかったので遺構としていない。出土遺物からＩB期古段階に属する。
出土遺物（第158図）
13は甕で胴部と底部が図上接合で、底部は小さな平底、外面右上のタタキで胴下位はタタキをナデ消している。内面ケズリが摩滅している。

37号竪穴住居跡（第159図）
１区北西部北西端に位置する方形住居で、西側を大きく撹乱に切られる。39号竪穴住居跡を切り、南端が80号土坑と切り合うが、先後関係は確認できなかった。南北にベッド状遺構を持ち、東壁中央のピットは屋内土坑と見られる。主柱穴と見られる深い柱穴の配置から２本柱になるだろう。ベッド状遺構は削り出しで、貼床も確認できなかった。出土遺物がなく時期を特定できない。

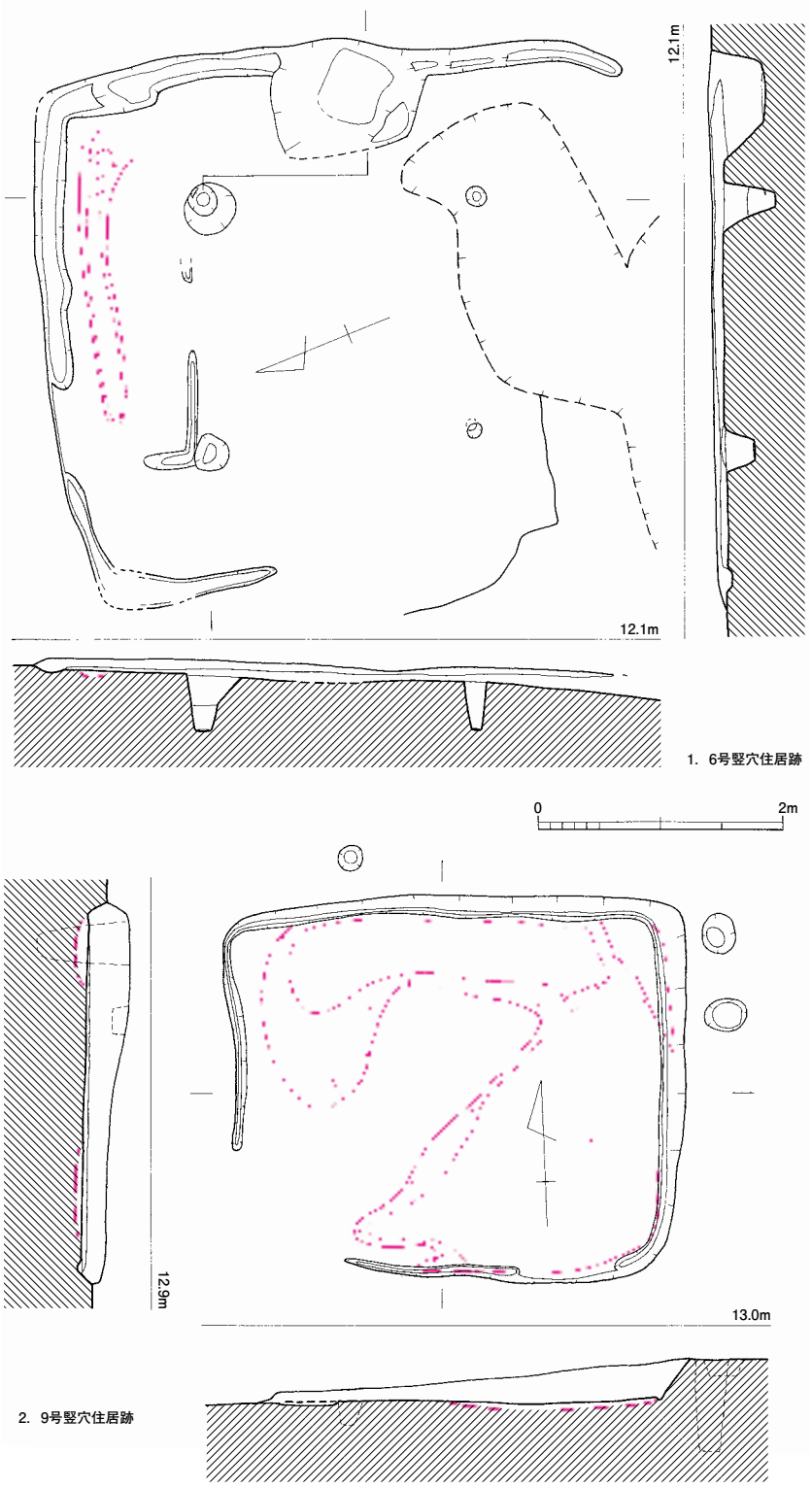
38a ～ c号竪穴住居跡（図版24、第160図）
１区中央部西端に位置する正方形住居で、南西側を大きく撹乱に切られる。東壁沿いに屋内土坑があり、北辺に貼土によるベッド状遺構がつく。ベッド状遺構の内側角に主柱穴があることから４本柱構造で、炉はほとんど掘り込みがなかった。出土遺物は多く、北側から投棄されたか流れ込んだものでほとんど床面から浮いていた。貼床も見られ、ベッド状遺構とともに掘り下げると、主軸方向を異にする周溝が検出されたので、これを38b号とした。この周溝は２条併走するので、北側にベッド状遺構を持ち、その内角の位置に主柱穴をもつタイプであろう。内側の周溝はさらに別の住居の周溝で、38c号が存在すると考えられた。38b号については屋内土坑がないものの炉跡が確認できた。38c号については屋内土坑も炉も見つからないので確実性に欠けるが、４本柱穴になると思われる。この柱穴が周囲のピットと隔絶していたことから、１基の住居として報告する。出土遺物から38a号はＩB期新、38b号は1B期古段階に属し、38c号は時期を特定できない。
出土遺物（図版57、第161図）

38a号竪穴住居跡

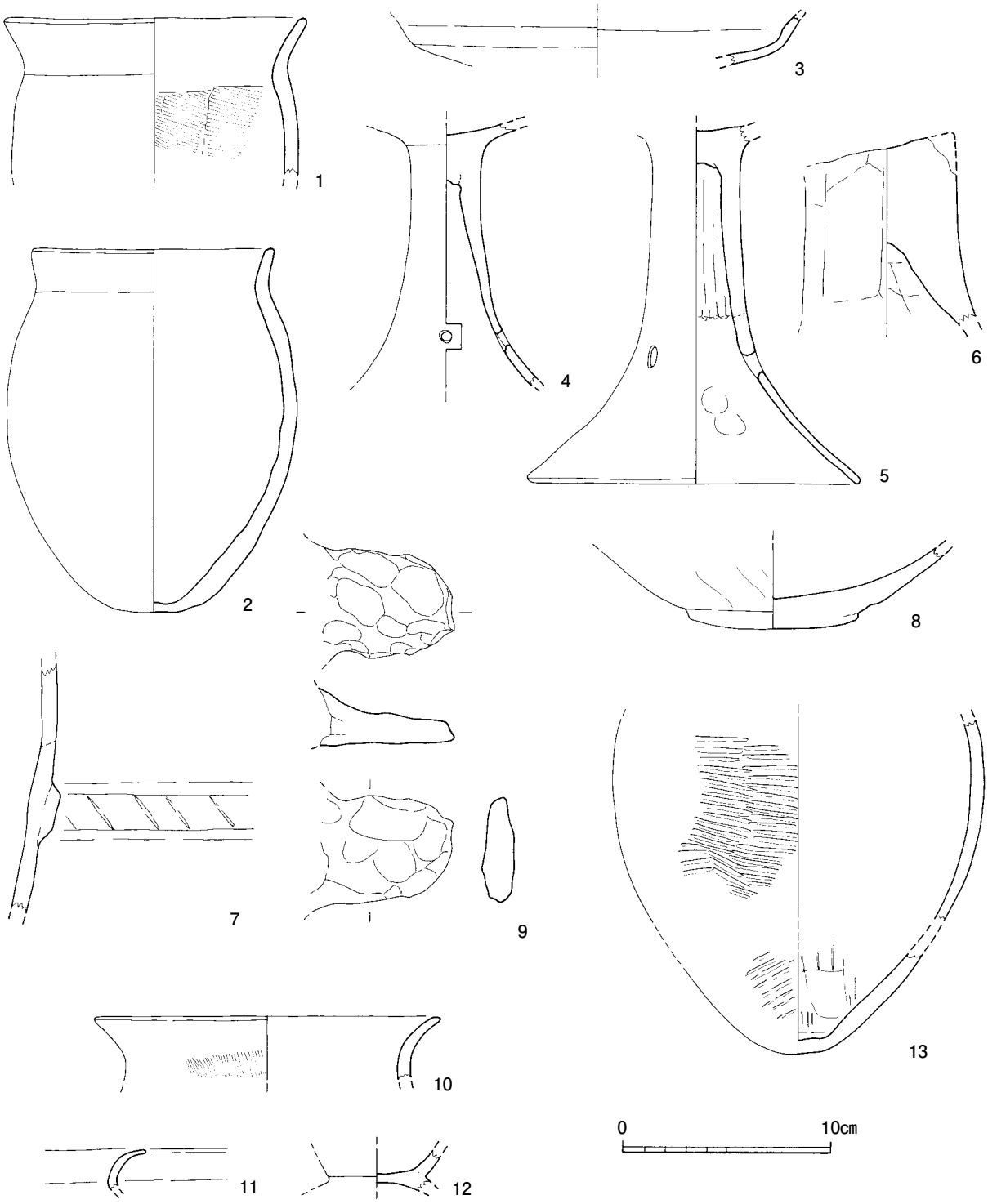


第156図　弥生時代終末から古墳時代初頭の竪穴住居跡出土土器実測図３
1区５号竪穴住居跡（1/ ３）

１は２重口縁壺で、内外ナデで赤橙色を呈する。意図的に赤く焼成した可能性がある。２は主柱穴１から出土した直口壺で内外ナデ、肩部内面はケズリ。口縁端部は跳ね上げ。内外黄橙色で変色なし。３は小型甕で、器壁が厚い粗雑な造り。底部は欠損している器面の残りはよいが外面は板状工具のオサエで器面の凹凸が著しい。内面はケズリ。口唇部は片単面をもつ。外面は上半が橙褐色で下半は黒褐色、内面も上半は黄橙色だが下半は変色しているので煮沸使用されている。４は甕で、器面摩滅で、口縁部は厚く、端部は摩滅しているため不明瞭。外面頸部に左上タタキの痕跡が



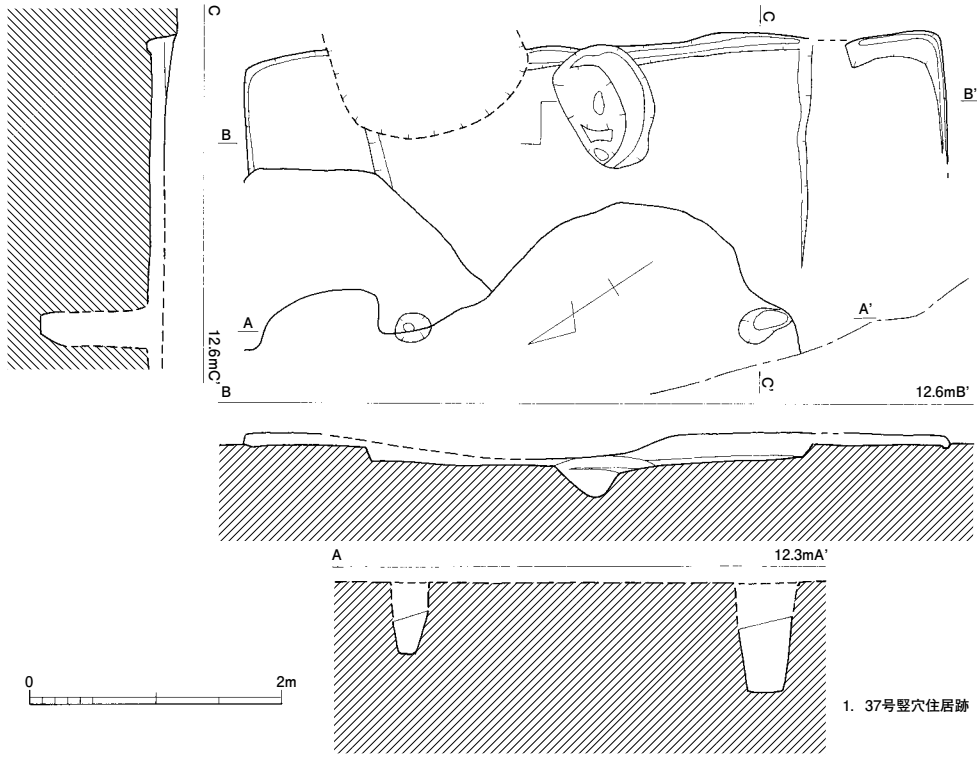
第157図　弥生時代終末から古墳時代初頭の竪穴住居跡実測図３　1区6･9号竪穴住居跡（1/60）

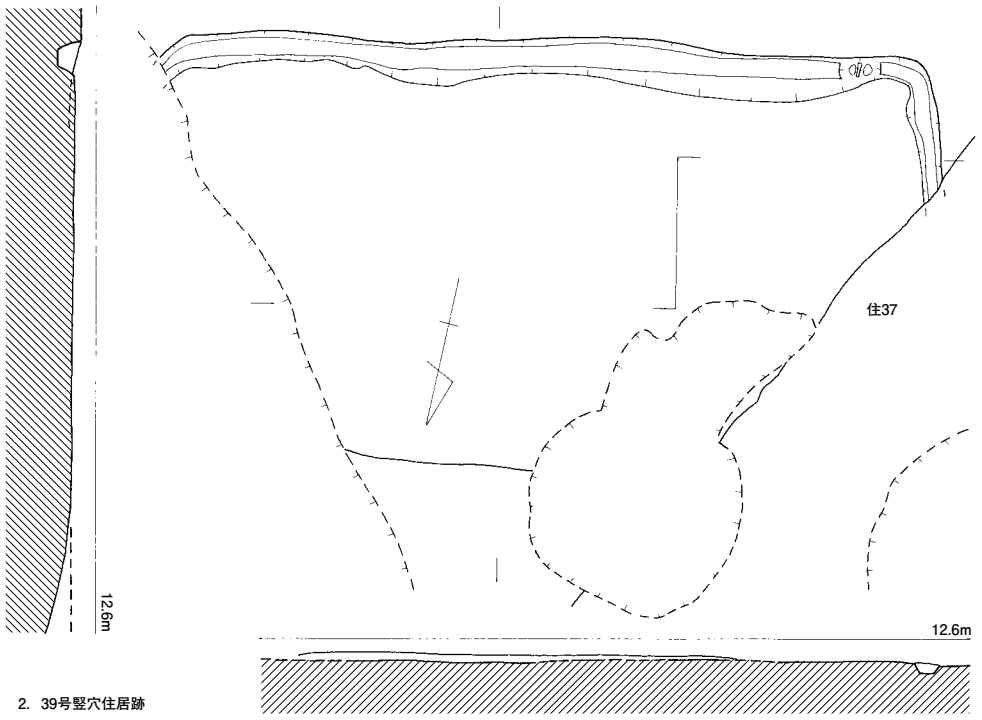


第158図　弥生時代終末から古墳時代初頭の竪穴住居跡出土土器実測図４
1区5･6･9号竪穴住居跡（1/ 3）

かろうじて残る。内面ケズリ。外面暗灰褐色で煤が付着する部分がある。内面は肩部が暗黄灰褐色で煮沸使用されている。５は甕で、口縁端部は跳ね上げる。外面は摩滅で不鮮明だがハケの痕跡がある。内面はケズリ。内外黄灰色だが胎の色調で、本来の器面は失われている。精良軟質で、褐色パミスが目立つ。６は小型甕で、口縁部と肩部の図上接合。外面は右上タタキの後ハケ、内面はケズリ。口縁端部は尖る。外面は橙褐色で、内面にぶい灰褐色で、口縁部は赤変しているので煮沸使用されている。７は甕で、外面は右上タタキ、内面摩滅で調整不明。器壁は厚い。外面肩部は赤橙色で胴下位は暗灰褐色に変色し、内面は暗黄灰褐色なので煮沸使用されている。８は山陰系の甕

で、器面摩滅で調整不明。外面暗灰褐色、内面にぶい暗黄灰褐色、内面肩部はケズリ。10は小型高杯で内外は摩滅のため調整不明。穿孔は３つ。内外黄橙色で変色なし。11は高杯で口縁部が杯部から直立気味に立ち上がるタイプの口縁部が短いものである。内外器面摩滅で調整不明。内外橙褐色で変色なし。裾に穿孔が４つある。12は高杯で、内外は器面摩滅のため調整不明。穿孔は４つ。内外黄橙色で変色なし。13は小型器台で、内外器面摩滅で調整不明。内外黄灰色。褐色パミスを多く含む胎土。14は小型高杯で内外は摩滅のため調整不明。穿孔は１つしか残っていないので総数は不





第159図　弥生時代終末から古墳時代初頭の竪穴住居跡実測図４　1区37･39号竪穴住居跡（1/60）

明。内外黄橙色から赤黄橙色でやや赤みを帯びるが、被熱によるものではない。15は小型高杯で外面裾部はハケをナデ消しでいる。穿孔は３つ。内外暗黄灰色で変色なし。16は器台で赤色顔料が塗布されている。器面が摩滅しているため調整不明。内外黄橙色を呈する。17･18は小型器台で、18は外面は幅の狭いミガキが丁寧に施され、内面は摩滅のため不明。穿孔は４つ。内外黄橙色で変色なし。19･20は柳井田式土器に近似例があるので杯だろう。高台状の底部をもち、一見すると蓋のようだが、19は底部に穿孔が２ヶ所ある。穿孔は内側から棒を差し込み、左右に動かしながら開けている。孔には紐ズレの痕跡はないが、孔の内面が外面と同じ色調なので焼成前に開けられている。外面ミガキ、内面は器面摩滅で調整不明。外面は黄灰色で黒斑あり、内面の黄橙色は胎が露出

第160図　弥生時代終末から古墳時代初頭の竪穴住居跡実測図５　1区38号竪穴住居跡（1/60）

したもので、橙褐色だろう。20は器面摩滅で調整不明。外面は天井部内面も含めて黄橙色で赤変している、内面は灰褐色で黒褐色の部分は黒斑。天井部完存で積み上げ方法不明。21は台付鉢で、内外面幅の広いミガキ、内面と外面の上半はにぶい黄橙色、下半は暗灰褐色で、煮沸使用されていない。22は内外煮沸使用の痕跡がないので鉢だろう。外底部は肥厚で蛇ノ目状を呈する。内底は、ナデ工具痕が集中する。外面黄橙色で、内面にぶい暗黄灰色。23は鉢で内面はナデ、外面は口縁部がヨコナデで体部は粗いナデでひびが多く入る。内外面黄橙色、外面底部には黒斑が入る。底部は丸底。24は小杯で、外面はオサエ、内面は器面摩滅で調整不明。内外面黄橙色で、外面底部には黒斑が入る。25は杯で、手捏ね成型でオサエ痕を多く残す。内外橙褐色で変色なし。外面に黒斑あり。

このほか、打製石鏃（第199図１）が出土しているが混入かもしれない。

38b号竪穴住居跡

９は小型器台で、脚部はオサエが多く残る整形が粗いものだが、杯部内面のハケは丁寧である。内外赤橙色だが、赤変でなく焼成が強かったためだろう。26は不明棒状土製品で、手捏ね成型で、１面に黒斑があるので焼成時に接地していた可能性が高い。ほかの面は黄橙色で変色がないので煮沸使用するものではない。柄杓の把手の可能性が高い。

39号竪穴住居跡（図版24、第159図）

１区北西部北西端に位置し、南端を37号竪穴住居跡に切られ、40号竪穴住居跡を切る。周溝は確認できたが、北半分を撹乱に切られているため全体像がわかりにくい。住居床面から検出される柱穴はいずれも浅く、主柱穴がない住居と考えた。出土遺物がなく時期を特定できない。

40号竪穴住居跡（図版24、第162図）

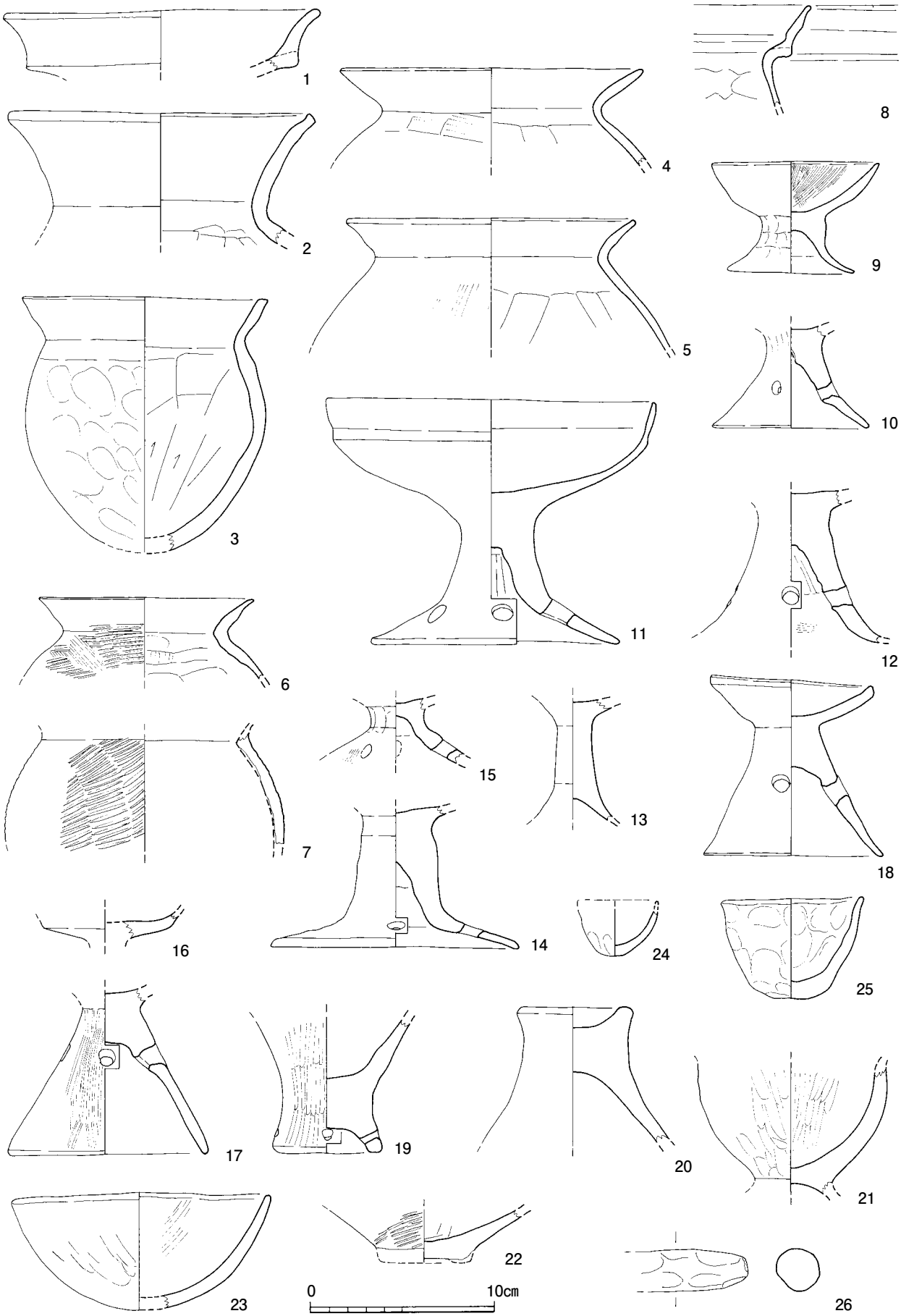
１区中央部西端に位置する長方形住居で、39号竪穴住居跡に切られて明確に検出された。東半分を撹乱に切られる。南壁沿いに屋内土坑があり、西壁に基盤層削り出しのベッド状遺構がつく。２本主柱穴構造になると思われるが、主柱穴は検出されなかった。炭化材と焼土が見られ、床面付近に達しているため炉跡の焼土と重なり、掘り込みもほとんどなかったので、炉跡のプランが明確に円形にならなかった。出土遺物からＩA期に属する。

出土遺物（第165図）

1･2は炉直上から出土した高杯で、１は内外器面摩滅で調整不明。外面は黄橙色で、内面はにぶい暗黄灰黒色なので伏せ焼きされている。２は器面摩滅で調整不明。内外黄橙色を呈する。3･4は小型の口縁が跳ね上がる甕で、近似するがやや大きさが異なるので別個体である。器面摩滅で調整不明だが、３は内面肩部にケズリかナデの痕跡がある。４の外面はナデのみか。内外黄橙色から黄橙褐色で変色ないので煮沸使用されていない。

42号竪穴住居跡（図版25、第162図）

１区中央部北端に位置する方形住居で、南西角が検出されたのみ全体像がわからない。西側に１段高いテラスがあったが、南辺が段の所で小さく張り出すことから、２基が切り合っていたものと考えられ、a･b号とした。遺物は一括して取り上げたが、掲載したものはいずれも42a号のもので



第161図　弥生時代終末から古墳時代初頭の竪穴住居跡出土土器実測図５
1区38号竪穴住居跡（1/ 3）

ある。42a号には貼床上に周溝があったが、ベッド状遺構はなかった。ⅠB期古段階に属する。
出土遺物（第165図）

５は有段高杯で、器面摩滅で調整不明。外面明淡黄橙色、内面黄橙色で変色なし。６は小型高杯で、器面摩滅で調整不明。内外にぶい黄灰色で黒斑あり。

43号竪穴住居跡（図版25、第163図）

１区中央部西側に位置する方形住居で、東辺の一部が検出されたのみで全体像がわからない。屋内土坑と見られる方形ピットに沿う東壁と、それに沿う側溝とさらにそれに垂直に走る周溝が検出されたので、ベッド状遺構に伴うものと考えられ、北ベッド状遺構をもつ住居を想定した。炉や主柱穴は36号溝に切られる位置にあるが、主柱穴があれば溝底から検出されるはずなので、主柱穴がない住居である。住居の東側に35号溝が巡っている。出土遺物からⅠB期古段階に属する。
出土遺物（図版57、第165図）

７は甕で、外面は肩部の摩滅が著しく不明で、胴中位は目の粗いハケが残る。内面ケズリ。内面から外面肩部は黄橙色で変色なしだが、外面中位は灰茶褐色なので煮沸使用されている。内面がよく残っているので使用頻度は小さかっただろう。８は屋内土坑から出土した甕で、平底で外面は左上のタタキでタタキの単位の面だけが残っている。内面は器面摩滅で調整不明。内外面黄橙色を基調

第162図　弥生時代終末から古墳時代初頭の竪穴住居跡実測図６
1区40･42号竪穴住居跡（1/60）

とするがにぶい暗黄灰橙色に変色している。９は台付鉢で、内外面橙褐色で変色なし。台内面は焼成不良で黒灰色。外面ハケ、内面はナデの工具痕が残る。10は器壁が薄く器面が平滑なので小型高杯の杯部であろう。器面摩滅で調整不明。内外黄橙色で変色なし。11は屋内土坑出土の小型高杯で、器面摩滅で調整不明。内外にぶい黄灰色で黒斑あり。12は屋内土坑から出土した小型器種で、外底に小さな平底あり。内外器面摩滅で調整不明。外面下半に黒斑あり。

44a･b号竪穴住居跡（図版24、第164図）

１区中央部に位置する方形住居で、大きな撹乱に切られ、南辺だけが検出された。南西角も撹乱と６号墓に切られている。南辺中央に屋内土坑があり、側溝が巡るがこれから派生して南北に小溝が東側に走っていることから、ベッド状遺構があったものと見られる。貼床を剥がした下からさらに周溝が発見されたので２基が切り合っていたものと考えて、a･b号とした。同一住居の建替えであろう。遺物は一括して取り上げたが、掲載したものはいずれもa号のものである。44b号は隅円方形で内部施設は発見できなかった。出土遺物からＩB期古段階に属する。

出土遺物（第165図）

13は甕で、外面はタタキが入る。内面は肩部ケズリ。外面黄橙色、内面にぶい黄灰橙色で変色しているので煮沸使用された可能性あり。14は小型高杯で、脚部外面は細かいミガキが入る。内外黄橙色。

45 a･b号竪穴住居跡（図版25、第164図）

１区中央部に位置する方形住居で、大きな撹乱に切られ、北・東辺が検出された。撹乱の床面から２本の主柱穴が検出されたので、４本柱構造である。壁沿いにベッド状遺構と周溝があったが、貼土によるもので、これを剥がした下からさらに周溝が発見された。そのため、２基が切り合っていたものと考えてa･b号とした。同一住居の建替えであろう。44b号竪穴住居跡の主柱穴がないのは44a号の柱穴より浅かったか、柱穴がない小型住居だったためだろう。遺物は一括して取り上げたが、掲載したものはいずれもa号のものである。45b号は隅円方形で内部施設は発見できなかった。東・南側には本遺構を巡る32号溝がある。出土遺物からＩB期新段階に属する。

出土遺物（図版38、第166･199図）

１は甕で、器面調整は外面が頸部にタテハケが残り、頸部以下は右上がりのタタキで、幅が２㎜ほどあって広い。内面はケズリで器壁は薄い。外面橙褐色で変色がないが、内面は暗黄灰色に変色しているので、胴中位以下が煮沸利用により変色している可能性が高い。２は高杯で、内外器面摩滅で調整不明。黄灰白色を基調とするが、杯部内面の横半分と、杯部口縁縁や脚部が赤橙色なのは２次的な変色だろうか。３は45号竪穴住居跡内のピット出土で、小型高杯で杯部と脚部の接合面に沈線が放射状に入る。内外器面摩滅で調整不明だが、脚部外面にはミガキの痕跡が残る。内外橙褐色で変色なし。裾部の一部に黒斑がある。裾に穿孔が４つある。杯部が完全に欠落しており、脚部と欠損面が赤変しているのは意図的に胎土を変えた可能性がある。４は赤変していないので壺の底部である。外面はケズリ状ナデ、内面はハケ。外面は黄灰色で変色なし、内面の暗黄灰色は焼成不良のためであろう。

このほか、磨製石斧（第199図５）・鋳造鉄斧片（第199図14）が出土している。

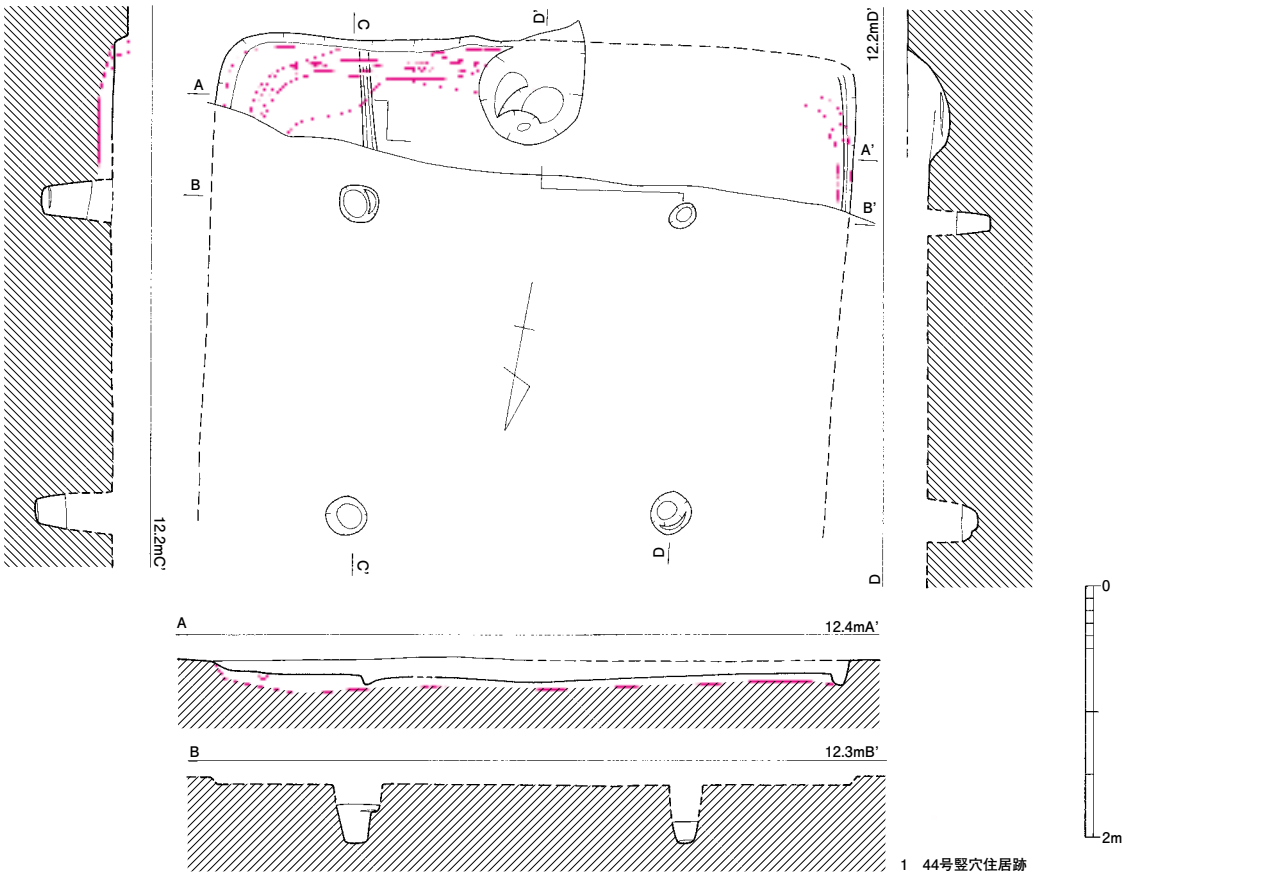
第163図　弥生時代終末から古墳時代初頭の竪穴住居跡実測図７
1区43号竪穴住居跡・35号溝（1/80・1/40）

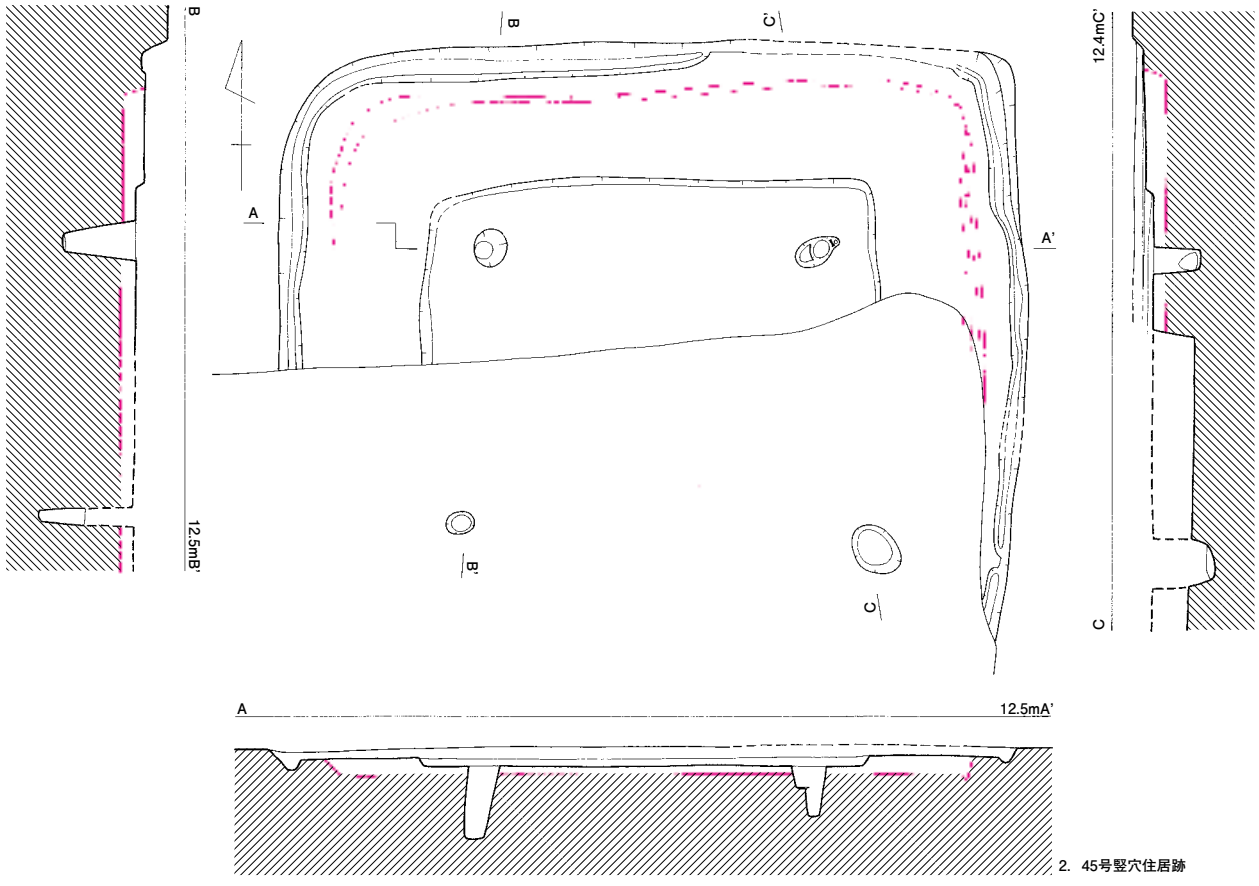
52号竪穴住居跡（図版25、第167図）

１区中央部に位置する正方形プランの住居で、32号溝に明らかに切られていた。３号溝を切って検出されたが、床面が硬化していたので、やや不整形だがプランは間違いない。中央からややずれた位置に焼土が見られたが、他の竪穴住居跡でも炉の掘り込みがほとんどなかったことと、炭化物が集中していないことからこれが炉になるものと考えられる。周溝は検出できたが、屋内土坑と主柱穴はまったく見られなかった。規模が小さいながら出土遺物が多く、壁の残りが悪く浅かったためほぼ床直で出土した。出土遺物からＩＢ期古段階に属する。

出土遺物（図版38、第168図）

１は東四国地方の壺で、図上接合である。口縁部は大きく外傾し、口唇部はナデで平坦面をもつ。頸部は肩部との積み上げ部内面にヨコハケが入り、その下はオサエ、外面は目の細かいタテハケ。底部は内面はケズリとハケ、外面はケズリ状のナデ。外面胴下位から底部は黒斑。胎土は全面橙褐色で、変色がない。意図的に赤く焼成したものか。胎土には大きな差はないが、器形の差異だけでなく、他の壺には見られない調整方法があることから搬入品だろうか。２は直口壺で、器面摩滅で調整は不明瞭。外面はハケのようだが、積み上げ痕の凹凸が残っているので調整が粗い。内面はケズリだろう。外面黄橙色で変色なし。内面は暗黄灰色だが焼成不良のためだろう。３は直口壺で、外面は頸部にタタキの痕跡が見られることから、タタキはナデ消されている。内面は器面摩滅でオサエしか見られない。砂の動いた痕跡はないのでケズリはない。外面黄橙色で変色なし、内面暗黄灰色で内面は焼成不良だろう。４は小型の甕で、調整は口縁部がヨコナデで、右上タタキでタタキ目の間の隔幅が広い。内面はケズリで器壁は厚い。胴下半が赤化しており、外底は赤橙色で、煮沸使用されている。にぶい暗黄灰色を基調とするが、黒褐色をはじめ、変色が著しい。内面は焼成不良の黒灰色。褐色パミスを多く含む。５は甕で調整は口縁部がヨコナデで、頸部以下は右上がりのタタキで、幅が２㎜ほどあって広い。その上に幅の狭いタタキが入る。内面はケズリで器壁は厚い。胴部の横半分が赤橙色で、半分が黄橙色である。黄橙色の中央部には黒斑があることから、焼成時に偶発的に起こったものだろう。本来の外面胴部は黒褐色で、煤が付着しており、内面は下半が変色しているので煮沸使用されている。褐色パミスを多く含む。６は小型の甕で調整は口縁部がヨコナデで、右上タタキでタタキ目の間の隔幅が広い。内面はケズリ。外面は全体的に赤化しており、内面もにぶい黄灰褐色に変色しているので、煮沸使用されている。にぶい暗黄灰色を基調とするが、黒褐色をはじめ、変色が著しい。内面は焼成不良の黒灰色。褐色パミスを多く含む。７は小型高杯の脚部で外面にタタキが入る。内外黄灰色で変色なし。８は高杯で杯部と脚部は図上接合である。杯部は積み上げた粘土が異なるため橙色と橙白色に色調が分かれている。器面摩滅で調整不明。９は小型壺で、頸部内面にオサエが入るので頸は長くないだろう。図化していないが丸底の同一個体がある。10は小型手捏ねのミニチュア甕だろう。外面はオサエをナデ仕上げ、内面肩部はナデが届かないので粘土積み上げ痕が残る。内面にぶい暗黄灰色、外面黄橙色。砂粒多い。11は台付の鉢で台部内面は丁寧なハケ、廃部内面はケズリ状ナデの凹凸が残るので調整が粗い。裾部にはオサエの凹凸が残る。内外黄橙色で変色なし。器面摩滅で外面は調整不明。12は甑で、底部は外面から焼成前に穿孔されている。底部は欠損部分があり孔の位置から孔は複数あったものと見られる。穿孔側には段があるのは器壁を薄くし、複数の孔を穿ちやすくしたものと見られる。内外黄橙色で赤変しており、内面底部は特に暗灰褐色に変色している。

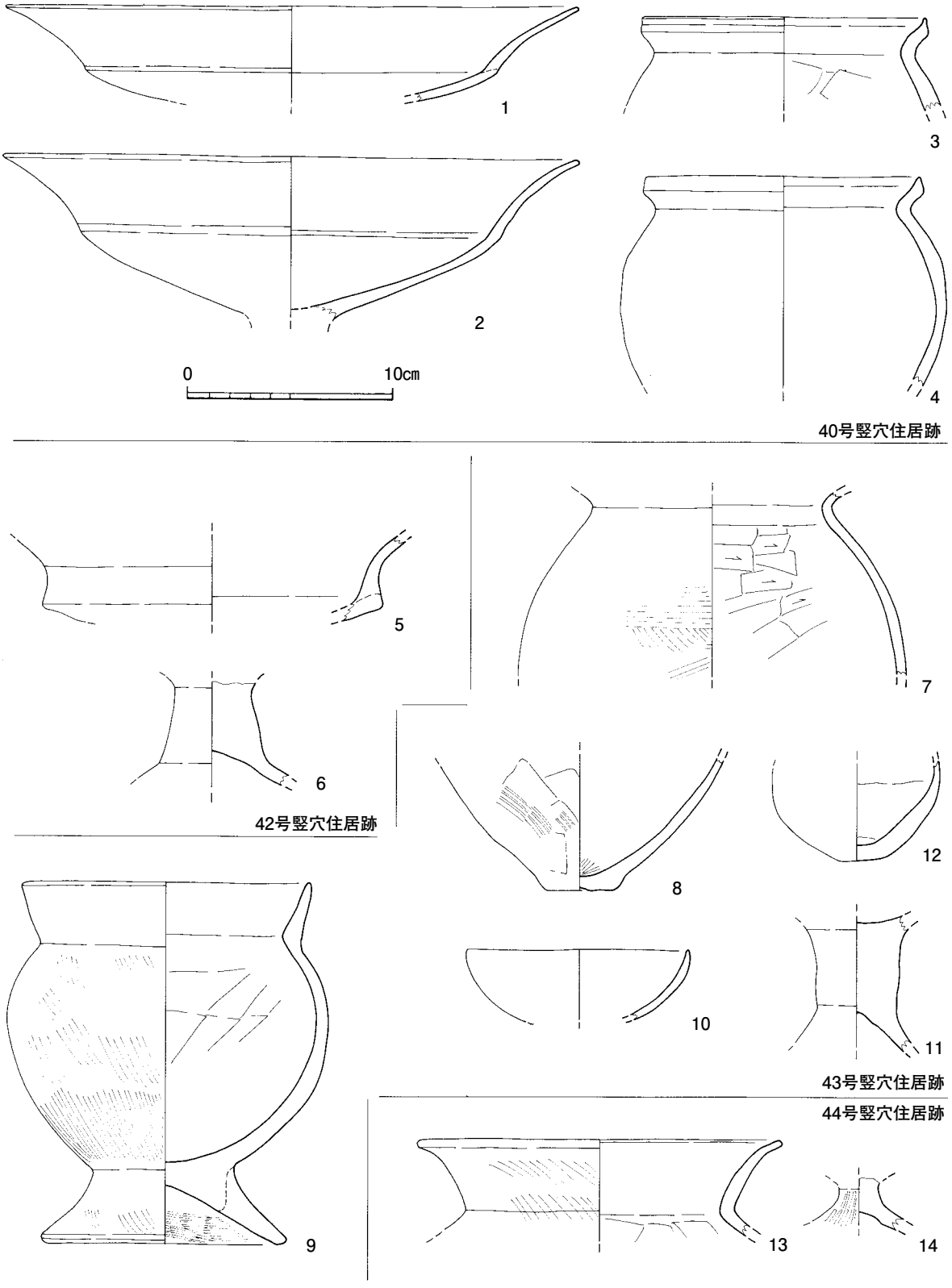




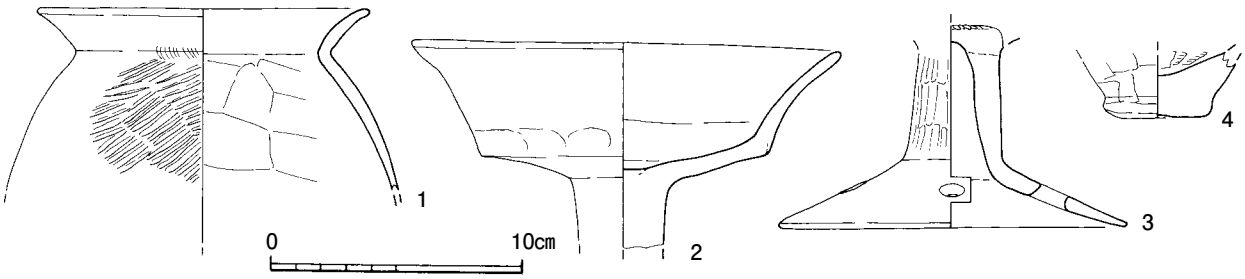
第164図　弥生時代終末から古墳時代初頭の竪穴住居跡実測図８　1区44･45号竪穴住居跡（1/60）

53号竪穴住居跡（図版25、第167図）

１区中央部北端に位置する方形プランの住居で、42号溝の北部に明らかに切られていた。中央に



第165図　弥生時代終末から古墳時代初頭の竪穴住居跡出土土器実測図６
1区40・42 ～ 44号竪穴住居跡（1/ 3）



第166図　弥生時代終末から古墳時代初頭の竪穴住居跡出土土器実測図７
Ⅰ区45号竪穴住居跡（1/ 3）

窪みがあるが床面は焼けておらず焼土もなかったので、炉ではなく上から掘り込まれたピットだろう。ややずれた位置に小さいながら焼土が見られ、他の竪穴住居跡でも炉の掘り込みがほとんどなかったので、同じような掘り込みのない炉跡であろう。周溝と基盤層削り出しベッド状遺構と屋内土坑は検出できたものの、主柱穴は精査したがまったく見られなかった。出土遺物からＩB期新段階に属する。

出土遺物（図版58、第170図）

１は甕で、内外器面摩滅で調整は不明瞭。外面頸部にヨコナデが残っており、器面が剥離した跡にもタタキの凹凸がないので、タタキではないので、ハケであろう。口縁端部は摩滅しており、本来の屈曲よりも短くなっている。内面は器壁が失われていることを考慮するとそれほど薄くない。ケズリの工具痕跡や砂が動いた跡も残っていない。内外口縁部と外面口縁部から肩部までにぶい黄橙色、胴部は外面黒灰色、内面暗灰褐色なので煮沸使用されている。器壁が厚いことから在地系、肩部がやや内湾する直線なので布留傾向甕か。２は甕で調整は口縁部がヨコナデで、頸部以下は右上がりのタタキで、幅が２㎜ほどあって広い。内面は目の粗いハケのみだが器壁は薄い。内外胴中位に灰褐色の変色があるが、内面に器面剥落はない。内面ハケなので在地系であり、右上タタキなので河内型庄内甕の模倣品である。肩が張らない球胴なので少なくともⅡA期以降に属する。３は高杯で、内外器面摩滅のため調整不明。脚部は外面ミガキの工具端がある。内外明橙白色で変色なし。杯部の一部に黒斑あり。全面赤いので意図的に赤く焼いた可能性がある。透し孔は３ヶ所。４は高杯で、脚部はやや膨らみがある。外面脚部は外面ミガキで、下位の列点文状のものはミガキの工具端である。内外茶褐色で変色なし。畿内第５様式系で脚部高が低いことからＩＢ～ⅡA期のものである。５は甑で、器面摩滅で調整は不明。内外赤化しており、赤橙色を呈する。

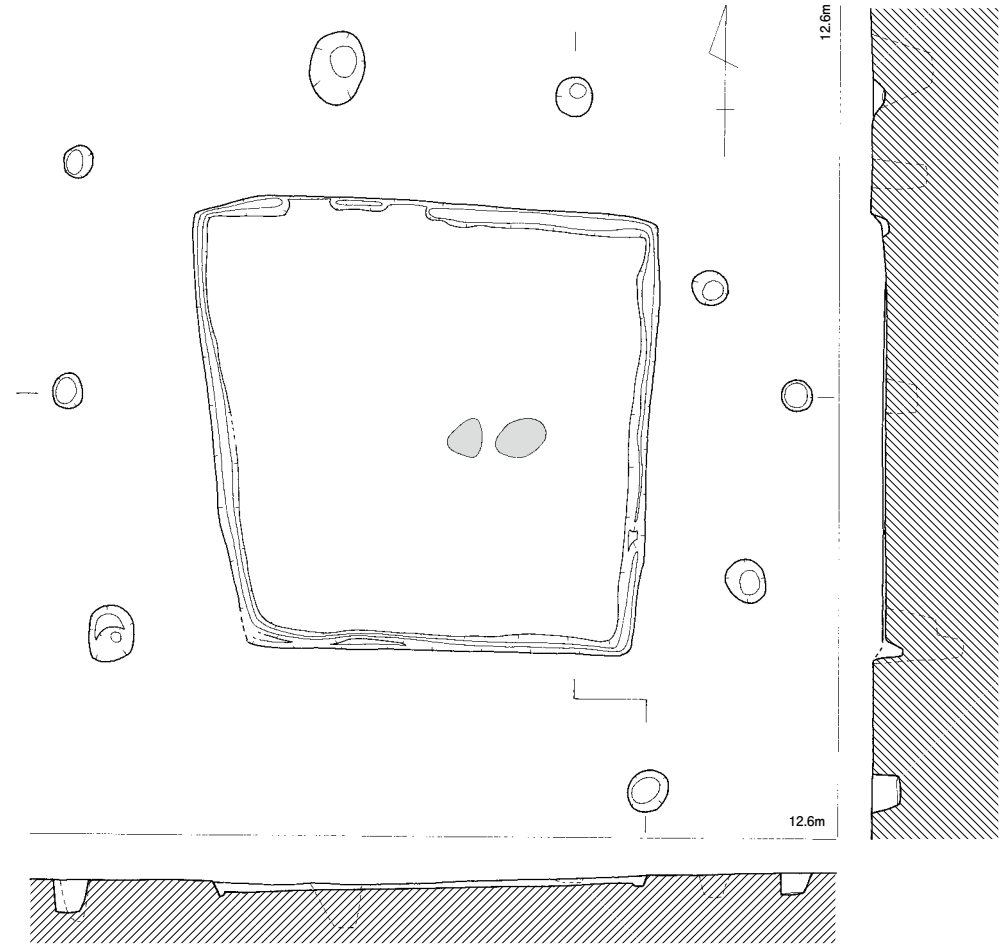
このほか磨製石斧（第199図６）が出土している。

56号竪穴住居跡（第169図）

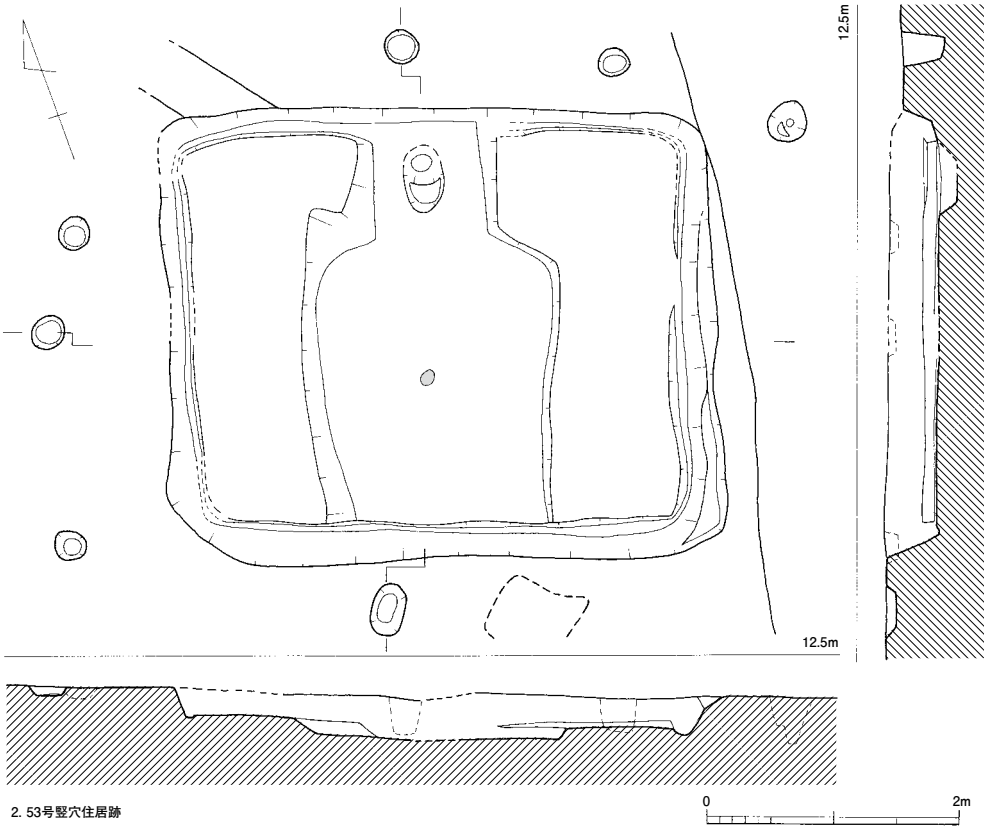
１区北東部北端に位置する４本の柱穴を、正方形プランの竪穴住居の主柱穴と考えた。掘立柱建物跡でないのは、１×１間で柱間間隔が等しく正方形プランになる掘立柱建物跡の類例がないためで、屋内土坑や炉など他の屋内施設は削平されると最も深い柱穴しか残らない。出土遺物がなく、時期を特定できない。

（２）掘立柱建物跡

当該期の掘立柱建物跡は３棟しかなく、特定できなかったものが存在すると思われる。

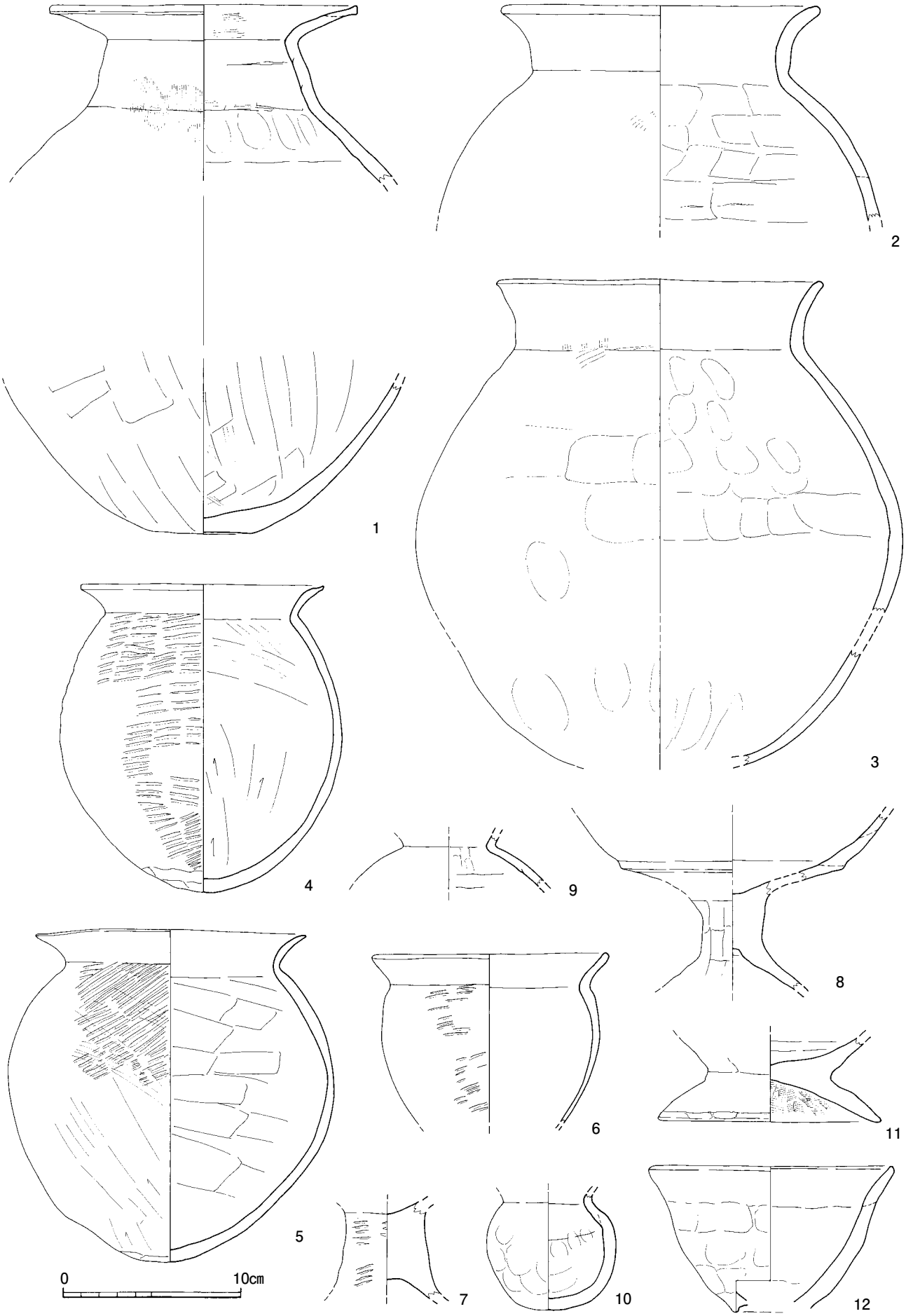


1. 52号竪穴住居跡



2. 53号竪穴住居跡

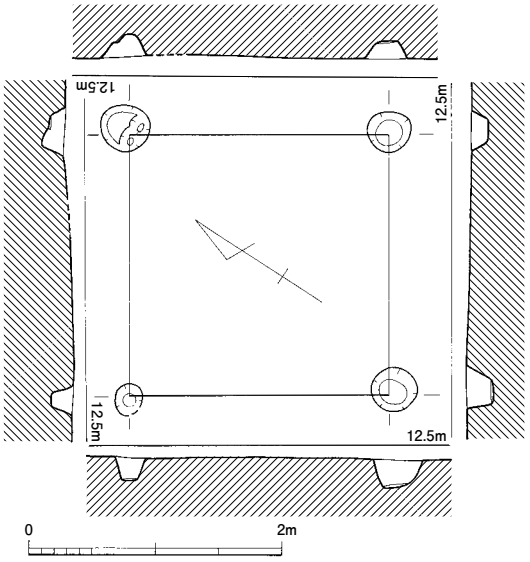
第167図　弥生時代終末から古墳時代初頭の竪穴住居跡実測図９
1区52・53号竪穴住居跡（1/60）



第168図　弥生時代終末から古墳時代初頭の竪穴住居跡出土土器実測図８
1区52号竪穴住居跡（1/ 3）

５号掘立柱建物跡（第171図）

１区中央部西端に位置する１×１間の掘立柱建物で、周囲のピットより規模の大きい柱穴で復元した。５号竪穴住居跡の貼土ベッドの上から検出されているので、同竪穴住居跡を切っている。切り合う10号掘立柱建物跡とは建替えと見られるが、先後関係はわからない。出土遺物がなく、時期を特定できない。



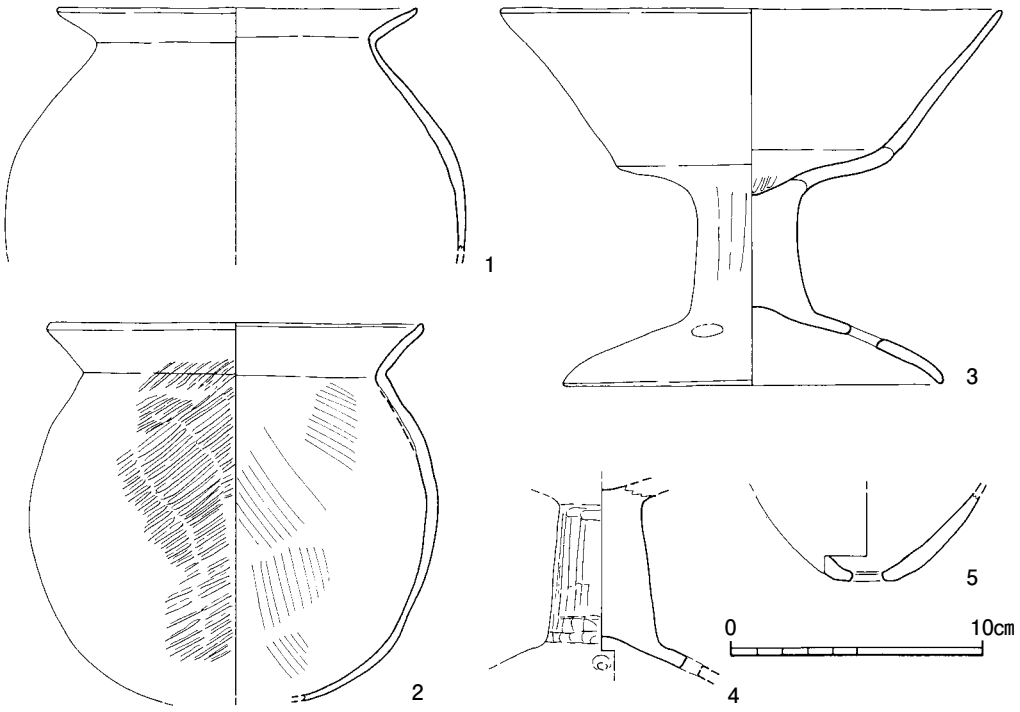
第169図　弥生時代終末から古墳時代初頭の竪穴住居跡実測図10
1区56号竪穴住居跡（1/60）

６号掘立柱建物跡（第171図）

１区中央部西端に位置する１×２間の掘立柱建物で、周囲のピットより規模の大きいもので復元した。18･26号貯蔵穴を切り、19号竪穴住居跡と切り合う。南辺中央の柱穴から断面M字突帯片が出土しており、弥生前期末から中期初頭の可能性もあるが、近い時期の貯蔵穴や竪穴住居跡と切り合っているので、古墳時代初頭に属するとした。

10号掘立柱建物跡（第172図）

１区中央部西端に位置する１×１間の掘立柱建物で、西側は削平で柱穴が小さくなっているが、底面の高さを比較して、周囲のピットより規模が大きいもので復元した。５号竪穴住居跡の貼土ベッドの上から検出されているので、竪穴住居跡を切っている。切り合う５号掘立柱建物跡とは建



第170図　弥生時代終末から古墳時代初頭の竪穴住居跡出土土器実測図９
1区53号竪穴住居跡（1/ ３）

替えと見られるが、先後関係はわからない。出土遺物がなく、時期を特定できない。

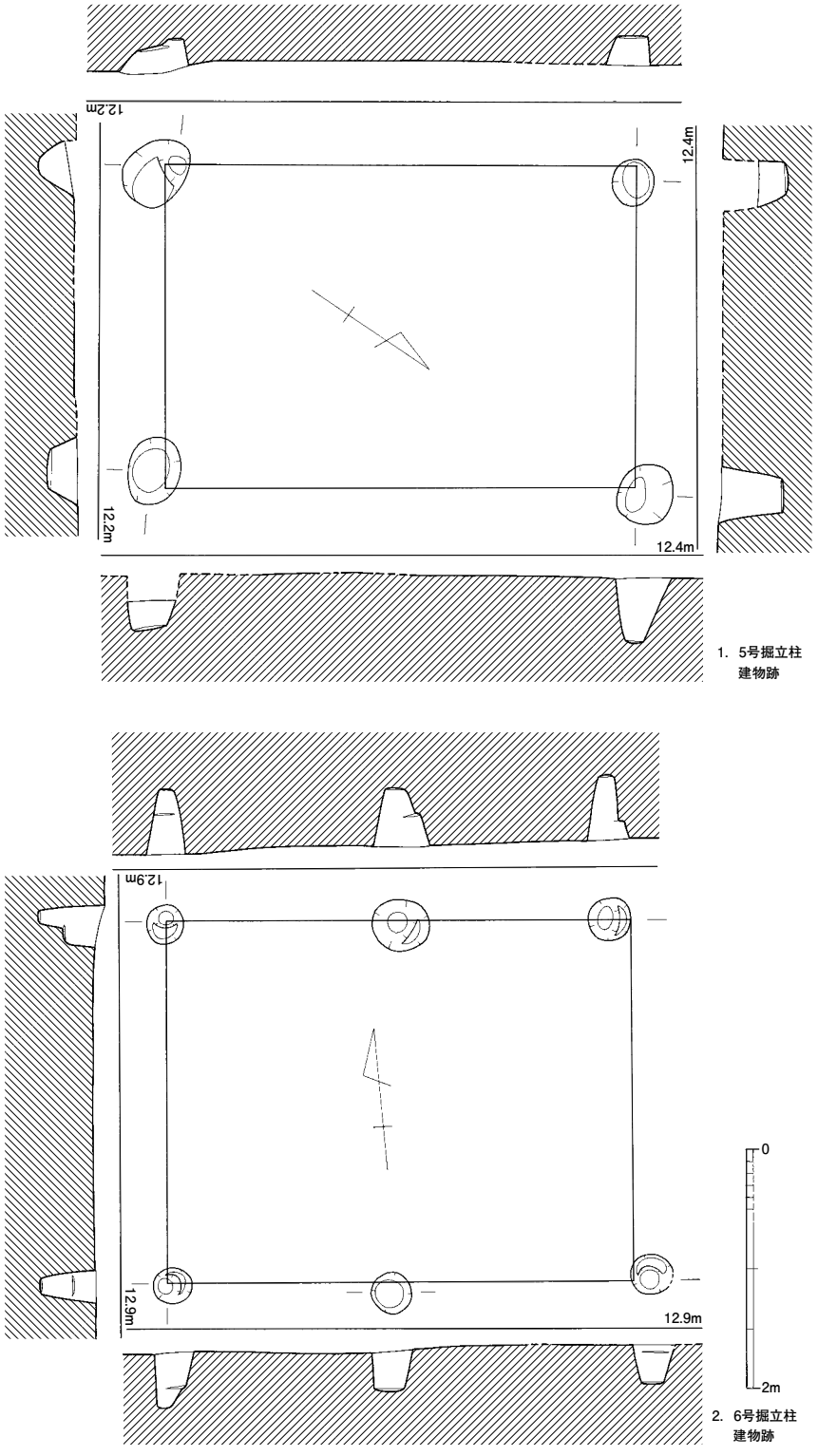
（3）埋葬遺構

埋葬遺構は方墳１基・方形周溝墓５基・木蓋土壙墓２基・小児甕棺１基で、１区からのみ検出された。

１号墳（巻頭図版４･図版26、第173図）

１区北西端に位置する方墳で、西側は削平で調査区に延びるが、その先は大きく削平されており、用地内を試掘したが、遺構は検出されなかった。墳丘は失われており主体部もなく、周溝しか残っていなかった。周溝も内側の壁には大きな撹乱が入っており、外側の壁は立ち上がりが緩やかであった。特に東壁は２号方形周溝墓の周溝と近接し、包含層に掘り込まれていたので不明瞭だったため、北東隅はプランが見つからず、陸橋部のようにも見える。これに対して、北側周溝は立ち上がりが明瞭だったので明らかに周溝とわかった。周溝にコーナー部分があるので方墳で、唯一全長が残る東辺で内法16.4m、外法で21.6mを測る。

37 ～ 40号竪穴住居跡の上に造られており、38号竪穴住居跡の埋土の上にわずかながら墳丘と見られる基盤層土ブロックが残ってい

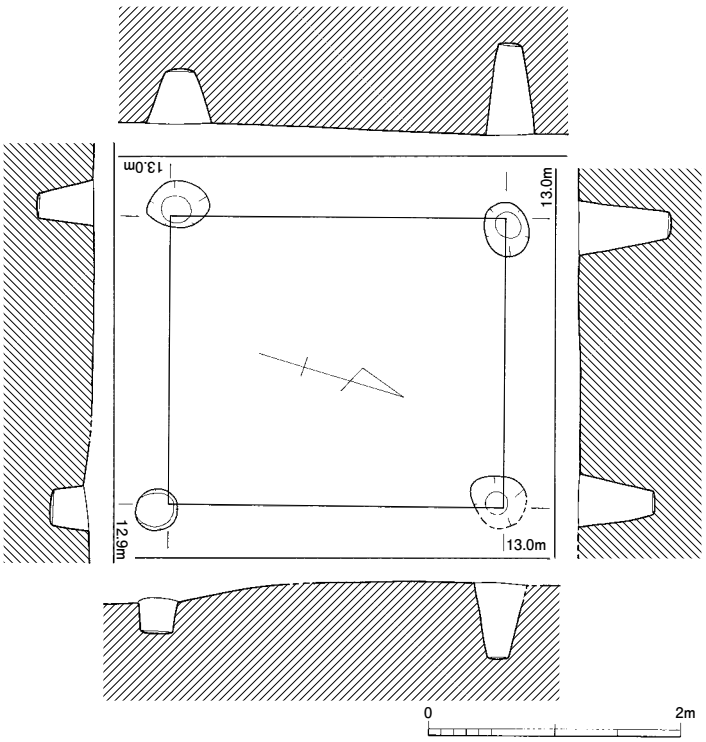


第171図　弥生時代終末から古墳時代初頭の掘立柱建物跡実測図
1区5･6号掘立柱建物跡（1/60）

た。このことから、少なくとも38号竪穴住居跡が完全に埋没してから造られたことは間違いないので、周溝の出土遺物から38号竪穴住居跡の埋没時期以前のものを除去すると、ⅡA期新段階に造られたものと考えられる。

出土遺物（図版58、第174図）

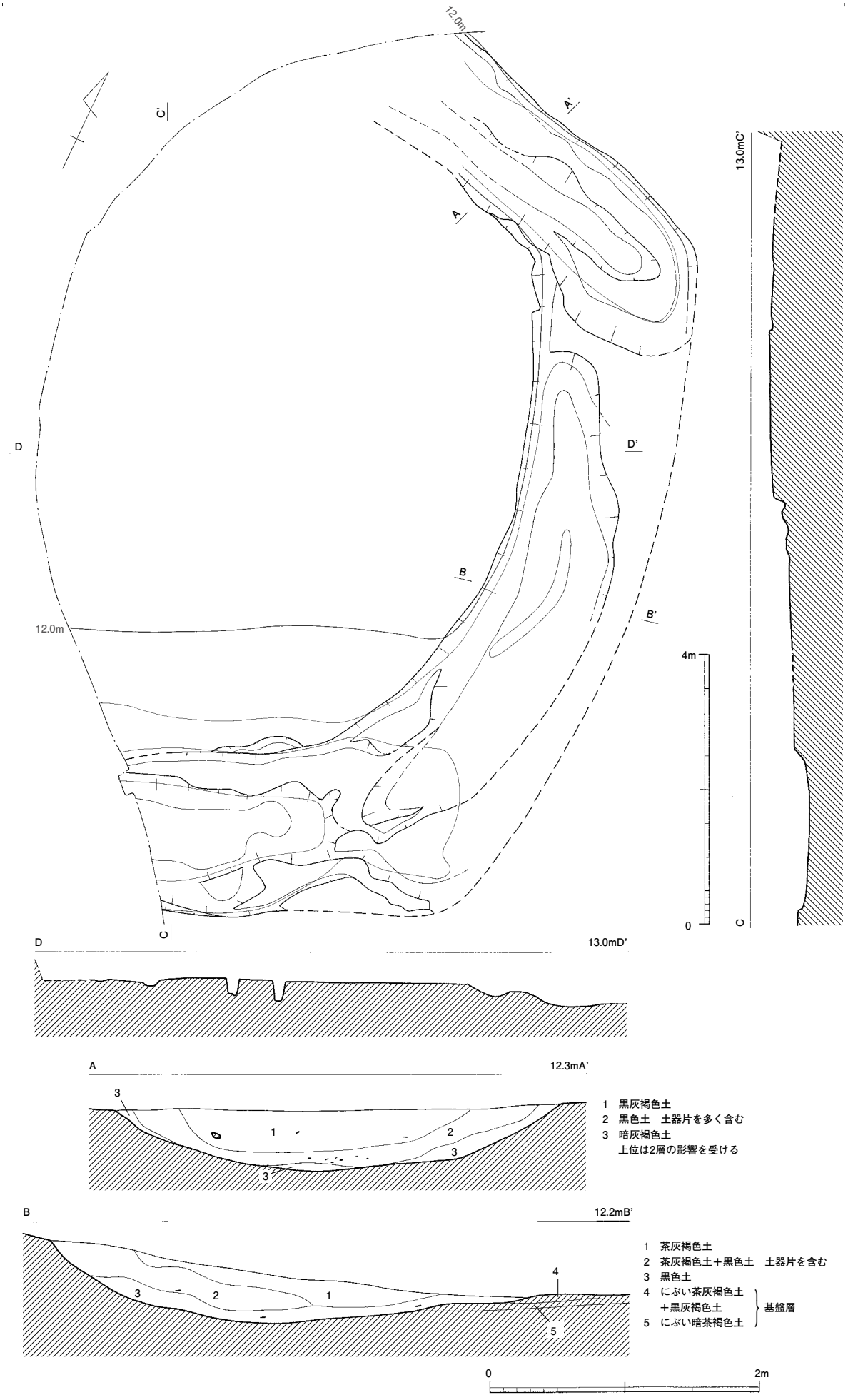
１は大型複合口縁壺で、内外黄橙褐色からにぶい暗黄杯灰色を呈する。内面肩部はハケ、外面はナデ。器壁が厚く重量がある。２は複合口縁壺で、器壁が薄いのは器面のためである。調整も不明で、内外橙褐色で、外面に変色が見られるが、２次的なものか。３は壺で、器面摩滅で調整不明。内外黄橙色を呈する。４は壺の肩部で、外面は丁寧なヨコハケ、内面はケズリ。内外黄灰色で、外面には黒斑がある。内面は黄灰白色なので内容物による変色だろう。５は甕で内外器面摩滅で調整不明。橙褐色で、外面は黒褐色の変色が見られる。６は甕であろう。外面口縁部は、口縁がやや内湾し、目の粗いハケで、黄灰色で変色なし。内面肩部はハケでケズリは見られない。７は小型丸底鉢か。内外丁寧なナデ、口縁部が暗橙褐色、下位は暗灰褐色で変色している。８は高杯で、杯部と口縁部の接合部は外面側が沈線状に窪み、内面側は段がつく。内外器面摩滅で調整不明。器面は胎の色調が露出しているが、本来は明橙灰色であろう。12は小型高杯で、器面摩滅で調整不明。透し孔は残っていない。内外黄橙色で変色なし。９は小型高杯で、器面摩滅で調整不明。透し孔は４ヶ所。内外黄橙灰色で変色なし。10は小型高杯で、器面摩滅で調整不明。透し孔は３ヶ所。内外黄橙色で変色なし。11は小型高杯で、器面摩滅で調整不明。透し孔は残っていない。内外黄橙色で変色なし。12は小型高杯で、杯内底のオサエ痕は接合部の痕跡の可能性もある。器面摩滅で調整不明。透し孔は残っていない。内外黄橙灰色で変色なし。13･14は小型高杯で、器面摩滅で調整不明。透し孔は残っていない。内外黄橙色で変色なし。15は小型器台で、器面摩滅で調整不明。脚部外面にミガキの面がある。透し孔は３ヶ所。内外黄灰色で変色なし。16は器台で、器面摩滅で調整不明。透し孔は４ヶ所。内外黄橙色で変色なし。17は甑で、底部の穿孔は焼成前に行われている。内外器面摩滅で調整不明。外面には板状ナデと見られる工具痕がある。黄橙色を呈し、外面黒斑あり。



第172図　弥生時代終末から古墳時代初頭の掘立柱建物跡
実測図　1区10号掘立柱建物跡（1/60）

１号方形周溝墓（図版26、第175図）

１区中央部西端に位置し、西側に陸橋部をもつ。削平されており主体部は検出されなかった。周溝も北東隅に大きな撹乱が入り、南東隅は94号土坑の掘り方を一緒に掘り下げたため本来のプラン



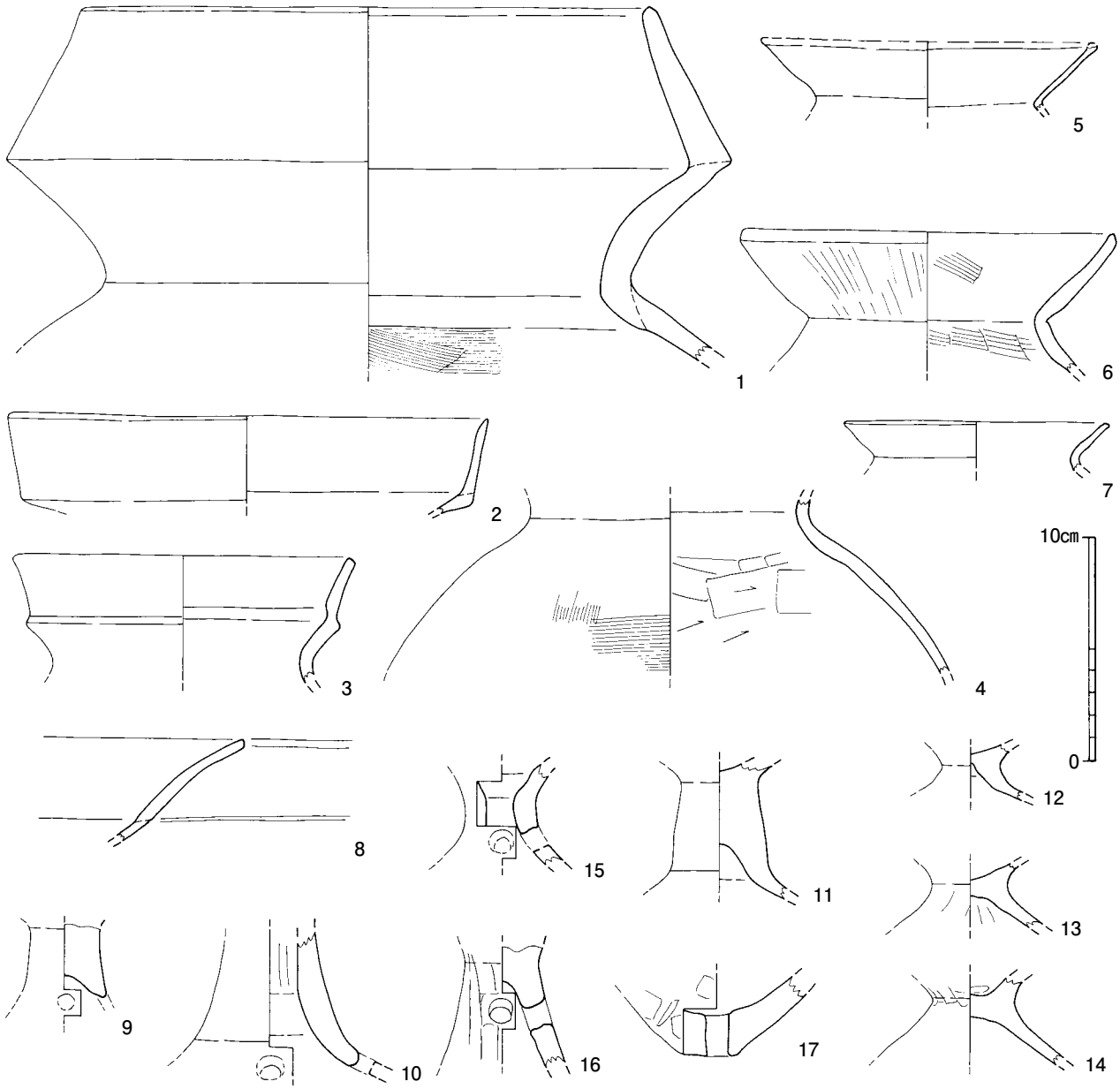
第173図　1号墳実測図　(1/40・1/80)

がわからなくなっている。東壁は４号方形周溝墓を切る。唯一全長が残る西辺で内法7.4m、外法で9.2mを測る。

周溝は残りが良く、出土遺物からⅡB期古段階に造られたものと考えられる。

出土遺物（第176図）

第176図１は２重口縁壺で、内外器面摩滅で調整不明だが、底部は外面ハケ、内面ケズリ。内外黄灰色で変色なし、２は１の底部になる可能性が高いが、間の破片がないので別に掲載する。底部外面は黒斑あり、内面の黒灰色は焼成不良のためだろう。３は直口壺で２号方形周溝出土品と接合した。内外面摩滅で調整不明。内外黄灰色で変色なし。４は直口壺で、器面摩滅で調整不明。外面に縦線の上に横線が入る線刻文が入る。左端は欠損のためまだ続く可能性があるが、右には線刻の痕跡がない。絵画にも数字を意味しているようにも見えるが、全体像がわからないので判断できない。内外黄灰色で変色なし。５は小型の杯でミニチュア器種か。器面は器面摩滅で調整不明だが、手捏ね成形時のものと思われるオサエ痕が多く見られる。外底部は平底である。外面は黄灰色から



第174図　1号墳出土土器実測図（1/ 3）

淡黄橙白色、内面は淡赤橙色。長石を多く含む。

２号方形周溝墓（図版26･27、第175図）

１区中央部北西側に位置し、北西隅に陸橋部をもつ。削平されており主体部は検出されなかった。周溝東辺は36号溝と撹乱が入り、南・西辺は１号墳周溝と近接するため外壁の立ち上がりが不明瞭であった。唯一全長が残る北辺で内法7.2m、外法で9.6 ～ 12.3 mを測る。３号方形周溝墓に切られる。

出土遺物からⅡB期古段階に造られたものと考えられる。

出土遺物（第176図）

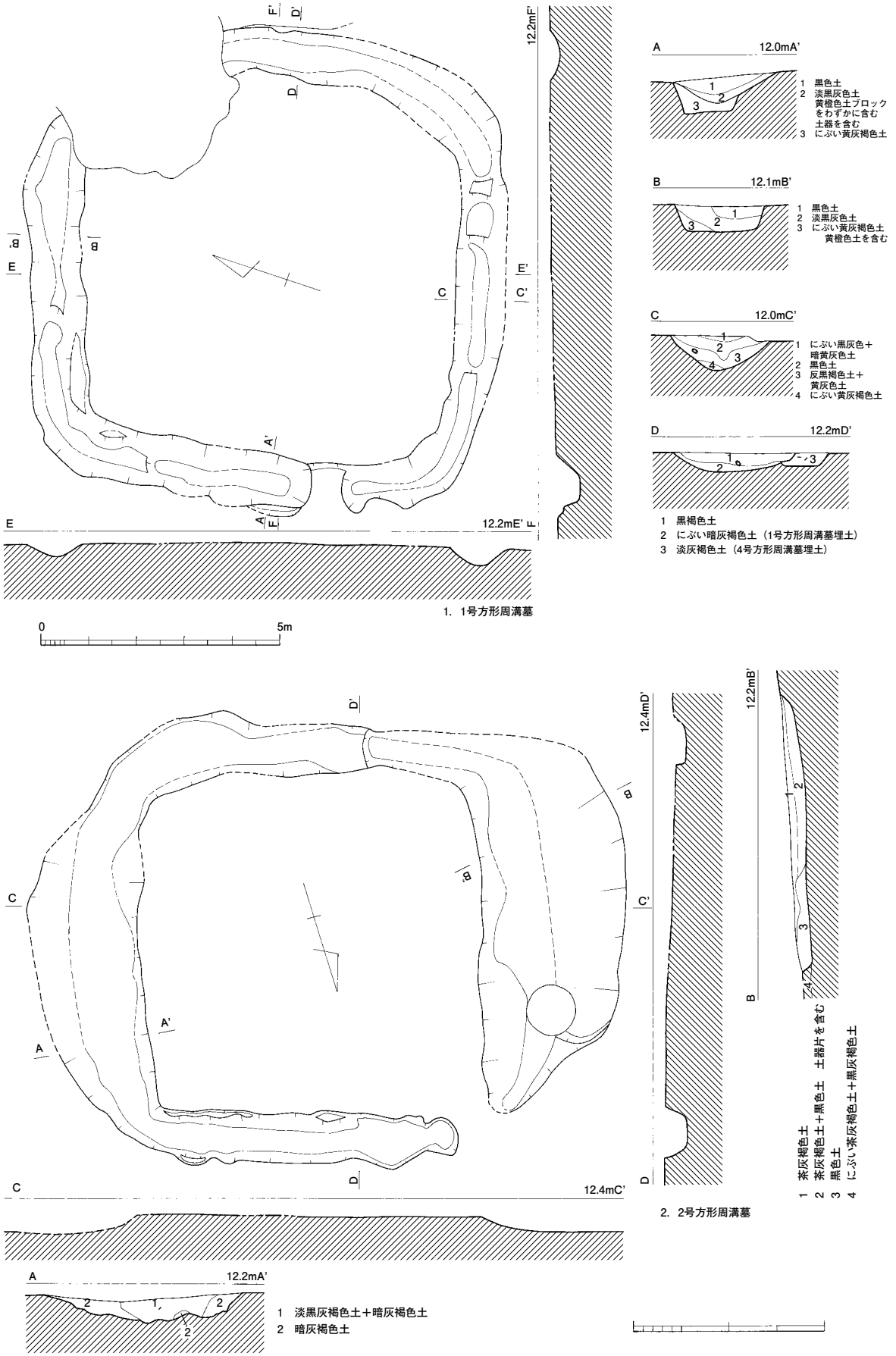
６は直口壺で、肩部内面には積上げ痕が多く残る。器面摩滅で調整不明だが、外面にタタキと内面のケズリの痕跡はない。内外橙褐色で、変色なし。褐色パミスを多く含む胎土。７は直口壺で、口縁部と頸部は図上接合。外面器面摩滅で調整不明。内面は肩部の内面にケズリの痕跡あり。内外橙褐色で、変色なし。内面肩部の黒灰色は焼成不良で、頸部から上は黄橙色になる。８は壺の口縁部で、４号方形周溝墓出土の胴部と接合する。器面摩滅で調整不明。９は２重口縁壺で、器面摩滅で調整不明。内外黄橙色で変色なし。10は２重口縁壺で、器面摩滅で調整不明。内外明黄灰色で変色なし。11は庄内系の甕で、タタキは幅が狭く右上。内面はケズリで、口縁端部内面側はナデで窪んでいる。内外器面摩滅、内面はにぶい暗黄灰色で、外面は肩部に煤の付着があるが、煮沸使用の痕跡はない。12は高杯の杯部で、器面摩滅で調整不明。杯部の接合部の段はわずかに残っている。外面にぶい橙褐色変色なし。13は高杯の杯部で、器面摩滅で調整不明。器壁が薄いのは摩滅のため。内外面赤橙色で変色なし。意図的に赤く焼成した可能性あり。14は高杯の脚部で、外面はミガキ、内面は器面摩滅で調整不明。内外面橙褐色で、変色なし。裾部は穿孔の入る部分まで残っていない。15は高杯の脚部で、器面摩滅で調整不明。内外面黄橙色で、変色なし。裾部は穿孔の入る部分まで残っていない。16は高杯の脚部で、器面摩滅で調整不明。杯部との接合部は欠損しており、すぼまらない。外面赤橙白色で、変色なし。裾部は穿孔の入る部分まで残っていない。17は小型高杯の裾部で、器面が摩滅しているが外面は膨らみがある。内外黄橙色で変色なし。穿孔がないが、穿孔部分が残っていないためであろう。18は畿内５様式系の底部で、煮沸使用の痕跡がないので壺だろう。残存部にはタタキは見られない。内外橙褐色で、変色なし。外底は蛇ノ目状に肥厚されている。19は器面摩滅しているが煮沸使用の痕跡はないので甕ではない。器面剥落で調整不明。平底で内外黄橙色を呈する。20は胴部の立ち上がりが弱く、内面が焼成不良で黒灰色なので扁胴の壺だろう。レンズ状底部で、胴下位の器壁が薄いのは器壁剥落のためである、内外面摩滅で調整不明。

このほか、周溝から鉄鏃（第199図13）が出土している。

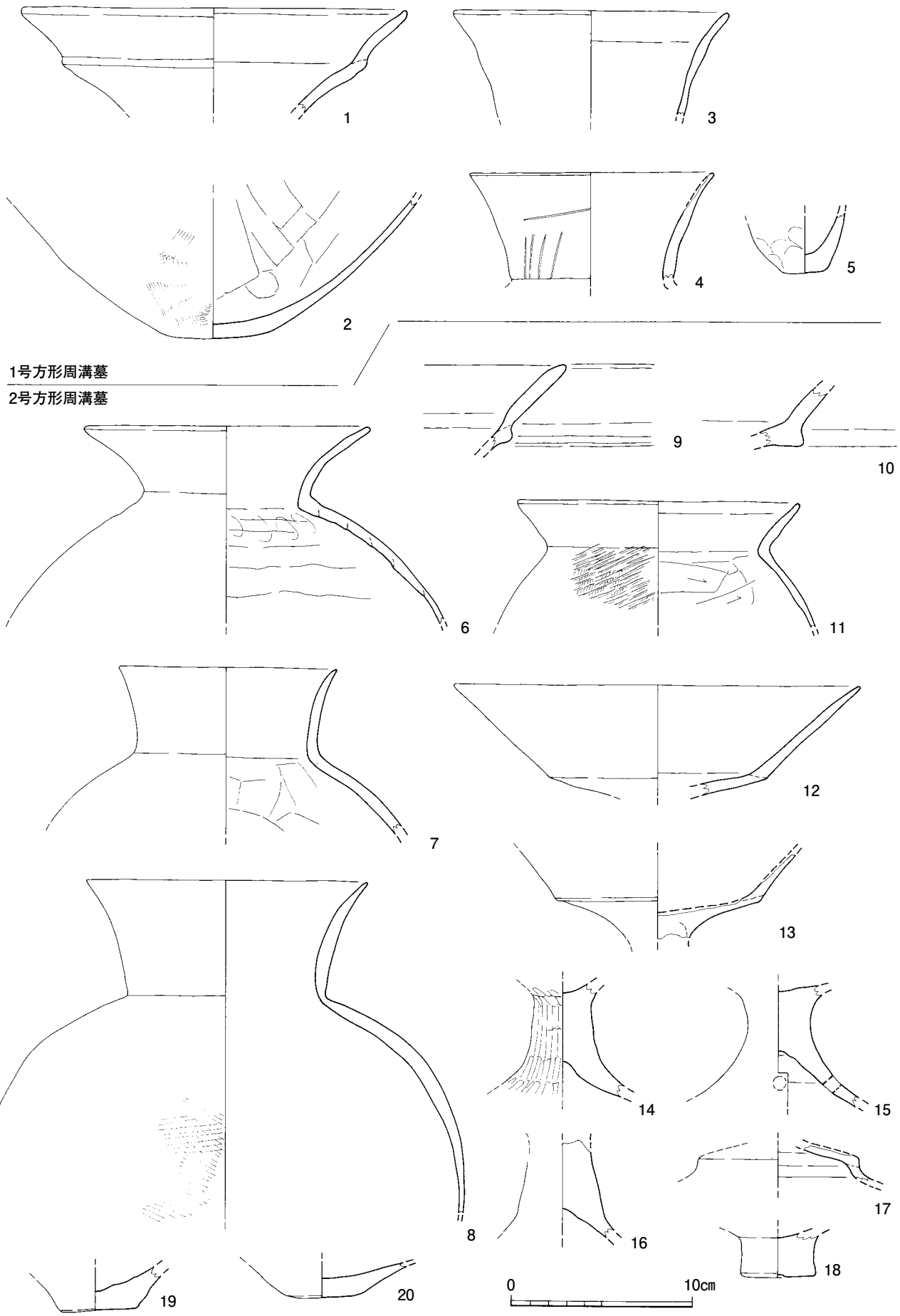
３号方形周溝墓（図版27、第177図）

１区中央部北側に位置し、陸橋部がない。削平されており主体部は検出されなかった。周溝北西隅は36号溝に切られ、南西隅は遺構の切り合いが多くプランが不明瞭だった。東・南辺は全長が残っており、東辺は内法8.2m、外法で10.8mを、南辺は内法7.4m、外法で10.1mを測る。2･4号方形周溝墓を切り、出土遺物からⅡB期に造られたものと考えられる。

出土遺物（図版58、第178図）



第175図　1･2号方形周溝墓実測図（1/60・1/120）

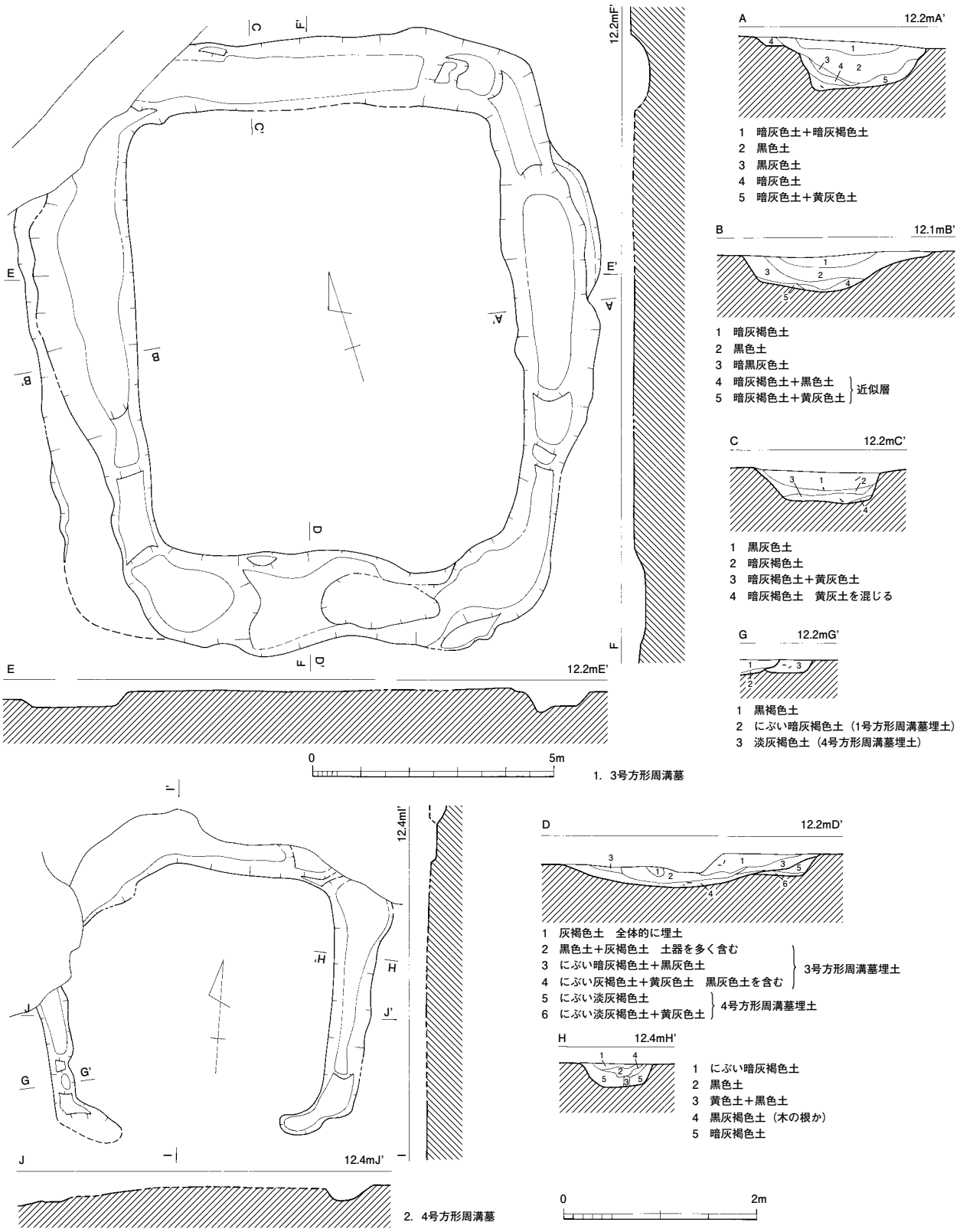


第176図　1･2号方形周溝墓出土土器実測図（1/ 3）

1は壺で、器面摩滅で調整不明。内外橙褐色で、変色なし。2は壺で、器面摩滅で調整不明。残存部の外面に沈線や浮文の痕跡はない。にぶい橙褐色を呈する。3は2重口縁壺の頸部で、突帯には断面三角形の2面に刺突が入る。器面摩滅で調整不明。黄灰色を呈する。4は2重口縁壺の頸部で、直立気味でやや膨らみをもつ。内外器面摩滅で調整不明。内外にぶい黄灰色で、内面下位は焼成不良の黒灰色化している。5は2重口縁壺で、頸部は図上接合。口縁外面には櫛描き波状文が上部に入り、下部には円形浮文が入る。その間は摩滅しており不明。円形浮文も摩滅のため本来の形状ではない。頸部は突帯の上面にのみ刺突が入る。内外にぶい暗黄橙灰色で変色ないが、肩部は焼成不良。6は壺の底部で、内外にぶい黄灰色で変色なし。器面摩滅で調整不明。7は壺の底部で、器面摩滅で調整不明。内外黄橙色で変色なく、黒斑がある。内面は器面剥落が著しい。焼成不良で黒灰色を呈する。8は畿内5様式系の底部で、煮沸使用の痕跡がないので壺だろう。残存部にはタタキは見られない。内外橙褐色で、変色なし。外底は黒斑あり。9は壺の底部で、内面はにぶい灰褐色だが、外面黄橙色で赤化は見られない。外面はナデのみ、内面はケズリ。黒斑あり。10は壺の底部で、器面摩滅で内面にハケの工具端が残るのみ。外底の窪みは種子圧痕の可能性が高い。外面黄橙褐色で、黒斑あり。内面は焼成不良で黒灰色を呈する。11は壺の底部で、内外にぶい灰褐色で変色なし。器面摩滅で外面にハケ、内面にハケの工具端が残るのみ。外面に黒斑あり。12は小型甕で、内面ハケだが、外面頸部の残存部にハケやタタキは残っていない。内外黄橙色から黄灰色で変色がない。煮沸使用されていない。13は内面橙褐色で焼成不良でないので鉢の底部であろう。外面は底部にタタキとハケが入り、内面はハケ。外底は平底で肥厚はない。外面黄橙褐色で変色なし。14は内面黄橙色で焼成不良でないので鉢の底部であろう。器面摩滅で外面にハケが部分的に残るのみ。外底の中央の窪みは小さいが蛇ノ目状である。外面黄橙褐色で、黒斑あり。15は北側周溝出土の高杯で、内外黄橙色で変色なし。脚部との接合部外面にハケが残るがほかは器面摩滅で調整不明。16は高杯の脚部で、器面摩滅で調整不明。外面黄灰橙色で変色なし。裾部は穿孔の入る部分が残っていない。17は精製器種の高杯の脚部で、外面は細いミガキが入る。内面はケズリで、内底に刺突がある。内外面黄橙色で変色なし。杯部との接合部には刻目が入る。18は小型高杯で、頸部の段は突帯ではなくナデ窪みであろう。外面は幅の広いミガキだが裾部は摩滅のため不明瞭。内外黄橙色で変色なし。穿孔のある部分まで残っていない。19は高杯の脚部で、器面摩滅で調整不明。外面黄橙色で、変色なし。裾部は穿孔の入る部分が残っていない。20は高杯の裾部で、外面はナデ、内面はハケ。外面淡黒灰色だが変色かわからない。裾部は穿孔の入る部分まで残っていない。21は小型器台で器面摩滅で調整不明。穿孔は3箇所に痕跡がある。内外黄橙色で変色なし。22は同様の器形の高台状の裾部に穿孔する例（第161図19）があるので、杯だろう。内外器面摩滅で黄橙色を呈し、受け部の一端に黒斑がある。23は精製器種の小型高杯で、外面は幅の狭いミガキ。内外橙褐色で、黒斑あり。内底は胎土ではないが摩滅している。24は外面に赤変部分があるが、内面は黄橙色で変色がないので鉢だろうか。内外ハケで底部は丸底、内底に小さな窪みがある。25は台付鉢で、器面摩滅で調整不明。肩部内面に積み上げ痕が残っており、オサエ痕が集中して見られる。内外黄橙色で変色なし。

4号方形周溝墓（図版28、第177図）

1区中央部に位置し、南に陸橋部をもつ。削平されており主体部は検出されなかった。周溝北部



第177図　3･4号方形周溝墓実測図　(1/60・1/120)

は３号方形周溝墓南側周溝に切られ、西側周溝が１号方形周溝墓に切られている。南西隅はピットと切り合い、北西隅は撹乱を受けており角が不明瞭である。全長が残っている辺がないが、東辺の内法は4.4m、南辺の外法で6.2mを測る。出土遺物からⅡB期に造られたものと考えられる。

出土遺物（第181図）

１は畿内５様式系の底部で、煮沸使用の痕跡がないので壺だろう。右上のタタキが胴下位まで入る。外面黄橙色、内面黄橙灰色を呈する。２は布留系の甕で、口唇部は跳ね上げている。肩部外面はヨコナデのみでハケは見られない。内面はケズリ。外面と内面肩部は橙褐色、内面口縁部はにぶい黄灰色を呈するが、摩滅で胎土の黒灰色が露出しているので、煮沸使用の有無は不明。

５号方形周溝墓（図版28、第175図）

１区中央部に位置し、北に陸橋部をもつ。削平されているが主体部が検出された。周溝北東隅を４号溝に切られているが、西辺は全長が残っており、東辺の内法は4.8m、外法で6.4mを測る。主体部は４号溝の底面から検出された。多くのピットに切られていたが粘土の広がりが見られ、特に西小口部に集中していた。粘土の検出面では赤色顔料が点在していた。この粘土を掘り下げると主体部の床面が検出された。掘り方は0.96×0.48mと細長く、床面が丸みを帯びていたので、割竹形木棺で被覆粘土が崩落した可能性が高い。床面には赤色顔料が塗布され、特に西小口部に集中していたことから、西を頭位として埋葬されたものと考えられる。鉄刀が副葬されており、西を頭位とすると肩部に切っ先を下にして置かれたことになる。出土遺物からⅡB期に造られたものと考えられる。赤色顔料は分析の結果しベンガラであった。

出土遺物（第181･199図）

３は周溝出土の高杯の脚部で、器面摩滅で調整不明。外面暗黄灰橙色で、変色なし。裾部は穿孔の入る部分まで残っていない。鉄剣については特殊遺物の項（第199図）に掲載した。

５号墓（図版31、第180図）

１区北西部に位置し、２号方形周溝墓と主軸方向を同じくして検出された長軸1.80m、短軸で0.66mを測る。土層から床面上に板痕が検出され、壁沿いと床面には板痕がないことから木蓋土壙墓である。板痕の土層上は基盤層ブロックに近い土層だったので、蓋上を覆っていた土が崩落したものだろう。赤色顔料や粘土は見られず、副葬品もなかったが、床上が薄い白色の部分があったので墓とした。出土遺物がなく時期を特定できない。

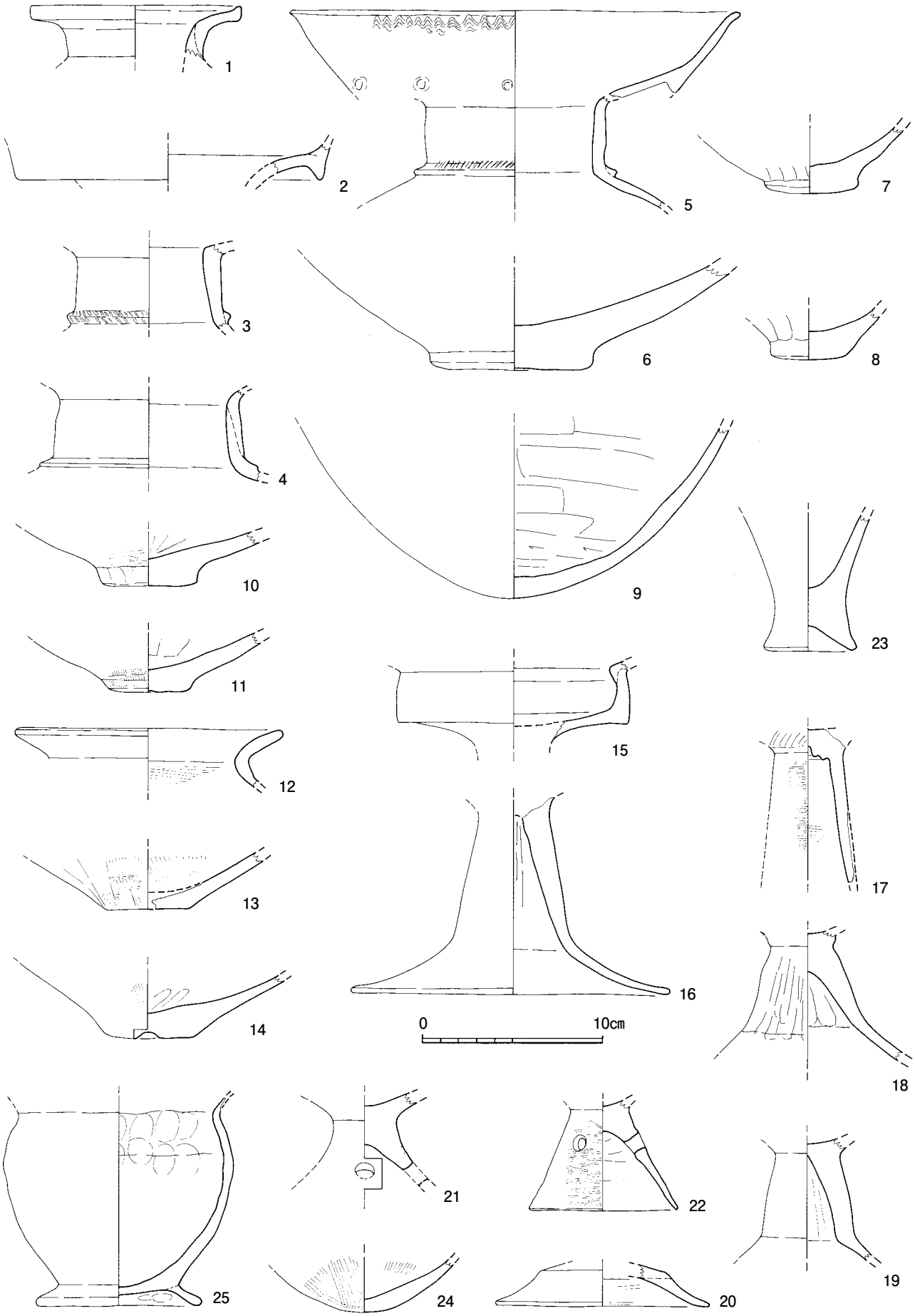
６号墓（図版31、第180図）

１区中央部西側に位置し、44号竪穴住居跡南西隅を切る。長軸1.62m、短軸0.76mを測る。土層から床面に板痕が検出されたが、床に敷かれたのではなく、木蓋土壙墓の木蓋が崩落したものと考えられる。現在の掘り方は壁の崩落でやや広がっているものと見られ、本来は板の長さと一致する規模であっただろう。赤色顔料や粘土は見られず、副葬品もなかった。出土遺物がなく時期を特定できない。

出土遺物（第181図）

４は小形の如意形口縁甕で、器面が残っているので器壁が薄い。内面口縁部はナデ、頸部はハケの上にオサエ。胴部は丁寧なナデ。黄灰色で黒斑あり。内面はにぶい黒黄灰色で煮沸使用されていない。５は鉢で、口唇部は平坦面をもつ。内外器面摩滅で調整不明。橙褐色で変色なし。

１号甕棺墓（図版31、第180図）



第178図　３号方形周溝墓出土土器実測図（1/ ３）

１区中央部北側に位置し、３号溝を切る。弥生時代前期の環濠である３号溝の上面に位置することから、完全に埋没していない窪みに造られたと考えられる。掘り方は検出できなかったが、検出時に周囲より黒色土が濃かった。甕棺の西に同時期の２重口縁壺の口縁部があったので、やや幅の広い掘り方があったものと推定できる。甕棺の検出時で長軸0.63m、短軸0.23mを測る。ほぼ水平に置かれているが上甕側がやや高い。中型甕同士を合わせ口するタイプで小児棺である。

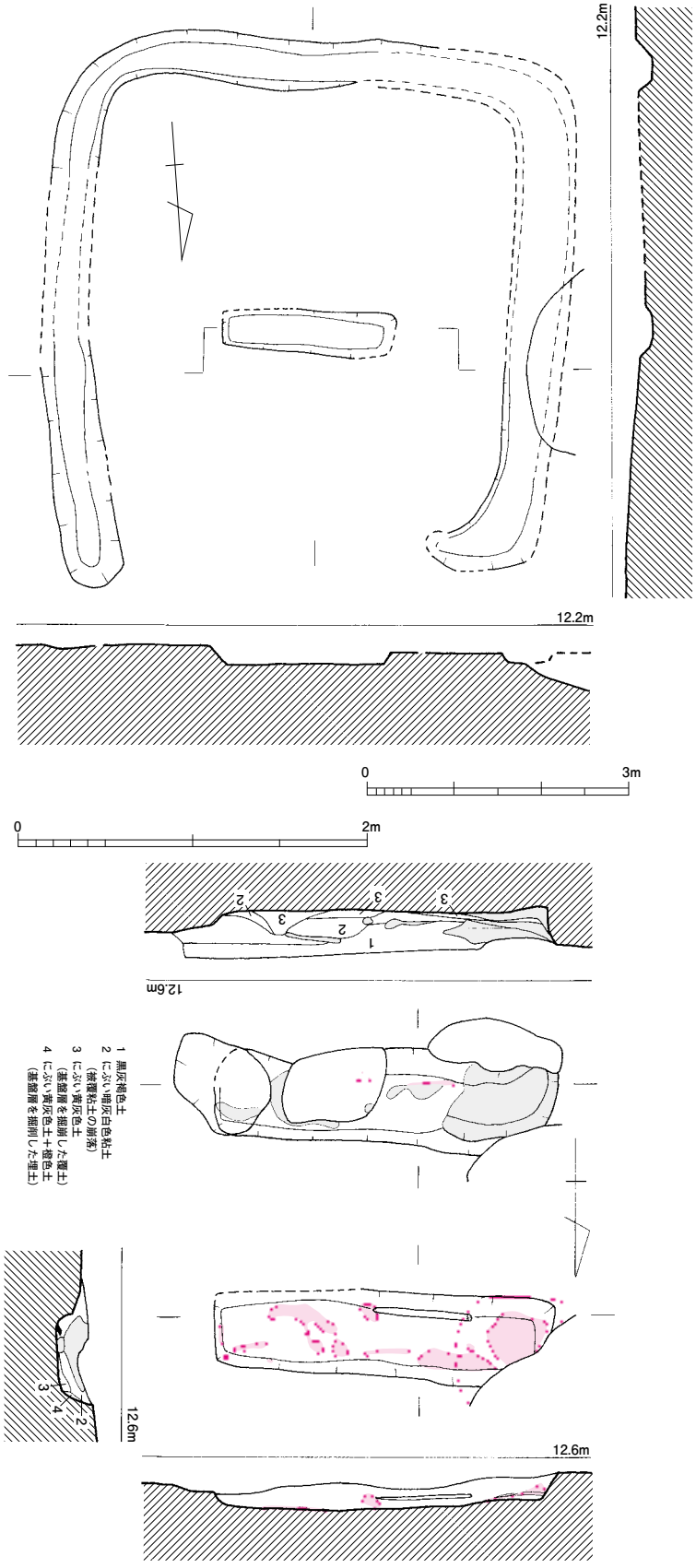
出土遺物（図版58、第182図）

１は上甕の口縁部である。外面は口縁部タテハケで、下半はヨコナデでハケをナデ消している。頸部はタテハケ、内面は口縁部に丁寧なヨコハケ、頸部はケズリ状のナデである。外面は暗灰褐色を呈する。２は下甕で、内外ハケで、上半が赤橙色を呈し、下半は黄灰色を呈する。この色調の違いは粘土の違いの可能性もあるが残存度が少ないので不明確である。内面は変色がなく、煮沸使用されていない甕を使用している。外面胴部に黒斑あり。３は１号甕棺付近から出土した二重口縁壺の口縁部である。他に同時期の遺物がないことから、墓拡に混入した可能性が高い。器面摩滅で調整不明。黄橙色を呈する。

（４）ピット

ピット260（図版31、第183図）

１区北西部西端の38号竪穴住居跡の南東で、38号掘立柱建物跡の内部に位置する。埋土上面に甕の底部が検出された。削平を受けているので、本来は完形で正置していた可能性が高い。土層の観察で



第179図　５号方形周溝墓実測図　（1/80・1/40）

は柱痕の中に入っているように見え、なんらかの構造物の柱穴に入っていた可能性がある。調査区外に展開する掘立柱建物跡の柱穴だった可能性もある。

出土遺物（第184図）

１は甕で外面肩部は幅が狭いタタキであろうが残存部が少ないため不明瞭。それ以外は左上がりのタタキ。内面はケズリ後等間隔でタテにナデが入る。外面は灰褐色で煤が付着する部分もあるが、内面は灰黒色のみ。底部は丸みをもつ小さい平底。

ピット261（図版31、第183図）

１区北西部の北西端に位置する。埋土上面に甕の底部が検出された。削平を受けているので、本来完形だっただろう。浅い土坑状の掘り方で、中央に正置されている。何らかの祭祀遺構であろうか。甕の底部片のみなので掲載してない。

ピット268（図版31、第183図）

１区北西部西端の38号竪穴住居跡の東に位置する。埋土上面に鉢の底部が検出された。削平を受けているので、本来完形だっただろう。浅い土坑状の掘り方で、中央に正置されている。何らかの祭祀遺構であろうか。

出土遺物（第184図）

２は内外ハケで、膨らみのある平底をなす。内面が外面と同じく橙褐色なので、短頸壺だろう。

その他のピット出土遺物

（図版58、第184図）

３はピット302出土の完形品の杯で、内外器面摩滅で調整不明。外底は丸みのある平底。外面胴下位に黒斑あり。内外黄橙色。

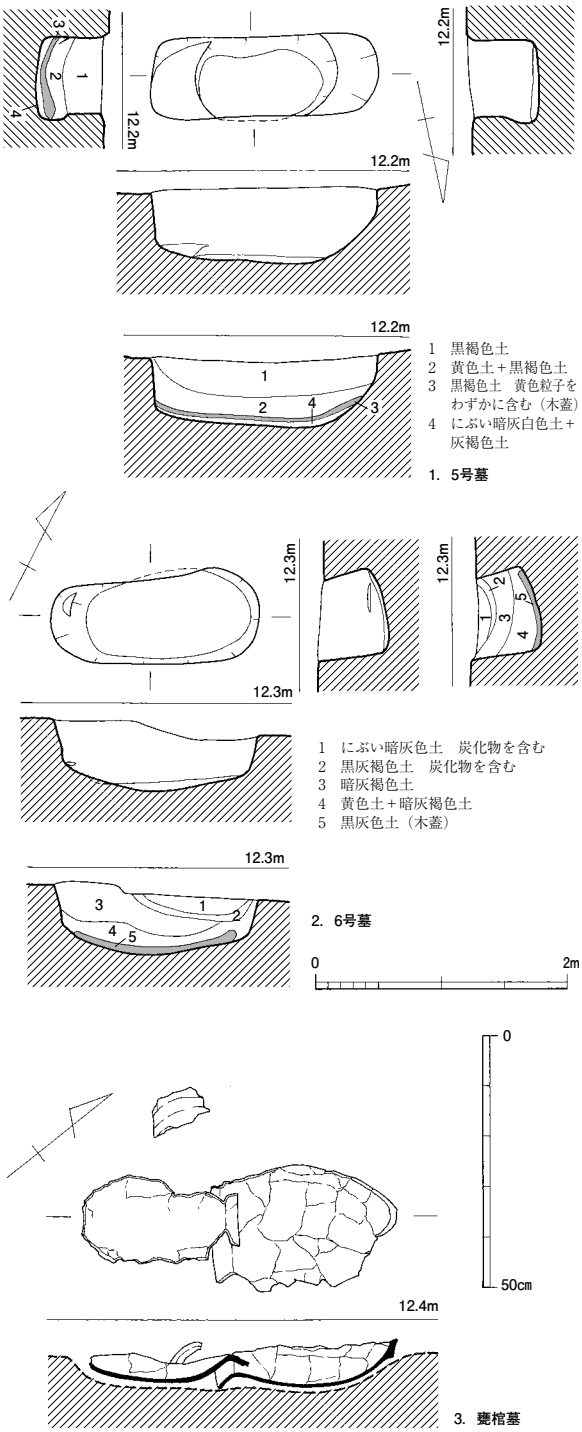
（５）溝

溝は２区の１条以外は１区からの検出である。

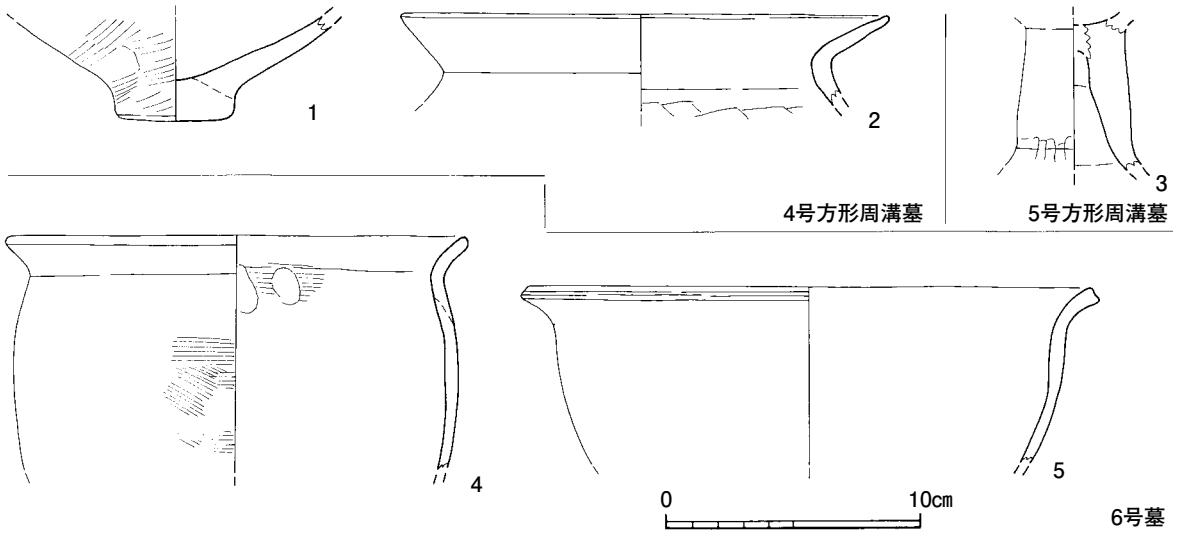
１区

７号溝（巻頭図版３・図版29・30、第185図）

１区中央部に位置し、北辺中央に陸橋をも



第180図　5･6号墓、1号甕棺墓実測図
（３は1/15、他は1/60）

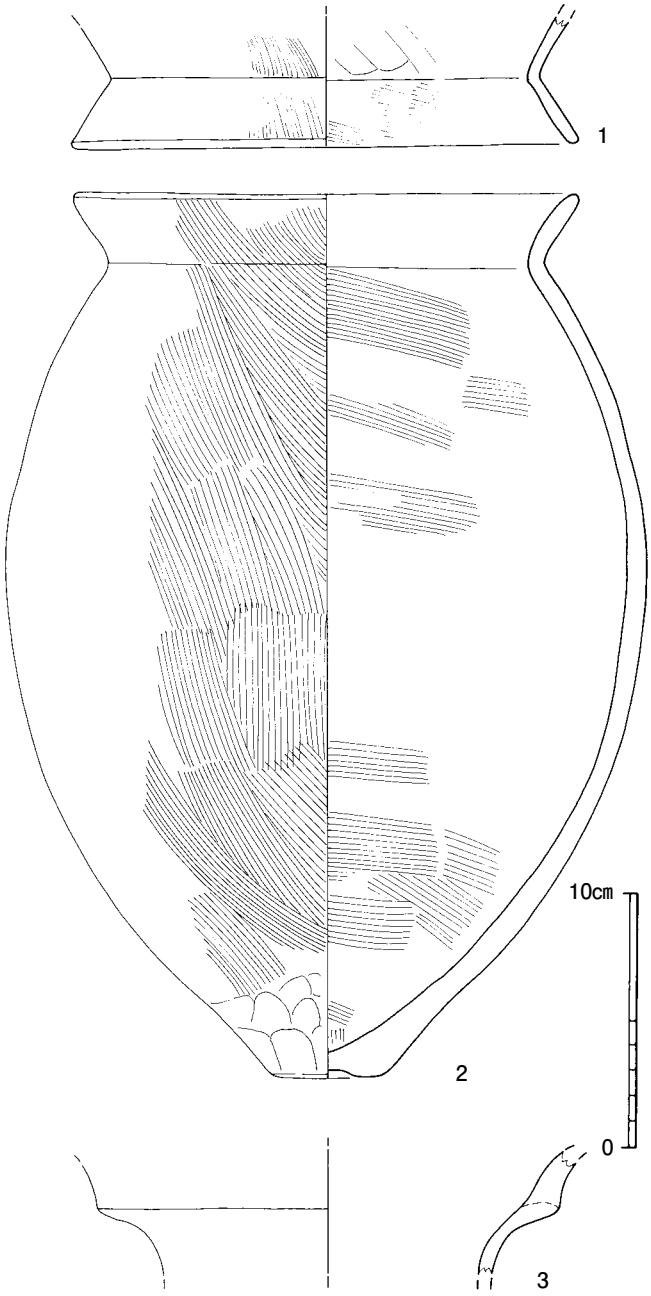


第181図　4･5号方形周溝墓･6号墓出土土器実測図（1/ 3）

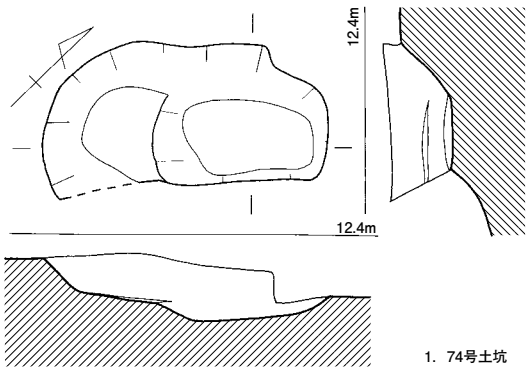
つ。隅が直角で辺は直線的な企画的な正方形プランで、溝の壁はほぼ直立している。溝の内法は南北14.0 ～ 17.4m、東西13.6 ～ 14.0、外法は南北16.8 ～ 19.4m、東西16.8 ～ 17.5mを測る。ほぼすべての辺から土器が出土しているが、特に東・南辺が多かった。上面が削平されているにしても、他の遺構は存在しているので、内部には主軸方向を同じくする掘立柱建物跡や柵跡はないといってよい。出土遺物からＩB期新段階に属する。

出土遺物（図版58 ～ 60、第186 ～ 190図）

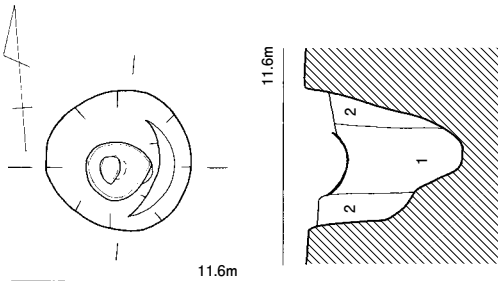
第186図１～３は複合口縁壺で、１は頸部の積み上げ痕は明瞭。内外器面摩滅で調整不明。外面黄灰褐色、内面黄灰色。２は頸部に刻み目が入るもので器面は摩滅している。橙褐色を呈する。３は複合口縁壺で、内外器面摩滅で調整不明。外面黄灰褐色、内面黄灰色。４は複合口縁壺で、頸部との接合部で剥離している。内面は暗灰褐色で、外面もにぶい暗黄灰褐色に変色し、器面の残っている部分は煤が付着している。２次的な変色であろう。５は複合口縁壺で、口縁下半は黄灰色だが、上半は内外黒灰褐色に変色している。赤変はないので、廃棄時の２次的な変色であろう。口縁

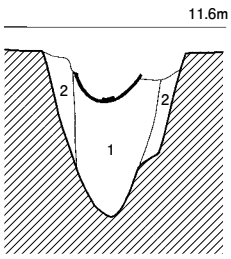


第182図　1区1号甕棺墓出土土器実測図（1/ 3）



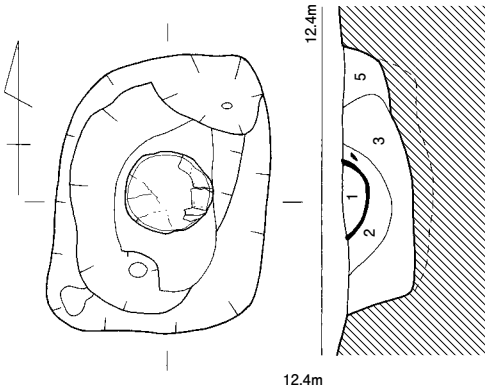
1. 74号土坑



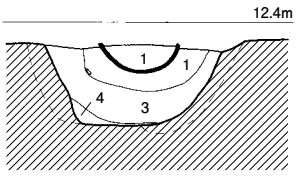


1 淡暗灰褐色土
2 にぶい黄灰褐色土　基盤層に近い　粘性あり

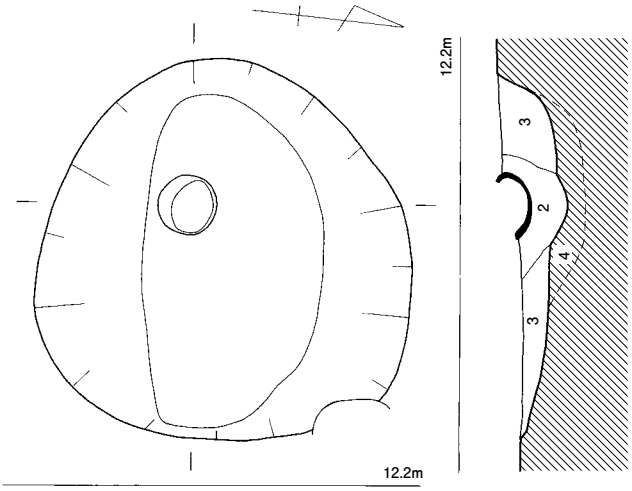
2 ピット260

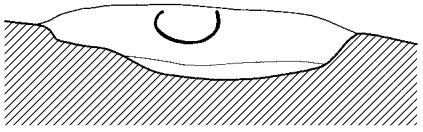


1 暗黒褐色土
2 黒色土
3 黒灰褐色土
4 黄色土+黒灰褐色土（基盤層ブロック）
5 淡茶灰褐色土　基盤層に近い

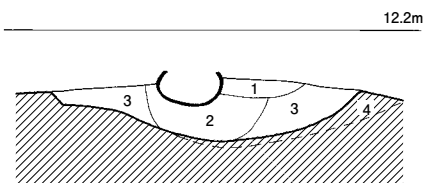


3 ピット261





1 ややにぶい黒褐色土
2 黒褐色土
3 黒褐色土+黄灰色土　} 近似層
4 暗黄灰色土（基盤層）



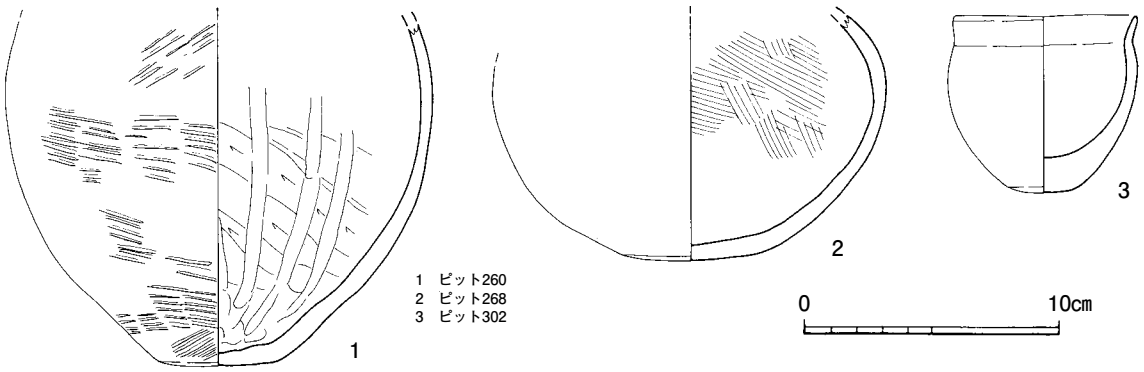
4 ピット268

第183図　1区74号土坑、1区ピット260･261･268実測図　（1は1/40、他は1/20）

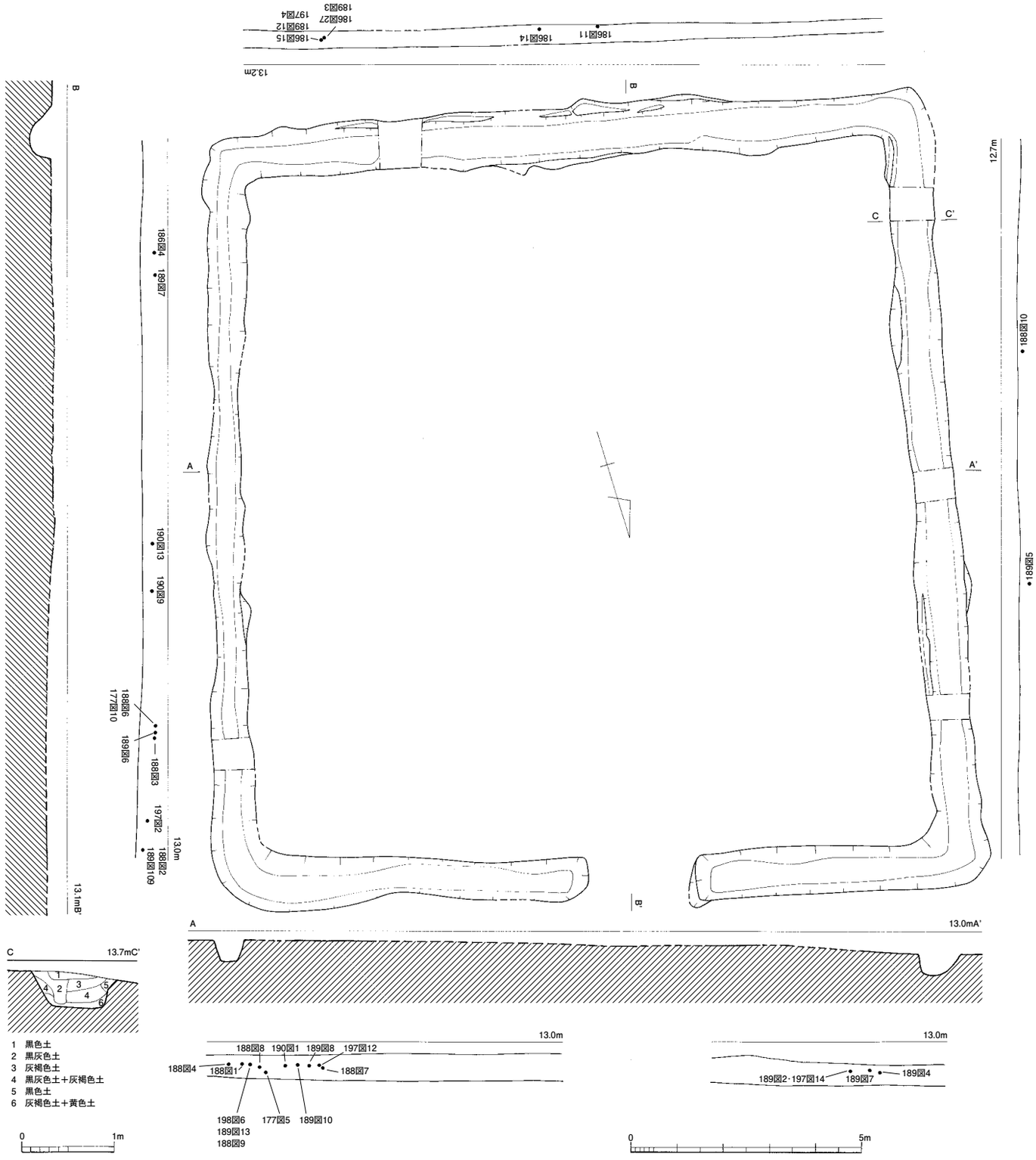
部と頸部の接合部で剥落している部分により、接合痕は明瞭。外面口縁部はナデで、無文。頸部は目の細かいタテハケ、内面は摩滅して調整不明。頸部突帯は斜めの幅の広い刺突を交互に入れたもの。６は直口壺で、器面摩滅で調整不明。外面は黄灰褐色で、内面は黄灰色。７は直口壺で、口縁部は摩滅しているので本来は跳ね上げ部は強かっただろう。外面頸部には右上タタキが残る。頸部内面はケズリ。内外黄橙色で変色なし。８は直口壺で、器面摩滅で調整不明。内外面は橙褐色で、変色なし。９は直口の扁胴壺で、器面の残りは良い。胴部はナデと目の粗いハケ、内面は丁寧なケズリ・内面黄橙色、外面黄灰色から黄橙色で、変色なし。口縁端部は残りが悪いが尖っているものと思われる。10は在地的な直口壺で、器面摩滅で不明瞭ながら、外面は右上のタタキ、内面はケズリか。外面は淡橙灰色で、内面がにぶい暗黄灰色なのは焼成不良のため。11は在地産山陰系２重口縁壺で、口縁部内面に横ナデが入る。胎土は精良で、にぶい内外黄灰色。12は２重口縁壺で、内外面黄橙色で変色なし、外面ハケ後ミガキで肩部は摩滅して調整不明、内面頸部までミガキ。13は２重口縁壺で外面に櫛描き波状文が入る。内外器面摩滅で調整不明。外面はにぶい黄橙灰色、内面は頸部と口縁部の接合部が黄黒灰色に変色している。

第187図１は外面黄橙色で変色がないので壺の底部である。外面タタキ、内面ハケで、内面は暗黒灰褐色なのは焼成不良のためだろう。２は外面が黄橙色で変色がなく、内面は焼成不良の暗灰褐色なので壺の底部である。外面は右上のタタキで、内面ハケ。外底は蛇ノ目状に肥厚している、外底に黒斑がある。３は外面暗黄灰褐色だが、内面は黄橙色で変色がないので壺の底部である。外面器面摩滅で調整不明。内面は丁寧なハケ。外底に不規則なスタンプがあるが、植物の茎と思われる。４は内外ハケで、外面暗黄橙色、内面は黄灰色で変色がないので壺の底部である。胴下位に黒斑あり。５は外面タタキ、内面は器面摩滅で調整不明。外面黄橙色で変色がないので壺の底部である。内外胴下位に黒斑があり、内面の黒灰色は焼成不良のため。６は壺の底部で、器面摩滅で調整不明。胎土は砂の混入が多く、ざらつく。外面胴下位から底部は黒斑あり。

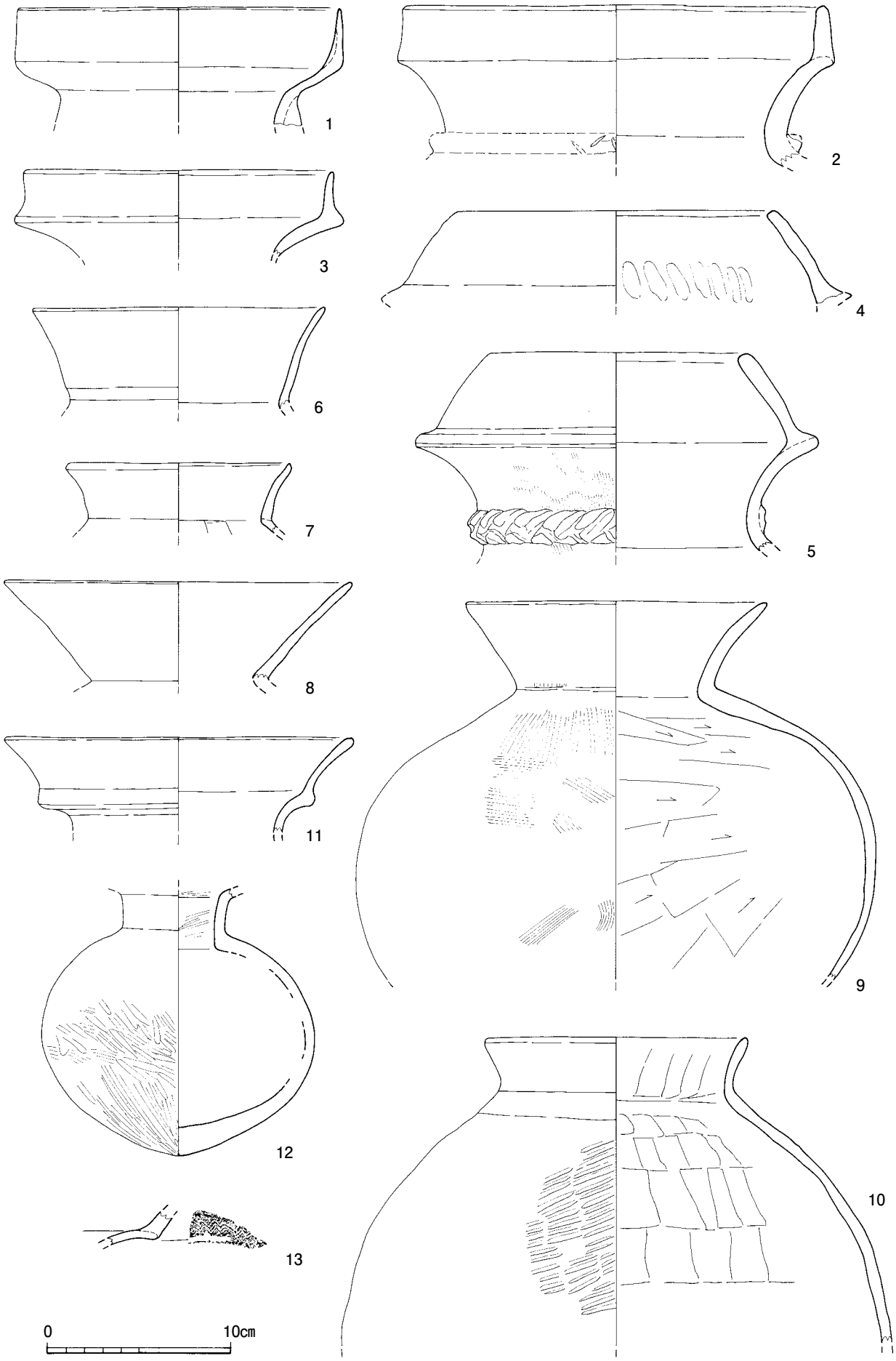
第188図１は甕で、外面口縁部はナデ、胴部は右上のタタキで、下位はナデ消している。内面はナデで、ケズリはない。器壁は厚い。内外面橙褐色で、下半は暗灰褐色に変色しているいので煮沸使用されている。２は初期の布留式甕で、外面胴中位までタテハケで、下位はタタキを消してハケが入る。内面はケズリ。器壁は薄い。内外面上半は明橙色で、下半は暗灰褐色に変色しているので煮沸使用されている。外面の器面の残っている部分には煤の付着が見られる。備後地方に多いタイプ。３は小型甕で、口縁部端は尖りや返りがない。肩部は右上タタキで、内面ケズリ。胴上位は器



第184図　１区ピット260･268･302出土土器実測図（1/ 3）



第 185 図　1 区 7 号溝実測図（1/120・1/60）



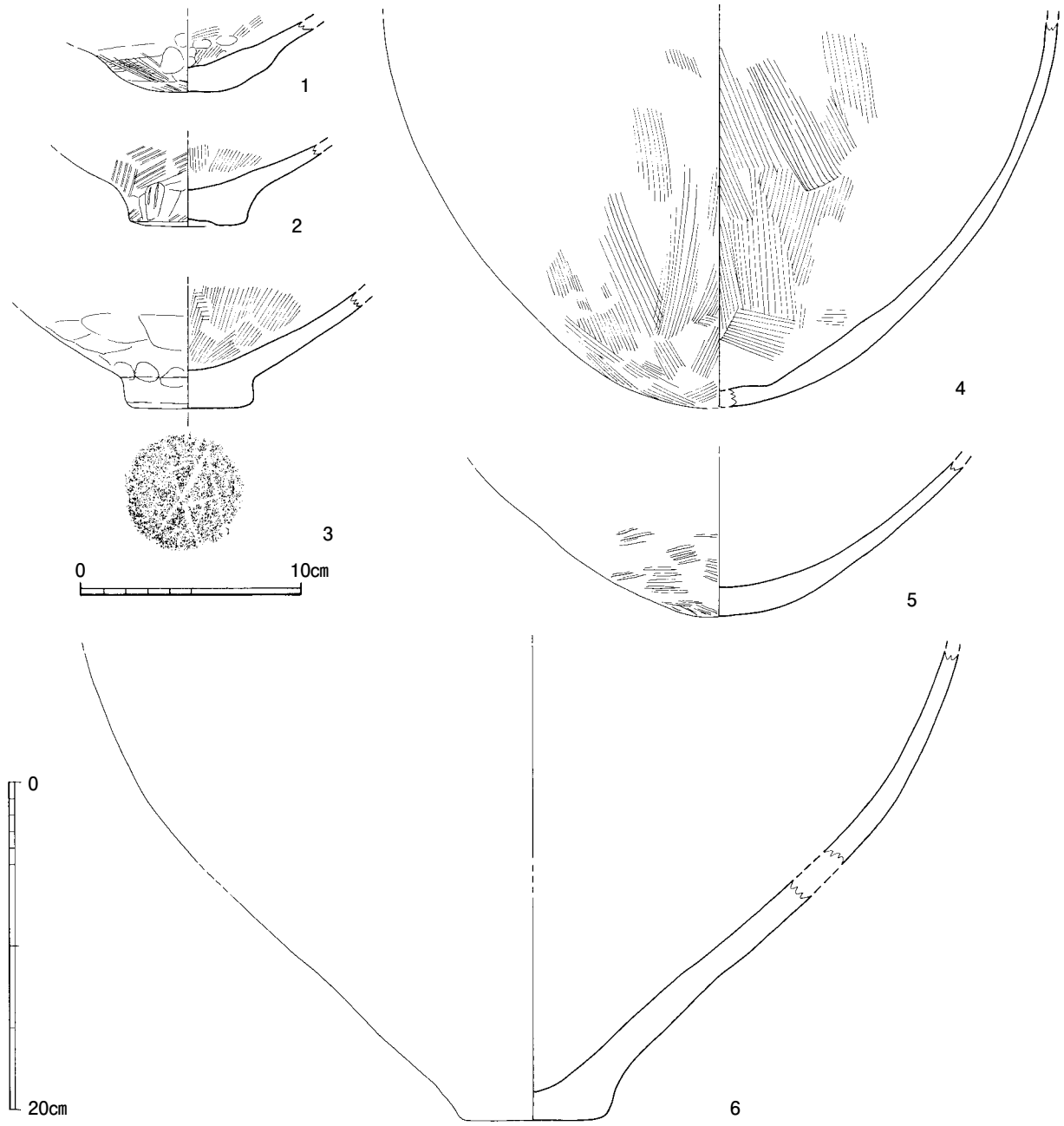
第186図　１区７号溝出土土器実測図１（1/ 3）

面摩滅でタタキの痕跡も残っていない。外面黄橙色で、内面は淡赤橙色に変色しているが、部分的なもので煮沸使用によるものではない。肩部の器壁が厚い庄内模倣甕である。４は庄内模倣甕で、口縁端部は摩滅しているが小さな返りがある。外面上半には右上タタキが、胴下位にハケがある。内面はケズリ。上半は内外面橙褐色で、下半は外面赤化し、内面には灰褐色の変色があるので煮沸使用されている。５は甕で、外面目の粗いハケ、内面は口縁部ヨコハケ、肩部はケズリ。器壁は厚い。外面橙褐色で、内面黄橙色で、変色がないので煮沸使用の有無は不明。６は甕で、口縁部端は小さな返りがある。肩部は右上タタキで、内面ケズリ。外面の黄灰色は胎土の色調で本来の器面の色調は不明。内面は黄橙色で変色がないので煮沸使用されていない可能性がある。７は小型甕で、器面剥落で器壁が薄くなっている。内外器面摩滅で調整不明。外面はタタキの単位らしい面が残る。外面暗黄橙灰色、内面暗黄灰色で変色ないが、胎土の色調が露出したにしても変色がないので煮沸使用されていないかもしれない。８は小型甕で、口縁部は残りが悪いが内面への返りはない。器面摩滅で外面胴上半にタタキの痕が、胴下位にケズリ痕がある。内面は調整不明で、砂粒の動きはない。内外面黄橙色で胴下半に黒灰色の変色があるので煮沸使用されている。９は畿内５様式系の変容した甕で、内面肩部以下にケズリが入る。内面口縁部はヨコナデ。外面は器面摩滅しているかタタキをナデ消している。10は甕で、器面の残りがよい。口縁部は内外ヨコナデ。外面肩部は右上タタキをナデでその上に幅の広いタタキが部分的に入る。内面ケズリだが器壁は厚い。内外黄橙色で変色なし。

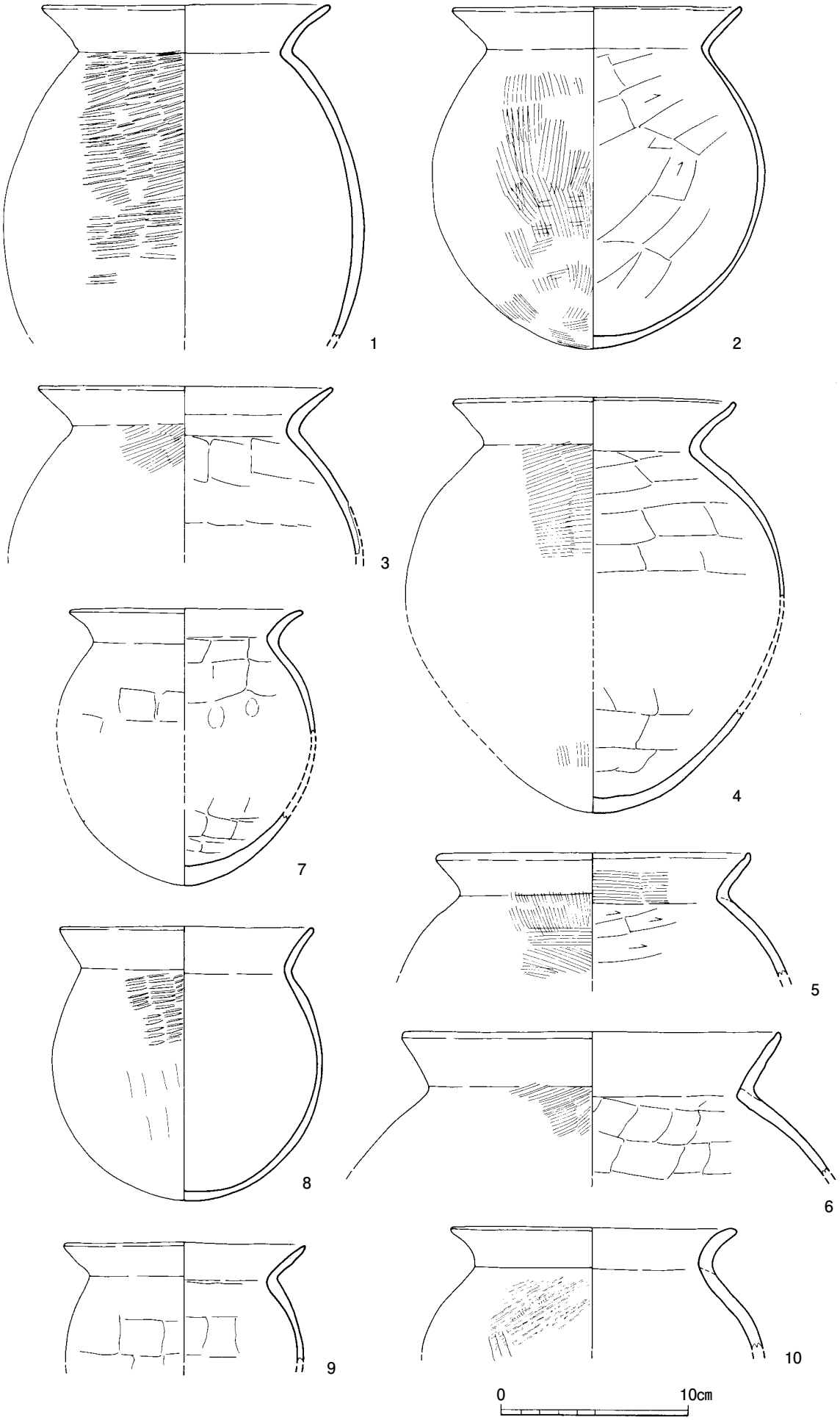
第189図１は小型甕で、器面は残りが悪い。外面はタテハケで、内面はケズリ。タタキの単位らしいものは残存部内にはない。外面黄灰褐色で変色ない。内面の暗黄黒灰色は焼成不良の黒斑だろう。煮沸使用の有無はわからない。２は畿内５様式系甕で、口縁端部は小さく跳ね上げがある。外面は斜めのハケ消し、内面はケズリ。器壁は厚い。内外面黄橙色で、変色がないので煮沸使用の有無は不明。３は甕で、外面器面摩滅のため不明瞭だが、頸部はナデで、下位にハケがわずかに見られる。内面は肩部がオサエ、胴部はケズリで器壁は厚い。外面黄橙色で、内面は橙褐色で変色していないので煮沸使用されていない。４は河内型庄内甕の模倣品で、内外器面摩滅だが、外面は頸部にわずかにハケが残る。内面は頸部上端までケズリ。内面黄橙色で変色ないが、外面黄灰色で赤化しているので煮沸使用されている。５は甕で、外面肩部はタタキ後ハケ、内面はケズリ。内外にぶい黄橙褐色で変色なし。６は甕で、外面肩部は右上のタタキをナデ消した後ハケが入る。内面はケズリ。器壁は厚い。内外面黄橙色で、変色がないので煮沸使用の有無は不明。７は小型甕で、口縁部と胴部は図上接合である。外面は上半がハケ。内面はケズリ。外面上半黄橙色で、下半は黒褐色で煤が付着している。内面は上半黄橙色、下半暗黄褐色で変色している。赤化していないが煮沸使用されている。８は小型甕で、器面剥落で器壁が薄くなっている。内外器面摩滅で調整不明で、外面はタタキの単位らしい面が残る。外黄灰色で変色ないが、胎土の色調が露出したにしても変色がないので煮沸使用されていないかもしれない。９は小型甕で、底部は丸底。外面タタキのような間隔だが目の粗いハケである。肩部はヨコハケ、肩部はタテハケだろう。内面は胴中位までタテケズリ、肩部はヨコケズリで、器壁は薄い。外面黄橙色で、下位は灰褐色に変色しているので煮沸使用されている。内面黒灰色なのは焼成不良によるもの。10は小型丸底壺で、外面は幅の狭いミガキで、内面はナデのみ。内外面黄橙色からにぶい暗黄灰色で、底部に黒斑がある以外は変色なし、内面は焼成不良のため黒灰色。11は小型丸底壺で、頸部と胴部は図上接合である。内面器面摩滅で調整不

明。外面黄橙色で、内面にぶい暗黄灰色は焼成不良のため。12は小型丸底鉢で、胴部と底部は図上接合である。外面目の粗いハケ、内面器面摩滅で調整不明。外面黄橙色で黒斑あり、内面にぶい暗黄灰色で変色なし。13は小型丸底壺で、器面摩滅で調整不明。内外面黄橙色で変色なし。14は小型丸底壺で、器面摩滅で調整不明で、外面胴下位に板状のオサエ痕が残る。内外にぶい黄橙色で変色なし。15は小型丸底鉢で、内外器面摩滅で調整不明。内外黄橙色で、変色なし。

190図１は幾内５様式系に近い高杯で布留式高杯を模倣したもの。器面摩滅で調整不明。外面杯部は粘土積み上げ痕の凹凸が大きいので調整は粗い。内外黄橙色で変色なし。２は幾内５様式系の高杯で、庄内系を模倣した器形。器面摩滅で調整不明。外面杯部は粘土積み上げ痕で剥離している。内外黄橙色で、内面杯部に黒斑あり。脚部透し孔は３ヶ所。３は高杯で、器面摩滅で調整不明。外面杯部が脚部との接合部で剥離している。内外黄橙色で、マーブル状の胎土である。脚部透



第187図　１区７号溝出土土器実測図２（6は1/4、他は1/ ３）



第188図　1区7号溝出土土器実測図3（1/ 3）

し孔は４ヶ所。杯部との接合面は赤橙色と黄橙色が交互に層をなしている。４は小型高杯で、裾部外面はミガキ、内面は丁寧なハケ。内面が暗灰褐色なのは焼成不良のためで、外面は上半が灰褐色、下半は内外とも赤変しており、変色の境界が明瞭であることから、意図的に胎土を替えたものと思われる。５は高杯で、器面摩滅で調整不明。内外橙褐色で変色なし。意図的に赤く焼いている。６は小型高杯で、杯部と脚部の接合面には格子目の沈線が入る。内外器面摩滅で調整不明。内外黄橙色から橙褐色で、色調が一定していないが胎土の色調が露出したものである。７は小型高杯で、内外黄灰褐色で変色なし。器面摩滅で調整不明。８は小型高杯で、外面は器面摩滅で調整不明、脚部内面はハケ。内外赤橙色なのは意図的なものであろう。透し孔は３ヶ所。９は小型高杯で、内外器面摩滅で調整不明だが、外面脚部にミガキの痕跡がある。内外橙褐色で変色なし。10は小型高杯で、杯部内底は剥落であろう。内外器面摩滅で調整不明。内外黄橙色から明橙色で、変色なし。透し孔は３ヶ所。11は内外面橙褐色で変色がなく、内面は焼成不良でないので鉢の底部であろう。外面はナデで、内面は摩滅していて調整不明。外底は平底で、胴下位と外底に黒斑がある。12は杯で、器面摩滅で調整不明。外面胴下位はタタキの痕跡がある。器壁が薄く、全体に歪みがあるので壺の下半ではなく、杯であろう。内外黄橙褐色を呈する。外面に胴下位から底部に黒斑あり。13は甑で、穿孔は外面から焼成前に行われている。内外ケズリ状のナデで、工具痕が多く残る。内外面橙褐色で変色がなく、器面も残っているので使用されていない。14は杯で、外面はオサエ、内面はナデ、内外黄橙褐色を呈する。内外黄橙色で、外面に黒斑あり。15は不明器種で、内面側から径２㎜ほどの小さな刺突が入る。内外器面摩滅で調整不明。内外黄橙灰色で、変色なし。16は小杯で、内外器面摩滅で、内面の工具によるナデかケズリの単位がわかるのみ。外底はオサエですぼまり、小さな平底を呈する。内外黄橙色で、外面に黒斑あり。17は丹精製土器の把手であろう。内外ナデのみで、鉢部は黄灰黒色から赤紫灰色に変色している。欠損部に２つ焼成前の穿孔が見られるが、機能がわからない。

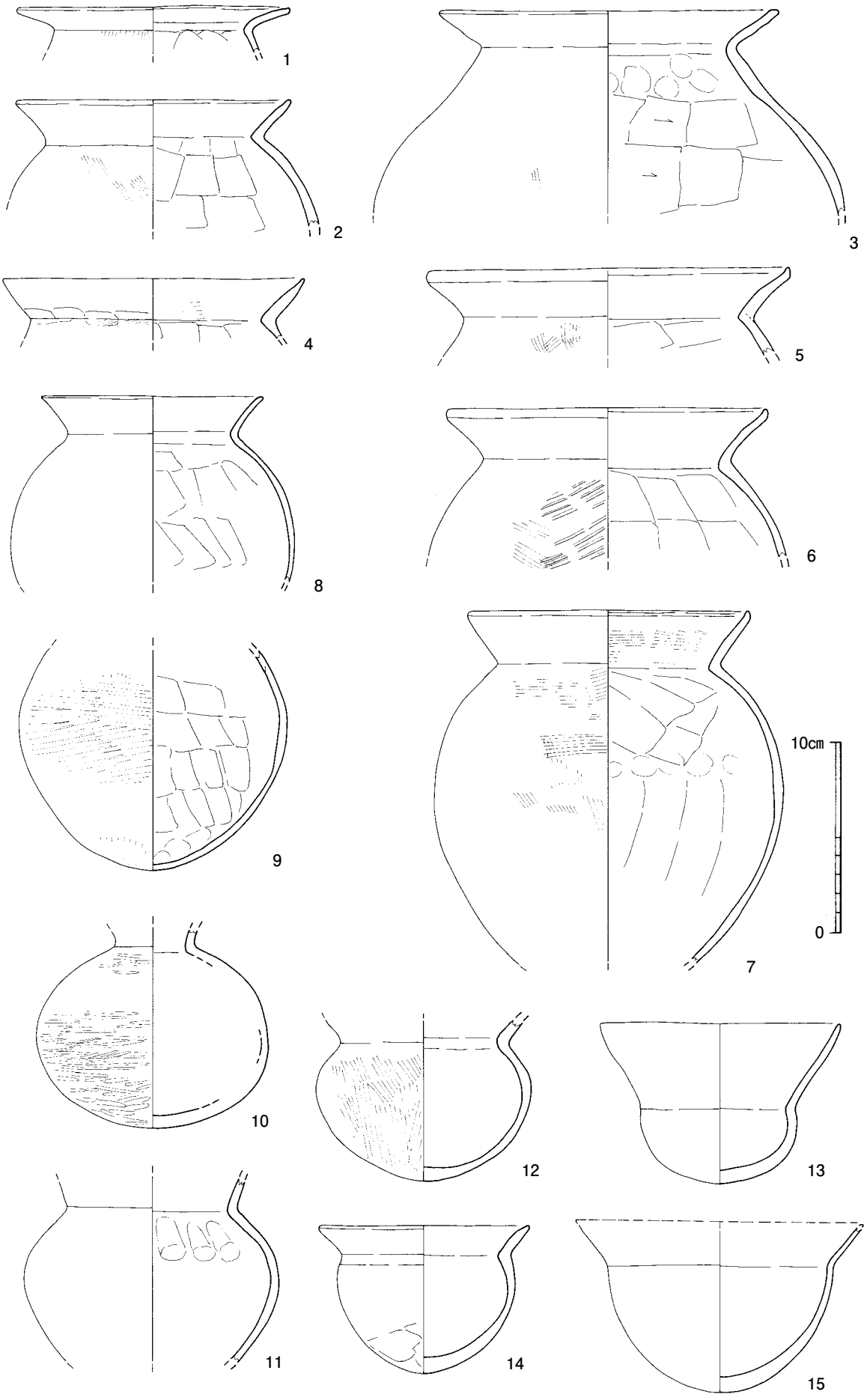
このほか、投弾（第199図８）が出土している。

28号溝（図版30、第191図）

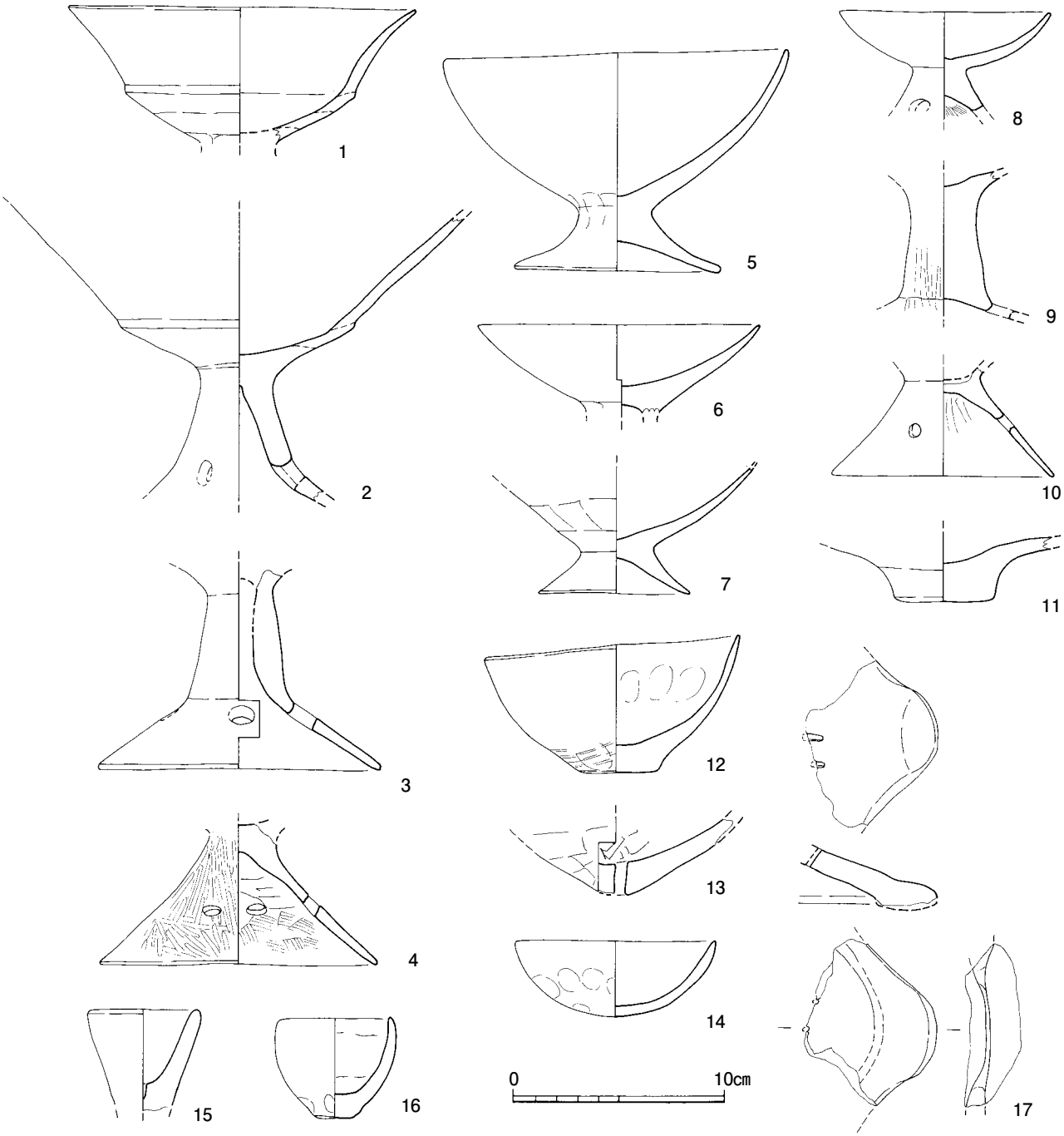
１区北西部の西端に位置し、南西から北東に走る溝で、44号掘立柱建物跡に切られ、25号溝を切る。北端の壁は立ち上がっており、それ以上北には延びない。溝幅は60㎝、深さ50ｃｍを測る。西側に集中的に土器が出土している。

出土遺物（図版59、第192図）

１は壺の底部で、肥厚して蛇ノ目状を呈する。胴部下位はオサエ。外面は暗灰褐色で黒斑あり。内面は器面摩滅で、色調は橙褐色で変色なし。２は内外黒斑で煮沸焼成した痕跡がないことから壺の底部であろう。底部は、肥厚して突出しているが、内面は窪ませている。外面は水平のタタキ。３は布留系の甕で外面縦横のハケで肩部はハケのナデ消し。内面ケズリ。内外にぶい黄灰色で変色ないので煮沸使用の有無は不明。4･5は小型高杯で、４は器面摩滅で調整不明だが、整った作りなので丁寧な調整だろう。黄灰白色を呈する。５は小型高杯で、杯部は器面摩滅で調整不明。脚部は内外目の粗いハケ。透し孔は外面から施されている。内外黄橙色で変色なし。外面裾部に黒斑あり。６は小型高杯で、脚部外面は器面剥落で調整不明。穿孔部分が残っていない。内外橙褐色で変色なし。７は小型高杯で、脚部外面は器面剥落で調整不明。穿孔部分まで残っていない。内外橙褐



第189図　1区7号溝出土土器実測図4（1/ 3）



第190図　１区７号溝出土土器実測図５（1/ ３）

色で変色なし。８は小型高杯で、脚部外面は摩滅しているがミガキの痕跡がある。内外橙褐色で変色なし。９は高杯で、脚部はやや膨らみがある。外面脚部は器面摩滅しているがミガキの痕跡がある。内外黄橙色で変色なし。幾内第５様式系で短いことからＢ２類のＩＢからⅡＡ期に属する。10は高杯で、脚部外面の器面が摩滅しているがミガキの痕跡がある。内外黄橙色で変色なし。幾内第５様式系で器高が低いことからＩＢからⅡＡ期に属する。11は小型器台で、器面摩滅で調整不明。内外黄橙色で部分的に赤橙色があるが赤変ではない。口縁部に黒斑あり。12は内外黄橙色で変色がないので杯だろう。外面は幅の広い水平方向のタタキ。内面は器面摩滅のため調整不明。13は杯で、器面摩滅のため調整不明。タタキの単位面は見られないが、器面は平滑なのでハケであろう。外面から内面半分が黄橙色で、内面の半分が黄灰白色である。これは、焼成時に何かに重なった部分が

焼成不良になったためだろう。それ以外は変色なし。このほか打製石斧（第199図3）が出土している。

29号溝（図版30、第191図）

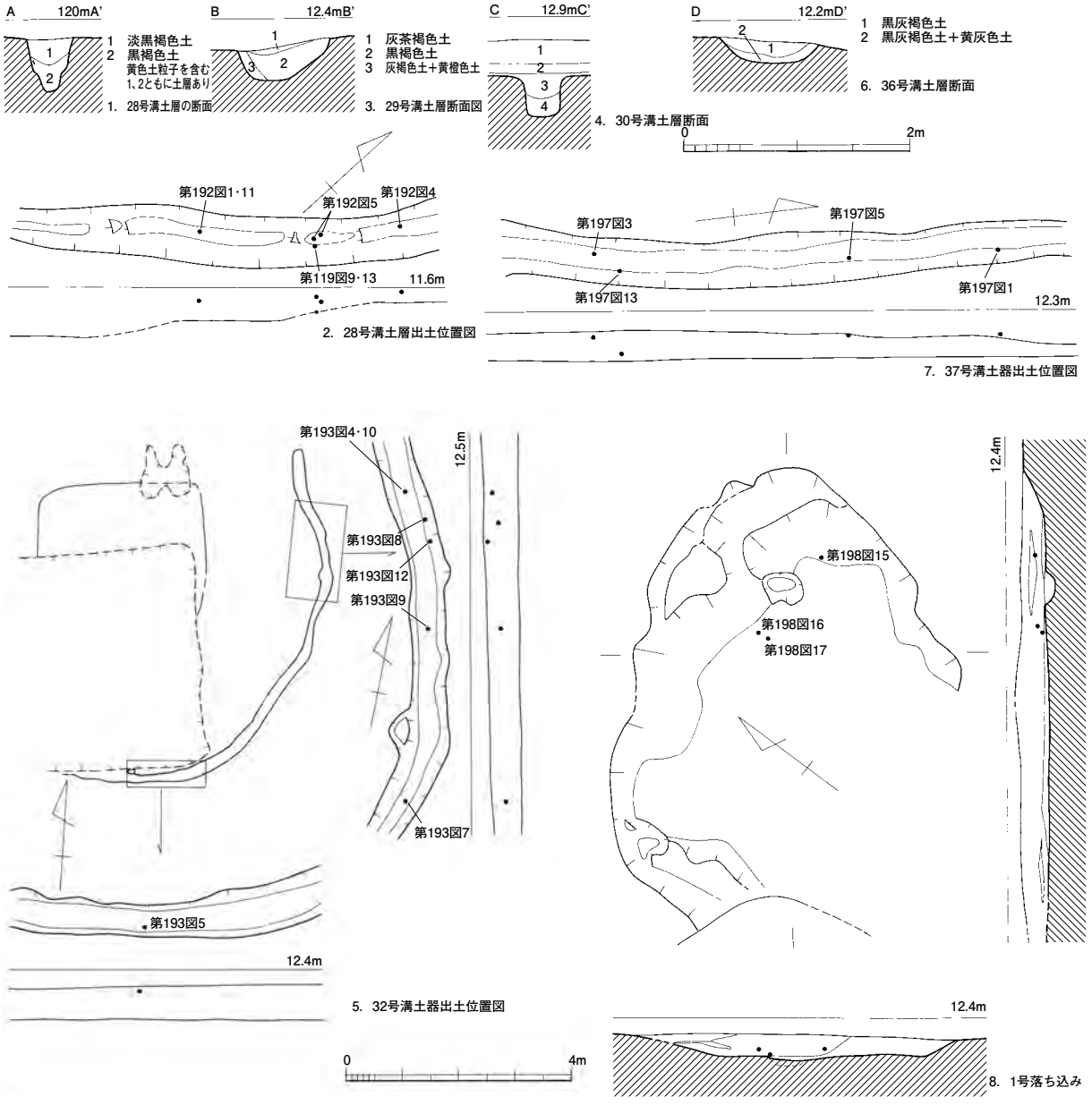
1区北西部の北端に位置し、南西から北東に走る溝で、南端は撹乱に切られ、北端は調査区外に延びる。溝幅は82cm、深さ20cmを測る。出土遺物は少なく、時期を特定しにくい。

出土遺物（第192図）

14は小型高杯で、内外器面丁寧なミガキで、器壁が厚い。内外橙褐色で変色なし。穿孔部分まで残っていない可能性が高い。

30号溝（図版30、第191図）

1区北西部の北端に位置し、南北に走る溝で、南端は壁が立ち上がり、北端は調査区外に延びる。埋土は黒色土で、溝幅は50cm、深さ40cmを測る。出土遺物は少なく、時期を特定しにくい。



第191図　1区28～30・32・36・37号溝、3号落ち込み実測図（8は1/120、他は1/60）

出土遺物（第192図）

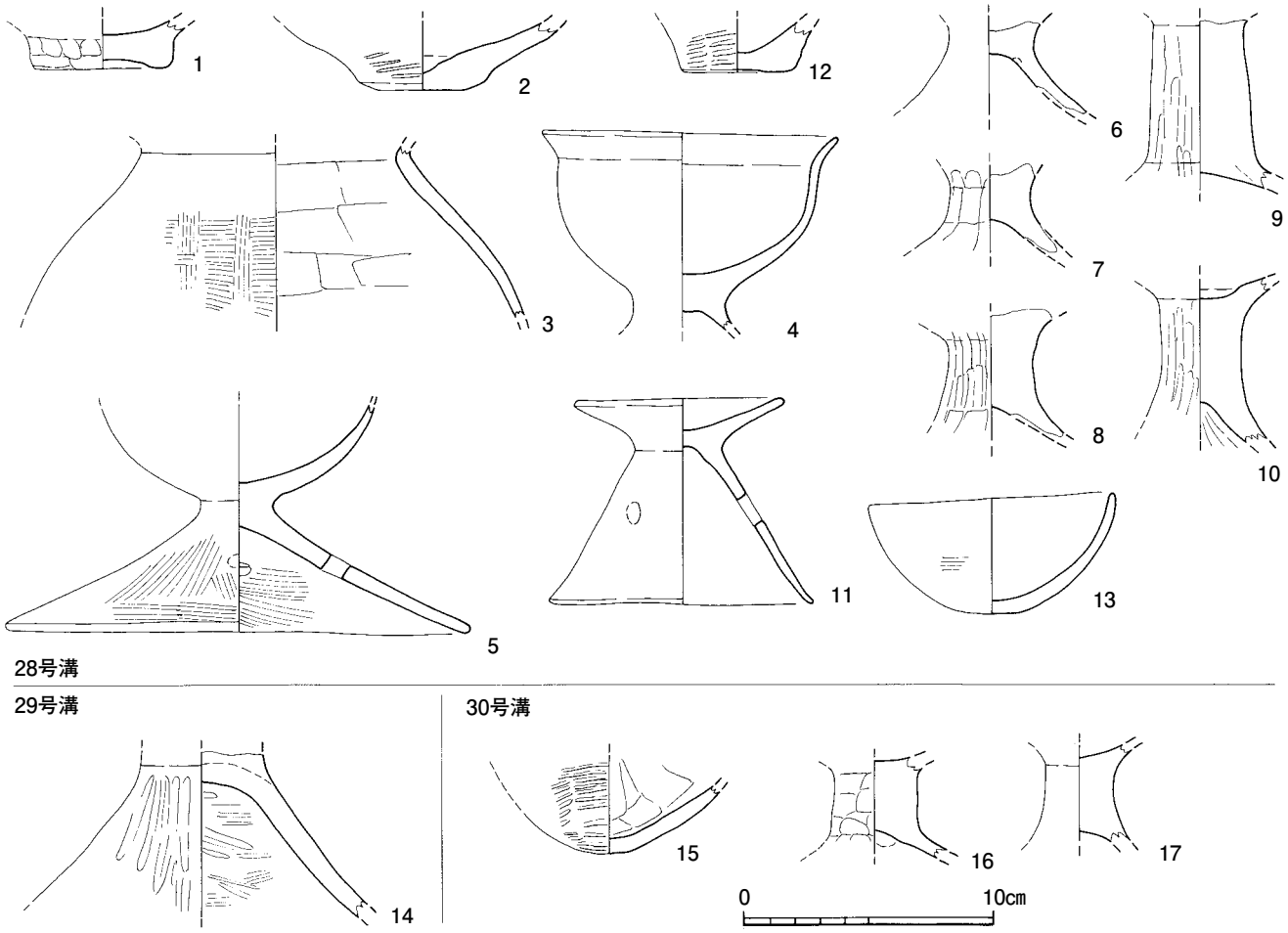
15は小型の甕で、底部は丸底だが粗い板状ナデで凹凸が多い。外面幅の広い水平なタタキ、内面ケズリで、外面は赤橙色なので赤変しているので煮沸使用されている。内面の黒灰色は焼成不良であろう。16は小型高杯の脚部で、器面摩滅で調整不明だが、脚部表面には幅の広い調整の単位面がある。穿孔のある部分まで残っていない。内外黄橙灰色で変色なし。17は小型高杯の脚部で、器面摩滅で調整不明。穿孔のある部分まで残っていない。杯部内面は胎の黄橙灰色で外面は下位ほど赤変しており、脚内面まで赤変している。裾部は３ヶ所に突出部があるように割れているので杯部と裾部を外して倒立し、支脚として使用したと考えられる。

32号溝（第194図）

１区中央部に位置し、45号竪穴住居跡の東を弧状に走る溝で、44･52号竪穴住居跡を切っていた。両端の壁は立ち上がっており、それ以上延びない。溝幅は45㎝、深さ15cmを測る。

出土遺物（第193図）

１は広口直口壺で、内外黄灰色で変色なし。外面胴部はタタキ後ミガキ、内面の口縁部は幅の狭いミガキで、肩部は積み上げ痕を明瞭に残し、タテナデが入る。２は２重口縁壺で口縁部に竹管文がスタンプされて、頸部は外面ミガキ。内面は器面剥落しており、調整不明。３は壺で口唇部が跳ね上がっている。内面頸部は積み上げ痕が残る。内外器面摩滅のため調整不明。４は壺で、外面は



第192図　１区28～30号溝出土土器実測図（1/ 3）

ミガキ、内面は胴部中位まで器面摩滅で下位はハケ。胎土は比較的精良。外面はにぶい黄灰色で、内面はにぶい暗黄灰色なのは焼成不良のためだろう。５は壺で、肩部内面に粘土積み上げ痕が残る。器面は摩滅しているが、外面はタタキの痕跡があり、内面は胴下半ケズリだが摩滅しており単位がわからない。上半は砂が動いていないので板状工具によるナデか。外面は赤橙色で黒斑の周囲は黄灰色である。内面はにぶい黄灰色で変色していない。意図的に赤く焼かれた可能性がある。６は内外赤変が見られず、内面が焼成不良なので鉢であろう。小さい平底で、外面幅の広い右上のタタキ、内面は器面摩滅しているため不明。外面が橙褐色で、内面は橙灰白色を呈する。７は壺の底部で、外面はケズリ、内面ハケがわずかに残る。内面にぶい黒黄灰色は焼成不良のためだろう。外面は黄橙色で、底部から胴下位に黒斑あり。外底に扇形の深い圧痕がある。８は直口壺で、器面摩滅で調整不明。外面黄橙色、内面緑青灰色は焼成不良であろう。９は小型の甕の底部で、小さい平底で、外面幅の広い水平なタタキ、内面は器面摩滅しているがケズリで、外面は黄橙色で部分的に赤変しているので煮沸使用されている。外面底部に黒斑あり。内面の黒灰色は焼成不良であろう。10は小型器種の底部で、外面は黄灰色で赤変がないので杯か。小さい平底で、蛇ノ目状に肥厚している。外面は幅の広い右上がりのタタキ、内面は器面摩滅で不明。11は小型高杯の脚部で、器面摩滅のため調整不明。穿孔は等間隔に４ヶ所。内外黄橙灰色で、半分に黒斑があり、杯部内面も黒灰色を呈する。12は甑で、外面はオサエの凹凸が著しい。外底の穿孔は内側から開けており、内面はヨコハケ。内外器面はにぶい暗黄灰褐色で、赤変がないので使用頻度は低かっただろう。外面には黒斑がある。

34号溝（第163図）

１区中央西端の小溝で、西端は調査区端に延び、東端は失われている。幅50cm、深さ25cmで、６号竪穴住居跡を切るが、他の竪穴住居跡の巡る溝に規模が近いので、同様な性格の溝だろう。

出土遺物（第194図）

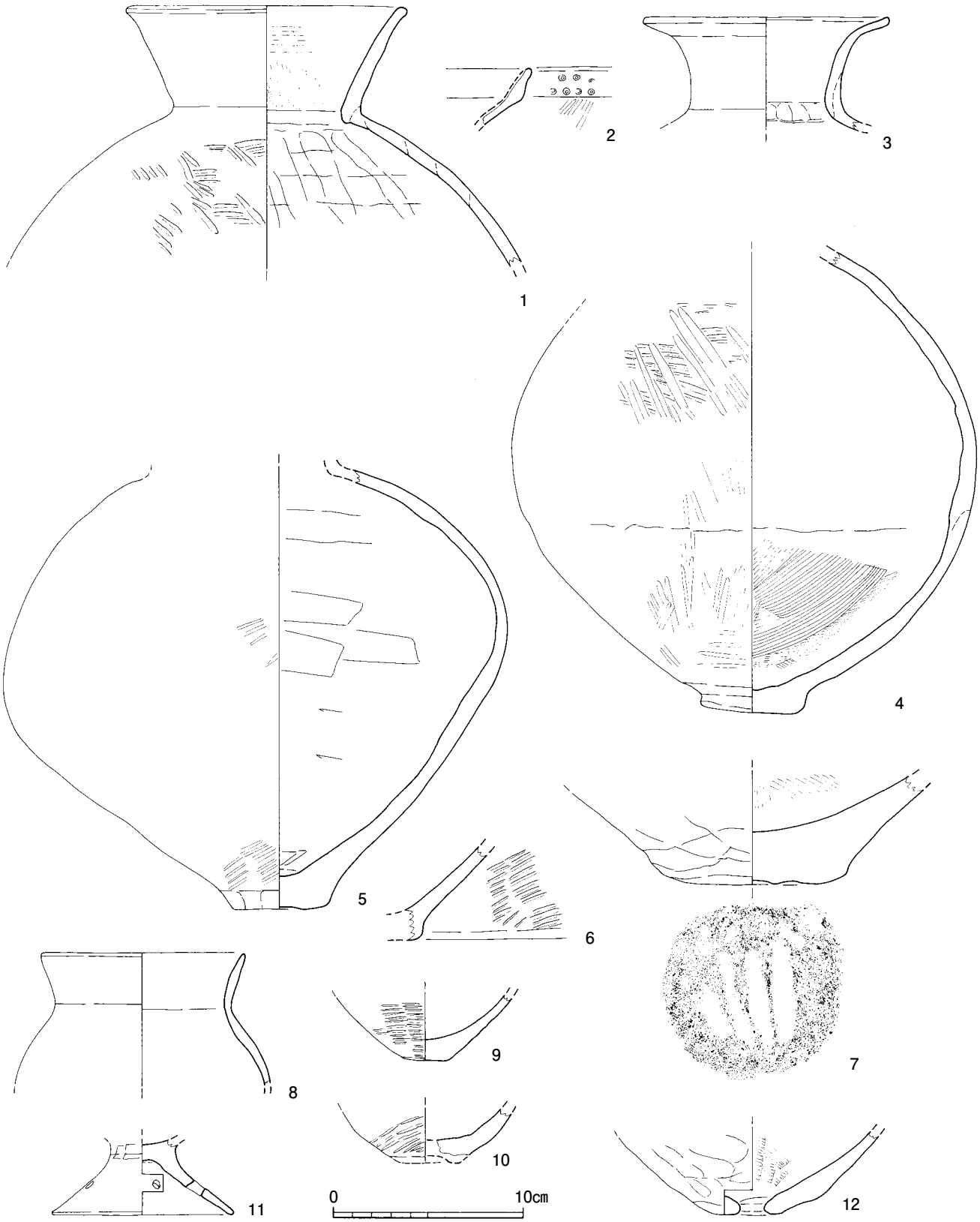
１は煮沸使用の痕跡がなく、内外ナデであることから広口直口壺の口縁部であろう。口縁端部は丸く整形されている。にぶい暗黄灰色を呈するが変色はなく、内面頸部は黒灰色は焼成不良であろう。２は上端の器壁が薄くなっているので広口直口壺の頸部であろう。器面摩滅で調整不明。内外面黄灰色。３は小型甕の底部で、小さな平底であろう。器面摩滅で調整不明だが、わずかに右上がりのタタキの痕跡がある。外面赤橙色で赤化している。内面黄灰色は胎土の色調だろう。

35号溝（第163図）

１区中央部西側に位置する43号竪穴住居跡の周囲を巡る溝で、28･36号溝に切られる。西端の幅が広くなっているが、別の遺構と切り合っている可能性が高い。南端部はピットに切られているが、それより西には延びず、北側も延びず端部の壁が立ち上がっていたので明らかに全周しない。狭いながら深く、溝幅は70cm、深さ40cmを測る。

出土遺物（第194図）

４は山陰系の壺だろうか。器面摩滅で調整不明。内面は口縁部にケズリが見られる。内外にぶい黄橙色で変色なし。５は２重口縁壺で歪みがある。小片のため傾きは不確実。内外器面摩滅で、暗黄灰色を呈する。６は長頸壺で、器面摩滅で調整不明。内面肩部に積み上げ痕が残る。内外黄灰色



第193図　1区32号溝出土土器実測図（1/ 3）

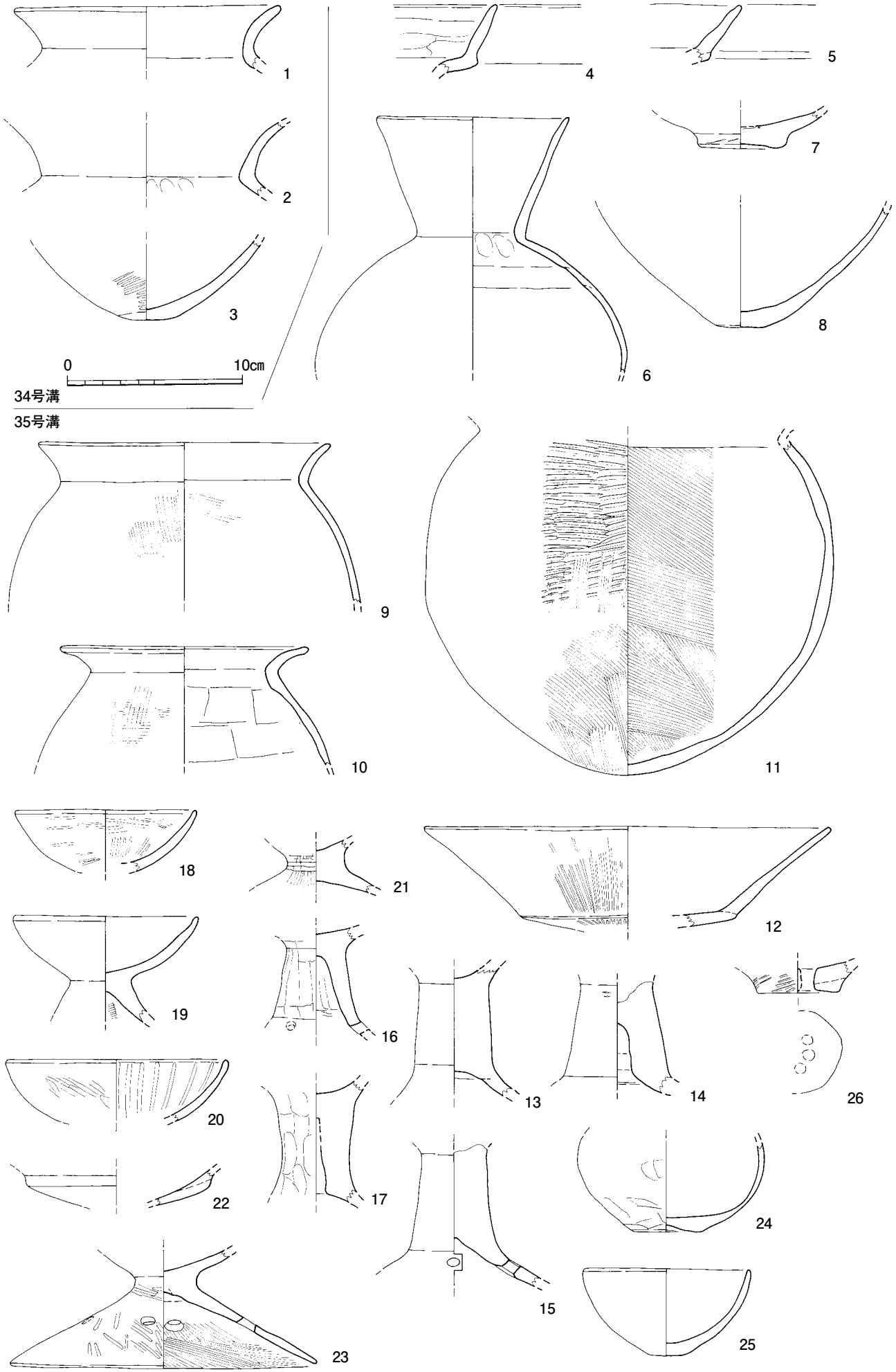
を基調としており内面の暗黄灰色は焼成不良である。７は壺の底部で、外底の縁は肥厚している。器面摩滅で調整不明。外面黄橙色、内面の暗黄橙色は内容物による変色だろう。８は小型甕の底部で、小さな平底である。器壁が薄いのは器面剥落のためで、内外器面摩滅で調整不明。内面黄灰色は胎土の色調であり、外面赤橙色で赤化しているので煮沸使用されている。褐色パミスを多く含む。９は甕で、内外器面摩滅だが、外面は目の細かいタテハケ、内面は斜めのハケがわずかに見られる。内外にぶい黄橙色だが、胎土の色調で本来の色調は不明。褐色パミスを多く含む。10は甕で、口縁端部内面は折り返しがある。内外器面摩滅だが、外面は縦横に目の細かいハケがあり、内面はケズリ。にぶい黄橙色は胎土の色調で、器面は黒灰褐色に変色しているので煮沸使用されている。11は鉢で、上端が口縁部との接合部がすべて外れていることから、打ち欠いて無頸鉢としてい転用した可能性もある。外面は上半がタタキで、3㎜と幅が広いが、中位はナデられて細くなる。下半はハケ。内面は全面丁寧なハケ。内外上半は黄橙色で、下半外面は黒斑、内面は焼成不良で黒灰色。煮沸使用の痕跡はない。12は高杯で、外面は幅の狭いミガキが縦方向に丁寧に入る。内面は摩滅のため不明。内外明黄橙色で変色なし。13は高杯の脚部で、外面は器面摩滅で調整不明。外面黄橙色で、裾部内面が暗黄橙色なのは焼成不良のためだろう。内面の中実脚部と裾部の接合部に隙間が空いている。14は小型高杯の脚部で、内外黄橙褐色で変色なし。外面は器面摩滅で調整不明。中実の脚部に棒状の工具で穿孔されている。15は高杯の脚部で、外面は器面摩滅で調整不明。外面黄橙色で、透し孔は対面に残っているので４ヶ所だろう。16は高杯の脚部で、外面は器面摩滅でミガキの面が残る。外面明赤橙色で、意図的に赤く焼成した可能性がある。透し孔は対面に残っているので４ヶ所だろう。17は高杯の脚部で、外面は器面摩滅で調整不明で、外面にミガキの面が残る。内外黄橙褐色で変色なし。中実の脚部に棒状の工具で穿孔されている。18は小型高杯で、内外橙褐色で変色なし。内外面ミガキ。19は小型高杯で、内外黄橙褐色で変色なし。器面摩滅で調整不明。穿孔部分まで残っていない。20は小型高杯の杯部だろう。内面は等間隔に暗文が入る。外面はミガキが部分的に残る。内外暗灰褐色。21は小型器台で、内外黄灰色で変色なし。脚部外面ミガキ、裾部はハケか。穿孔部分まで残っていない。受け部内面は剥落している。22は小型器台で、内外茶褐色で変色なし。23は小型高杯で、内外黄橙褐色で変色なし。裾部外面ナデ後ミガキ、内面は丁寧なハケ。透し孔４ヶ所入る。杯部内面には工具痕が残る。24は小型器種で、煮沸使用の痕跡はないので壺だろうか。底部は肥厚で蛇ノ目状を呈する。外面黄灰色、内面暗黄灰色なので内面は焼成不良なので頸が締まる器形だろう。外面工具によるナデ、内面ナデで平滑になっている。25は杯で、小さな平底がつく。外面黄橙色で黒斑あり、内面暗黄灰色で変色している。器面摩滅で調整不明。26は底部に３つの穿孔があるので甑だろう。外面右斜めのタタキ、外面はにぶい黄灰色で赤変はなく、内面は器面摩滅で、暗黄灰色。

このほか、石庖丁（第199図２）が出土している。

36号溝（図版30、第191図）

１区中央部北西側を南西から北東に走る溝で、南端は１号墳の周溝に達しており、切り合う部分が浅く、撹乱が入っていたことから不明瞭だった。北端は調査区外に延びる。溝幅は105㎝と広く、深さは30㎝と浅く、断面形は台形を呈する。2･3号方形周溝墓を切る。

出土遺物（第195図）



第194図　1区34･35号溝出土土器実測図（1/ 3）

１は複合口縁壺で、外面部に櫛描き波状文が入る。内外橙褐色で変色なし。２は２重口縁壺で、器面は摩滅しており調整不明。内外黄橙色で変色なし。３は初期の布留甕で、西部瀬戸内に多いタイプで、外面は器面摩滅で調整不明。内面はケズリ。内外黄橙色で変色なし。４は高杯の脚部で、外面は器面摩滅で口唇部ヨコナデ調整不明。内外黄橙褐色で変色なし。胎土はマーブル状である。５は高杯の脚部で、外面は器面摩滅で調整不明だが、外面はハケだろう。内外面橙褐色で、透し穴は残っていない。６は支脚で、器面摩滅のため調整不明だが、外面はハケの痕跡がある。外面と内面上位はにぶい黄橙色、内面下位は焼成不良で黄灰黒色。被熱による赤化はわずかに見られる。８は支脚で、器面摩滅のため調整不明。外面黄橙色、内面は焼成不良で灰黒色。少なくとも被熱による赤化は見られない。７は小型器種の底部を穿孔されたもので、孔の表面から焼成後に穿孔されているので甑ではない。内外器面摩滅で調整不明。内外黄灰色で変色がなく、胴下位から底部に黒斑がある。

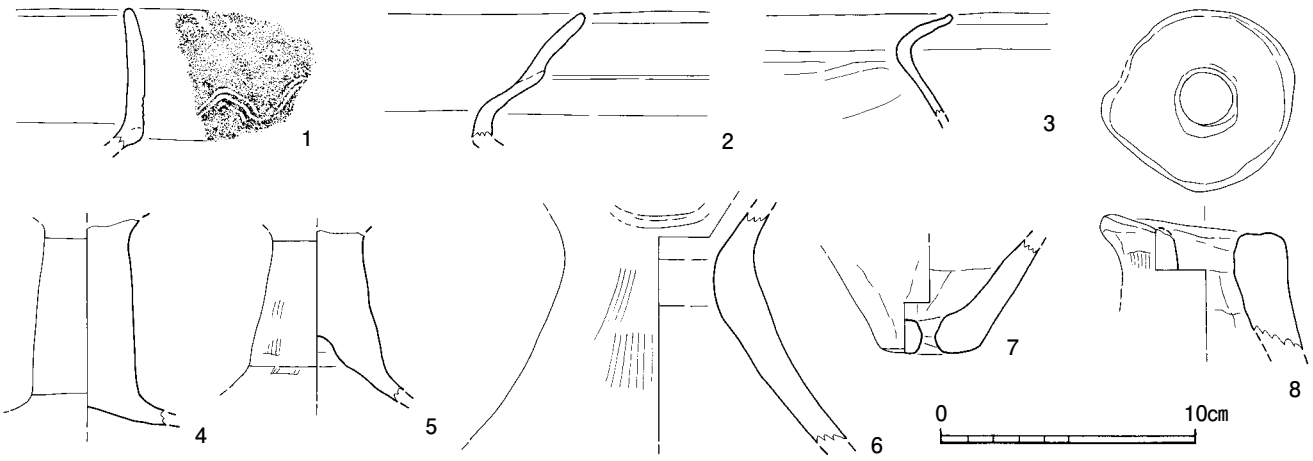
このほか、磨製石斧（第199図４）が出土している。

37号溝（図版30、第191図）

１区中央部北西側を南西から北東に走る溝で、南端は４b号溝に切られているが、４号溝の対岸に40号溝が見られ、これと同一遺構になる可能性が高い。36号溝・３号方形周溝墓東辺にも切られており、溝幅は46cm、深さ25cmを測る。

出土遺物（第196 ～ 198図）

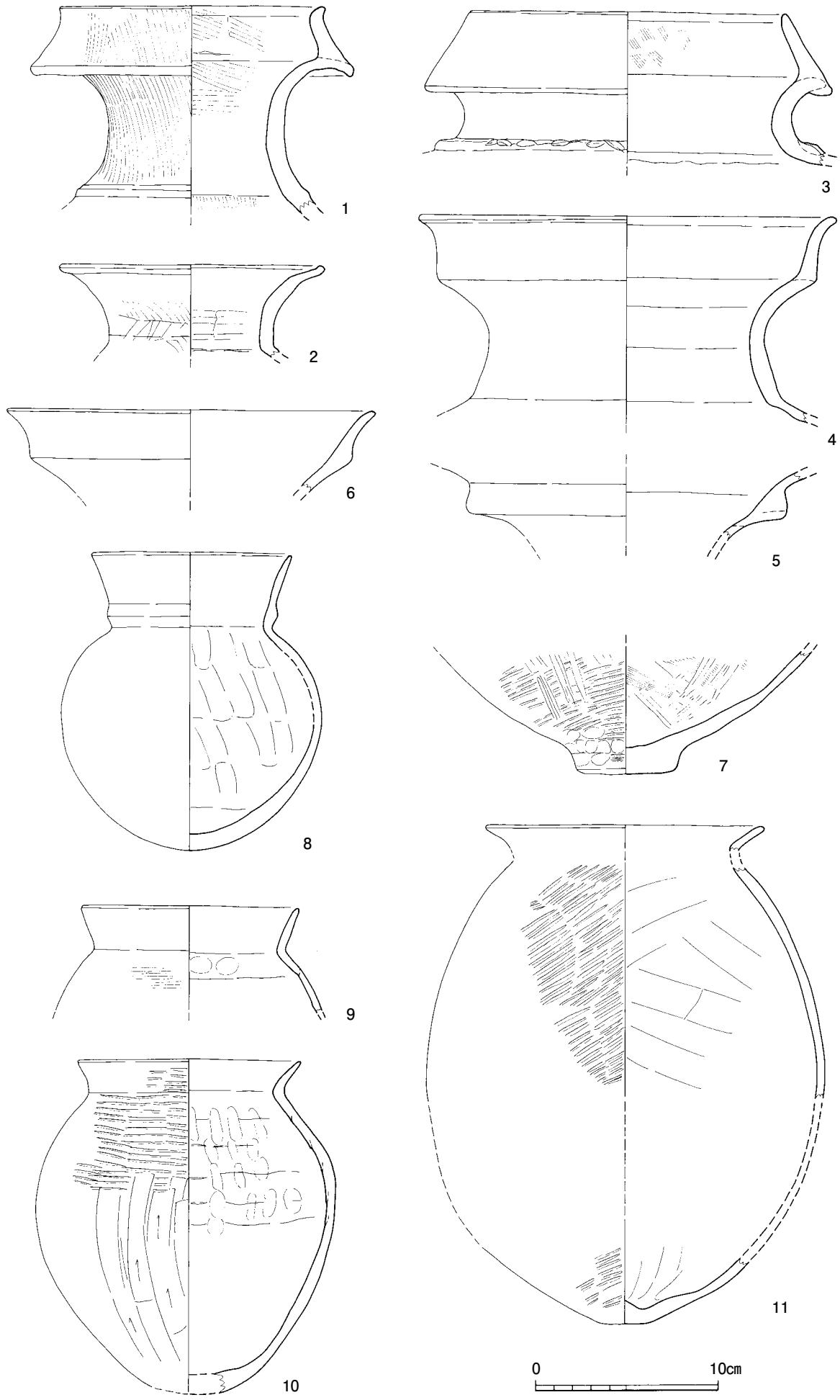
第196図１は複合口縁壺で、目の粗いハケが入り、口縁部外面は同じハケを施した後ナデ消している。茶褐色を呈する。２は壺で、口縁端部は跳ね上げている。外面はヨコナデで頸部はハケとケズリで接合部を調整している。内面はヨコハケで、積み上げ痕が残る。内外面は橙褐色で変色なし。３は複合口縁壺で、口縁部内面はハケ、それ以外は器面摩滅で不明。頸部の突帯は交互に刺突されている。外面は口縁部が暗灰色なのは器面が摩滅しているためと見られ、他は赤橙褐色から橙褐色で意図的に赤く焼成された可能性がある。マーブル状の胎土。４は２重口縁壺で、器面摩滅で調整不明。頸部の突帯は交互に刺突されている。外面は口縁部が暗灰色なのは器面が摩滅しているためと見られ、外面頸部の黄橙色と内面橙褐色が本来の色調だろう。マーブル状の胎土。５・６は２重口縁壺で、胎土が酷似する。５は内外器面摩滅で調整不明。黄橙色を呈し、変色なし。６は口縁部外面のヨコナデが残る。７は内面が暗灰褐色で外面にも暗橙褐色の変色があるので甕であろう。外底はタタキの上にハケとミガキがある。倒立して回しながら底部周縁に施している。内面はハケ後ミガキである。黄橙色を基調としており黒斑あり。８は壺で、器面摩滅で調整不明。内面はケズリでなくオサエ。内外面は黄橙色で外面胴下位から底部は赤変しており煮沸使用されている。９は甕で、器面摩滅で調整不明だが、頸部から肩部にタタキの痕跡が残る。内面は積み上げ痕が明瞭に残っているのでケズリはないようだ。外面は黄橙色だが胎土の色調で、器面の色調がわからないので煮沸使用の有無は不明。10は甕で、外底は欠損しているので小さな平底か丸底か不明。胴中位より口縁まではほぼ水平から左上のタタキで、下半はタテ方向のケズリ。内面は積み上げ痕が残り、オサエが残り、ケズリはない。内外面は橙褐色で外面胴下位から底部は赤変しており煮沸使用されている。11は甕で、口縁部と胴部は図上接合である。左上タタキでその後の調整はない。内面はケズリ。内外面上半は黄橙色で変色がない。底部の外面は右上のタタキで、内面はケズリ、外面



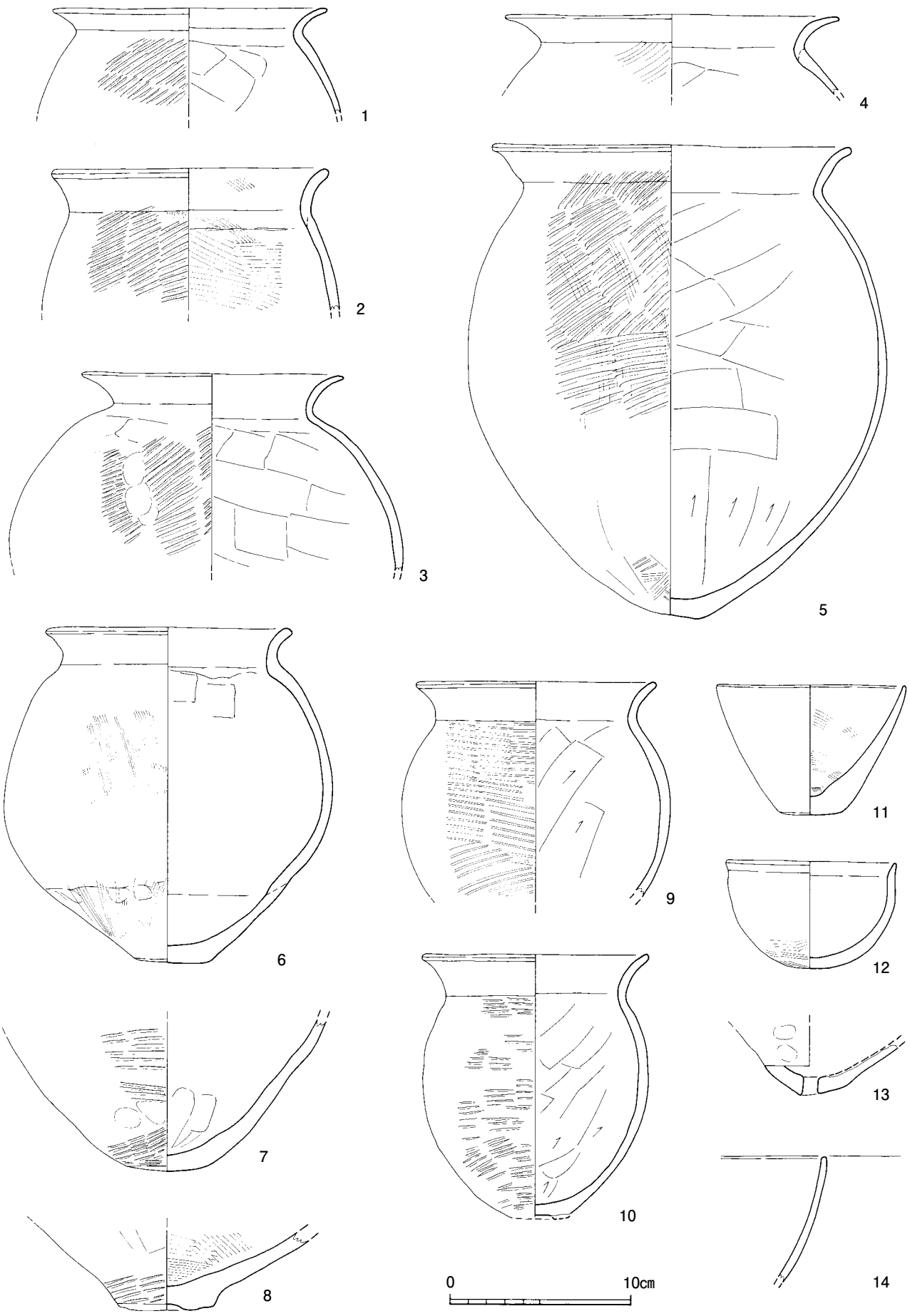
第195図　１区36号溝出土土器実測図（1/ 3）

は黄橙色を基調として赤化し、内面は黒灰褐色に変色しており煮沸使用されている。

第197図１は甕で、ほぼ右上方向の太いタタキが入る。内面は摩滅しており不明瞭だが、ケズリ。外面は内外橙褐色で、口縁部外面と肩部に煤が付着しているので煮沸使用されている。２は甕で、外面頸部は右上の幅の広いタタキ、内面肩部はヨコハケで積み上げ痕が残る。外面の頸部は橙褐色なので本来の器面の色調と見られる。内外口縁部はにぶい暗黄褐色なので煮沸使用されている。３は甕で、外面胴上半は右上のタタキ後オサエが部分的に入る。肩部はケズリで、内面は器面摩滅が著しく不明瞭だがケズリ。外面は内外胴上半は黄橙色で、下位に煤が付着しており、口縁部内面も黒褐色に変色しているので煮沸使用されている。外面に黒斑あり。４は甕で、外面頸部は右上のタタキ、内面肩部はケズリで、内外面は器面摩滅が著しい。外面は頸部は橙褐色なので本来の器面の色調と見られる。内外口縁部はにぶい暗黄褐色なので煮沸使用されている。５は甕で、外面胴上半は右上のタタキ後ハケが等間隔で入る。下半はケズリで、胴下位はタタキが内面はケズリで、外面は内外胴上半が黄橙色で、外面は煤が付着している。胴下半は黒灰褐色で煮沸使用されている。６は甕で、外底は平底。外面はにぶい黄橙灰色だが胴下位から底部は赤変しており煮沸使用されている。胴下位は器面に積み上げ単位で段がつくため不均一な形態である。内面肩部はケズリの可能性もあるが、肩部のみしか見られないのでハケの工具痕であろう。外面は目の細かいタテハケ。７は甕で、ほぼ水平の太いタタキが入る。内面は摩滅しており不明瞭だが、ケズリ状のナデか。外底は平底。外面は黄橙色が赤変しており煮沸使用されている。８は内面が黄橙色で、焼成不良でもなく煮沸に伴う変色がないことから鉢の底部だろう。外底はタタキで、倒立して回しながら底部周縁に施している。内面はハケで、外底は肥厚して蛇ノ目状を呈する。外面は橙褐色、黒斑あり。９は小型甕で、外面は左上のタタキ、内面肩部はケズリ。内面は黄灰色だが、外面は頸部は橙褐色で、それ以外は灰褐色なので煮沸使用されているだろう。使用頻度は少なかったのだろう。10は甕で、外底は摩滅しているが肥厚して蛇ノ目状を呈する。胴中位より口縁までは水平のタタキで、内面はケズリ。外面は橙褐色で外面胴下位から底部は赤変しており煮沸使用されている。11は杯で、外底は平底だが、内底は小さい底がつく。内外面橙褐色から黄灰色で変色なし。内面ハケ、外面摩滅で調整不明。12は小型鉢で、内外面黄橙色で変色なし。外面下位はタタキであろう。底部はハケ、内面器面摩滅で調整不明。13は甑で、図上接合である。底部の穿孔は焼成前。暗黄橙色で、外面には黒斑あり。内面の黄灰色は胎土の色調で、器面の色調は不明だが、内外変色や赤変が



第196図　1区37号溝出土土器実測図1（1/3）



第197図　１区37号溝出土土器実測図２（1/ ３）

ないので使用されていないが頻度が少なかっただろう。

第198図１は鉢で、内外ハケで、外面の肩部と内面はミガキが入る。外面の暗灰褐色は、外面は黄橙色の部分が見られるので黒斑部分であろう。内面は暗茶褐色で変色なし。２は鉢で口縁部の一端を張り出させて注口を形成している。底部は欠損しているが丸みをもった平底の可能性が高い。外面口縁部から胴中位と底部はタタキで、幅が広い。胴下位はタタキ後ナデている。内面は摩滅しているが、ケズリはない。粘土の積み上げ痕が多く見られる。内外黄橙色で変色なし。外面に黒斑あり。３は高杯で、器面摩滅しているが脚部には外面ミガキが残る。受け部内面は剥落した痕跡はない。内面の水平に規則的に並ぶ隙間は積み上げ痕であろう。内外黄灰色～黄橙色を呈する。４は高杯の脚部で、外面は器面摩滅で調整不明。内外黄橙褐色で変色なし。透し孔は４ヶ所だろう。５は高杯の脚部で、外面は器面摩滅で調整不明。内外橙褐色で変色なし。透し孔の総数は不明。６は高杯の脚部で、外面は器面摩滅で調整不明。内外黄橙褐色で変色なし。透し孔は３ヶ所だろう。７は高杯の脚部で、内外面は器面摩滅だが、脚部外面にミガキの面が残っている。内外赤橙色で意図的に赤く焼成している。透し孔は４ヶ所だろう。８は器台で、外面は器面摩滅で調整不明。内外黄灰色で変色なし。透し孔は４ヶ所だろう。９は高杯で、外面は器面摩滅で調整不明。内外黄灰白色で変色なし。透し孔の有無は不明。10は内面が焼成不良なので、頸が締まる台付鉢だろう。内外器面摩滅で調整不明。外面黄橙色で変色なし、内面は焼成不良のため暗黄灰色を呈する。11は鉢で、外面は器面の剥落した下にタタキが見られるのでタタキをナデ消している。内面摩滅しているがケズリ。外面は煤が付着しているが赤変は見られず、内面も黄橙色で変色がないので煮沸使用はされていない。12は高杯で、器面摩滅で調整不明。口縁部は肥厚しているが、表面は器面が失われているので文様の有無は不明。内外面は本来黄橙色である。13は高杯の脚部で、外面は器面摩滅で調整不明。内外黄灰白色で変色なし。透し孔は小さく総数は不明。

39号溝（付図）

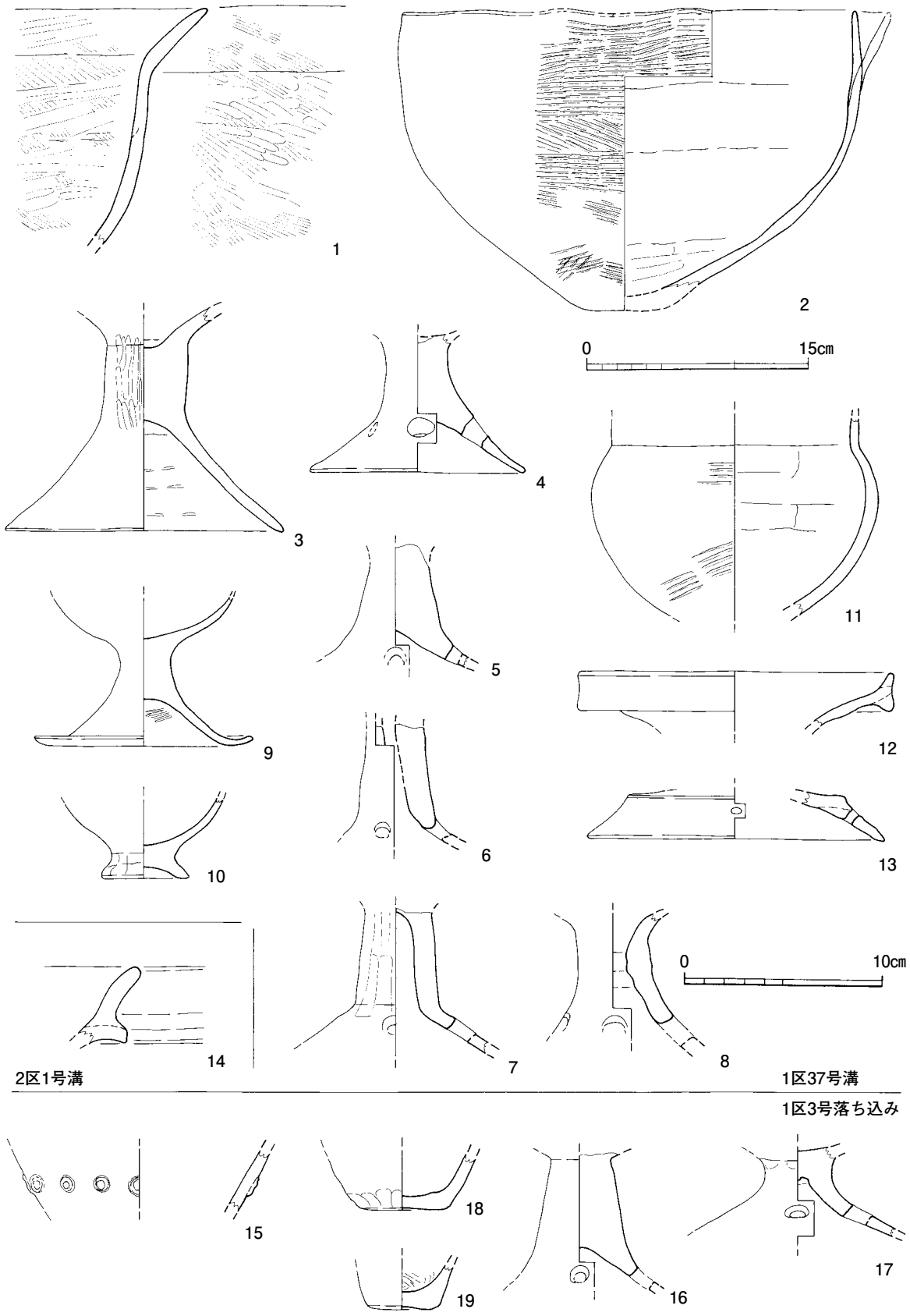
１区中央部西端に位置し、32号溝の西側から南に走る小溝で、30･39号貯蔵穴を切る。南側の調査区では見つからなかった。32号溝から派生するものなので、32号溝と同じ時期だろう。溝幅は15cm、深さ10cmを測る。図化していないが小型高杯の脚部（Photo .11）が出土している。

40号溝（付図）

１区中央部西側を北西から南東に走る溝で、北端は４b号溝に切られ、南端は５号溝に切られているが、５号溝の対岸には見られないのでそれ以上延びない。４b号溝の対岸には37号溝があり、これと同一遺構になる可能性が高い。しかし、本溝からは弥生前期の土器しか出土しておらず、混入品の可能性が高いながらも、別遺構として報告しておく。溝幅は38cm、深さ35cmを測る。

42号溝（付図）

1区中央北部を南東から北西に走る溝で、幅70cm、深さ20cmほどを測る。32号溝と規模が等しく、一連の遺構と見られる。３号溝と切り合うが、3号溝上面では切り合いがわからなかった。出土遺物がないため時期を特定できない。



第198図　１区37号溝・２区１号溝、１区３号落ち込み出土土器実測図（2は1/4、他は1/ 3）

２区１号溝（付図）

２区の西部を南西から北西に走り、北側が低くなる幅約95㎝、深さ15㎝ほどの溝で、幅に比べて浅く、床面はほぼ平坦である。埋土は黒色土で縄文時代や中世の遺構とは異なっていた。

出土遺物（第198図）

14は複合口縁壺の口縁部で、器面摩滅のため調整不明。精良な胎土で軟質。

（６）その他の遺構と遺物

土坑１基と落ち込み状遺構１基のほか、土器を中心に据えたピット３基などが検出された。

74号土坑（図版25、第183図）

１区北西に位置する小型の土坑で、東半分が撹乱で切られている。床面には段があり不整形で、図化できる出土遺物がなく時期を特定できない。

３号落ち込み状遺構（図版31、第191図）

１区北西に位置する大型の浅い掘り込みで、北辺は明瞭な壁があるが、南辺にはない。包含層を掘り込んでいることと、１号墳周溝と近接していたため明瞭に確認できなかったものだが、不整形で大型の掘り込みである。壁が不均一で湾曲があり、壁沿いに小ピットがあったので木の根痕の可能性があった。しかし、埋土には倒木痕特有の基盤層が表面化したものがなかった。そこで、木を人為的に倒したか自然に倒れた後に、木の根を持ち出して埋め戻したため基盤層ブロックは除去されて残っていないのだろう。壁が明瞭に検出できなかったのは持ち出す際に壁が崩壊したためではないだろうか。

出土遺物（第198図）

15は小型二重口縁壺の口縁部片で、外面に円板浮文に竹管スタンプを押したもの。内外器面摩滅で調整不明。暗橙褐色を呈する。16は小型高杯の中実短脚で裾がやや開く。内外黄灰色で変色なし。器面が失われている。17は見込みが浅いことか小型器台で、裾部の穿孔は位置関係から３ヶ所あるだろう。内外黄橙色で変色なし。器面が失われている。18は杯で、内外オサエ痕が残る。19はミニチュア杯で、外面はナデ、内面はケズリ状のハケ。内外橙灰色で変色なし。

（７）特殊遺物（図版61、第199図）

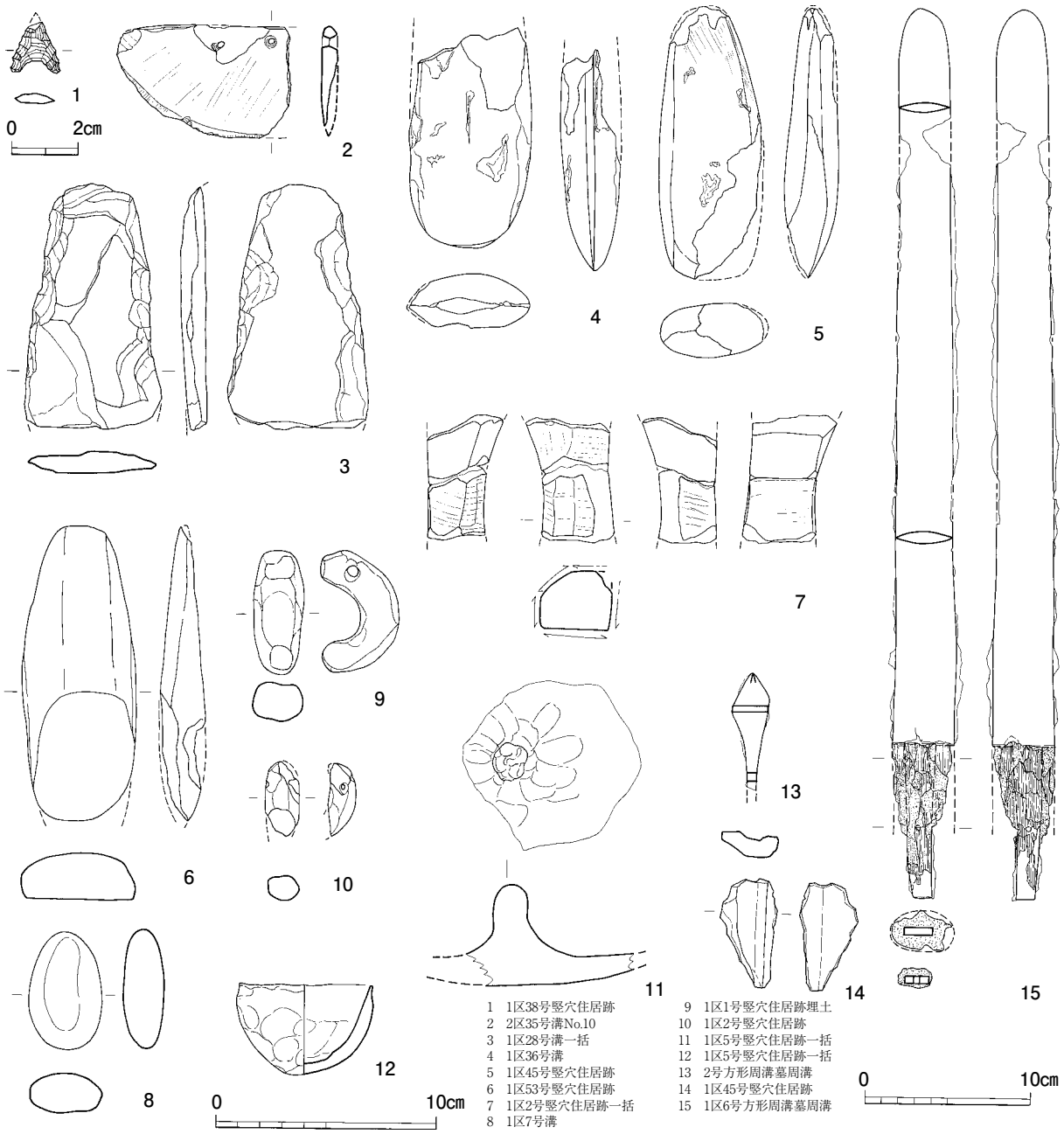
第199図１は１区38号竪穴住居跡の打製石鏃で、風化が著しいので縄文後期・弥生前期のものが混入した可能性もある。２は１区35号溝状遺構出土の石庖丁で、研磨面は光沢がある。刃こぼれは刃部全体に見られる。３は１区28号溝状遺構出土の打製石斧で、縄文後期・弥生前期の混入の可能性もある。４は１区36号溝状遺構出土の磨製石斧で、縄文後期・弥生前期の混入の可能性もある。刃の中央部分が使用により潰れている。５は１区45号竪穴住居跡出土の磨製石斧で、基部の横筋は石材の縞で擦痕ではない。６は１区53号竪穴住居跡出土の磨製石斧で、断面蒲鉾形で、平坦面は素面である。表面が風化しているが、側面に研磨面が残っている。７は２号竪穴住居跡出土の砥石で、４面使用している。表面は風化しているため研磨痕は不明瞭。８は１区７号溝出土の蛇文岩の原石で、玉の材料になるのではないだろうか。投弾の可能性もある。９は１区１号竪穴住居跡埋土

出土でほぼ完形の土製勾玉である。上下端だけ黒斑がある。10は２号竪穴住居跡出土の土製勾玉片で、穿孔部はオサエで平坦面が作られており、湾曲の内側は両平坦面が接するため稜ができる。11･12は１区５号竪穴住居跡から出土したもので、11は土製模造鏡だろう。蓋にしては下面が反っている。器面が残っていないので本来の色調がわからないが、つまみ部の下面のもっとも厚い部分に黒斑があるので、正置して焼成している。延永ヤヨミ園遺跡（註２）から類例が出土している。12は小杯で、口縁部は器壁が薄い。器面は摩滅しているが、手捏ね成型で、外面はオサエ、内面はハケの痕跡が残る。内外面にぶい黄灰色で、外面に黒斑がある。13は２号方形周溝墓周溝出土の圭頭平根鏃で、刃部の側縁は左右とも尖っていない。また、非対称でもあるので、刃部を欠損しているのかもしれない。14は鋳造鉄斧片と見られる鉄片で、先端が尖っていないので破片だが、再利用品の可能性もある。15は５号方形周溝墓出土の鉄剣で、刃部の鎬は不明瞭。基部は目釘穴が１つで、端部がやや曲がっている。

註

1　久住猛雄1999「北部九州における庄内式併行期の土器様相」『庄内式土器研究』 XIX

2　九州歴史資料館2012『東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告－２－ヤヨミ園遺跡Ⅰ』第16図９



第199図　古墳時代前期の石器・土製品・鉄製品実測図（1は1/2、15は1/4、他は1/3）

表6　特殊遺物一覧表５

図番号	出土遺構	時期	器種	長さ	幅	厚さ	重量	石材	備考
199図－１	１区38号竪穴住居跡	古墳初頭	打製石鏃	1.0	1.2	0.3	2.8	姫島産黒曜石	縄文後期・弥生前期の可能性もある
199図－２	１区35号溝No.10	古墳初頭	石庖丁	5.0	7.7	0.7	39.5	凝灰岩	
199図－３	１区28号溝一括	古墳初頭	打製石斧	10.9	6.0	1.2	115.0	緑色結晶片岩	
199図－４	１区36号溝	古墳初頭	磨製石斧	9.6	5.5	2.7	208.4	安山岩	
199図－５	１区45号竪穴住居跡	古墳初頭	磨製石斧	11.9	4.6	2.4	223.6	安山岩	
199図－６	１区53号竪穴住居跡	古墳初頭	磨製石斧	13.4	5.1	2.0	175.1	砂岩	
199図－７	１区２号竪穴住居跡一括	古墳初頭	砥石	6.8	3.8	3.2	68.1	頁岩	4面使用
199図－８	１区７号溝	古墳初頭	投弾	5.3	3.4	1.8	46.7	蛇紋岩	玉原石の可能性もある
199図－９	１区１号竪穴住居跡埋土	古墳初頭	土製勾玉	5.7	2.3	1.7	32.7		
199図－10	１区２号竪穴住居跡	古墳初頭	土製勾玉	3.4	1.5	1.2	6.8		
199図－11	１区５号竪穴住居跡一括	古墳初頭	土製模造鏡	8.0	7.5	4.6	101.0		
199図－12	１区５号竪穴住居跡一括	古墳初頭	小杯	径6.2		器高4.2	－		
199図－13	２号方形周溝墓周溝	古墳前期	鉄鏃	4.8	1.8	0.3			
199図－14	１区45号竪穴住居跡	古墳初頭	鋳造鉄斧片	5.0	2.5	1.0			
199図－15	１区６号方形周溝墓周溝	古墳前期	鉄剣	53.8	3.5	0.8			

報告書抄録

ふりがな	やどみどうのまえいせき
書名	矢留堂ノ前遺跡
副書名	
シリーズ名	東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第19集
編著者名	秦　憲二
編集機関	九州歴史資料館
所在地	〒838-0106　福岡県小郡市三沢5208－3　（Tel：0942-75-9575，Fax：0942-75-7834） HP：http://www.fsg.pref.fukuoka.jp/kyureki/、E-mail：
発刊年月日	2015年（平成27年）3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
やどみどうのまえいせき 矢留堂ノ前遺跡	ふくおかけんゆくはししやどみ 福岡県行橋市矢留	402133	－	33° 42′ 1″	130° 58′ 0″	20091005 ～ 20101024	8750㎡	東九州道 建設

所収遺跡名	種別	おもな時代	おもな遺構	おもな遺物	特記事項
矢留堂ノ前遺跡	集落	縄文時代	竪穴住居跡 土坑・自然流路跡	縄文土器・石器	扁平打製石器
		弥生時代	竪穴住居跡 土坑・貯蔵穴	弥生土器・石器	弥生時代初頭の土器 東北系土器　青銅器鋳型 方形区画溝
		古墳時代	竪穴住居跡・溝・古墳 ・方形周溝墓	土師器・鉄製品・ 土製品	
		平安時代	掘立柱建物跡	土師器	
		鎌倉～戦国時代	掘立柱建物跡・溝	土器・瓦器・瓦質 土器・陶磁器	溝で区画された屋敷地群

要約

矢留堂ノ前遺跡は、縄文時代から中世の複合遺跡である。縄文時代は落し穴群と、縄文後期の竪穴住居跡と自然流路跡が検出された。弥生時代では、前期の環濠が注目される。弥生時代終末期から古墳時代初頭にも集落が作られ、その廃絶後の古墳時代前期に同じ場所で有力者一族の墓地が作られており、方墳１基、方形周溝墓５基、木蓋土坑墓２基が発見された。また、１辺17mの方形区画が注目される。このほかにも、奈良時代の掘立柱建物群や、室町から戦国時代の溝で区画された屋敷地群が確認され、中世の集落端部では鍛冶が行われている。

福岡県行政資料	
分類番号	所属コード
ＪＨ	2117104
登録年度	登録番号
26	0013

矢留堂ノ前遺跡(上巻)

福岡県行橋市矢留所在遺跡調査の報告

東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告書　第19集

平成27年3月29日

発行　　九州歴史資料館

〒838-0106　福岡県小郡市三沢5208-3

印刷　　株式会社インテックス福岡

〒812-0892 福岡市博多区東那珂 1-15-1